まんじ

No. 91

2004.2.1

まんじ第九十一号　目次

文禄の役の狭間で清正をめぐる数奇な人々 …… 新井　宏 … 4
小町散策 …… 島津隆子 … 14
虎道吟月居士素描　借別譜 …… 大和禎人 … 20
古い物・遠い夢 …… 忠内正之 … 22
風景論 …… 堀内永人 … 37
俳句　秋の蝉 …… 大澤鷹雪 … 46
短歌　行雲流水（四） …… 石黒修身 … 48
イタリアンレストラン …… 森　実与子 … 51



丙午の女（一） …… 太田和貞 … 64
妖星（二） …… 三戸岡道夫 … 70
踏絵（二） …… 鍋屋次郎 … 79
遥かなるカメルーン（二） …… 太田精一 … 87
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十三） …… 千坂精一 … 96
紙透家の人びと（十九） …… 紙透寛夫 … 103
漢詩　潮騒録（三十八） …… 鯨游海 … 110
撞木 …… 編集子 … 117
表紙・カット …… 田寺怜葦
カット …… 鈴木國男
清水トム



文禄の役の狭間で
清正をめぐる数奇な人々

新井宏

加藤清正。熊本では今でもセイショウコウ（清正公）と崇められ庶民信仰の対象ですらある。

もともと熊本は寛永九年（一六三二）に加藤家二代目の忠広が家光により改易されて以来、細川家が治めていたところ、それなのに未だ人気は加藤清正にある。代々の細川家がよほど寛容だったのかも知れないが、単なる虎退治の武将にしては出来すぎた話である。

加藤清正。永禄五年（一五六二）に今の名古屋市中村区に生まれた。幼名を虎之助といい、母が秀吉の生母の叔母にあたることから、秀吉子飼いの武将となり、賤ケ岳の合戦等で多くの戦功たて、天正十六年（一五八八）には早くも肥後の領主佐々成政改易に際して肥後を小西行長とともに分与され二十五万石の熊本城主となっている。

さらに慶長五年（一六〇〇）には関が原の戦いで家康につき、小西行長の旧領等合わせて、五十四万石の大名となり、慶長十六年（一六一一）五十歳で没している。

とにかく有名人であるからこのような紹介は不要だったかもしれない。賤ケ岳の合戦、虎退治、蔚山籠城、伏見地震、家康と秀頼の二条城会見、名古屋城の清正石等々のエピソードは、年配者なら誰でも知っている話である。

ところで加藤清正がどの程度の有名人なのかちょっと証明して見よう。

戦前の尋常小学校では、誰もが同じテキストで修身と唱歌を習っていた。修身には各学年ほぼ二十七課ずつあり、例えば五年生用では忠義、公益、倹約、孝行、勇気、忍耐、度量、博愛、徳行などのキーワードで、その実例として内外の有名人の逸話を載せるのがひとつのパターンであった。また小学唱歌もほぼ二十七曲ずつあり、「白地に赤く」は一学年の初めに、「春がきた」は三学年の初めに教わるようになっていた。かくして六年間で全国民が、約百五十課の修身と約百五十曲の唱歌を習うわけであるが、その中で修身にも唱歌にも登場する人物が四人だけいる。

もちろんそのトップは二宮金次郎である。ともに二年生で習う。これはまったく別格である。次が三年生唱歌の「豊臣秀吉」で、修身では五年生の「謝恩」の課に出てくる。そして三番目が五年生唱歌の「加藤清正」であり、修身では五年生の「信義」と「誠実」のふたつの課に出てくる。後は五年生唱歌の「水師営」に出てくる乃木希典で、修身では六年生の「清廉」に登場している。

だから加藤清正は問題なく日本を代表する「誠実で信義あつい」有名人なのである。こんなことで証明になったであろうか。

このように、日本では非常に人気の高い豊臣秀吉や加藤清正であるが、もちろん韓国では正反対に悪や鬼の代名詞である。無理も無い。秀吉は文禄慶長の役（壬辰倭乱丁酉再乱）を起した張本人であり、また加藤清正は小西行長とともにその戦役を通じて、自らも最大の死傷者を出しながら最初から最後まで戦った猛将である。しかも和睦志向の強かった小西行長とは異なり、常に主戦派であり続けたのが清正であり、それだけ恨まれる立場にもあった。だから韓国ではかって「キヨマサオンダ（清正がくるぞ）」と言えばむずかる子供を黙らせる効果があったという。

なにしろ文禄・慶長の役では加藤清正はまさに主戦投手の位置にあっただけに、清正の周辺には日韓の歴史の狭間にその名を伝える数奇な人物も少なくない。その代表的な例が、沙也可であり、毛谷村六助であり、余大男である。

沙也可（金忠善）

かって司馬遼太郎が「街道をゆく・韓のくに紀行」の中で紹介して以来、日本にも良く知られるようになったのが、いわゆる降倭領将「沙也可」である。降倭領将というのはもちろん韓国側の用語で、降伏して朝鮮側に付いたわけではないので、最近は帰化倭将ともいっている。

その存在は朝鮮側の資料に幾つか記録されており、『慕夏堂文集』では「加藤清正軍の右先鋒として三〇〇〇人の兵を率いて十三日、釜山に上陸、直ちに略奪を禁じる軍令を下し、二十日、反旗をひるがえして朝鮮軍に投降した」と伝えている。

また正史『李朝実録』等の記録では、沙也可は鉄砲の技術に優れたため、李朝に厚遇され金海金氏の姓を賜り金忠善と名乗り、三〇歳の時、晋州牧使の娘を娶り、後

の清朝の朝鮮侵攻の時（丁卯胡乱、丙子胡乱）にも活躍し「三乱の功臣」と称えられ正憲大夫（正二品上）という高級官職にまでのぼったとある。一六四三年七二歳で死没。望郷の七言絶句を残しているというので、教養人であったのかも知れない。釜山に上陸した時は弱冠二十二歳であった。

しかし日本側にはそれに相当する記録がない。沙也可が鉄砲に優れ、しかも沙也可の音が鉄砲傭兵集団の雑賀衆に通ずるので、これを雑賀とする説が有力であるが、その他にもさまざまな説がある。

まずは沙也可は沙ヱ門の写し間違いとする司馬遼太郎説、加藤清正の配下の岡本越後守あるいは阿蘇宮越後守説、小西行長の鉄砲隊の沙姓説などであるが、いずれにせよ加藤清正配下であった可能性が高い。特に越後守説は『宇都宮高麗帰陣物語』や『朝鮮記』に加藤清正の家臣であった越後守が蔚山城攻防戦で朝鮮側の講和の使として現れたと記録されていて、彼が沙也可と同一人物であったことを思わせるが、加藤家中には身分ある武将が逃亡あるいは投降したとする記録はまったくない。

韓国側の伝える沙也可像は「儒教の文化に憧れ、その文化の行き届く国に兵を向けて侵す義は何もない」として朝鮮に投降したとあるが、実情は雑賀衆のような傭兵集団であり、既に銀や銅の貿易を通じて国際化していた日韓関係にあって、どちらに付くかは打算の問題だったのではなかろうか。第一、儒教が日本に広まるのは文禄慶長の役のあとなのだから。しかし日本の高校教科書にも、記録によるとしながら「朝鮮の礼・義と中華文物のさかんな様子を慕い、その配下を引き連れて朝鮮側に投降した」とある。歴史教科書歪曲問題の影響であろうが、ここまで配慮することもあるまい。

もっとも歴史的に見ると、沙也可は日本から抹殺され続けて来た。徳富蘇峰や内藤湖南らの歴史学者はこぞって『慕夏堂文集』を偽書と断じていた。ただその中にあって、朝鮮総督府の朝鮮史編修官であった中村栄孝が『李朝実録』にも同じ内容があるのを見つけ、友鹿洞を訪れ、金忠善の直筆の婚書（納采）を発見して、その実在を報告していた。当時としては極めて勇気ある行為であった。なんとなく司馬遼太郎が発掘したように思っていた「沙也可」の歴史にも、このような前史があったのである。

沙也可は義兵将として有名な郭再祐とともに第一次晋州城戦で日本側を敗退させている。この時の手柄で宣祖から金海金氏の姓を下賜され両斑に取り立てられている。またおそらくその時の縁で晋州牧使張氏の娘を娶ったのであろう。牧使は当時の地方長官であるから、かなりの名家から妻を迎えたことになる。このことは沙也可がかなりの教養人であった可能性を示唆しているようにも思え、望郷の七言絶句を残したのも、まんざら作り事とも思えない。

沙也可は一六一四年、大邱の南にある友鹿洞に住み着いた。いまも友鹿洞には沙也可の十四代目の子孫が住んでいて、家訓十条が伝えられている。

その中には、①栄達を求めるなかれ、②努めて耕し努めて学べ、③富貴を願わず、④清を尚び倹を尚べ、⑤家にいては親に孝、⑥外に出ては君に忠、⑦酒色に溺れるなかれ、⑧賭博はするなかれ、などとあり、日本的な面が多く伺える。

韓国は面白い国で、各家庭に必ず族譜という系図がある。それによれば沙也可すなわち金忠善を祖先とする金氏一族は、賜姓金海金氏として分類されていて、全国に二千六百五十世帯、約八千人いることが判っている。

子孫の宗家の住む友鹿洞には、いま鹿洞書院という沙也可（金忠善）を祭った書院がある。普通の学問のための書院ではなく、一七八九年にこの地方の儒学者たちが金忠善を顕彰するために建てたものである。大邱市の南二十キロにある小さな村であるが、最近は日本からの観光客も増えているようで、ボランティアの日本語案内人もいる。ちょっと質問したりすると十四代の子孫という金泰烈氏が出て来て相手をしてくれる。そこには八角銃身の火縄銃が展示してあったが、道路工事中に発見されたものとかで、日本でも珍しいものだ。

沙也可が加藤清正の家臣であったか否かは別としても、ちょうど沙也可が朝鮮側につくころ、加藤清正不在の肥後国では梅北一揆が起きている。島津家の家臣梅北国兼が肥前名護屋城に向かう途中、反乱を起しそれに農民が加わり、佐敷城を手にするほどの勢いがあったが、秀吉によって鎮圧されている。沙也可との関連はもちろん判らないが、清正が肥後を治めるようになってから、まだ四年目のことであった。

毛谷村六助（木田孫兵衛）

いま日本で毛谷村六助を知る人は歌舞伎通ぐらいである。しかし韓国では誰でも知ってる人物である。それは論介が第二次晋州城戦で城が陥落後の酒宴で、彼を抱かかえたまま南江に身を投じ殉節したからである。

朱論介。韓国で一番有名な女性の名前を挙げてもらうと必ず最初に出てくるのが論介であり、二番目が儒学者栗谷李珥の母で、女流漢詩人であった申師壬堂である。いわば論介は韓国人にとってジャンヌダルクにも比すべき救国の念に燃えた愛国の烈女なのである。

その論介はかって妓生と見られていたことがあった。当初の記録に官妓とあったのでそうなったらしい。しかし、なにしろ超有名人であった。大勢の歴史学者たちも参加して、文献や口伝説話の調査が行われた結果、いま

では両班階級の出身で、第二次晋州城戦で籠城側の副将格で慶尚右兵使に上っていた義兵将崔慶会の妻であったというのが有力である。国民的な愛国の烈女が妓生では格好の付かない思いをしていた多くの韓国人もこれでほっとしたに違いない。

一五九三年六月十九日にはじまり、二十九日に終わった第二次晋州城戦は立てこもった軍兵と民衆六万人が悉く殺されるという悲惨なものであった。

その前年の四月に釜山に上陸して以来、時を置かず首都漢陽を陥落させ平壌を占拠した日本軍も、年が明けると明の本格的な参戦もあり、海戦では李舜臣に痛めつけられ補給が閉ざされ、動きがとれなくなっていた。碧蹄館では戦闘的には明軍に圧勝したものの、もはや漢城を維持する力はなかった。

講和の機運が高まっていた。日本と明は朝鮮の頭越しに現地での交渉をまとめる。そして漢城の日本軍は四月になると明軍の了解のもとで残りの食料を携え無事に釜山近くまで撤退する。明から見れば兵力の損耗なく、日本軍を漢城から駆逐したことで、明の安泰は確保したことになる。日本は戦闘に勝って戦争に負けた。

そして五月十五日には明の使節が名護屋に到着し、秀吉と会見し本格的な講和交渉が始まる。この時示した秀吉の要求は、当時の戦況から見れば現実ばなれしたもので、ゼロ回答が不可避であった。それを避けるためには、既成事実をつくることが何よりも重要であった。せめて慶尚道だけでも実効支配をして、戦果としなければ豊臣政権の存続さえ危うくなる。

そこで出された方針は、慶尚道の各地に日本式の城を築き、支配の実態を整えることと、晋州城を抜いて全羅道を支配化に置くことであった。特に、第一次晋州戦で日本側が敗退したことを秀吉が激怒しており、晋州城攻撃問題はすでに戦略的な次元を越えてしまっていた。

日本側は第二次晋州城攻撃に総力を注ぐ。これには、やっとの想いで南下撤退してきたばかりの小西行長、加藤清正、黒田長政ら五万五千名も主力として加わり、補給軍を合わせると十二万の大軍となった。明や朝鮮側から見ればまさに背信行為とさえ映ったであろう

一方の守る側の態勢は複雑であった。講和によって日本を追い払うことに期待かける明軍は、城を明け渡した方が得策であると傍観して動こうとしなかった。在地の義兵たちも、戦術論をめぐって意見が対立し、第一次戦で活躍した紅衣将軍の郭再祐も城に入るのを拒否する。また当の晋州城主ともいうべき牧使の徐禮元は大軍におののき、城内にとどまるのさえやっとの状態であった。

その中で、推されて指揮とることになったのが義兵司令官ともいうべき倡義使の金千鎰と慶尚右兵使に上って

いた義兵将の崔慶会である。いずれも全羅道の出身であった。このことが示しているように、第二次戦の主力は前回と異なり地元勢よりは、むしろ全羅道の兵士たちであった。晋州城が落ちればもはや全羅道は守れないという危機感のためでもあったろうがやはり異常であった。それでも、第一次戦の倍、すなわち七千名程度の兵士を確保することに成功する。そこまでは良かった。

しかし異様だったのは、非戦闘員が次から次へと五万人余も城に逃げ込んできたことである。そもそも朝鮮半島の城は逃げ込むためのものであるから当然とも言えるが、やはり第一次戦で日本側を撃退した経験が大きく影響した。これが悲劇を大きくしてしまった。

戦闘の経過は凄惨であった。秀吉の命は「最前せめそこない候城にて候條、一人も不洩やうに悉可討果事」とあった。この時秀吉は一般民衆が多数逃げ込んでくることなど想像もしていなかったにちがいない。しかし命令は忠実に守られる。

六月十九日に始まった包囲戦は、連日激しい攻防が続き、双方に多くの犠牲がでるが、結局は六月二十九日の城壁の崩壊が城の運命を決める。加藤清正配下の森本儀夫と黒田長政配下の後藤基次が先陣を争って城内に入る。

最後まで残って戦った金千鎰や崔慶会らは南江を臨む矗石楼で宴を催し南江に投身して果てる。城内では、人はもとより、牛、馬、鶏、犬に至るまで悉く殺され、南江に投じた者等を合わせると死者は六万余人にのぼったという。

そして月があけ、七月七日の七夕の夜、晋州城の矗石楼で戦勝祝賀会が開かれた。この時の主役はなんと言っても加藤清正であった。さほど広くもない矗石楼に配下の武将たちを引き連れ宴をはった。この時二十歳の論介は、官妓のように装い、夫・崔慶会の果てた南江上の矗石楼に侍る。期するものがあった。

論介が崔慶会の妻（妾）となったのは十七歳の時であった。きっかけは母子家庭となった六歳の論介が、叔父によって博打の借金のかたに売り飛ばされたのを、長水県監であった崔慶会が裁判で助けたことにあったらしい。行く場所のない母子は、その後官婢のような形で崔慶会に仕える。そして病弱であった崔慶会の夫人に請われて十七歳で側室になるが、その時に論介は身分を妓籍に落としている。官吏は良家の娘を妾にすることが出来なかったからだという。だから論介は官妓として伝えられていたが、本来は両班出身だという訳である。

論介にとって崔慶会は夫であり父であった。自分も夫のように矗石楼から投身して果てる。それが彼女の選択であった。せめて夫の仇討ちのために有力な武将を道ずれにして。

しかし言葉の通じない中で、有力な武将を探し、南江

の岩上に誘い出すのは容易ではなかった。宴盛んな矗石楼から見下ろせる大きな岩端に、艶かしく装い、微笑んで立って誘うのが作戦であった。

これに気づいたのが毛谷村六助であった。酔った足取りで大きく張り出した岩の上に降り立つと、論介が手招きしている。南江に三日月が映えていた。そして花びらが散った。

その岩をいまは義岩という。論介の号にちなむという。

死んだ毛谷村六助は本名木田孫兵衛という加藤清正の参謀長格の武将で、日本側の記録では兀良哈で戦死したとなっている。また六助の出生地の豊前英彦山の麓に残る『六助略縁起』によれば、戦後凱旋して余命を日本で過ごしたともある。したがって論介が道連れにした相手は毛谷村六助ではない可能性もある。事実、論介が初めて記録に登場するのは乱後三十年近くたって柳夢寅が書いた『於于野談』の中であるが、そこにはただ倭将とだけある。一七七九年の丁茶山の書いた『晋州義妓祠記』も同様である。また晋州近隣に残る民謡でも「倭将キヨマサ（清正）の身を抱き」とあって異なっている。だから国立晋州博物館の編纂した『壬辰倭乱』の中には毛谷村六助の名はない。

日本で毛谷村六助が一般に知られるようになったのは、おそらく歌舞伎「彦山権現誓助太刀」が初演された一七六六年以降のことであろう。気は優しくて力持ち、立川文庫の豪傑のひとりとしても登場する。そんなことから、論介の相手の武将として仮託されたのではなかろうか。ちょっと詮索しすぎかもしれないが。

余大男（高麗日遙上人）

第二次晋州城戦で城が陥落した直後、各将配下の兵が近隣の村々を略奪して廻っていた。その頃すでに日本側は食料も軍資金も自ら稼ぎ出さなければならない状況まで追い詰められていた。国許では労働力が極度に不足していた。

第二次晋州戦では結局「牛、馬、鶏、犬に至るまで」悉く殺すことになってしまったが、本音では捕虜を必要としていた。国許の労働力不足を補うばかりでなく、捕虜を次々とポルトガルに売り払いヨーロッパの奴隷市場に送りだしていた。

晋州城の西方三十キロにある河東郡の良甫面に加藤清正配下の軍勢が入ったのは月のあけた七月初旬のことであった。

晋州城のある慶南地方では小さな山並みを縫うかのように二、三百メートル位の巾の細長い平野が曲がりくねって広がっている。「山の向こうは山」の日本とは異なり、山を越えるとまた里がある。

ちょうど晋州から良甫への道のりもそんな山間を縫って半日あまりの行程であるが、さすがに良甫まで行くと標高も上がり、そこを越えると今度は蟾津江までなだらかに下りになる。

その奥まった良甫面にある双渓洞の普賢堂で当時わずか数え十三歳の余大男は捕らわれる。いつものように日課の勉強中のことであった。

ただちに晋州城まで連れ去られた余大男の見たものは、何であったろうか。そしてそこには加藤清正との運命の出会いが待っていた。

論介が殉節して果てる七夕の直前のことであった。加藤清正は捕虜の中に漢字を書ける子供がいるとの報告を受ける。当時の武将は貿易商の小西行長も行政能力にも腕をふるう加藤清正も文字を書けなかったという。それだけに文字に対する憧憬もあって、清正は余大男をつれてくるように命令する。

幼い時から父より文字を学んでいた余大男は研ぎ澄まされた刃の前でも恐れることなく、「独上寒山石経斜、白雲生處有人家」と書いて読上げた。これは唐末の詩人杜牧の「山行詩」の一部をもじったものであった。

普通なら千字文から初め、小学を習っている年頃なのに、四書を終えて、もう詩文学の段階まで進んでいたらしい。これに感心した清正は、余大男を日本に連れ帰り僧侶にすることにした。

加藤清正はよく知られているように熱心な法華経信者で、旗印を南妙法蓮華経としていたほどである。九州各地に妙法蓮華経の文字を入れた五ケ寺を建立している。彼は余大男を日本に送り、身延山第二十一世日蓮宗中興の祖と敬われている寂照院日乾上人に託し、京都本国寺学道に学ばせた。

学業成った余大男は加藤清正の城下、熊本の本妙寺に入り日遥と名のる。そして清正が亡くなった翌年の慶長十七年（一六一二）には本妙寺三世の法灯を継いでいる。外国人でありながら、二十八歳の若さで九州地方の最大の寺院を継承したところを見ると、よほど学問的あるいは人間的に優れた人物だったと思われる。事実寛永九年（一六三二）加藤家が改易された時には、本妙寺も一大危機に直面したが、春日局を介して将軍家光に働きかけ、新領主の細川家からも保護を得ることに成功する。いまも続く七月二十三日の大祭頓写会は清正の三周忌に際して法華経を一夜の内に書写して供養したことに始まる。

この高麗日遥上人が慶南道河東郡良甫から拉致された余大男と判ったのはつい最近のことである。四百年間に渡り寺宝として保管されていた日遥上人の遺品の中から、三通の手紙が発見されたことが発端であった。そこには故国の父からの古びた二通の手紙とその返書の下書き一通があった。

まず最初の手紙は一六二〇年五月七日の日付であり、余大男が捕らわれてから二十七年ぶりのことであった。

最初に「朝鮮国河東不居」で始まり「汝在癸巳年七月、双渓洞普賢庵被捕虜 後、未知汝之生死」と続くこの手紙によって、河東郡良甫の出身であることが判り、宜寧余氏の族譜によって、全てが判明する。男の子三人の中の長男で、本名を学渕といった。

この間、生死さえ判らなかった息子に手紙を書き送れる喜びの気持ちと、帰ってこれない息子に対する恨の気持ちの入り混じる手紙を読んだ余大男の気持ちはいかばかりであったろうか。

それに対する余大男の返書草稿は六ヵ月後の日付けになっている。ある信義ある日本人を介しての秘密裏のやりとりだった。手紙の到着後まもなく書いたものと思われる。

手紙では、主君に帰国を願い出たが、かえって監視を厳しくされてしまい、年老いた父母の世話をできない悲哀を綴ったあとに、「これからは頂いた手紙を朝夕あがめて過ごしますので、お父上お母上もこの手紙を私と思って、何時かお会いできる日まで待っていてください」と結んでいる。この時の主君は二代目加藤忠広で二十歳、幕府の監視下にあり、自主裁量できる状況ではなかった。

そして父からの二通目の手紙は余大男の草稿からまた二年経過した一六二二年の日付になっている。その時、父は五十六、母は六十、そして余大男は四十になっていた。戦争が終わって暮し向きは大分良くなったが、いつも子供を失ったことが恨になっていて、帰れない事情を知りながら、なぜ還ってこないかと訴えている。そして息子の身を案じながら、生前に一度会えたなら永年の恨も一朝にして氷解するだろうと結んでいる。

余大男の噂が故国に伝わったのは、父の手紙によると丁未年（一六〇七年）の通信使に随行していた河東の人が偶然余大男を見かけたからであった。ただし通信使という名称は父親の記憶違いで、この時の使節は回答兼刷還使で、捕虜として連れ去られた朝鮮人を刷して還るのが目的で、各地で情報を収集していた。この頃、余大男は京都の本国寺にいたはずであるから、使節団との接触の機会はあったであろうが、修行中の身で帰国はかなわなかったのであろう。

それにしてもそれから十三年も経ってから、手紙が届いたのはどうしてであろうか。あるいは丁未年は第二回目の回答兼刷還使の丁巳年（一六一七年）の間違いなのではなかろうか。その頃であれば、余大男はもう本妙寺の三世として世に知られていたから、噂も伝わりやすかったに違いない。

余大男すなわち日遥上人が心から加藤清正に恩誼を感じていたことは十分にあり得る。清正の三周忌に際して

法華経を一夜の内に書写して供養したと伝えられているが、それは日遥上人の心情の現れであったに違いない。

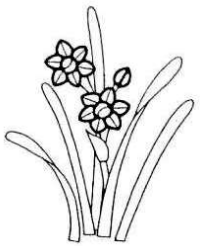
加藤清正にはそれだけの人間的な魅力があった。文禄の役の初期に、今の北朝鮮の会寧まで攻め上った時、朝鮮の王子二名を捕えているが、礼を尽くして処遇した。そのことは両王子の感謝状や礼曹司から秀吉宛ての手紙で知られているが、「慈悲は仏のごとく」とか「真の仁人」とあり、そこには社交辞令を越えるものがある。また行政面でも貿易等にも力を入れて名君との風評を得ているが、実態は清正の人間性による面が多かったのではなかろうか。

だからであろうが、清正の死に際して多くの家臣が殉死しているが、その中に金宦という人物がいた。本名を良甫鑑と言い、もとは朝鮮二王子の小侍部であったが、二百石の会計職として清正に仕えていた。殉死は一種の社会的な強制であるから、金宦が殉死したからと言って清正の人間性を示すことにはならないが、少なくとも周囲が殉死して当然と見なすだけの人間関係が存在していたと言うことはできよう。あるいは清正の庇護なき後の厳しい事態を和らげる面もあったかも知れない。その結果、金宦は加藤清正の忠臣と崇められ、いまでは熊本城内の加藤神社に主神加藤清正と共に陪神として祭られている。また加藤清正の墓所・本妙寺の浄池廟には清正の墓に並んで金宦の墓がある。

ところで金宦という日本名と良甫鑑と言う朝鮮名にはとても気になることがある。日本において金宦と名乗ったのは会計職であったからというのが通説であるが、朝鮮で最も多い姓が金氏である。それに反して良氏は少ない姓である。だから本名の良甫鑑は良甫の金鑑（宦）だったのではないか。

いま私が何を考えているかもうお分かりであろう。金宦は余大男の郷里の良甫と関係があったのではないか。余大男が捕われた時に、彼を見出し清正に会わせたのは金宦だったのではないか。論介が毛谷村六助を抱かかえ、南江に身を投じた時、余大男も金宦も晋州城にいたのではないか。それなら小説になりそうだ。

かくして加藤清正は朝鮮から連れて来た余大男と良甫鑑に守られると言うアイロニーの中にいる。



小町散策

島津隆子

随心院へ

十一月の、とある秋の日の午後、女三人で、京、山科の小野御霊町への路をゆっくりと辿った。後になり、先になり、お互いの歩みを確かめ合いながら歩く、決してもう若くない私たち。そのひどく埃をかぶったウオーキング・シューズ姿は、見ようによれば、過ぎ去った青春の面影を宿しているかもしれない。

尋ね当てた随心院は整然として美しい寺域を持つ、堂々たる真言宗善通寺派の大本山である。寺の門をくぐり、小野小町の碑の前までくると、私たちはほっとして顔をみあわせた。そして、

花の色はうつりにけりな　いたづらに
　わが身世に　ふるながめせしまに

大きな石に刻まれたあまりにも有名な歌の文字を、身につまされる思いからか、かわるがわる指先でなぞった。

それから私たちはお寺の広い境内に入り、本堂の玄関で案内を請うた。

若い僧侶に通された祭壇にみたのは、小野小町白描画と、恋文を下張りにして小町が造ったという小町文張地蔵尊と、黒色の卒塔婆小町の百歳像であった。

二つの雪洞の明かりに、片足を立膝にして古代坐りをした、もの言わぬ小さな小町坐像が黒く浮かぶ。

さっきまであれほど饒舌だったのに、私たちは息を呑むように沈黙したまま、しばらくその像をみつめていた。憧れの歌人である小町にやっと出逢えたことで緊張がとけた私は、思わず「ああ、小野小町」と低く言葉をもらしていた。

そのとき、畳を擦る足音がして、若い僧侶が部屋に入ってきた。手にしているのは給仕の器らしい。僧侶は慣れた手つきで夕べの供物を静かに祭壇に供えると、密かな足音を残して去った。

「朝に夕べに、お給仕されているのね、小町は幸せな女人……」

手厚くもてなされていることに驚いた私が言うと、

「死んで千年余りになるというのに、大切にされているんですね、小町は」

Kが相槌をうった。

外に出ると、周囲の風景はすっかり日暮れの色を濃くしていた。

私たちは本堂をぐるりと廻って、ほのかに薄暗くなった道を裏庭に出た。木立の中に竹垣に囲われて、多くの貴公子から贈られた、千束もの文を埋めたと伝わる、小町の文塚があった。五個の石を重ねた塔である。

「私の恋文はみんな焼かれて、紫色の煙になったわ」

「そして、恋は昇天したというわけね」

「恋愛沙汰の形跡も何も残していないんだから、私たちが歴史に残るはずもないわね」

冗談とも本気ともつかない話をしながら、私たちは落ち葉をかさこそと踏みならし、前庭に戻った。そして、庭木の間を縫う小道が尽きるあたりに残る井戸跡に向う。小町が朝に夕べに使ったと伝わる化粧井戸は、湧き水が枯れることがないという。

石組みのまま今に残る化粧井戸は、私に幻想を抱かせる。

もしかしたら、井戸が鏡面となって、小町の姿を映したにちがいないと。

また、かつて京の公達たちが、苦むす小道を牛車に揺られ、小町のこの棲家に不意に訪れたりしたことだろうと。

ちなみに、この小野の里には、百夜通いの深草少将が日ごと小町の門口に木の実を置いたという、榧の大木があるが、私たちはこの木もやっと探し当て、手柄顔に喜んだ。

月心院へ

旅の二日目。

京阪電鉄の無人駅・大谷に降り立った私たちは、国道を走るひきもきらない車の疾走に、肝を潰してしばし立ち尽くした。そして、

「この騒音って、京都らしくない」

などと、口々に無意味な異議をとなえた。

片側の斜面は林なのに、片側に並ぶ民家は、どの家も戸をしめきって、この騒々しさにじっと耐えているように見える。

気をとり直した私たちは、大正から昭和にかけて活躍した橋本関雪画伯の別荘で、没後、寺に改めた月心院をめざした。

しばらく行くと、長くつづく月心院の土塀が見えてきた。

風雅な門には軒行燈がかかげられている。その門をくぐると玄関脇に、はるか記紀の時代の成務天皇の産湯に使われたという〝走り井〟がある。

風流な玄関を入り、庭に抜けると、大小の石と木々が配置された庭園が見渡せて、その見事さに思わず息を呑んだ。所々に点在する燈籠にぼうっと灯が点っている。

見上げると、築山の上の方に、藁葺き屋根の小堂がみえる。小町の像を安置する「百歳堂」である。そのそばに独り働く庭師の姿が小さく見える。なるほど、手入れの行き届いた箱庭をみているようだ。

私たちのたっての願いが叶い、百歳堂に安置された小町像に逢えることになった。

半間の床の間のお厨子の中に、片膝立ちの小町の黒い坐像が安置されている。額に深くきざまれた皺の下の眼はしっかりと見開かれているが、わずかな笑みを浮かべて動かない厚い唇は、百歳の老女そのものである。

お厨子の前の狭い板の間に座って、おずおずと小町と対面した私に、小町は過去のすべてを、否、嘆きや悔恨のすべてを、自ら冷笑するように語りかけるようであった。また、たるんだ唇からは、呪文を口ずさむ衰えた老婆のしわがれ声がもれるような気がした。障子を通した弱い秋の光が、ひときわ不気味にみせているのかもしれない。前日に見た小町像より、一層、妖気と霊気に満ち、見る者に迫ってくる。一瞬、その迫力にたじろぎひるんでしまった。

「……さようなら、小町」

別れを告げる私たちに、老いの苦しみにじっと耐えているのか、小町は悲しみをこめた一瞥を投げかえした。

旅の回想

もうかれこれ二十年も前、京都旅行の折り、左京区に補陀洛寺を訪ねたことがある。俗に「小町寺」といわれるお寺には、その名称どおり小町と深草少将の供養塔が建ち、本堂には小町の老衰像が祀られていた。小町姿見の井戸もあった。私がまだ若かったせいか、ロマンチックで可愛らしいお寺の印象が残っている。

その後、小町にまつわるお寺や史跡も数多くあることを知った。

そして、この秋、二つの思いが私を小町逍遥の旅に誘った。

千年の美女が眠る、小町ゆかりのお寺に詣でてみるのも一興かな。ひとつは日ごろの読み書きのつれづれに、秀抜な十八首の歌だけを遺し、今に名を留める謎めいた小町に、ふと、心惹かれたためである。

秋になって、そぞろ旅心が沸いてきた二人の女友達と、

すらすらと話がまとまった。

旅の段取りは、綿密な計画を立てるのがお得意なKにお任せしてしまった、相変わらずものぐさな私である。

三人はいつの頃からか心の通い合った歴史好きなトリオである。いままでにもグループで何度か外国にもでかけているが、三人旅は今回がはじめてだ。

すこし膝が痛む年長の私の遅い歩きに、

「急ぐことはないのよ。ゆっくり行きましょう。ゆっくりと……」

繰り返し言ってくれる二人に、私はすっかり甘えてしまっている。しかし、体力は劣る私だが、年下の二人に負けず劣らず口だけは達者で、三人でおどけた冗談や、減らず口をたたき合っては楽しんでいる。はたから見たら、まさに老いを知らない童心の道化師たちである。この得体の知れない東国の旅人たちの無邪気さに、すれちがった京の人たちは驚くばかりであったろう。

とある道すがら、どうしてそういう会話になったのかわからないが、話題が横道にそれた。

「私が死んだら、お棺の花は、平凡な菊じゃいや！　好きな花に埋もれるの。春ならフリージャ、秋はコスモス。カトレァもいいわ。バラなら一年中あるから安心ね」

Kが気の多い少女のように言った。

「私は葬式はいらないの。ひっそりと死んでゆく。だからいつも言う〝さよなら〟が、いつか、最後の〝さよなら〟になる」

私もつい、日ごろ思っていることを言葉にした。

「もう、寂しい話は、ここまでにしてね！」

笑いながらやんわりと、Sが縁起でもない話題にストップをかける。

こうして、どこまでもつづくアスファルトの路を、急ぎもせずにぶらぶらと、だが、ひたすらに、小町の眠るお寺を探して歩いた。

随心院も月心寺も私たちの想像を超えて、美しく魅力に満ちた寺院だった。二つのお寺にはそれぞれの小町像が祀られ、懇ろに供養されていることを知った。私たちは、何故かわからないが、ほっと胸を撫で下ろすような感慨を抱いた。

といっても、貴族好みの小町にくらべ、私たちはお金も従者もない渡り者の似非遊閑夫人である。花の都の京にきて、何が面白いのか、笑い転げんばかりにご機嫌なのだ。

「箸が転んでもおかしい年代は、とうに過ぎているはずなのに……。三人とも変だわ」

あきれるほどに私たちの笑いを誘う噂の主人公は、三人の共通の知人たち。だが私たちにかかると、最後はみんな笑い飛ばされて、全く顔色なしである。

桓武天皇の血を引く高貴な生まれで、出世しながらも

「でも私は、できるかぎりこれからは我慢なんかしたくない。わがままに生きたいの」

私は思わず、本音をもらしていた。

姑を見送ったのはつい三年前のこと。個性の強い姑には、ほとほと手を焼いた。家庭に波風を立てないためには、私が我慢するより仕方なかった。夫は聞く耳を持たず、いつしか会話もなくなり、心も冷えて、孤独になっていった。そして、私は自分の結婚は失敗だったと後悔の臍をかんだ。

自信を失くしてひ弱になり、人に頼ることが身上となった私は、人にも裏切られた。そして、人生の終点間際になって、遅ればせながら、私はやっとわがまま宣言ができるようになったのだ。

私たちが知り合う以前から、三人にはそれぞれが過ごしてきた幾歳月、過去がある。その長い年月の間には、人に煩わされたり傷つけられたり心ならずも人傷つけたりしたさまざまな出来事があったはずだ。その顛末がいやでも日常に影を落とし、人知れず人生に疲れていることも確かである。だがそれが人生であり、長年生きてきた証なのだ。

私たちの会話の中に、それとなくその断片を垣間見ることがあっても、それ以上追求して深入りしないのが、自然にできた私たちの不文律かもしれない。

だから、無邪気な童女を装ってみても、お互い心の奥

出家して、小町と恋歌の贈答をした、洒落っ気溢れる僧正遍昭という人物がいる。

私たちの友人である今様遍昭氏は、飄々としながら、実に女性への配慮が細やかで行き届いている。昔の部下から聞いたところによると、厳しい上司時代には鬼軍曹とあだ名されていたとか。しかし、滅法、女性には優しいのである。

「あれって天性のものかしら」

「いえいえ、長い女性遍歴の間に、培われたものよ、きっと」

「じゃぁ、昔とった杵柄というところね」

と姦しいが、結局、遍昭氏の妙に憎めないぬくもりが、なぜか私たちを笑いの渦に巻き込んで、飽きさせないのだ。

今は心ときめく異性への思いも、仕事への焦りもない。だが、まだ好奇心も興味もつきることなく、結構スリリングな楽しさをも味わっている。私はこんな安逸な老境が気に入っているのだ。

「歳をとると女も寛大になるものね。すべて笑えてしまうんですもの」

Kが道端の右を蹴りながら言った。

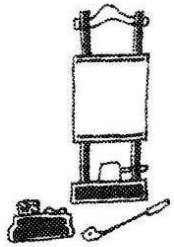
「棘がなくなって、人間が丸くなったのかしら。自然にそうならよいことだわ」

鷹揚な人柄のSが肯定する。

深くには、触れればすぐにこぼれ落ちてしまう涙のしずくを隠し持っていることも、わかっている。

絶世の美女と謳われた小町も、歳をとればただの哀れな老女にすぎない。二体もの、百歳の小町像に相まみえてしまったからは、世にも不幸な女になりはてたなどと、もう、自分たちを嘆きはしまい。

少なくとも私たちは今に生きて、京を散策できる適度の健康とほどほどの自由を手に入れ、周囲には愛すべき男や女の友人たちがいるのだから。



虎道吟月居士素描

大和禎人

「虎道吟月」はよほど坊様苦心の戒名であったろう。読経の上、大喝して引導をわたされたのだから、君の黄泉へのパスポートはこれで決まりであった。

幽界への旅立ちの儀式は今様の葬祭場で行われ、その場で初七日までの法要が合わせ行われ、同じ建物の中を柩を守り少々歩を運んで火葬の施設に、読経に送られ無情の鉄扉の中に柩は呑込まれる。あとは骨揚げを待つだけのコンベヤー方式任せ、会葬者は控え室に戻り、浄めの席になる。

「父が最後に書きとめた、落書みたいに乱れた文字で、(花盛り)と書かれたメモの意味がやっとわかりしましたこういう場面だったのですね」

喪主の佳代子さんが臨終いらいの連夜、万端ここまで取り運んだ苦労をそんなふうに吐き出された。人生朝露の儚さを思い、一座は白けを免れない。

寂滅為樂、寂滅為樂
いまはただ口中こう唱えるばかりであった。
「せめて虎道の「道」を「洞」にしてもらいたかったですね」

「そう仰しゃられてみると、そうでしたね」

長女の佳代子さんがそううなずき返された。

故人は俳号水虎洞を称し、季語帳の例句に登場し、ローカル紙の選者をつとめる俳人であった。僧家は参考にこれを採って「虎道」とし、「吟月」の二字にせめて俳諧人の立場を敬し戒名を選んだものと思われた。

さて、故人について物語ろうとする時、まずは昭和二年二月にタイムスリップしなければならない。

往時の小学六年生について、卒業期に伊勢神宮参拝という皇国民の意識高揚を意図におく行事があった。払暁午前五時学校校庭に集合、東京駅発は六時十五分発、東海道線をひた走り、十五時間をかけ二見浦直行という強行の末、午後九時四十五分に二見着。朝日旅館という海浜の宿にたどり着くという行程で、左右の座席の間の通路につなぎ板を渡した五人掛け、なんとも苦行の旅路のあげくの到着であった。

厳かに旅行の栞の冒頭には「祈誓」とあり、時代的な文言があったことを忘れていない。

さて、旅館では大広間での就寝前、すでに十時を過ぎようという学童にとっては深夜、土産物屋が店を広げる光景があり、眠気にかかわらず娯楽会が催されている。

その折のことだ、有志を促す声に応じて敢然、躍り出たのが幼き日の「虎道吟月居士」その人であった。そして落語を演じたのである。「八巻」という外題だった。

男子三クラス、女子三クラスの約三〇〇の児童を睥睨して口演した君の度胸には驚かされたものだ。昭和三年二月十日(金)夜、のことだった。

紛れもなく格好の語り種になる光景を刻んだ出来事であった。蛇は寸にして人を呑む、のたとえさながら、まさに逸することの出来ない挿話を生んでいる。

東京市富士前尋常小学校での君とわたしはクラスが違っていたが、君を認識したこれが最初のエピソードである。学校は本郷区神明町に所在したが、君は滝野川区田端町から通う越境生徒であった。

今は暗渠化し町並みに隠れてしまっているが、愛染川が流れ、染め物店の干し場櫓の光景が認められた滝野川の田端町の昔風景が懐かしく思い出される。君の家はその川添いにあった。

大正十二年の関東大震災は二年生の時である。君は東海道線根府川駅の官舎にいて、兄が地割れに呑まれて死亡するという惨事に出会っている。相模湾頭を震源とする激震地の体験だった。君の祖父が同駅の駅長だった。

わたしたちの富士前小学校は昭和二十年二月二十五日の空襲で区内最初の被災校となり廃校の運命をたどった。

君とわたしは旧制中学校で五年間を共にした。毎年の組替えにかかわらず、一度も同クラスにはならなかったが、同じ出身小仲間として、親密を加えた。ともに体操、を苦手とし、美術部を共にする仲間でもあった。

受験雑誌「考え方」の表紙絵の入選を何度か、君の画才は芳しく、将来は美校生かと思われたが、父親が製薬会社の勤めにあって、その悲願に応え薬学の学校に進み、やがて公立病院の勤めを一貫している。

太平洋戦争末期の六月、君は一男二女を残し応召し、雄心勃々勇躍を伝える手紙をわたしに与えている。

戦後の一時期、組合運動の絶頂期には病院労組の執行委員長に祭り上げられている。得意然とした彼の危うさを人知れず心配したものである。戦後初、男女平等の選挙権を行使する普通選挙では延安帰りの野坂参三とのんき節の石田一松の二人に連記投票を行い唖然とさせた。

「おい、天ちゃんが死んだな」

平成に代がわりした日に、わざわざわたしになぜか電話を呉れた記憶も鮮明に甦る。昏迷の世代を顧み、覚えず吐きかけた吐息だったろうか。(日十五・十二・十八)

古い物・遠い夢

忠内正之

序章　骨董狂い

古い物・遠い夢と言う題名は青柳瑞穂先生の書名から借用する。ご令嬢のいづみこさんも骨董好きの同病をもってきっとお許し下さるに違いない。

骨董好きではあるが骨董と言う言葉の響はあまり好きでない。うさん臭さとか、眞贋とか、金銭がらみのトラブルとか、何となく不快な雰囲気を醸し出すからである。とは言え自分から古美術収集家であると言うのではあまりにおこがましい。所詮は唯の古道具好きに過ぎないがそれでは可哀想である。結局骨董好きと言う表現で我慢しなければいけない。

骨董品を大別して仮にＡＢＣとランク付けして見よう。Ａは美術館、博物館クラスの特優品であり、Ｃは古道具、雑器等の類である。私の求め得るのは中間のＢランクのもので限りなくＣランクに近い巾広い層が対象となる。

生来ケチな上に子供の頃から戦時下とあって物は何でも大切にせよと躾けられて来た。学用品も書物も衣料もすべて貴重な存在であった。例えば中学生時代の腕時計は兄からのお下がりであったが、学校を出て就職しても当分の間愛用していた。耐用年数がとうに過ぎても愛着があり今も記念にもっている。

古くから生家にあった書画、陶器、刀剣等にも興味を抱いた。生家の薄暗いヒンヤリする土蔵に入っては古いタンスや長持ち等をよく改めたものだ。友達にも古臭い性格と言われたが何でも故事来歴を究める事が好きであった。早晩骨董に興味を持つ事になるのは自然の成行きであったのか？長じて自力で骨董集めをする様になっても自由になる資金には限度がある。当然のことに手の届くランクの物に絞らざるを得なかった。

雑器であっても古い物は本当に味わいがあって良いものだ。大げさに言えばそれが持つ文化や歴史が窺える。

過去三十年に亘って骨董狂いに熱中して来た。高級な美術品は美術館、博物館で鑑賞出来る。しかし多くはウインド越しであって隔靴掻痒の感を否めない。品物は自分の金で買って触って時には使って見て本当の良さが解ると言うものだ。だが良い品物は少ないし又手が届かない。従って私の所蔵品は安物ばかりで気が引けるが、恥晒しを覚悟の上で紹介して見たい。自分史の記録ともなるので。但し勉強不足による独断とマニア特有の思い上がりの点はお許し下さる様予めお願いしておきます。

第一章　亀亭の小瓶と六兵衛のパイプ

私は十八才で上京、学校卒業後銀行に就職して養家を継いだ。養家は微禄乍ら徳川の直参旗本であった。常に文晁の絵が床の間に掛っていたと言うから多少お宝もあったと思われるが、維新のドサクサと関東大震災にあって動産は殆んど失なってしまった。残った物の中で焼物の目星しいのはこの二点である。小品ではあるが少しの時代もあって魅力がある。（写真参照）

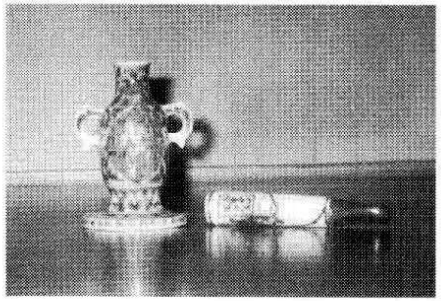
左の小瓶は一輪差しとも見受けられるが、小さ過ぎて花が入らない。染付の絵は祥瑞風でよく見ると中国の童子が踊っている。高台は座りが良く裏にサインがあるが読めない。

右のパイプは明らかに紙巻タバコのパイプ（ホルダー）で「大日本六兵衛作」とサインがある。先祖が使った物らしく古びている。だが幕末に紙巻きタバコが存在したか疑問である。

勤め人として転勤は宿命である。昭和四十二年富山勤務となり家族を伴って赴任した。

富山市は戦災に逢ったものの前田家十万石の城下町として趣のある町であった。城跡には立派な美術館もあって美術品の愛好家も多い様だ。東都の美術界でも富山出身の有力者が何人か居る。Ｙと言う美術店もその内の一軒の本家で繁華街の中で盛業中であった。早速訪問してご主人に二品を見てもらった。

流石に一流の美術商で直ぐに解った。小瓶は和気亀亭



第一章　亀亭の小瓶と六兵衛のパイプ

作で煎茶道具の箸立て。裏のサインが独特で素人では読めない。一方は清水六兵衛作のパイプであった。どちらも幕末から明治にかけての京焼の名工作であった。金額的価値は乏しいが眞正な物だと言う。二つとも母の幼期に遊び道具としていた記憶があるそうだ。

私は次の様に推論する。幕末時講武所で武術の師範役であった当家の惣領忠内次郎三は剣もかなり使えた。そこで友人で親戚の伊庭八郎（有名な剣客）等と共に再度に亘り将軍家茂の上洛を警護した。伊庭八郎の「征西日誌」にも度々次郎三の名前が出て来る。次郎三が江戸に残った父親への京都土産として買求めて来たものらしい。亀亭は当時京都で著名な陶工で窯跡が五条坂下にあって今では記念碑が立っている。六兵衛は清水六兵衛で現在も京焼の名家として連綿と続いている。他の煎茶道具は散逸したが、箸立てだけが残ったもの。パイプは当時珍らしかった紙巻き煙草用のもの。紙巻き煙草は当時上流社会では普及していたらしい。（J・Tで確認済）

次郎三「平」吉行は維新の時勤皇方へ降伏するを潔しとせず敗走し函館戦争に参加し伊庭八郎等と転戦奮斗したが明治二年四月函館郊外の福山で戦死を遂げた。次郎三の墓は賊軍なるが故に俗名の侭で小さな石塔が立っている。時折り心ある史家が訪ねて来る。（寺は本郷高林寺）。パイプはかなり愛用されたらしく古びている。今だに他で見た事がない珍品。

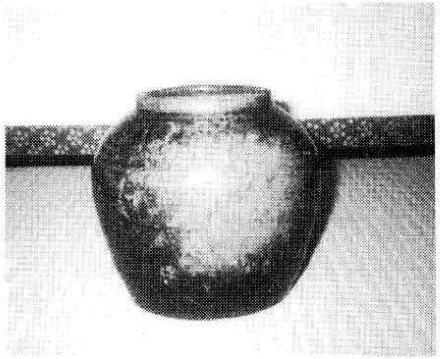
二つとも大した価値は無いそうだが、私にとっては先祖の遺品であり我家の歴史に係わる品なので大切にしている。

維新の動乱期を旨く泳いで生き残った忠内家の屋敷は入谷田圃にあった。入谷乾山の窯跡の記念碑が立つ附近である。地下鉄日比谷線の工事中に陶片が沢山出た様であるが、丁度その頃東京から離れていたので確認するチャンスを失ってしまった事は子孫として又好事家として誠に心残りである。

第二章　丹波の油壺

古い物好きは生来の性であるが、本格的に骨董好きになったのは、富山から大阪勤務となった昭和四十年前半の頃である。大阪の前任者が急病で倒れたので急遽赴任した。支店が新築開店したので慌ただしい中重い責任を背負った。血気に逸る弱冠三十八才。関西勤務の経験など全く無く、如何にして関西商法に特課するか自信が無かった。ままよ、自分の地のままでぶっつかって行こうと固く決心した。取引先を増やし取引量を高めることが先づ第一と考え、その為には社長と親しくなるのが一番と思った。この事が結果として私が骨董好きとなる原因となった。ミイラ取りが、ミイラとなったのである。

支店の隣りに優良な中小企業があったが、本格的な取引では無かった。何とか親密化を図りたいのだが、地元S行からOBが経理に入っており難かしい。長年に亘る懸案だと言う。着任後落ち着いたので早速隣りへ乗り込んだ。漸く社長室に辿り着いたが、社長と面談しても、話の緒が掴めない。改めて室内を見廻すと、矢鱈に美術・骨董品が飾ってある。油絵や唐三彩の馬（多分コピー）位は解るが、陶器、大和絵、書等は不案内な物が多い。解らない時は素直に教えを乞うべきとはかねて先輩から得たアドバイスである。解りもしないのにお世辞で誉めたり、間違いなのに得々として知ったかぶりをするのは得策でない。むしろ素直に教えを乞えば相手は悪い気はしない。自尊心を擽るのがベストである。（当時社長は少



第二章　丹波の油壺

し前に奥さんに先立たれ、寂寥感から、特に骨董趣味に入られたものの様であった。）

数回訪問し、ひとしきり美術品の講釈を受ける内に、すっかり親しくなり、土曜日の午後、ミナミの八幡筋や、老松町あたりの美術店を案内してもらう仲となった。又清・荒神（鉄斎寺として著名）を参詣し境内に展示された鉄斎の作品等も解説してもらった。そう言えば社長の応接室にも鉄斎の書が飾られていた。こうしている間に取引は急速に進み、実質主力行となる事が出来た。それは大成功だったが、副効果として私の古い物好きを昂じさせてしまったのである。

元来関西には古美術観賞の好条件が揃っている。寺社、美術館、美術商等が数多くある。京都や奈良は町並みそのものが歴史的である。又資産家のオーナー経営者が多くて、之等の方々は良い物を所持しており造詣も深い事が解ったので相手の趣味を大いに利用する内に自身がハマってしまったのである。

刀剣好きの方もあり、社長クラス数人に自慢の刀を持ち寄ってもらい店で鑑賞会を開いた事もあった。信国、為継、清麿等珍しい品も出品され好評であった。結果的に応分の取引を戴いたのは当然の事である。大阪には二年余り在勤したが、趣味と実益が好循環となって良い経験となった。

趣味の方は本格的となり、余暇には八幡筋他で古い物

第三章 魯山人の詩書文鉢

大阪から東京の本部に転勤となり、少し経ってから支店勤務となったので多少暇が生じた。そこで東京中の骨董店を冷やかして歩く様になった。骨董店ウインドショッピングとでも言うべきか？。店数は二百軒以上に昇ると思うが、今でも主要な店は覚えている。お陰で数多くの品を見たり、店主との会話等を通じて良い勉強をさせてもらった。

昭和五十年だったと思うが、春の彼岸の墓参りの帰途駒込の六義園近くのNと言う店を覗いた。ここでは曽っ



第三章　魯山人の詩書文鉢

を求めて歩いた。小遣いには制限があるので、際立った優品美品は買えなかったが、気に入った物は多少無理して買った。

この時期に入手した物の内一品を紹介する。写真の古丹波の油壺である。丹波焼は日本の中世に盛んに稼動した六古窯の一つであって兵庫県で現在も造成されている。民具から茶陶に至るまで陶技も多彩となって発展した。この油壺は口縁に柄杓の柄を入れる切り込みがあり、灰被ぎが黒一色の壺の上部に青白く流れて見所となっている。往時の職人の無心の技が、現代の吾々に感動を与える。江戸中期頃の作と思われる。当初は油壺として作られたものと思うが、後世の茶人に見立てられて茶道の水指として転用されている。後で解った事だが、遠洲流先々代家元、小堀宗明宗匠の「古丹波油壺水指」の極め書があった。

妻が茶道の稽古をするので時折り出番がある。大阪時代を回顧しては眺めて楽しんでいる。

大阪以来、今日に至る迄、永年に亘る収集で品数だけは豊富になった。既述の通りあまり誇れる程の優品は少なくガラクタが中心である。サラリーマンとしては当然であるが、そんな中苦労して求めた物程愛着が湧く。新しい物は作意が鼻につき値段も高い物が多い。古い物は本当に味わいが深くて良い。見る度心が安まる様な気がする。遠い夢がある。思い出が蘇る。

て芙蓉手の中皿（明末の染付）を格安で堀り出した実績があった。ショーウインドの中に染付のかなり大きな鉢が目に付いた。かねて顔見知りの店主に尋ねると魯山人の作品だと言う。

魯山人はあまりに有名な人物なのでご存知の方々が多いと思うが一応紹介する。魯山人は昭和三十四年に七十六才で没した天才的な芸術家である。陶器は勿論のこと、書画、漆芸、料理、等行く処可ならざる無しの名人で、その多才振りは現代の光悦と言っても過言ではない。社家の子供として生まれたが、すぐ里子に出され、捨て子同様の扱いの中で育った。親も兄弟も親類もないも同然であった。愛情を受けないで育った人の根性には反骨の精神と、かなりの僻みがあった。それが毒舌となって勝手気ままな放言を吐いた。嫌われて世間から白眼視された。このあたりの悪評は白崎秀雄氏著「北大路魯山人」の表現のどぎつさによって真の人間性が歪められたと辨護する好意的な説が最近になって出て来た。

奇妙なことに、死んでから徐々に声名があがり、海外でさえ彼の作品を評価する人が現われ出した。市価をよんで彼の作品は愛好者の中で珍重され、当今の超一級品と目されるに至っている。その作品は多岐に亘っており難かしい作品もあると言う。つまり贋作が多いと言うことである。

そんな魯山人の作品が手頃な値段で簡単に転がっているとは思えないが、何か惹かれるものがあった。気品と風格があって訴えて来る。新陶を軽んじていたが、彼の作品のすばらしさは古作に迫り凌ぐ程と言われており、本品にもその様な魅力があった。但し共箱では無かった為か（骨董業界は嫌なもので作者とか、確実な鑑定者又は所蔵家の「極め書き」が無いと極端に安くなる）何とか手の届く水準であった。そこで無理して買うことにした。無論家計に響くので妻には当分内証とした。

購入した後、店の応接間に飾って楽しんだり来客にも見て貰って話題の種として得意になっていた。或る日取引先であるF家の主人が来店され、この鉢を見るなり即座にこれは駄目だと断言された。Fさんの家は生前の魯山人と極めて深い親交があり、現在も山人の作品を数多く所有されておられる。

意気消沈した私は家に持って帰ったものの口惜しくて自宅の庭石にぶっつけて割ってしまおうかと思った。見込み違いをした時位いひどい自己嫌悪に落ち込むものはない。Fさんは悪い事を言ったと思われたのか、その後食器の類を二～三点下さった。眼を肥やせと言うことであろう。遠慮なく頂戴した。鉢は割らず天井の押入れに投げ込んでおいて忘れた。

そのまま十年位あとのこと、六本木にある美術商と親しくなった。真面目な人で後に都の美術購入委員もされた。前述の失敗談を恥を忍んで披露したところ、物はよ

く見直さなければいけない。駄目だと思った物が、良い場合もままあると、自分の経験を踏まえて力付けてくれた上、有力な目利きに鑑定を受けることを奨めてくれ、品物を預けた。忘れかけた頃連絡が入り、「大変ですよ」と言う。当時魯山人の作品鑑定では第一人者の黒田領治氏が、紛れもない真物に間近いなしと判定し、而も極めて珍らしい作品だと折紙を付けてくれた由であった。この写真の鉢が現物である。多少金を掛けて塗蓋を造り、お茶の平水指に見立て愛用している。妻の茶道稽古も漸く軌道に乗って来たので、妻との経済的軋轢に対するかなりの緩和剤ともなった。

詩文は次の通り、

朝弄布袋暮布衣　朝に布袋と弄び暮に布衣と弄ぶ
弄来弄去知歳晨　弄び来たり弄び去って最晨を知る
南無帰命老布袋　南無帰命す老布袋
天上天下唯一人　天上天下唯一人の

（読みは鯨　游海氏による）

独特な篭字で書いてある。魯山人の哲学を述べたものと思う。古染付を意識して作られたと思われ見込の　釉には特有のむらが二ヵ所程ある。この時期魯山人はロクロは自らひかず職人等に任せたというが、職人達の中に若き日の荒川豊蔵氏が居たと言う。もしかしてこの作品もと想像すると楽しい。後にこの鉢は雄山閣から出された魯山人作品集に解説入りで掲載された。その本は五冊から成りかなり高価だったが義理から購入する破目となった。月賦にしてもらったが、本体より高く付いた。

第四章　不識の壺

不識とは達磨大師の異称であり、不識の壺とは本来茶祖利休が水指に見立てて有名になった南蛮渡りの壺の事である。（実際は常滑の古い手であったと言われるが）。

ここで私が紹介するのは、生れも時代も不詳な見栄えのしない不思議な壺の話である。

浦和に勤務したのは、昭和五十一年の春から五十三年春迄の二年間である。浦和の街は今では立派な市街であるが、当時は区画整理前で、特に駅前は雑然としていた。但し宿場町の面影を残す中山道筋は、趣があり流石に貫禄を感じさせた。少年の日先輩から借りて胸を躍らせて読んだ佐藤紅緑の小説「ああ玉杯に花うけて」の舞台は、浦和がモデルであったと後で知った。尤も舞台は浦和でも作者の心象は故郷の津軽平野の景色だった様である。

中山道の商店街の中にはのれんと由緒を誇る店が多くあるが、漬物のS商店もその代表的な存在で今も盛業中である。ここの奈良漬（浦和漬と言うべき）は極めて美味である。ご主人のSさんは商売熱心であると共に地元の名士で且つ話題が豊富であった。親しくなって度々お邪魔させて貰った。その都度広大な屋敷内の工場兼自宅



第四章　不識の壺

に上げて戴いた。お宅には立派な調度品が多くあった。数代も続いた伝統のあるお店は違うなあと感服した。

私が古い物に興味を抱いている事を知り、浦和にも骨董品屋が一軒あるよと教えてもらった。最近では、調宮神社の境内で、野天の骨董市が立つそうであるが、当時は骨董品屋など皆無と思い込んでいた。早速訪ねて見ることにした。

中山道を北浦和方面に歩くと外れの右側に古ぼけたそれらしい店があった。見ると薄暗く淋しい風情で僅かに古銭類、キセル等が並べられているが、他に目ぼしい品とてなく、唯の古道具屋であった。折良くご主人が在宅中ですぐ見せたい物があるから部屋に上がれと言う。良いカモが来たなと思ったのであろうか？但しSさんの紹介なので応待は丁寧であった。

その折見せられて結果的に求めることとなったのが写真の壺である。説明によればこの品はさる由緒ある家からの払い下げであり、外国勤務経験のあるお屋敷なので良い物と思うが、自分では解らないので鑑定して欲しいと言う。見ると、六古窯の産では無さそうだ。国焼きとなると範囲が広すぎてさっぱり見当がつかない。形と釉薬から李朝末の出来かとも思われる。ハマったかなと思いながら何となく興味が湧いて欲しくなった。浦和での記念にでもなればと買うことにした。足許を見るのか、それとも仕入が張ったのか仲々高い事を言う。結局こちらの付値との中間で手を打った。こう言う場合欲しいという気持が先向するとこちらの負けである。当時のボーナスに食い込んで痛かった。

よく観察すると内部も丁寧に　釉　が掛けてありかなり上手である。底は碁笥底で、やや軟陶、胴継と言う古風な造りであり乍ら轆轤目はキチンとしており気品がある。決して雑器では無く大切に扱われた様である。

後にプロの一人に鑑定してもらったが、首を捻るばかりで確たる返答が無い。花を飾っても今出来の品と違って風格があって楽しいではないですか？と問いつめると慰めともとれる言葉があった。さほど出世する物とも思わなかったが、之には一寸ガッカリした。

私なりの結論としては、これは江戸期の志戸呂焼の生まれと考える。地肌が図録の品に実に似ている。国焼きではあるが志戸呂は小堀遠洲の指導も入ったと言う静岡の伝統ある窯場である。今は本格的な窯場は断絶しているので貴重な品と勝手に解釈して自己満足している。

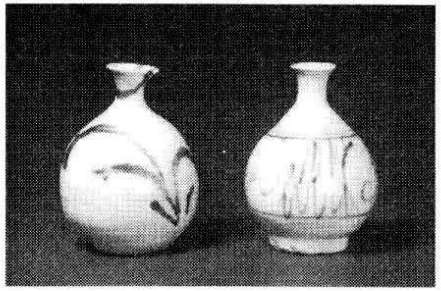
この壺の用途は花入れと考えるが、妻は花の入れ方が難しいとの理由で使用を抵抗している。無断で買ったのが気に入らないらしい。買値は未だに言っていない。

春ならば水仙を二～三本、秋ならば萩の花一枝を投げ入れて飾れば一段と趣があろう。だが今は飾り棚の中に出番のないまま鎮座している。きっとそのうちこの不可思議な壺の出自と時代をバッチリ解明して下さる方が現れるに違いないと心待ちしている昨今である。

第五章　珍品堂主人

「珍品堂主人」は井伏鱒二の小説である。梗概は次の通り。学校の教師くずれで趣味がいつの間にか本職になってしまった骨董狂、加納夏磨五十七才。この通称「珍品堂」という主人公が骨董の売買に行き詰まって料理屋を始める。凝って開店した甲斐があって、料亭は繁昌するが、資金の関係で顧問格に迎えたお茶の師匠に弱みを握られて、いびり出されてしまう。そして再び骨董の道に舞い戻る。それだけの話である。多少色気模様もあって風俗小説の部類だが、流石に井伏氏の名筆によって完成度の高い文学作品となっている。骨董に興味を持つ方で未だお読みでない向きには一読をおすすめする。

この作品にはモデルがある。もう故人なので名前を出しても良いと思う。その人の名は秦　秀雄と言う。明治三十一年福井の浄土真宗の寺に生まれる。学校卒業後、福島、東京で教師生活を経て、北大路魯山人を知り、料亭「星岡茶寮」支配人となる。魯山人によって更に美術品の鑑識力を叩き込まれたらしい。魯山人と喧嘩別れしてより放浪生活に入る。



第五章　珍品堂主人

そののち卓越した鑑識眼をもって、古美術界で活躍した。著書も多くある。青山二郎、白洲正子、小林秀雄、井伏鱒二外、作家、陶芸家、美術商等と深い親交を結んだが、異端者でもあった。その奇行ぶりは小説の中に詳しい。すでに物故されたが、私は、元気な頃の氏に数回逢うチャンスがあり薫陶を受けた。その当時の思い出と、秦氏所持の初期伊万里徳利の物語りを綴りたい。

二十数年程前のこと、私は骨董趣味を深めて暇を見ては都内各所の骨董店をひやかして歩いた。ギャラリ「K」はその頃度々訪れた六本木の店である。店主は脱サラ乍ら秀れた感性の持ち主で、後に文化庁の購入評価委員を勤める程の信用ある人物であった。未熟な私に対しても嫌がらずに色々と手解きして呉れた。

ある時店を訪ねると、痩せて小柄な八十才前後と見受ける先客があった。眼光の鋭さからこれは唯者ではないと察した。その後数回逢う内にその人が美術界で有名な秦氏と知った。氏は色々話をして呉れたが、今だに明確に覚えているのは、私に向って「お前は初心者の様だが、これから骨董集めを始めるのは大変だよ。なぜならあまりに値段が高くなり過ぎている。焼物を主体に絞るとしても分野が広すぎる。酒を呑むかな？酒が好きならば、酒器つまり〝徳利〟と〝ぐい呑〟（酒盃のこと）集めからスタートしなさい」と教えてくれた。大家のアドバイスは暗中に模索を繰り返していた私にとって天啓の閃となった。

それから数年は徳利とぐい呑を集めることに熱中した。唐物（中国・朝鮮産）和物（瀬戸・志野・唐津・有田等）を問わず良質なものからガラクタまで、新陶（現代作）を含めて夢中になって漁ったのである。当時は未だ市中に品数も豊富で今より安価であった。その点でも秦氏のアドバイスは的確であった。だが家計を益々圧迫することとなったので家人からは、一層冷やかな目で見られるハメとなった。

後年になって、妻の指向する茶道具の収集へシフトするため、資金繰りから主だった酒器を処分せざるを得なかった。特に唐津、古瀬戸、絵志野、青磁等は優品だったので好条件で下取りして貰った。これ等は二度と手に戻らない類の物で、今となれば惜しい品ばかりであったが、悔やんでも後の祭りである。骨董品との出合いは一期一会だから。

さてこの写真の二本の徳利は当時所持していた品で、初期伊万里の希少品である。初期伊万里と古伊万里との明確な分別は極めて至難であるが、初期伊万里は元和年間の白磁創業の焼造品であり、李朝白磁の陶技が端的に表現され、いかにも開窯期の製品らしい格調を温存している。初期はごく短期であり、その後、古伊万里、近代、現代と続き発展しているが不勉強の故をもってこの程度の説明でお許し願いたい。この徳利は間違いのない品で

あるが、何れもキズのあるもの、それ故に私ごとき者でも手に入れる事が出来た。完品ならば十数倍の値はする。

右は染付、左は辰砂である。前述の通り初期伊万里は時代が古く且つ作られた期間も極く短かいと言われる。従って作品は極めて少ない。完品には仲々お目にかかれない。

実はこの二つは、白洲正子さんから秦さんの手に渡った曰くつきの品であった。瑕疵はあるが充分使用出来る。この人達は古陶の風情を愛して「キズものをいとわず」と渇破して苦にしない真の骨董好きであった。

左の辰砂の方は〝珍堂〟（秦氏の自称）の箱書があった。珍しいものなのでしばらく愛蔵したが、前述の事情で処分した。

右の徳利は晩酌用に長く愛用した。一合弱程入って私の適量である。手取りも良く愛らしい。しかしこの頃は私も禁酒してしまったので出番がない。思い切って旧来の親友である酒好きのIさんに進呈しようと思っているうちに「お前の死水はとってやるからな」と豪語していたのに自身が逆に先立って逝ってしまった。もっと早く進呈すれば良かったのにと悔やまれてならない。今は押入れに仕舞ってある。

十数年前秦さんは天寿を全うされた。見舞に行ったK氏に向って秦さんは重病の床の中で「この頃、古唐津のぐい呑の出物はないか？」と質問したそうでその執念深さは正に鬼気迫るものがあったと言う。

第八章　陶片も亦楽しい

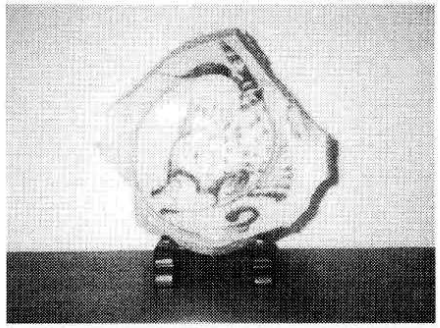
「なんでも鑑定団」と言うテレビ番組の評判が高い。視聴率も良い様だ。当該テレビ局の久方ぶりのヒット番組だそうである。Nプロデューサーの十数年に亘る苦節が実ったとのことご同慶の至りである。鑑定士（？）たちのタレント性が強く出ており学識権威は乏しいものの彼等のカリスマ性は秀れて出色、視聴者のお宝への興味を刺激する。「ウサン臭い連中が出ている」と識者の発言を聞いた事が別のセミナーであったが、演出の巧みさで娯楽番組として見ていれば面白い。鑑定金額は買入を保証する訳ではないので時として噴飯物の結果もあるが、夢とロマンを与えてくれて楽しい。

平成十四年八月放映の番組で「古井戸から奇蹟の発見歴史ロマンの超珍品に仰天値」と言うふれ込みで古備前の徳利に四百万円の高値がついた。窯印なのに隠れキリシタンの十字架に見立てての講釈であったが大いに疑問であった。唯の古い帽子をナポレオンの帽子と称して売るが如き類の話と思うが、娯楽番組なので咎められない。

さてこの番組の影響か？最近古い物への関心が高くなり骨董ブームを招来した事は誠に結構な事だと思う。古い物は再製が利かず、唯の古民具であってもそれが持つ歴史的内容と文化は貴重だからである。

私の住んでいる練馬のはずれの片田舎でも数軒の骨董兼古道具店が開業し結構繁昌している。その内一軒と特に親しくなり、お馴染みとなった。古民具中心のガラクタが多いが、時には安価で楽しい堀出し物もある。過日もテレビカメラが来ていたので聞くと「なんでも鑑定団」のロケ現場として提供した由で、時たまテレビに店内が写るらしい。

或る時店の片隅にあって一山程ある陶片類の中にあって一際光彩を放っている陶片が目に付いた。黄白色の地肌に鉄砂で魚の絵が書かれている。大皿の中心部のかけ



第六章　陶片も亦楽しい

らであろうか？確っかりした高台（底のこと）が残っている。珍味等入れの中皿として使えるし又皿立てに飾っても部屋がひき立つと思った。何と言っても躍動する魚の絵に迫力がある。かなりの時代を経ているものと思われ、又安値であったので買うこととした。

元来陶片は陶器愛好家にとって究極の到達点だと言う。近代陶芸の神様とも崇められる石黒宗麿は四十数年程前三十五万円もの大金を払って古唐津の鉄絵の陶片を購入したと言われる。古典に迫る研究の必要上執着したのであろう。この陶片は小山富士夫を経て今は現代陶芸家小山岑一氏が所有している。（二〇〇二年陶説八月号）

私が手に入れた陶片は写真の品で、当然の事そんな価値はない。家に持ち帰り、先づ洗ったり割れ目の土を眺めたりして愛玩した。文献で調べても出自は判然としない。店主は瀬戸か唐津の古い手だと言っていたが私にはそうとは思われない。和物でなく唐物（外国製）の様だ。唐物と言っても朝鮮や中国ではなく、東南アジア系の生まれと睨んだ。理由は、堅手であるが土の色が濁っており粘土が粗い。最大のポイントは描かれた絵の魚の形が有名な元の染付魚藻文の壺に見られる魚と殆ど同形であるからである。草魚のイラストでもあろか？私の好奇心はふくらむ一方だ。

仲々判断がつき兼ねるので「なんでも鑑定団」に持ち込もうかと大それた考えを抱いたが、たかだか一万円未

試験に合格した。高小卒にも拘らず成績極めて優秀で教導学校（後の予備士官学校）をトップクラスで卒業し原隊へ復帰、合計六年間満州勤務後曹長に昇進して除隊予備役となって陸軍省に文官として入省、縁あって母と結婚した。

支那事変が没発するや翌年応召、中支作戦に参加最前線で活躍した。応召三ヵ月目、江蘇省陳家甸の戦場で渡河作戦のさきがけとして奇襲攻撃の特命を受けて小隊の指揮をとって出動、使命は全うしたが途次敵弾に当たって壮烈な戦死を遂げた。後に戦友だった方の話しによると父は職業軍人のプライドもあってか極めて勇猛果敢、常に部隊の牽引的役割を果した。この時の出動も自ら志願したものらしい。

父はこの戦功で功六級の金鵄勲章を貰った。下士官クラスでは最高の栄誉である。当時は戦勝中でもあり遺骨も軍刀も丁重に扱われ帰還した。

戦時中母は軍神の妻などとおだてられて気分良く過して来たが戦後は多分に洩れず「たけのこ生活」を余儀なくした。幸い自宅が戦災を免れたので間貸等で凌いで来た。

そんな中でも遺品の軍刀は大切に仕舞われて来た。戦後の占領軍による刀狩りを極端に恐れた母は長年に亘って押入れ深く布団の奥に隠し持って居た。養子となった私や妻にも決して見せることは無かった。価値観の著る

満の代物では恥をかくばかりである。そこで旧知の美術商に見て貰った。即座に「これは安南の大皿の陶片であり、四百年以上の時代がある。価値としては乏しいが、資料としては貴重な物だ」。と判定して呉れたので嬉しくなった。今ではリビングに飾って毎日眺めて楽しんでいる。無心な作者の力強い筆のタッチが迫って来る。

後日、著名な出光美術館にある陶片資料室を訪ね見て廻った時、殆んど同じ手で同じ魚の描かれた陶片を発見した。解説では採取地は「タイ」とあった。意を強くした次第である。

追記、陶片は探せば高安まちまちだが、市中で容易に手に入る。だが、古窯を堀って採取することは内・外国共に違法なので念のため。村田喜代子著「人が見たら蛙に化れ」では国内の陶片についても詳しく書かれており興味深い。

第七章　刀は富山籍

我が家に一振の日本刀がある。宝物とは言わない迄も大切な品である。この刀は日支事変で戦死した義父（以下父とする）の遺品だからである。

父は下士官ながら職業軍人であった。（戦死時准尉）明治四十二年豊橋市の郊外に生まれ育ち現役で入営しのち選抜されて関東軍に配属された。推薦されて幹部候補生しく変ってしまった世間に対するささやかな抵抗と生活を守って来た明治女の一念が頑固な性格を強めたのであろう。

元来母の出自は武家であり曾祖父戸田讃岐守は六百石取りの旗本で田宮流の剣の達人であった。幕末には練兵所であった講武所の奉行を勤めた程だ。維新後は旧領の豊橋郊外に迎えられ神官を業として静かな余生を送った。この辺りの事情は子母沢　寛著の小説「消えた剣客」のモデルとして詳しい。戸田家は現在も続いており終戦時には立派な刀箪笥の中に百本以上の刀剣があったが占領後この殆んどを役所経由で強制的に召し上げられたと言う。但し頗る銘刀は何とか数本残して貰った。その中の一本は源　清麿作の長巻きでその存在は業界でも有名、後に東博に預けて展観された事もあった。当家のこの刀も父の応召時に実家の刀箪笥から貰い受け軍刀　拵　に仕立てて携行したものだ。

斯くしてこの刀は母が隠し持ったまま何年も経った。私共一家は勤務先の都合で富山へ転居することになった。刀の存在は薄々承知していたが、遂に私の確認する処となり、かなり揉んだ挙句富山で届出させる事を説得した。引越し作業中に発見したと言うアバウトな説明で結果的にはＯＫであった。当時では既に然るべき刀であれば登録するだけで所有する事を認可したのである。

登録先富山市教育委員会へは私が持参した。委員会の有力な役員は刀を一瞥するなり「これは良い刀だから大切に保存して下さい」と直ぐ許可を呉れた。なお手入れが緊要だからと親切に地元の研師を紹介してくれた。長年布団蒸しの状態であったので相当荒れていたのだ。早速「貴剣庵」なる研師に持ち込んだところ丁寧に研いでくれ更に軍刀の拵も古くなったのでと白鞘に納めてもらった。研ぎ代と鞘代とで約三万円支払ったが、当時の薄給ではきつかった。

改めて調べるとこの刀は肥前刀で藤原兼広作享保三年二月鍛作と銘がある。享保三年は一七一八年である。文献を読むと古刀期は文禄以前、新刀期は慶長より明和まで、新々刀期は安永より明治までと言う（戦時中普通の



第七章　刀は富山籍

将校達が見せびらかしていた軍刀は昭和刀と言う）従ってこの刀は新刀である。実践の使用に耐えるのは古刀の名刀よりも新刀新々刀の方だと言われる。長さ、強靭さに於て秀れているからだ。幕末時新選組の近藤　勇は新々刀源　清磨を又土方歳三は新々刀和泉守兼定を好んで愛用し活躍したと言う。

私は時々鞘を払ってこの刀を手入をする。鈍い色と光を放つ刀身が現われる。名工肥前忠吉の流れを汲む業物である。刀の持つ歴史の重みか、潔きよく散った父の国を思い家族を思った切ない心情か、訴えて来るものがあって文字通り真剣な気持にさせられる。刃渡り七二センチメートル、二尺四寸ほどで長刀の部類である。ずっしりと重い。父は剣道三段で腕っ節も強かったそうだが、普通の者では到底自在に使うことは出来まい。物干竿とは言わないまでも長刀を背にしての活躍振りは佐々木小次郎の雄姿を彷彿させる。決して名刀では無いが家宝として大切に伝えたい刀である。

富山で発見した事にして富山で届出したのでこの刀の籍は富山市にある。東京に定着してから東京へ移籍する事も度々考えたが手続きが面倒そうである。辛かった事も多かったがすべて忘れてしまった。今は楽しく懐かしい思い出のみが残る富山籍のままで良いと思っている。



風景論

堀内永人

第一章　風景へのプロローグ

一、農村の風景

東海道新幹線「掛川」駅から四粁ほど北へ行ったところに、「美人ヶ谷」というユニークな地名の長閑な農村がある。戸数は五十戸ほどある。

当地の氏神様「五社神社」の古文書によれば、美人ヶ谷は「鬢ゼガ谷」から転じたとある。しかし、当地は徳川二代将軍秀忠の生母・西郷局の出生地であり、五社神社は西郷局の産土神であったので、西郷局にあやかり「美人ヶ谷」と呼ばれるようになったと言い伝えられている。

この辺りは低い山と狭い田や畠からなり、お茶と自家用米を生産している農家が多い。田圃の真ん中を、幅二十メートル程の川が流れている。「西郷川」と呼ばれる山あいの川だ。生家はこの地にあった。

生家の裏門は昭和の始めに開通した「西郷県道」に接していた。この県道は十年ほど前に第二東名高速道路の取り付け道路として拡幅された。このため屋敷の半分は道路用地に買い上げられ、帯のように細長い地形になってしまった。やむなく生家は五百メートルほど離れたところに移転した。残った土地は、都会地ならば二軒位は建てられる広さであるが、田舎のこととて更地のまま放置してある。眉毛を剃り落とした額のように、間延びして狭く殺風景な土地になってしまった。

大正の頃までは、生家の後ろには山が迫っており、夜になると、裏山からキツネが降りて来て、屋敷の中の築山を通り抜けた。ケーンと一声鳴いて家の前の西郷川に掛かった木橋の上を飛び撥ね渡っていった。キツネの足音がトーン、トン、トンと三つ聞こえたという。雨季になるとこの川が増水氾濫し、付近一帯の田圃は冠水して湖のようになった。子供心に恐ろしく、家の中から怖々

と強い雨脚を何時迄も見ていた。

表門と西郷川の間には牛車や荷車が通れる程度の道幅の村道があり、屋敷と川底とは十メートル位の高低差があったので、大雨が降っても、わが家は水の被害はなかった。

夏の渇水期になると屋敷の中の三つの井戸は水が涸れ、家の前の川原に即席の浅い仮井戸を掘り、溜まった水を木桶に汲み入れ、天秤棒で担いで運び上げ、風呂水や洗濯水に使用した。

川の向こう側は田圃が続いていた。その先には、小高い山腹に茶畑が連なっていた。また、山あいには潅漑用の溜め池の土手が見えた。全く長閑などこにでもある農村風景だった。

屋敷の周囲には、県道に沿って黒板塀が、村道沿いには槙の生け垣があり、門柱の際に大きな太い藤の木があった。藤の木は庭一面に枝を張り、大きな藤棚一ぱいに拡がっていた。初夏ともなれば、身の丈ほどの藤の花が庭一面に咲き、蜂が蜜を求めて群がり飛び舞っていた。

生家の移転と共にこの藤の古木も切り取られ、今は根元しか残っていない。藤棚の風景も懐かしい思い出である。

山と田園の中で多感な少年時代を過ごしたので、田舎の風景は今も記憶から消えない。十六歳のときに進学のため家を離れた。半世紀以上も昔のことである。それ故か、故郷の風景は大変懐かしい。年を追うごとにその思いは強くなる。

いかにいます父母
つつがなきや友がき
雨に風につけても
思いいずるふるさと

高野辰之作詞　岡野貞一作曲　文部省唱歌「ふるさと」の二番の歌詞が好きだ。今はなき両親を思い、一人、また一人と欠けていく旧友をしのんで時々この歌を口ずさむ。

田舎の風景は、住民と共にいつも変わらず暖かく迎えてくれる。本当にふるさとは良いところである。

二、温泉場の風景

昭和三十年六月から五年間を熱海で仕事をした。田舎育ちにとって、国内切っての大観光地・大歓楽地の熱海温泉は想像もつかない別天地で、そのカルチャーショックは大変であった。

週末の熱海駅周辺は、車中で飲んだ振る舞い酒で酔いしれた客、千鳥足になった遠来の観光客の酔声、客引き番頭の呼び込み声などが入り混じって、人の行き来もままならないような雑踏であった。昨今の閑古鳥の駅前からは想像もつかない活気ある温泉観光地の駅前風景だった。

夜ともなれば温泉旅館の大広間から、三味線・太鼓の音と共に調子外れの歌声が聞こえてきた。宴会の後は下駄履き浴衣姿の宿泊客が三々五々と盛り場に繰り出す。そこには土産物店が軒を連ねて立ち並び、家で親の帰りを待つ子らへの土産を買う観光客、酔眼朦朧として足元も定かでないまま射的屋で鉄砲を構え、打っても打っても的を外してばかりいる客などなどで大賑わいの温泉場の風景があった。花柳街では、旅の恥はかき捨てとばかりに遣り手婆さんと揉めている人、人。今は全く見られない温泉場のちょっと淫靡な生活風景であった。

温泉場にはつきものの芸者置屋と、そこに籍を置く抱え芸者の私生活もまたひとつの温泉場風景であった。半玉たちの艶やかな稽古場通いの姿はもう見られない。こんな風景も昔のものとなってしまった。

第二章　風景と季節とことわざ

目を閉じると「目ぼたる」とともに色々な風景が瞼に浮かんでくる。自然に目に浮かぶ風景は空気と同じようにあまり意識しない。毎日吸っている空気のように、慣れ親しんだ風景には特別な感慨はない。朝な夕なに富士山を見ている者は、特別に富士山を見たいと思わない。でも、ある日突然、冬の晴れた青空にスキッと聳え立つ冠雪の富士山を仰ぎ見たときは素晴らしいと思う。絵にも描けないような美しさだ。富士山は矢張り日本一のお山である。永久に残して置きたいと願う。富士山の見える土地に住まいしていてよかったと思う。

かっては東京からも、名古屋からも富士山は見えた。富士見町などと「富士」を冠した地名がいたるところにある。富士山はどこから見てもよい姿だ。なかでも、伊豆半島西海岸戸田（へだ）漁港の温泉宿から、青々とした駿河湾を前景に、真っ白に冠雪した富士山を遠望する風景はまさに絶景だ。これほど見事に借景を生かしきった風景はない。

風景はどこにでもあるし、季節とともに変化もする。風景にかかわる故事・ことわざ類も多い。「小倉百人一首」などは、風景描写のオンパレードだ。

「風景」と「季節」と「ことわざ」について少し考察してみたい。

一、冬の風景

今は冬である。冬になれば流氷がオホーツク海からやってくる。流氷は北海道の沿岸を覆いつくす。氷の下はどのようになっているのだろうか。海の幸でいっぱいなのか、文字どおり冷たい氷塊に埋め尽くされている奈落の底なのか。大地に立つ私たちには判らない。氷の上の風景はまさに〝氷山の一角〟である。

冬は寒いのが定版である。しかし、〝暑いと思えば冬

でも暑い〟し、〝暑い寒いは気の迷い〟らしい。そうはいうものの〝冬の風は網の目くぐる〟といわれるほど、寒風はどんなすきまをも通って吹き込み、身を刺すように冷たく痛い。

〝冬男に夏女子〟といわれるように、冬の男姿はどっしりとよく、温泉場でのどてら姿は冬の風景である。女性は夏姿がよい。花柄模様の浴衣姿は艶やかでよい。西洋には〝女心と冬の風〟と愛情の冷めやすさと移り気を指す言葉があるが、これは西洋版セクハラで日本女性には当てはまらない。

〝冬編み笠に夏頭巾〟〝冬の氷売り〟ということわざはものの譬えである。さかさまであったり、時季外れであったり風景を逆手にとっている。

〝春耕し夏草切り秋刈り冬納む〟農作業の一年は終わり、〝待てば海路の日和あり〟というわけで、〝冬来りなば春遠からじ〟である。

二、春の風景

〝一花開けて天下の春〟春ともなれば心眼が一度に開け、すべて〝我が世〟と錯覚するような思いがする。

春はまことによい季節で、風景も明るくなる。元禄時代の俳人・榎本其角は〝鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春〟と景気のよい春の風景を詠んでいる。時には春でも雪が降ることがある。〝解けやすいのは春の雪に繻子の帯〟と思わせぶりな風景が詠まれている。

〝花を踏んで同じく惜しむ少年の春〟落花を踏み散らして、友人とともに過ぎ行く青春時代の春を惜しんだ経験は誰にもあると思う。桜並木の下で繰り広げられる花見の宴の〝落花狼藉〟は見るに堪えないが、これも春の風景でもある。しかし、度を過ぎた酔客の醜態やボリュウムをあげたカラオケの騒音はなんとかならないものか。

兎追いしかの山
小鮒釣りし　かの川
夢は　いまも巡りて
忘れがたきふるさと

遠く離れて思う「ふるさとの風景」は懐かしい。瞼に浮かぶ〝春の小川はさらさら流れて〟いるだろうか。

死後仙界に暮らす楊貴妃が、玄宗への思慕を詠んだ長恨歌、〝梨花一枝春雨を帯ぶ〟は、美人の思いであっても悲しい歌は淋しいものである。

昼の長い夏がだんだん近づいてくる。だから春の日は暮れそうで暮れない。この辺りで〝我が世の春〟は終り、季節は夏となる。

三、夏の風景

かっては辛い仕事は嫁にさせよとばかりに〝夏の火は嫁に焚かせよ〟といった時代もあった。現代の教育方針は、自分の娘には厳しく嫁には優しくなり〝夏の火は娘に焚かせよ、冬の火は嫁に焚かせよ〟という。厳しく躾ければ、わがまま娘も良妻賢母となり、その家庭は円満となる。

鰈は真ん中より鰭に近いほうが味がよい。夏も同じように座敷の奥より縁に近いほうが涼しくて過ごしよい。〝夏座敷と鰈は縁端が良い〟縁側に出て、蚊やりを焚きながらの夕涼みも夏の風景である。

避けようもない午後の暑い盛りの日差しの中での〝ラムネ屋さんのかき氷〟風景は、想像するだけでヒヤッと冷たさが歯にしみてくる。

麦わら帽子をかぶって鬱蒼と生い茂ったお寺の裏山に入れば、〝静けさや岩にしみいる蝉の声〟が耳に覆うばかりの喧噪である。一週間で果てる蝉の命の儚さがふと頭をよぎる。今年も〝とんで火にいる夏の虫〟にならなくて幸せであった。〝夏歌うものは冬泣く〟ことのないように、働ける時にはしっかり働くべきだ。キリギリスの真似をしていては後で泣かなければならない。心しよう。ながーい夏の一日もようやく終わりになった。

四、秋の風景

十月は秋の真っ只中。秋といえば味覚の季節である。

〝柿食わば鐘がなるなり法隆寺〟そして、〝秋の夕焼け……〟は美しく、しかも、秋の夕焼けは明日の吉兆のしるしでもある。私たちは子供の頃から、歌とともに風景を楽しんできた。

秋の夕日に　照る山もみじ
濃いも薄いも　数ある中に
松をいろどる　楓や蔦は
山のふもとの　すそもよう

と秋の風景が歌に詠まれている。

〝秋の稲妻は千石を増す〟といわれる。稲妻は「稲の夫」の意で、古代の農民の間では、稲が稲妻によって霊的なものと結合し、穂を実らせると信じられていた。

秋の豊饒を祝う鎮守のお祭りも、年一回の「農村の風景」である。娯楽の少なかった時代の農村では、大人も子供も村祭りを心待ちしたものだ。

村のちんじゅの神さまが
きょうはめでたいお祭り日
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
朝から聞える　ふえ・たいこ

年も豊作満作で
村は総出の大祭り
夜までにぎわう　宮の森

治まるみよに神さまの
めぐみ仰ぐや村祭り

聞いても心が　勇み立つ

〝秋の空と男の心は七度変わる〟といわれるように、秋の空は男心に似て一日に何度も変る。一方、秋が深まれば周りはなんとなくひっそりと静まり、〝秋深き、隣は何をする人ぞ〟と、ますます隣家と没交渉になっていく。

秋の日は暮れやすい。釣瓶桶が井戸の中に勢いよく落ちていくように、日の暮れるのが速く、〝秋の日は釣瓶落とし〟に暮れていく。

秋の風景には侘しさもある。しみじみとした秋の趣は、四季の中でいちばん優れている。〝物のあわれは秋こそまされ〟と「徒然草」に書かれている。昨今は、地球温暖化防止のため〝野焼き〟が禁止されて「焚き火の風景」は見られなくなった。時代とともに風景も変わってきた。

ぽつぽつ〝秋風が立っ〟て時雨れてきたようだ。次の季節は冬である。

第三章　風景とはなにか

一、風景の定義

辞書によれば風景とは、「けしき、風光」（岩波・広辞苑、学研・漢和大字典）「景色、ながめ」（講談社・日本語大辞典、大修館・新漢和辞典）などとある。風景を「空や海を含めた山野の姿」と定義することもできるが、それでは遥か上空から見下ろす地上の姿も風景といえるか、の問いに対して説明ができない。旧ソ連邦のガガーリン少佐は「地球は青かった」と地球を見たさまを描写している。もっと高度を下げて地上を見れば、海は黒い平面で、川は黒い帯のように見える。陸地も板に絵の具を平面的に掃いだように見えて風景と呼ぶのに相応しくない。もっと、もっと高度を下げても空から見下ろす地上の姿は風景と呼ぶのには縁遠い。

空から見た地上の姿は平坦で、視線を移動させても同じように見えて変化がない。距離があり過ぎて地上の凹凸を見極められないからだろう。また、飛行機から見た地上の姿は地図のようだと言われるが、いっそ地図の方が、文字が書いてある分なんの変哲もない平坦な姿よりましだ。

地上に立って見る自然の山野は、凹凸があり、見る位置により全く異なる姿となる。荒々しくも見えれば、穏やかにも見える。母なる大地といわれる所以でもある。

やはり風景というものは、見る距離も角度もほどほどがよいようだ。

中公新書・中村良夫著「風景学入門」二八頁によれば、「風景とは、地に足をつけて立つ人間の視点から眺めた土地の姿である。飛行機や人工衛星から見た姿ではない」と説明している。風景は「大地に立って見た広い場の情

景で、建造物なども含めた姿」をいう。よって、宇宙から見た「青い地球」や、地上から夜空を見上げた「星空」を風景というのにはいささか抵抗を感ずる。

風景というに相応してのは、「超然現代科学」の入らない〝あるがままの自然の情景〟であろう。「花鳥風月」ということばがあるが、花鳥風月は絵画の主役になり得ても、風景では脇役でしかない。

二、自然の風景と造られた風景

（一）日本の代表的な景勝地

美しい風景といえば、日本の代表的な景勝地、安芸（広島県）の「宮島」、陸前（宮城県）の「松島」、丹後（京都府）の「天橋立」が挙げられる。〝日本三景〟と呼ばれる風光明媚の代表地である。

秘境といわれる風景には、越中（富山県）の五箇山（ごかやまたにごかのしょう）谷、阿波（徳島県）吉野川上流の祖谷（いや）、肥後（熊本県）の五家荘の日本三大秘境がある。

美しい庭園といえば、金沢の「兼六園」、水戸の「偕楽園」、岡山の「後楽園」は、日本三名園として名高い。この三つの庭園は、いずれも江戸時代の有力大名が権力を誇示するために造られたものである。

札幌の「時計台」、高知の「はりまや橋」、沖縄の「守礼門」はそれぞれ有名な観光名所である。しかし、実物は高名とは裏腹に日本三大ガッカリという不名誉な陰口も囁かれている。日本三大ガッカリの名誉のために少し三名所の説明をしておこう。

①札幌の「時計台」

札幌市の札幌農学校（現北海道大学）は、北海道開拓の拠点として開拓吏などの官庁とともに、一八七八（明治十一）年に建設された。時計台はこの農学校の演武場に取り付けられてある。

この時計台は、アメリカ風コロニアル建築の典型で、由緒ある建造物として名高く、建設当時は札幌一ののっぽの建物だった。時計は街中のどこからも見えて住民の生活には欠かせないものであった。今はビルの谷間に埋もれて以外に小さな印象だ。

時計台の名が有名になるがゆえに、大きな建造物を見慣れた私たちの目には物足りなく感じてガッカリするのだろう。

②高知の「はりまや橋」

はりやま橋は高知市の中心部にあって、民謡「よさこい節」で有名な橋である。江戸時代の初期に掛けられた。一九〇八年に鉄橋になり、一九五〇年に石橋に変わり、川は埋め立てられた。現在は、橋の両側に保存されていた鉄橋と新造の太鼓橋を掛け、橋の下に水を流している。観光バスでこの橋の上を通っても、ガイドさんに教えられても見過ごしてしまいそうな橋である。

ペギー葉山さんの唄う〝南国土佐をあとにして…〟が大ヒットしたため、日本津々浦々まで知られるようになった。菊田一夫作のラジオドラマ「君の名は」で有名になった東京・銀座の「数寄屋橋」と同じようなものである。

③沖縄の「守礼門」

守礼門は沖縄県那覇市街東部の首里城公園にあり、第二次世界大戦で破壊され、戦後復元された。首里城跡には琉球大学も建てられた。この守礼門は、首里城の第一の門で、琉球王朝の栄華を今日に残している。小渕内閣の時に発行された弐千円札（銀行券）の絵柄にも使われ、沖縄サミットで世界に紹介された。

日本三景などが「天下の絶景」であることに異論を唱える人は少ないと思う。なぜに後者の三名所が、観光地として有名でありながら、その地を訪れた人がガッカリするのだろうか。それは見る人の価値観もあるだろうが、建造物などとして歴史的な価値があっても、天地創造の神がもたらした自然景とは、スケールの雄大さにおいても、また、〝自然界の配合（天の配剤）の妙〟からも比較にならないからだろう。

（二）生活景

私たちの生活の中にある風景、生活景は、古来からの生活様式を残した神社仏閣を中心とした日常信仰生活の中などにも見いだすことができる。村境や辻に鎮座し、悪霊の侵入を防ぐ道祖神の並んだ生活風習に、鄙びたなかにほのぼのとした静かな農村の生活風景を見ることができる。

また、武家屋敷の面影を残す土塀のある城下町の辻々の風景。物干竿に掛けた洗濯物の見える下町の風景、木陰や物陰から目に映るちょっとほこりっぽい街角の風景などなど、込み入って忙しそうだが、こんなところに意外と調和がとれた生活景を見い出すことができる。生活景は見る位置によって変幻自在で、まことに不安定であるが味わい深い。

（三）山野の風景と見る位置

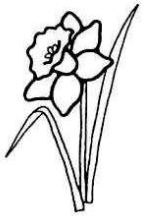
なだらかな山々であっても、遠くに立って見る山並みは、屏風を立てたように切り立って見える。これが「翠屏」と呼ばれる所以である（翠屏＝緑の屏風＝草木が茂ったり、苔むしたりしている崖や連なり立つ緑の山々の形容）。

田園のなかの道や川の流れは、遠くに行くにしたがって先つぼまりに細く小さくなる。線遠近法的効果である。建物や樹木も手前のものほど形や凹凸がはっきりしており、離れるしたがってぼけて見える。また、幾重にも幾重にも遠くへ遠くへ連なる山々は、手前の山の輪郭線が後ろの山の下の部分を覆い隠して遠近感をつくっている。当然ながら遠くの山ほど色彩も薄く不鮮明となる。

薄青色の山の気配、樹木の青々した「翠嵐」、緑色の眉墨をひいたように見える山の「翠黛」、緑の山峰の「翠巒」、雲霞たなびく連山の遠景「遥青」、これらの風景は空気遠近法と呼ばれる大気の効果に外ならない。

自然の風景は、見る位置が離れてくれば次第に変化してくる。自然の風景の中にあってその存在意識のある建造物、例えば長良川から見る岐阜城などは「画竜点睛」の如き存在といえよう。

小説にも風景は欠かせないと思う。小説においては風景は「従物」の位置に過ぎないが、「従物」があってこそ「主物」がクローズアップされる。次回は風景の「主物」と「従物」について語ってみたい。



社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

俳句

秋の蝉

大澤鷹雪（おおさわようせつ）

薫風を胸一杯に笛の音
橡の花散るや鉄扉の裁判所
悪童の剣豪遊び草を刈る
父の日や父退職の齢過ぐ
欄干に流木架かる出水かな
糠自慢しつつ男のなすび漬け
藷焼酎御三家もある時節かな
洞深き幹踏ん張りて石榴咲く

家康も日月硯洗ひしか
執着も硯洗ひし墨のごと
夏霧の這ひ上り来る峠かな
汗疹の児抱きて途方に暮れし日も
サングラスかけてアクセル深く踏む
緑陰や看守も遠き面会所（市原刑務所）
月見草たどれば至る家ありき
迎火や集ひし子らの名を尋ね

迎火や遠き先祖は知らぬまま
新住民盆を外して盆踊り
法灯を分けて火入れの夏の宵（比叡山薪歌舞伎三句）
鯛を追ふ長唄の高音かな
橋弁慶汗が飛び散る吉右衛門
赤蜻蛉吾が吹く笛に止まりけり
地蔵会や指差して見る大火星
落雷の死者数記しゴルフ場
嘯ける鬼に極刑八月尽
気の急きて効かぬ手足や運動会
秋の蝉草を抱きて鳴きにけり
秋出水鉄路は宙に残りけり
秋出水古き地形がそのままに
藤袴その名の惹かれ手折りけり

秋雨やトレモロの音の重りて
秋雨や語り合はせて香を聞く
振向けば女庭師や松手入
作務衣着て俄庭師の松手入
裏返し土下座も強ひて芋嵐
町営の温泉白し蕎麦の花
子規館を出づれば眩し櫨紅葉（松山二句）
山茶花の緋の飾りたる石鳥居
砲身の向きし彼方の海霧深し
都鳥言問ふやうにつがひけり
百合鴎宙のレールを潜りけり
冬山や指失ふを誇る友
冬の山夜又も菩薩もおはしけり

短歌

行雲流水（四）

石黒修身

長月になれば瞼に「風の盆」
胡弓幽（かそけ）く乙女らは舞う
註　九月一日風の盆本祭

縦縞の雪を纏いて男体山
初冬の空に豁然と屹つ

残したる名曲とはに歌われて
廉太郎夭（わか）く逝きて百年
註　滝廉太郎没後百年

廉太郎逝きて百年のメモリアル
ソプラノ冴えて「荒城の月」
註　紀尾井ホール佐藤美枝子

古き日の抒情を今に小津映画
アーカイブスの窓を開きて
註　小津安次郎生誕百年

坂多く運河さびれし港町
「多喜二」が在りて「裕次郎」棲めり
註　小樽市

函館の青柳町の片隅で
花壇に立つ札「矢車の会」
註　石川啄木

秋過ぎて冬来る気配の中禅寺
岸辺は枯れて湖（うみ）茫漠たり

がん末期修羅のたたかい今朝終えて
義兄身罷れり彼岸花咲く

託されし辞世の一句会葬の
礼状に付し遺志に副いたり

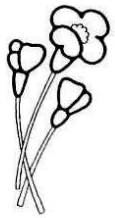
百年の記念に映す小津ドラマ
　時空を超えて哀歓深し

その言や鵠を射て楽し異国にて
　文明を説く塩野七生の
　註　在ローマ

駒形のどぜう鍋屋に万太郎
　一句残せり「御輿まつ間の」
　註　久保田万太郎「どぜう汁すゝりけり」

恵まれぬ運命（さだめ）の人も幸せを
　つかめとドラマ「北の国から」

ウルマンの「青春」の賦は頽れしか
　世代交替喧しき今
　註　サムエル・ウルマン



イタリアンレストラン

森　実与子

さまざまな客が、思い思いに食事を楽しんでいる。甲高い笑い声や話し声、店の人の注文をとる声、BGMに流れるカンツォーネの音楽……、めまぐるしい音が、土曜の夜の店内を渦巻いている。胃袋が満たされていくことの満足感と高揚感。この店に来ている人たちの貪欲な本能が、広い店のなかに充満しているようだった。

ピンクのテーブルクロスをかけた四角いテーブルは、小さな島のように整然と並び、従姉妹同士の泉と裕子も、その一角で、黙々とピッツァをむさぼり食べている。オードブルに続く二皿目。チーズとトマトのとろけるような触感が口のなかに広がり、喉から食道を通って胃の壁に吸いつくように吸収されていく。その一連の動きに陶酔しながら、得体の知れない渇きを満たすかのように、二人はひたすら食べていた。

大人の雰囲気が漂う都心の街の、商店街の裏手にある隠れ家のようなイタリア料理店は、今のところ、裕子の一番のお気に入りの店だ。まず、人込みに遭遇しなくていい。新宿や渋谷の繁華街だと、人の波に押されて、目的地にたどり着くまでに疲れ果ててしまう。この店なら、雑踏を掻き分けなくてもたどりつくことができた。それに一軒家をお店に改装したらしく、庭にビニールシートを張って空間を広くしたり、気取っていない無造作な作りも好ましかった。

五歳年下の泉は、何故か最近、裕子によく電話をしてくる。

「お姉ちゃん、映画に連れていって。その後、ごはん食べに行こう。……お姉ちゃんの知っているお店ならどこでもいいから、ねっ、連れていって」

ここ二年あまり、三、四ヶ月に一度くらいの割りでそんな甘えた電話がある。受話器から、泉の一オクターブ高い声が伝わる。その声に引き寄せられるようにして、二人で連れ立っては、映画を見て食事をしていた。この夜

も三ヶ月ぶりに会い、フランス映画を見た後にここへやって来た。

頻繁な電話に、裕子は泉が自分に対して何か魂胆があるのかと、勘繰りたくなるほどだった。というのも、泉の方から会おうといっておきながら、約束の時間に必ず遅れてくるからだった。会う頻度が増すごとに、遅刻はますますひどくなっている。この日も映画の上映時間になっても泉は現れず、裕子は人気のなくなった、一月の冷たい風が吹き抜ける映画館の入り口で、一人ぽつんとたたずんでいた。前回も前前回も、泉は上映時間ギリギリに飛び込んで来た。

「お姉ちゃん、ごめんね。遅くなっちゃって」

息を切らしながら言い訳するが、途中で買い物でもしてきたのか、手にはブティックの真新しい紙袋を抱えている。

上映直後の映画館の入り口ほど、寂しいものはない。

それまで人が右往左往していた慌ただしさが、開演ベルの音とともに、波がひいたように静まり返る。入口のドアはピタリと締まり、人は一掃され、キップのもぎり嬢や売店の店員など、映画館の従業員たちは、手早く仕事を終えて手持ち無沙汰にいるだけだ。そんな場所に一人寂しく立っていると、捨てられた猫みたいな感覚に襲われる。従業員の冷ややかな視線が、全身を刺すようで、居心地の悪さがある。

「かわいそうに、デートの約束、すっぽかされたのかしら」

そんな蔑んだような目と、外から入ってくる一陣の冷たい風が、裕子の心をささくれさせていた。

「また今日も……。私をこんな哀れな思いにさせる泉は、なんて意地悪な女なんだろう。それに今回は、今までになく遅れている」

腕時計に目をやって、落胆とイラ立ちを感じながらも、裕子はしばらく立っていた。

(今日は、泉は現れないんじゃないか。帰ってしまおうか。いや、泉が現れるまで待っていなくてはまずいかな)

思いが交錯する。しかし、予告篇の上映が終わって本篇が始まるギリギリの時間になっても、泉は現れなかった。結局、せっかく出かけて来たのだから、一人で映画を見て、買い物でもして帰ろうと思い直し、暗くなった劇場に入った。すでに後方の座席は満杯で、前から二列目に空席を見つけ、腰をおろした。

……約二時間後、映画を見終わって映画館を出ると、ドアのところに泉が立っていた。

「ごめんね、お姉ちゃん。電車が事故で止まっちゃって、三十分以上も動かなかったのよ。ここに着いた時は、もう映画が始まったあとだったの」

甲高い声で、泉は遅れた理由をいう。

「あら、そうだったの。悪かったわねえ」

半信半疑で、裕子は泉の言い訳を聞いた。

「よりによって、携帯を職場に置き忘れてきちゃったの。私って、どうしてこう抜けてるのかしら。ゴメンね」

「いいえ、こちらこそ。それで、今までどこにいたの?」

「ここで待ってたのよ」

「映画、見なかったの?」

「終わる時刻を聞いてデパートで時間をつぶして、二十分くらい前からここにいたの。映画館の人、不思議そうな顔をしていたわ」

「まあ、ごめんなさい」

心にもない言葉が口をついて出る。

いつもいつも遅れるのは泉の方なのだから、一度くらい待ちぼうけをくらわされても当然だろうと、心の中では思っていた。それなのに泉の甘えた口調は、遠回しに、勝手に一人で映画を見た裕子の方が悪かったみたいな言い方である。

(待っていない私がいけない、っていうの?それはそちらの言い訳でしょう。でも不可抗力で遅れたというのだから、仕方がないけど)

もっともらしい弁解に腹を立てるわけにもいかず、気を取り直して食事に行くことにした。

そして予約してあったこの店に、電車とタクシーを乗り継いでやってきたのだった。

泉と裕子は、お互い一人娘のせいで、子供の頃からよく行き来した。

裕子の母親の兄の娘が泉で、泉一家は祖父母、つまり裕子の母の両親と同居していたから、祖父母が生きている間は、学校が休みになるとよく泊りに行った。もっとも、子供の頃の五歳の年齢差は結構大きく、泉がようやく物心がついた頃、裕子は小学校高学年。年上のお姉ちゃんが遊びに来るのを待ち構えている泉の相手をするのは、かなり面倒くさかった。

泉は、まだ公園のブランコやすべり台で遊ぶことが楽しい年代だが、そんな遊びを卒業した裕子は、億劫で仕方がない。泉と遊ぶことは年下の幼い子供をあやすことと同じわけで、煩わしくもあった。それでもひとりっ娘同士の連帯感からか、「泊りに来て」とせがまれると、なぜか裕子は断ることができなかった。

裕子が大学生になるまでは、夏休みや休日には映画を見たり、プールへ行ったり、泉一家と一緒に旅行に行ったりした。年下の子供のお供は、面倒くさいといえばそれまでだが、自分を慕ってくれる唯一の身内だと思い、裕子は快く付き合っていた。

その後、長い空白があった。

泉一家が同居していた祖父母も、もうとおに亡くなっていた。

そしてお互い、いとこと付き合う時間もないほど、自

分のことで精一杯だったのだ。親戚づきあいなんて他人以上に希薄なもので、会わなくなれば、冠婚葬祭以外には用がなくなる。大人になって、泉とはそれっきりかなと思っていたけれど、何故か再び会うようになっていた。

大学を卒業した後、十年間、医学関係の出版社に勤務した裕子は、フリーの編集者として家で仕事をしていた。もっとも仕事の大半は校正であり、単調な仕事には違いないが、唯一、時間が自由なことが救いだった。

泉は、犬のトリマーだ。犬の毛をシャンプーやカットして、きれいに整えてやる、いわば犬の美容師だという。子供の頃からの大の犬好きが昂じて、トリマーの専門学校に通い、今はペットショプや動物病院で働いている。

「今はね、シーズーのナナちゃんと一緒にお散歩に行くのが、楽しくて仕方ないの」

目を輝かせながら犬の話をする時の泉は、本当にうれしそうだ。

二人で歩いていても、犬が目に入ると必ず駆けよっていき、いとおしそうに顔や体を撫でてやる。すると、撫でられた犬も、すぐに反応してでれでれとなる。なんとも微笑ましい風景を見せてくれるのだ。

泉は今でも裕子のことを、子供時代と同じく〝お姉ちゃん〟と呼ぶ。気恥ずかしい気がしないでもないが、自分のことを〝お姉ちゃん〟と呼んでくれる人間は、この世で泉しかいない。肉親の縁の薄い裕子にとって、彼女は唯一の妹みたいな存在には違いない。泉も裕子も相変わらず、年老いた親元で暮らしていて、お互い、子供時代と何ら変わっていないのだ。だから、泉の裕子への擦り寄りに、何かたくらみがあるのかなと勘ぐるのは、深読みしすぎだろうと、裕子は思った。

「お姉ちゃんのおこぼれが欲しいのよ」

泉は、時々冗談めかしていう。約束に遅刻してくるのは、仕事や何やらで忙しいと思わせぶりの態度をとり、精一杯虚勢を張って見せる泉特有の性癖なのだと、裕子は軽く受け流していた。

厨房のカウンターに面した四角いテーブルに、裕子と泉は角合わせに座っている。厨房内は明るく、イタリア人シェフが、歌を口ずさみながら軽やかに料理を作っているのが見える。それにひきかえ店の中の照明はテーブルに置かれた小さなローソクだけで、ほの暗い。横向きの泉の表情ははっきりはわからないが、満足そうな微笑みを浮かべている。

「昨日はお店の人たちと、先生のおごりでしゃぶしゃぶを食べに行ったの」

「若くてハンサムな先生なんでしょう?」

「そう、院長は本当に動物思いのやさしい男なの」

「泉ちゃんの理想の男?」

「まあ、そんなとこかなぁ。……そうそう、夕べは人数が多くて落ち着かなかったの。だから食べた気がしなかったわ。今日はお姉ちゃんと二人きりだから、ゆっくりと料理を味わえるわ」

喰い道楽の泉は、小柄のころっとした体型をしている。ショートカットに童顔、セルロイドの黒い縁の眼鏡をかけ、とても三十歳には見えない若作りである。

一方の裕子も、食べることは大好きだ。特に最近、自分でも驚くほどの食欲でよく食べてはよく飲む。だが、絶対に太りたくはないという信条を掲げている。だから、過食症気味の食欲を吐き出すかのように、食べた後は必ずスポーツジムへ行き、マシーン、エアロバイク、エアロビクス、ジョギング、サウナで、消化しなくては気が済まない。そのおかげで、たくさん食べる割には痩せている。つまり過食症のような食欲と、拒食症のような体つきが理想であり、食べても太らない、それが今、裕子にとっての一番の課題といってもよかった。

この前、泉と懐石料理を食べた時にも、翌日はエアロビクスで汗を流した。裕子にとって汗を流すことは、体の疼きのはけ口かもしれない。と同時に、自分の体の若さを維持したいという、ある種のナルシシストの鏡と言ってもよかった。年齢は重ねても、絶対に肉体は老化させたくない。贅肉や皺とは無縁の、少しでも若々しい肉体を維持するため、食べた分だけ吐き出すかのような運動が、欠かすことのできない、一つのリズムになっている。食べるからには、それなりの努力が必要なのだと、自分に言い聞かせている。

「明日はエアロビに行かなきゃ」

裕子がいうと、泉は顔を歪めて笑い、なんともいえない表情を見せた。ダイエットなんて、ハナからあきらめているのか。それとも運動するのが億劫、そんな顔つきである。

「犬のお散歩だけじゃ、足りないのかしら」

「一日どのくらい歩いてるの?」

「日によって違うけど、毎日一時間近くは歩いてるかも」

「それなら十分じゃない」

「でも、たくさん食べちゃうから。女の職場だから、ストレスが多いの」

店の中を、給仕人が忙しげに行き交う。注文をとっては皿を運び、動きをやめない。それはまるで、お客の胃袋を満たすベルトコンベアーのように規則正しい。裕子たちのテーブルにも、三皿目の菜の花のパスタがきた。

「おいしいわ。ゆでかげんがちょうどいいわ」

泉がいう。

なるほど、耳の形をした肉厚のパスタとあっさり味のソースは、絶妙のハーモニーだ。

次々に運ばれてくる豪勢な料理は、鮮やかな色彩がより一層食欲をそそる。ワインを飲みながら呑気に食事することは、もはやただ単に食べるという行為から逸脱し

ている。それはまるで、自分を飾るファッションの一部と化しているみたいだ。贅沢な振る舞いであって、独身女の特権といえるかもしれない。

二人の間には、もう一人、女のいとこがいる。ちょうど裕子と泉の中間の年頃の園子は、世の中でいわれている結婚適齢期の二十五歳で結婚した。

時々、園子のことが話題に上る。

「園子ちゃん、変わったかな」

懐かしそうに泉がいう。

「きっと、会ってもわからないわよ。もう十年近く会ってないんだもの」

実際、同じ電車に乗り合わせたり、デパートや雑踏の中ですれ違ったとしても、お互いにまったく気づかないだろう。

「子供が二人いるなんて、想像つかないわね」

園子とも、子供時代はよく行き来したものだが、泉とはまるで違う感覚だった。

園子には二歳年上の兄、洋一がいたせいもあって、決して、泉のように裕子に甘えてくるようなことはなかった。むしろ、あまりなじめなかったといった方がいいかもしれない。そして、泉が裕子に抱くような憧憬を、裕子もまた従兄の洋一に求めていたのかもしれなかった。なぜなら、学校が休みになって洋一たちと一緒に遊ぶことが、子供の裕子は何よりも待ち遠しかったから。彼らの家へ行き、外でバレーボールやかくれんぼうをしたり、流行っているマンガを教えてもらったり、三人で遊ぶことが何よりも楽しかった。

だから裕子は、兄のいる園子が心の底からうらやましかった。洋一の園子への対し方は、もちろん裕子の場合とは違う。もっと親密で辛辣で、本物のきょうだいの繋がりは、他人は決して窺い知ることができない世界だと、子供心にも裕子は敏感に感じていた。

園子は、特別器量よしというほどではないけれど、十人並みではあった。もっとも子供というだけで誰でも十分かわいいものだから、小さな頃の美醜なんて、今となってはよくわからない。けれど、園子の母と洋一は、いつも園子はかわいい、かわいいとその容姿を誉めそやしていた。

「女の子の目元は、絶対二重瞼じゃなくっちゃ。園子はぱっちりとした二重だけれど、あいにく裕子ちゃんは一重ね」

園子の母親は、裕子に向かってずけずけと物をいった。裕子は家に帰って、鏡に自分の顔を写してみる。その目元は母に似ていた。母はどことなく寂しい目をした憂い顔、叔母は二重瞼に大きな口という派手な顔立ちで、それがそのまま子供にも受け継がれていたのだ。子供心に、やっぱり女の目元はぱっちりした二重の方が好ましいと

感じた裕子が、鏡に向かって目を大きく見開き、瞼に力を入れてみると、目の上にくっきりとした線ができた。

「なあんだ、簡単なことなんだ」

それ以来、裕子は毎晩寝る前に、鏡に向かって二重を作ることが習慣になっていた。

また、園子は痩せていることが自慢で、子供の頃、けっこうぽっちゃりしていた裕子は、何かにつけて、太っているとけなされた。洋一さえも、痩せている女の子の方がいいとませたことを口にする。

三人で遊んでいると、

「ブタブタ子ブタ……」

洋一が、鼻歌を歌う。

「太っている子のことを何というか知ってる？ ブタっていうんだよ」

洋一の言葉に、園子が同調して笑うので、裕子はいたく傷ついた。

母親と兄の誉めそやしに、園子はいつもうれしそうに笑っていた。

家の中で遊んでいる時、裕子は暗い階段で目の前にいた園子を、瞬間、後から突き落としてやろうという衝撃にかられたことがある。

(憎たらしい子。少しもかわいくもないのに、どこがどうすぐれているっていうの)

しかし実行する勇気はなく、代わりに園子の手の指を噛んでやった。

当然ながら、叔母は真っ青になって園子を裕子から引き離し、抱きしめながら、「あきれた子ね」とぴしゃりといった。大切な宝物を傷つけられたような、慌てぶりを見せて、それ以来さらに、裕子の劣っている部分をチクチクと皮肉るようになった。

「ひとりっ娘って、片輪みたいなものなのよね。わがままで世間知らずで。裕子ちゃんは、たいへんね。ママも先が思いやられるわねえ」

運動神経が鈍い、友達を作るのが下手など、何事につけても園子と対比させられ、裕子は落ちこぼれのようなレッテルを貼られていった。

その頃から、裕子の心のなかに、園子に対する敵愾心のようなものが芽生えたのだろう。おかげで、裕子は痩せることや自分の顔に、人一倍執念を燃やしているのかもしれない。それだったら、園子と母親に感謝してもいいかもしれないと、今になって思っている。

ある夏、園子一家と裕子の家族とで一緒に旅行にいった。

小学校四年生の夏休み、数日を八ヶ岳の麓で川遊びやハイキングをして過ごした。裕子自身の記憶にはないけれど、山道をハイキングしながら、従兄妹二人がお揃いのTシャツを着ているのを見て、自分も同じものが欲しいと泣き叫んだと、裕子の母が話してくれたことがある。

「お揃いがうらやましくて、裕子は泣き出したのよ。……困ったわ」

古いアルバムを引っ張り出すと、その言葉を証明する写真が出てくる。なるほど洋一と園子は、同じ赤いポロシャツ、裕子は白いTシャツを着て、一枚の写真に収まっている。

微かな記憶の風景は、ジリジリと照りつける太陽の元、時折吹くさわやかな風と、眼前に広がるなだらかな山である。洋一が口走る冗談に笑い、二人の歩きに遅れをとるまいと、一生懸命歩いた。喉が乾くと親たちにジュースをねだり、その場で休憩して体にはりつくような汗がひくのを待った。振り返ってみると、それは子供時代の中で一番光り輝いた思い出だったのかもしれない。

「洋ちゃんのところへ泊りに行って帰ってくると、必ず裕子は熱を出すのよ。ハッスルして遊び疲れて、帰るとクタクタになったんでしょうね。反対に、洋ちゃんがうちに泊まりにきて帰る時には、まだ帰らないでって、泣き出すの」

裕子の母親の言葉だ。

きょうだいの存在そのものがうらやましかったのだ。とりわけ女の子にとって、兄の存在は一番身近で、最初の異性である。ひとりっ娘の寂しさは、大人になった今でも、常に裕子にまとわりついているといったらいいか。

しかし、園子一家とは、中学生になると、疎遠になっていった。泊りに行っても、何故か前ほど楽しくなくなった。正月に祖父母の家で年に一度会うか会わないくらいになり、年を増すごとに間延びしていった。

特に洋一は祖母の家にも顔を出さなくなり、叔母にくっついている園子と顔を合わす程度で、おとなしい園子とは余り言葉も交わさなくなった。そのせいか、叔母の娘に対する誇大宣伝が一層際立った。

「園子ちゃんはもてるのよう」

きれいで男の興味をひくという話を、甲高い声で思い入れたっぷりに喋るのだこちらはそんな気持ちなど微塵もないのに、裕子へのライバル意識剥き出しで、チクチクと心を刺激してくる。

「ねえ、聞いてくれる。園子ちゃんね、スキーの合宿に行って、大学生のコーチに好かれちゃったのよ」

スキーだろうがテニスだろうが、行く先先で、園子は必ず男に好かれるという話を、叔母が得意気に語る。園子はその隣で、首をかしげてニコニコしているだけだった。男が群がるほどの美貌ではないが、園子はスラッとして背が高く、おとなしげな少女になっていた。

大学生になると、話はますます熱を帯びたものになっていった。アルバイトをはじめると雇い主に気に入られ、医学生とT大生の両方に交際を迫られて困り、弁護士の卵に床の間に飾っておきたいといわれ、誕生日プレゼントにはブランド物のスカーフやバッグ、花束をもらい、

バレンタインデーには男たちを梯子してチョコレートを渡す……等等、並べたらキリがないほど華やかな話題にあふれ、園子母娘は結婚に執念を燃やしていた。

裕子は、何がなんでも結婚とは、考えなかった。自分の仕事を身につけることを優先だと考えていたから、大学時代に恋人はいたけれども、結婚はまだ現実味がなかった。

「仕事をしたいの。……手に職を持ちたいというかな、まだ何をしたいか自分ではわからないけど」

そんなことをいう裕子に向かって、叔母は、

「裕子ちゃんはかわいそうにね」

という。

何がかわいそうで何がかわいそうでないのか、いわれた本人にはよくわからないけれど、結婚に夢中にならないと、まるで女じゃないみたいな言い方に、裕子は内心憤然とした。

世の中には、いろいろな価値観を持った人間がいて、人生に対する考えもまちまちなのに、自分と違う考えの持ち主をあざ笑うような叔母の言葉は、実に大人気ないと、軽蔑するようになった。そして叔母の態度から、娘自慢は、本当は裕子の母へのライバル意識の裏返しではないかと感じるようになった。

「ねえ、若い頃の園子の母親って、どうしようもなく暗かったんでしょう。ママの方がもてたのね」

裕子は母親に聞いてみたことがある。

「…そうね、私の方がもてたことは確かね」

母親はいたずらっぽく笑う。

おそらく年頃の叔母は、辛い思いをしたのだろう。その反動で、今になってここぞとばかり娘を誉めたたえる。まるで叔母自身が園子に乗り移ったように一心不乱に語る姿は、異常でさえあった。それほどまでに一心同体の母娘は、単純にいえば、親バカな母親と、蝶よ花よとちやほや育てられた、能天気な娘にちがいない。

玉の輿みたいな結婚に血まなこの園子は、どこそこの御曹司とゴールインかと思われたが、結局、腰掛け程度のOL生活を経て、意外にもごく平凡なサラリーマンと結婚した。もちろん結婚と同時に勤めはやめ、専業主婦になった。一、二年すると子供を生み、今や普通の暮らしをしているらしいかった。

一方の裕子は、自分にはどんな仕事が合っているか迷った挙げ句、好きな編集の仕事に携わっている。将来のことを考えると、大きな不安はあるが。

「この前、おじいちゃんの命日にうちに来て、叔母ちゃんがうちにきて、泉ちゃんも、園子みたいに弱い女にならないと結婚できないわよっていわれちゃった」

泉が、口をとんがらせて訴える。時代錯誤の女性観の持ち主の叔母の言葉は、もうんざりといった顔つきだ。

「でもね、園子って本当に弱い女なのかしら?」
「どこまでもついていきますっていうタイプなんだって、おばちゃんがいうの。右向いていれろっていわれれば、一日中右向いているような」
「そんな女が今時、いる?それに、園子になんてもう十年以上も会ってないんだから、彼女の実体を私たちは知らないわけでしょう。本当にそんなおとなしいだけの女なの?男って勝手なものだから、そういう女には物足りなくなっていくものでしょう。奥さんにしておくには、その方がいいのかもしれないけど」
結婚式に出席して以来、園子とは会っていない。まったく別世界に生きているから、もはや園子の輪郭すら裕子にはわからない。それなのに、いまだに泉と裕子は園子のことで笑ったり憤慨したり、話のネタにしている。当人の園子は、想像だにしないだろう。
「そうよね、私、別に園子ちゃんがうらやましいとは思っていないもの。今、いろんな経験ができて楽しいし、結婚しても仕事はやめたくないもの」
「人種が違うのよ」
「あのね、お姉ちゃん」
「何?」
にやにやしながら泉がいう。
「私ね、夢があるの。いつの日か、自分のお店を持ちたいの。だから今、一生懸命、頑張って、いつか夢が叶えばいいなって」
「すごいじゃない。……じゃあ、泉ちゃんの夢に乾杯!」
同じ女でも、まるで生きている世界が違うのだ。子育てに悪戦苦闘している年代に、こうやって、ワインを飲みながら、お洒落な店で食事できること自体、園子より自分たちの方がずっと自由だし贅沢ではないかと、裕子は無理矢理自分に言い聞かせた。
「ねえ、あの人たち私たちが来る前からいるわよね」
裕子は泉に目配せする。横に男同士の客がいる。男二人で、次から次へとよく食べるが、こんなお洒落な店には似合わないいでたちだ。
「そうよ、もうパスタ四皿目よ。その前にはピザも食べていたし、ワインも二本目よ」
二人とも学生風で、片方の男はジーパンスタイルに、長髪を後ろで束ねている。もう一人も銀縁のメガネに細い目の、キツネ顔。興味を引く男たちではないが、自然と目に入る。
「居酒屋の方が似合っているのにね」
「本当、場違いな感じ」
居酒屋で酒を飲み交わしているのなら、男二人連れなどありふれた光景だけれど、こういう店にはちょっと違和感がある。親密な男同士という、危ない関係とも見てとれて、二人は軽口をたたく。

パスタを食べ終えた私たちのテーブルに、きのこのリゾットが運ばれてきた。我ながらよく食べると自分でもあきれてしまうほどだが、お洒落なレストランだから一皿の量は少ない。二人で一皿だと、ほんの一口か二口分しかないので、数をこなせるのだ。
「これもいけてるわ。おいしい」
泉が私に同意を求める。
本当は、あの男と来るはずだったのに……。
二人の男を観察しているうちに、裕子はいつの間にか、一緒にここへ来るはずだった男のことを思い浮かべていた。
(あなたが私を愛してくれないことを、恐らく私は、はじめから気づいていたんだと思う。なぜならあなたの容貌が、限りなく暗かったからだ。
二年前にはじめてあなたに会った時、恥ずかしそうに笑う笑顔と、翳りのある容貌に私は心が踊った。私は恋の始まりを感じて、帰りのタクシーのなかで、一人でほくそ笑み、胸を高ならせた。そしてあなたもそうであることを疑わなかったが、それは私の一方的な思い込みだったらしい)
「今度、食事に行きましょう」
男はそんな誘い文句を口にしたが、電話はなかった。鳴らない電話を待つことにしびれを切らせた裕子は、仕事とバカンスを兼ねて外国を訪れる度に絵葉書を送り、お土産を渡すことで男と会う機会を作った。そんなことが三回ばかり続き、裕子が誘えば彼は出てくるのだが、向こうからは応答がないという、一方的な関係となった。こちらから電話をして、重い腰をあげさせなければデートらしきものは成立せず、男が裕子に興味を抱いていないのは明らかだった。さすがの裕子も、もううんざりし、あきらめていた。
そして、十二月の中頃、二年前に男と初めてあった時と同じ場所での忘年会で、偶然、半年ぶりに顔を合わせたのだった。
「あら、お久しぶり。こんなところで会うなんて、元気?」
「まあね、相変わらず忙しくて」
男は同性の連れと一緒だったのに、裕子に会ったことで、バツが悪いみたいな複雑な表情を見せた。店を出る時、
「また、食事にでも……」
「そうね。とってもかわいいお店を見つけたから、今度食べに行きましょう」
「年末になったらヒマになるから、電話しますよ」
暮れに男とこの店に来る約束をしたのに、やはり電話は鳴らなかった。
それよりも、忘年会が終った後、地下鉄のホームで、連れの男と手をつないでいる姿を見た時の、裕子のショッ

クは大きかった。

（やっぱり、何かあると思っていたら……）

「食事に行こう」とか「電話します」という言葉は、彼にとっては社交辞令に過ぎないものだったのに、裕子が勝手に本気にしていただけなのだ。出会ってから二年たつのに、恋人同士にも、気軽なともだち関係にも進展しない関係に、ほとほとうんざりしていた矢先に、見たくないものを見てしまった。もはやその男に、それほど親しみを感じているわけでもなければ、ましてや愛してなどいない。裕子はただ、自分の思うようにならないことが情けないだけだった。だからこうして、男の代わりに従妹の泉と、このイタリアンレストランへ来たのだ。

さっき一人で見た映画は、一人の美しくも情熱的な人妻の物語だった。軍人である夫と離れ離れの生活には耐えられず、常に男に身を任せていないと生きられないような女。その奔放な生き方に振り回される夫や回りの男たちが哀れだった。女と生まれたからには、あんな風に生きてみたい。そんな美しく自由な女の話だった。映画のストーリーの余韻に酔いしれながら、ふと現実を振り返ると、何と味気ないことか。

裕子の胸をやるせなさが、去来する。強がってみたって、自分の日常は、切なさに満ちている。園子と自分とどっちが幸せだか、そんなことはわからない。女同士の気楽な食事も楽しいけれど、男と一緒の方がなお楽しい。

裕子はそんな、恋にとりつかれた女なのかもしれない。それなのに、思いを寄せる男からは素っ気なくされ、好きでもない男にはつきまとわれる。その繰り返しで、裕子は不毛な恋愛に年月を費やしているだけだった。

「私には、一体何がある？」

自問自答してみても、結局は何もないのだ。男たちの痕跡は、跡形もなく消えている。ささやかな仕事はあるものの、それだけでは、たまらなく空しいのだ。

最後の皿の、子牛のソテー、マルサラ酒ソースが目の前にあった。

何だか、ほの暗い店内の客たちが、亡霊のように思える。顔がよく見えないせいか、話声だけが、妙に耳につく。現実から逃避したくて、このところ裕子は家に閉じこもってばかりいた。久しぶりに外に出てきたけれど、何だか空疎な感じがして、レストランの中にいても、死者の世界にさまよいこんだような奇妙な感覚にとりつかれている。それもこれも、ちょっとばかり色男だからって、煮え切らないあの男がいけないんだ。

裕子は突然、憎しみがこみあげ、のみかけのワインを、男にひっかけていた。

「……お姉ちゃん、どうしたの」

いや、あの男ではなかった。目の前にいるのは、泉だったのだ。裕子は自分のしたことに呆然としながら、我に返った。

メガネがワインで赤く染まり、濡れてくしゃくしゃになった泉の顔は、ピエロのように滑稽である。憮然とした表情がそこにあった。

「……ご、ごめんなさい、ボッーして、手が滑ったみたい」

夕方泉に待ちぼうけをくらわされた裕子の、無意識のうちに芽生えた、ささやかな反撃なのか。

いや、泉が憎らしくてやったわけではない。この娘に敵意など抱いてはいない。現実と妄想がごちゃまぜになり、自分自身に取り乱しているだけなんだ。

「お客様、どうなさいました」

すぐに店の人が飛んできた。

「酔っ払って、グラスを落としてしまったの。すみません」

裕子がその場を誤魔化していると、ボーイが急いで、テーブルと泉の洋服を拭いてくれた。

「ごめんね、他のこと考えてて、手元が狂ったの。……きっと飲みすぎね」

「疲れているのよ、お姉ちゃん」

しょうもないといった表情を見せ、泉は俯いてしまった。

二人の間には白けた空気が漂い、せっかくの子牛のソテーも、台無しだった。手をつける気にもなれないほどの、重苦しい疲労感が襲ってくる。

「デザート、私がご馳走するから勘弁してくれる？」

「……まあ、今日は遅刻した私が悪いんだし、おあいこね」

大皿に盛られたデザートの中から、チョコレートケーキとアイスクリームをチョイスして取り分けてもらうと、泉も機嫌を直したみたいだった。

スプーンを口に運ぶと、チョコレートの押さえた甘さが口の中に広がる。そのとろけるような甘さをかみ締めると、頭がしびれるような満足感に浸り、くさくさした思いもどこかへ吹き飛んでしまう。

ふと横を見ると、隣のテーブルの男二人も、食事の仕上げのデザートを食べていた。

私たちは時間も気にせずに、甘いものに浸っている。

「本当、おいしい。幸せな気分よ」

泉が目を閉じて、独り言のように呟く。泉も私も、今のところ、食べることでしか心のもやもやを解消する手だてがないのかもしれない。そんな自分を哀れだと感じることもあるけれど、同時にたまらなくいとおしくもあるのだ。

混雑していた店内もいつのまにか、空席が目立ちはじめている。時計を見ると、十一時を過ぎていた。賑やかな土曜の週末も、そろそろ終わりを告げようとしている。

ひのえうま 丙午の女（一）

太田和貞

黄落

長崎産婦人科病院は、京成小岩駅南口から徒歩一分のところにある。

病院前の三間ほどの道路は、朝夕の出勤時間、登校時以外は閑散として人通りも少なかった。

ときたま、遅刻した女子高校生が足早に店の前を通り過ぎることはあっても、店の人は誰も気にしなかった。

その長崎産婦人科病院に併設されている老人施設に有名な俳人の島田桂女（けいじょ）が入所してくるというので、病院ではいろいろと噂が立ち始めていた。

「有名な俳人なら、こんな場末の施設ではなくて、もっと環境のいい施設に入ったらいいのに、……」

「いや、いや。うちの院長先生は三千石という俳号を上田五千石先生から貰っている。専門が産科だから三千石になったそうだ。うちの先生は人がいいから、きっと押し付けられたんだ」

「そうじゃないわ。生れ故郷の鴨川に帰るに帰れないわけがあるから、せめて川ひとつ、へだてたこの江戸川の小岩を選んだのよ。きっと」

看護師、介助人、賄人などが自分の知っている知識に頼って、入所の理由を組み立てていた。

誰もが、有名な俳人という点に、いささか羨望と反撥を感じていた。

「たしか、九十歳は過ぎているはずよ」

看護師のこのひとことが止（とど）めだった。

（もう、ヨボヨボなんだ）

誰の顔にも、そんな表情が浮んだ。

島田桂女と長女亜季（あき）が京成小岩駅に降りたのは、ちょうど近くの私立高等女学校の下校時間だった。

ホームに溢れた女子高校生で降りようとした桂女たちは電車に押し込まれそうになって、あわてて、「降りますよ」と亜季が大声を出して、やっとホームに降りることができた。

「元気のいい女学生だこと」

桂女は笑っていた。

（わたしにも、こんな時代があったんだ）

久し振りに体験した女子高校生たちの若さに、大きな眼鏡の奥の目が笑っていた。

「体格がびっくりする程、よくなったわね」

亜季が母親の顔を見ながら、そう言った。

桂女は萠黄色（もえぎいろ）の紬を着て、臙脂（えんじ）がかった帯をきっちりと締めていた。

黒々した髪をしっつめにまとめて、緑色の大きなサンゴ玉のかんざしを差していた。

その大きな唇には、真っ赤な口紅がつけられていた。

（さすが、新橋の路地裏で何十年も小料理屋の女将をやっていた人ね。わたしもかなわないわ）

亜季は母親の凛とした姿に感嘆していた。

桂女の背筋をピンと伸ばした着物姿に、気圧（けお）されて、女子高校生は誰も桂女の側には寄ってこなかった。

階段を降りてくる女子高校生の流れに、さからいながら重いバックを抱えた亜季が、

「年寄りがいますので、よけてください」

声を張りあげながら階段をのぼった。

「新橋の小料理屋の女将を年寄り呼ばわりは、しないでおくれ」

改札口を出ると桂女は娘に文句を言った。

「母さんのことじゃありませんよ。わたしのことです。わたしも歴（れっき）とした年寄りですからね。ことし、六十九歳ですからね。なんなら長崎産婦人科病院にわたしが入院して、その入院費用を母さんが払ってくれますか」

「ええ、ようござんすよ。わたしに六十九歳の若さをくれるなら、喜んでお支払いしますよ。それにしても、あんなに可愛かった亜季が六十九歳とはねぇ」

桂女は改めて亜季の全身を眺めた。

改札口の近くに立っていた桂女が女子高校生に突き飛ばされて、よろけた。

「ほら、ほら。母さん、あぶないから病院に早く避難しましょう」

亜季は右手に重いボストンバックを持ち、左手で母親の手を握ろうとした。

「嫌ですよ。わたしは娘に手を引いて貰うほど、惚（ぼ）けてはいません」

桂女は亜季の手をビシッと叩いた。

「転んで足を折ったら事ですからね。気を付けて下さい」

亜季の後ろについて、女子高校生の流れに逆らって階段を降りていった。

「母さん、早く病院に入りましょう」
亜季が二、三度催促しても、桂女は「もうちょっと」と言って、病院の前の車寄せから女子高校生の流れを見ていた。
（わたしは馬鹿になった）
そんな思いが桂女の心をくもらせていた。
こんな大勢の女子高校生の流れを見たら、二つや三つの句が立ち所に心に浮んできたのに、今では何も浮んでこなかった。
「母さんを院長先生にお願いしたら、今夜、京都に帰るのよ。悪いけど、早くしてくれない」
「分かっているよ。でも、こんなに大勢の若い人を見るのは珍しいからね。もう少し、見させて、……。見納めになるかも知れないし、生きてこの病院を出られないかも知れないからね」
こともなげに、そう言いながら亜季を振り返った目は、亜季がこれまで見たことのない静かで、冷たい目をしていた。
有名な俳人、新橋の小料理屋の女将、九十五歳の高齢者などと、どの噂も桂女にマイナスになっていたが、廊下で桂女に会った誰もが、「ほおうッ」と驚きの表情を見せた。
個室に入っていたので、桂女は滅多に廊下に出てこなかったが、朝と夕方の二回、廊下を歩いた。
渋い色合いの和服を着こなして、トレードマークの大きな眼鏡を掛けていた。
廊下で擦れ違う誰にでも、笑顔で挨拶した。
「さすが、新橋の小料理屋の女将。イキだわ」
桂女の後ろ姿に溜息をついたりした。
「とても、九十五歳には見えない。六十五歳と言ってもいいわね」
誰もが桂女の若さに圧倒されていた。
桂女が八十八歳で上梓した第六句集『蛍火』が読売文学賞、第七句集『紫陽花』が蛇笏賞を授賞していたことも、この老人施設で囁やかれるようになったので、桂女を見る目も違ってきた。
「あの先生はお部屋で、何をなさっているの」
桂女の個人担当の看護師斉藤真紀は、よく聞かれた。
「ご自分の俳句を筆で清書していることが多いです」
着物姿で文机の前に正座して筆を持っている姿に圧倒されて、斉藤真紀は桂女の個室をノックするとき、いつも緊張していた。斉藤真紀の気配に気付いて「なにか」と桂女は聞いた。
「はい。体温と血圧をお測りします」
「あら、もうそんな時間ですか、わたしって駄目ね。いつも測っていただいているのに、忘れてしまって、ごめんなさいね」

桂女は軽く会釈して、斉藤真紀に向き直った。
壁際にベット、その反対側の窓際に畳一畳をはめこんだ家具が置かれていた。腰掛けるのに丁度いい高さで、桂女のように文机を置いたり、小さな卓袱台を置いて、付添いの家族と食事ができるようになっていた。
部屋の奥に、洗面所、バスルーム、トイレが設置されていて、この個室で生活できるようになっていた。
ただ、火災の危険防止のため、火を使うことは厳禁されていた。
「お勉強するのに、ちょっと狭いようですね」
「いいえ、これでじゅうぶんですよ。ほら、立って半畳、寝て一畳と言うでしょう」
「血圧一一〇と八〇、脈拍七四、体温三六度一分、体調は申し分ありません」
「ありがとう。そう言っていただくと、元気が出るわ。赤ちゃんの声って、いいわね。時々、泣き声が聞えてくるのよ」
「うるさくありませんか？」
「いいえ、赤ちゃんの声を聞くと、娘を産んだときのことを思い出して、わたしまで若返るわ。産婦人科に老人施設を併設するなんて、三千石先生も、……。いいえ、ね。ここの院長先生のこと。産科だから俳号を三千石としゃれたのよ」
「このあいだ、一緒にいらっしゃった方はお嬢さんですか？」
「お嬢さんっていったって、もう孫が三人もいるのよ。薄情者だから、忙しいといって、すぐ帰っちゃったけれど、……」
「お仕事をなさっているんですか？」
「そう、京都で画商をしているわ。この不景気でしょなかなか、絵が売れないって、こぼしていたわ」
「お子さんはおひとりですか？」
「ひとりと言うのか、五人と言うのか、このごろ、わたしにも分かんなくなっちゃったの。でも、あの子だけはよくしてくれるわ」
「お子さんに大切にされて、お幸せですね」
「今まで何十年と夫や子供たちを裏切ってきたのに、人生の最後ぐらいは幸せな帳尻をつけたいと願うのは、自分でもおかしいと思うわ。でもね。このわたしがこれから、どうなっていくのか、とても不安なの」
「入院された方は誰でも、そう思うようですよ」
「あら、そうなの、……」
「そうですよ。この病院に馴れれば、みなさん元気になります。それには、さっきおすすめしたように、みなさんと一緒に食事をしたり、お遊戯をすることです。ひとりでは自分の影におびえると言いますよ。こうしてお部屋に籠もってお勉強ばかりされないで、たまには大部屋の人たちともお話しなさっては、いかがですか、気晴ら

しになると思いますよ」

「ありがとう。わたし、新橋で長いこと小料理屋の女将をやっていたでしょ。お愛想笑いが嫌になったの。これからは、わたしの地のままで生きて生こうと思ったから、お店も姪夫婦に譲ってここにお世話になったのよ。大部屋にいけば、笑いたくないときも、笑わなくちゃいけないでしょ」

「いいえ、そんなことありませんよ。みなさん、楽しそうにしていらっしゃいます」

「折角のお誘いだから、気が変ったらいきますね。大部屋にいきたくないというわたしの気持ちも分かって欲しいわ」

「わかりました。お待ちしていますから、どうぞ気楽においでください」

「ありがとう。淋しくなって、いくかも知れないし、そのときは、よろしくね」

斉藤真紀は一礼して、桂女の個室を出た。

斉藤真紀が出ていくと、桂女は、またひとりになった。斉藤真紀と話していたときの楽しい気持ちが忽ち落ち込んでいくのが桂女にも分かった。

ドアがノックされた。

「はーい」

桂女は明るい声で返事をした。斉藤真紀が戻ってきたのだと思った。

部屋に入ってきたのは、院長の三千石だった。白衣を脱いで、草色のセーターを着ていた。

「桂女さん、元気そうだね。なにか、いい句ができましたか、……」

「ありがとう。でも、昔の句を写しているだけよ。こうして壁に囲まれていると何もできないわね」

「そうですよ。だから、吟行が大事なんですよ。しかし、桂女さんの才能をもってすれば、この狭い空間を破る名句が生まれることを、この三千石は願ってやまない。正岡子規の病床句のようにね」

「三千石さん。わたし、この頃、怖いのよ。なんか、わたしがふたりいるみたいで、……。わたしをもうひとりのわたしが、じーっとみつめているのよ。またたきもしないで、じーっとみているの。あの目は、わたしをとがめている目だわ。そりゃ、若いときから、わたしにも、いろいろとありましたよ。夫を裏切ったり、亜季を捨てたり、わたしは決して褒められた女じゃありませんよ。その折々に、あの目が出ていてくれたら、別の人生があったと思いますよ。それを、今になって出てくるなんて、遅すぎます。証文の出し遅れよね」

「証文の出し遅れは、いいな。ボクは、いつも証文の出し遅れだ。桂女さんに、『魚河岸や　けふ黄落の　定休日』という句があったでしょ。うちの病院の内庭に、カツラの木が一本あって、一年に一日だけ、黄落したカツラの葉が黄金のじゅうたんを敷きます。ボクはそれを句にしようと、毎年、ウンウン唸っているけど、どうしてもできない。桂女さんなら、きっといい句ができると思うな。ぜひ、うちのカツラの黄落を句にしてください。中庭にカツラを植えたのも、桂女さんに負けてはならないと、自分自身を戒める意味もあったけど、木は大きくなってもボクの句は一向に伸びなかった。ボクのあこがれの桂女さんがボクの病院に入院したいと五千石先生から連絡があったときは嬉しかった。桂女さんの顔を見ているだけで、いい句ができそうに思えるから」

ここで、三千石は、「カツラの黄落に夢中になって、肝心の話を忘れるところだった」と独り言を言って、桂女にのし袋を渡した。

「さっき、区の俳句連盟の会長と副会長がきて、桂女さんに、ぜひお目に掛かりたいと粘っていたけど、ボクは断ったよ。それなら見舞金だけでもと置いていった。受け取りたくはなかったけど、そこまで断ると話がこじれてしまうので、ボクの独断でいただいて置いた」

三千石はそれだけ言うと、片手をヒラヒラさせながら個室から出ていった。

（三千石さんは、よく喋るのね。今まで気が付かなかったわ）

桂女は、そう思いながら三千石が渡してくれたのし袋の中身を見た。

のし袋には、五万円が入っていた。桂女は、ゆっくりと二度数えた。

ドアがノックされた。

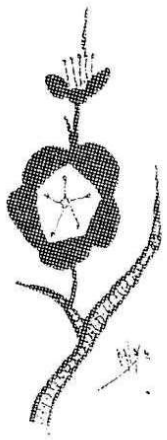
「はーい」桂女は返事をしながら、三千石が戻ってきたのだと思った。

入ってきたのは、斉藤真紀だった。

「夕方の検温をお願いします」

斉藤真紀のことばに、桂女は、（わたし、お昼の御膳をいただいたかしら）と思った。

この物語はすべてフィクションですが、文中の俳句は、『鈴木真砂女全句集』（角川書店）からお借りしました。



妖　星（その二）

三戸岡道夫

（一）偽りの服従

東大寺大仏殿の焼き打ちによって松永久秀は悪名を残したが、その打撃で三好三人衆は総崩れとなり、退却した。

三好三人衆に勝った久秀は、翌年の永禄十一年（一五六八）の正月には、奈良の多聞城に帰って、元旦を迎えた。三好三人衆を退却させたとはいえ、撃滅させたわけではない。三好三人衆を中心とする三好一族は、したたか者で、結束が固い。いつ、また、勢いを盛り返して、攻撃してくるかもしれない。油断できなかった。久秀は多聞城で酒を飲みながら、じっくり天下の形勢を睨んでいた。

すると天下の一大事が起きたのである。同時にそれは久秀にとっても一大事だった。織田信長が将軍義昭（足利十五代将軍）を奉じて、京都へ入ったのである。久秀と三好三人衆とで擁立した十四代将軍の足利義栄は、腫物をわずらい、すでにこの世を去っていた。信長の本格的な天下布武の戦略が開始されたわけである。

うすうす予想していたとはいえ、久秀の運命を左右する大問題が、こんなに早く、突如として起るとは思わなかった。

（これにどう対処するか）

畿内は、天皇や将軍が日本を統治する、国の中心であり、したがって畿内を治める者は畿内の者でなくてはならない、と久秀は思っている。そして久秀は曲りなりにも、その畿内を手中にしているのである。だから他国者の侵入を許すわけにはいかない。畿内は久秀の領域である。表面では服従と見せかけて、内心では従わない作戦である。

正直言って今の久秀は、信長と戦って勝てる兵力を持っていない。これまでの久秀は三好家に寄生し、三好一族の軍力に頼って、今日までやってきたのである。その三好三人衆と決裂してしまっている現在、久秀が頼れるものは、自分の軍力しかない。その軍力だけでは、とうてい信長に対抗することはできなかった。

（ここでは、いったん従うことだ）

それが賢明な策というものである。

だが、久秀がそう決意した裏には、実はもう一つの計算があった。たとえ信長が京へ入ってきたとしても、簡単に畿内を平定することはできない。信長は利恰な男であるから、そのことを知っている。だから畿内を平定するのに、自分の軍力でするよりも、畿内にある既存の軍力を使うはずである。

その有力な軍力が久秀なのである。だから久秀が信長に服従を誓っておけば、信長は久秀を手先として使うだろう。信長の手先になることによって、久秀は自分の地位を安泰にすることが出来るのである。信長に会って

（京のことならわたくしめが逐一存じておりますから、ご上洛のときには杖がわりにご案内いたしましょう）

とでも言っておけば、大よろこびするであろう。

（これは一挙両得だ）

（信長のごとき尾張の田舎者に、この畿内に足を踏み入れさせてなるものか）

これが久秀の決意だった。しかし、

（だが……）

と、老獪な久秀は考えるのだった。

（相手は織田信長だ。それで本当にいいのだろうか？）

聞くところによると信長という男は、若いながらなかなかの出来星だという。五十九歳の久秀に対して、信長は三十五歳である。数年前の桶狭間の戦では、信長は若干二十七歳にして天下の勇今川義元を討ち取り、それを機会に尾張五十六万石、美濃五十四万石を手中にした。また、遠州、三河を領する徳川家康と同盟を結び、いざとなれば、五、六万の軍勢をそろえて京へ攻め上ってくることも出来るという。だから、

（この信長に本当に反抗してよいのか）

ここが思案の仕どころであった。

（信長軍と激突して本当に勝てるのか？）

（信長を敵に廻すのは損ではないのか）

思い悩む久秀の顔に、そのとき、

（うむ、これじゃ）

という不敵な笑みが浮かんだ。妙案が浮かんだのである。妙案とは、世にいう、

（面従腹背）

だが悪がしこい久秀には、さらにもう一つの計算があった。信長の畿内平定は、当然、三好一族をも標的にするであろう。だから、久秀の力によっては全滅させられない三好一族を、信長の力によって征服するのである。言ってみれば、信長を久秀の手先として使うわけである。

（京と畿内の掃除を信長にさせてやるのだ。尾張の田舎者の小悴には、掃除役がお似合いじゃ。掃除の終った段階で、わしが畿内をいただくという寸法さ）

天下に恐れられた信長を、自分の手先として掃除役に使うなどということを、たとえ頭の中だけのこととはいえ、考えることが出来たのは、この松永久秀一人だけだったのではなかろうか。

（これこそ一挙三得である）

いわば、利用したり、利用されたりというわけである。要はその信長と久秀の化かし合いが、いつまで続けられるかということであろう。

そう決心すると久秀は躊躇しなかった。

直ちに岐阜城へ使いを走らせた。そして人質と、献上品を信長に差し出し、服従を誓った。

人質には、側室の一人が生んだ、四歳の男子を差し出した。そして献上品として差し出したのが、名高い「つくもがみ」と呼ばれる茶入れである。信長はその茶入れを掌にのせ、もてあそぶようにしながら、

「う、ふ、ふ…、あの爺めも、頭を下げてきたか」

と、満足げにつぶやいた。

実は信長の方も、奸物と悪名高い松永久秀を、どのように料理すべきか思案していたところだったからである。それが、はからずも先方から折れて出てきたのである。だが、

（本気かな？）

鋭い信長の頭は、すぐ、その先へと回転するのだった。

（あの爺のことだ、まさか本気ではあるまい。しかし今は、その本気に乗ったふりをすることだ）

信長の方も老獪であった。武力一辺倒の者ならば、武力で押えればいいが、悪知恵の働く奸物は、武力だけでは片付かない。しかしそうかといって、こちらから折れて出るわけにもいかない。それが久秀の方から折れて出てきたというわけである。

信長にとっても、久秀は使い道があった。

（おれが京に足を入れても、畿内には敵が多い。畿内の地侍は一筋縄にはいかぬ。それを押えるには、畿内で力を持っている久秀を使うに限る。毒をもって毒を制するというわけだ）

と、はやくも久秀の利用方法を考えていた。

（利用できるものは徹底して利用するのだ。そして利用価値がなくなったときは、それはその時のことだ）

信長も久秀と同じようなことを考えていたわけである。

こうして久秀は信長の傘下に入ることによって、引つづき大和一国を統治することを許され、いちおうその地位を確保したのである。

信長の軍門に下った久秀は、その後、信長軍と共同して、三好三人衆や筒井順慶などへの攻撃を行った。当然、久秀一人で戦うよりかはるかに強力であり、また信長にとっても、勝手知ったる久秀と手を組んだ方が、信長軍だけで戦うよりも好都合であり、信長と久秀との関係は、表面上はうまくいっているように見えた。

やがて信長は石山本願寺に五千貫、奈良興福寺に千貫、堺に二万貫の矢銭を課した。矢銭とは、信長が戦費に使う軍事税のことである。石山本願寺と奈良興福寺はすぐ承知したが、堺はこれに応じなかった。応じないばかりか、塁を設け、濠を深くして、応戦の構えをした。

堺は中国貿易、南蛮貿易、密貿易の拠点であり、九州の博多と並ぶ日本の代表的な経済都市である。信長が天下を統一するのに、絶対必要な都市である。だから堺に二万貫を課したのは、二万貫の金が欲しいからではなくて、それを機に、堺を自分の支配下に組み入れたいのだった。相手が応戦する構えなら、武力で屈服させるほかはない。

ところが久秀にとっては堺は地元であり、親交があった。久秀は三好家の家臣であった頃、堺の代官を勤めたことがあったので、堺の代表的な顔役である会合衆（えごうしゅう）や、納屋衆と親しかった。そのため久秀は堺を使って私腹を肥やすという、抜け目のない力量も発揮していた。久秀が動けば、信長は武力を使わなくてもすむのである。

その信長の心理をよく読んだ久秀は、如才なく両者の間を仲裁し、信長と堺の間をうまく取り纏めたのである。すなわち久秀は点数を稼いだのである。信長は、

（うむ、爺め、なかなか、やるわい）

と満足の態であった。

かと言って、もちろん信長も全面的に久秀に心を許したわけではなく、

（久秀め、おれの勢いが盛んなときは、おれに従っているであろうが、旗色次第で、いつ、どう寝返るか、わかったものではない。油断は禁物だ。だが、いましばらくは使っていて大丈夫であろう）

と、鋭い打算を働かせるのだった。

（二）二条城の造営

永禄十二年（一五六九）二月に、信長は京都勘解由小路（かげゆ）に、二条城の造営に取りかかった。将軍義昭の居館とするためである。久秀ももちろん大和から大勢の役夫を送るなどして、それに協力した。

工事は突貫工事によってスピーディに行われ、はやくもその年の四月には、いまだ未完成ながら、将軍義昭は

二条城へ移転した。

将軍義昭のために二条城などを造営して、信長と義昭との間は一見うまくいっているように見えたが、それは表面だけで、水面下では次第に二人の間は嫌悪になりつつあった。それは信長が、将軍義昭の権限を規制する『殿中御掟』という九ヵ条の掟書を作ったりして、義昭の権限、自由を、制約したからである。信長は足利将軍を奉るというよりも、自分の指揮下に組み込んでしまおうという意図が、露骨になってきたのである。

だが義昭にしてみれば、

（自分は信長の力によって将軍になることが出来たのだ）

ということがわかっていても、将軍としてのプライドがそれを許せなかった。

義昭は信長の許可を受けずに、ひそかに、上杉、武田、大友、毛利、朝倉などの諸国大名に御内書を発して、将軍の権力支持を要請した。そして、そうした義昭の暗躍を、信長は察知した。

やがて信長と義昭の関係が表面上も崩れてくるようになると、信長と諸国大名との対決関係も、次第に変化してきた。だから、そのことに気がついた信長は、この年（永禄十三年）の岐阜城での年賀の席で、久秀を出しに、

（信長に対する反逆は許さぬぞ）

と、久秀や家臣たちを牽制し、家中の団結をはかったのである。

そして、その年賀の席の後ただちに、すなわち永禄十三年正月十三日に、信長は、

（諸国大名に御内書を出されるときは、事前に信長にお知らせください）

という内容を中心とした五ヵ条の誓書を、義昭へ送り、これを承認させた。

永禄十三年二月末に、信長は数千人の家来を従えて入京した。それは二条城完成の祝宴を開くためであったが、同時に信長の威信を京に知らしめるためでもあった。

永禄十三年四月十四日にその祝宴は開かれ、猿楽能が興行された。もちろんその席に久秀も招かれた。しかし、つい三ヵ月ほど前の、岐阜城の年賀の席での信長の仕打ちが、頭に鮮明に残っているだけに、猿楽能に興ずる信長の姿を見るにつけても、久秀の腹は煮えくり返る思いがした。しかし今は、腹の中を信長に気どられてはならぬと、無念の唇をぐっと噛みしめた。

祝いの席には、信長、将軍義昭につづいて、大勢の武将たちが居流れていたが、その中に朝倉義景だけが姿を見せていなかった。久秀は、信長と朝倉義景の間にひろがる黒い闇を感じた。

そして、久秀のその予感は適中した。二条城の祝宴が終ると、信長はただちに朝倉義景攻撃の陣触れを発したのである。

もちろん久秀も何くわぬ顔をして、数百人ほどの供をつれて信長軍に加わり、朝倉攻めに向った。

義昭は将軍になる前の亡命中に、長く朝倉義景の世話になったことがあるので、義景との仲は親しかった。そこで義昭の頭を押えるのには、その朝倉義景を討って、義昭を支援する勢力を弱めようと、信長は考えたのである。

しかし朝倉攻めは一筋縄にはいかなかった。朝倉義景が浅井長政と歴史的な同盟関係にあったからである。そのために信長軍は朝倉と浅井の両軍の挟み打ちにあい、信長はいったん岐阜城へ逃げ帰った。そして戦備を整えると、後日、姉川において朝倉、浅井の連合軍に対決し、これを破って完勝することが出来た。世に名高い姉川の合戦である。

（三）反信長同盟網の中で

姉川の合戦は信長の完勝ではあったが、朝倉義景の止めを刺すまでには至らなかった。そのため、朝倉、浅井の反抗がきっかけになり、畿内の反信長勢力が動きはじめた。

永禄十三年（元亀元年）七月には、三好三人衆が河内でふたたび活動をはじめ、また九月に入ると、石山本願寺の顕如が各地の門徒を蜂起させた。

さらに翌年の元亀二年（一五七一）になると、抗争はさらに深刻な様相を呈するようになった。本願寺顕如と将軍義昭が結束する、反信長同盟網に、甲斐の武田信玄が加わったからである。武田信玄も、信長と同じように天下統一を狙っている。その上顕如の夫人は、信玄夫人の妹であったから、顕如と信玄の連結は密であった。

こうして元亀二年になると、将軍義昭を中心とする、本願寺顕如、朝倉義景、浅井長政、武田信玄、三好三人衆という、巨大な反信長の同盟網が張りめぐらされたのである。

久秀がこの反信長同盟網をだまって見ているはずはなかった。とくに武田信玄が同盟網へ参加したことは、

（わが機会、到来す！）

と久秀を狂喜させた。表向き信長に服従しているが、それは仮の姿であって、いつ信長へ反逆するか、久秀はその機会を虎視眈々と狙っていた。その機会がやっと来たのである。

「うむ、やっと武田信玄も腰を上げたか。これで信長の前途も終りであろう。待った甲斐があって、やっと信長へ反旗をひるがえす機会がやってきたわい。この機会を逃す手はないぞ」

久秀はにやりと唇をゆがめると、元亀二年五月十七日に武田信玄に書状を送って、

（公儀の御威光をもって上洛されたときは、ねんごろに

ご協力をいたしたい）

と協力を申し入れた。

また久秀は同時に三好三人衆とも手を結んで、信長への作戦行動を開始した。いったん三好三人衆とは対立したものの、反信長という畿内勢力結集のために、両者はふたたび結束したのである。

また元亀二年六月十三日、本願寺顕如は、長子の教如光寿と、朝倉義景の娘との婚約を成立させた。この事は、朝倉義景の母の広徳院が甲斐の武田氏の出身であること、また顕如の夫人が、武田信玄夫人の妹であるということも関係して、顕如、義景、信玄の三者による反信長戦線は、いっそう強固なものになったのである。

こうした久秀の裏切りを知った信長は、

「久秀め、油断のならぬ腹黒の狸（たぬき）だと思っていたが、やっぱり正体を現わしたか。ふん、馬鹿な奴め。わしがやすやすと、そんな同盟軍などに敗けるものか。わしを見限るのは、ちとまだ早すぎるわい。わしを見限るのは、おのれの運を見限るのと同じだということが、わからぬのか。この、おいぼれ爺（じじ）いめ……」

と、せせら笑った。だが、

（それにしても目先を読むのがすばやい奴だ）

と、警戒の眼を走らすことも忘れなかった。

そうした状況の中で、信長は元亀二年九月に、岐阜と京都の間に立ちはだかって、信長の京都入りを阻み、かつ朝倉義景と組んで信長に抵抗する、比叡山を焼打ちにした。

そのとき久秀は高槻に兵を進めていたが、九月十三日、比叡山が燃える焔を遠望すると、

（ふん、信長め、きさまもついに寺を焼いたか。わしが東大寺を焼いたのを『天下の大悪人』と面罵しくさったが、比叡山を全焼させ、四千人もの僧俗を焼き殺したきさまこそ、もっと大悪人ではないか。比叡山のような聖地を焼き打ちするようでは、信長の命運も、そう長くはつづくまいぞ）

比叡山の方にむかって唾を吐きかけた。

そうした状況の中で、久秀が最も期待するのは、武田信玄の動きだった。そして、その上洛の動きは、久秀の期待した通りの目ざましいものがあった。

信長が比叡山焼き打ちをやった次の年、すなわち元亀三年九月二十七日、武田信玄は京都を目ざして、西上の軍を動かしはじめた。元亀三年十二月には、三方ヶ原の合戦において、信長の同盟軍の徳川家康を大破した。信玄の上洛は目前に迫っているといえた。

（これで信長は、武田信玄とわれら近畿勢との挟み打ちになって、もう終りだわい）

次の期待へと久秀の胸は躍るのだった。

元亀三年十二月二十九日に武田信玄は、久秀へ、三方ヶ原の合戦の大勝を知らせるとともに、

（わたしの上洛に協力してほしい）

と要請してきた。よろこんだ久秀は、年が明けた元亀四年正月二日付で、信玄の戦勝を祝う書状を送った。

だが……。

どうしたわけか、その後の武田信玄の動きがぴたりと止ってしまったのである。信玄がいっこうに上洛の気配を見せないのである。

（どうして信玄は動いてこないのか）

久秀は急に不安にかられた。

（信玄に何かあったのか？）

その疑念は久秀の中で次第にふくれ上がっていった。

（あれほど上洛の意欲に燃えていた信玄の動きが急に止るのには、何かの理由があるとしか考えられない。ひょっとして信玄は暗殺されたのか、病で死んだか。それとも病で動けぬのか？）

そして久秀の予感は当ったのである。元亀四年（一五七三）の四月十二日、信玄は持病の労咳（ろうがい）が悪化して、甲府への凱陣の途中で、病死したのである。信玄の嫡子の武田勝頼は信玄の死を秘したが、信玄の死の噂は十日もたたないうちに、あっという間にひろまった。

武田信玄の死は久秀を狼狽させた。

「信玄め、死におったか。これは難儀なことになったわい」

さすがの久秀も、一瞬、言葉を失った。

武田信玄は、反信長同盟の柱である。久秀が反信長同盟に加担したのは、その中に武田信玄がいたからである。その信玄が死んだとは、晴天の霹靂としか言いようがない。久秀の心は、一瞬の闇に閉された。

だが、久秀のふてぶてしさは、いつまでも心の闇に逡巡していないことだった。

「まあ、いいじゃないか。信玄が死んだって、まだ、朝倉、浅井、本願寺、それに三好一党がいる。また、信玄の代わりには、上杉謙信もいる」

と久秀の精神はすぐ衝撃から立ち直った。

しかし、反対側の信長の方にしてみれば、信玄の死は、天から降った幸運といってよかった。信長が一番恐れ、警戒していたのが信玄だった。それが突然自滅したのである。

（天はおれに味方した）

信長は着々と、反信長勢力の撃滅作戦を進めていった。

そしてその勢いに乗って信長は、天正元年七月に、将軍義昭を追放して、足利幕府を滅亡させた。そして年号を元亀から天正へと変えた。

その天正元年八月二十六日に、念願の朝倉義景を滅亡させることに成功した。

朝倉滅亡の報せを受けたとき、

「なに、朝倉が滅びたとな。越前の朝倉といえば強軍と

心頼みにしておったのに、なんと早き往生よのう」
と、さすがの久秀も、みぞおちの辺りに痛みが走るのを感じた。そして、
（朝倉が潰れたら、次は浅井か）
久秀が思った通りに、信長は次に電光石火の如く浅井長政を攻め、あっという間の四日後の八月三十日には、浅井長政の小谷城を陥落させてしまった。
（うーむ、浅井も落ちたか）
久秀はうめいた。
武田信玄につづいて、朝倉、浅井も滅亡し、将軍義昭も追放ということになっては、あと頼りになるのは本願寺だけだった。
（おれの作戦はやはり失敗だったかな）
と、久秀は臍をかんだ。
（こうなると、こっちの首も危くなってきたわい。さて、どうするか。今度は信長もそう簡単には許してくれないだろう。仕方がない、頭でも剃って丸坊主になり、信長の前に這いつくばらねばならぬかもしれぬな）
と自虐的につぶやいた。しかし、信長が簡単に許さないだろう、とは思いつつも、
（でも、信長は絶対おれを許すだろう、いや、許さざるを得ないだろう。なぜならば、おれはまだ信長にとって利用価値がある）
という、久秀のふてぶてしい自信はゆるがなかった。

そして久秀が考えているように、信長の方も、久秀の利用価値を十分に計算に入れているのだった。
信長は畿内の武将や地侍が、いかに統治しがたい者であるかを、よく知っている。彼等は利に誘われて、離合集散常ならぬ行動をくり返し、その複雑な勢力は侮れない。信長はそれを自分で押えるよりも、畿内に力を持っている者にやらせた方が、やり易いと考えている。その男が、
（松永久秀）
なのである。
加えて信長は商業都市である堺を押える必要がある。そのために、堺商人と親密な関係にあり、その裏表に通じている久秀の力が、まだ必要である。
（畿内平定に、まだまだ久秀は利用価値がある。まだまだ、爺め、その首根っこを手放しはしないぞ）
と。信長の方も、久秀と裏腹のことを考えているのだった。

（つづく）

踏絵（二）

鍋屋次郎

松雲寺を出て暫くすると、俄に風雨が強まり、役人は蓑と笠を着けているが丑松など百姓達は何も着けていない。
泉郷まであと半分の道程という所で、丑松女房おときが突然よろめき、道路際の木を抱えるように蹲った。
おときに近づく丑松を冷たい視線で見ていた井上禮之助は、傍らにいた宋助衛門を見て
「キリシタン露見の不安のあまり倒れたのだろう。その方が家まで連れて参れ。丑松はこのまま連れて行く」
と言った。それを聞いた丑松は
「お役人様、女房は六ヶ月の身重でございます。少し休ませてから私が家まで連れ帰ります。そうさせてください」
と哀願するように宋助右衛門を見上げた。
井上禮之助は
「今は公儀の命令でそち達を召し連れているのだ。勝手は許すわけにはいかない」
と丑松を睨み付け、他の者に対し
「何を突っ立っているか。そち達はさっさと歩め！」
と一喝したので、他の者は全員歩き出した。
大粒の雨が降り注ぐ中で、血の気が失せ目を閉じてぐったりしているおときを抱きかかえるようにして、丑松も屈みこんでいる。
宋助右衛門は井上禮之助の前に行き、腰を屈めて
「井上様、丑松女房おときの様子では、暫しの休息が必要と思います。それにこの雨でございます。この先に塩焚き用の小屋がございますので、丑松と身共がおときをそこに運び入れ休息させたいと考えます。どうかお許しを賜りますようお願い申し上げます。その上で身共が責任もって二人を連れ帰ります」
しばし宋助衛門と丑松夫妻を見つめていた井上は、苦々しい表情で

「甘やかすでないぞ。出来るだけ早く連れ帰れ」
と言うが早いか、先に行った者達に追いつくように足早に去っていった。
幸い、おときを担ぎ込んだ塩焚き用の小屋には製塩用の薪が置いてあり、助衛門は、丑松にそれを燃しておときを暖めるよう促した。
長時間雨に当たっていたため、雨は衣類を通し肌は冷たくなっている。漸く薪が燃えだし、小屋の中が暖かくなったとき、助衛門は丑松に
「身共に遠慮することなく女房を裸にして暖めてやれ。これから近くの部落に行っておときの着るものを借りてこよう」
この言葉に今まで一言も発しなかったおときが首を持ち上げ
「お役人様、勿体のうございます」
とか細い声を出した。丑松も
「お役人様に、そこまでして戴くのは勿体のうございます」
と、おときを抱いたまま助衛門の方に顔を向けて頭を下げた。
「何を遠慮するか。このままでは女房の命がないぞ。ましてやっと授かった子供が腹の中にいるではないか。ここは俺に任せろ」
と言って、小屋の外に出て行った。いつの間にか「身共」が「俺」に変わったことに丑松は、助衛門の役人風を吹かさない人間的な暖かさを感じていた。
一方、松雲寺から飛ぶようにして泉郷に戻った留吉達は、我先にとそれぞれの家に飛び込み、隠してある「十字架」「ロザリオ」「聖画」などを、かねて申し合わせて各家に用意してある太めの竹筒に入れ、古布で出口を塞ぎ、草むらの中に埋めて、その上は恰も自然に雑草が茂っているようにした。
留吉は松雲寺に夫婦とも残された丑松と彦次の家に入り、万一の時の対策として、キリシタン関係品の各自の自宅での隠し場所を「松雲寺のお札の後ろ側かまたはそのお札の中」と決めてあったことから、そこから取り出し、竹筒に入れて裏山の草むらに埋めた。
一通り隠し終えた住民達は、これからの成り行きがどうなるかが心配で、家の中にひっそりと閉じこもった。
留吉は、葬儀などの時に使う道具等を入れてある泉郷住民共有の物置小屋の前に、二尺位の長さの竹筒を無造作に立てかけて置いた。これから役人に引き立てられて来る丑松達に安心して貰うための合図である。

暫くして役人と四名の住民が戻ってきた。井上禮之助は迎えにでた留吉には目もくれず、泉郷担当の役人今村治平に
「貴殿は丑松の家の中を隈無く探索せよ」
と指示して、後の役人には二人一組となって徳三、徳治、彦次の家を探索するよう命じた。
井上と今村は、キチンと整頓されている丑松の家の中で、布団、衣類など全て押入から引っ張り出し、その他の家財も動かしたり、また中の物を全て出して探索したが、キリシタン関係の品は何一つでてこない。家の中はこれ以上の「散乱」はないと言えるほどの状態となっている。居間の中央の鴨居に棚を付けて、その上に波頭島唯一の神社「三島神社」のお札一枚が祭られ、その横にはには土器の中に水が献じてある。その左の棚にも松雲寺のお札一枚だけ祭ってある。もう探すところはない。そんな表情で今村が井上を見ると
「今村、貴殿は農器具の入っている納屋を探せ」
と指示し、自らは家の周囲の探索を始めた。
他の三軒を探索した役人達が丑松の家の前に集まってきた。どこの家からもキリシタン関係品は一つも見つからなかった。丑松の家の周囲を見回った井上がそれぞれからの報告を聞き
「どこからも一切見あたらないと言うことはあり得ない。貴殿方はここに残れ。丑松の帰りを待って吟味いたす」
と言い終えて足の踏み場もないほど散乱を極めている丑松の家に再び入って行った。
留吉は丑松夫妻と宋助衛門の姿が見えないのが気になって仕方がない。泉郷担当役人の今村に聞きたくても、今村は井上の指示に従って忙しく立ち回っており、とても声を掛けられる状況にはない。
暫くして、丑松の家の中から井上の苛立った声が聞こえ
「今村、丑松達が遅い。宋は何をしているか。貴殿は今きた道を戻り三人を連れて参れ」
と、今村に指示していた。
塩焚き小屋の中の丑松は、自分も濡れた衣類を脱いで褌一つとなって、おときにも濡れた着物を脱がせ、焚き火に暖をとらせていた。おときは薄い腰布だけとなっている。丑松がおときの背を両手でゴシゴシとこすっていると、肌に赤みが差してくる。今まで蒼白そのものだった顔面も少し血色が良くなった。
「ね、宋様の旦那はどうしてこんなに親切なのかしら。

私たちに全てを白状させるためなのでしょうか」
おときの問いかけに、丑松は
「わからない。今はご親切を有り難くお受けするより仕方がない。泉郷のみんなを裏切ることは死んでも出来ない」
「そうね、宋様がこれから何を言い出してもキリシタンのことは一切存じません、でいきましょう。しかし、もうきっと家の中は探されていますよね」
丑松は少し黙った後
「心配ない。きっと『じい様』が隠してくれている筈だ。心配するな」
と、おときの不安を打ち消した。

暫くして、小屋の入り口が勢いよく開いた。腰布一つのおときの姿を見た宋助衛門は
「おっと、これは見ては拙い。この着物に早く着替えるがよい。その間俺は外にいる」
と言って、持ってきた衣類を丑松めがけて放り投げ、入り口を勢いよく締めて外に出ていった。

おときが着替え終わって、濡れた衣類をまとめていると、そこに今村が入って来た。丑松から助衛門の好意を聞いた今村は
「おまえ達、甘えるでない。お前の家の中は全て探索済みだ。キリシタン関係の品をどこに隠したか白状せよ。井上様がお待ちになっている」
そこまで聞いた丑松は内心ホッとしていた。じい様がやってくれたと、後ろにいるおときを振り返った。それに気がついたおときは、わざと蹲り苦しそうな身振りをした。

助衛門が小屋に戻ってきて、今村から泉郷でのことを聞いて
「今村、当方は病人を連れている。貴殿は今すぐ泉郷に戻り、井上様に『宋が二人を間もなく連れ戻すでありましょう』と復命いたせ」

先程まで激しく降っていた雨も上がり、助衛門は二人を連れて泉郷めざして歩き出した。おときの血色も戻り普通に歩けるようになっていた。助衛門は今までの優しさとは打って変わって、いつもの役人の宋助衛門の顔に戻っていた。

丑松とおときが家に着くと、到着の遅いことと、探索しても何もでてこない苛立ちから、二人を土間に座らせ
「丑松、証拠は挙がっているのだ。キリシタン関係の品はどこに隠した。神妙に白状いたせ」
と大声で怒鳴りつけた。

「お役人様に申し上げます。キリシタンでもない私達が、キリシタン関係の品を持っている筈がございません。私どもへのご探索は何かのお間違いでございましょう」
と、泉郷共有の物置小屋の前に立てかけてある竹筒を見て、安心して強気になった丑松がそこまで言うと、井上は
「生意気なことを申すな！貧乏百姓の指図は受けぬ！」
と一喝した後、助衛門に
「宋助衛門、そちはこの泉郷が毎月定例的に集まってキリシタン信仰の集会を行っていることを知っているか」
と厳しく問いただした。宋助衛門は
「井上様に申し上げます。仰せの通り、留吉を頭として毎月一回泉郷全戸主が集まって常会を開いておりますが、それは塩竈への奉仕当番と塩焚き用の薪伐採の打ち合わせであります」
ここまで言って丑松を見て
「丑松、相違ないな。返答を致せ」
と言った。この宋助衛門の言葉に、丑松は
「仰せの通りでございます」
と短いながらきっぱりと返事をした。
これを聞いた井上は、宋助衛門を無視して、その下役である今村治平に対して直接
「お前は、今日からこの泉郷の動静に一段と目を光らせ、特に丑松の動きを見張れ。その状況を月一度、福江城にいる井上まで報告を致せ。良いか。相分かったか」
言い終わると、福江城から連れてきた三人を伴い代官所へ戻っていった。

踏み絵を発端とした嵐から半年が過ぎ、泉郷には平和な日々が続いていた。過ぎたばかりの正月も平和そのものだった。そのようなある日の午後、突然、助衛門が丑松の家に現れた。丑松は塩焚き用木材の伐採当番で留守だった。おときは生まれたばかりの祥（さち）に乳を飲ませていたが、授乳を止め急いで着物の胸元をあわせ、助衛門に挨拶した。縁に腰を下ろした助衛門は
「よいよい、赤子に乳を飲ませなさい。元気に生まれて良かったな」
と、おときに声を掛け
「ところでおとき、つかぬ事を聞くがお前は対馬の出だそうだな。おっかさんは今でも健在か。おっかさんの名は何という？」
どうしてこんな事を聞くのか分からないおときが、返事をどうしたものかと迷っていると
「そんなに堅くならなくともよい。わしも名の通り対馬の出なのでな、一寸聞いてみたくなったまでよ」
助衛門の優しい問いかけに安心したおときは
「はい、私は対馬の出です。幼いとき、事情があってこの島に貰われてきたのです。私がこの家に嫁ぐ前、生み

の母という人がある日尋ねてきて知りました。今は厳原港の船主のおかみさんでキヌと申します。今は三十五か六になるでしょう」

このおときの返事を聞いた助衛門は、

「おとき、わしにその赤子を抱かせてくれ。名は何という?」

と言いながら両手を差し出した。祥を抱いた助衛門は

「祥（さち）か、よい名だ。元気に育てよ」

と言ってあやしていた。

踏み絵騒動以後、泉郷担当の今村治平は、最初は毎日のように泉郷を歩き回って、村民の動きを監視していたが、キリシタン集会的動きは全く見あたらないため、この一～二ヶ月は姿を見せていない。

宋助衛門も、他の役人も、村民の静かな生活に安心していた。

彼等は表向き完全に仏教徒をよそおって、葬儀のときは松雲寺の僧侶によって仏式により形通り行い、泉郷の墓地に埋葬し、全くキリシタンを思わせない生活をしていた。

しかし、夜になって僧侶も役人もいなくなってから、僧侶によって唱えられたお経を取り消すための祈りが留吉によって行われ、埋葬した遺体も掘り出して、キリシタン方式の祈りによる埋葬が改めて行われていた。このことは宋助衛門も今村治平も知らない。

そこで留吉と丑松は、中止していた月一度の集会を再開した。その再開の第一回目の集会で祥は、じい様役の留吉から洗礼を授けられた。洗礼に使う水はこの日の昼、留吉が泉郷の奥にある谷川の岩から湧き出る「お聖水」を汲んで持ち帰っていた。

桜も終わって新緑の季節、彦次の孫の洗礼式が五月常会のなかで執り行われていた。留吉の祈りと「お聖水」授けの洗礼式も終わり、洗礼名を「ペトロ」と名付け、丑松がその名を記した紙を柱に張ろうとした瞬間、留吉の家の入り口の戸が開く音がした。

留吉と丑松は咄嗟に洗礼用具や命名の紙を箱に入れ、留吉がその箱の上に腰掛けて、さも月例打ち合わせ頭領の姿を取った。

入ってきたのは今村治平である。今村は留吉に

「これは何のための会合か」

と尋問したが、塩焚き用薪の切りだし当番割り当ての常会であるとの説明に、それ以上追求しなかった。しかし、本来戸主だけが集まる月例常会では不自然にも彦次の嫁が同席し、その上晴れ着を着せた生まれたばかりの赤子を抱いている姿を

「何かある」

と感じていたが、この席では一言も発しなかった。

翌日、代官所では今村が宋助衛門に対し、泉郷の状況について福江城の井上禮之助への月例報告に行くことの許可を求めていた。今村は昨夜のことは宋助衛門に対しては一言も報告していない。宋助衛門は、月例報告は井上の指示事項でもあるし、加えて、今村からは異常なしの報告しか聞いていないので気軽に許可を与えた。

それから三日後の朝、今村は彦次の家に行き、嫁に対して

「戸主のみが集まる月例常会に、なぜお前が赤子に晴れ着を着せて出席していたのか」

を厳しく追及した。咄嗟のことで嫁も答えに窮している。傍らで彦次が

「私が皆さんに赤子を見せたく連れてゆきました」

と言ったが、今村は

「お前は黙っていろ。嫁に聞いているんだ」

と一喝した。嫁は

「はい、義父が申し上げたとおりです」

と小声で返事をした。その時、嫁の視線が鴨居の上の棚に祭ってある松雲寺のお札を眺めている事に不審を感じた今村は、つかつかと棚のところに行き、松雲寺のお札に手を伸ばした。お札の後ろに隠すように一枚の紙が折り畳んで置いてある。今村がそれに手を伸ばして彦次を睨みながらその紙を開いた。

「彦次、嫁女、二人に聞くが、このペトロとは何の事か。キリシタンにこのような名前があることは知っているが」

とその紙を彦次の目の前に突きだした。彦次は覚悟を決めたのか

「今村様、その紙は私どもが以前バテレン様からお聞きしたキリシタン聖人の名前で、この赤子がそのようなお方にあやかるように、とその名を紙に書いて毎日拝んでいたのです」

「ではお前はキリシタンを捨てていないのだな」

「キリシタンではありません、が、お聞きしたそのお方があまりにも立派な方なので、是非あやかりたいと」

彦次の言葉をここで遮った今村は

「彦次、嫁女、代官所まで同道致せ。そこで詳しく聞こう」

と言って、彦次、嫁女と赤子を代官所に連行した。それもわざわざ人目に触れるような道を通り、今村は留吉、丑松の家の前ではわざと人目につくように彦次と嫁女をこづき、これ見よがしの歩き方をした。

翌日、彦次と彦次女房おうめの二人は、今村と他の二人の役人によって福江城に連行され、彦次の息子夫婦は何時でも福江城に連行できるように昨日に引き続き代官

所に留め置かれた。赤子は丑松の家で預かった。

留吉、丑松の両名も代官所に呼び出され、先の泉郷の月例常会に、何の理由で彦次の嫁と生まれたばかりの赤子が、晴れ着を着て同席していたかを宋助衛門から尋問されていた。

留吉も丑松も

「彦次の初孫なので泉郷の皆さんに是非お見せしたいと言う彦次の願いもあって同席を許したものでございます」

と主張し続けたので宋助衛門は

「初孫ではそうであろうの、お互いにな」

と言って二人を帰宅させた。

翌日、福江城から井上禮之助が三人の部下と今村を従え、島にやって来た。彦次夫妻は福江城の牢に入れられている。昨夜遅くまで行われた尋問にも

「キリシタンではございません」

の一点張りで、井上達にとっては一向に埒が空かない。彦次の息子夫婦は今日も代官所に留め置かれている。

井上達が今村を加えて四人で彦次の家を徹底的に捜査した。今村が「ペトロ」と書かれている命名の紙が出てきた場所に祭ってある松雲寺のお札を手にしたとき、手触りからお札の中に何か入っていると感じ、開いてみると小さな十字架が出てきた。

「井上様、ありました！クルスが出てきました！」

この今村の声に井上ほか役人全員が今村の所に駆け寄った。

祝出版
昭和を生きた新選組
滝澤中（あたる）
―幕末を生き残り日本の近代化に捧げた新選組の志士がいた―

遥かなるカメルーン（二）

太田精一

（四）

引越後一ヶ月経ったある日、家の周りで遊んでいた摩耶と登が突然いなくなった。夕方もすでに六時を過ぎている。

「三、四才の男の子と女の子を見かけませんでしたか」

桂木夫妻は、近所の人びとに尋ね回った。

「二人で手を繋いで、向こうのほうに歩いて行ったよ」

空港に向かう道路の方角を指差して、カメルーンの少年が言った。

夕陽が落ち、闇が迫っている。カメルーンの夜は、漆黒の世界となる。月のない夜は星明りだけが頼りだ。

桂木夫妻は、次第に不安になった。二時間ばかり探し回りすでに夜の八時近くになっていた。

（誘拐されたのではないか）

四才の娘の摩耶と三才の息子の登の助けを求める顔が桂木の脳裏を掠めた。

（いや、そんなことはないだろう。誘拐なら身代金要求の電話か何かあるはずだ）

子供たちがいなくなったことを聞きつけた近所のフランス人やカメルーン人の家族が、家の周りの道路や草叢の中を探している。桂木夫妻は感謝の気持ちで胸が熱くなった。暫くして、二人のカメルーンの少年が子供達を空港に向う道路脇で見付け桂木の家に連れて来た。

「この女の子と男の子は、お宅の子でしょう。空港へ行く広い道を二人で手を繋いで歩いていました。名前を聞いても分かりませんでしたが、この辺に最近引越してきた東洋人がいると聞きましたので、きっとその家の子だろうと思って連れてきました。家に帰る道が分からなくなったようです」

「有難う。本当に有難う。どこへ行ったのかずいぶん心配していました。助かりました。何んとお礼を言っていい

やら言葉もありません。」

桂木は、感激の余り思わず二人の手を握り締めていた。直ぐに礼金を用意し、二人に手渡そうとした。だが、二人はお金を受け取ろうとしない。

そこで、日本から携行したお土産用の扇子を感謝の印に上げた。すると若者たちは、

「有難うございます。迷子の子供を連れて来ただけなのに、お礼を頂くなんて……」

と言って、爽やかな微笑を残し立去った。

桂木は、子供たちが無事戻ってきた事を喜ぶと同時にカメルーンの人の暖たかい心の襞に触れ、この国への愛着が次第に涌いてきた。

（五）

新居にも慣れ、桂木のドアラでの駐在生活も軌道に乗ってきた。そこで彼は、摩耶と登を近くの公立の幼稚園に入れることにした。

当時のカメルーンでは、子弟を幼稚園に入れることのできるのは富裕層に限られていた。公立の幼稚園といえども一般庶民にとっては大きな負担なのだ。そのためか薄汚れた服装の園児は、ほとんどいない。

桂木は、摩耶と登をできるだけ早く現地の生活に溶け込ませたかった。異なる文化を吸収し、たくましく生きる人間に育てたかった。そのため、あえて普通の公立幼稚園に入れることにした。

入園手続は簡単である。入園申請書を提出し、園長先生と面接しただけで翌日から入園が許可された。

入園後、桂木の日常は急に慌しくなった。職場と幼稚園の送り迎えに追われる毎日である。妻の由美は、運転ができない。その上運転手も雇っていなかったため、幼稚園の送り迎えは桂木の仕事となってしまったのだ。

桂木は、朝七時半頃に家を出て、幼稚園に子供を預けそのまま事務所に出勤する。八時から十二時まで勤務し途中幼稚園に立寄り子供たちを引き取ってから帰宅する。家族揃って昼食をとり、ひと眠りして、午後二時半に再び子供達を幼稚園に預け出勤する。五時半まで事務所で執務し、途中また幼稚園に立寄り、子供たちを引取ってから帰宅すると言う毎日であった。

入園後一週間ほどしたある日、突然摩耶が幼稚園に行くのは嫌だと言い出した。

「お父さん、もうわたし幼稚園に行きたくない」

「どうして、幼稚園は嫌いか。カメルーンの子供たちとお話しができないから行きたくないの」

桂木は、言葉の全く分からない子供たちの中にぽつんと淋しげに取り残されている姉と弟を想像して目頭が熱くなった。

「お話しもできないけどそれだけじゃないの。カメルーンの子がいっぱい寄ってきて、私の髪を引張っていじめるの。それでシノワ、シノワって言うんだもの」

シノワと言うのは、フランス語で中国人のことだ。カメルーンの子供たちが囃すように言った場合、悔蔑の意味が含まれている。

「ノン・シノワ（中国人ではない）、ジャポネ（日本人だ）って言ってやったらいいじゃないか」

そうは言ったものの、桂木は心配になって、先生に相談した。

「先生、私の子供たちがいじめられるから幼稚園は嫌だと言っているのですが、それは本当なのでしょうか」

「私の見る限り、いじめられているわけではありません。この幼稚園には、カメルーン人以外の子供たちもいますが、東アジアの人はいませんので珍しいのでしょう。特に黒くて真直ぐな長い髪の子供は、この近くには見掛けないので、触ってみたかったのだと思います。多分　触らせて　と言って触ったのでしょうが、摩耶には分からなかったので〝引張られていじめられた〟と受け取ったのだと思います」

先生の説明を聞いて桂木はなんとなくその場の光景を想像できた。だが、嫌がる摩耶を無理に幼稚園に行かせることは、可愛想な気がした。だからと言って幼稚園にもやらず二人だけで過させるわけにはいかなかった。

桂木は二人の子供を幼稚園に入れてフランス語に馴染ませ、小学校に入ったら現地の子供たちと同レベルで話せるようにさせたかった。そうしなければ、他人の行為をまた誤解して受け止めることになりかねない。その誤解がやがては不信感に変り、カメルーン人との間に深い溝ができてしまうのではないかと心配した。

（六）

桂木夫妻は思い悩み、秘書のマダム・ベルトランに相談した。

「子供達を近くの公立幼稚園に入れたのですが、東洋人は珍しいのか、シノワ、シノワと囃されて、髪を引張られ、幼稚園に行きたくないと言うのです。でも、今、幼稚園に入れなければ学校に行った時に困ると思うので、何とか行かせたいのですが何か良い方法はありませんか」

「それなら、幼稚園を変えてみたらどうでしょう。現地の公立幼稚園では、ほとんどカメルーン人ばかりですから、どうしても外国人は目立ちます。まして東洋人の子供はほとんど見たことはないので珍しいのでしょう。黒くて固く縮れた自分たちの髪と色は同じでもどうして東洋人の髪は、柔らかく真直ぐなのか、触って確かめたかったのだと思います」

「どこかいい幼稚園はありますか。あれば紹介してください」

桂木は、ベルトランに尋ねた。

「それならドミニック・サビオと言うフランス系の幼稚園があります。カソリック系の私立幼稚園で授業料はちょっと高いのですが、先生の質もいいし設備も整っています。そこに私の子供も入れております」

ドミニック・サビオは幼稚園から小学校、リセ（中・高等学校）まで一貫教育となっていて、十二年間でバカロレア（大学入学資格）を取得するところまで教育している。フランス政府公認の教育機関で、学力のレベルも高い。桂木は現地の人と一緒の教育をさせるつもりであったが、将来の進学を考えれば彼女の意思に従うべきだと考え直した。

「もともとドアラにいるフランス人の子供たちを教育するために創設されたのですけれど他の国の子供たちも受け入れるようになり、今ではドイツ、イタリア、ギリシャ、レバノンなどの子供たちも大勢います。全校生徒の三分の一くらいはカメルーン人で、知識水準の高い家庭ではそこに入れたがります。躾も厳しく、いろいろな国の子供たちがいて、黒くて長い髪の子供も珍しくありませんから髪を引張られることもないと思います」

「フランス語の分からない子供には何か特別な教育プログラムでもあるのですか」

「特別なカリキュラムはないようですが、生徒の中から選ばれた子供を世話掛りとして付けて呉れます。ある程度フランス語が話せるようになるまで、その子がいつもそばにいて呉れます」

マダム・ベルトランの説明を聞くにつれ、桂木夫妻はドミニック・サビオが子供たちにとって最もふさわしい幼稚園であると思えてきた。

「そのドミニック・サビオに入園できるように是非お力添えください」

「はい、分かりました。ただ定員枠以上は入れていないようなので、欠員があるかどうか調べてみます。私の子供もそこに入れていて、園長先生も知っていますので、早速聞いてみます」

一ヶ月ほどして入園の許可が下りた。

その頃から、日本とカメルーンの貿易関係は急速に進展した。桂木の仕事もますます多忙となり、幼稚園の送り迎えも遅れがちとなった。そのため、先生からもっと早く迎えに来るようにしばしば注意を受けた。

最初のうちは、先生も桂木が迎えに来るまで、子供たちと一緒に残っていた。だが、遅刻が度重なるにつれ、子供たちを守衛に託し、帰宅するようになっていた。

薄暮の中を姉と弟が二人だけで父親の迎えを待って、ぽつんと幼稚園のベンチに腰掛けている姿は、心細げで桂木の胸を痛めた。

「遅くなってゴメンね。二人でおとなしく待っていたかい。日が暮れて怖かっただろう。これからは遅れないよ

うにするからね」

「ううん、怖くなかったけど淋しかった。皆んな帰ってしまったんだもの」

摩耶は、泣きそうな声で言った。二人は健気にも夕闇の迫る心細さにじっと耐えて父の迎えを待っていたのだ。

桂木は、二人を抱き抱え、車に乗せ家路を急いだ。

それ以来桂木は、遅れそうになる時や出張の時などには、マダム・ベルトランに送り迎えを頼むことにした。

（七）

一九七三年の新年を迎えた。桂木にとって赴任後初めての正月だ。正月と言っても元日しか休みはない。熱帯のカメルーンでは、季節感が乏しく、家の周りの風景も変らない。

桂木は、朝寝を楽しみ、ソファに腰掛けて新聞を読んでいた。すると遠くから太鼓や空缶を叩くような音がし、次第にその音が近ずき、家の前から聞こえる。

玄関のドアーを明け、外に出てみると、丁度日本のお神楽のように仮面をつけた少年たちが太鼓と空缶の音に合わせ踊っている。少年たちは踊り終るとフランス語で「ボン・アンネ（新年おめでとう）」

と言って手を差し出し祝儀を求めた。一年の無病息災を祈ってお祓いをしたその報酬を求めているのだ。

桂木は、リーダー格の少年に

「メルシー」

と言って祝儀を渡した。少年はニコニコしてそれを受け取ると、再び太鼓や空缶を打ち鳴らし、一踊りして立ち去った。

各戸毎に門付けをして新年を祝う風景は日本でも戦前にはよく見られた。桂木は、子供の頃の正月の風物詩であったお神楽と重ね合わせ少年たちの一行を見送った。

ドミニック・サビオに子供たちが入園し、三ヶ月が過ぎた。摩耶も登もなんとかフランス語が分かるようになっていた。

「シノワはシノワ。ジャポネもシノワ」

登が声を張り上げて言っている。ドミニック・サビオでも「シノワ、シノワ」と言われているようだ。登は、父親に言われた通り「ノン・ジャポネ」と答えたに違いない。すると

「シノワ、エ、シノワ。ジャポネ、オッスィ、シノワ。（中国人は中国人、日本人も中国人）」

という答えが返ってきたのであろう。

カメルーンの子供たちから見れば、中国人も日本人も変わりはない。モンゴル系の人種を総称して中国人と呼んでいるのだ。

それは、日本人にとってカメルーン人もナイジェリア人もガボン人も区別できないと同じである。

桂木は、カメルーンからみて、日本は地理的にも文化的にも遠い国であることを実感した。

子供たちのフランス語が上達するにつれ、友だちも増えてきた。休日には、フランス人の男の子フランキーとカメルーン人の女の子コンフォートがパンツ一枚の姿でいつも遊びに来る。鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたり、どこの国の子供も遊びは共通である。

「お父さん、お父さん、来て蛇がいるよ」

登とフランキーがベッドの上で飛び跳ねて遊んでいる時であった。

桂木が駆けつけてみるとベッドの下から緑色の細い蛇が首を出している。七〇センチほどの小さな蛇だ。桂木は箒木を由美に持って来させ、子供たちには、じっとしているように注意した。

「戸口を開けて」

由美に戸口を開けさせた桂木は箒木を持って蛇をベッドの下から追い出し、戸口の方に誘導した。すると蛇は、明るい戸口に向かってスルスルと動き出し外の草叢の中に消えて行った。

翌日、事務所のピエール・ブーリーにその話をした。

「誰れも噛まれなくて良かったですね。それは多分グリーンスネークという奴ですよ。猛毒を持った蛇です。普通体長は五〇センチから一メートルぐらいまでで、あまり大きくはなりません。おとなしい蛇だからこちらから攻撃しなければまず噛みつくことはありません。ただ、草と見分けがつかないので、うっかり草叢で踏んだりしたら大変、五分と命が持たないと言われています」

桂木は、それを聞いて思わず鳥肌が立ち寒気がした。

(ここでは、常に危険と背中合わせに生きている。ちょっとした運命のいたずらが生死を分けるのだ)

桂木は、胸を撫で下ろした。

(八)

乾季も終わる四月頃には、桂木もカメルーンの生活にすっかり慣れ、多くの知人もできた。そのほとんどはヨーロッパ人かカメルーン人である。

ドアラにいる東アジア人は、当時一〇〇人にも満たなかった。日本人は、桂木の家族と日本の漁業会社の駐在員二名だけである。その他の東アジア人は、香港の琺瑯製品メーカー、エマエリー・ヌーベル・アフリック社の中国人七、八家族とベトナムやカンボジア料理店を営む数家族が在住しているに過ぎない。

桂木の家族とは、同じ東洋人であることから親しみが湧き言葉を交すようになった。特に琺瑯製品メーカーの人びととは家族ぐるみの交際が始まった。

ジェトロ・ドアラ事務所も、桂木で三代目、すでに七年近く続いていた。

カメルーン政府はもとより、関係機関にも次第に知られるようになった。日本の大使館、領事館、商社もなかったため、現地では日本を代表する出先機関として受け止められていた。

この頃になると日本あるいは、ヨーロッパにある日系企業からの来客が急増し、出迎えのため桂木は頻繁に空港を訪れた。

入国管理官や税関吏と親しくなり、空港内は、ほとんどどこでもフリーパスとなった。日本から要人を迎える場合など飛行機の到着したタラップの脇で出迎えすることも少なくなかった。

「ジェトロ、ジェトロ」

ビジネスマン風の東洋人が空港から出て来るとタクシーの運転手が群がって来る。ドアラを訪れる東洋人は皆ジェトロに行くと思っているようだ。

「タクシーに乗ったらここに連れて来られました。フランス語が分からないので、どぎまぎしていたらここで下ろされてしまったのです」

突然日本から来客があった。商社マン風の男が戸口に立っている。

「運転手は、どこへ行ったのですか。お金はいくら払いましたか」

「まだ、下の一階の入口にいます。二千CFAフラン払いました」

桂木は、一階のビルの入口まで下りて行き、運転手に言った。

「お前またやったな。この前日本人からそんな高く吹っかけるなと注意したばかりじゃないか」

「だって、払って呉れたからいいじゃない。俺の運転が気に入ったから払ったのさ」

運転手は、悪びれもせず言ってのけた。

タクシーにはメーターはない。ある程度の料金の基準はあるが、値段は交渉次第である。空港から市内までは十キロ足らず、通常は千CFAフラン。当時の日本円にして千二百円程度だ。外国人とみるとそれを倍くらいに吹っかけるのが通例である。

「今度やったら、お前のタクシーは使わないからな」

「ダ・コール、ダ・コール」(わかった、わかった)

運転手は、ニヤニヤ笑って分ったような振りをして帰って行った。罪悪感など感じられない。恐らくまた土地不案内の外国人に対しては、同じ手口で法外な値段を要求するに違いない。それがアフリカだ。

買物についても同様だ。カメルーン人のマーケットで買物をする場合、言い値で買う必要は全くない。

(九)

五月の暑い日、桂木は妻の由美と二人で、十数軒のト

タン葺きの小屋の立並ぶ土産物屋横丁を訪れた。

「高い、高い」「高い、高い」

褐色の露天商の口唇から日本語らしい響きが聞えてきた。

その露天商は、桂木夫妻を手招きして、台の上に並べてある木彫の彫刻、象牙細工、布製のテーブルクロスや壁掛け、豹、鰐、駄鳥など野性動物の皮で造った袋物類を指差して盛んに〝高い、高い〟と言っている。

〝高い、高い〟という言葉を〝安い、安い〟と取り違えているようだ。ドアラを漁業基地としてエビ漁を行っていた漁船員たちが、この土産物屋で買物をする時によく使った言葉を逆の意味に取ってしまったに違いない。

「セ、コンビアン」（これいくら）

桂木は木彫りの面を取り上げて露天商に値段を聞いてみた。

「千五百CFAフラン。高い、高い」

露天商は、いかにも買得品であるかのように手の込んだ彫刻であることを強調している。

「トレ・シェール」

トレ・シェールとは、フランス語で高過ぎるという意味だ。ドアラでの買物は、まずこの一言から始まる。

「ノン・シェール」（高くない）

そう言って、露天商は、しばらく考え込んだ。

「では、いくらなら買う」

と、露天商は、切り込んできた。

「まあ、五百CFAフランだな」

桂木が三分の一の値段を呈示するとすかさず露天商は答えた。

「旦那、それはあまりにもひどいじゃないですかい。この彫刻は、職人が十日間もかけて彫ったんですぜ。特別に千二百CFAフランに安くしとくからどうですか」

露天商は、桂木が買う気があると見て取った。

「いや、五百CFAフランがいいとこだ。それ以上で買うつもりはない。確かに手彫りではあるが、新しく観光土産用に彫ったもので、作りも雑だ。二日もあれば一つ作ることができるだろう」

桂木は、そう言ってその場を立去ろうとした。すると「ちょっと待って下さいよ旦那、そんな気の短いことはなしにしましょう。では、どうです千CFAフランにしておきます」

「だめだ五百CFAフランしか出せないね」

「それは、いくら何でも安すぎまさあ。本当にこの面を買う気があるんですか。あるならもうちょっとはずんでくださいよ」

そんなやりとりがえんえんと続き、品物を通して売手と買手がお互いに会話を楽しんでいるようだ。アフリカの市場（マーケット）は、品物の交換を通じてコミュニケーションを行う重要な場所なのだ。だから、黙って言い値で買ってすぐ帰ってしまう客は、単なるお客さんであって信頼できる本当の客ではない。

桂木もドアラに住んで半年以上になり、大体この面がいくら位の値段のものか知っていた。

「どうしても欲しいような面ではないが、七百CFAフランなら買ってもいいよ」

露天商は、せめて八百CFAフランは出して欲しいと主張したが、結局七百CFAフランで結着した。

「旦那にはかなわないなあ。ドアラに長く住んでいるんですかい。七百CFAフランで買ったなんて、他の人に言わないでくださいよ」

そう言って露天商は片眼をつぶると木彫りの面を新聞紙に包んで桂木に渡した。

桂木にとって、そこで百CFAフランや二百CFAフラン違ったところでどうでも良いことであった。ただ、わずかばかりの品物を売買するにも大げさな身振り手振りを交えて、大声で駆け引きをする市場（マーケット）の熱い雰囲気を体感することによって、人間的な触れ合いを求めていたのだ。ここでは、品物を介した言葉のやり取りは、売り手と買い手の品物に対する思いを高める役割を果たしている。売り手は、その品物との決別を自分自身に納得させ、買手は、その品物を得た喜びを実感する。だから、ほとんど言葉を交さないで取り引きすることは、礼儀に反し、品物にとっても不幸だと考えられているのだ。

物の豊富な日本では、すでに忘れ去られてしまった人間味あふれる取引の原形がそこにあった。

桂木は、面を受け取りながら〝高い〟という日本語の意味を伝え、日本人に売る場合には、〝安い、安い〟と言ったほうがいいとアドバイスした。

数日後、桂木は、日本からの客を連れてその露天商を訪ねてみた。彼は〝安い〟という言葉を忘れてしまったのか。それとも〝安い〟と言う言葉の持つ意味の中に、〝安物〟のイメージが隠されていると感じたのか、桂木たちの顔を見るとまた〝高い、高い〟と声を掛けてきた。

「高いと言うのは。シェールという意味なんだよ。始めからシェールと言っては売れないだろう」

桂木がそう説明すると彼は

「ノン高い、ノン高い」

と言ってあくまでも〝高い〟と言う言葉にこだわっていた。

それ以来桂木一家は、その露天商を〝高い、高い屋〟と呼ぶことにした。

（つづく）

体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（十三）

千坂精一

特攻まえの総攻撃

馬場助治飛長が、瀕死の重傷を負った十月二十四日のレイテ沖航空戦は、まさに凄絶な戦闘であった。

私の手許にある、若い搭乗員たちが折りに触れて軍歌や流行歌を書いたあの古びた帳面のなかで、署名のある三十人のうちこの日の戦闘で六人が戦死してしまった。

その日のことを、もういちど振り返ってみよう。

九九式艦爆隊のK一〇二、一〇三両飛行隊が所属している七〇一空は、二航艦麾下の主力部隊である。

台湾高雄（カオシュン）基地に司令部をおいているその二航艦が、一航艦と協同してすでに発令されている捷一号作戦に当たるよう命ぜられたのは、十月二十二日であった。

福留長官は、全飛行隊にフィリピン進出を下命した。

アメリカ軍が、二十日未明レイテ湾に上陸を開始したことを知った連合艦隊司令部は、二十五日に水上部隊をレイテ湾に突入させることにして、そのまえに航空部隊に総攻撃をかけさせることにしたのである。

福留長官は、機動部隊を撃滅するまでには至らずとも、反転させるぐらいの損害は与えられると確信していた。

この作戦で、七〇一空の指揮下に入ったK三、五の彗星艦爆隊を含めた六〇機は、台中を発進してフィリピン（クディナオ）クラーク基地群のマバラカット東飛行場に向かったが、短時間に多数機が集中したため空中混雑になり、そのうえ飛行場が数箇所隣接していて判別がつかず、着陸するのに異常接近（ニアミス）して衝突事故まで起きてしまった。

マニラに着いた福留長官を待っていたのは、一航艦司令長官大西瀧治郎中将がすでに麾下戦闘隊（零戦）をもって実施していた特攻戦法への協力であった。

福留を迎えた大西は、司令部二階の長官個室に案内すると、海兵同期で航空艦隊司令長官同士の気易さから、

「この捗々しくない戦況を打開して、戦局を挽回する方法は、航空部隊の特別攻撃以外にない。一航艦は昨日実施に入った。二航艦も参加してくれれば士気が揚がる」

そう単刀直入に申し入れた。

だが、福留は正攻法の大編隊による爆撃、雷撃戦法に固執していたので、大西の勧誘を受け入れなかった。

開戦まで連合艦隊参謀長だった福留は、山本長官が生還余地のない作戦は断じて許さなかったことが習い性となっていたので、正攻法を枉（ま）げようとはしなかった。

そして、翌二十三日に航空作戦が開始された。

この日一航艦からは、二十一日の特攻戦法開始で出撃したものの、当日も翌日も悪天候に阻まれ、目的を達せず帰投していた敷島、朝日隊らが三度目の出撃をした。

二航艦も、福留長官が七〇一空に出撃を下命した。

〇六三〇、K一〇二、一〇三飛行隊の九九式艦爆三八機が、昨日ばらばらに着陸した各飛行場から一斉に飛び立ち、クラーク西飛行場上空で集合すると、飛行長江間保少佐指揮のもとに編隊を組み、攻撃目標をマニラ東方二五〇浬（四六三km）針路一一〇度で進撃を開始した。

しかし、二十日以来その動静を把握していないための索敵行も、洋上の天候不良の雲中飛行でままならず、そのうえ途中から猛烈な雨に見舞われて闇に包まれた。

編隊飛行の危険を感じた江間隊長は、帰投を命じた。

こうして初日の出撃は失敗に終わったが、一航艦の特攻もまた、大和隊の爆装零戦一機がスルアン沖の艦船に突入したと思われる未確認情報のほか全機帰投していた。

特攻第一号は、二十一日に出撃してセブ島沖の艦船に突入したと思われる大和隊長のS二〇一分隊士久納好孚中尉であったが、二号もまた大和隊員であった。

ついでながら、久納好孚中尉は愛知県生まれで法政大学出身の満二十三歳であったが、二号になった香川県出身の佐藤馨上飛曹は、同じ二十三歳ながら生粋の軍人で、昭和十三年満十七歳で佐世保海兵団に入団、戦艦霧島乗艦を経て横須賀航空隊整備兵になったのち、昭和十七年七月に飛行科に転属した丙飛十二期生であった。

七〇一空の主力は、開戦二年前に採用された九九式艦爆で、真珠湾、珊瑚海、ミッドウェー、ソロモンと活躍をつづけてきていたが、固定脚だったためにいまでは引込脚の彗星にとって替わられ、九九棺桶といわれていた。

江間飛行長は、戦闘能力を上げるために新鋭機の彗星に替えてくれるよう強硬に申し入れたが、ミッドウェー以後に採用されたばかりで生産が間に合わないという理由で、申し訳程度にしか補充してくれなかった。

（性能の異なる機種を混淆しては、同一行動が難しい）

歴戦の指揮官はそう判断して、彗星の受領を諦めた。

そのかわり、部下思いの江間飛行長は、直掩隊長に、「棺桶といわれる旧式艦爆で敵の防衛網突破は至難だ。攻撃の成否は掩護隊如何で決まる。よろしく頼む」

そう組って、旧式機搭乗の部下たちの護衛を懇願した。
その夜、二航艦は九七式飛行艇三機を索敵に出した。
明後二十五日の水上部隊レイテ突入を援護するため、明日は是非とも索敵して殲滅しなければならなかった。
その願いが通じて、〇〇五〇待望の第一報が入った。
「マニラ東方に電探を探知する」
大規模な機動部隊群のようであった。
福留長官は、二航艦の総力を挙げての出撃を決意した。
江間飛行長は、昼間の集団攻撃は敵防衛網の餌食になる自殺行為だと考えて、払暁か薄暮の攻撃を主張したが、獲物を取り逃がす虞があると受け入れられなかった。
江間飛行長は、今回の出撃が最期と覚悟を決めた。
この日の出撃は、小林實少佐卒いる制空隊の零戦、紫電が先発して敵機動部隊防衛の戦闘機群を掃討撃破する。
つづいて、鴛淵孝大尉卒いる直掩零戦隊に護られて江間保少佐指揮の九九艦爆隊三八機が出撃し、目標に到達して急降下爆撃で空母群を屠る作戦が立てられた。
艦爆隊の編制は、昨日とおなじであった。
第一中隊長七〇一空飛行長江間保少佐。
第二中隊長K一〇二飛行隊長松井清大尉。
第三中隊長K一〇二分隊長深堀直治大尉。
第四中隊長K一〇三飛行隊長柏井宏大尉。
第五中隊長K一〇二分隊長宮崎富男大尉。
七六名の攻撃隊員は、二五番を抱いた三八機に分乗して、〇七〇〇マバラカット東飛行場から勇躍発進した。
だが、この司令部の机上構想は最初から躓いた。
制空隊七五機、直掩隊五一機、攻撃本隊三八機の大部隊が、統一行動をとることは所詮至難の業であった。
各隊指揮官は、自隊の纏めが精一杯で、他隊と連繋をとりながら整然と目標に向かう余裕はまったくなかった。
攻撃隊は針路を東方に向けたが、相変わらずの天候不良なので高度三五〇〇メートルの断雲の上に出ると、さらに四〇〇〇メートルまで上昇して酸素面をつけた。
飛行服や帽子、手袋などは夏物なので、寒さに震えた。
同時発進した直掩隊は、途中鴛淵指揮官機の発動機不調で編隊が遅れがちになり心許なかったが、海上へ出たころにようやく追い付いてきたのでほっとした。
零戦が護ってくれなければ、二五番を抱いた身重で自由のきかぬ艦爆はグラマン戦闘機の餌食になってしまう。
あと一時間足らずで目標の敵機動部隊上空に達すると思われた〇八〇〇ごろ、突然雲間からグラマン戦闘機一〇〇機が獲物を狙う鷹のように奇襲攻撃をかけてきた。
大部隊の行動は、電波探知機で捕捉されていたのだ。
直掩隊は、本隊を先導する隊形をとって前方にいて、まだ護衛態勢に入らぬその間隙を衝かれたのである。
あっという間の急襲で、編隊を乱した江間隊は、つぎつぎに被弾し、あちこちで黒煙を噴き出した。
隊員たちは、常日頃から、

「爆弾を捨てるのは艦爆乗りの恥」
とみずからを戒めているので、この緊急事態においても二五番を離さず旋回銃で必死に応戦したが、速力に優るグラマンは、一撃すると素早く急上昇して、態勢を立て直すとまた突っ込んでくる波状攻撃をかけてきた。
艦爆は、格闘戦には向いていない。
やむなく、二五番を投下して避退運動に入り、追いつ追われつ彼我入り乱れての壮絶な空中戦が展開された。
だが、性能に劣る艦爆は、グラマンの好餌であった。
断雲に逃げ隠れして、辛うじてマバラカット東飛行場に帰投したが、九機はついに還らなかった。
まえに述べたが、この戦闘で江間隊長機は燃料容器を打ち貫かれて火を噴き、錐揉み墜落するのを必死に回復させて帰投したが、車輪破損で着陸と同時に転覆した。
整備兵たちが機体を引き起こしたとき、操縦席と偵察席とのあいだに二〇ミリ機銃の不発弾が刺さっていた。
また、点検に立ち会った整備分隊長は、
「理論上は飛行不能であるはずなのに、なぜ錐揉み状態がなおったのか、まったく理解出来ない。不思議だ」
そう言って首を傾げ、腕組みして考え込んでしまった。
歴戦の勇士は運を抱き込むし、考え及ばぬ難事も熟す。
さきに触れた右足貫通銃創で踏み棒操作が出来なくなり、下げ翼も故障したままの状態で見事田圃に不時着させた馬場助治飛長の場合もまた、熟練の放れ業であった。
九機未帰還のうちには馬場飛長機も入っていたが、後日生存が判明したので、戦死者は八機一六名であった。
もっとも惨澹だったのは、七機中六機未帰還になったK一〇二飛行隊長松井清大尉指揮の第二中隊であった。
生還したのは第二小隊二番機で、操縦小林正三一飛曹、偵察肝付良志一飛曹の組であった。肝付一飛曹は旋回銃でグラマン戦闘機一機を撃墜していた。
未帰還六機は、

中隊長機	(操)	松井大　尉	(偵) 高橋飛曹長
二番機	(操)	黒木飛　長	(偵) 石松上飛曹
三番機	(操)	久道一飛曹	(偵) 大石一飛曹
第二小隊	(操)	北畠上飛曹	(偵) 佐野中　尉
第三小隊	(操)	飯田中　尉	(偵) 橋口上飛曹

それに、被弾重傷で不時着し、後日生存が確認された、

二番機	(操)	馬場飛　長	(偵) 熊田一飛曹

であった。
あとの三機は、江間指揮官直率の第一中隊から二機、

第一小隊	(操)	影山上飛曹	(偵) 淡井上飛曹
第二小隊	(操)	後藤飛　長	(偵) 高橋一飛曹

K一〇三飛行隊長柏井宏大尉指揮の第四中隊から一機、

第三小隊	(操)	續木一飛曹	(偵) 土屋飛曹長

であった。
この戦死者一六名のうち、五名が雑記帳に書いている。

○黒木健美飛長、石松俊彦上飛曹組
途中グラマンに邀撃され、交戦自爆。

湖上の尺八

一、名残の月の影淡く
今日も戦の夜は明けて
風肌寒き大湖上
遠く大砲の音を聞く

（二～四番は省略する）

飛長　黒木健美

一九年七月十八日　於美幌空

艦爆隊の唄

一、妖雲低く乱れ飛び
狂風飄々吹き荒ぶ
嵐の空に雄々しくも
降魔の翼蔽たける
あゝ武き哉艦爆隊

（二～七番は省略する）

昭和十九年七月二十日

爆偵　石松上飛曹

○久道常助一飛曹、大石英一一飛曹組。
途中グラマンに邀撃され、交戦自爆。

青い背広で

一、青い背広で心もかるく
町へ彼の娘と行かうぢゃないか
紅い椿で瞳も濡れる
若い僕等の生命の春を

（二～四番は省略する）

一飛曹　久道常助

久道常助一飛曹は、髯の濃い古武士を彷彿させる人だったという。

大石英一一飛曹は、雑記帳に書いていないが、静岡県出身の好男子だったそうである。

○北畠一雄上飛曹、佐野禮司中尉組。
途中グラマンに邀撃され、交戦自爆。

夜霧の馬車

一、行けなげきの馬車
赤い花散る港の夕
旅を行く我を送る
鐘の音さらばよ
いとしあの町君故に
幾度ふりかへる

（二～三番は省略する）

昭和十九年八月二十七日

北畠上飛曹

北畠一雄上飛曹は、青森県出身の温和な人で、いつもにこにこ顔だったという。

佐野禮司中尉は、雑記帳に書いていない。

○後藤利三郎飛長、高橋秀一一飛曹組。
途中グラマンに邀撃され、交戦自爆。

緑の處女地

一、花の姿の白雪の
清い心を捧げつゝ
愛の小鳩よたくましく
呼べよ南の夜明けていく

（二～三番は省略する）

故郷の空

一、夕空晴れて秋風吹く
月影落ちて鈴虫泣く
想へば遠く故郷の空
あゝ我が父母如何に在はす
二、澄み行く水に秋萩たれ
玉なす露はすゝきにみつ
想へば似たり故郷の野辺
あゝ我が兄弟誰と遊ぶ

昭和十九年八月二七日

高橋一飛曹

後藤利三郎飛長は、雑記帳に書いていない。

以上五名のほか、この日マルコット基地から索敵攻撃に発進したK一〇二緒方徹中尉指揮の彗星五機中の一機、

○山下洸雄一飛曹、黒部信行一飛曹組が、『未帰還』と記録されている。

南京の花賣娘

一、緑の光よたそがれよ
呼べば来る花籠さげて
純な瞳よ南京娘
花は如何嬉しい花たのしい花
ゆれてほのかに
涙ぐむ様な花の命よ

（二～三番は省略する）

一飛曹　黒部

昭和一九年七月十六日

於美幌基地

山下洸雄一飛曹は、雑記帳に書いていない。

この日江間隊が、途中邀撃されて九機もの損害を蒙ったにも拘らず、二航艦司令部はなおも強気だった。

それは、水上部隊のレイテ湾突入が明日に迫っているのに、まだ敵機動部隊を掃蕩していない焦りであった。

そのため、一四〇〇すぎに三々五々帰投したばかりの七〇一空に対して、再出撃を命じる暴挙を冒した。

指揮官江間飛行長は、打ち貫かれた容器から噴出した燃料を多量に吸っていて絶対安静だったため、後任指揮官にK一〇二分隊長深堀直治大尉を命じた。

被弾破損の四機を除く二五機が慌ただしく整備された。

鴛淵孝大尉の零戦隊二二機が、引き続き直掩になった。

第二次攻撃隊及び直掩隊は、整備後薄暮に近い時刻にマバラカット東とマルコットから逐次発進して、マニラ東方海上の敵機動部隊攻撃に向かったが、雲量一〇の厚い雲に行く手を阻まれ、その雲海を縫うようにして進んだが、視界不良になったため攻撃を断念して帰投した。

こうして、福留長官が命じた大編隊による昼間集中攻撃は、第一次、第二次とも失敗に終わってしまった。

司令部参謀たちの机上計画より、戦闘経験豊富な現場指揮官江間飛行長の判断のほうが正しかったのだ。

いっぽう一航艦のほうも、特攻出撃した敷島、朝日両隊がやはり悪天候に妨げられて虚しく帰投してきていた。

その夜、大西長官は福留長官に、

「一航艦は、明二十五日早朝、栗田艦隊のレイテ湾突入に呼応して、神風特別攻撃隊の七隊全機を発進させる」

そう告げると、是非とも協力してくれるよう懇願した。

だが、福留長官の返事は鰾膠もなかった。

あくまでも正攻法に固執して、譲らなかったのだ。

この日、レイテ湾に向かっていた栗田艦隊がシブヤン海で空襲を受け、戦艦武蔵沈没、その他数隻が損傷した。

（つづく）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）

春季号　二月一日　十二月三十一日

夏季号　五月一日　三月三十一日

秋季号　八月一日　六月三十日

冬季号　十一月一日　九月三十日

円滑な発行を期するため、できるだけ一週間前までに編集長の手元に到着するよう努めましょう。

紙透家の人びと（十九）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の葉書より）

紙透寛夫

四　南十字星の下で

終戦直前の第五野戦憲兵隊は、日本憲兵隊の中で、最も小さな島嶼に数多く分散配置され、最も広大な海洋地域にまたがって任務に服した、憲兵隊であった。配備地域は濠北地区、つまり、東はニューギニアを除く西、北はハルマヘラ島・モルッカ島を除く南、西はセレベスとバリ島を除く東、南は濠州以北を外壁とする地域内で、いわば濠北のバンダ海とフロレス海に浮かぶ諸島である。島名を挙げれば北からセラム島、アンボン島、カイ諸島、アル諸島、タニンバル諸島、スピルバット諸島、チモール島、小スンダ列島のフロレス島・スンバ島・スンバワ島などであった。

第五野戦憲兵隊はこの地域を大体三方面に区分して配置されていた。まず、最重要地点のセラム島に憲兵隊長中村通則中佐以下の本部を置き、アンボン島には沼田英隆少佐の分隊を配置した。次がカイ諸島、アル諸島、タニンバル諸島には、セラム島ピルに分隊を置くセラム分隊古川与嘉大尉の旧部下を派遣した。旧古川中隊を分隊編成にして独立させて派遣したわけである。最後がチモール島及び小スンダ列島であるが、ここには油谷佑二郎中佐の分隊を分散配置した。

しかも、これらの諸島に分散配置された憲兵は、最少二名の兵力から一個分隊まで様々であったが、米濠軍爆撃はあっても、反攻上陸作戦がなかったため、戦闘による直接の被害は軽微であった（日本憲兵正史より）。

父小太郎は当初、アンボン島の沼田分隊に配属されていた。

この戦争中、私は戦地の父から十数通の葉書を受け取った。なかの六通は、次のように書いてあった。（原文のママ）

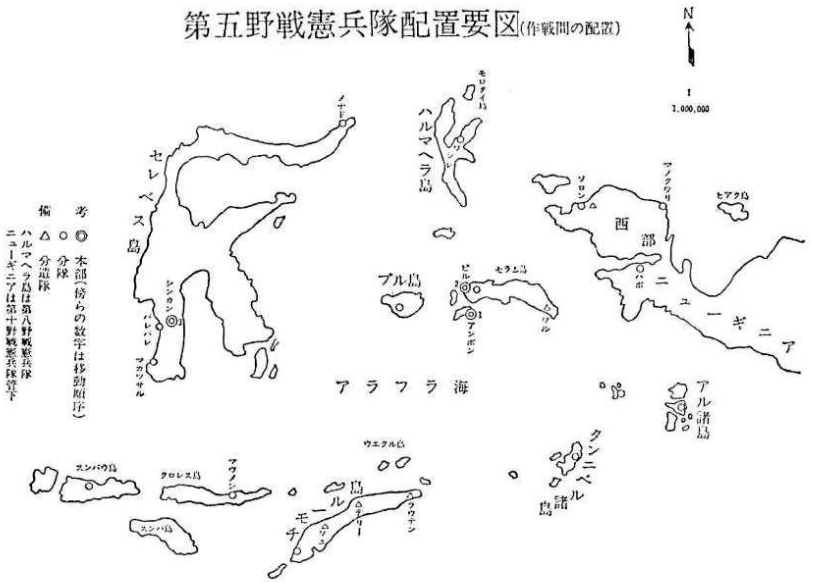
① 静岡県周智郡山梨町下木戸　鈴木義平様方
紙透寛夫君
濠北派遣堅第九四五〇部隊気付
紙透小太郎

今、物すごいスコールがきました。その後元気で通学しておる事と思います（中略）。淑子、敏子、久代、皆丈夫かね、幹郎は元気か、内地も暖かくなってよい季候と思う。身体を丈夫にして元気で皆仲良く勉強する事です。父は非常に元気で御奉公している、赤道を越へたが割合に凌ぎよい所で、内地の花類なら無いものはない、その他珍しい非常に綺麗な花、野菜は里芋、馬鈴薯、大根、いんげん、胡瓜、人参、さつま芋、年中あります。

② いつも内地の盛夏のように暑いが、蚊は余りいない。今いる所は印度ネシア（人）が大部分で非常に柔順な人達ばかり、色は一寸黒いが、乱暴な事など出来ない人ばかり、日本軍を神様の様に信じてます。今日はこのくらいにします。当分手紙が出せないと思う、御祖父ちゃん、御祖母ちゃんへよろしく、では左様なら、内地のニュースを知らせてほしい。

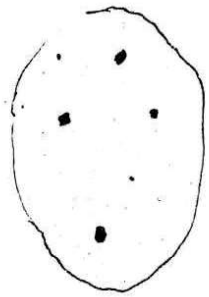
③ 紙透寛夫君
濠北派遣堅第一九二一部隊
紙透小太郎

第五野戦憲兵隊配置要図（作戦間の配置）



日本憲兵正史（全国憲友会連合会編纂委員会）より転載

寛夫始め皆さん御元気か、ミッキー（幹郎）ター坊（忠）はどうか、今日は『南十字星』の事をお知らせします。今おります所は月夜の晩などとても空が綺麗です。南十字星がよく見えます。大きい四つの星がそれです、この図の大きさも皆同じでなく下図のように大きいのと小さいのとあり、真南にあります。この辺ですと、北極星は見えません。赤道の下といっても、真下ではありません。椰子とマンゴー樹がとても多く、土人はそれで生活してます。そして椰子の間から出る月はまた、格別キレイで、光も強く、内地の冬の月夜を思い出します。次には土人の生活をしらせます。



④ 土人の事をお知らせします。毎日暑いので大人も子供も裸です。男は猿股とそれから一寸した襦袢で、女は襦袢にサロンといって腰布を巻きます。これは男も同じですから、全裸体という事はなく、子供は猿股だけで裸です。布団などは無いようです。以上が田舎の普通の生活で、椰子の実を採ったり、海で魚を採ったりして、別にお金がなくても生活が出来るので、自然、怠け者が多いようです。それから男子は皆タバコを喫みます。子供でもタバコをやりますと、とても喜んで何でも手伝います。又面白い事を知らせます。御ジイチャン、御バアチャンへ宜しく申して下さい。久代チャンは字が書けるようになったら手紙を下さい。

左様なら

⑤ 過日、十字星の手紙を書いてより約一か月、目下内地は盛夏の候、皆真っ黒になっている事と想像しております。一向、返事がこないので、今日か、今日かと、待っております。皆元気の事と思う、当方は至極元気なり。季候も今一番涼しい時で、雨期も明けて毎日晴天続き、南十字星がキラキラと光って、その反対、真北に北斗七星が内地を思わせる様に光って美事です。（中略）南十字星下にて

⑥ 寛夫始め淑子、敏子皆元気ですか、今僕がいる所はとても綺麗な所です。小さな島で海の水がとてもすんで、真っ青で、十米くらい迄見え、魚がとても沢山いる。亀の大きいのがおって土人がそれを捕って売りにきたり、島は椰子が多くその他、年中花が咲いて葉の枯れる事がなく、いつも真夏で半年雨期で半年雨の降らない所で、今丁度雨期です。島ですから刺身が食べられます。果物はバナナとパパイアはいつでもあります、少し送ってやりたいが、少し遠いので駄目です。（以下略）

この戦争中、戦場からの手紙や葉書は軍事郵便といっ

て、発信年月日が書いてなく、検閲済みの印が押してあった。これは、いつどこで、何をしているかを敵側に情報が漏れないようにするためだったようである。いま、読み返すと、いつどこでのことだったのか、さっぱり分からない。せめて葉書を受け取った時に、すぐ日付を書いておけばよかったのに、私には、まだ、その知恵がなかった。

父小太郎は昭和十八年二月二日、宇品港から出征して、シンガポールに寄り、二月二十二日、ジャワ島のスラバヤに、四月八日にはアンボン島に上陸したことは既に述べた。その後、セラム島からゲッセル島へ、さらにその先をと、いちいち書き連ねるのは煩わしいので省くが、多分、この六通の葉書はジャワ島か、アンボン島からのものだったと思う。六通目は、あるいはゲッセル島からだったのかも知れない。いずれにせよ、昭和十八年、日本軍がまだ勝ち軍の時で、どこで戦争をしているのか、分からないような、のんびりした雰囲気を漂わせた葉書である。あらしの前の静けさ、だったのであろうか。

四通目の葉書に土人（原住民）について書いてあったが、これはアンボン島からのものらしい。というのは、鈴木島吉著『南十字星は知っている』という本のなかで、奇しくも、父とは別の視点で住民の生活について、次のように面白く述べていたからである。

宿舎の前をバトメラ川が流れていて、住民の生活には、欠く事の出来ない水であった。食品洗いは勿論だが、洗濯も又、排便も一つ川で済ますのには吃驚りしてしまった。サロン（大巾の布の両端を縫い合せ筒状にしてあるだけの物）を男女を問わず、スカート、ズボンのように使用、又一枚を頭から斜め被り歩く者もあり、肩に掛け、幼児を脇の下に抱えこむようにして子守りをする婦人等、重宝な衣類である。

このサロンを頭からスッポリ被り、水中にしゃがんで用を済ますと岸へ出て、乾いたサロンを上から、濡れた物を下に落して交換し、又川に入りそれを洗って草叢に干して帰って行く。完全な水洗便所であるが寒い所では出来ない風景である。

椰子の一種から酒が取れる。枝もない木の本体から大人の腕程もある花房がニョッキリと出て一メートルも垂れ下がる。この花房の根本を切り竹筒をぶら下げる。そして、明日から毎日竹筒を交換すると、筒一杯に汁が入っている。この汁が椰子酒である。

カルピスか甘酒の薄い物を見るような、白濁色で、盛んに発酵する。瓶へ入れて蓋をすると間もなく「ポン」と音がして蓋が飛んでしまう。一寸とビールの様で私でも一杯ぐらい呑めた。甘口で美味かった。二・三日すると、酸っぱくなり私にはとても呑めなかったが、原地人は好

んで呑む。居酒屋風の店には大勢呑み手がいて、この世界はどこも同じだなと懐かしく思った。

この原酒、シゲールとかいったが、これを蒸溜すると、ソッピーというウイスキー風となり、卓上に流して火を点ければ、ボーと燃えてしまうようになる。アルコール分が可成り高いらしく高級品となり、労働者では手が出せないように高価となる。

この著者の鈴木島吉氏は、開戦後、逸早く（昭和十七年一月三十一日）海軍軍属として設営隊員となって、アンボン島に上陸した。父小太郎が翌十八年四月に上陸した時には、鈴木島吉氏はすでにニューギニアからセラム島に移動していた。二人のアンボン島での時期は一年余り違うが、原住民の生活は変っていなかったと思う。

私は、著者禾晴道の『海軍特別警察隊―アンボン島BC級戦犯の手記』を読んだことがある。海軍特別警察隊とは、わかりやすくいえば、海軍の『憲兵隊』であったとのこと。なかに海軍設営隊について次のように述べてあった。

……わたしがアンボン島着任のとき第一歩を地に着けたラハ飛行場の近くに、海軍設営隊があった。設営隊とは、わかりやすくいえば飛行場や道路・橋・兵舎の建築から防空壕などをつくったり、修理したりする土木・建築の総合部隊であった。占領地にとって、最も重要な任務をもった部隊だった。それでいて縁の下の力としてあつかわれて、戦闘部隊とは差をつけてあった。首脳部は現役海軍軍人がかため、実際に働く隊員は、あらゆる階層からの出身者で、軍人でなく軍属としてあつかわれていた。かれらは、軍人からは軽べつ的な目で見られがちだった。

軍人と軍属の違い、軍政への疑問を抱きつつ、従軍した鈴木島吉氏は、この事実を裏付けるように、不満を控え目にその一部分を次のように述べていた。

恩賜のタバコと戦給品

毎日、草刈りをして日毎に飛行場らしき広場が出来ていった。

昭和十八年三月二十八日、侍従武官御差遣に際し御紋付き紙巻き莨が御下賜された。五本入りの、菊の御紋が付いた、立派な品物であった。

後で判った事であるが兵隊は十本入りとの事、又時々支給される戦給品も我々は半分であった、赤紙（旧日本軍の召集令状の俗称）と白紙、鉄砲とスコップでは、御国の為とはいいながらもその重要度が違い、その働きも半分の評価しか、してもらえないものかと、情けない思いがするのであった。

なお、鈴木氏はアンボン島について、次のように語っている。

アンボン島は、沖縄那覇の真南辺り、南緯三、四度くらいで東西約六十キロメートル、南北約三十キロメートルと推定される。面積七百六十一平方キロ、日本の種子島よりやや大きいと思われ、島のあちこちにさんご礁が生育している。約十万人の住民は、アンボン人とよばれ知能は高いといわれるが、産業界の主役は華僑であった。

香料諸島の名で知られるモルッカ諸島、バンダ海の要地で丁字香が豊富に生産され、又良港のため産物の集積地として栄えた所らしい。

昭和十九年初頭のころは、日本軍にとっても南西太平洋で最も重要な根拠地として、陸海警備隊及び私達、設営隊などで、総数一万二千を数える時もあったという。

五月ごろ、このころが南方生活中一番平和で、戦争中の敵地にいることなど、忘れるような日常であった。日曜日には、交替で外出も許され、市内へ遊びに出られた。物資は少ないながらも、各種の店が開かれ、住民も買物に、あるいは自作の野菜、果物、魚等々市場へ売りにくる人達も多かった。

驚いたことに、一寸、好い店だなと思うと、皆、華僑の店であった。また日本の農村部で少し集落があれば日



用品、食料品を売る店があるように、どこに行っても一寸、店らしい店は、華僑であった。

港は一万屯以上の船が接岸出来、大きな倉庫もあった。近くに発電所もあり市内は電灯も点り、上水道も完備されていた。

桟橋の北側に旧オランダ兵のビクトリヤ城があり、万里の長城のような土塁に囲まれ、十数メートルおきの間に、銃眼が造られ、又塁上の所々に明治初期、日本の砲台に据えられたような大砲が据え付けられてあった。

一つの島が完全に占領されると、軍政から民政へ移され、政治も名ばかりながら住民の手に任せられる。町名も青葉通り、山之手通り等、日本名が付けられ、学校も日本語と軍歌等が教えられる。子供達は歌を早く覚えて上手に歌えるようになった。やっぱり子供は可愛い。

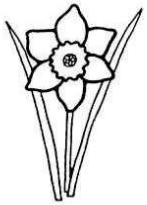
町には歯医者も二、三あり皆んな金歯を入れた。一本五円で、革靴一足と同値だったけれど帰るころには大部分の人が抜けてしまったり半分取れて、額縁のようになってしまった。又華僑の商売上手にも、内地の買物と比較して全く困ってしまった。売値はお客次第でずいぶんと値切って負けさせたと思っても、なお安く買った人があり、多勢寄り合って話し合うと、それ以上安く買った人がいるという有様で、損をせぬ買物には苦労するのだった。

町内に流しの床屋さんがいる。折り畳みの椅子と機具入れの小箱を持ち歩いている。客が声を掛けると、木陰に椅子を置き、白布を掛けて散髪をし、終れば髪の毛はその場に捨てて立去ってしまう、とても日本では出来ない商売である。

波止場近くの市場では、終日賑わいほとんどなんでもある。百貨店のようであり、また、この買物客目当てに、三輪自転車が駅前タクシーのように、客待ちしているかと思えば、天秤棒一本で客の荷物を運ぶ、運送屋さんも多勢誘客している、のどかな風景もあった。

このアンボン島には、鈴木島吉氏も父小太郎も日本軍の敗色が濃くなってから、再上陸したがそれは後日、述べることにする。

（つづく）



漢詩

潮騒錄（卅八）

鯨游海

馬遼太郎が同志社大学で講演した際に記念に残した揮毫である。同志社建学の祖、新島襄の生涯に念いを馳せ併せて学生らにその精神を伝えようとした。

猿猴月を取る＝猿が池に映った月を取る＝欲に駆られて大失敗する喩え（夫木和歌抄より）。

曲肱の楽しみ＝論語「曲肱枕之而樂亦在其中矣」＝俗世を離れて道を楽しみ励む意。

坂の上の雲＝日露戦争を勝利に導いた明治の重臣、秋山好古陸軍大将、眞之海軍大将兄弟ら俊秀達を描いた司馬遼太郎の代表作。あの時代多くの志ある若者が日本の近代化を目指して理想を敬仰し奔放に活躍した。「哀しい程貧しい後進国日本があの大国ロシアに勝った奇蹟」程感動的なドラマはない。私も志は猶千里に在りたい。

☆ケータイをまさぐる茶髪猿に似て
　明治の志士に君は愧じずや

賀甲申春　　平成十六年元旦

倜儻不羈明治臣
猿猴取月昨今人
愚生未識曲肱樂
仰坂上雲還迎春

押韻・臣 人 春

〈甲申（猿猴）の春を賀す〉
倜儻不羈たるかな　明治の臣は
猿猴月を取るごとき　昨今の人
愚生未だ識らず　曲肱の楽しみを
「坂上の雲」を仰ぎて　また春を迎う

〔注　解〕

倜儻＝才気が衆人にかけ離れて優れているさま。司馬遷・報任安書「唯倜儻非常之人稱焉」。不羈＝羈ながれず＝自由奔放に活躍する意。この四字「倜儻不羈」は、司

遊淺間山麓小諸懐古園・信州旅懐其一　　平成十五年三月

古薹古壁古城門
曲水頌春懐古園
爾後文豪何不現
遊人豈唯獨藤村

押韻・門 園 村

〈浅間山麓小諸懐古園に遊ぶ・信州旅の懐いその一〉
古薹古壁の　古城の門
曲水春を頌ほぐ　懐古園
爾後文豪　何ぞ現われざる
遊人あに唯　ひとり藤村のみならんや

〔注　解〕

旧友と信濃路に遊んだ。春未だしの雪景色。浅間は秀麗だ。山麓に楼門が佇ずむ。曲水は千曲川だが併せて詩酒の遊宴の故事「曲水の宴」をも聯想。さて大意。

由緒あり気な古薹古壁の古城の門。千曲が蜿々と曲折し視界の涯まで続き来る春を頌ほいで流れている。

それにしても彼の藤村以降文豪が出ていないのはどうしてだろう。この景観なら次々と出ても当然と思うが…。

☆歌人は藤村のみに非ざらん
　佳景余りて詩客を拒むや

泊湯田中溫泉客舍椿野遠望北信五嶽・信州旅懐其二　　平成十五年三月

紫嶽青山蟠碧空
白雲冠雪競玲瓏
幻聽何處鞭聲肅
恍惚唯看落日紅

押韻・空 瓏 紅

〈湯田中温泉客舎椿野に泊し北信五岳を遠望す・信州旅の懐いその二〉
紫岳青山　碧空にわだかまり
白雲冠雪　玲瓏を競いたり
幻に聴く何処にか　鞭声の粛々たる
恍惚として唯看る　落日の紅なるを

〔注　解〕

二日目は車で長野市に入った。善光寺と東山魁夷美術館では幽玄の絵画を、信濃美術館では池田満寿夫展を堪能した。戸隠高原でのそばは美味しかった。

そも信州は学術文芸に優れた人材を多数輩出している。翌日訪ねた一茶ゆかりの里や画狂北斎館等々、一度は見ておきたい所が多い。

さて目指すは長野市東のかた、渋湯田中温泉郷の旅館

椿野。またここでのサービスの行き届いた様子は素晴らしかった。サービス業に身を置く私にとっては目を開かれるが如き想いだった。サービスについては限りがなく奥深いものだと改めて教えられる所が多かった。

客舎「椿野」の屋上の露天風呂に入る。遠望する妙高、黒姫、戸隠等いわゆる北信五岳が西方に連なっていた。大気は冷涼、清冽であった。まさに「春宵一刻　値千金」とはよくぞいったものだ。落日が眞紅に燃えながら徐々に沈んでゆく。覚えず信玄と謙信の川中島決戦の情景が浮かぶ。それはやはり頼山陽の漢詩によってであった。歴史は文学が作り伝えるものか。

題不識庵撃機山圖・頼山陽

鞭聲肅肅夜過河　鞭声しゅくしゅく夜河を過る
曉見千兵擁大牙　暁に見る千兵の大牙を擁するを
遺恨十年磨一劍　遺恨なり十年一剣を磨きしに
流星光底逸長蛇　流星光底長蛇を逸す

不識庵とは謙信の、機山とは信玄の号。大牙は大将旗のこと。余談だが昼間長野市内の公園で一騎打ちの銅像の銘版にこの詩の起句が刻まれていたが「過」であるべき所が「渡」となっていた。ここは平字でなければならず、山陽も苦心の末「過」という平仄両用の字を用いて「わたる」と詠んだのに。已止乎。これは興覚めであった。原作誤用であり山陽が泣いている。市の見識や如何。

☆湯に酔いて幻に聴く鞭の音
五岳染めあぐ燃ゆる落日

二宮金次郎之一生・(八)櫻町領復興事業〔下〕
平成十五年四月

教化叛徒圖冷害
至誠推譲十餘年
美田粒粒三千石
一國蘇生以徳全

押韻・年　全

〈二宮金次郎の一生・(八)桜町領復興事業〔下〕〉
叛徒を教化し　冷害に図り
至誠もて推譲すること　十余年
美田粒々　三千石
一国の蘇生　徳を以って全うす

〔注　解〕

教化とは教え導く。推譲とは己を捨てて他人を立てること。実収九百石と千にも満たなかった桜町領の収穫が終に待望の三千石を実現したのである。遂にやった！

小田原藩から派遣されて来た悪役人の妨害に逢った金次郎は成田山に籠って修養し一円観と呼ぶ境地を悟得開眼した。これは対立する全ての物を円の中に入れるという度量の大きい境地である。領民らも協力勉励し農産に

励み終に桜町領の復興が成った。十五年が経過していた。

☆人をたておのれを捨てて十五年
三千石の稲穂たわわに

二宮金次郎之一生・(九)青木村復興事業
平成十五年四月

灌漑路干青木村
急流築堰乞支援
先沈茅屋投岩塊
忽現碧湖新水源

押韻・村　援　源

〈二宮金次郎の一生・(九)青木村復興事業〉
灌漑の路干れし　青木村
急流に堰を築くに　支援を乞う
先ず茅屋を沈め　岩塊を投ぜしむ
忽ち現わる碧湖　新たなる水源

〔注　解〕

時に南隣の青木村は用水が涸れ田畑は荒れ廃村の一歩手前という惨状であった。名主は金次郎に復興の指導を懇願するが金次郎は「お前達が怠け良田を荒廃させたので、用水のせいにするのは口実だ」と厳しく悟す。村人は改心し未明から働き出した。自助努力を始めたのである。これをみて用水の堰の大修理に力を貸す。その工法は人々を驚かせた。茅で作った屋根を一気に川底に沈め土塊や木石を投げ入れたのだ。短期に安価にかつ堅固に完成した。

かつて酒匂川で経験したことを応用したのである。かくして青木村は数年の間に見事に復興を遂げた。

☆堰なりて深く湛たえし碧き水
渦巻き溢れほとばしり出づ

二宮金次郎之一生・(十)谷田部・茂木
細川家復興事業
平成十五年四月

無縁他國細川門
一介至誠甦弊藩
數巻今留爲政鑑
儉勤分度實行論

押韻・門　藩　論

〈二宮金次郎の一生・(十)谷田部・茂木細川家の復興事業〉
縁なき他国　細川の門

一介の至誠　弊藩を甦えらしむ
数巻今に留む「為政鑑」
倹勤分度の　実行論

〔注　解〕

桜町領三ヶ村と青木村計四ヶ村の復興の目途がついた頃、肥後の国の大藩、名門細川家の分家である細川興徳が領する谷田部・茂木計六十九ヶ村（一万六千余石）の君民が困窮していた。

数度の飢饉と大火災、累増する借金が直接の原因とされたが、要するに指導者の不在、経世理念の欠如、無計画な借金、臣民の他者依存体質等藩政の基本が成っていなかったのである。

興徳の養子興建は英邁な人物であった。忠臣中村元順の意を容れ、礼を尽くして二宮金次郎に復興の指導を懇請する。

再三に亘る熱意に打たれた金次郎は、復興計画書「為政鑑」を自から作成手交してその実行を迫る。分度を君民共に厳守させ、土地を改良し勤勉に働くこと等々、さらに借金の返済方法迄記した厳しいが至誠溢れる懇切なものであった。

かくしてその後紆余曲折はあったものの着々と成果が現われた。

もっとも完全に復興が完了したのは借金が完済された時とするならば何と二十五年後のことであった。一度疲弊した領国を再建するにはこれ程の年月がかかるのである。現下のわが国を想うと慄然たらざるを得ない。

要は人材である。人材は居ないのではなく埋もれている。それを発見し活用する事だがそれも上に立つ人材が居て成り立つ。人材の熱意が人を打ち人材を動かす。

☆縁なくも忠臣三度頼り来ば
　倹勤分度至誠もて説く

《漢詩の流れ29》北宋の巨星たち②

梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）、字は聖俞、宣城（安徽省）の人。進士出身でなかったので地方官で終り一生貧困であった。その詩風は杜甫、白樂天、元稹ら社会派の詩が多い。尤も社会の底辺にある人々の苦しい生活を唱う詩は、既に詩経の國風の中にみられる所で、中国詩歌の本題の一つとして綿々と唱い続けられて来たものであり、この時代にも猶本流であった。陶淵明を慕い身辺を詠んだ。歐陽修と親しく更に王安石、蘇軾らが門下であり当時詩人としての声望は高く、西崑体の詩に反対して平淡だが深い思索の詩を作り社会の矛盾を鋭く抉った。

陶　者（とうしゃ）
陶盡門前土　陶き尽くす　門前の土
屋上無片瓦　屋上　片瓦なし

十脂不霑泥　十脂　泥に霑らさずして
鱗鱗居大厦　鱗々として　大厦に居るものあるに
※大厦は大邸宅。

汝墳貧女（汝墳の貧女）
汝墳貧家女　汝墳の貧家の女
行哭音悽愴　行々哭して　音悽愴たり
自言有老父　自から言う「老父有り
孤獨無丁壯　孤独（男児の居ない男）丁壮（若者）なし
郡吏來何暴　郡吏の来たるや　何ぞ暴なる
縣官不敢抗　県官も　敢えて抗わず
督遣勿稽留　督遣（せきたてる）して　稽留なからしむ
龍鍾去攜杖　龍鍾（よぼよぼ）と　杖をついて去る
勤勤囑四隣　勤々として　四隣に嘱す（依頼する）
幸願相依傍　乞い願わくは　相依傍（面倒をみる）せよ
適聞閭里歸　たまたま閭里より帰れる（人）を聞き
問迅疑猶強　問迅す　疑うらくは猶を強むるならんかと
果然寒雨中　果然　寒雨の中
僵死壞河上　僵れ死す　壊河の上」
弱質無以託　（自分の）弱質は以って託するなく
横尸無以葬　横尸（死体）は　以って葬むるなし
生女不如男　女を生むは　男に如かず
雖存何所當　存す（生存）と雖も　何の当る所ぞ
拊膺呼蒼天　膺を拊って　蒼天を呼ぶ
生死將奈向　生死　将に奈向せん
※生き残った者も死んだ者もこれからどうしたらよいのだろう！と慨嘆して結ぶ。

寄病友（病の友に寄す）
詩本道情性　詩は本と　情性を道うも
不須大厥聲　厥の声を大にするを須いず
方聞理平淡　方に理の平淡を聞くべし
昏曉在淵明　昏暁　淵明に在り
※声を大にするとは西崑体の虚飾を揶揄。

魯山山行（魯山の山行）
適與野情愜　適しく　野情とかない
千山高復低　千山　高く復た低し
好峰隨處改　好峰　随処に改まり
幽徑獨行迷　幽径　独り行くに迷う
霜落熊升樹　霜落ちて　熊は樹に升り
林空鹿飲溪　林空しく　鹿は渓に飲む
人家在何許　人家　何許にか在る
雲外一聲雞　雲外　一声の鶏

夜聽鄰家唱（夜、隣家の唱を聴く）
夜中未成寐　夜中　未だ寐りを成さず
鄰歌聞所稀　隣の歌は　聞くに稀かなる処あり

想像朱脣動　朱唇の動くを　想像し
髣髴梁塵飛　梁塵の飛ぶに　髣髴たり
誤節應偸笑　節を誤って　応に偸かに笑うなるべし
竊聽起披衣　窃かに聴かんと　起って衣を披る
披衣曲已終　衣を披りしとき　曲已に終り
窗月存餘暉　窓月　余暉を存す

※梁塵飛とは美声の形容。魯国の虞公が歌を歌うと梁の塵がゆれ動いたという。
※節は拍子。
※余暉は残照。



祝出版

まんじ傑作選
—90号記念—

ハードカバー
500頁
定価1900円
＋税
栄光出版社

残部僅少。ご注文は早目に下記へ（送料無料）
まんじ事務局　又は　栄光出版社宛
(045-544-5947)　　(03-3471-1235)

撞木

☆「まんじ」九一号の原稿を頂いた。パソコンの原稿がずいぶん多い。手書き原稿は今や少数派なのであろう。書く（打つ）スピード、読み易さ、訂正の容易さ、いずれもパソコンのほうが利便性に優れている。とはいえ、作家の中には、手書きの魅力が捨て難いとしてパソコンから手書きに戻る人もいるようだ。日常的にパソコンで文章を書いていると知的活動の中枢である前頭葉をあまり使わず書けてしまうため、文章がパターン化することを恐れてのことらしい。

☆情報技術の発達にともない若者の活字離れは、進んでいる。ネット上の作品をパソコンや携帯電話の画面で読み、電子辞書を使って日本語や外国語の学習を行う。そのため書籍類の売れ行きが低迷していると言う。他方、もともとネット上の作品であった小説を単行書にして出版したところ爆発的に売れたと言うケースもみられる。

☆かつては、書物が知識や教養の源泉であった。それがパソコンや携帯電話にその座を明け渡すことになるかも知れない。元日の日経新聞で「パソコンや携帯電話が世の中を良くしているか」とのアンケートの結果を報じていた。八七パーセントが肯定的だったと言う。

☆書物とＩＴ機器との競合と共存の時代が始まった。書物の思恵に浴して育ったわれわれにとって共存の時代が末永く続くことを願って止まない。（Ｏ・Ｓ）

まんじ　第91号

平成16年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世にあまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦　画

まんじ

No. 92

2004.5.1

まんじ第九十二号　目次

小野小町物語……島津隆子…4
パリーいくつかの情景……森実与子…17
義人・伊豆頭七異聞（一）……堀内永代…27
封人の家……大和禎人…44
澤田吾一―ふたつの人生……新井宏…48
国近三吾先生の思い出……吉田忠雄…56
古い物・遠い夢　御風の短冊……忠内正之…61
俳句　海霧深し……大澤鷹雪…64
短歌行　雲流水（五）……石黒修身…66
荘内藩と「海坂藩」……石黒修身…69
丙午の女（二）……太田和貞…71
妖星（三）……三戸岡道夫…77
踏み絵（三）……鍋屋次郎…88
遥かなるカメルーン（三）……太田精一…97
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十四）……千坂精一…108
特別寄稿　インドネシアの戦跡をたずねて……鈴木島吉…118
紙透家の人びと（二十）……紙透寛夫…124
漢詩潮騒録（三十九）……鯨游海…128
撞木……編集子…133
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
鈴木國男
清水トム

小野小町物語（一）

島津隆子

一　はじめに

小野小町といえば、わが国では古今を通じて最高の美人を意味する。

後世いかなる美女が現実に出現しても、その女は「なになに小町」と呼ばれる慣わしの中におかれる。いわば小型小町というニックネームを冠されるのが精一杯である。その意味で小野小町は歴史を貫いて美人No.ワンの座を永遠に保持し続ける女性ともいえる。

小町は九世紀の女性である。それが二十一世紀の今日まで、その盛名を謳われるのには当然大きな理由がなくてはならない。

クレオパトラや楊貴妃は文字通り「傾国の美女」であり、それぞれ自分の国を滅ぼすことによって、後世にその名を留めた。しかし、小町には歴史の表舞台を泳ぐといった派手な実績は皆無である。

例の深草少将に〝百夜通い〟をさせたあげく、やつれ死をさせたという説話がかりに事実だったとしても、それぐらいではとうてい千年間の名声は保持し得ないであろう。女に惚れて命を落す男はいつの世にも大勢いるからである。

それなのに、小野小町がひとり永遠のミス日本となり得たのは、簡単に言ってしまえば、彼女の生涯があまりに深い謎に包まれているおかげである。その実像が今もって全くはっきりしないからこそ、謎は謎らしく伝説や説話を生み出して、その結果、美の殿堂の奥深く、さながら美女の化身として祭り上げられている。

一体どういう家柄の出で、どんな才能があり、どんな生活を送り、その生涯の果はどんなであったかなど、実像は深い霧のベールに包まれて曖昧模糊としている。にもかかわらず女性として史上最高の栄冠と名声を有ったという、まことに不思議きわまりない女性という以外に

ない。

「三十六歌仙絵巻」には小町だけが後ろ向きに描かれている。つまり、恐ろしいほどの美貌なので、さしも当代随一の画家藤原信実も丹青の技の振るいようがなかったというのだ。後世の百人一首の絵巻などでも、小町はとかく後姿だけが描かれがちである。大抵の大家といわれる画家は、小町には正面から取り組まずに逃げの一手をうった。

ただはっきりしていることが二つある。

一つは『古今和歌集』の序文で、万葉集の柿本人麿と共に歌聖と仰がれる紀貫之が、六歌仙である在原業平、僧正遍昭、小野小町、喜撰法師、大友黒主、文屋康秀ひとりひとりの解説の中で、

「小野小町はいにしへの衣通姫の流れなり。あわれなるようにて強からず、いわばよき女の悩める所あるが如し、強からぬは女の歌なればなるべし」

つまり小町の歌は古の衣通姫の筋で、その強くないところは美女の悩める風情があるようなものだ、と言っている。これが同時代の最高の知識人の眼を通して見た小町の評であり、そのまま小町像でもある。わずかではあるが、その生身の姿がうかがえる。

衣通姫というのは『古事記』や『日本書紀』に登場する史上最初の美女で、允恭天皇の皇后の妹である。天皇から召されたとき、姉皇后の嫉妬を恐れて辞退したが、天皇の熱望に負けて宮中に召抱えられ、皇后の憎しみと天皇の深い寵愛の間に立って生涯悩みつづけたといわれる。

その美しさは比類がなく、まさに容姿端麗で、肌の白さが衣を通して輝くようであったから、衣通姫と名づけられた。貫之はこの姫に小町が勝るとも劣らぬほど似ていると評したのである。

もう一つはっきりしていることは、小町はその『古今和歌集』に、生々としてなまめかしくも妖しい真情を吐露した、たった十八首の和歌を残しているにすぎないという事実である。

この和歌をもとにしてさまざまな伝説が流布しているのだが、これ以外には生年や没年はもとより、家系、素性さえもよくわからない。

強いてその家系を求めると、今日までの説では父は出羽国の国司小野常詞、または小野常嗣、または小野良実、それに養父として小野好美などがあげられる。最近では仁明天皇の更衣小野吉子が小町ではないかともいわれる。こんな諸説紛々たる中に、

「わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと　人には告げよ海人のつり舟」

の歌で知られる参議小野篁の名前もみえるが、説得力に欠けるようだ。

むしろ小町は、小野の里に居を構えていた参議小野常

嗣の娘で、本名を藤原比古姫といい、小野は父親の家号で、小町は宮中の呼名であったという説の方が容易に納得できるかもしれない。ちなみに文徳帝の更衣・紀静子は〝三条の町〟と呼ばれていたという。

そして、奥州の出羽（秋田）―秋田美人の名称はここに由来するーからはるばる京へ上り、淳和、仁明の両朝に仕え、仁寿二年（八五二）三十歳の頃、秋田小野荘に閑居して、もう夢でしか逢えない恋人を慕い、数々の歌を残したというのだ。そこでの小町の歌は二種類の歌集に、重複歌を除いて百二十首あるが、後世の人が集めたものなので、はたして小町の作か疑わしいものが多く、明らかに他人の歌が紛れ込んでいるとみられている。

しかし、京で詠まれた『古今和歌集』の十八首は確実に小町自身の歌であり、その内の六首が夢の歌である。

現（うつつ）にはさもこそあらめ夢にさへ
人目を守（も）る見るがわびしさ

かぎりなく思ひのままに夜も来む
夢路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめず通へども
現（うつし）にひと目みしごとはあらず

この「題しらず」としている歌をみるかぎり、小町の愛していた人は、たやすく逢い得ない人であったことがわかる。さまざまな障害があって現実には晴れて逢うことができないのはやむを得ないが、人目をはばかって、夢の中までも逢いにこられないのは侘しいかぎりです、と歌い、次に、まさか夢の中まで人は監視しないから、涯（はて）しない思いのままに夜中こっそりお逢いしましょう、と詠じている。そして、夢の中ではせっせと通いつめても、現実にひと目逢ったあの歓びとはくらべようもありません、と嘆息する。

小町の歌う相手はよほどの事情があって忍び忍ばねば逢えない人であったのは確かであろう。だから、恋い焦がれる人の存在をこのような形で後世に残したのだろう。

しかし、たくまずして小町の陰の人の陰影が深まることで、小町自身がより神秘のベールに包まれるという効果はみごとである。ともあれ、障害の多い恋の嘆きを詠って、惻々と人の心に迫るものがある。

人に逢はむ月のなきには思いおきて
胸のはしり火に心焼けけり

思う人に逢う手立てもなく、闇夜ではあるし、心の中に燃えさかる恋心がぱちぱちと火の粉のように走り回り、胸を焼かれてとても眠ることなどできません、と切々た

る悩みを詠う。相思相愛の仲を何ものかに隔てられて、なおいっそう激しく燃え上がる恋の炎。「胸のはしり」という表現など、真剣な悩みの底からでなくては生まれない痛切さがある。

これ以後の小町の歌は相手を明記しているが、この辺の歌には小町の真実の叫びの吐露があるにもかかわらず、相手の名は全く記されていない。この一点に、実は小町伝説の深い謎を解く鍵がかくされているように思える。

二　華やかな宮中

小町がその才色容貌をかわれて、京の宮中に召抱えられたのは、十六歳のときであった。

宮中の長い廊下に連なる各局は、位の高い名家の姫たちが妍を競って華やいでいた。

左大臣藤原冬嗣の娘順子を筆頭に、藤原澤子、藤原貞子など名門藤原家の姫たちが綺羅星のごとく並び、また、高家紀氏からは紀種子、その他百済家、滋野家など名だたる高家からも選び抜かれた妃たちが、御所づとめをしていた。

これらの女性たちの名は正式な宮中の記録文書に載っているが、小町の名はどこにも記載されていない。

いちばん先輩格で名家の藤原順子は、後に仁明帝の后となるが、小町よりも十一歳も年上である。若い姫たちでも小町より三～四歳は年が上であった。

当時の記録に順子妃は「美姿色雅」、貞子妃は「風容甚美」、あるいは紀種子妃は「和順にして進退規にあたって」と言う風な美辞で形容されている。このようにいずれも家門を代表する優れた姫たちが織りなす絢爛たる王朝絵巻さながらの世界であった。

その極彩色の華美な世界の中にあって、女人たちはみな一様の目的を持って生きていた。いずれ将来は更衣となり、中宮となり、最後は皇后になるという目的である。多くの高貴な女性たちが同じ目的で同じ処に暮らしているのだから、その華麗な舞台裏では熾烈な競争心や嫉妬心が渦巻いていた。

そんな中にあって容貌才能ともひときわ群を抜いていた小町が、宮家や殿上人や貴公子たちの噂にのぼるのに、そう時間はかからなかった。そのために名家の姫たちから嫉妬の矢を向けられ、務めの中で何かと邪魔立てをされるようになった。

宮中務めの女性たちが競争相手の寵姫に対して、どんなに意地悪に当たるかは『源氏物語』の「桐壺」からも容易に想像されよう。

小町は紫式部より約二百年近くも以前の女性だが、式部のように中宮付きの女官ではなく、直接天皇に仕える後宮の付人であった。したがって天皇はじめ公達たちから何かとちやほやされる立場にいた。先輩の姫たちから

妬まれたり妨害されたりしながらも小町は懸命に慣れない宮仕えをしていた。だが、小町がそれら高貴名門の男性たちと真剣に親しさを増さないかぎり、姫たちから必ずしも意地悪ばかりされていたのではなく、最古参の順子妃からはむしろ親切にされたことが『遍昭歌集』などから想像される。

しかし、このような時、小町は宮中の「誰か」高貴な男性に巡り逢い、真剣に愛され、その男性によって見事に高貴な女に染め替えられてゆくのである。先にも触れた「現にはさもこそあらめ夢にさへ　人目を守ると見るがわびしさ」

この歌では、現実ばかりでなく夜寝て見る夢の中でさえも、人目を気兼ねしなければならない侘しさを詠じている。

「やんごとなきひとの忍びたもうに」

という前書きからもわかるように、小町が、

「誰であるか名前は言えませんが、さる高貴なお方」との逢う瀬に、ひとかたならず心を配った様がしのばれる。その人の名は決して言えないし、また言ってはならない尋常の人ではなかった。

そのやんごとなき方とは、帝の御子、親王であったろうか。

三　妙な噂

小町は宮中の女官として他の姫より見劣りするほどの家柄の娘ではなかった。天皇の食事の給仕をしたり、洗手番を勤めたりする身分だが、歌の巧みさと水際立った艶やかさで、別格に取り扱われた。

こんな小町に近頃妙な噂が立って、宮廷サロンの話題をさらっている。

「あの女は、あれで女なのか？」

「あの女は、女として持つべきものを持っていないらしい」

というのだ。

小町が天皇との添い寝を拒んだことから起こった風評である。噂の仁明天皇は弘仁元年に生まれた嵯峨帝の第一皇子のことである。皇子は父帝が皇太弟の淳和天皇に譲位したとき、十四歳で皇太子の位に就いた。その時、後に皇后となる順子、女御貞子が後宮入りしている。

東宮であり正良親王と呼ばれた皇太子には二十二、三歳にして十人もの御子がいて、十人以上の側女が侍っていたという。小町が正良親王の目に止まらないはずはなく、執着されるのだが、すぐに思いのままになる女たちとちがい、するりと身をかわす小町に、正良親王はむしろ新鮮な魅力を感じて寵愛した。

そして、二十五歳で仁明天皇となったとき、小町は二十歳であった。

天皇にも靡かない小町の心理は確かに誰にも納得できるものではない。宮廷は詩歌宴楽の豪華な貴賓席であると同時に、政権争奪の桧舞台でもあるのだ。

女にも女らしい政権欲はある。天皇の寵愛を受けて、御子、つまり皇子を産むという望みがそれである。選ばれて宮仕えをしている国司受領の田舎出の娘たちまで、百花の妍を競うのは、つまりはその目標があるからだ。女官や殿上人や貴公子たちに、小町の了見が解せないのも道理である。

解せないといえばそればかりではない。

当時はまだ女が固苦しい貞操観念などに制約されない時代だから、色恋沙汰は公然の遊びであった。どんな女性も誰かの手に落ち、さらに誰かの手に渡って、それから……という話題もまた歌舞音曲の出来映えと同じように好奇の花を咲かせた。

ところが、小町だけは未だに誰彼の手に落ちたという噂もない。小町に言い寄る男性は実に多かったが、誰もいざという間際になると逃げられてしまう。その逃げ方がまたはなはだ巧妙で、決して相手に絶望を与えずに、いつの場合もこの次こそはという嫋嫋たる余韻を残すのだ。

それは小町のバックにいる確かな存在がないかぎりできるものではない。この辺から小町の演技は佳境に入ってゆき、絶妙さを増してゆくのだが、宮中の人々は色々と思案する。

どうもおかしい。十分にその気がありながら、土壇場になってなぜ逃げをうつのだろうか。

そこまで考えてゆくと、結局、女の機能の欠如という所に、人々の考えは落ち着かざるを得ない。それ以外に考えようがないではないか、というのだ。

この噂はたちまち人の口から口へと伝わり、かねて小町のあでやかさに圧倒されつづけ、憤懣を抑え難かった深窓の姫たちまでもが、この噂に尾ひれをつけた。

これが当の小町の耳に入らない筈がないのに、当人は一向にそ知らぬ顔でいる。それがさらに小町の神秘性を深め謎を呼んだ。

男とはおかしなもので、口では女人失格とか不具などと嘲笑しながら、前にも増して、熱狂的に艶書を渡したり、和歌を贈ったりする。つまり、われこそは事の真偽を確かめるのに適任と言わぬばかりの男たちの浅ましい冒険心は、ますます小町を高嶺の花へと祭り上げてゆくのである。

四　秘められた愛

だが、小町がいかに歌才に恵まれ群を抜く容貌の持ち

主であっても、厳然とした家柄の違いはどうしょうもない。宮中の姫たちがしかるべき皇子と結ばれて内親王となってゆく中で、小町はやはり寂しさに唇を噛んだ。

ああ、家柄さえ立派なら……それとも、あの方がやんごとないご身分などでなく、下司の賤しい出の人であったなら、いつでも相見えることもできたろうに。

小町の偽らざる胸奥の慨嘆である。

小町は夢をみていた。

……「小町、そなたの家門ではいかにそなたが才色兼備であっても、この王朝絵巻の世界で貴公子と結ばれ、その妃となることは至難の業である。よし万一、妃になり得たとしても、そこにはそれ相当な高位の姑や親族が待ち構えていて、何かと賤しめられることだろう。生涯家柄の差を背負って生きる羽目にもなりかねない。この私との将来だって同じことが言えよう……」

小町の目に涙が浮かぶ。

「それよりも小町、そなたの美しさと怜悧さを永遠に青史に留め置くことを願うべきだ。女人が嫁いで高位を極めたとしても、たかだか二、三十年に過ぎまい。あとはみな忘れられ草葉の露と消えてゆくのだ。妃などというものも過ぎ去ってみれば春の夜の夢のように、実に空虚なものであろう。女人として生まれたその類なき美しさを、人間の歴史のつづくかぎり留めるのだ。古今を絶して「小町」の名を永遠にすることこそが、並みいる高貴名門の姫君たちからはるかに優越する唯一の道であろう。それには……十八首の和歌を残すことだ。そなたと私が契ったのは、そなたが十八歳のときであったから。それで十分、そなたは歴史に名を残すことができる。永遠に、限りなく美しく……」

涙が小町の白磁のような頬を伝い落ちる。

親王は懐中から巻紙を取り出して広げてみせる。墨の色も鮮やかに、和歌に必要なおびただしい枕詞や感嘆詞が書き並べられている。

「これは和歌の原型ともいえるものです。その場、その時の感情をこの類語類句の中から選ぶとよい。しかも、この中に記した歌の主題と詞こそ、そなた小町にもっともふさわしいものばかりだ」

そう言い終えると親王は静かに立ち去っていった。小町は追いすがるようにその場に泣き崩れる。

思えば十六歳で出逢って以来、親王は限られた時間を惜しむように、小町に対して実に多くのことを語って聞かせてくれた。男のこと、女のこと、世の中のこと、そして人生について。和歌の道も厳しく仕込んでくれた。そのために親王が費やした言葉の濃密な質と量は、これから小町がどんなに長く生きて、誰彼と交わす言葉など、この何分の一にも値しないだろう。

別れたくない、行かないで！　と小町は親王の後姿に

叫んだ。だが、一顧だにしないで親王は去った。小町は自分の泣き声で目が醒めた。

それから、親王は天皇の思し召しにより、政略の意図で、さる高家の姫と婚約をした。小町の澄んだ目からとめどなく涙が溢れる。

そして、親王の婚礼が近づいたある日、小町は涙をのんで宮中を辞したのだ。小町の名は宮中の記録から完全に抹殺された。なぜなら、宮中では毎年のように身分の低い誰かは、親王や内親王の母親代わりになるしきたりがあるのだが、ただ一人、小町だけは母親代わりにならなかったからである。

五　宮中を去る

表面の華やかさとはうらはらに、明けても暮れても家柄の競争と嫉妬が渦巻く、それでいて何事につけても慣例という名目の形式ばって固苦しい宮中生活から解放された小町は、紅葉の名所である京の洛北で、自由奔放な生活に入っていった。

宮中では言い寄る公達も多かったが、身分の低いことをよいことに、一時の慰み者にされることは、何としても我慢ならなかった。小町の自尊心の支えは「美しさ」であった。小町にかぎらず女は自分が多少なりとも美しければ、それ相応に男性から大事にされて当然と思い込んでいるふしがある。並外れる美しさだった小町の場合は、男性に対しての要求も大きかったにちがいない。

ともあれ、京の都の文学青年たちとの華やかな交際は、こうして始まった。小町の年齢は三十歳に近かった。

小町の相手になったこれら文人貴公子たちはすべて年下にかぎられていた。

夫に相応しい男性は年齢的に妻帯者であり、若い女性を囲っている者が多かった。年下ならいつ別れてもいいという気楽さがある。自由でのびのびとした若者が、遊びの対象としては最適である。それに若者と交際しているかぎり、いつまでも若々しく華やいでいられるという特権もある。そんな交友関係は年とともに増す色香と才能への誇りで、ますます小町の文学的情熱を高めていった。

そして、ついには交際相手も単に青臭い貴公子というだけでなく、博識な文人を求めた。大伴黒主、小野貞樹、安部清行、文屋康秀等など、みな当代屈指の才人たちである。

しかし、天性の美貌と気位の高さと、かつて天皇側近の宮中女官であったという小町の誇りは、かりにも不用意に近づこうとする男性を、きっぱりと跳ね除けるだけの矜持に満ちている。

ともすればあだなき風にさざ波の
なびくてふごと我なびけとや

これは安易に親しく言い寄ってきた文屋康秀を跳ねつけたときの歌である。だが、それでいながら小町を取巻く環境は、それら文人たち相手の奔放な交際へと小町を駆り立ててゆく。

六　在原業平と恋

「今業平」として日本史を代表する美男子、在原業平と小町が知り合ったのもこの頃と思われる。業平は小町より十歳年下である。

業平の父は平城天皇の第三皇子阿保親王である。母の伊登内親王は平城天皇の父桓武天皇の第八皇女という。これをみても、当時近親結婚が盛んであったことがわかる。女が本居に住んで、男は女を娶るとその里へ夜な夜な通う。女を二人三人持つと、男は此処、あそこへと忙しい。遠く隔たった異腹の兄妹も珍しくなかったことだろう。

阿保親王の御子は男子だけでも五人いるが、天長二年（八二五）、業平は五男として生まれた。何人かいた阿保親王妃の中で、伊登内親王にとれば業平は一人子だったので、母の里でことのほか可愛がられて成長した。

しかし、四品に叙せられていた阿保親王は、弘仁元年（八一〇）に起きた薬子の乱に連座した廉で太宰権帥に左遷されていた。だが、天長三年（八二六）、許されて京に戻った阿保親王の奏請により、皇室直系の子である行平、守平、業平らに在原朝臣の姓が賜わられ、臣籍となったのである。

世の中にたへて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

この世にもし桜の花が絶えてなかったならば、この暖かい春の時節に、私の心はさぞのどかに落ち着いたものでありましょうに。

と業平は、桜に傾けた耽美の心のおもむくままに、咲くにつけ散るにつけ、われとわが心を疲れさせる嘆きを詠じている。はかなくも美しい桜花に耽溺する詩人の心を逆説的に詠みきったところに、業平の情熱的な面が窺える。

絶世の美男子というと、頭脳の方は？というのが世間一般の通り相場なのだが、業平が天才的な詩人であったことはまちがいない。正史である『三代実録』の中で、「体貌閑麗にして放縦不抱」と、当代随一の学問の神様菅原道真が折紙をつけたほどの風流才子である。まさに小町

と好一対なのだ。

この業平には昇華されたロマンスが秘められている。

大原や小塩の山も今日こそは
神代のことも思ひいづらめ

『古今和歌集』の詞書によれば、この歌は藤原高子（二条后）が東宮御息所として大原神社に参詣した折、業平が詠んだものという。

藤原一門の氏神である春日神社を京の近郊に移したのがこの大原神社で、藤原家出身の皇后・高子は華麗な行列を整えてこの神社に参詣するのが慣わしであった。『大和物語』はこの一首から、高子と業平の遂げられない恋の物語を展開する。

表面は今日の盛儀をたたえる歌であるが、余韻として、業平の高子に対する抑え難い愛の沈痛が読みとれる。

業平は高子が乗っている御車のすぐ近くの薄暗い場所に立っている。折あらば、車の中の女に一言申し入れたいと思っていたのだ。

それと気づいた高子は、人々に禄（当座の引き出物）を与えるとき、わざと業平を後まわしにした。そして、肌に着ていた単の衣を脱ぐと、車の後から業平に与えたのだ。そのとき業平が忍びやかに口ずさんだのがこの歌である。

高子妃と私の秘密、それはもう神代のことといってもいいぐらい、遠い昔のことになってしまいました。家も身も捨ててまでと燃え上がったあの日あの時の思いを、今日同じこの道を通って、あなたは思い出していらっしゃるでしょうか。

というのだ。高子は後の『源氏物語』の「朧月夜の君」のモデルになったほどの情熱的で美しい人妻であった。

二人の出逢いは、高子の従妹の明子（染殿后）のもとに、宮廷の催しを見せてもらいに行った夜の偶然がもたらしたといわれる。

「大幣の引く手あまた」禊をする具である大幣は誰彼の手が触れるもの、今でいえば、もてもて身がもたないといわれる業平だが、よりによって結ばれてはいけない相手、業平の父阿保親王を死に追いやった政敵、藤原良房の姪である高子と恋に落ちたのである。しかも一途に燃え上がってしまったのだ。

業平は、当時高子のいた叔母五条宮皇太后の西の対（屋敷）へ夜毎通いつめた。だが、間もなく二人の仲は家人に知られるところとなり、番人をおいて警戒が厳しくなった。

人知れぬわが通い路の関守は
宵々ごとにうちも寝ななむ

人に知られないように私が通って行く道で、警戒の目を光らせている人には、夜毎ぐっすり寝ていてもらいたいものを。

少年のような率直さが、高子に対する慕情の純粋を示してあまりある。この歌は人々に伝誦されて、二人の仲は世の人の同情を誘った。当時の社会は秘められた恋には寛大で、優れた歌がそれに絡めば、敵視する方がものの哀れを知らぬ者といわれて非難された。

だが、それも風流を解するごく限られた粋人の範囲のことで、家柄を重んじる階級には無縁であったから、なお、いっそうの厳しさが二人の前に立ちはだかった。藤原一門の親族会議で高子の遺産相続は認められなくなり、経済的圧迫を加えることが決定される。

いつの時代にも見られる、血を分けた者たちが執る非情手段である。

高子は当然のごとく反発した。もちろん業平も同調し、二人は駆け落ちをして恋を貫く決意を固める。

業平には長岡に、母から受け継いだ別荘があった。先ずそこを目指すことにした二人が、手に手をとって桂川を渡ると、小塩山が目に入る。

「ここからあの山の方へ道をとるのですよ」

業平が説明をする。秋草の花々が咲き乱れ、露が星のようにきらめく明け方である。

「まぁ、まるで珠のようですこと」

高子が目を輝やかす。業平はその様子に不憫を感じて、次の歌を詠んだ。

白玉が何ぞと人の問ひしとき
露とこたへて消なましものを

あの光るものは白玉でしょうか。それとも何なのでしょうか、とあなたが尋ねられるので、あれは露の光です、と返答しました。けれどこんな逃避行をするようなみじめな二人なら、あの儚い露のように、いっそ消えてしまった方がよかったかもしれません。

『伊勢物語』では摂津国（兵庫県）の芥川まで逃げのびたことになっているが、現実には京の町外れで早くも追っ手に捕まってしまったらしい。

二人は引き離された。

高子は叔母の屋敷に監視付きで閉じ込められてしまう。業平は、やはりあの時死ねばよかったのだと後悔しながら、傷心を抱いてあてどない流離の旅に出た。

それから数年の後。

桜の花の咲く季節、業平は京に帰ってきた。そして、五条の家の西の対に行ってみたが、高子の姿はどこにもなかった。その頃、高子は完全に宮中の人となって入内していたのだ。

そうとも知らぬ業平は、恋しい人の姿を求めて、月の傾くまでその辺りを彷徨い歩いていた。耐えられないほどの寂しさを噛みしめながら、絶唱とまでいわれる歌を詠む。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

月よ、お前は昔のままの月ではないのか、いや、昔のままであろう。春よ、お前は昔のままの春ではないのか、昔の春であろう。そして、この私も昔と変らぬ一つの身であるのに、傍らにいたあの人はどこにもいない、違った身になってしまった。

業平の歌の数々は高子の耳にも届いていた。

しかし、業平殿が再び宮中に忍び入ってこの私を連れ出すことはないだろう。業平殿は明らかに歌詠みの境地へ逃げていってしまった。これが天才歌人の恋の結末だったのだ。と高子は深く嘆き悲しんだ。

それから十数年間、藤原家から白眼視された業平の官位の昇進は、当然のごとく許されなかった。

嘉平二年（八四九）に従五位下に任じられてから、貞観四年（八六二）に従五位上に至るまで、実に十三年間の長きに亘り、冷遇に甘んじなければならなかった。

ところが、元慶元年（八七七）に従四位上となり、その後、任官昇進のスピードが増して、元慶三年には蔵人頭に任じられる。

これには、今や東宮の母上となった高子が、本来の奔放な生き方を取り戻したことに原因があった。しかし、それは恋愛の方にではなく、華やかな宮廷サロンの主催者としてであった。

このサロンには菅原道真をはじめとして橘広相、紀長谷雄など一流の学者、文人を集めていた。漢詩文の制作、歴史の編纂などを行う名目を持つ、和歌を中心とする文化サロンである。

これは、高子が業平を意識しての開催であることは明らかだ。歌人としての資格を持つ業平と、晴れて接近する機会を得た高子は、業平を菅原道真などに紹介する。この男性の文化サロンは、藤原氏と並ぶほどの勢力がある左大臣源融（みなもとのとおる）の邸宅で催されていた。そこにも業平が参加できるように計らい、歌会の司会者めいたことなどをさせた。

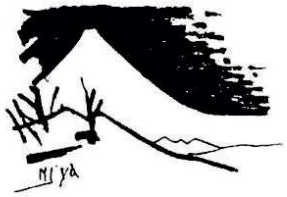
その後、業平は貞観十四年（八七二）には渤海大使の接待役になり、左大臣源融の勅使にもなる。だが、昇進するにつれ、歌人としての業平は「解放されざる」自分を感じはじめるのだ。

業平のような美貌と文才は、あくまで儀礼的な面にのみ使われて、政治性よりも社交性を求められる。実の伴

わない装飾品的存在では、本質はロボットに過ぎない。
そのような己が身を観じれば観じるほど、業平は自分の後半生は父阿保親王が辿ったのと全く違う道、つまり藤原氏への接近と妥協の道を、生涯歩まねばならないと観念するのだった。その思いから業平は藤原一門に対して、今度こそは従順になると忠誠を誓い、尽そうとした。
しかし、父と自分の境涯のジレンマに苦しんだ業平は、とうとう歌の道一筋に生きるべく、官位も宮廷サロンも辞してしまった。
あぁ、やっぱりあの人は歌人そのものであった。
高子はしみじみと業平と生きた激情の過去を顧みる。だが、高子の育成した和歌のサロンは滅びなかった。そして、高子はどこまでも后そのものであった。
延喜五年（九〇五）に作った『古今和歌集』には「二条のきさきの春のはじめの御歌」と題して、

雪のうちに春はきにけり鶯の
こぼれる涙いまやとくらむ

あれほどまでに情熱的に感傷的に、雪のようにこぼれ落ちた涙も、いまやっと溶ける春がきました。
高子の生涯におけるただ一首の歌が遺されている。業平との長く激しかった恋の挽歌であろうか。



パリ―いくつかの情景

森　実与子

人気のないがらんどうの建物をバックに、黄色く色づいた木々が、美しくライト・アップされている。幻想的な眺めを、由実はうっとりしながら見入っていた。真っ暗な窓が双眼鏡のように並ぶ白褐色の建物と、樹木のハーモニーが見事に写し出され、今の季節にふさわしい、落ち着いた雰囲気をたたえている。これまで由実が目にしたことのない、陰影に富んだ風景である。枯葉の匂いが漂ってくるような河岸のなかを、船はゆるやかに進んでいく。
だが、窓の外の森閑とした風景とは裏腹に、セーヌ河を遊覧するバトー・ムッシューの船内は、喧騒の真っ只中にあった。観光客向けの遊覧ツアーは、定刻の八時半にアルマ橋を出発した。窓に対して垂直に、規則正しく並んだ長テーブルの、お仕着せのディナーの前に、由実は同胞たちとともにお行儀良く座っていた。しかし、時間がたつにつれて、乗客たちにワインの酔いが回ってきたのだろう。いつしか部屋の中は、甲高い話声や、淫らな笑い声などが充満し、窒息しそうな状態になっていた。日本人ばかりの部屋に閉じ込められているから、東京の居酒屋にいるのと大差ないような騒がしさである。
この喧騒を他人事のように感じながら、窓際の席に座っていた由実は、ひとりでじっと河岸の景色に見入った。

飛行機とホテルがセットになった七日間のフリーのパリ滞在ツアーに、由実は一人で参加していた。七日間といっても移動を含めての日数なので、正味四日しかない。それでも、定職を持たない由実にとっては、アルバイトでためたお金をはたいての贅沢な旅だった。やっとお金の余裕ができたので、子供の頃から憧れ続けていたパリにフラッと舞い下りてみたくなったのだ。
連日、由実はパリの街中をさまよった。

サンジェルマン・デ・プレ界隈の洒落たブテック街、学生たちの行き交うカルチェ・ラタンの雑踏のなか、枯葉が敷き詰められた人気の少ないリュクサンブール公園、工事中のように銀色のパイプで外観が覆われたポンピドゥーセンター、ギリシャ神殿のような造形美を見せるマドレーヌ寺院、優雅さが漂うフォーブル・サントノーレ通り、壮大なゴチック建築のノートル・ダム寺院……、由実はパリの名所を、地下鉄を乗り継ぎながら、精力的に歩いた。

どの景色も由実にとってはじめての風景であり、憧れのパリにいるという実感で心が高鳴っていた。ヨーロッパの秋は早い。十月の末ともなると、連日、灰色の空から、時々、薄日が射す程度のどんよりとした天気が続く。せっかくエッフェル塔に上ったものの、霧に覆われて、下界を見下ろしても、何もみえなかった。

ただ、凱旋門から俯瞰して眺めた街並みは、すばらしかった。霞がかった青白い空に優しく包み込まれ、建物や道路や車、街路樹のどれもが、駒のように整然と並ぶ。絵になる風景とはこんなことをいうのかと、街に漂う空気に飲み込まれながら、一人で感慨にふけった。

けれども、カタコトのフランス語で街ゆく人に道を尋ねても、実に素っ気ない。カフェでフランス語のメニューを渡され、なかなか読めなくて注文に手間どっていると、店のボーイは嫌悪感を露わにする。そして、まったく無視されてしまうのだ。

無愛想で傲慢なフランス人に対して、由実はある種の落胆を感じていた。いま自分はパリという街の只中にいながら、ここにいる人々はとても遠く手の届かないものだという距離感と劣等感、それがささやかな失望となっていた。

(誰だって異国の地にきたら、おのぼりさんでしょう。何をやるにも手間がかかるに決まっている。フランス人だけが世界で唯一の人種ではないんだから、もう少し親切にしてくれてもいいじゃないの)

由実は胸の内で、不満の声を上げていた。風景が美しすぎるために、かえって打ちのめされたような気分に陥っていくのだった。

昨日、歩き疲れて夕方ホテルに戻ると、同じツアー客の夫婦に、夕食を誘われた。

「ガイド・ブックで調べてきた、いいお店があるんです。ご一緒しませんか」

食事のおいしいまずいは、料理の内容よりも同席した人間や雰囲気に左右されるものだ。これといった予定もなかった由実は、一人で夕食を食べても味気ないと思い、誘われるままに同行することにした。

九州からやってきたという夫婦は、由実より一回りくらい年上の、三十代半ばに見えた。頭が少し薄くなりかけた夫と、おかっぱ髪のおとなしそうな妻。二人が人の良さそうな無邪気な表情を示してくれたので、由実は夕食を一緒にしても悪くないと思えたのだ。

ホテルからタクシーに乗って、シャンゼリゼの近くのレストランに向かった。ガラスのドアを開けると、広い店内に赤い絨毯をしきつめ、白いテーブルクロスをひいた四角いテーブルが並ぶ。壁に飾られた絵画や随所に置かれた観葉植物、明るい照明が、モダンで手軽なフレンチレストランと思えた。だが、時間が早いせいか、まだ客の姿もなく閑散としている。

席につくと、痩せて背が高く色白の、いかにもフランス人らしいボーイがメニューをとりにくる。

「今回の旅行、とても楽しみにしていたんです。ヨーロッパははじめてですから。今日は二人で、バルビゾンの方まで足を伸ばしたんですよ」

由実と違って、夫婦は綿密に計画を立てて、郊外に行ってきたという。

「家内が絵が好きなもんで、バルビゾンに、どうしても行きたいっていうのでね」

「いいですねえ。ミレーとか、バルビゾン派の画家たちのアトリエが残っているのでしょう。フランスの田舎町、私も行きたかったわ」

「絵の世界、そのままっていう感じでした」

「のんびりできたわね」

「私は、次回のお楽しみかしら」

「僕たちは九州の片田舎に住んでいるもので、食事も期待してきたんですよ」

もっぱら口を開くのは夫の方で、かなり饒舌だった。

「東京には、ビストロ通りっていうところがあるんですか。フランス料理のお店が、たくさんある通りらしいですね」

「さあ、私は聞いたことがないですけど。どこなのかしら?」

「確か、青山あたりだと思いますけど」

「お二人とも、かなりの食い道楽なんですね。それに、東京の人間の方が、かえってそういうこと知らないのかもしれませんね」

由実が笑いながら答えると、

「行ってみたいわねえ」

妻が相づちを打って、二人で仲良さそうに笑う。

前菜の野菜のテリーヌ、コンソメスープなど、順番に食事が運ばれてくる。

「やっぱり本場のフランス料理はおいしいですね」

夫婦は満足気な表情を見せて、微笑む。

由実は食事の内容よりも、閑古鳥が鳴いている店のことが気になっていた。八時を回ったが、客の入ってくる気配がない。店内の作りは凝っているけれど、何か寒々しさが漂っているような気がしてならない。もっとも有名な星付きのレストランというわけでもないから、そう

そう賑わうこともないのだろうか、などとあれこれ考えているうちに、
「お客さん来ないですね、このお店」
思わず口に出していた。
「きっと平日だからでしょう」
夫婦は気にする風もない。鴨肉のローストやアンコウのソテーなど、それぞれが注文したメインの皿が目の前に置かれ、いよいよ食べることに熱中していた。
黙黙と食事を口に運んでいたその時、突然、夫の動きが止まった。料理をじっとのぞき込み、うつむいたままだ。一瞬顔をあげたが、それまでの晴れやかな表情が、一転して不審な顔つきに豹変している。手はガタガタ震えだした。
「……どうしたの？」
だが、妻の問いかけにも答えない。そのうちに、力が抜けたのか、ナイフとフォークがガチャリと皿の上に落ち、ナイフははずみで絨毯に落ちて転がっていく。夫は力なくうなだれている。
「具合でも、悪いんですか？」
由実も心配になって、尋ねる。
「ねえ、一体、どうしたの？」
夫は下を向いたまま答えない。
会話が途切れ、それまでのなごやかな空気が、急に澱んだものになった。

「……こんなことってありますか、……料理のなかに」
そこまで言うと、絶句してしまった。隣の妻が、夫の料理をのぞきこみ、
「ひどいわっ」
と絶句する。
「……魚のなかに、ゴキブリが……」
夫はようやく顔をあげたが、目は潤んでいる。
「まさか」
由実は返す言葉も見つからない。
「こうやってはるばる遠くから来て、料理を楽しみにしていたのに、こんなことってありますか。……私たちが日本人だからでしょうか」
「そんなつもりじゃなくて、何かの拍子にそうなってしまったのよ」
妻のとりなしに、由実も調子を合わせ、
「そうですよ。本に紹介されるくらいのレストランですもの。きっと、何か間が悪くて……」
「いくらなんでも、ひどすぎるじゃありませんか」
二人がなだめても、夫はなすすべがない。
「取り替えてもらいましょうよ」
ボーイを呼んで、夫はたどたどしい言葉で皿を見せ、説明する。しかしボーイはバツの悪そうな顔をしただけで、皿を取り替えるでもない。
「出よう。帰ろう」

夫の落胆は、怒りに変ったようだった。けれども、予想もしない事態に、すぐに店を出る気力も失せていた。三人はしらけた気分のまま、席に座っていた。
客の来ないレストランには、やはりそれ相当の理由があったのだ。
(料理のなかにゴキブリが入っているなんて、失望のあまり、私なら一瞬、死にたくなるかもしれない。けれど、よくよく考えてみれば、これほど滑稽な出来事はないだろう。パリの、しかもシャンゼリゼの真ん中のレストランの食事が、ゴキブリ入りなんて。……気取ってはいるけれど、所詮フランス人だってこの程度のものなんだわ。花のパリが聞いて呆れるわ)
由実は、口にはださなかったけれど、密かに心のなかで呟いていた。
そして次第に、この夫婦がとても愛すべき人たちに思えてきた。夫の見せた悲しげな表情とストレートな喜怒哀楽は、由実自身の気持ちをも代弁してくれているようで、妙な親しみを抱いていた。
ボーイはその後、何食わぬ顔をしてデザートとコーヒーを運んできた。
「ろくに謝りもしないで、無神経なボーイね」
妻の方が、ヒステリックに叫ぶ。さすがに三人とも、デザートに手をつける気にはなれなかったが、コーヒーに口をつけて、早々にホテルに戻った。

レストランを出るとき、店のなかには中年のフランス人カップルがコーヒーを飲んでいただけで、他に客は来なかった。
そんな前夜の出来事をチラチラと思い出しながら、由実は一心に外を見続けていた。
その時、由実の視線の先に、とある若いフランス人カップルの姿が目に入った。窓の外の、河岸に面した白い石段に座る、パリの男と女である。
グレーのタートルセーターに黒い帽子の男は、ジーパンをはいた長い足を石段の上にポーンと投げ出している。黒っぽいジャケットとパンツを着た女は、長い栗色の髪が豊かになびく。それはまさしく、映画のワンシーンのような場面だった。階段の一段上に女が座り、下にいる男は女の方を見上げながら仲睦まじく話をしている様子だ。観光船から見られているのを、彼らは意識しているだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。そのうちに、二人の姿が一つになり、抱擁をかわす。それはほんの一瞬の甘美な出来事であり、みるみるうちに、船は二人から遠ざかっていく。どんちゃん騒ぎの船内では、おそらく、窓際に座り、ひたすら外を見つめていた由実の目にしか、二人の姿は入らなかったのではないか。
途端に由実の心のなかを、再び一抹の落胆が襲った。
(あんなに美しい恋人同士を目の前にして、何故私はこん

な雑多な席にいて、ただ呆然と眺めていなくてはならないの。なぜ私は、あの女になれないのだろうか。眺めているだけなんて。私も、あんな恋愛の主人公になりたいというのに)

大多数が、パリの真ん中のセーヌ河を船で遊覧しているということだけで浮かれ気分になり、お喋りに花を咲かせ、徒党を組んでカラオケまがいに歌まで歌っている。こんな拗ねたような感傷的な感情を抱くのは、この船のなかの何百人の乗客のなかで、由実ぐらいのものかもしれなかった。

船は決められた路線を機械的に走り、くぐり抜けていくいくつもの橋も、どれがポン・ヌフかイエナ橋か、名前もわからない。あの恋人たちがいたのはシテ島なのか、サン・ルイ島なのか場所も定かでない。はじめてのパリでは、まさしく由実は、はるか東洋からやってきたおのぼりさんであり、自分の所在すら認識できないでいる。けれども、恋人同士の絵になる風景だけは、確かに、由実の記憶のなかに深く食い込んだのである。

この風景を目にするために、由実は一人はるばるパリにやってきたのかもしれない。それは自分だけに語られた物語であり、誰にも見えていないのに、由実だけに見えた風景……。しかし、そんな甘ったるい感傷さえ、単なる幻想にすぎにかったかもしれないのだ。

船に乗り合わせた多くの人々の弛緩した精神のなかで、由実の意識だけが氷のように張り詰めていたからだろう。ひとときの夢が眼前で霧のように広がり、跡形もなく消えていった。

気がつくと、雨の滴が窓に当たり、銀色に光っていた。

(ああ、もう冬のはじまり……)

船を降りて、タクシーに乗ってホテルへ戻った。

タクシーの運転手は女性で、助手席の毛布の上には茶色い犬が座っている。大きな耳がダランと垂れ下がった毛並みのいい大きな犬は、ドライバーの方を向いてきちんと席についている。暗い広い道路は、深夜になってかなりのスピードでとばす車のライトが、光の渦になって流れていく。犬は、時折、舌を出して呼吸を繰り返したり、後ろを振り向いたり、まるで彼女のナビゲーターをつとめる、いっぱしの相棒のようだった。二人の姿はほほえましく、由実の顔は自然にほころんでいく。女が犬とともにたくましく生きる都会の風景は、旅行者である由実に、生活の臭いを感じさせてくれたのだった。

翌日、由実はヴェルサイユへ出かけた。丸々二日間パリの町中を散策したので、都会を離れて郊外へも足を向けてみたくなったのだ。

地下鉄の駅で、郊外へ向かう電車に乗り換えた。パリ市内を抜けると、地下に潜っていた電車が地上に顔を出

し、窓外の風景は都会の密集地帯から素朴な住宅地に変化していく。手入れの行き届いた小さな庭を持つ家々が、目の前を通り過ぎてゆく。三十分ほどで、終点のヴェルサイユに着いた。

駅を出て五分ほど歩くと、すぐにヴェルサイユ宮殿の入り口が見えてきた。前庭に、この宮殿の主だったルイ十四世の騎馬像が立つ。馬にまたがり右手をあげた堂々たる宮殿のシンボル像は、しかし、長い年月の間に雨風にさらされかなり痛めつけられている様子だ。この日の天気は今まで以上にどんよりとしていて、靄がかかった怪しい具合だった。その背景にある宮殿の建物は、まるで乳白色の霧のなかに姿を隠しているような曖昧さである。ひんやりと頬をかすめた風に、由実は思わず肩をすくめた。セーターの上に厚手の上着を着込んできたけれど、時折吹きつける風は、肌を鋭利に刺す刃物のように冷たい。

観光客の群れが、いくつもかたまっている。外人、日本人、各国の団体客が、人数制限をされながら、順番になかに送りこまれていく。由実も日本人のガイド付きの一団に混じって、宮殿のなかの一部屋一部屋を、人波に押されながら見学していった。

どの部屋も、床にはビロードのようなふかふかの絨毯を突き詰め、鮮やかな天井画が波打ち、金をほどこしたゴテゴテの装飾が続く。ガラス細工のようにきらめくシャンデリアの数々、天蓋から厚いカーテンで囲まれた天国の揺りかごみたいな豪華なベッド、鏡がはりめぐらされ迷路のような広間……。

それはあたかも、白い大粒の真珠、華やかな光を放つダイヤモンド、血のように赤い珊瑚、ルビー、サファイア、トパーズ、はてはガラス玉といった具合に、ありとあらゆる宝石の寄せ集めを見ているような眩惑……。目の前にめくるめく綴られていく、王朝絵巻のページは、南国の海のはてしない波打ち際のようでもあり、息をつく間もないくらいの、絢爛豪華の連続である。由実はかえって落ち着きを失い、それらをじっくりと目にする余裕もなく、混雑した人波のベルトコンベアーに乗せられて、押し出されていった。

宮殿の外に出ると、広大な庭園が広がる。きれいに刈り込まれた緑の絨毯、赤やピンク、黄色の色とりどりの小さな花々、色づいた木々、水の出ない噴水、円錐形に刈り込まれた植木、宮殿の中の続きのように、すべてに手入れが行き届き整然としている。

吐く息は白かったが、由実は汗をかき、微かな疲労感を感じていた。黙々と歩き続けていくと、次第に、人の手を加えていない自然そのままの落葉した大木や枯葉の絨毯に風景が変っていく。由実は、やっと息苦しさから解放された気分になった。乳白色の霧に誘われるままに、さらに歩をすすめると、いつしか宮殿の外に出ていた。

回りを見回すと、あれほど賑やかだった観光客の姿もない。団体たちのなかから由実はたった一人、ポツンとはじき出されたような格好である。何か目に見えない力に吸い寄せられるようにして、宮殿の敷地の外の一般道路に来ていた。

（迷子になったのだろうか）

衝動的な旅に出たのには、それなりに理由がある。東京の日常でいつも感じている疎外感、行き場のない焦燥感、そういったものから解放されたくて、抜け出してきたのだ。けれども結局、自分は、異国にきても同じような感情から抜け出すことができないらしい。いや、ますます増してかえって孤立していくだけなのかもしれない。世界の果てまでいったとしても、逃れることはできないのだ。

石畳の道路には車が行き交い、アパートらしき建物が続く。宮殿のきらびやかさに息をつく間もなかったけれど、やっと人間らしい場所にたどりついたという、妙な安心感を抱いて、ホッと息をついた。

（私は、ああいうきらびやかな場所は、苦手なのだろう。整然として完成されたものよりも、廃虚とか、どこかでバランスを崩したような混濁したものに魅力を感じる人間なのかもしれない……）

途端に、足は重く、もうこれ以上、歩けないことに気づいた。

由実は一休みしようと、あたりを見回した。すると道路の向かいにある、一軒の小さなカフェが目に入った。華やかな看板もなく、素通りしてしまいそうな小さな店だが、とにかく一息つきたかった。道路を横切ってガラスをはめ込んだ木のドアを開けると、間口は狭いけれども中は思ったよりも広く、数人の地元客らしい人たちがお茶を飲んでいる。

寒さのために手はかじかみ、頬を触ると氷のように冷たい。朝早くホテルを出たのに、時計を見ると、もう三時を回っていた。何か暖かいものを、早く胃の中にいれたかった。由実は窓際の椅子に腰掛け、カフェオレとサンドイッチを注文した。窓から外を見ると、ヴェルサイユの街は、やはり都会のパリとは違う。もっと翳りがあって、憂愁に富んだ町並みが静かに横たわる。

遅い昼食を食べながら、ふとカウンターの方に視線を向けると、カフェの女主人らしき女性が、目に入った。面長の顔をした痩せた女性で、白髪まじりの黒い髪を後ろで束ねている。丁度、由実の母親と同年代くらいの女性に見えたが、何よりも由実の印象をとらえたのは、彼女のグリーンの瞳である。突き抜けるように澄み、ガラスのような鋭さ、硬さを持ち合わせているようだが、それでいてどこか寂しげな空虚を見つめている凛とした目。一瞬、彼女と由実の視線が、宙でぶつかりからみあった。その時、女の目から硬さがとれ、フッと優しい視線を、投

げかけられたように感じた。由実ははにかむように、あわてて目をはずし、外の道路を見つめた。

雨がパラッキはじめた道路には人影もなく、車だけが通り過ぎる。とその時、この女主人の硬質さは、この街で生きていることの証とでもいうような類のものであり、厳しく寂しげだけれども、生への根源のような光をたたえていると思えたのだった。そんな風に感じたのは、雨が降り出したせいかもしれないが。

彼女の視線を感じながら、由実はコーヒーをすすった。なぜ、この私を見ているのだろう。肌も瞳の色もまったく異質の、彼女の生きる世界とは、まったく無縁のところで生きてきたような自分を……。そんなことをぼんやり思っていると、店のなかにいた一人の日本人らしき男性が、突然、由実に近寄ってきた。

「一人旅ですか？」

微笑みながら話す男は、黒いタートルネックのセーターに上着をきた、四十歳くらいの男である。由実は軽くうなづいた。

「私は、パリに来て十五年になるんです。通訳や翻訳の仕事をしていましてね。観光客の案内に、よくこの町にもこのカフェにも来ます。…ここの女主人はエレナというんですが、彼女とも顔なじみなんですよ」

由実の心の中を見透かすように、男は言葉を続けた。

「とても硬質な、吸い寄せられるような目をしているわ。……フランス人には見えないけれど」

「ええ、彼女はポーランド人なんです」

「フランスの人と結婚して、ここに住んでいるのかしら」

「そうではなくて、祖国を追われたんです」

男の言葉に、由実はハッと息を飲んだ。

「ポーラントに住んでいたユダヤ人ということですか」

「そうです。彼女の両親は、この前の戦争で祖国を追われて逃げのびてきた、いわば難民なんです」

「きっと、私たち日本人には想像できないほどの苦労をしているんでしょうね」

着のみ着のままに近い状態で、幼い子供といくつものトランクを抱え、国境を越えてよその国へ逃げていくユダヤ人たちの姿は、映像で見たことがある。陸続きの国境を、足早に、時に転びながら、不安と恐怖と苦痛に満ちた表情で、泣き叫びながら、流れ流れていく難民たち。

かれらの表情は、大きな衝撃となって由実の記憶のなかに鮮明に焼きついている。そんな思いをしているから、彼女の目はこんなにも強固で寂しげなのだろうか。

「両親と一緒にパリに亡命して、しばらくは田舎町で生活をしていたそうです。戦後、ポーランドへ戻り、祖国の男性と結婚して娘が一人生まれたんです。けれど娘は、突然難病にかかって、大都会の病院でなければ治すことのできない病に冒された。それで、再びフランスのこの町にやってきたそうです」

「その娘さん、今はお元気なのでしょうか」
男は首を横に振った。
「助からなかった？」
「ええ、十年前に亡くなったそうです。あなたが、その娘さんに似ていると、エレナはいっています」
「私が？私は日本人ですよ」
由実は驚いて、大きな声を発していた。
「…なんだか、娘を見ているようで、あなたから目が離せなくなってしまった。失礼しましたと、エレナからのメッセージです」
由実は、ガラス窓に写った自分の横顔をみた。その顔は自分でもびっくりするくらい、頬がこけ、目が窪んでいた。連日さまよい続けたせいで、こんなにやつれてしまったのか。その顔は、いわれてみれば、ユダヤの少女に似ているといわれてもおかしくないのかもしれない。一体、自分は何を求めてこの異国の地にやってきたのだろうか。たった四日の、安易な気まぐれ旅行にすぎないかもしれないが、人種を越えた何かのつながりの片鱗をかすめたような、不思議な感情が、体の奥底から沸き上がってきていた。
店の照明がガラス窓に反射して、キラリと光る。雨の滴と重なりあったその小さなきらめきは、エレナの追憶そのものなのかもしれなかった。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）
春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日
〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

義人・伊豆頭七異聞（その一）

堀内永代

第一章　危機一髪

（一）

ドン、ドン、……ドン、ドン、……
「お母ぁ、お母ぁ、おらぁ、やったぜ」
春寒の夕暮れ時、表の大障子戸を激しく叩く音と、緊迫した中にも精根尽き果たしたような男の子の声が台所に聞こえてきた。夕餉の支度をしていた伊豆国仁田村の本百姓・清六の女房おかねは、長男稲七（とうしち）の呼び声に、慌てて表土間の大障子戸を開けると、全身血だらけ泥だらけの稲七が倒れ込んできた。
「とうしち、おみゃぁーどないした。おみゃぁ、その顔ぉどないした」
おかねは思わず、独り息子の稲七を抱き起こした。
「お母ぁ、おかぁ…おらぁ、おらぁ…お春姉ちゃん助けたぜ…」
「そんなこったらより、おみゃぁ、その顔ぉどないした」
稲七の顔は、左眉尻に負った傷口から流れ出た鮮血と泥で、赤黒く汚れていた。十二歳の稲七は子供としては大柄であるが筋骨はまだまだ幼く、前髪立ちの髪は乱れ、手も足も泥だらけ、袷の着物はぼろぼろに引き裂かれて存分に痛め付けられた姿である。あどけない顔立ちをしているだけに見るも無惨であった。
おかねは、稲七の答えを待たずに、裏の井戸端に抱き抱えるように連れていき、血と泥で真っ黒に汚れた着物を脱がせ、顔と体を洗ってから家の中に抱き入れた。
春とは名ばかり、弥生の季節風は冷たい。おかねは、ぶるっと震える稲七の顔や手足の傷を焼酎で洗った。
「痛ててぇ。焼酎が滲みる…」
「馬鹿たれ、ちょっくら我慢せぇ。動くんじゃぁない。手当ができないじゃぁないか」

おかねは稲七をなだめたり叱ったりして傷口を消毒し、有り合わせの晒で応急処置をした。左眉尻に負った傷口は大きく、斜めに二寸（六センチ）ほどもあったが、傷は浅かったのが幸いであった。その傷は、喧嘩相手に突き倒された拍子に石か木杭で抉られた傷であったが、出血の酷さの割りには軽傷で、おかねはホッと胸を撫で下ろした。体には沢山の黒痣もできているが、いずれも打撲傷で見た目ほどの深手ではない。骨折もないようだ。若い柔軟な体が幸したのであろう。後は破傷風さえ発病しなければ大丈夫だ。

「とうしち、おみゃぁ…さっき、お春坊がどうしたとかいったなぁ…お春坊って、東の鍛冶屋のお春坊か。どうかなったのか」

「おう、おらぁ…お春姉ちゃん助けたぜ。お春姉ちゃんは、着物は破れたが体は大丈夫だ」

「お父うが留守の間に、おみゃぁにもしものことがあったら、お母ぁはお父うに合わす顔がなくなるだで。喧嘩でもしたかなぁ。一体どうなっただか話してみろや」

興奮覚めやらぬ稲七の話は要領を得なかったが、喧嘩の経緯は次のようなことだった。

稲七が原木の伯父の家へ父親の言い付けで行った帰りに、狩野川の土手沿いに帰ってくると、船着き場の近くで、

「誰かぁ助けて…」

と女の悲鳴が聞こえてきた。

「なんだろ…」

と思って急いで悲鳴の聞こえてきた方へ飛んでいってみると、土手の窪みのところで一人の若い女を、男たちが四、五人で押さえ込んでいた。女の上に馬乗りになっている男が、

「この女…暴れやぁがってできゃぁしねぇ、ちったぁおとなしくしねぇーか、おめぇたちゃぁしっかり押さえてろ」

といって仲間の若い衆に怒鳴った。

そのとき女は、手拭の猿轡を噛まされて、

「ウ、ウッ…」

と声にならない声をあげてもがいていた。紺地の脚絆を穿いた女の脚は大きく広げられ、藍染めの七分丈の野良着の裾は腰の辺りまで捲り上げられ、真っ白な臀部はすっかりあらわになっていた。胸元も大きくはだけて危機一髪の有り様だ。それでも女は男の毒牙から逃ようと顔を真っ赤にし、髪を振り乱し、馬乗りになって覆いかぶさってくる男の胸倉に両手を突っ張って、精一杯の抵抗をしていた。

稲七が怖わごわと近寄って見ると、どうもお春のように見えた。びっくりして、これは助けなければならないと思い、無我夢中でお春の上に馬乗りになっていた奴に、どどどーんと頭突きをくらわせた。

するとお春の上に乗っていた男は、土手下に転がって川の中に落ちてしまった。

稲七も弾みで土手の窪みにつんのめってひっくり返り、その拍子で顔をどこかにぶっつけて怪我をしたのだった。

お春は上から押さえられてた男がいなくなったので、稲七の方へ転がって逃げてきた。

「やいやい、この餓鬼きゃぁ何でぇ…」

「この野郎、畳んじゃえ…」

ということで、男四人対稲七が一人という取っ組み合いになった。稲七は

「こりゃぁいけね…」

と思い、有りったけの力をぶっつけた。

始めにかかってきたソップ型の男は、稲七が前に突き出した左手をむんずと掴んでぐっと引いた。稲七は簡単に引き倒されるのかと思いきや、びくともしない。反対に稲七が

「キエーッ」

と奇妙な気合をいれて、掴まれた左手で逆に相手の腕を掴み直して振り回すと、ソップ型の男はドドドッと土手を転がって、ドブーンと二間ほど下の狩野川に叩き込まれてしまった。

「このガキぁ、てえしたガキだ」

と今度は二人が同時に前と横から飛び掛かってきた。たかが子供となめている男たちと、死に物狂いの稲七とでは、気迫のうえで既に勝負がついていた。取っ組み合っているうちに二人とも狩野川に突き落とされてしまった。最後に残った一人は怖じけづいて、川に落ちた仲間を見捨てて逃げて行ってしまった。

稲七がハッとして後ろを見ると、お春はハァハァ息を弾ませ、腰を抜かしたようになり、土手に這いつくばっていた。稲七は顔から血が流れ出るのもかまわずお春を背負って東の鍛冶屋まで送り届けてやった。男たちは川向こうの日守村の権太らの爪弾き者であった。

権太のほかに、吾作や茂吉らもいた。彼らはいつも仁田の方へやって来て、威張っているので、今日は稲七が仇をとったというわけだった。

「姉ちゃん、泣いて喜んでくれたよぉ。おらぁお春姉ちゃん助けることができたで嬉しいだよ」

と稲七は母親に報告するのだった。

十歳の時に両親に死別したお春は、十七歳になる今日までお祖父・弥吉に育てられていた。毎日、鍛冶屋の手伝いをしていたお春は、顔や手足こそ炭や泥で汚れていたが、目鼻立ちは整い、衣服の下に隠されている肌はきめ細かな色白で、年頃の娘の色香を十二分に匂わせてい

た。鍛冶屋の手伝いで引き締まった身体は五尺三寸（一・六メートル）と大柄で、当時としては大女の部類であったが、村の若い衆には人気があった。今日は弥吉爺さんの使いで船着き場まで鋤と鍬を届けに来た帰りに災難にあったのだった。

お春は日頃から弥吉爺さんの鍛冶の手伝いをしていた。大金槌を振って真っ赤に焼けた鋼の鍛造の相い方をつとめていたので、並の女よりはるかに腕力が強かった。一対一の戦いならば、男たちにむざむざと負けることはなかったが、多勢に無勢では仕方がない。遂に押さえ込まれ、あわやの状態となっているところへ、運よく通りかかった稲七の助けで、日守の悪どもの魔手から脱することができたのだった。

この事件は、文政九（一八二六）年三月初旬の夕暮れ時のことであった。

このとき稲七は十二歳ではあったが、背丈五尺八寸（一・七メートル）の父親清六譲りの体格で、大人並の五尺三寸（約一・六メートル）ほどもあった。さらに子供ながらも力が強く、特に利き腕の左手は、右手より一寸五分（五センチ）ほども長く、左手の腕相撲なら大人が両手で懸かっても敵わなかった。

しかし、体力は強くてもまだ子供の稲七が、多勢に無勢でよく頑張ってくれたと、母親のおかねは思わず大きなわが子を抱き締めたが、

（この子はなんという向こう見ずな子だろう。将来この性格が災いにならねばよいが）

と心配した。十年後の稲七はどうなることであろうか。

（二）

稲七は五人兄妹の長男として文化十一（一八一四）年十一月三日に生まれた。父・清六は二十六歳、母・おかねは二十一歳のときの子であった。妹四人は二つづつ年違いで次々と生まれてきたが、末の子は生後間もなく早世した。

稲七の父親清六は、三町五反歩ほどの田圃と三反歩の畠、五町歩の山林を所有する、仁田村の中でも裕福な本百姓で、門構えと塀で囲まれた家に住むことが認められていた。母親・おかねは、隣村・大場（だいば）村から清六に嫁いできた。清六の家は、代々村役人を務める家柄であった。

本百姓は、村の寄り合いに出席して意見を述べる資格があり、寄り合いでは田植えのための用水管理、入会林の利用期間や利用範囲、村の鎮守社や菩提寺の修繕、祭典・行事など村内のさまざまなことを取り決めていた。寄り合いは村の最も権威のある会議で、清六はその中でも、いつも活発に意見を述べ、寄り合いのリーダー的な存在であった。

しかし、清六が裕福な本百姓の村役人であったことがかえって災いし、その長男稲七に数奇な運命を歩ませることになるのだった。

当時の農村では、村内の決め事は「入札（いりふだ）」と呼ばれる住民投票で決めることになっていたが、ほとんどは本百姓から選ばれた村役人が仕切っていた。特に伊豆国は幕府直轄のいわゆる天領であったため、三島代官や韮山代官とその手代が実権を握っていた。村役人は代官や手代、近隣の村役人などとの折衝に当たった。このため、村内での決め事は一握りの村役人が仕切っており、この入札制度は空文化していた。

村役人は本百姓の中から選ばれ、名主一人、組頭十数人で構成されていた。名主は世襲、組頭は名主の推薦に基づいて代官が任命していたが、半ば世襲のようになっていた。

仁田村の名主である仁田利左衛門は、村一番の大地主で、三十五町歩の田畑と五十町歩の山林を所有し、他人の土地を踏まなくても隣村に行くことができたといわれていた。

名主は代官の下で納税の監督、農耕指導、村内の人事支配を司どった。組頭は名主を補佐し、初めの頃は五人の農民を一つの組みとしてこれを取りまとめる係であったが、農民の数が増加するに従って十軒から十五軒が一つの組となっていた。

農民の大多数は小前（こまえ）百姓、即ち、所有する田畑がないか、田畑を持っていても極く僅かしかない百姓で、地主（本百姓）の所有田畑を借りて米麦穀類、野菜を作っている小作百姓であった。

江戸幕府が開府した当時は、農村に入所する者は、新田開発を行って本百姓になったが、新田開発が一段落した江戸中期以降は、誰でもが本百姓になれる時代は終わっていた。この時代には、名主である大地主、所有田畑のある本百姓（自作農）、小前百姓（小作百姓）と、その身分が確立されていた。

清六の時代には、小前百姓（小作百姓）の二男、三男以下の男は、継ぐべき耕作地がなく、やむなく地主（本百姓）の奉公人として宛てがい扶持の給金で働くか、日雇いの形で地主から耕作賃を貰って働く抱え百姓（奉公人と小前百姓の中間のような存在）となるかどちらかであった。そしてこのような仕事も働く場所もない者は、江戸などの都会地へ流れていくか、無頼の徒となって、渡世人といわれる無宿者に落ちていくしかなかった。

小前百姓や抱え百姓は、余程の努力をするか、幸運に恵まれなければ本百姓になれなかった。こういった時代

背景のもとで、幕府の統制力が低下すると、世相は頽退し、庶民の生活体系も乱れていった。

(三)

そもそも伊豆の国・仁田村は、源平時代に源頼朝の旗揚げに側近として忠勤を励んだ「仁田四郎忠常」出生の地として知られていた。仁田四郎は、頼朝の富士の巻狩の時に手負いの暴れ猪に跨がり、これを小柄一本で退治した武将として名高い。源氏の平家追討のときには、源範頼に従って平氏を西海に討ち、富士の巻狩で曽我十郎祐成を打ち取った勇者でもあった。将軍源頼家の命により北条時政を誅しようとして失敗し、建久七年（一二〇三年）、加藤景廉によって殺された。

それ以来今日まで、仁田村にはその血筋が脈々として受け継がれ、多くの勇者が輩出した。

仁田村は京の都から東海道を江戸に向かって下り、天下の険・箱根峠の登り口、三島宿から南へ一里半（六キロ）ほどのところに位置している。北には霊峰・富士山を仰ぎ、東は箱根山、西は伊豆の太郎とも呼ばれる大河狩野川に、南は箱根連峰に源を発する柿沢川に接していた。村の真ん中を流れる来光川は箱根山中から丹那盆地を通って柿沢川とともに狩野川に合流していた。村の大半は肥沃な田畑で、ほぼ平坦な百町歩（百ヘクタール）ほどの農村地帯であった。

狩野川は伊豆半島天城峠下に源を発し、大見川、船原川、桂川、来光川、大場川、柿田川、黄瀬川の支流を合流し、沼津の城下町の中心を流れて駿河湾に注いでいた。上流地帯は材木、山葵、椎茸などの産物が多く、下流は田方平野の水田地帯を形成していた。

狩野川の全長は十二里（約四十八キロ）、伊豆の暴れ太郎の名があり、雨季ともなれば滔々と流れる本流は、暴れ太郎の名の如く両岸の堤を削り取っては流域の住民に大きな被害をもたらした。狩野川は、太平洋沿岸で唯一南から北へ向かって流れる大河だ。四季を通じて水量が多く、材木を始め伊豆半島から採れるさまざまな農産物の運搬には欠かすことのできない水の交通機関であった。

狩野川は現在と違って川幅も広く、左右に大きく蛇行して水深もあり、五十石船が修善寺村小立野（こだちの）まで悠々航行されていた。当時は護岸設備の技術も未熟で、絶え間無い氾濫で川幅も広がり、支流の大場川、来光川が合流する仁田村と対岸の日守村との川幅は六百間（約一キロ）、水深は十尋（約十八メートル）もあった。

川を挟んだ仁田村と日守村には、それぞれ船で運ばれてくる伊豆半島の産物を積み降ろしする船着き場があり、二つの村はお互いに勢力を争ってきた。時には船荷の権利を争い、船荷を奪い合って引き起こした流血の惨事も

一度や二度ではなかった。

仁田村の船着き場には、三島宿から伊豆半島の先端下田港まで、半島を縦断する下田街道が通っていた。船着き場の界隈には、船頭や荷揚げ人足、馬方、旅人、乗船客を相手の一膳飯屋や飲み屋、木賃宿などが店を張っており、結構な賑わいを見せていた。また、下田街道沿いには村人の生活に欠かせない酒や味噌醤油、雑貨、衣類、陶器類、農機具などを商っている店や、鍛冶屋や大工、左官、屋根職人などが住んでいた。稲七が助けたお春の家もその中の一軒であった。本百姓・清六の家と、鍛冶屋・弥吉のところとは、後北条が伊豆一帯を支配していた三百年前の時代から主従に近い付き合いがあった。

仁田村は戸数三百戸、人口千五百人、米麦の収穫高四千石といわれる裕福な農村であった。そのうえ、狩野川の船着き場からの水揚げも大きな収入源であった。村民の大半は農民であったが、商売屋や職人、馬力屋、人足など雑多な人達も住んでいた。

(四)

十二歳の少年仁田村稲七の蛮勇は、またたくうちに仁田や日守の村はもちろん、近隣の村々にも広がり、怪童・稲七は、いつの間にか「五人力の稲七」と呼ばれるようになった。このことが、逆に日守村の若い衆の反発を買い、不穏な動きが日増しに膨れあがっていくのだった。この事件がなくても、長い年月の間、仁田村対日守村の感情は険悪であったので、稲七の存在はこれに火を付けたような結果となり、一触即発、何時大乱闘があっても不思議でない様相を呈してきた。

仁田村と日守村の船着き場は、伊豆の産物の集散地として要衝地であっただけに、天領内での騒乱は、幕府の支配力にも影響を与えかねなかった。

当時の性犯罪のうち、不義密通は死罪、軽くても遠島の流罪を科され、婦女暴行にも当然に重罪が科された。しかし、江戸時代の中期以降の婦女暴行事件は、その多くが奉行所や代官所へ訴えられることもなく、被害者は泣き寝入りしていた。平成の現代の婦女暴行事件は親告罪である。当時においても本人は勿論、親も組頭も奉行所・代官所へ同道して訴えなければ取り上げてもらえない仕組みになっており、手続きが厄介で泣き寝入りせざるをえなかった。特に被害者本人は、取り調べに対する事情聴取で恥ずかしい思いをさせられた。江戸幕府も後期になって、奉行所の権威が失われるにしたがい、お春が受けた強姦未遂のような犯罪は半ば公然と起こるようになっていた。

韮山代官江川太郎左衛門英龍（坦庵）（この時はまだ代

官見習であった）は、代官所の権威を維持する上からも住民間の騒動を重視し、急遽代官所手代斎藤弥九郎に命じ、仁田村と日守村両村の名主以下村役人を代官所に呼び出して厳重に注意を与えて仲直りを命じた。だが、一旦両村の間にできた確執は、表面的には静謐を保っているものの、真からの関係修復は不可能となっていた。

韮山代官所手代斎藤弥九郎は、非凡な稲七の力量に着目し、父親清六を説得して、十二歳の稲七少年を代官所手代付若党（従者）として代官所で働かせることにした。

すでにこの時期は、老中松平定信の寛政の改革が失敗に終わり、江戸幕府の地方大名に対する支配力は弱体化し、一方、アメリカや、イギリス、フランス、ロシヤなどから開港を迫られ、その外圧に国内の不安は増していった。弱冠二十五歳の青年代官（見習）江川太郎左衛門は、海防の必要性を訴えて、自ら韮山村に大砲鋳造所・反射炉を築く計画を建て、伊豆半島先端下田港の砲台修築を進めていた。

斎藤弥九郎の思惑は、表向きは稲七を保護することにあったが、①仁田、日守両村の争いを収めて代官所の権威を領民に知らしめ、②併せて幕府の威光を大名に誇示し、③稲七を薩長の浪士から韮山代官（見習）江川太郎左衛門を守るための警護役に仕立てる意図があった。

稲七は表向きは代官所若党であるが、真の目的がこのようなものであったため、実質は弥九郎が師範を務める剣術道場の内弟子のようなものであった。

第二章　稲七の武道修業

（一）

斎藤弥九郎は、いよいよ稲七を自分の手元に引取って鍛錬にかかった。

この時、稲七は文化十一（一八一四）年生まれの十二歳、江川太郎左衛門英龍は享和元（一八〇一）年生まれの二十五歳、斎藤弥九郎善道は寛政十（一七九八）年生まれの二十八歳、東の鍛冶屋弥吉の孫娘お春は文化六（一八〇九）年生まれの十七歳であった。

この物語の中で、主人公稲七に次いで主要な人物の二人について少し述べておこう。

江川太郎左衛門英龍は江川家三十六代目の当主である。江川家は清和源氏の流れを汲む鎌倉時代からの名門で、京都の小堀家と同様に数少ない世襲代官であった。代々太郎左衛門を襲名して伊豆韮山代官を務めていた。代官は大名と違って自前の領地をもっているわけではない。英龍の父英毅は四十二年間代官職にあり、名代官といわ

れたが俸禄は百五十俵と少なかった。しかし、代官所の経費や三十名の家来の俸禄などは幕府から別途支給されていたので、特に仕事に支障を生ずることはなかった。江川家の財産は自領五千石といわれ、幕府での地位は三千石格以上とされていた。

英龍は三十五代の当主英毅の次男として生まれたが、文政四（一八二一）年兄英虎が病死したため嗣子となった。文政七（一八二五）年江戸本所の屋敷で代官見習となり、二十四歳で将軍家斉に拝謁した。天保五（一八三四）年父英毅が病死したため家督を継ぎ、翌天保六（一八三五）年三四歳で代官職を継いでいるので、稲七が韮山代官所の若党になった文政九（一八二六）年のときは、英龍は代官見習であった。しかし、聡明な英龍はすでに父英毅の代行として実質上の代官職を務めていた。

江川代官の支配地は、父英毅のときは伊豆、駿河、相模、武蔵の四カ国で、合計五万四千石であった。その後、天保九（一八三八）年には甲斐の幕府領地を加えて十二万石となり、さらに英龍の実力が評価されて安政元（一八五四）年には二十六万石に達し、その実力は大大名に匹敵するといわれていた。この史実からもいかに英龍の力量が抜群であったかが判ろうというものである。英龍は管内の民情を視察して人材を登用し、後世「幕末の良心」「日本民主主義の原点」「聖農」と称賛された篤農家二宮尊徳と親交を結び、その意見を入れて施政の公正と人民の保護育成につとめた。そのため「世直し江川大明神」と敬われ、住民達の信望を一身にあつめるほどの名代官であった。種痘の普及にもつとめた。

英龍は幼い頃より武術を好み、文政元（一八一八）年十七歳の時に江戸に出て、武州出身の神道無念流の達人岡田十松の岡田道場・撃剣館に入門して剣を学んだ。太刀筋が良く、三年で免許皆伝を許された。撃剣館は盛況を極めており、この道場で師範代をつとめていたのが、後に練兵館の主、幕末の三剣豪の一人といわれた斎藤弥九郎であった。兄弟弟子には、水戸藩の藤田東湖、武田耕雲斎、渡辺崋山、桂小五郎（後の木戸幸允）、秋山要助、新選組の長倉新八、芹沢　鴨、新見　錦など多彩な顔触れであった。

また、英龍は、西洋砲術を高島秋帆に学び、秋帆から西洋砲術教授を許され、幕臣川路聖謨、松代藩士佐久間象山はじめ多くの人が門下に集まった。

剣の師匠・岡田十松は、剣術だけでなく、学問、礼儀、道徳など人として歩むべき道を教えた。この十松の元での修業が、多感な青年時代の英龍の人格形成に大きな影響を与えた。

英龍の父英毅は、剣術だけではなく、学問にも優れていた岡田道場・撃剣館で三歳年長の兄弟子斎藤弥九郎善道を英龍の後見役として、韮山代官所に招聘した。

弥九郎は、師匠岡田十松の息子熊五郎が岡田道場・撃剣館を継いだ後、江川家の支援を受けて独立し、江戸、番町（現在の靖国神社のところ）に練兵館を開いた。練兵館も岡田道場もいずれも隆盛を極めていた。やがて斎藤練兵館は桂小五郎（後の木戸光）が塾頭となり、高杉晋作、品川弥二郎なども学んだ。

幕末の三剣豪とは、斎藤弥九郎、鏡心明智（みょうち）流の士学館道場主桃井春蔵、玄武館道場主千葉周作の三人を指す。練兵館には桂小五郎が、士学館には武市半平太が、玄武館には坂本龍馬がそれぞれ塾頭になっていた。それぞれの剣風は、位の桃井、技の千葉、力の斎藤といわれた。

十二歳の稲七は、韮山代官（見習）江川太郎左衛門英龍、代官所手代斎藤弥九郎善道というすばらしい指導者について、文武両道を学ぶことになった。文政九（一八二六）年秋涼の頃であった。

稲七が韮山代官所の若党として代官所に住み込んだ始めの一、二カ月は、役所のしきたりや代官所で働いている大勢の侍や足軽、女中、下男、下女などの顔や名前を覚えることで目の回るような毎日であった。

当時の韮山代官所には、手附、手代、手附見習、手代見習、書役、書役見習など士分の役人の外に、江川家の大和国以来の家臣の末裔、金谷衆十三家といわれる郷足軽、女中、下男、下女など屋敷に出入りする家来衆や使用人は二百人を下らず、これらの人々が三十六余町歩（三十六余ヘクタール）の田畑を耕したり、五百余町歩（五百余ヘクタール）の山林を植樹伐採管理していた。

三千六百坪（一二、〇〇〇平方メートル）の代官所屋敷内には常時江川家自前の使用人が男女併せて二十人ほど住んでいた。

今まで何ひとつ不自由なく両親に甘えて育てられた十二歳の稲七にとって、代官所の生活は精神的にも肉体的にも非常な試練であった。しかし、父清六から因果を含められ、自分も納得して代官所に来たこともあって、稲七はぐっと歯を食いしばって我慢した。背丈と体重こそ大人と比べて遜色のない稲七であるが、顔付きはあどけない子供の顔、話す声は声変わり前の幼さが残っており、下男や女中衆はいたく同情して、なにくれとなく愛の手を差し延べる者もあった。

だがこれらの修業は、稲七にとってほんの序の口の試練であった。

弥九郎は、稲七を代官（見習）江川太郎左衛門英龍の

親衛隊長に鍛え上げる目的があったため、使用人に対して稲七に同情したり、憐憫の情をかけることを固く禁じた。

この当時には、百姓、町人も侍の株を手に入れて武士になる者もいた。稲七の家は代々村役人を務める家柄であったので、稲七が学問や武芸を修めたうえで、士分たることを代官が認めれば、稲七が武士になることに誰も異論を唱える者はなかった。やがて稲七がひとかどの武士になり、江川家のために活躍する人物になることを誰もが疑わなかった。

(二)

稲七が代官所のしきたりや様子をひととおり覚えた霜月（十一月）の中頃、弥九郎は稲七を代官屋敷正門前、濠の内側に設けられた桝形と呼ばれている練兵場の一角に呼び出した。

「稲七、いまから俺が剣の試技をする。よく見ておれ」

弥九郎は下男に運ばせた土を庭の中央に一尺の高さに盛り上げ、これに太さ一寸（三センチ）、長さ六尺（一・八メートル）ほどの生木を突き立てた。弥九郎は立てた生木の前六尺の位置に立ち、自然体になって静かに目を閉じた。両腕は体に沿って下に伸ばし軽く指を握っている。両足は半歩開いて、やや両膝に撓（たわ）みをもたせて整息している。弥九郎が腰に指している刀は、二尺六寸（八十センチ）、無名の新々刀ながら弥九郎自慢の業物である。長身の弥九郎には手頃な長さである。

弥九郎の体から静かに気迫が伝わってくる。一瞬すべての音が消え去ったかと錯覚するほどの静寂を感じた。構えるともなく構えた自然体の姿勢からすばらしい気迫がほとばしり出ている。

弥九郎が小さく息を吸ったその一瞬であった、

「ターッ」

と短く鋭い気合がかかった。

達人が使う刀は空気を切り裂くという。まさにそんな感じである。

右足が一歩前に踏み込む。右手が刀の柄にかかる。同時に左手が刀の鯉口を切って胸の高さまで鞘ごと刀を持ち上げ、間髪を入れず鞘を引く。右手に白刃が煌めく。一瞬、盛り土の上に軽く立てられた生木が、地上四尺の高さから切られ、上の部分だけが音も立てずに下に落ちた。その時には刀は鞘に納められ、何事もなかったかの如く弥九郎は静かに稲七の方に向き直っていた。

この一連の動作は、瞬き一つするほどのわずかな時間であった。

弥九郎の刀捌きは、いわゆる『居合術』の一つである。居合は速さが勝負である。弥九郎は、神道無念流の達人であるが、居合術を本格的に習練した訳ではない。だが、

弥九郎ほどの剣の達人ともなれば、おのずと居合術も会得するものである。

「…稲七、今度はお前がやって見ろ。細い生木だ、訳なく切れるだろう」

稲七は、新しい生木を盛り土の上に立て、弥九郎の立っていたと同じ位置に立って、下男が渡してくれた太刀を両手で持って構えた。目を軽く閉じ、呼吸を整え正眼に構えてから上段に振りかぶって、

「キエーッ」

と気合もろとも右から左に刀を切り下げた。

「コッ」

と刀が生木に当たる音がして、刀は右側に撥ねられ、生木は刃傷がついただけで左方向に大きく飛んでいってしまった。稲七とて初めて刀を手にした訳ではない。しかし、結果は無残であった。弥九郎が斬れば生木の下部は微動だもせず、見事に四尺の高さで切り下げられている。修練の差である。木刀だけの修練と、真剣を用いて斬るのとはまったく違う。真剣の場合は少しでも刃の向きが違えば、刀はとんでもない方向へいってしまう。

「よいか稲七、俺がやれば切れるが、お前がやっても切れない。なぜか判るか」

「……」

「稲七、お前は未だ幼い。ちょっと難しいが聞いていろ。これは大変な鍛え方である。

「ハイ、畏まりました」

弥九郎が選んだ樫の木刀は、十二歳の少年には少し重かったが、大人と力比べをしても互角に戦う力持ちの稲七には、やがて物足りなくなることだろう。

稲七は翌日から、明け六つ前（午前六時）に起きて、練兵場で素振りの練習を始めた。素振りといっても、上に下に、右に左に、すーっ、すっと振り下ろすだけではない。自然体から右足を半歩前に出して木刀を正眼に構え、眼を閉じて整息する。丹田に力を入れて気力が集中した瞬間、頭上に振りかざして、

「キエー」

と気合もろとも振り下ろす。打ち終わると左足、右足と一歩づつ後ろに下がって、また自然体から右足を半歩前に出して木刀を正眼に構え、眼を閉じて整息する。丹田に力を入れて気力が集中した瞬間、頭上に振りかざして、

「キエー」

と気合もろとも振り下ろす。これを繰り返すこと幾十合。

一回の素振りで、現代の時間でいえば三十秒から四十秒かかる。回数が進むうちにだんだん疲れてきて、速度が落ちてくる。一刻（二時間）経っても下命された三百回が終わらない。腕が痺れてきて木刀を持つ手に力が入らなくなる。下肢は引きつり足が前に出ない。初めのうちは汗も少ししか出なかったが、素振り二百回が終わる頃には、全身汗びっしょりとなって、目元も定かでなくなってくる。

素振り三百回が終わったときは太陽も伊豆連山から姿を現し、朝日が燦々と稲七の頭上に降りそそいでいた。稲七は放心状態となって跪き、気息奄々しばらくは起き上がれなかった。

しばし体を休めた後、いったん裏庭の井戸端へいって汗を拭って母屋の台所へ入った。

「まぁー稲七さん…。大変だねぇー…。かわいそうに」

同情無用、という弥九郎の命令もそっちのけで、下男や下女たちは大騒ぎであった。中でも久恵、雪恵姉妹の同情は女たちの誰よりも大きかった。

久恵、雪恵の姉妹は、江川家の遠縁に当たる渡辺家のみなし子であった。母親は妹の雪恵を産んだ産後の肥立ちが悪くて死亡した。

父親は久恵が五歳、雪恵が二歳の時に、江川家の所有林の伐採の折りに、切り倒した桧が思わぬ方向に倒れたため、その下敷きになって死亡したのであった。

やがて理解できる時がくる。刀は触れれば切れる、なぜ切れるか考えたことがあるか。刀が切れるのはその原理があるからだ。それを『理』という。刀には切れる原理があり、それが切るという形になって現れる。お前は切れる原理を正確に生かしきっていないから、生木は傷が付いただけで飛んでいってしまった」

「……」

「刀が切れる原理、これが『理』だ。刀の『理』が切るという形になって現れる。この現れが『気』である。理と気の二つが一つになったときに刀は切れるのだ。そもそも理と気は本来一つのものなのだ。これを『理気合一』という。今のお前には理解できないだろうが…」

「……」

「そのうちに判るようになる……。今日から三カ月間、一日三百回、木刀の素振りをせよ。一日とて休むでないぞ、よいな稲七……」

「ハイ、畏まりました」

「素振りに用いる木刀はこれがよかろう。お前は強力の持ち主だからこの位の重さのものが丁度よかろう」

「ハイ」

「三カ月経ったら、その次は木刀で一日三百回、立木を打て。それも三カ月間だ。一日とて休むでないぞ、よいな稲七……、嵐の日も、雪の降る日も休むな、俺がよしというまでは怠るな」

これを不憫に思った代官夫人の久子の方が引き取って、わが子同様に育ててきた。

姉の久恵は、十五歳、面長の二重瞼、理知的な顔立ちで、常に妹をかばい、絶えずあちらこちらに気配りしてよく働いた。妹の雪恵は、稲七と同じ年の十二歳、名前のとおり雪のように色白丸顔で、愛くるしい黒目をくるくる廻して屈託のない笑顔を振り撒き、お茶目振りを発揮していた。

「久恵ねぇちゃん。稲七さんかわいそうね。なんとかしてあげたいね」

「雪恵、だめよ…。弥九郎先生が手助けしてはいけないときつくおっしゃったんだから…」

「久恵ねぇちゃんの意地悪…。なんとか弥九郎先生に判らないようにして助けてよ」

「やはり駄目よ。弥九郎先生がいけないというから駄目よ」

「久恵ねぇちゃんてほんとに意地悪ね…。本当は自分だって稲七さんを助けてあげたいと思っているくせに…」

「まぁ、なんていうことを言う子でしょう…」

「わぁーい、久恵ねぇちゃん赤くなった、わぁーい」

「この雪恵の意地悪。わたし知らないから、ぶつわよ」

「あっ…久恵ねぇちゃん耳まで赤くなった…」

「もう…わたし知らないから…」

久恵は図星を指されたような気持ちがして色白な顔を真っ赤に染め、下女達の嫉妬とも冷やかしともつかない笑い声を背に受け、いたたまれず袖で顔を隠してその場をあわてて逃げ去った。しかし、身を隠す場所とてない久恵は、普段はあまり使われない表玄関脇の「塾の間」に駆け込んだ。この部屋は若い家来や他藩からの留学生の学問の部屋で、早朝か、夕方以外は無人の部屋であった。小走りに台所から塾の間に駆けこんできた久恵は、入口の板戸を開けて中に入り、急いで板戸を閉めた。高鳴る胸を押さえて

「フー」

と吐息をもらした。

無人と思った十八畳の塾の間の庭に面した障子の近くから人の気配が伝わってきた。

〝ドキッ〟として久恵は後ろを振り返った。一瞬、

「あぁ…稲七さん…。どうして此処に…」

そこには諸肌脱ぎの稲七が、晒の帯で上半身から流れ出る汗を拭っていた。

「まぁ…わたしどうしよう…」

久恵は瞬間、立ち眩みして畳のうえにへたへたと座り込んでしまった。

(まさかこんなところに稲七さんがいようとは…)

久恵の頭の中は真っ白になった。

一方、稲七とて同じであった。まさか日頃高嶺の花と遠くから見ているばかりの久恵が、なんの前触れもなく、塾の間に入ってこようとは思ってもみないことだった。

「久恵さん、俺…どうしよう。済みません」

声も震え、やっとの思いで唇からでた言葉はこれだけであった。十二歳の稲七には、微妙な女心は理解できなかった。あたふたと稲七は塾の間を退散するのが精一杯であった。

日頃仲のよい久恵、雪恵の二人姉妹は、稲七のことになると夢中になって言い争うことが多くなってきた。この姉妹喧嘩を知っている江川家の使用人たちは、お互いに顔を見合わせ、暖かい眼差しで二人を見守っていた。

稲七の素振りの練習もやがて二カ月が過ぎ、稲七は十三歳となった。稲七の足の捌き方、正眼に構えてから振り下ろす両腕の筋肉の躍動、木刀を握る両手の力加減、剣術修業をしたことのない者が見ても明らかに上達振りが判った。素振りの練習を始めた頃は、背丈こそ大人並であったが、顔付きはふっくらと幼な顔で、骨格は勿論、筋肉も柔らかく、素振りの練習が何か痛々しく感ぜられた。当初に命ぜられた三カ月が終わった頃は、体つきは見違えるように逞しくなり、顔も日焼けしてぐっと引き締まり、すっかり若者の顔立ちに変貌してきた。

逞しい体は父親清六譲り、面長で睫の長い涼しげな切れ長の眼は母親おかねの血を受け継いでいる。稲七は、弥九郎が見込んだ通りの美丈夫となりつつあった。

(三)

正月を江戸の練兵館で門人達に稽古を付けたり、本所の江川代官所に出仕したりしていた斎藤弥九郎が、三月上旬になって再び伊豆韮山代官所に戻ってきた。

その頃仁田村では、一年前、日守の権太らに犯されそうになり、あわやのところを稲七に救われた東の鍛冶屋弥吉の孫娘お春は、十八歳の寒の明けの吉日に、弥吉の弟子喜三を婿に迎えて新所帯をもった。喜三は狩野川の上流筏場部落の樵の三男で、体も頑健で実直な男であった。年齢はお春と五つ違いの二十三歳であった。婿の喜三は、十三歳の時に弥吉に弟子入りし、以来十年間、暖簾分けを許されるまで一生懸命に働いてきた。弥吉は早くから、お春の婿には腕も確かで実直な喜三がよかろうと一人心に決めていた。しかし、連れ添うのはお春である。お春が喜三を嫌えば別の婿をと思っていたところ、お春が承知したので、急遽、喜三と祝言を上げる運びとなった。

お春は喜三と夫婦になると、あれほどよく手伝っていた仕事場には一切顔を出さなくなり、今までにも増して甲斐甲斐しく家事に精を出し、喜三にもよく尽くしてい

た。夫婦仲も円満で弥吉をすっかり安堵させた。
　親方の弥吉は、お春が喜三と夫婦になって安心したのか、鍛冶屋の仕事も喜三に任せ、お札所巡りに明け暮れするようになっていた。そうしているうちに、お春が十九歳になった春先にちょっとした風邪が思わず長引き、あれほど丈夫であった弥吉が、端午の節句に初曽孫の鯉幟を揚げたいといい続けているうちにめっきり体が弱り、曽孫の顔を見ることもなくあっさりと死んでしまった。弥吉はもうすぐ古希を迎えるところだった。

　弥吉の七七忌の法要を済ませたある日の夜、晩酌を軽く済ませた喜三はお春を身近に呼んで、
「なあ・お春、つつがなく親方の四十九日も終わったことだし、親方の使っていた部屋に手を入れて俺達夫婦がそこで生活するようにしてはどうだろうか」
「そうね、お前さんのいいようにして下さいな。祖父ちゃんもその方がきっと喜ぶよね」
「弟子の松蔵と為吉は、今まで俺達が使っていた離れに移そう。お前もその方が気兼ねなく夜寝られるだろう」
「いやだよお前さん、そんなこと言って、恥ずかしいじゃないか」
「お前はいつも『思い切って声を出してみたい・・・一度でいいから』って言ってたじゃぁないか」
「馬鹿ねぇ、お前さんったら・・・」
　口ではいやだと言いながら、お春は弟子たちの不在を確かめて右側から喜三の方へにじり寄って逞しい胸に体重を預けていった。
　若い喜三の体には精気が漲っている。喜三はお春の弾けるような柔らかい躰に後ろから右腕を廻してぐっと抱き締めた。
「あぁ・・・」
　倒れ込んでくるお春の全身は、燃え上がってくる興奮でカーッと熱くなってきた。喜三は両膝の間にお春を抱き上げて左腕でお春を支え、眼を閉じて上向きになったお春の紅潮した顔に唇を近づけた。熱く吐息を洩らし、半開きになったお春の口唇の間から、ぬめるような紅舌が小刻みに震えて喜三をまち受けていた。喜三は両腕に力を入れてお春の豊潤な躰を抱き締め、激しくお春の口を吸った。お春もこれに応えて紅舌の先を喜三の口中に入れてきた。お春のそれは生き物のように小さく激しく喜三の舌を求めて動いてきた。
　唇を合わせたお春と喜三は、お互いの口中に替わるがわる舌を入れて相手の舌先をむさぼるように吸い合った。
　激しい口吸いの愛撫がしばらくあってから
「お春・・・　お前は素晴らしい。きっと幸せにするぜ・・・」
「うれしい・・・お前さん・・・」
　お春は喜三の躰にしがみついていった。喜三は右手でお春の襟元を広げて長襦袢の下に指先を這わせていった。そこには突き上げるように大きく盛り上がった二つの乳房が激しく息づいていた。
　喜三は左の乳房を掴み、緩急、強弱の変化をつけて揉み上げた。お春はむせかえるような甘い体臭を発散させて激しく身悶えした。
「あぁ・・・あぁ・・・」
　お春は喉の奥から押さえきれない歓喜の声を洩らし始めた。喜三の愛撫の攻撃が激しさを増してくると、お春の情感が一段と燃え上がり、豊満な腰の悶えも次第に激しくなってきた。くの字に曲げた引き締まった足も腰の悶えとともに動きが激しく、大きく吐く息遣いはひときわ高まりを増してきた。
　緋色の長襦袢の裾は乱れて真っ白な太腿が露になり、お春は下腹部とともに腰を捩っている。
「おまえさん・・・　早く・・・」
　喜三の右手がお春の下腹部に伸びて、右指が一本二本とお春の秘所に深く吸い込まれていった。
「おまえさん・・・奥へ・・・」
　喜三は、お春の紅潮した躰を両腕に抱き上げ、足元を確かめながら奥の寝所へ運んでいった。お春は熱く火照った全身を喜三の両腕に託し、両手を喜三の首に巻き付けて紅舌の先を伸ばして喜三の首筋に這わせていた。
（つづく）

祝出版
「近藤重蔵富蔵の生涯と其の時代（二）」
金子正義　著
栄光出版社（1,500円＋税）

封人の家

封人＝国境を守る人。
奥の細道「一の家を見かけて舎を求む」
広辞苑

大和禎人

東北新幹線で仙台を経て古川へ、さらに陸羽東線に乗り継ぎ川渡へ向かう。出で湯遊山の旅であった。

沿線の途次に岩出山の懐に抱かれ有備館駅がある、ホームに降り立つと、後部車掌室を降り専務車掌くんが歩みよってきて、声をかけてくれた。

「お客さん、ほら改札を出ればすぐ前が入口です、ゆっくり見ていってください」

車中で検札の折、地の理を聞いた乗客を覚えていての親切だった。途中下車して、遠い道程では先の予定にさし支えるところ、思いのほかの近さ、ありがたいことであった。沿線の大方は無人駅で、この駅も例にもれず車掌は集札するためもあり、ホームに降り立つのだった。

天正十九年九月
玉造郡岩手沢城普請成就、移徒。岩出山と改める。
移徒＝うつす、移し動かすの意。

仙台藩史に見る記事である。

仙台藩の伊達氏の始祖政宗が初めて城を築き、十二郡を含む新領の成立を見た記録である。

雄藩としての伊達氏の仙台城築城はさらにこの十年後、慶長六年の後年に着手、二年の歳月を経て落成を見るのである。

岩出山城下の士民、仙台へ移る。

次いで、

慶長八年八月、仙台城移徒祝儀あり。

と藩史はさらに伝える。つまり有備館はかつて伊達藩発祥の遺構の地に後代藩主四代綱村の治世、元禄五年にいたり学門所をひらき、かねて西隣に備え一朝有事の場合を名称に滲ませ、警備の要衝として岩出山を借景とする園池を構えたもの、清水通潅の作庭とされる。

しばし回遊式庭園の逍遥を楽しみ、学問所の建物内部も一巡した。竹に雀の伊達家の紋章を認める籠乗り物など、旧幕時代の遺品を展示する奥まった部屋などを見た上で縁先に出て小憩した。

次の列車の待ち時間はたっぷりあり、遊覧客を乗せたバスが二台ほど駅前に入り、その団体客でひとしきりの賑いが見られた。駅舎に接して近代風の建物があり土産物を並べ、また資料室と表示する公共の施設もあり、いずれか、当所の役所から常駐の人の配置も認められ、コンピューターを備えるデスクがあるなど、無人駅に相応しくない光景で、観光客に備える熱意をうけとれた。

宿泊予定の川渡温泉は鳴子温泉郷に属し、鳴子町の東端に位置する古湯である。乗車券は鳴子温泉までもとめてあったが、何度かの印象から賑いを避けて閑静を選んで途中下車の上、宿に向かったのだった。宿の玉造荘は所在する郡名からとられた称号だ。無人の温泉駅からはタクシーを呼んで宿に向かっている。荒尾川の川渡大橋を渡り、かなりの距離であった。

こけしの里、鳴子に関心をもっての久方ぶりの旅であったが、観光ガイドブックを見る中に、「封人の家」という記事があり、あまり要を得ない記事であったが、鳴子から二駅先の「堺田駅」近傍の観光ポイントとして数行の紹介があって、興味を誘われた。説明はいたって簡単で、国境守備のため任務を与えられていた村人の家というほどの記事であったが、とりわけて「封人」の二字にわたしは関心をもったのである。

堺田という地名もいみじく、今日の宮城、山形の県境に位置し、まさにかつての仙台領と新庄領の国境にもあたるところから、「封人」の称にはなにらか歴史的な意味あいがあろうか、という興味に魅かれたのである。

冒頭、サブタイトルに掲げ、広辞苑に言う奥の細道との関連は帰来、数か月後に念のため索引し、簡潔ながら実態をとらえていることに気づいた。さすがこの辞書の権威に感心することになった始末をここであらかじめ告白しておこう。

川渡の玉造荘の一夜明けて、JR温泉駅駅への戻りの無駄を避け、温泉街のバス停を教えられ、鳴子へ向かうことにした。土地の客筋はこの便を多く利用するらしく、誰彼親しげな土地訛に囲まれ、揺られて鳴子に達した。生憎の小雨の一日になった。日本こけし館は山手にあり、タクシーを拾い向かうことにした。「封人の家」を是非訪ねたいという先の予定上も、急いだのだった。

館内は壮観を呈するこけし群の中に高松宮家のコレクションなど、収集家のコーナーに圧倒されつつ、程よく一巡の上切り上げ、タクシーを呼び鳴子駅へ戻った。

陸羽東線は鳴子を出ると、中山平温泉駅を経て切り通しにかかり、宮城から山形への県境に向かう。わずか十

五分で堺田駅に達する。切り通しの崖下にホームを置く無人駅である。乗降客は他にない心細さの上、小雨の階段を昇らねば地上に出れない。おまけに何らの案内板もない貧寒さに遊子は途方に暮れねばならなかった。

折よく畑帰りの軽トラックが近くの民家で荷おろしするところに出会い、道を聞くことができた。

「あ、それは真っ直ぐ突き当たる街道に出れば右手、向かい側に見える萱葺きの家です」

街道は舟形に通じる鳴子街道、今日の国道四十七号線である。教えられて約一kmほどを歩いて国道に出た。雨しぶきをあげてトラックの疾駆する往還の反対側にそれと覚しき藁屋根の建物が見えた。

雨に濡れて幟が三旒、昭和四十四年十二月重要文化財指定を示して「封人の家」、そして「おくのほそ道」とあり、他は雨に濡れ、色彩褪せて判読しがたいまま、ようやく芭蕉ゆかりの史跡という認識を与えられた。

元禄二年六月松尾芭蕉来新

と藩史は伝えている。来新の新はもちろん新庄藩を指すものだ。

新庄藩は元和八年戸田政盛の六万石領有に初まり、政実の十代にわたり明治に及んでいる。藩史の元禄は二代正誠の時代である。

…なるこの湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越んとす。此道旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて漸として関を越す。大山をのぼって日既に暮れければ、封人の家を見かけて舎を求む。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

『奥の細道』

蚤虱馬の尿する枕もと

新庄藩史は（六月来新）と伝えいるが、芭蕉が堺田に達したのは五月十五日、陽暦の七月一日に相当する。江戸を三月二十七日に発ってから奥羽の勝を探り、まさに四十七日目に相当し、あたかも「送り梅雨」といった梅雨明けに近い季節とて、生憎、霖雨止まぬめぐり合わせに、止むなく堺田逗留は十七日の朝まで三日におよんだのだった。

芭蕉師弟の旅路は「細道」に記述されるごとく、国境の尿前の関のいざこざもあって心証上、平穏を欠く嫌いもあったのであろうか、（蚤虱馬の尿する枕もと）の句を残したいきさつは少々気にかかる。

同行の河合曽良の「曽良日記」には格別の記事は見出せないのである。一宿の恩義の手前、報いる句境としてはたしてどんなものであろうか、と気がかりである。

老翁が一人、小雨降り止まぬ中、好事家を迎えて観覧

券を売ってくれた。二五〇円である。

「どうぞ右脇の入口からお入り、あとは自由に、道路向かいに資料館があります、ええ、とくに説明はしておりません」

いたって愛想もない。指し示された入口は馬屋であった。内馬屋方式は堺田が山形唯一の馬産地の特色を伝えるものと言う。東北独自の曲家の類、人馬一体の飼育形態なのである。

芭蕉を遇して粗略はなかったはずという弁疎が資料館の方の簡略な説明に見出されるが、むしろ蕉翁はこの地で初めてその実態に接したに違いない。素朴な驚きをもって尿の句を成したと思いたい。蚤虱と冒頭にあることではこの時代では茶飯、あえて言わずもがなであったと思われる。

茅葺き屋根の補修中とあって、養生シーツを雨足が叩く風情、文化財保護の容易でない一面を伺えた。

資料館の建物は女性が守っており、誰やら客相手に話し込んでいて、いよいよ愛想がなく、馬産地を物語る馬具の展示が大方で、辛うじて一隅に芭蕉関連の簡略な説明板が二枚あるだけの粗末さ、別に集会用の別棟が接続して、村方の利用に供される趣で、文化財維持のやりくりが伺われるようであった。

現存の住屋の方は十八世紀前半頃の建立で、茅葺き、平屋建て、ちょうな造。約八十一坪、所在は最上町大字堺田五九。前記同名JR駅から北方一kmとある。

蕉翁が有路家を呼んでとりわけ「封人の家」とした根拠はなにに拠ったものか、現地の説明では庄屋住宅兼役屋で問屋と旅宿をかね、国境を守る役人の家という意味とやや牽強付会の説明を免れないものになっている。

新庄藩史に探ると次のような事実につきあたる。

本街道、これに準ずる交通路の出入り口に、舟形、及位、笹森、古口の四ケ所に番所を置いた。鳴子街道から仙台への出入り口は笹森番所がこれにあたる。間道出入り口には口留を置いたとある。口留という耳慣れない役どころは七ケ所、口留は一人扶持を給し、足米御免の持権を与えられた。このへんに真相を探れそうである。

芭蕉は堺田から最上町と尾花沢を結ぶ山刀伐峠と呼ぶ標高四七〇mの難所を越えている。奥の細道の難所の一つである。芭蕉の作風転換点と言われる。峨峨たる自然を越えて何らか心境に響くものがあったのであろう。山寺の蝉の声、最上川の船旅はこれからの出会いであった。

少なくとも「馬の尿する枕もと」の句境は忘れ、澄みきった詩心に帰ったはずだった。

（H一六・三・一四）

澤田吾一・ふたつの人生

新井宏

奈良時代の人口は六百五十万で現在の二十分の一程度であった。

同じ頃、中国盛唐期の人口は五千三百万人、現在の西ヨーロッパ地域の人口は二千七百万人と推計されている。面白いことにいずれも現在の人口の約二十分の一程度に相当している。ついでに言えば、七世紀当時の世界人口は二億六千万人程度であり、これも現在の世界人口六十三億人の約二十分の一である。数字は歴史を雄弁に語る。

ところで奈良時代の日本人口はどうして六百五十万人と判明したのであろうか。これひとえに澤田吾一の研究の成果なのである。

澤田吾一。あまり一般に知られている人物とは言えないかも知れない。しかし日本で「ふたつの人生」を生きた代表的な人物を挙げるなら伊能忠敬とともに、いやあるいは伊能忠敬の前にまず挙げるべき人物なのである。だから同じ道を歩もうとしている私がいつも敬愛し意識しつづけている人物である。

明治大正期の日本を代表する数学者でありながら、還暦間際に東京帝大史学科に再入学し、それから不朽の名論著『奈良朝時代民政経済の数的研究』を著し、日本の古代社会経済史研究に燦と輝く業績を残した人物。

いまでこそ定年後大学に再入学して学ぶ老年学徒はめずらしくもないが、それでもふたつの分野にわたって大きな業績を残した人物といえば、澤田吾一を凌ぐ者はいない。それほどの人物でありながら、今では古代史研究分野の研究者や和算史の研究者を除いては名前さえ知る者がすくない。

先日思い立って、澤田吾一の生まれ故郷、滋賀県岐阜市野一色を訪れた。現地に行けば何か情報が得られるに違いないとの判断が甘かった。道行く人の誰に聞いても澤田吾一を知らない。澤田家の菩提寺である天衣寺に行って、若い尼僧に聞いてもさっぱり要領を得ない。たまたま住職は読経中とのことで「お呼びしましょうか」との声にも、なんだか拍子抜けして「いえ結構です」と辞してしまった。既に収集してある資料を越えるものが得られる予感がまったくしなかったからである。

それも当然かもしれない。澤田吾一の長男で医者でありながら理学博士でもあった澤田弘貞でさえ、書架の一隅に眠る名著の存在をすっかり忘れていたと述べているほどである。

澤田吾一は美濃国厚見郡野一色村の庄屋澤田久平と美津の長男として文久元年（一八六一）に生まれた。野一色は岐阜城のある金華山から南につながる洞山の南山麓に位置し、岐阜市の東方五キロのところ、現在では新岐阜から関に向う市電風の名鉄電車で五つ目のところにある。澤田家の遠祖は、美濃国守護職土岐家の家臣澤田重能で、後に織田信長に仕えたが本能寺の変の後、土着し代々庄屋をつとめたという。もっとも吾一の父母は夫婦養子で、実父久平は野一色の南四キロにある切通村の大庄屋伊藤嘉右衛門の五男であった。

その関係であろうか、吾一は五歳の頃から切通の岡崎寿仙という人につき『四書』や『唐詩選』を学び、また広江永貞という和算家から算数の手ほどきを受けている。広江永貞は吾一が後に『日本数学史講話』で紹介しているように『続神壁算法起源』という当時の数学問題集を出版したほどの江戸末期の和算大家であった。これらの教育環境が後の吾一の学問形成に大きく役立ったことは疑いない。

幼少期の澤田吾一は、おそらく本人の言葉であろうが「記憶力弱く世才にも劣り、父母が心を痛めた」ということであった。それは数学少年に有り勝ちな、雲を見て空想に耽るようなところがあったためではなかろうか。ある時、父の久平が吾一の帰りが遅いので、提灯をもって出迎えにでると、『とうさま、だまっていてね、きょうは先生をまかしたからなあ……』などと言って父を驚かせている。もう先生方に難しい質問をしては困らせるほどの力をつけていた。

明治五年（一八七二）学制頒布の年、十一歳になっていた吾一は病気のため通学はできなかったが、翌年には小学校卒業と同時に「読本助教試補」という国語の代用教員資格を得ている。そして岐阜県立中学校に進む。もうその頃には吾一の優秀さは近隣に鳴り響いていた。

明治は激しく動いていた。廃藩置県、徴兵令、地租改正、西南戦争とつづく社会変動のなかで、庄屋であった

澤田家も何かと家計面がきびしくなり始めていた。そんな中で、明治十一年十月、吾一の人生を決定づける出来事が起こる。明治天皇の御前で「物理学熱論の実験講義」を演ずる栄に浴したのである。中学校を卒業する直前の十七歳の時であった。

明治天皇が岐阜に行幸することになったのは偶然であった。明治十一年八月、明治政府は大久保利通の暗殺事件はあったものの、そして直前には近衛兵の暴動という事件が勃発したものの、北陸道と東海道の巡幸を予定通り実施する。将軍に替わる天皇を民衆に知らしめ、畏敬の念を与え、親愛の情を抱かせるための重要な行事であった。

悪天候になやまされながらの北陸道巡幸をやっと終え、久方ぶりに天皇が京都に立ち戻った時に、三重県でチフスが発生したとの緊急連絡が入る。そのため伊勢神宮参拝を経て東海道に向う予定は急遽変更され、岐阜を経て名古屋にでることになった。

天皇を迎えるため各地ではこぞって管内の概況資料、徳行ある者の事蹟調査、有名物産の閲覧資料など、周到に準備を行っていた。だから予定の変更がもたらした影響は甚大であった。特に急遽行幸が決まった岐阜県の当局者がどれほどの負担を感じたかは想像に難くない。そのなかで、岐阜中学校参観が選ばれ、澤田吾一が御前で実験をすることになったのは、準備に時間を必要としない手軽さもあったかも知れない。

実験はマグネシウムの燃焼による発熱現象の観察のようであった。マグネシウムが激しく燃えて、白い灰が明治天皇の服にまでふりかかったと伝えている。周囲ははらはらしたが、首尾は上々で、金一円を宮内庁から下賜されている。これが吾一をして、物理そして数学に向わせる決定的な要因となった。そして中学校を卒業と同時に日本のニュートンたるべく東京をめざす。

しかしその頃の澤田家は吾一を東京に遊学させるほどの余裕を失っていた。吾一は郷土の先輩等をたよるが志を得ず、いったん帰郷し、母校岐阜中学で助教として後輩の指導にあたる。そのような吾一に対して周囲は暖かかった。この優秀な人材を東京に送るため、郷里の人たちが同郷の浅井道博を紹介する。その頃、郷里の代表選手を東京に送って学ばせるのは、ある意味で郷里にとっても有利な投資でもあった。

そして明治十五年（一八八二）に吾一は再び上京して、本郷の浅井道博宅に身を寄せ、参謀本部測量課に職を得る。日本全土に三角点を張り巡らせ、精緻な地図を作成する仕事であったが、ここで吾一の数学的な才能がおおいに役立つ。野営しながら山野をかけめぐることも病弱な吾一にプラスした。しかし吾一にとっての目標ははるか先にあった。

吾一の数学的な才能は専門外の浅井道博にさえ良く判った。このまま測量技師として埋もれさせるわけには行かなかった。そして同じ町内に住む数学者で物理学者の菊地大麓に吾一の身を預ける。

菊地大麓はこの時三十歳の若さで既に東京帝大理科大学学長の地位にあった。幕末の蘭学者・箕作阮甫の女婿・箕作秋坪の次男であり、十一歳の時幕府の留学生として英国に渡り、明治維新でいったん帰国したものの、後に再び英国ケンブリッジ大学で数学や物理を修めた超エリートで、後には東京帝大総長や文部大臣も歴任する。

この菊地大麓がさすがに吾一の能力を直ちに見抜き、菊地家に寄寓させるとともに、第一高等中学校（後の一高）の数学授業を委嘱する。学歴などにこだわらないダイナミックな時代であった。

ここで吾一は教育のかたわら数学研究にも意欲を燃やし、大英数学会の懸賞論文に応募し、時価二十円に相当する金牌を受ける。テーマは「四次方程式の近似一般解法」であった。

その頃、四次方程式の一般解法は存在しえないことが既に証明されていた。それにもかかわらず、近似解法とは言え、一般解を求めたのであるから、金牌に相当する価値は十分であった。思うに幼時に身に付けた和算の微積分的なアプローチがここで活きたに違いない。

それにしても明治二十年当時、日本人として外国学会で論文を発表するのは稀有のできごとであった。いまその実情を詳らかにする資料を持たないが、すくなくともかの有名な南方熊楠が英国誌ネイチャーに天文学に関する論文を発表する五年以上も前のできごとであった。この頃には、吾一は菊地大麓の欧文蔵書の多くをひそかに読破していて、菊地を驚かせたとのエピソードも伝えられている。

ここにいたって、吾一はいよいよ念願の大学進学を決意する。若干の準備期間の後、明治二十三年九月に東京帝大理科大学物理学科三学年に編入学し、翌二十四年七月には早くも卒業している。わずか十ヶ月で理学士の称号を得たことになる。三十歳の時であった。

その後、明治二十五年に金沢の第四高等学校の教授、明治二十八年にはいったん東京帝大に戻り博士の学位を目指して大学院に入学するが、翌年には中退して陸軍教授に任じられている。陸軍参謀本部時代の縁によるものと思われるが、博士の学位をとって東京帝大の教授になる道が何らかの理由で閉ざされたからではなかったかとも思われる。やはりトップクラスは洋行帰りでなければという当時の風潮だったのではなかろうか。あるいはこの頃、吾一の十一歳年下の弟・敬義が東京帝大医科大学に入学しているので、その学資を稼ぐ必要があったのかも知れない。その弟・澤田敬義は後に越後の風土病ツ

ツガムシの研究に業績をあげ、新潟大学の総長になり、新潟市の名誉市民にもなっている。吾一に似て文筆にも優れ、『紀陽随筆』などいくつかの著書を残している。いずれにしても、この小さな挫折が吾一の後年の業績のばねとなったに違いない。挫折のない人生は深みがない。

そして明治三十年には東京高等商業（現一橋大）の教授となり、以降定年時まで勤務し、教育や各種の数学書の著述等に専念することとなる。著書は十数冊におよび、菊地大麓の著のいくつかも実質的には吾一の手になるものであった。その上、吾一には滅び行く和算の研究でも多くの業績を残している。

かくして東京帝大の教授にはならなかったものの、吾一が明治・大正を代表する数学者であったことは全くゆるぎない。同郷の後輩である高木貞治が世界的な数学者としてあまりにも有名で、その影にやや霞んでしまっているが、前半の人生だけでも間違いなく日本を代表する人物なのである。

しかし澤田吾一の真価は前半の人生によってではない。大正六年（一九一七）五十六歳で東京高等商業を退官し、時間に余裕が生ずると、澤田家のルーツを求めて、遠祖・澤田重能以来の系譜調査を始める。もとより幼時から漢学の素養があり、和算史の研究を通じて歴史になじんでいた吾一にとっては、調査そのものは手馴れたものであったが、旺盛な好奇心は平凡なルーツ探索にとどまることを許さなかった。資料を求め、住居の小石川区大門町から東京帝大の史料編纂所まで足を運ぶ日々がつづくようになる。

それと同時に、和算史の研究は必然的に奈良時代の算道の研究、すなわち律令制下の古文書の研究へとつき進むことになる。

すべての面で西洋文明に圧倒される日本にあって、なぜ西洋数学に比肩しうるほど和算だけが発達したのか。もし和算がなければ、西洋の砲術や航海術、そして産業技術など短期日に咀嚼することなど、到底不可能だったに違いない。吾一はそう考えて、そのルーツを、律令制度で大学の一分科を形成するほどの重みを持っていた算道に求めたのである。律令政府は班田収受法などを実施する過程で、膨大な計数処理を必要とし、算道は当時の官吏登用の一大用件であった。吾一は算道の研究を通じて『正倉院文書』などの行政資料にも関心を持つ。

そしてついに還暦を迎える直前の大正九年には、東京帝大文学部国史科に再入学する。前代未聞のことであった。

もちろん当時の教授や助教授たち、すなわち萩野由之、三上参次、黒板勝美、辻善之助などは、吾一の弟や子供

の世代であった。既に顕職を歴任した吾一をお客さまとして遇したに違いない。それは吾一が自ら学ぶ道を切り開くことでもあった。そして三年後の大正十二年に卒業し、理学士に加え文学士の称号を得る。もちろん学制始まって以来はじめてのことであった。

そして卒業を期に、いよいよ畢生の名論文『奈良朝時代民政経済の数的研究』に着手する。引用した文献は奈良朝古文書のほとんど全てにわたっており、そのことだけでも研究への情熱が伝わるに十分であるが、内容的にも全く前例のないものであった。そのため、先行学説の引用さえほとんどないという異様な状態で、それだけ独創性に富んだものでもあった。

そして研究成果を博士学位請求論文として提出する一方、一般の人にもわかるように書き改めて、七百三十七ページにもおよぶ大著として昭和二年に富山房から出版する。富山房は吾一の数学書を多数出版した出版社であり、おそらく自費出版的なものであったと思われる。

結果的に見て、吾一のこのような配慮は大正解であった。博士学位請求のために書かれた論文は、その特異性のため審査が大幅に遅れ、通過の吉報がもたらされるのは、吾一が肺炎で急逝した直後の昭和六年となってしまう。何しろ、外国文献を多数引用し、数学理論を駆使した、文系学者にとってはまことに難解なものであった。

そのため、もし一般書としての出版がなければ、そのまま埋もれてしまった危険性さえあったのである。国会図書館に吾一の博士論文を見出せないのは、死後の通過によるためであろうか。

そしてこの大著の価値がやがて世に知れ渡る。なにしろ奈良時代の社会経済史を書くためには絶対に引用せざるを得ないほど全ての項目を網羅していて、しかも余人では達し得ない論考に充ちているのであるから、以降の奈良朝に関する論文は、まず吾一の著書の引用からスタートせざるを得ず、研究者必読の書となったのである。

そのためこのような学術書としては異例なことであるが、昭和二年の初版に続き、太平洋戦争のさなかの昭和十八年には再版される。そればかりではない。戦後の昭和四十七年には、出版社を新たに柏書房に移すことまでいとわずして、復刻版を出版し、さらにその再版が平成五年にも出されている。骨董本や資料集ならいざ知らず七十年にもわたって生き続けている研究書など、おそらくその類をみないのではあるまいか。

さて、ここで吾一の研究概要について触れておこう。本書は六篇四十二章の構成となっており、政治制度、人口推論、税帳解析、斗量復元、地方政治実態、産業経済などについて論じているが、もちろん圧巻は人口推論

にある。しかし論文の主目的はあくまで奈良朝期の民政経済史の解明にあった。人口推論はその基礎資料の作成過程のひとつにすぎないのであるが、ここで吾一の数学的な素養が縦横に発揮される。

なにしろ東京高等商業で経済数学、生命保険数学を論じ、統計論を熟知している吾一である。当時の学者たちにとっては、戸籍・計帳や正税帳の残簡など資料としては、もてあまし気味なものであったが、吾一はこれらを整理し、時には虫食い算的に、時には数値間の対応関係の解明を通じて欠値を復元しながら、年齢構成や性別構成を考慮して、地域別に纏め上げて行く。そしてこれらの作業結果と律令の規定を総合的に考察し、地域間に共通する項目を次々に抽出する。無意味な残欠資料が吾一の手にかかると次々によみがえる。

一方、出雲風土記、豊後風土記、播磨風土記や続日本紀などの奈良時代の資料と後世の和名抄を対比し、そこに記載された郷の数がほとんど一致する事実を見出す。これが日本全体の人口推定に決定的な役割をはたす。

かくして日本の人口はミクロ的にもマクロ的にも明らかにされる。この推論結果は従来の想像的な見解とはまったく異なり、既存資料を最大限に活用したもので、新たな木簡資料等が豊富になった現在でも、いまだ修正らしい修正が行われていないほどの定説である。

しかし吾一の研究の価値が人口推論ばかりにあるわけではない。いやむしろ、より重要な成果は正税帳の記載方式や計算方式を完全に復元し、行政の実態を明らかにして、後学に資すること大であったことや、斗量の研究によって当時の収穫量を明らかにしたことにある。古代社会の実態をつかむためには、人口とともに食糧生産の実態が明らかにされなければならないからである。

その点で、計量史研究者でもある私が特筆評価するのは、吾一が斗量すなわち当時の容積単位（石、斗、升）を文献資料と正倉の構造を対比して較正し、当時の一升を現在の四合六厘と確定させたことである。それは従来の定説であった五合八勺説とは大違いであり、古代食料生産のイメージを一変させるほどのものであった。

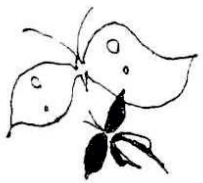
どの学問分野でもそうであるが、いったん確立した定説を覆すのには非常に困難で、中途半端な論証では見向きもされない。すでに旧定説にしたがって多くの論考が行われているからである。したがって決定的な新資料でも出現すれば別であるが、古代史のように限られた資料の中で定説を覆すのは至難な技である。

このことは、奈良朝以前の「高麗尺」定説を否定し、新たに「古韓尺」説を唱えている私にとっては、日頃痛感しているところである。過去の学説がなければ、すんなり認められる新説であっても、「ご破算で願いましては」とは行かないのが常である。それにもかかわらず、吾一は多角的、合理的な研究を通して、一気に旧説を葬り去ってしまう。温厚冷静な吾一にしても、この部分では自説に関して「一点の疑いもなし」と力んでいるのが面白い。

かくしてふたつの人生を生きた吾一。晩年の研究については余程のこだわりを持っていたに違いない。子息の澤田弘貞によれば、吾一の甥姪たちが澤田家を来訪するたびに、その大部の原稿を提示して講義を始めるので、「そらまた奈良朝が始まった」と顰蹙を買ったことも再々であったという。私の著書『まぼろしの古代尺』を家族の誰もが読んでいないことに似て、思わず微笑んでしまう。だから、おそらく吾一の後を追おうとしている私が、吾一の心境を一番理解しているのではないかとさえ自惚れている。

その吾一、東京高等商業の教授就任の翌年、三十七歳で十六歳年下の幸子と結婚している。当時としてはまことに晩婚であったが、三子に恵まれる。長男の弘貞は医師ながら、結晶理論で理学博士の学位を持つが、不幸にして次男の秀篤は東京帝大在学中に早世している。弟の敬義とともに父母に孝養を尽くす幸せな家庭生活であったが、子息の死は晩年の吾一を悲しませたに違いない。

澤田吾一は昭和六年、急性肺炎で急逝する。享年七十であった。



国近三吾先生の思いで

吉田忠雄

平成十六年一月二十九日夜、岡信三郎先生から電話があり、国近三吾先生が急逝されたことがつたえられた。享年九十四歳とのことであった。そのとき私は既に就寝しており、家内が対応した。翌日午後一時に告別式が予定されており、私に弔電をうってほしいという伝言があった。

私は一月三十日午前九時三十分に近所の郵便局に行き、国近先生の奥様宛てに弔電を打った。私は歳とともに物忘れがひどくなりつつあり、お世話になった国近先生のことも書きとめておかないと忘れてしまう恐れがあるので、ここに筆をとることにした。

私は昭和三十一年に東京大学工学部応用化学科を卒業し、日本化薬株式会社に入社した。そして同社の火薬製造工場である山口県の厚狭作業所でニトログリセリン、ニトロセルロースおよびニトロ化合物の製造現場監督に従事した。その間、平行して現場の製造工程の改善研究を行った。

それからある事情で昭和三十五年四月に東京の本社に転勤し、企画室勤務となった。そこで私に与えられた仕事は、自動車の塗料の原料となるアクリル酸エステルの製造法の開発研究であった。先ずは文献調査からはじめた。

六月になると、先任の太田正昭さんと交代して京都大学化学研究所の国近研究室で研究を行うことになった。国近先生は昭和十年に京都大学理学部化学科を卒業された方である。同級生の伊藤さんが日本化薬企画室の課長であったので、日本化薬と国近先生の関係が生まれたのであろう。

昭和三十五年六月のある日、私は伊藤さんに連れられて京都大学化学研究所に行き、国近研究室で初めて国近先生にお目にかかった。初めての印象はうまくやっていけるがどうかわからないという不安なものであった。そ

のとき国近先生は五十一歳で私は三十歳であった。

研究室には、岡信三郎助教授、榊原保正助手、片桐孝夫助手と二人の女性研究員、一人の女性補助員が居られた。岡先生が私の直接の実験指導者で他の方々は研究室の同僚であった。

先輩の太田さんの話によって国近先生についてのいくつかの予備知識を得ることができた。国近先生はアセチレン化学の研究者として有名であり、著書もある。私がお邪魔した当時は石油化学や触媒化学の領域にも手を伸ばしておられた。

国近先生はテニスがお好きである。夕方五時になると教授室に皆を集めて紅茶のティーパーティーを開く。それが終わるとすぐにテニスウエアに着替えてテニスコートに出て行かれる。研究室員は少し雑談してからテニスコートに出て行く。

私が国近先生から最初に与えられた研究テーマは、アクロレインの液相酸素酸化によるアクリル酸合成の研究であった。アクロレインは必須アミノ酸メチオニンの原料として日本化薬で使っていた。

アクロレインを溶媒ベンゼンに溶かしてオートクレーブ（加圧反応器）に入れる。これに酸素を圧入して振とうして反応させる。数回の実験の後爆発が起きた。幸い私は爆発が起きたときに現場に居なかったので怪我をしないで済んだ。

可燃性のベンゼンを溶媒として使っていたので、これが酸素と反応して爆発したと考えた。ベンゼンの代わりに不燃性の四塩化炭素を溶媒として使えば爆発は起きないだろうと考えた。国近先生と相談して、そのようにして実験を再開した。

しかしやはり爆発は起きた。このときも、私が昼飯から帰ってきて爆発が起こり圧力ゲージが吹き飛んでいるのを発見した。自然現象に人知が及ばないことを痛感した。国近先生はこの実験は止めるよう指示された。

続いて、先生は触媒を用いたプロピレンの気相空気酸化によるアクリル酸合成の実験を指示された。先任の太田さんが既にシェル法と呼ばれる酸化銅触媒を用いた方法を研究していた。

先ずはこのシェル法を追試し、反応条件を変えて収率の変化を調べた。それからソハイオ法と呼ばれる新しい方法が発表されたので、特許を取り寄せて追試実験を行った。反応条件や触媒を変化させて実験を行い、収率の向上をはかった。

確かに、ソハイオ法はシェル法に比べて好収率を与えた。さらに一年間の研究で収率はかなり向上した。しかし、その収率は特許に記載されたものに達しただけだった。特許に記載された成績は、さばを読んで上乗せされたものなのか、あるいは既に好収率を達成した後に書かれたものなのか疑問をもった。

ソハイオ法が優れていることがわかったので、太田さんがアメリカに行き、ソハイオ社と交渉して、ソハイオ法の技術導入をすることになった。

プロピレンの空気酸化によるアクリル酸の合成ではソハイオ法で好成績を得たので、この方法をイソブチレンの酸化によるメタクリル酸の合成に適用することを試みた。しかしアクリル酸の場合のような好成績は得られなかった。そのときのイソブチレンの取扱が杜撰であったせいか、一年後の冬に喘息に苦しんだ。

国近先生は大所高所から研究を適切に指導してくださった。研究を進めるのが楽しくなる指導であった。国近先生のお人柄を反映して、研究室は穏やかな雰囲気に包まれていた。したがって研究室は自由に発言できる雰囲気であった。しかし、研究室員の冗談が過ぎると、「研究室は神聖なところだから、それをわきまえなければいけない」とたしなめられた。

実験の具体的な指導は岡先生がしてくださった。岡先生のやりかたは、当日行った実験の結果は当日まとめて翌日の計画を立てるというものであった。私にとっては貴重な経験となった。そのため毎週本社に送る私の「国近研究室報告」は充実したものとなった。

岡先生は私より数歳上で、活発に活動しておられた。国近先生とは互いによい信頼関係にあり、名コンビで研究室を運営しておられた。これは見習うべきものであると思った。私も国近先生、岡先生から大事に扱われ、今でも感謝している。

榊原保正さんは私と同年輩である。国近研究室の中では一番酒が強く、酒の好きな私とは最も多く付き合っていただいた。化学研究所の官舎に住んでおられ、私は奥様やお子さんとも顔を合わせることが多かった。

片桐さんも私と同年輩である。岡先生、榊原さん、片桐さんはそれぞれ違った個性を持っていて、大変勉強になった。片桐さんは博識で、皆の知らない話題を提供してくれた。

三人の女性研究室員が居られた。皆さんは私に対しても親切であった。

私はソフトボールや野球が好きで、それまでにかなりの経験があった。しかしテニスはあまりやったことがなかった。国近研究室に来たら毎日のようにテニスをやるようになった。岡先生は親切で実験指導のみならず、テニスも手を取って教えてくださった。ダブルスでは、下手な私と組んで、負けを厭わず引き立ててくださった。

化学研究所の技術職員に上野さんというテニスの名手がいた。この人も親切で何かと教えてくれた。結局私はあまりうまくならなかったが、国近先生のお蔭で、後で東大や法政大で学生とテニスを楽しむことができる程度になった。

毎日のように昼と夕方テニスをしたおかげで、化学研

究所の多くの先生、職員の皆さんと親しくなることができた。同年輩の作花さんと親しくなったが、最近名前を見ることがあるので、専門領域でえらくなられたのであろう。田代先生ともお手合わせをさせていただいた。やはりお名前を見ることがある。

大阪で行われた関西化学工業会のテニス大会にも参加させていただいた。武田薬品工業（株）研究所の所長でテニスの上手な神澤さんという方が居られた。国近先生は、私がテニスの初心者だと言ってくださったが、神澤さんは私がそれほど下手であるとは思わなかったらしい。私と神澤さんはダブルスを組んだ。第一回戦で負けてしまった。そして敗者復活戦では優勝した。神澤さんはすごいテニスの実力者であった。

別の機会にソフトボール大会が開かれた。そのときに私はホームランと三塁打を打った。テニスは下手であったが、ソフトボールでは実力者であることを実証して、面目を保った。国近先生も私を見直された。

国近先生は当時五十一歳で、再婚されており、小さい坊ちゃんが居られた。当時長嶋茂雄選手の全盛時代であった。坊ちゃんが長嶋選手を見に行きたいと言っているという話を聞いた。早速日本化薬の大阪支店に頼んで、甲子園球場の切符二枚を送ってもらい差し上げた。大変喜ばれた。

夏には研究室で伊勢湾に海水浴に行った。このときに

は、海岸に黒い原油の塊が流れ着いていた。海洋汚染が著しい昭和三十六年のことであった。

冬には、片桐さんの発案で兵庫県神鍋川に研究室でスキーに行った。驚いたことに、国近先生も行かれるといわれる。皆が心配した。先生が足を折られたらどうしよう。実際に先生はスキーに行かれてすべられた。骨折もされなかった。日頃テニスで鍛えておられたからであろうか。

春は、化学研究所の玄関前の桜の巨木の下で国近先生を交えて研究室の花見の宴を催した。素晴らしい花見であった。これは私にとってはよい思い出となり、その後の各大学での学生との花見を行う前例となった。

秋には室戸台風が来た。私と榊原さんは研究室内にいた。台風が接近したときに水銀気圧計を見ると普通の七六〇㎜水銀より水銀柱がずっと下がっていた。榊原さんとすごく強い台風ですねと話し合った。化学研究所や高槻市では大きな被害は出なかったが、場所によっては大きな被害があったことを翌朝の新聞で知った。

国近研究室のOB会にも出していただいた。OBの中の一人がハワイに行ってこられて、「トリスを飲んでハワイな行こうというコマーシャルはあたりだ。ハワイは本当にいい所だ」と言ったのを今でも覚えている。残念ながらその後ハワイは飛行機の中継地として通ったことはあるが、行ったことはない。

国近研究室の研究者の出身学科である京都大学理学部化学科の同窓生の交流も京都市内で行われた。「静」という店が会場であった。京都大学の先生方は京都ではもてることを知った。

日本化薬の取締役火薬部長で厚狭作業所勤務時代にかわいがってくださった南坊平造さんが国近研究室を訪ねてくださった。南坊さんは私たちの入社式の折に、「Anfang ist shuwer」というドイツの格言を贈ってくださった。これは今まで学生たちに贈る言葉として使わしていただいている。

南坊さんは火薬の歴史に造詣が深く、日本化薬退職後は、銃砲火薬史研究会に拠って九十一歳でなくなられるまで火薬史の研究をされた。北京理工大学の副学長であった丁儆教授も火薬史の大家であるが、南坊さんの論文を多く引用している。この影響で私は火薬史に興味を持っている。

そのあと私は南坊さんに京都祇園の美濃家という料亭に連れていってもらった。私にとっては初めての経験であった。昼間から風呂に入り、三助が背中を流してくれた。風呂から出てくると、浴衣を着た相撲取りとすれ違った。付け人を従えた関脇鶴ヶ峰であった。鶴ヶ峰は手を前にして「ごっつあんです」と言った。私は「こんにちは」と挨拶を返した。

縁は異なもので、私は隅田川花火コンクールの審査員として知り合った鶴ヶ峰の次男の井筒親方(元関脇逆鉾)と親しくなり、井筒部屋に出入りするようになった。そんなことで、部屋付き医師の武田先生とも親しくなり、鶴ヶ峰の化粧回しを譲られた。この化粧回しはショーケースに入れられて老人福祉施設を巡回し、お年寄に喜ばれている。

京都の大文字焼きの折に私の許婚とその母親が高槻に訪ねてきて、国近先生をはじめ研究室の皆さんに挨拶した。義母は八十九歳で既に世を去ったが、当時国近先生の印象を、立派で素晴らしい先生だと語っていた。国近先生も大変喜んでくださった。そんなことで家内は国近研究室の皆さんと面識がある。今回国近先生のご逝去にあたり、岡先生から電話があった折にも家内が電話に出て詳しいお話を伺うことができた。

私が大学に転職し、教育研究に携わってきたのは、国近先生並びに国近研究室の皆さんの影響が大きい。見習いたいと思ったからである。

昨年まで国近先生は年賀状に添え書きし、励ましの言葉を下さった。今年の年賀状には添え書きがなかった。体調を崩されたのかと思って心配した。これが虫の知らせであったのかもしれない。

古い物・遠い夢

忠内正之

第八章　御風の短冊

太平洋戦争が終わった時私は旧制中学の三年生であった。長かった工場動員から学校へ戻ったが、あまりにも激しい世の中の変化に従いて行けず戸惑った。教師の節度のないひどい豹変ぶりも癪にさわった。勉強に精を出すこともなく唯々小説本を求めては乱読にふける怠惰な毎日であった。ビジョンも目標も定まらぬ生活は実にだらしの無いものだった。世の中も自身も激しい過渡期にあったのである。

世情が少し落ち着いて来て、自分も稍自信を取り戻すことが出来たのはしばらく後のことであった。総合雑誌もぼつぼつ発行され出した。知識欲盛んな折柄片端しから読みたかったが、買う金が無いので人に借りて読んだ。その頃講談社から出た雑誌「群像」に載ったエッセイを読んで特に感銘を受けた。(群像は今も発行されている。)作者名題名共に忘れたが、内容は戦後の絶望とカオスの中で如何にして作者自身が平静さを取戻したかとの述懐談であった。その文中に作者の心を鎮めるキッカケとなった、次の二首の歌が紹介されていた。

あしびきの　いわまをつたう　苔水の
かすかにわれは　すみわたるかも

大空を　静かに　白き雲はゆく
しずかに　われも　生くべくありけり

私はこれ等の歌を何度も繰り返し唱える様に読んだ。前首の枯淡な境地を完全に悟るべくもなかったが何か心が洗われる様な気がした。後首は文字通りの歌で生きる事への静かなうちに力強い自信と平常心をとり戻すべく反省をさせられた。なお世情は流動的でありその後進学

上京したもののポット出の田舎者としては心身共に苦難の日々が続いた。

革新思想の洗礼を受けた。惨めな片想いの失恋をした。生家の経済上の逼迫が生じた。更に上京二年目で胸部疾患に倒れる等々の苦労があった。この様な中でマイペースを守って平常心を維持してこれらに耐えて何とか克服出来たのは家族の応援に依るは当然であるが若さと座右の銘として心に刻んだこの「大空の」歌のお陰があったと思う。

就職して働き盛りの三十才台大阪勤務となった。文人趣味があって骨董に興味を抱き始めていた私は大阪のそれらしい店を冷やかして歩いた。阪神デパートの美術品売場で「大空の」短冊を発見した。(写真参照)「御風」と署名があった。代価一万円は当時としては安くない価格であったがどうしても欲しくて無理して買った。以来今日まで大切にして座辺に飾っている。

その後の調べで前の歌は良寛作であり後の歌は相馬御風の作と解った。憧がれていた御風の短冊を得た喜びは一入であった。

良寛(一七五八～一八三一)は江戸後期の禅僧で詩歌・書に秀れた人物である。越後生まれの偉人を選ぶなら一に「上杉謙信」二に「良寛」と言われる程立派な人であった。野にあって自然や子供を愛し、道を求めて流浪し、やがて故郷へ帰って小さな庵を結んだと言う。その良寛は晩年貞心尼と言う若くて才色兼備の女性との熱烈な交流があって必ずしも孤独ではなかったと言う。そんな人間的なところも私は好きである。「あしびきの」歌は女性との親交があった晩年の頃の作と思われ「世の中に同じ心の人もがな草のいおりに一夜かたらむ」「こいしくばたずねて来ませわが宿は越の山もとたどりたどりに」等一連の相聞と思われる歌がある。

良寛の詩歌は弟子たちに口伝されたものが多く揮毫は好きで無かったので極めて能筆でありながら真筆のものは希有と言う。現在目にする良寛の遺墨は殆んどすべて偽物といっても過言ではないらしい。もし真筆物があれば間違いなく重文クラスである。私ごときが美術品として手に入れたく思っても到底高嶺の花なので諦めが早い。

御風(一八八三～一九五〇)は同じく新潟の出身である。少年期より文才に秀で、中学時代国語の先生から和歌の指導を受け、佐々木信綱の「竹柏会」に入会し詩才を現し始めた。その頃から「御風」と号した。早稲田大学英文科を卒業後井上天弦、岩野泡鳴らと共に早稲田文学社に入る。明治四十年命を受けて早稲田の校歌「都の西北」を作詩する。時に二十四才、一躍名声を得る。その後文壇で華やかな活動を行ない、文芸評論、詩作に好評を博した。大正五年突如として自己反省の書「還元録」

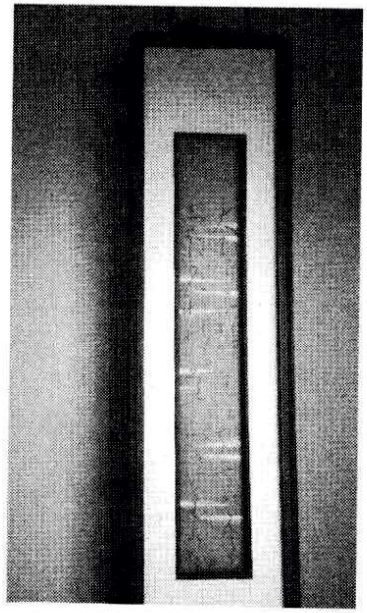
を発表、中央における一切の地位を捨ててふるさと糸魚川へ帰って傾倒していた良寛研究に専念した。人間が人間らしくなるには良寛の心を学ぶことにありと悟ったのである。そして良寛に関する数多くの本を現した。

今日良寛が有名になったのは、御風がその心と事跡を世に広めたからである。御風は昭和二十五年六十七才で没したが、帰郷後はたった一度だけ上京したのみと言う。それは師島村抱月急死の葬儀に立合った時であった。女優松井須磨子が程なく抱月の死の跡を追ったことは有名である。須磨子が歌って一世を風靡した「カチューシャの唄」は御風の作詩によるものである。

さて私の宝物となった短冊の歌は何時頃の作であろうか?この稿を書くに当って色々資料を調べたところ「大空の歌」は大正十二年に発表された御風の代表作であった。そしてこの歌は現在糸魚川の美山公園山頂に立派な碑となって飾られていることが判った。(御風記念館談)折をみて一度糸魚川を訪ねて見たいと思っている。

御風自身この歌が好きで自信作でもあったので求められれば喜んで揮毫したそうである。従ってこの歌の色紙・短冊等はかなりの数が市場に出廻る筈であるが、最近の古書展など訪ねてもとんと見掛けたことが無い。矢張り人気が高いのであろう。

改めて今この短冊の歌をじっくり眺めると、良寛の心を受け継いだ御風の求道者としての精神が私の胸に迫って来る。稍もすれば今だに迷い勝ちな自分の心が糺され、更に自己研鑽に努めなければと自戒させられるのである。



第8章　御風の短冊

俳句

海霧深し

大澤鷹雪

砲身の　向きし彼方の　海霧深し
裏返し　土下座も強ひて　芋嵐
町営の　温泉白し　蕎麦の花
子規館を　出づれば眩し　櫨紅葉（松山三句）
山茶花の　緋の飾りたる　石鳥居
城山の　萩の間近の　リフトかな
盗人も　出でて荒れたる　刈田かな
冬桜　咲く道筋の　武家屋敷

小走りに　向ふ宿の灯　初時雨
冬桜　爛漫と咲く　身延山
テロ続く　ニュース横目に　根深汁
帯締めて　文士気取りの　懐手
堀切の　崖下埋めし　石蕗の花（宮崎三句）
夜神楽や　ともに酔ひたき　友ありて
冬ごもり　倉庫潰して　獄となす
「ひかりあれ」　神もとなへし　初茜

霧氷林　朝日の中の　ミレナリオ
朽ちし木を　支へし蔓も　枯れにけり
吹初めの　笛にぬくもり　残りけり
買初や　つひに求めし　老眼鏡
星雲も　星も似たるや　廻し独楽
芸人の　独楽白刃を　渡りけり
自嘲して　凍鶴眺む　片思ひ
仰向きて　目蓋で受けし　春時雨
音の乾く　笛に潤ひ　春時雨
寄りし子に　片栗の花　教へけり
お浸しの　片栗の花　味淡し
親株は　ごみと捨てられ　菊根分
まづ素質　あとは丹精　菊根分
重来を　期す者北へ　雁供養

雁風呂や　残りし者も　行く者も
菜の花や　女児の饒舌　聞くがごと
菜の花を　乱し機関車　通りけり
亀鳴くや　ドラマとなりし　老の恋
亀鳴いて　相聞歌集の　塵払ふ



短歌

行雲流水（五）

石黒修身

古き道疎水流れて鯉群れり
　文豪の里ひそと昏れゆく
（津和野町）

先賢や宰相あまた出でしとう
　長州の古都武家屋敷古りぬ
（萩市）

「良い旅を」道指しくれし若き女（ひと）
　倉敷の町の風情さながら

丹沢の山なみに座す冬の富士
　落暉を背負いくつきりと聳（た）つ

淡々と詩歌論じてその謂は
　不羈にして良し大岡信の

さむらいを描きしドラマ多けれど
　新渡戸の説きし武士道ありや

旅人はそぞろ歩まん白壁の
　旧き舘（いえ）立つ倉敷の町
（倉敷市三首）

振舞の佳き女（ひと）ありき倉敷の
　茶器を商う小さき舗にて

重き賞受けし女（ひと）らはうら若く
　あつけらかんと感想を言う
（芥川賞二首）

ベテランの労作よりも若き才
　選ばれるのか時代は奔（はし）る

フアド聴くリスボンの夜の追憶は
　微醺そぞろに「サウダーテ」

パリに居てマルモツタンまでそぞろ行き
　モネを観し日を懐かしみおり

もの知らぬ老爺となりて薬局で
　処方の説明(はなし)聞くとき吾は

老いの坂やすらぎの日々こい願う
　放埒のとき遠のきし今

やすらぎの常日にあれど
　たまさかに荒ぶる心陋巷を恋うる

祝　出　版

仙境黄山
絶景桂林
（写真集・漢詩入）

撮影　塩塚邦夫（二科会）
漢詩　鯨　遊海（日本ペンクラブ）
香港天馬図書有限公司出版

㈳日本中国友好協会推薦
中国安徽省人民政府観光局後援

中国の水墨画に見られる断崖絶壁の奇山「黄山」の雄大奇異、幻想の世界を余すところなくとらえた名写真集。
流麗な漢詩の調べに乗って居ながらにして深山幽谷の世界に浸ることのできる名品。

価格（税込）3000円

荘内藩と「海坂藩」

石黒修身

冒頭の歌は、藩主の家柄でもと伯爵であったことから、周囲の人々から「殿、殿、」と呼ばれていたことを率直に詠んだものであり、酒井氏ならではの内容で、歌会始の題「町」に相応しい一首であろう。

一方で「海坂(うなさか)藩」は、作家藤沢周平（平成九年歿）が著した数々の時代小説の舞台としてしばしば出て来るもので、徳川の治世らしい北国の小藩という設定である。

この「海坂藩」の各地域、町や村を舞台として、藩主以下の上、下級武士や町人、百姓達を登場させているが、この背景は、荘内藩の領地であった現在の山形県鶴岡市一帯にわたっている。即ち、酒井家ゆかりの鶴ヶ丘城や、領内の集落、藩校、庭園等が物語りの舞台に擬せられているのである。

そして、藤沢周平自身も鶴岡市の生れで、山形師範を出て教員を務めた湯田川中学もこの地にある。

酒井氏は、前述の如く穏れもない「殿様」で、令名高

「今もなほ殿と呼ばるることありてこの城下町にわれ老いにけり」

平成十五年一月十五日の宮中歌会始の召人として酒井忠明（さかいただあきら）氏が披露された歌である。

御存知の人もあろうが、酒井氏は徳川治世下の荘内藩（徳川譜代で江戸初期から藩籍奉還までの二百五十年間十三万八千石の大名）の十七代目の当主である。

酒井氏は歌人として令名が高く、「黄鶏」という歌誌の主宰をしていたが、二十年ほど前まで筆者がかつて所属していた「泉会」という結社に十五年程居られ数多くの歌を寄せられている。

その縁で筆者の歌集「時潮の波に」についての懇篤な批評を、そして自身が召人に選ばれたことの喜びを縷々綴った信書を貰っている。

記述は前後するが、酒井氏は今年二月に肺がんのために逝去された。

い歌人でもあった。

他方周平は、その作品が歿後も幅広い読者を保ち、その描く主人公の生きざまが昨今のリストラの嵐の中で苦悩する中高年の人々の共感を呼びブームとなっている。

出版物にとどまらず、ついにはその作品が、松竹の山田洋次監督により、「たそがれ清兵衛」として映画化され、これまたロングランで人気を博したのは周知のことである。

更には、入賞は逸したものの二〇〇四年のアカデミー賞候補にノミネートされたことも記憶に新しい。

このような今日的な背景から、聊かなりとも短歌にいそしむ者として、そして周平の愛読者として、酒井氏と周平の結びつきに敢えて拘わりたいのである。

多分に筆者の思い込みによるこじつけの嫌いがあることは自覚するところであるが。

なお、過去において、酒井氏と周平との直接、間接の出会いがあったか否かは、極めて興味深いことではあるが、筆者の乏しい文献渉猟では把握出来ていない。

そして、この雑文は荘内藩の歴史記述でも、周平の作家論でもない。単に両者を並べて観照したい想いと、既に天界に在る両者に対する追慕の念の発露であると理解して頂ければ幸いである。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名　まんじ

ひのえうま

丙午の女（二）

太田和貞

徘徊

長崎産婦人科病院で、いつも和服を着ている桂女（けいじょ）は目立った。病院に併設されている老人施設に収容されている老人たちはジャージー姿だった。

和服姿の桂女には、九十三歳の老いは少しも感じられずに、華やかな色っぽさを発散させていた。

小柄で色白な桂女の魅力にひかれて、歩くことのできる男の老人たちは、桂女の姿をみつけると、桂女のあとを追った。

朝と夕方の二回、病院の廊下を歩く桂女のあとに続いて歩いた。まるで大学病院の教授の回診の行列に似ていたが、この行列はみすぼらしかった。

桂女はこの行列を極端に嫌って、「シィ、シィ」と追い払おうとしたが、無視されて、いつも七、八人の老人たちが桂女のあとに従っていた。

桂女が個室に逃げ込むと、老人たちは遠慮なくドアを開けて個室の中をのぞき込んだ。

桂女は、担当の看護師斉藤真紀（まき）に、「なんとかして、ちょうだい」と訴えた。

「美人は、いいですねぇ」

真紀は笑いながら、桂女をからかった。

「桂女さんがいらっしゃってから、みなさんに元気が出てきましたのよ。特に殿方はそうですが、女の方も唇に紅を差すようになりました。桂女さんと張り合うつもりなんでしょうか？。殿方には桂女さんの着物姿が好ましいし、女の患者さんには羨ましいんでしょうね」

「それなら、わたしは着物をやめるわ。みなさんが着ているジャージーというの、あれを着るわ、真紀さんあれを買ってきて頂戴。一着どれくらいするかしら？」

「そうですね。いろいろありますけど、一着、五〇〇〇円あったら、おつりがくると思いますけど、……」

「それなら、五着、買ってきて」
「えッ、五着ですか、……」
「わたし、これでも小料理屋の女将だったのよ。毎日、同じ物を着れる訳はないでしょう。わたしの着物の好みは知っているわね。わたしの好みに合わせて欲しいけど、あッ、いいわ。真紀さんにお任せするわ」
ここまで言って、桂女は引き出しから、院長の三千石が置いていった区の俳句連盟の祝儀袋からピン札の五万円を取り出した。
「これ、区の俳句連盟の方々からいただいたの。わたしは、『ボケるが勝ち』と思っているのよ。ボケてしまえば、あとは神様にお任せ。わたしが心配することではないわ。そのうち、真紀さんにもご迷惑を掛けるかも知れないけど、よろしくね。そのときは、きっと、わたしはわたしでなくなっているわ」
「ボケるなんて、そんなことありませんよ」
真紀はたしなめながら桂女の体の寸法を測った。
「昼休みに買ってきます。できるだけ、かわいらしいのを選んできますけど、なんだか胸がドキドキします」
真紀は一万円札を五枚、ポケットにしまって、その上をポンポンと叩いた。
昼の休憩時間に、小走りにスーパーに駆け込んだ真紀は大きな紙袋を抱えて、急いで病院に戻ってきた。真紀の選んだジャージーが桂女の好みにあうか心配だった。
「わたしが思った通り、真紀さんセンスがいいわね。このジャージーの色合い、とても気に入ったわ。それに、五着もいっぺんに買いますから、まけなさいと交渉したのもいいわ。わたしも女将をしていたとき、毎朝、築地でお魚の仕入れをしていたの。必ず値切ったわ。値切れば、それだけお客さまのご負担がすくなくなるでしょ」
釣り銭とレシートを渡そうとする真紀の手を桂女は両手で包んで言った。
「これから、わたしはだんだん壊れていくと思うの。あげたくとも、あげられなくなると思いますから、これは、とって置いてちょうだい」
「こんなに、たくさん、……」
「いいのよ、これからあなたに掛ける迷惑を考えたら、すくないくらいだわ。それじゃ、着てみましょうかね。さーてと、どれにしましょうかしら、……」
桂女は五着のジャージーをベットに並べてみくらべた。桂女が選んだのは、真紀が気に入った桜色のジャージだった。真紀の顔がいっぺんにほころんだ。この桜色のジャージーを見付けたとき小柄で色白な桂女によく似合うと思った。
その桂女が桜色のジャージーを選んでくれたことで真紀は満足し、桂女により親しみを感じた。
「それじゃ、着さしていただくわ。席をはずしていただける?。着替えと、トイレにいく後ろ姿を人に見せないのがわたしの流儀なの」
桂女の言葉に、真紀は慌てて個室を出た。
遅い昼食をすませて、真紀が桂女の個室のドアをノックしたが、応答はなかった。
真紀は、そーっとドアを開けた。
「桂女さん」真紀は小さい声で呼んだ。トイレにも、風呂場にも桂女はいなかった。
真紀は、すこし心配になってきた。各階の病室を回って、桂女を探したが、どこにもいなかった。
最後に、玄関の受付の看護師に聞いた。
「小柄で色白で、トンボ眼鏡を掛けた和服の方でしょ、玄関には降りていらっしゃいませんでしたよ」
そう言って首を横に振った。
「ありがとう」そう言い捨てて、真紀は階段を二段ずつ駈け上がって桂女の個室に飛び込んだ。
トンボ眼鏡がベットの枕の脇に無造作に置かれていた。
桂女がジャージーに着替えたとき、無意識にトンボ眼鏡をはずしてベットの上に置いたのに違いなかった。
(桂女、和服、トンボ眼鏡)
と思い込んでいる看護師は、トンボ眼鏡をはずして、桜色のジャージーを着た桂女は別人に見えたはずだった。
真紀は婦長室に駈け込んで事情を説明し、「私の責任です。申し訳ありません」と謝った。
「私の名前を使って、ここへ水野さん、太田さん、鈴木さんの三人を呼んで、事情を説明して頂戴。私は院長先生に報告して、ご指示をいただいてきます。大丈夫、心配しないで、……」
婦長は真紀に言葉を掛けて、足早やに婦長室を出ていった。
「院長先生が早速、小岩警察の署長さんに電話を入れて下さったわ。全パトカー、全署員が動き始めてくれたと思いますけど、できれば私たちで見付けたいわね。患者さんたちに気付かれないように、そっと連れて帰ってきて下さいね。今、三時半です。四時半には暗くなりますから、これからの一時間が勝負よ。それじゃ、お願いします」
婦長から激励されて、四人の看護師は婦長室を出た。
真紀は緊張で、全身が細かく震えた。
(わたしの不注意で、こんなことになってしまった)
京成電車に跳ねられた桂女の姿が頭に浮んできて真紀は首を振った。
「四方向に分かれましょう。私は京成小岩駅周辺と線路際、水野さんは駅前の商店街、太田さんは柴又街道沿いの商店街、鈴木さんは駅の北口を探して下さい。見付けたら、すぐ携帯電話で連絡し合いましょう」
真紀はテキパキと指示をして、それぞれの方向に別かれた。入院して間もない桂女にも分かるように、四人とも白の看護服にカーディガンを羽織っていた。

京成小岩駅の階段を上るとき、真紀の膝がガクガクと震えた。

「二時半ごろ、桜色のジャージーを着た品のいいおばあさんが、この改札口を通らなかったでしょうか?」

駅の事務室の奥から出てきた駅員の姿を見て、真紀は(これは駄目だ)と直感した。

駅の改札は自動化されて、駅員は改札口に立っていなかったのだ。

「気が付きませんでしたね」

駅員の返事は、そっけなかった。

「ありがとうございます」

真紀は礼を言って、改札口を離れた。

線路をまたいだ跨線橋(こせんきょう)の渡り廊下の窓から、真紀は暮れ始めた小岩の街を眺めた。

西の空は黄色味を帯びた茜色に光り輝いていたが、小岩の上の空は急速に光りを失っていた。

(この街のどこかに、桂女さんはいる。早く探さなくちゃ)

真紀は、そんな思いにかられて、階段を急いで降りた。

駅前の商店街をのぞいても桂女はどこにもいなかった。

街灯が一つ、二つと付き始めた。

真紀の後ろから自転車が二台追い越していった。

その後ろ姿をぼんやり見送っていた真紀が、「おまわりさーん」と叫んだ。

キ、キ、キッとブレーキを掛けた自転車に駈け寄って、

「わたしは長崎婦人科病院の看護師の斉藤真紀です」

と名乗った。

桂女が病院を抜け出して、服装は桜色のジャージー、九十三歳の小柄で品のいいおばあさんであることなどを話した。自分の一存で、路傍で警察官に捜索を頼むことにためらいはあったが、桂女を探しだすことが先決だと真紀は思った。

「交番にそういう迷い人はおりませんが、本署に問い合わせてみましょう」

中年の警察官はマイクで話し始めた。

「その年寄りはピンクのジャージーを着ていますか?。ああ、そうですか。ありがとうございます」

警察官の応答で、桂女が見付かったことが分かった。

「お年寄りは西小岩五丁目の池田さんというお米屋さんのお家にいらっしゃいます。最近、引っ越してきたばかりなので、家が分からなくなってしまったと言っているそうです」

警察官の言葉に真紀は、ほっとした。

「本当にありがとうございます」

二人の警察官の後ろ姿に、何度も礼を言った。

空は黒みを増して、各商店の蛍光灯が輝き始めた。

(真っ暗になってしまったら、あぶなかったかも知れない)

携帯電話で婦長に報告しながら真紀はそう思った。

三人の看護師にも連絡し、池田さんの家の前で落ち合うことにした。三人の看護師から、「見付かってよかったですね」と涙声が返ってきた。

途中で真紀は菓子折を買った。先日、桂女から貰ったジャージーの釣り銭だった。

こんなに早く、桂女のために使うとは思ってもみなかった。

「これから、わたしだんだん壊れていくと思うの。あげたくとも、あげられなくなるから、……」

そう言ったときの桂女の訴えるような顔の表情を思い浮べた。

池田さんの家は、すぐ見付かった。愛国学園高校の裏手の路次の角にあった。

池田米穀店という看板が出ていた。真紀は玄関のチャイムを押した。「はーい」という返事があって、すぐ玄関のドアが開いた。主婦の池田まさだった。

「うちにもボケ始めた年寄りがおりますので、すぐ分かりました。それで、警察に電話を入れました。こんなに早く身元が分かって安心しました」

菓子折の礼を言いながら、そう説明してくれた。

「最近、この近くに越してきた島田といいます。散歩をしていて、喉が渇いたのでお茶を下さい」

そう言って桂女が玄関に入ってきて、丁重に挨拶をしたという。

米屋という商売柄、近隣の出入りには関心を払っていたが、島田という家には心当りが無かった。それに、スリッパを履いているのも気になった。

端正な顔立ちと落着いた振る舞いに、まさかと思いながら、それとなく探りを入れると、

「なにしろ、越してきたばかりで覚えておりません」

と、はぐらかされてしまった。

「さぁ、さぁ。お茶をどうぞ、……。このお漬物はわが家自慢のお漬物ですから、召し上がって下さい」

まさは爪楊枝にさした糠漬(ぬかづ)けを島田の顔の前に差し出した。

「まあ、いい香りですこと。この糠床は五十年ものですね」

「お分かりになります?」

「ええ、分かりますよ。わたしも五十年ものの糠床を持っていました。亡くなった主人が糠漬けがとても好きでしたから、……」

「わたしもここに嫁にきて、義母から教わりました。米屋の嫁が糠漬けができなくて、どうすると怒られながら教わりました。義母から譲られた糠床はわたしの宝物です」

「今の若い方は、糠床の匂いを嫌って、あまり糠漬けをなさらないようですが、大事な旦那さまに、どんな糠漬

けを出しているのでしょうかね」
「スーパーで買ってきた漬物を包丁で切って出しているんじゃないですか？」
「糠漬けをいただきながら飲む、このお茶のおいしいこと」
島田は飲み干した茶碗を静かに置いて、「ご馳走さまでした」と頭を下げた。
「奥さまのお茶のいれ方、とてもお上手！」
島田にお茶のいれ方を褒められて、まさは、「もう一杯いかがですか、……」とすすめた。
「歩いてきましたので、喉が乾きました」
色白な肌に桜色のジャージーが映えていた。
（うちのお義母さんも、こうしてお茶をご馳走になったのだろうか？）と思ったりした。
今では寝付いてしまったが、元気な頃はあッと気が付くと、家のどこにも義母の姿はなかった。
「お前がそばにいながら、なんだ！」
配達から帰ってきた夫によく怒られた。
（お義母さんに、怪我をさせてはならない）
そんな思いで、北小岩の街を走って探した。
嫁にきたときは、いじめられもしたが、糠床と糠漬けのつくり方は、みっちりと叩き込まれた。
「米屋の嫁が糠漬けができなくて、どうします」
これが義母の口癖だった。
（若くは見えるけど、九十歳は越えている）
まさは島田の顔を見ながら、寝付いてしまった義母の顔を思い浮べていた。
まさに案内されて、真紀が部屋に入ってきた。
「わたしに黙って出掛けられちゃ、困りますよ。お客さまがこうしてお見えになっても、何もご接待ができないじゃないですか」
桂女は真紀の顔をみるなり、叱った。
「はい、ご免なさい。これから気を付けます」
真紀は素直に謝った。
「ジャージーではお客さまに失礼ですから、お着替えをしましょうか？」
真紀は両手を差し伸べた。
「嫌ですよ。わたしはひとりで立てます」
真紀の両手を払って、立ち上がろうとした桂女が体をふらつかせた。
「足がよろめいてしまいました。年のせいですね。昔は殿方に体がよろめいたものでしたが、……」
桂女は涼しい顔で、そう言ってのけた。

この物語はすべてフィクションです。

妖　星（その三）

三戸岡道夫

（一）ピラニア

久秀は内外の情勢から判断して、信長に服従したほうがいいのかな、と思いつつも、心の底には、
（信長などに、いまさらへいこら出来るものか）
という気持も強いのである。だから酒に酔うと、飼い猫の首をわし掴みにして、
「信長猫め、死ね！」
と、柱に投げつける凶行が、いつまでたっても止められなかった。
止められないどころか、ますます激しくなってくる。酒に酔うと久秀の中に凶行への衝動が、つむじ風のように荒れ狂ってくるのである。とくに信貴山城や多聞城へ帰ってきたときは、自分の城へ帰ってきたという安心感からか、凶行への衝動が一段とはげしくなるのだった。
久秀は猫の首をわし掴みにすると、思いきり、
「信長、死ね！」
「くたばれ、信長！」
と、信長の前では絶対口にできない悪態を思いきり叫び、猫を柱に投げつけた。
だから猫は次第にこわがって、久秀に近づいてこなくなった。そこで家臣たちは猫さがしに忙しくなり、民家の猫でも野良猫でも片はしから捕えては、久秀の手許に集めねばならなかった。そしてその数は、いまや十匹にも及んでいた。
その猫に久秀は、一、二、三、と番号をつけて、
一番信長
二番信長

三番信長

などと名前をつけていた。そして投げつけるたびに、

「一番信長、死ね！」

「二番信長、死ね！」

と声高に叫び、運よく（猫にとっては運悪く）柱に激突して、猫が死のうものなら、

「やったぞ、やった！」

「信長が死んだ！」

と、盃を片手に狂喜して、居間の中を踊りまわるのだった。

そんなある日のことだった。

久秀が多聞城へ帰ってくると、家臣が、

「殿、珍しいものが届いておりまする」

と報告してきた。

「何じゃ？」

「珍らしい魚でございます」

「魚……？」

「はい、堺の商人が、珍らしい魚が毛唐から手に入りましたので、ぜひ殿に差し上げたいと、持ってまいったものでございます」

「どんな魚だ？美味いのか？」

「いえ、食べる魚ではありません。毒魚でございます。いや、毒魚というよりも、人食い魚、人殺し魚と申した方がいいかもしれません」

「人食い魚…？」

久秀の眼がギョロリと光った。

「はい、名前はピラニアとか申すそうで、なんでも遠い南国のアマゾンとかいう大河にしか棲まぬ怪魚だそうでございます。はなはだ凶暴な性質で、鋭い歯を持ち、牛や馬が河を渡ろうとして水に入ると、たちまち襲われ、食い殺され、餌食になってしまうとのことです」

「ふむ」

と久秀はちょっと考えるふうにしていたが、

「すると人間でもそうなるな」

「おおせの通り、あっという間に血を吸われ、食い殺されてしまいます」

「うむ、気に入ったぞ、はやく見せろ」

「かしこまりました」

運ばれてきたのは巨大なギヤマンの水槽だった。それは将軍家でも大名家でも見ることの出来ぬような見事なギヤマンの大水槽で、さすが堺衆の手によらねば入手できぬ逸物と、久秀を感嘆させた。

その透明な水槽の中に、キラリ、キラリと、刃物のように光ったものが群れて泳いでいた。それはあたかも光の波片が水中で飛翔しているかのようで、

「怪魚というから、獰猛な顔をした巨大な魚かと思ったのに、案外小さいのだな」

ピラニアと呼ばれるその魚は、一尺（約三十センチ

メートル）ぐらいの体長で、それが五匹ほど、鉄砲弾のような金属的な光を放ちながら泳いでいた。

「はい、身体はこの程度ですが、凶暴で、一匹が獲物の血にありつくと、血の臭いを嗅いで他のピラニアたちが、あっという間に獲物に集ってきて、肉に群り、短時間に食いつくして、骨ばかりにしてしまいます」

それを聞くと久秀の頭に、いつも投げつけていじめている信長猫の姿が浮かんできた。

「猫でもそうなるのだな」

「もちろん猫なら、なおさら、あっという間に血祭りにあげられてしまうでしょう」

家臣にも久秀の考えていることがわかってきて、にたりと笑みをもらしながらそう答えた。

「じや、信長猫でためしてみるとしようか」

家臣が、信長猫と名前をつけた猫を持って部屋に入ってくると、猫はまたいつもの凶行にあうのかと、鋭い警戒の眼を久秀に向けた。が、久秀は無造作に猫の首をわし掴みにすると、一気にギヤマンの水槽へ突っこんだ。

「ギャー、ニャー…」

猫は泣き声とも、叫び声ともつかぬ声をあげて、もがき、あばれた。

久秀は信長猫にどんな異変が起るのかと、水槽の中を見つめた。

一匹のピラニアが猫の横腹でキラリと光ったかと思うと、猫の動きがぴたりと止った。それは不思議なほどの急変で『動』の世界が一瞬にして『静』の世界へ、そして次の瞬間、キラリ、キラリと光の破片が『静』の周囲できらめきはじめたかと思うと、すでに五匹のピラニアが猫の身体に食いついており、見る見る猫は血を吸われ、肉を食いちぎられ、あっという間に骨ばかりになってしまった。

「うーむ、そちの言う通りだ、気に入ったぞ」

久秀の背筋に甘美な戦慄が走った。

「もう一匹つれてこい」

「かしこまりました」

家臣がもう一匹の猫をつれてくると、今度も久秀が首筋をつかんで、

「二番信長猫、食われろ！」

ギヤマンの中へ思いきり突っこんだ。二匹目の信長猫も、

「ギャー、ニャー！」

と絶叫すると、たちまちピラニア軍団に襲われて、骨ばかりになってしまった。

久秀の中で、信長への憎悪感がいくらか解消され、血圧も下がっていくように思われた。

この日を境にして、久秀の信長猫を柱に投げつける凶行は、このピラニアへの餌じき作戦へと変っていった。

ギヤマンの巨大な水槽は床の間の正面に飾り置かれ、

久秀は酔うと信長猫を、
「信長死ね！」
「信長、食われろ！」
と水槽の中へねじこみ、そしてゆっくり酒を飲みながら、ピラニアの鋭い歯が信長猫の血を吸い、肉を食いちぎり、骨になっていくのを、じっと時間をかけて眺めていた。

（二）再びの服従

久秀は内外の情勢から判断して、信長に服従したほうが有利だと判断した。そこで天正元年十一月、臆面もなく佐久間信盛のところへ使者をやって、
（信長への降参の斡旋）
を懇願した。その条件としては、久秀が所有する二つの城、すなわち多聞城と信貴山城のうち、多聞城を信長に差し出し、久秀は信貴山城のみに在城することを誓った。
佐久間信盛から、久秀の申し出を聞いたとき、信長は苦笑して、
「久秀め、また態度を豹変させたか。節操のない爺だ。今度許しても、また、いつ叛くか、わかったものではない。だが、その節操のないふてぶてしさが、気に入ったわい。これから畿内を平定するのには、そのふてぶてしさが必要なのだ。まだまだあの爺は使える玉だ。いましばらくは、生かしておくとしようか」
そう言って、久秀をあっさりと許した。
信長からの赦免の通知を受けると、久秀は、
（やはり信長は利口者だ。わしの利用の仕方をよく知っているわい。信長の気の変らぬうちに、詫びておかねばならぬ）
そうつぶやくと、すばやく行動した。
久秀は信貴山城を出発すると、夜を日に継いで岐阜城へ急行した。岐阜城は三年前の年賀の席で、信長から『天下の大悪人』と面罵された場所である。その屈辱は久秀の胸の底に、今もどす黒くどぐろを巻いている。しかし今は、そんなことにこだわっている時ではなかった。
岐阜城に着き、信長に謁見すると、久秀は畳に額をすりつけて、孫（嫡男久通の子の春松）を人質の追加として差出し、それに約束の多聞城、牧渓の絵、そして不動国行の太刀と薬研藤四郎の脇差しを献上して、
「それがしは度々の心得ちがいを重ね、今日ここにお詫びに参上いたしましたは、面映ゆい限りでございますが、寛大な思召しをいただき、ありがたき幸せに存じます。いったんはなき命を、拾った思いにございますれば、今後は粉骨砕身のご奉公をいたすでありましょう」
と言上した。
信長は醒めた眼でその久秀を眺めていたが、

「うむ、今度だけは許してつかわそう。だが、何回詫びたとて、魂まで入れ代えることは出来ぬであろう。いいか、爺い、この後わしの命運が尽きたと思ったときは、遠慮なく謀反するがよいぞ」
ずばりと久秀の心の底を言い当てた。
さすが老獪な久秀も、心の余裕を失い、背筋に冷や汗をかいた。が信長は、その久秀の心の傷口に手を突っ込むように、すぐ次の指示を下した。
「わしは朝倉、浅井を討ち滅し、将軍義昭は京都から追い出して、すでに目ざわりな者はいなくなった。しかし、まだ一人邪魔な奴がいる…」
「はあ…？」
と久秀はとぼけてみせたが、みぞおちのあたりに冷たいものが走った。
「三好義継じや。あれを討て」
三好義継は、亡き三好長慶の養子である。すなわち久秀が仕えていた主家の主である。したがって信長は久秀に、
（主殺し）
を命じたのである。変節極りない久秀のことである。どんな事でも平気でやるだろうと、信長は冷徹に久秀の反応を観察していた。
かつて久秀は主家乗取りのために、主君の長好長慶と、その嫡子の義興と、二人も毒殺している。したがって久秀は、信長から三人目の主殺しを命ぜられたわけである。
毒を食わば皿までというが、久秀は三人目の主殺しに何の躊躇も見せなかった。
「かしこまりました。さっそく信貴山城へ戻り、仰せのごとくいたすでありましょう」
平然とそう返事した。
三年前この岐阜城で、久秀は、主君三好長慶殺しを信長に指摘されて『天下の大悪人』とののしられたのに、今度は同じ岐阜城で、信長から、その大悪事をさらに命令されたのである。
（ちえっ、信長め、勝手な奴だ）
内心舌打ちしながらも、表面は恐懼のていで信長の前から退出すると、岐阜城を後にした。
信貴山城へ戻ると、久秀はただちに、三好義継が詰める河内若江城へ、密使をさしむけた。そしてひそかに、多羅尾右近、池田丹後守、野間左吉という、三人の重臣を呼び寄せた。この三人は主君の義継から重用されず、主君に恨みを抱いていると、久秀はにらんでいたからだった。
久秀は声を低めて、
「信長は天下無双の大将であり、そのうち天下は信長のものとなる。そう睨んで、わしは先日、岐阜城へ駆けつけ、服従を誓った。義継はわれらの主君ではあるが、器量乏

しく、あんな主君に従っていても、陽の目を見ることはない。おのおの方も、義継などを見限り、信長についた方が、前途が開けるというものだ。如何かな」

と説得すると、三人とも深くうなづいて、

「わかり申した。信長殿が河内へご出馬されるときは、忠節をつくしまする」

と賛同した。

「それがよい。それならばさっそく、岐阜へその旨をご注進いたすであろう。必ず恩賞を下されるであろう」

天正元年（一五七三）十一月十日に、信長は三好義継攻撃のために西上し、若江城へ出陣した。

久秀も七千の兵をひきいて、参戦した。

信長軍が若江城を取り巻くと、かねて久秀が手を廻しておいた、多羅尾右近、池田丹後守、野間左吉の三人が叛逆し、夜になって信長軍を城内に導き入れた。

三好義継は頼りに思っていた久秀に叛かれて進退きわまり、血に染った本丸で、妻子とともに自害して果てた。

こうして久秀は三度目の主殺しを平然と行い、信長の期待に応えたのである。

久秀が信長へ献上した多聞城へは、信長の重臣である柴田勝家が入り、奈良地域の諸政を取りしきった。

またこれと前後して、久秀とは宿敵にあたる筒井順慶が、信長と手をにぎって、筒井城に返り咲いた。久秀と信長の間の軋轢（あつれき）のいきさつを、いち早く嗅ぎとった筒井順慶が、勢力挽回のために信長にすり寄ったのである。

（三）再びの反信長同盟

年が変わって天正二年（一五七四）三月、信長は平氏姓を名乗って、平氏幕府創設を朝廷に申請した。しかし許されなかったので、その腹いせに香木蘭奢待（らんじゃたい）を所望して、公家衆を威圧しようとした。

蘭奢待というのは、東大寺の御物の一つとして有名な名香木で、聖武天皇のころ唐から持ちこまれた黄熟香である。これまでに下賜された者は、足利八代将軍義政ただ一人だった。それを信長は無理を承知で、所望したのである。

三月二十六日に朝廷から蘭奢待下賜の勅許が下り、勅使が東大寺へ向った。

信長はそれを受取るために、三月二十七日に多聞城へ入り、待っていた。

多聞城は信長が久秀から取り上げた城である。たとえ多聞城が東大寺の近くにあり、蘭奢待を受取るのに都合がいいとはいえ、多聞城を選んだのは、明らかに久秀に対する当てつけだった。

多聞城は久秀が信貴山城よりも精魂をこめて築いた、自慢の城だった。それが今、信長の土足で踏みにじられるのは、久秀の顔が信長の土足で踏みつけられるのと、同じであった。

多聞城の磨き上げられた檜の廊下を、信長はわがものの顔で歩いていることであろう。久秀が愛用していた茶室で、得意になって茶会を開いていることであろう。それを想像すると、久秀の頭にかっと血がのぼってきた。

だが久秀にとってその屈辱感は、皮肉なことに、それがある復讐感と同居していることであった。

久秀は岐阜城で信長から『天下の大悪人』と面罵されて以来、酒に酔うと、

（信長、死ね！）

と猫を投げつけて怒り狂うのだったが、その狂気の沙汰は、多聞城でもしばしば行われていたのである。

だからその多聞城の中で、信長がしたり顔をして蘭奢待を受取ったということは、久秀に妙な自虐的な復讐感をさそうのだった。

蘭奢待が多聞城へ運び入れられると、信長は勅封を解いて、一寸八分を切り取った。切り取った香木を打ちくだいて香包みに入れると、戦功のいちじるしい家臣に与えた。

その様子を知った久秀は、

「ふん、香木などに何ほどの価打ちがあろうや。香がそれほど欲しければ、おれの屁でもかがしてやろうわい」

と悪態をついて、側近を笑わせた。

すると次の月、すなわち天正二年四月に、石山本願寺の顕如が兵を起した。それは顕如が、

（信長が石山本願寺攻めを行う）

という情報を手に入れて、先手を打ったのである。

信長はただちに本願寺攻撃の軍を進め、久秀のところへも出陣の触（ふ）れがきた。信長に服従した今の久秀としては、これに従うしかない。久秀は八千の兵をひきいて信貴山城を出ると、大坂へ向った。

本願寺勢は手強かった。信長軍をしてもそう簡単に陥落さすことはできず、信長は半月ほどの攻撃のあと、やむなく兵を退かざるをえなかった。

しかし信長はその後も手をゆるめることなく、同じ年（天正二年）七月に、伊勢長島の一揆勢攻撃のため、九万の兵を発した。そして八月には、長島勢の老幼男女一人のこらず皆殺しにして、長島征伐を成功させたのである。

その報を聞くと久秀は、信貴山城の山腹の風通しのよい館で酒を呑みながら、

「ちっ、信長め、やりおるわい。ほんまに悪運の強い奴じゃ。はやく甲斐の大将がやってきて、蹴とばしてくれると面白いのになあ」

と、はるか東の方、甲斐の方角に視線を走らすのだった。

甲斐の大将というのは、死んだ甲斐の武田信玄の子の、

武田勝頼のことである。この頃、久秀はひそかに、武田勝頼から密書を受け取っていた。

そして、その武田勝頼を陰で動かしているのは、将軍義昭なのだった。義昭は信長によって京都から追放されたものの、追放されたままになってはいなかった。義昭は紀伊由良の興国寺に流寓していたが、武田勝頼へ、

(上杉謙信、北条氏政、本願寺顕如などと謀って、わしを京都へ帰れるようにしてくれ)

という内書を送り、信長打倒の作戦を進めていたのだった。

久秀は好き好んで、信長に服従しているわけではない。機会があれば再び信長へ牙を向けようと、その機会を狙っているのである。だから勝頼からの動きは、久秀にとって大歓迎といってよかった。久秀は注意深く勝頼の動きを眺めていた。

武田騎馬軍団は武田信玄の亡きあとも、日本で随一といわれる強力軍団である。その軍団を引きつれて武田勝頼は、遠江から三河、そして東美濃にいたる広大な地域に転戦し、徳川家康や織田信長を脅やかしているのを、久秀は期待をもって眺めていた。

その勝頼と、久秀は陰で連絡を取りあっているのである。そして同時に、上杉謙信や北条氏政とも密書を交わしていた。

勝頼はまだ若い上に、父の信玄よりも性格がはげしかった。だから久秀から見れば、上杉謙信や北条氏政に期待するよりも、勝頼の攻撃力が心強く感じられるのだった。

(信長め、はやく倒れろ、はやく死ね!)

表面は服従をよそおいつつも、久秀の中では信長への憎悪がますます燃え上るのだった。

(四) 本願寺攻撃

武田勝頼に対する久秀の期待は大きかった。しかしその期待も裏切られてしまった。

天正三年(一五七五)五月、勝頼は長篠の合戦において信長軍に惨敗し、武田軍は崩解してしまったからである。久秀はがっくりと肩を落し、

「勝頼なら猪武者だから、なんとか信長をけ散らかすだろうと思っていたのに、やはり駄目だったか。信玄といい、勝頼といい、武田は案外役に立たなかったわい。信長の武運が強いんじゃな。やはり今しばらくは、信長にひれ伏している以外はないということか」

久秀の心中は、無念さと、くやしさで、きりきり舞いをする思いだった。

長篠の合戦で大勝すると、信長はその勢いをかって、その年の八月に、越前一向一揆を征伐した。すなわち昨年の伊勢長島につづいて越前一向一揆を退治して、石山本願寺支振の根拠地を壊滅させたのである。

そして次の年、すなわち天正四年(一五七六)二月に、天下征覇の拠点として、琵琶湖畔に、七層天守閣を持つ巨大な安土城を完成させた。安土城建築に当っては、久秀の多聞城が大いに参考になっていた。

天正四年五月に信長はいよいよ、畿内に唯一残る敵である石山本願寺攻撃に取りかかった。

信長軍は六千余の軍兵をこれに向けた。

これに対し石山本願寺の方は、諸国の門徒四万人が集結して、八町四方の寺域に立てこもった。そしてその勢力の中核は、四千挺ともいわれる鉄砲を駆使する、紀伊雑賀鉄砲衆であった。

そのため石山本願寺の勢力は強硬で、信長軍の先手は潰走せざるをえない破目に陥った。また後詰めの軍勢も苦戦し、総崩れとなった。そのため、やむなく信長軍の中核は、天王寺村の四天王寺に立てこもらざるをえなかった。

この時信長は京都の妙覚寺に宿陣していたが、信長軍総崩れの報を聞くと、ただちに諸大名に陣触れを出し、また自分自身も出陣した。そして石山本願寺周囲の天王寺に付け城を構えて、諸将にこれを守らせ、兵糧攻めの持久作戦をとった。

そして久秀も、佐久間信盛たちとともに、天王寺付け城の定番に置かれた。

しかし天王村の砦や付け城は、仮普請のため、要害とはいえなかった。だから本願寺勢の猛攻にさらされ、天王寺砦は陥落する危険もあった。もしそのようなことがあれば、畿内の形勢が急変しかねなかった。

だから信長軍の諸将の中にも、微妙な動きをする者が出るのは当然だった。その中でも、

(松永久秀がもっとも危険だ)

と信長は見ていた。そしてもし久秀が変な動きをすれば、同調する大名や豪族が他にも現われる危険があった。

信長は天王寺砦の援軍のために、三千人の軍勢を揃えていた。三千人を三組に分け、第一陣には佐久間信盛、松永久秀、細川藤孝などがいた。久秀は信長の動静に眼を光らせ、虎視眈眈と脱出の機会を狙いながら、何くわぬ顔をして、本願寺攻撃の隊列の中に身を置いていた。

天正四年五月七日の夜明け、本願寺門徒勢二万人と、信長勢一万人との死闘がはじまり、それは二刻ほどつづいた。そして本願寺門徒勢は信長勢の猛攻に屈して、退却しはじめた。

久秀もその信長勢の中に混って戦っていたわけであるが、戦いながらも久秀は、

(本願寺門徒勢は退却したが、まだ勝敗は決ったわけではない。石山本願寺がそんなにたやすく落ちるはずがない。上杉謙信や毛利輝元の応援もある。必ず信長を倒す機会はある)

と、胸に秘めた悲願の灯は消さなかった。

事実、毛利輝元も、久秀が期待していたように、本願寺へ兵糧を送るために、天正四年七月に六百余艘に兵糧を積み、兵船三百余艘に警固させて、本願寺を目ざして、木津川河口へ向っていた。

木津川河口は信長の水軍四百艘が封鎖していたが、毛利船団は海戦の駆けひきに習熟した強軍である。熾烈な海戦の結果、毛利水軍が大勝した。毛利軍が大坂湾の制海権を握れば、石山本願寺への兵糧、弾薬の補給が可能になり、本願寺はゆるぎはしないであろう。

その報告を聞いた久秀は、

(うむ、今度ばかりは信長も立ち直れないだろう)

と顔に凄い笑みを浮かべた。

翌年(天正五年)の二月、信長は兵力六万余人を率いて、紀州へ向った。本願寺勢の中核である、雑賀門徒討伐のためである。

信長が総力をあげて石山本願寺を攻撃しても陥落しないのは、鉄砲の威力を持つ雑賀勢がいるためである。本願寺を撃滅させるには、中核である雑賀を撃つ必要があるからである。

久秀は五千の兵をひきいて天王寺定番をしていたが、

(雑賀勢は手ごわい相手じゃ。そうやすやすと信長の手に落ちるものか)

と冷やかな眼で眺めていた。

さて、この時点での天下の形勢を眺めてみると、信長によって京を追われた足利義昭は備後の鞆(とも)にいたが、まだ京への帰参をあきらめてはいなかった。そのために越後の上杉謙信を味方につける工作に狂奔しており、その効果が次第に現われてきていた。その動きと並行して、謙信も昨年(天正四年)五月に、宿敵であった石山本願寺顕如と和睦していた。

また北条氏政も昨年(天正四年)八月に、反信長戦線に参加していた。

その後、越前、加賀の一向一揆もいっせいに蜂起して、信長へ果敢なゲリラ戦を挑んでいた。

久秀は天王寺定番として本願寺を攻撃するふりをしながら、

(上杉謙信は間もなく京都へ兵を進めてくるであろう。そうなれば、今度ばかりは信長も進退きわまるであろう)

と、上杉謙信と頻繁に連絡をとりながら、裏で本願寺顕如と通じていた。そして、

(そうなれば、いつまでも信長の尻にくっ付いている必要もないわい)

と、もう一度信長へ叛旗をひるがえす時が来たのを、本能的に感じ取っていた。

そして久秀の予感は当った。天正五年七月になると、上杉謙信は大兵をもって七尾城攻撃のために、越中へ乱

入した。上杉謙信の西上が始ったのである。

久秀はこれを知ると、

「いよいよ謙信が動き出したか。これでやっと、わしの信長へ叛旗をひるがえす時が来たわい」

とその妖怪な顔に眉(まなじり)を決した。

「わしはもう二度と信長へは降参せぬぞ。こうなれば、喰うか、喰われるかだ」

そう決心すると、これまで久秀を押えつけていた信長という重石(おもいし)がすっと肩から外れた気がして、気分が軽くなった。

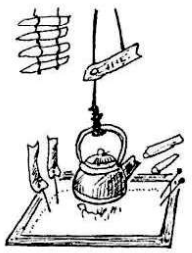
意を決すると久秀は、天正五年八月十七日に突如として大坂天王寺を引きはらった。

すなわち十七日の深夜、久秀の軍勢は陣屋に篝火を燃して在陣を装い、他の付け城の者たちに気づかれないように、ひそかに天王寺の付け城を引きはらったのである。主将の佐久間信盛が、紀州の雑賀の残党を征伐するために出張っていた留守を狙ってのことだった。

久秀は八千余の兵力をひきいて河内平野をまっしぐらに東へむかうと、明け方近くに信貴山城へ帰り着いた。そして信貴山城と、麓の松尾城に分れて、立てこもった。

そして翌日から、信長軍の攻撃に備えて二つの城の補強工事にかかり、兵糧米の備蓄にもはげんだ。

(つづく)



踏絵（二）

鍋屋次郎

寛永一八年（一六四一）、島原の乱から三年過ぎているが、長崎奉行所は、昨年六月に無謀にも、ポルトガル貿易船を、貿易に名を借りたキリシタン布教船と断定し焼き討ちして沈めた後、乗員六十一人全員を処刑（斬殺）してしまった。従って幕府は、報復としてのポルトガル船の来襲を極度に警戒していた。当時のポルトガル船の銃砲装備は幕府の装備をはるかに上回っていたため、江戸幕府は九州海岸沿いの諸藩に沿岸防備を命じ、それまでは隣藩間の軍事連携を一切禁じていたが、この件に関して例外として、一旦ことが発生した場合、隣藩相互の支援体制と長崎・江戸への急使派遣も命ずるほど神経を使っていた。

関連して、ポルトガル来襲時に、国内のキリシタンが内応するとの噂も飛び交い、長崎奉行所は九州諸藩に対して、徹底したキリシタン狩りとも言いうるほどの探索と、キリシタンを発見次第棄教させ、棄教しない場合は速やかに死刑に処することを命じていた。また、キリシタン探索が手緩い藩に対しては、長崎奉行所が直接介入することも表明していたため、長崎近隣諸藩のキリシタン摘発は、藩そのものの存亡をかけて苛烈を極めていた。

波頭島駐在役人で泉郷担当の今村は、井上禮之助指示による執念の探索によって、漸く彦次の家の鴨居に吊った棚の上に立てかけてあったお寺のお札の中からクルスを見つけた。今村の「ありました！クルスがありました！」の叫び声を聞いたは井上は今村のところに駆け寄ってきて、今村の震える手からクルスを受け取った。

井上はその場に居合わせている者が、自分の腹心の部下である福江城から同行してきた三人と今村のみであることと、この家を遠巻きにしていた村民の姿も、いつの間にか見えなくなっていることを確認して、おもむろに口を開いた。

「各々方、今、彦次の家で、松雲寺のお札の中からクルスが出たことは誰にも口外するな。知っている者はこの五人だけだ。今村、お札だけを元に戻しておけ。」

一呼吸入れて、お札を元通りに棚の上に立てかけてきた今村を見て

「今村、明日朝早く留吉と丑松の家を急襲せよ。ここにいる木下と本郷を同道させる。そしてどこの家でも鴨居の棚の上に祭ってある松雲寺のお札を調べよ。必ずキリシタン関係品が入っているとみてよい。松雲寺のお札の中にご禁制のキリシタンの品々を隠すと言うことは、公儀と寺を何とも思っていない証拠だ。むしろ公儀と寺を侮辱するものだ。これだけで死罪にあたると言うものだ。これから代官所に引き上げるが、良いか各々方、彦次の家からは何も出てこなかったことにするからそのつもりで。特に宋助衛門には絶対に気取られるな」

代官所に戻った井上は、まだ宋助衛門に引き留められ、詮議を受けている留吉と丑松に

「お前達、昨日からご苦労だった。彦次のところを隈無く探したが何も出てこない。こうなると、お前達がキリシタンではないと言うことを信用するしかないだろう。やはり彦次は初孫を皆に見せたくて連れて行ったんだな。気持ちは分かるよ。どうしてペテロなんてキリシタンの名前を書いた紙を神棚に置いておくのかね。ほんとに人騒がせだよ」

と笑顔を見せながらそこまで言ってから、助衛門をみて、留吉達に聞こえるように大きな声で

「助衛門、やはり貴殿がいつも言っているとおり、この泉郷にはキリシタンはいないと考えて良さそうだ。貴殿の部下も皆疲れているだろうから全員引き上げさせよ。そこの百姓どもも帰せ。貴殿も帰ってゆっくりと風呂などに浸かって疲れを休めるが良い。身どもも疲れた。今日はこの奥座敷でゆっくりと休ませて貰おう」

全員が帰ってから井上達福江城から来た四人と今村の五人が、代官所の奥座敷に集まった。井上は上機嫌で

「おい、今村、明日手柄を挙げるのは間違いない。そうすれば、宋を罷免してお前をこの島の取締に任ずるようご家老様にお願いしよう」

「身に余る勿体ないお言葉。偏に井上様のお導きによるもので手前には誇るところは何もございません。今回の手柄は井上様こそ褒められるべきでございます」

この今村の言葉に井上は大きく頷き、自らの立身も夢見て注がれる酒を飲み干していた。

井上から帰宅を勧められた後、宋助衛門は代官所の出口で彼に深々と頭を下げている留吉と丑松の二人に

「井上様があのように仰るのだ。これでこの島も穏やかになるだろう。これからも精を出し、女房子供と楽しく

過ごせよ」

ここまで言った後、二人に近づき丑松の肩に手を置いて

「丑松、赤子は可愛いだろう。いい子に育てよ。おときとも仲睦まじくな」

と言って、二人に笑顔を見せて去って行った。

助衛門は、役宅へ真っ直ぐ帰ることなく、浜辺をゆっくりと歩いていた。彼は、過日、丑松女房おときの

「はい、母は対馬厳原港船主の妻で名はキヌと申します」

の返事を心の中で反芻しながら、その時の、おときの、いかにも幸せそうな明るい若女房ぶりの姿と、乳飲み子の祥のあどけない可愛い姿を思い出していた。

今から二十年前のこと、彼は厳原港差配役人の部下で、地元の船主の頭領である喜左衛門と、漁業から上がる年貢の決め方のことでしばし彼の自宅に出掛け、家族とも一緒に食事をするなど、身分の分け隔てなく親しくていた。

その中、喜左衛門の一人娘キヌと深い仲となり、キヌは十六才で身籠もった。喜左衛門も相手が助衛門とは分かっていたが、身分の違いと、キヌはやがては婿取りをして家業を継がせることになっていたことから、密かに他所で出産させ、生まれた子を、この波頭島の農家に相応の持参金をつけて引き取って貰っていた。

助衛門はそこまで詳しくは知らなかったが、両親は世間体を憚り他所で密かに生ませ、生まれた子は波頭島に貰われていったらしい、と言うところまでは人伝に聞いて知っていた。そのことを、過日のおときの言葉と繋げてゆくと、丑松の女房おときは自分の娘で、あの祥は自分の孫ではないか。

これからどのように丑松やおときと接してゆけばよいのか、このまま自分だけが胸の内に納めておけばよいのか、等いろいろと考えながら海岸を歩いていた。今日の海は、明日からの悪天候を思わせるように波が高く荒れ模様であったが、彼には全く気にならなかった。その時の彼は思わず顔がほころびるほど、心の中は満たされていた。

翌朝は雨風が強く、まだ朝が早いせいか浜にも畑にも村人は誰も出ていなかった。丑松の家では朝食をとろうとしたとき、福江城から井上が連れて来た木下を伴って今村が入って来た。雨に濡れた蓑と笠を脱ごうともせず、土間に突っ立った今村は、家族の驚きには構わず

「そこ動くな。皆土間へ下りろ。木下殿、貴殿は土間で丑松と家族を見張っていてくだされ」

と言うが早いか、滴のしたたる蓑を着たまま、雨に濡

れた泥まみれの土足で家に上がり、真っ直ぐ松雲寺のお札が祭ってある棚の下に行って、手を伸ばしてお札を掴んだ。手触りで何か入っていると感じた今村は、土間から今村の手元をじっと見つめている丑松の方にチラッと目をやり、おもむろにお札を広げた。中からは小さな十字架と、折り畳んではあるが聖母マリヤが幼子のキリストを抱いている聖画が出てきた。

蒼白になってその動きを見つめていた丑松は、その場で木下に後ろ手に縛られ、おときは祥を抱いたまま縄で腰を結わえられ、強い雨風の中、蓑も笠も着けることは許されず、代官所に引き立てられていった。

丑松達が代官所に着いて暫くして、留吉夫妻も福江城から来た本郷に、やはり後ろ手に括られて引き立てられて来た。

昨晩代官所に泊まった井上禮之助が、上座にどっかりと腰を下ろし、後ろ手に結わえられて、ずぶ濡れの着物のまま冷たい土間に座らせられている留吉と丑松、その後ろに座っているおしの、おときの四人を見下ろし

「その方共，良くも今までこの井上を騙してくれたな。証拠は挙がっている。詮議はお城で致す」

と言って今村に対して

「今村、その方でかした。波と風が治まり次第身共も一緒にお城へ戻る。船を用意致しておけ」

と言って、昨日来のことを記録するため奥座敷に戻って行った。

暫くして、昨日で全て終わったと安心しきっていた宋助衛門が出仕してきた。この状況に驚き、忙しそうに動いている今村をつかまえて聞いたが

「ご覧の通りでございます」

としか言ってくれない。まさか、留吉や丑松に聞くわけにも行かない。奥の部屋にいる井上禮之助のところに挨拶に行くと、

「見た通りだ。貴殿が百姓どもに甘いので今村が苦労の末漸くキリシタンを捕縛した。証拠は挙がっている。朝も遅い貴殿には任が重すぎたか。職務怠慢とお叱りを受けるのもやむを得ないな」

と皮肉たっぷりに言ったまま机に向かい、振り向きもせずまたその後の質問には返事もしなかった。

いよいよ福江城に連行するために留吉夫妻・丑松夫妻を土間で立ち上がらせたとき、おときが

「お役人様、この子の襁褓を用意に家に戻ることをお許し願えませんでしょうか」

と今村に願ったところ、それを聞いていた井上は

「キリシタン大罪人が何を申すか。赤子連れではお城も

困ろう。そうだ。宋助衛門、貴殿がこの赤子を預かっておれ。キリシタンを捨てればおときもこの島に再び戻ってこよう。それまでだ」

と言うと、それを聞いた今村はおときから祥を無理矢理奪い、助衛門に渡した。

祥を渡された助衛門は咄嗟にどうして良いのか分からない。助右衛門の腕の中の祥は、衣類の下まで雨が通って、下着も襁褓も冷たくなっている。おときは哀願するような表情で助衛門を見つめている。丑松が何か言おうとしたが、井上が

「今村、早くしろ」

と促したので、丑松とおときは引きずられながら後ろを向き、助衛門に抱かれている我が子を見て、助衛門に

「お願いします」

と、言葉にならない視線を送っていた。

宋助衛門は、井上禮之助や今村達が代官所を出てから、この間の事情を代官所に残っている部下の役人から聞いてやっと納得し、自分が大分以前から、井上から外されていたことも知った。

今朝から乳を飲んでいない祥は、ぎこちない抱き方に不安を感じたのか泣き出していた。祥の着替えを用意すると共に、泉郷の中で母乳を分けてくれる農家の嫁を探さなければならないことに気づいた助衛門は、代官所の下女に妻を迎えに行かせ、事情を話して祥を妻に託した。

福江城内では、奥書院で筆頭家老藤堂頼母を上座に、緊急評定が始まった。下座にかしこまっている井上禮之助が波頭島泉郷でのキリシタン取締について一通りの説明報告を行った。藤堂が井上禮之助に対して

「泉郷全員がキリシタンというのか。井上，そちも長崎奉行所が、今、いかに血眼になってキリシタンを探索しているか知っておろう。場合によればご公儀の権威をかさにきて藩内にも立ち入ってくる危険さえあり得る。ここは、今そちが捕らえた六名のみがキリシタンであったことにして、後は徹底した探索によってもキリシタンの証拠は見つからず、当藩といたしては他の泉郷村民はキリシタンではない、と結論する」

ここまで言って一同を見渡し

「各々方、良いな。万一泉郷全員がキリシタンであった、と長崎奉行に報告したら、我が藩はどうなるか。おわかりであろう。ここは我ら全員が心を一つにして殿をお守りしなければならない。井上、泉郷村民全員に誓詞を書かせ、その上で一件落着とせよ。捕らえた六名が一両日の取り調べにおいても棄教しなければ、直ちに、見せしめのために処刑せよ」

藤堂は更に、同席している祐筆の奥村勤之丞に対して

「良いか、殿には身どもからお話をする。従って、長崎奉行所宛に、幕命によるキリシタン探索について、当藩あげて必死の探索を行った結果夫婦三組、計六名のキリシタンを発見した。厳重に取調中である。と報告書をしたためよ。その後のことは、いよいよ処刑をすることとなった時に、身どもが書面をもって直々に長崎に出向くことする」

と命じ、再び井上に対して

「井上、見せしめの処刑をするときには、泉郷村民で十五歳以上の男女全て立ち会わせよ。また、その方から波頭島役人どもに対して、先に述べた当藩決定事項をよく言って聞かせよ。呉々も他藩に漏れないように。よいな。皆の者、下がってよろしい」

福江城で証拠を示された彦次、留吉、丑松の各夫妻は、キリシタンであると自白した後、棄教を迫られた。

全員、何を言われても黙して語らず、棄教に応じなかったので、妻は夫の前で半裸にされ激しい鞭打ちの拷問を受け、また夫は、妻の見ている前で、かねてから拷問用に用意されていた三角の柱を何本か横に並べ、その上に正座させられた。正座しただけでも向う脛に三角の柱の頂点が食い込み、痛くて思わず腰を上げようとするのだが、更に正座した膝の上に大きな漬け物石を載せられ、向う脛の骨が砕けるかと思われる強烈な痛みに、三人はうめき声を上げ、やがて彦次は失神した。

井上禮之助は、彼らが夫婦で相談して棄教することを期待して、夜は夫婦毎に一つ牢に入れた。男三人は足が立たず歩けない。拷問を受けた中庭から牢まで、戸板に乗せられて運ばれた。妻達は肩から脇腹に掛けて、また乳房にも鞭の筋が何条も紫色に腫れて、熱と痛みで誰も眠ることは出来ない。

夜中、彦次女房おうめは小声で

「こんなに苦しむのなら、ゼウス様にお詫びして、形の上だけキリシタンを捨てましょう。心の中で捨てなければ、きっとゼウス様は許して下さると思います」

と彦次に囁いた。彦次は向こう臑の痛みに耐えながら

「馬鹿を言うな」

一言だけ答え、夫婦の会話はそれでとぎれた。

朝になって一睡もしていないおうめの顔を見ると、すっかりやつれた頬に、鞭のあとが一条頬から下顎に掛けて紫色に腫れ、見るも痛ましい。背中から胸にかけての鞭の痕は数え切れない。

夜中のおうめの言葉を、彦次は朝までまんじりともせず考えていた。ゼウス様には許しを請うとしても、泉郷の中でどのような立場になるのかが心配であった。

しかし、今、妻の顔を眺めて

「ゼウス様を裏切るのではない。心の中は崩れていな

い。これでは二人とも死を迎えるのみだ。キリシタン弾圧の嵐が過ぎるまでの辛抱だ」

と心に決め、おうめを見て

「おうめ、お前の言うようにしよう。牢番が来たら『キリシタンの教えを捨てます』と一言伝えよう」

彦次夫妻が棄教したことは、直ちに井上禮之助に伝えられ、井上は直々に留吉夫妻と丑松夫妻の牢に出向き、彦次夫妻の棄教を伝えて、その上で彦次夫妻を「殊勝である」と誉め上げた後、厳しく彼等に棄教を促した。

彦次夫妻は即日家に戻された。立つことが出来ない彦次は、戸板に乗せられて帰宅した。船着き場に近づく船の姿を見て、何事かと出てきた村民達は、船が着いたとき、船着き場を遠巻きに取り巻いていた。

そこへ船から下りた役人の一人が、皆に向かって

「彦次はキリシタンであることを白状した後、殊勝にもキリシタンを捨てた。今までのことは、お城からお許しがでた。皆、彦次達を大切にいたせ」

と大声で話し、彦次を戸板に乗せたまま家の中に担ぎ込んだ。

それから数日後、どんなに拷問を受けても、また説得を受けても棄教しない留吉夫妻と丑松夫妻を、見せしめのために泉郷の浜で処刑にすることが決まった。これは泉郷全戸に対して、無言で棄教を迫ることが目的であった。

拷問も取り調べもない日が三日間続いた後、今村が丑松の牢の前にやってきて、足が立たず牢内で横になっていた丑松に、

「明日は島に戻す。棄教するなら今のうちだ」

と伝えた。それを聞いたおときは、島へ帰って処刑されることを察知、半狂乱になって

「祥も自分と一緒に死なせて欲しい」

と喚いたが、相手にされなかった。

丑松はおときに

「ゼスズ・キリスト様の十字架の苦難と同様な苦難を天にいるゼウス様は私達に与えてくださった。この世は仮の住まいで、パライソ（天国）こそ私達の永遠の住処なのだ。私達は地上の戦いを終わってパライソに凱旋できるのだ。そこに迎え入れられる時まで、あと少しの時間お互いに頑張ろう。おとき、パライソでは、お前が地上で流した涙をゼスズ・キリスト様が拭ってくださるのだ」

「幸せな毎日でした。貴方、有り難うございました。祥のことはゼウス様にお任せしてお祈りしましょう」

のおときの言葉に、体の痛みで祈る姿勢が取れない二人は横になったまま胸の上で手を合わせ、無言のまま祈

り続けていた。

泉郷の船着き場の浜辺の一角が竹矢来で囲まれ、その中に四本の柱が立てられていた。自分では立つことも出来ない四人は戸板に乗せられて運ばれてきた。地面に下ろされた四人は牢番などに抱えられて、右から留吉、女房おしの、丑松、おときの順に柱に括りつけられていった。

この前日、宋助衛門はキリシタン取締に落度があったことを理由に謹慎、自宅蟄居を命ぜられ、後任の波頭島取締責任者に今村が昇進して、この現場では井上の下で総指揮を取っていた。

井上は、この処刑に、泉郷村民の十五歳以上の男女全員が立ち会うことを厳命したため、竹矢来の周りには、多くの村民が集まっていた。しかし、殆どの村民は、下を向いたまま、戸板で運ばれてきて柱に括り付けられた四人を見ようとしない。

また、井上は、宗助衛門にも立ち会うことを命じたが、助衛門は謹慎蟄居の身を理由に出てこなかった。

井上禮之助が役人の座る中央に置かれた床几に腰を下ろした時、長い槍を持った役人がそれぞれの柱の前に立った。そして役人が槍をかまえた瞬間、留吉と丑末が、今までうなだれていた顔を上げ、にっこりと笑顔を見せて

「お先に。パライソで」

と声を発した。その瞬間、ほんの一瞬ではあったが、おしのも、おときも顔を上げにっこりと微笑んだ。

竹矢来の周りに集まった村民達は、留吉達のその声に驚いて初めて顔を上げ、四人の姿を見た。四人の一瞬の笑顔は、村民達の目には、拷問でのやつれも、体中の痛みも、何もかも苦しかったことが拭い去られ、天国への凱旋の喜びに満ちあふれているように見えた。

その直後、合図の号令と共に、留吉も、丑松も、また二人の女房も、それぞれ下から左胸を槍で突き刺され、四人は泣くことも喚くこともなく、静かに息を引き取った。

これを見ていた村民達の心の内は、悲しみよりもむしろパライソへ凱旋した四人に対して羨望の思いすらあった。皆、石のよう表情で四人を見つめ続けていた。

その日の午後、彦次夫妻はひっそりと裏山で首を吊っ

て自殺していた。

また、宋助衛門は、実孫の祥を抱いて、妻にも誰にも行き先を伝えることなく姿を消していた。

完



祝出版

大和禎人著

誠涙抄

幕末最後の老中、小笠原壱岐守長行とその嗣子、海軍中将長生の至誠の生涯を描いた珠玉の名作。主題作のほか十三の短編を収録。

栄光出版社刊　価格（税込）三一五〇円

遥かなるカメルーン（三）

太田精一

（十）

ヴァカンスシーズンの始まる六月になった。ドアラの街は、次第に車の数が減って人影もまばらとなり、やがて七、八月にはひっそりと眠ったような状態になる。

この街に駐在する外国人は通常一年に二ケ月の休暇が与えられる。彼等は、ヴァカンスを楽しむために残り十ケ月を働いているようなものだ。

ヴァカンスをどこで過し、何をして楽しむか。ドアラに勤務する者にとって最大の関心事である。ヴァカンスを終え帰国したその日から次の年のヴァカンスを話題にするほどだ。ドアラに在住する外国人にとって一年はヴァカンスを中心に回っていると言っても過言ではない。

カメルーン人も欧米人の影響を受け、政府要人や経営者たちは、たっぷりと休暇を取る。一般の労働者も一年に最低三週間以上の休暇を取得する権利が法律によって認められている。ヨーロッパは欧米人にとっても裕福なカメルーン人にとっても最も人気のある保養地の一つである。だが、生活にゆとりのない一般の社員や労働者にとっては高嶺の花だ。こうした人たちは、親戚の家を訪ねたり、家の手入れをしたりして休暇を過す。

多くのヨーロッパ人は休暇中、母国に帰るかヨーロッパの他の国に長期滞在する。なかには、南太平洋のタヒチやカリブ海の島々で優雅にバカンスを楽しむ人もいる。

マラリアの多いドアラでは、外国人は通常キニーネ系の予防薬を服用する。だが、副作用が強く、肝臓、胃腸などの内臓障害をしばしば起す。そのため、身体の中から予防薬の薬害成分を放出させる必要がある。ヨーロッパ人がドアラから出てマラリアのない地域で一ケ月以上過すのは、健康上の理由からでもあるのだ。

一九七三年当時の日本ではたとえ熱帯アフリカに勤務する駐在員であっても一年に二ケ月の長期休暇を取るこ

とはできなかった。それどころか二ケ月間も長期にわたって休暇を取得することはむしろ罪悪だと考えられていた。

「今年のヴァカンスは、七月一日から八月三十一日までとしたいのですがよろしいですか。主人もその期間に取れそうなので一緒にフランスに帰りたいと思います。許可頂けますか。ところで桂木さんの休暇予定はいつですか」

マダム・ベルトランは、桂木のヴァカンス取得期間と重なるのではないかと心配して尋ねた。

「日本では、まだ一ケ月以上長期にわたって休暇を取る習慣はないのです。ただ、マラリアの危険がある不健康地での勤務者には、特別な休暇制度を検討していると聞いていますので、もしかすれば来年から長期休暇も認められるかも知れません。少なくとも七月から八月にかけて今年は休暇を取るつもりはありませんからどうぞ心置きなく休んでください」

「では、その期間休ませて頂きます。夫もきっと喜ぶと思います。有難うございました」

「ところで、このところ来客も多く仕事も忙しくなってきました。ヴァカンスシーズンで少しは来客が減るかも知れませんが、二ケ月間貴女がいないのは痛手です。その期間だけでも誰れか貴女の代りに来てくれる人はいませんか」

桂木は、マダム・ベルトランの休暇中の事務所運営を考え、代わりのアルバイトを一人雇う必要があると思っていた。

「ちょうど適当な人がいます。私の友だちですが、ご主人の会社の都合で九月からしか休暇が取れないと嘆いている人がいます。彼女ならきっと引受けると思います」

「何んと言う方ですか。働くつもりがあるかどうか聞いてみて頂けませんか」

「名前は、ジャンヌ・ベルナールと言います。ご主人は製材会社で働いています。カメルーンには五年いると言っていました。子供は二人いて、男の子と女の子です。はきはきした人ですから、仕事も手際よくこなすと思います」

翌日、マダム・ベルトランは、友人のマダム・ベルナールを事務所に連れて来て、桂木に引き合わせた。大柄で鼻が高く女優のアリダ・バリに似た感じの女性だ。髪は少し赤味を帯びた茶色で、鳶色の目がキラキラ光り、活発な性格を表わしている。

小柄でやや控えめな優しい感じのするマダム・ベルトランとは対照的であった。

「マダム・ベルトランのヴァカンス中の二ケ月だけ働いて頂くことになるわけですが、それでもいいですか。労働条件はマダム・ベルトランと同じです。当事務所では予

算が少ないので二人とも同時に働いて頂くわけにはまいりません。そのことについては彼女からすでにお聞き及びのことと思いますが、予め申し上げて置きます」

桂木は、マダム・ベルナールにも、是非事務所で働いて欲しかった。だが、二人を一度に雇用する予算的な余裕がないため、ベルトランのいない間だけの勤務であることを強調する必要があった。

「はい、それは分っています。マダム・ベルトランとは親友で、彼女のいない間ムッシュー桂木の手助をして欲しいと頼まれて来ました。彼女から聞いて二ケ月間だけの契約であることを承知しています」

桂木は、直ちにマダム・ベルナールとの雇用契約書を作成し、東京本部にその旨電報で連絡した。

(十一)

七月、八月のドアラは閑散としている。車もまばらで人通りも少ない。欧米系企業の多くは、責任者がヴァカンス休暇で、不在となるため仕事は著しく停滞する。カメルーンでは、官庁でも企業でも一般職員には、ほとんど権限が与えられていなかった。判断を要する事項についてはできる限り地位の高い人と接触する必要がある。

桂木は、本部の指令による〝一九七二年のカメルーンの貿易動向〟に関する報告書作成のため、ドアラの統計事務所を訪問した。

「一九七二年の一～十二月の対外貿易統計はすでに出ていますか。書店で見てもまだ公表されていないようですが、いつ頃出版の予定ですか」

「十二月の統計はいつも遅れがちになる」

桂木は前任の前島から聞いていた。彼は、公表されるのを待っていたのではレポート提出期限に間に合わないと考え、直接統計事務所から数字を聞き出そうと考えた。

何度も統計事務所に足を運び担当者と接触したが埒があかない。そこでマダム・ベルナールに命じ同事務所のムカベ所長との面談を取り付けさせた。有力者とのアポイントの取り付けは、硬軟織り交せた説得力が決め手となる。その点マダム・ベルナールは実に巧みであった。その後もヤウンデの中央官庁の局長たちとのアポイントも見事にこなし、高官との人脈造りに大いに役立つことになった。

「カメルーンの貿易動向についてのレポートを東京に送らなければならないのですが、統計資料がなくて困っています。暫定数字でもかまいません。一九七二年のカメルーンの対外貿易の数字が分かる資料はありませんか。また、対日貿易についてもできるだけ詳細な数字を教えて頂きたいのですが…」

桂木は、一～十二月の統計数字を入手するため、ムカベ所長に懸命に頼んだ。

「未公表の暫定数値ならあります。コンピューターで出したナマの数値ですから、今後若干の微調整があると思われます」

ムカベ所長は、席を立ち部屋を出た。暫くしてコンピューターで出したままの部厚い統計資料を四冊抱え戻ってきた。

「この統計の中から関連ある数字を拾い出してください。作業は隣の部屋を使ってください」

四冊の部厚い統計資料を見た桂木は、必要な数字を拾い出すには、二、三日かかると直観した。彼は、改めて作業に来る旨所長に伝え、統計局を辞した。

翌日、桂木は、マダム・ベルナールと妻の由美を伴って統計事務所を訪れ、二人に数字の拾い方を示して、作業を頼んだ。

二人は三日間統計事務所に通いつめ必要な数字を拾い出した。桂木は、そのデータをもとに自からソロバンを入れ集計作業を行い、商業会議所や企業との面接情報と併せて、カメルーンの対外貿易動向に関するレポートをとりまとめ東京に送った。

暫定数字ではあったが、旧宗主国のフランスが発表する前にカメルーンの貿易動向が明らかにされたことは、情報の乏しいカメルーンの貴重なレポートとして関係業界から感謝された。

ドアラの統計事務所に出向きデータを拾い出すのは、時間的にも労力的にも大変である。そのため桂木は、首都のヤウンデまで出張し、中央政府の統計局長に会いドアラにある資料を直接入手することにした。

（十二）

首都のヤウンデは、標高八百メートルの高原にある。ドアラよりも気温が低く、空気も乾燥していて爽やかだ。人口は、ドアラの半分程度。産業も少ない。

そこに、三井物産と大東カカオの合弁によるソカカオ社があった。チョコレートの原料になるカカオバターの製造を行っている。社長以下数人の日本人社員が家族ともども常駐し、多くのカメルーン人を雇用していた。ソカカオ社は、産業の少ないヤウンデにあって有力企業の一つとして知られていた。

桂木は、ヤウンデへの出張の都度ソカカオ社を訪れた。同社の工場敷地の前を小川が流れている。工場建設を始めた当時には、その小川に鰐が生息していたと言う。

緑に囲まれたソカカオ社は、色とりどりの野鳥が囀り、豊かな自然の中にあった。数少ない日本人家族との歓談は、桂木のヤウンデ出張の一つの楽しみでもある。政治経済、貿易動向、企業経営などの固い話からカメルーン人の食物、衣服、生活習慣などにいたるまで桂木はソカカオ社の社員と夜遅くまで語り明かした。（その後ソカカオ社はカメルーン政府に売却譲渡され、日本人家族はすべて帰国している）

翌日統計局を訪れた桂木はヤンバ統計局長と面談した。三十三、四歳の若い男で、精悍かつ頭の良さそうな風貌をしている。ソルボンヌ大学出身で、ボーイスカウトの日本大会の引率者として日本を訪れたことがあると言う。

「私は、日本とカメルーンの貿易の振興を図るために東京から派遣されてドアラに駐在している桂木と言う者です。貴国の貿易動向をできるだけ早く本国に伝え、日本の貿易業者の参考に供したいと思うのですが、公表され出版された統計資料が古く、あまり参考になりません。ドアラの統計事務所に伺ったら未公表で出版される前の資料を見せて呉れました。その資料の購入を希望したところ、もともと販売するものではないので余部はないと言っていました。ヤウンデの統計局には、余部があり、あるいは購入も可能かも知れないとのことでしたので、こうしてわざわざヤウンデまでやって来た次第です」

桂木は、何んとかヤンバ局長を説得し統計資料を入手しようと拙いフランス語で懸命に説明した。

ヤンバ局長は、部下に命じ統計を持ってこさせた。

「おっしゃる資料はこの統計のことですか。税関を通過した貨物をもとに統計（通関統計）を取っているのですが、十二月は駆け込みの荷物があったり、書類の提出が遅れたりして最終的に微調整せざるを得ません。その後に印刷し、公式発表しますので、どうしても遅れがちとなります。コンピューターで出したままの統計でよろしかったらお渡しすることはできます。ただ、あくまでも暫定数字ですので、その旨明記されるようにしてください。無料で差し上げたいところですがこれだけ大部のものでコストもかかっていますので、有料とさせて頂きます」

桂木は、各二分冊にわたる品別。国別統計と国別・品別統計の配布を受け、代金八千CFAフラン（約一万円）を統計局の会計に支払った。

ヤンバ局長は、日本に滞在した当時の印象を熱く語り高度成長期に入った日本への礼讃を惜しまなかった。それ以後、桂木は、ヤウンデ出張の都度ヤンバ局長を訪問し親交を重ねるようになる。ヤンバ局長との親交は桂木に多くの知識と情報をもたらし、カメルーンでの活動の幅を大きく繰り拡げる結果となった。

（十三）

赴任して一年経った一九七三年九月、バカンスも終盤を迎え、街も次第に活気を取戻してきた頃のことだった。

桂木は、車を運転しながら猛烈な寒気に襲われた。炎天下、車の窓を占め切って走っていてもなお寒く震えが止まらない。帰宅して毛布を頭から被り、じっと震えの治まるのを待った。そのうちに体中の水分が失くなって

しまうのではないかと思われるほど滝のような汗が流れ出た。頭は破れるように痛い。顔は真赤で、桂木の体は火のように熱かった。

（マラリアにやられた）

桂木は、不安に駆られた。予防薬を飲んでいながら、マラリアに罹った自分の不甲斐なさを悔んだ。

カメルーンでは、マラリアは最もポピュラーな病気である。四十度を超す高熱が三日間ほど続くが、薬を服用し体力を消耗しないようにしていれば、通常四、五日で治る。よほど悪質な脳性マラリアでない限り、生命の危険は避けられる。

ドアラで最も信頼の置ける病院の一つであるポリクリニックで桂木は診察を受けた。明らかにマラリアである。医師は、桂木に入院を勧め早速治療に当った。

入院後キニーネ系の薬品注射によって四十度を超える熱も次第に退き、三日目には食欲も出てきた。ポリクリニックでは朝食が終わるとその日の昼食と夕食のメニューが配られる。ワインを注文することもでき、まるでホテル並みだ。

「今日の昼食は、コンソメスープ、鶏の唐揚げ、サラダ、パン、コーヒーです。ワインはロゼにしますか白にしますか。また、夕食はポタージュスープ、オニオングラタン、仔牛の胸腺肉きのこソース、パン、コーヒーですがワインは赤にしますかそれともロゼにしますか」

男性の配膳係が食事のメニューを配りながら、ワインの注文を聞く。さすがは〝食〟の国フランス系の病院である。部屋は個室で、病院とは思えない雰囲気だ。ただ、ホテルと違っているのは、薬の臭いが病室や廊下に漂い、白衣を来た医師や看護士が医療器具を携えて建物内を歩く姿が目につくことだけである。

「マラリアを早く直すには、体力の回復が何よりも大切で、それにはどんどん食べることです」

担当医のアドバイスもあり、桂木は、昼、夜ともロゼワインを注文し、出された食事はほとんど平げた。

四日間の入院によって体力の回復した桂木は、五日目には退院し、翌日から平常通り事務所に出た。だが、マラリアの原虫は、桂木の体内から完全に除去することはできなかった。体力の衰えとともにその原虫は、体内で暴れ出し発症した。その後も桂木一家は、ときどきマラリアに苦しめられることになる。

（十四）

二回目の正月が過ぎた一九七四年二月の乾季の暑い日であった。カメルーンの手工芸品（プロデュイ・アルティザンナ）を輸出したいとディコンゲと名乗る男が、桂木の事務所を訪ねて来た。

「木彫りの彫刻、ブロンズ製品、草木染織物、ビーズ玉、象牙細工、豹の牙、河馬の歯などで造った首飾り、豹やライオンの毛皮の敷物、鰐や駝鳥の皮のハンドバックなど日本に輸出したいのだが、輸入業者を紹介してくださらんか」

本人はどうやらすぐにでも商談がまとまって輸出できるとでも思っているらしい。

「貿易業者の名簿がここにあるから、その中から雑貨品を扱っている業者を拾い出し、直接その業者に手紙を出してみてください。ただ、相手に興味がなければ恐らく返事は期待できないと思います。無駄を覚悟で、根気よく続けることが必要です。成約率は千分の三ぐらいと言われています」

「航空便では高くつく。船便で出した場合、どのくらい時間がかかるの。手紙はフランス語でもいいかね」

「船便だと二ヶ月ぐらい。フランス語でも取引している業者はいますが、非常に少ない。日本では、英語のほうが通じやすいと思います。また、ジエトロの東京本部で外国からの引合情報を収録したトレード・インクワイアリーを出していますので、それに掲載するよう手続を取ってみます。掲載料は無料です。だが、引合が来るかどうか分かりません」

「どうも時間がかかってややこしそうだ。ほかにもっと簡単に見付ける方法はないものかね」

「そうですね。お金をかけるつもりであれば、業界紙や雑誌に広告を掲載したり、見本市や展示会に出品すると言った方法もあります。それには相当の出費を覚悟する必要があります。この場合、貴方か、その商品を良く知った代理人が常時その出品小間に居て、商談できるようにしなければ効果は期待できません」

桂木は、ディコンゲがどこまで本腰を入れて対日輸出に取り組むつもりなのか様子を窺いながら説明を続けた。

ドアラ事務所の受ける相談の多くは、日本からの輸入に関するものである。ディコンゲのような対日輸出に関する相談は、当時ではあまりみられなかった。

「現在フランスやドイツから音響機器を輸入している業者が、日本からも輸入したがっている。日本のメーカーのコミッション・エージェントとなって、その業者の輸入を助けてやりたいと思っている。適当な輸出業者を紹介してほしい」と言った内容の相談が最も多い。

来客者の多くは、貿易に関する知識や資金が乏しく実現性に欠ける。その点ディコンゲの話はすでにフランスやギリシアに輸出実績があることから現実味を帯びている。だが、原材料が野性動物である輸出品については、量産は困難で国際的な捕獲規制の運動も起り始めていることから、将来は必ずしも明るいものではなかった。

野性動物の保護に関するワシントン条約は、一九七四年当時にはまだ締結されていなかった。カメルーンでも

大量の野性動物が捕獲され殺されていた。そこで政府はやっと重い腰を上げ野性動物の保護に乗り出し、これらの動物を生きたまま輸出したり、原皮や象牙などを何の加工も施さず輸出する場合は、ライセンスの取得を義務付けるようになった。

だが、例えば鰐皮のハンドバック、象牙の置物のように加工した製品であれば、野性動物を原材料として使ったものでも自由に輸出することができたのである。

（十五）

暫く顔を見せなかったディコンゲがふらりと桂木の事務所にやってきた。カメルーンバムーン地方の木彫りの置物の輸出商談のため、象牙海岸やセネガルに出張していたと言う。

「ムッシュー桂木、奥さんは一人か」

桂木はディコンゲの質問の意味を咄嗟に理解できなかった。まじまじとディコンゲの顔を凝視した後、間を置いて、返事をした。

「あたり前だよ。妻は一人に決まっているじゃないか。日本では一夫一婦制だよ」

「キリスト教徒でもないのに妻は一人か。日本でもカメルーンと同じように何人も妻を持っている人がいると聞いていたけどそうではないのか」

「正式に妻とは言えない女性を囲っている人は、いないわけではない。だが、それはきわめて例外的な事だ」

「そうか。実は俺に妹がいるが、夫と死別し俺たち家族と一緒に暮している。どうだろうか妹を妻にしてくれないか。婚資は牛二頭と山羊三頭でいいよ」

「それは駄目だ。すでに僕には妻がいるし子供もいるから無理な話だ」

「そんなことは分っている。妻が二人あっても三人あってもカメルーンでは特別珍しいことではない。ムッシュー桂木のような金のありそうな外国人は、妻を二人持っても少しもおかしくない」

ディコンゲは、桂木に妹を薦め、一度事務所に連れて来るからと言って聞かない。

「妹の名はクンボと言う。子供が一人いる。クンボの夫は彼女が十才の時に俺の親父に婚資を払い、十五才になったら嫁入りをさせる約束をした。その約束に従い妹は十五歳で夫の許に嫁ぎ第二夫人となった。夫はクンボを可愛がってくれたが、結婚生活十年で去年亡くなっちまった。クンボが二十五才の時だ。クンボは、夫の弟と再婚する筈だったが、その男に生活力がないため俺が引取ったと言うわけさ」

カメルーンでは、数人の妻を持つ人も少なくない。男女の生まれる比率は、ほぼ同数であるのに何故そのようなことが社会的に成り立つのか疑問が持たれるところだ。

一人の男性が多数の女性を占有してしまえば、一生妻を持てない男性も出て来る。実際そうした男性もいないわけではない。しかし多くの男性は何らかの形で妻を持っている。

一般に、ブラックアフリカに住む女性は、カメルーンを含め早婚である。夫は、妻の父親に婚資を払わなければならず、財力がなければ妻を持つことはできない。

女性の父親は、婚資をたくさん払ってくれる男性のもとに娘を嫁がせたがるが、若い男性には婚資の貯へが少ない。他方女性は、若いほうが好まれ婚資を高く取れるので、父親は娘を早く嫁がせる。そのため女性は早婚となり夫と妻の年令差はきわめて大きくなる。こうしたことから妻が夫に先立たれることが多い。夫と死別した妻は夫の親族の誰かと再婚する。その再婚相手も死亡するとまたその親族の誰かと結婚すると言った具合に女性は一生に何度も結婚する。こうしたことによって男女のバランスが保たれているのである。いわば女性は、妊娠可能な全期間を通して結婚しており、そのため子供もたくさん生むことになる。

ブラックアフリカの社会で子供の多いのは、こうしたことも一つの大きな理由となっているのだ。

（十六）

カメルーンでは、西欧化された家庭は別として、夫婦が一つ小屋に一緒に寝ることは少ない。夫も妻もそれぞれ個別の小屋を持っている。子供が小さかったのでクンボはいつも子供と一緒に自分の小屋で寝ていた。夫婦の交わりは、夫の小屋で行われることが多かった。炊事はクンボの小屋の外で行われる。が、雨が降れば中で煮炊した。料理はほとんどいつも決っていて野菜、魚、肉をまぜたごった煮だ。だが、味付けには自信があった。主食はいもやバナナなどをゆでてから杵と臼で搗いて餅状にしたものか、とうもろこし、ひえ、もろこしなどの穀物をすりつぶして粉にし、その粉を水で溶いて固めて作ったもので変わりばえはしない。

煮炊をするのは、クンボを含めた三人の妻の役目だった。妻たちはそれぞれに食事を作り、自分の娘や子供と一緒に食べた。三人の妻は作った料理の一部を夫のところに運ぶ。夫は、クンボの料理を好んで食べた。だが、クンボと一緒に食事をしたことはなかった。

夫は、集団を統率し、食物の生産を指揮する一族のリーダーであった。その生産物は、兄弟など男性血縁者や集団内の既婚男性と協議のうえ配分を決めていた。クンボは夫から分配を受けた穀物で、夫や子供の食事を用意した。

とはいえクンボは、一族の取決めた穀物生産の農作業に出る時間以外は自分だけの畑を耕すことができた。そ

れが彼女の励みとなった。その畑で収穫した農作物は彼女のものとすることができたからである。

カメルーンでは、マーケット・マミーと言われる中年の女性が自分の作った野菜や穀物を売っている姿をよく見かける。このおばさんたちの旺盛な生活力が、マーケットに活気を与えている。そこでの取引を通じて知り合った仲間との会話がおばさんたちのストレス解消ともなっているのだ。

夫の他界した後、クンボは何も遺産らしいものは貰わなかった。一般にカメルーンでは、夫の遺産を妻が相続する権利はない。だが、クンボは、自分の作物をこのマーケットで売ることによって少しばかりの貯えを持っていた。

クンボには、秘かに想いを寄せる男性がいた。夫の晩年に、マーケットで知り合ったタクシーの運転手のブワンガである。彼は乗客を拾うためマーケットにしばしば出掛けた。当時のドアラは定期バスがなく、交通手段はタクシーに頼らざるを得ない。タクシーはバス代りに使用されるため乗合で、先に乗った客と同じ方向であれば、どこでも乗車可能である。値段も乗合の場合は安く市民の足として広く利用されていた。

乗合の嫌な場合は運転手に言って他の乗客を乗せないようにすることもできる。その代わり代金は、乗合料金の六倍ぐらい払わなければならない。無論メーターなどはない。値段はすべて交渉次第である。

荷物を一ぱい抱えたクンボが、ブワンガのタクシーに乗り込んで来た。タクシーはボロ車で、床の絨毯は剥がれ、鉄板がむき出しになっている。その鉄板もところどころ腐って穴があき隙間から地面が覗いていた。

「ずいぶんひどい車ね、もう買い替えないと危いわよ」

「新しい車にしたいところだが、金がなくて今だにこの車を使っている。もう五十万キロも乗った車だ」

「そこのマーケットで下してくれない。私ときどきここに来て自分で作った野菜や豆を売っているの」

ブワンガはクンボの荷物を下ろすのを手伝った。

「有難う。いつも決った場所で売っているから、たまには買いに来てね」

（十七）

その後ブワンガは、しばしばマーケットに顔を出し、クンボの作った野菜類を買った。親しく言葉を交わすにつれ、二人の愛情は深まって行った。

クンボは、ブワンガといると心が安らいだ。夫にはクンボの他に二人の妻がいる。その妻たちとの心の葛藤や夫の兄弟との軋轢は、クンボにとっては大きなストレスとなった。離婚も考えないわけではなかった。

だが、離婚には、お金が必要である。父親が受取った婚資を返さなければならない。クンボには、それだけのまとまった金はなかった。また、ブワンガも貧乏で婚資を払うだけの貯えはなかった。

しかし、二人の想いは募るばかりである。灼熱の太陽の下で燃え上がった恋の炎は、消そうにも消すことはできなかった。クンボは、夫への裏切と知りつつブワンガの誘いを拒むことができず一線を越えてしまった。

クンボの行為は許されることではなかったが、夫が三人の妻を持ち、しかも高齢であったことから、周りの人たちの同情を呼んだ。

そんな時、夫は脳卒中で突然死んでしまった。夫の弟との再婚の話もあったが、クンボはブワンガへの想いを断ち切ることができず、兄に頼んで実家に引取ってもらった。ディコンゲは、そんな事情があることも知らないで桂木の第二夫人に妹を薦めたというわけである。

ディコンゲは、クンボに再婚話しを薦めていることを告げた。クンボは、そこで始めて兄にブワンガとの仲を告白したのだ。

「どうしてもブワンガと結婚したい。確かに彼は、お金持ではないけど誠実で私を愛してくれている。また彼が独身であり、他に妻を持っていないことが何よりもいい」

婚資を受け取った父親はすでに他界していたので、兄のディコンゲが親代わりを務めていた。

「夫は亡くなってしまったし、子供も生んで夫の家族に残してきたのだから、もう婚資も返さなくていいだろう。お前がそれほどブワンガが好きなら、結婚させてやる。婚資は、ほんのわずかで結婚の証しとなる程度でいい」

ディコンゲは、クンボにそう言った後、早速桂木を訪れ、事情を説明し彼との結婚話しを取り下げた。

桂木にしてみれば始めからクンボを貰うつもりはなかったわけで、煩わしい話から解放されてほっとした。そして何故ディコンゲが自分に結婚話を持ち込んだのか改めて考えてみた。

つづく



体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十四）

千坂精一

栗田艦隊のレイテ湾突入

七〇一空が台湾からフィリピンに移動して戦闘に参加した〈捷号作戦〉というのは、七月にサイパン島が陥ちて本土全域が敵爆撃機の航続距離内に入ってしまったことで、慌てて立案された陸海軍協同の防衛作戦であった。

だが、敵がどの地域を目標（ターゲット）にして攻めてくるか判らないので、四地域に分類してそれぞれに防衛策を講じた。

一号、フィリピン方面。

二号、九州南部、南西諸島及び台湾方面。

三号、本州、四国、九州方面と小笠原諸島。

四号、北海道方面。

こうしてみると、大本営陸海軍部はつぎの決戦場をフィリピンと睨んでいたようで、まさに読みは当たった。

アメリカ側は、マッカーサー極東軍総司令官の名誉挽回のために一日も早くフィリピンを取り戻さなければならなかったし、日本側は、フィリピンを奪回されれば必要不可欠の石油供給が遮断される死活問題だったから死守せねばならず、本土決戦と同様の深刻な事態であった。

十月十日、沖縄が空襲を受けると同時に、〈捷一号、二号作戦警戒〉に入った。

十七日、アメリカ軍は予想通りフィリピン奪還を目指して、レイテ湾東方のスルアン島に上陸を開始してきた。

大本営は、直ちに〈捷一号作成実施〉を発令した。

この作戦の主力は連合艦隊水上部隊で、スマトラ島のリンガ泊地に待機させておいた第二艦隊司令長官栗田健男中将の第一部隊、第二部隊（栗田艦隊）、第二戦隊司令官西村祥治中将の第三部隊（西村艦隊）、および台湾海峡の澎湖島馬公（マーコン）に碇泊している第五艦隊司令長官志摩清英中将の第二遊撃隊（志摩艦隊）に出撃を命じた。

十八日早朝、リンガ泊地を出港した栗田艦隊は、二十日にボルネオ島北西岸のブルネイで燃料を補給すると、二十一日〇一〇〇に進攻を開始して、二十四日仏暁フィリピン諸島中部の東西通路シブヤン海に入り、ルソン島とサマル島のあいだのサンベルナルジノ海峡に向かった。

いっぽうの西村艦隊は、レイテ島と最南端ミンダナオ島とのあいだのスリガオ海峡を目指していた。

つまり、栗田艦隊は北から、西村艦隊は南からレイテ湾に迫り、二十五日早朝同時に突入する手筈であった。

さらに連合艦隊司令部は、瀬戸内海の泊地にいる第三艦隊司令長官小澤治三郎中将の機動部隊本隊に囮役を命じて攪乱戦法をとり、栗田、西村両艦隊の成功を期した。

小澤機動部隊は、温存しておいた瑞鳳、瑞鶴、水上機母艦を改造した千歳、千代田の空母四隻と、航空戦艦日向、伊勢、それに軽巡大淀、多摩、五十鈴のほか駆逐艦八隻を加えた堂々たる航空艦隊であった。

だが、戦力は空母四隻の合計搭載機数が僅か一一〇機、搭乗員の練度も著しく低下していて見掛け倒しだった。

囮の任を課せられた小澤機動部隊は、二十日夕刻豊後水道を南下して、一路フィリピンの決戦場へ向かった。

ところが、栗田艦隊は二十三日の仏暁敵潜水艦に発見されてしまい、重巡愛宕と摩耶が沈没、高雄は航行不能に陥り、駆逐艦に曳航されて辛うじてブルネイへ戻った。

レイテ湾突入まえに戦力を削がれたことは痛手だった。

敵潜が去ったあとも、厳戒態勢を解かずに緊張しつづけたが、再度の攻撃はなく平穏のうちに一夜が明けた。

それは、嵐のまえの静けさであった。

二十四日一〇二五、サンベルナルジノ海峡を通過中の栗田艦隊は、艦載機による大々的な空襲に見舞われた。

栗田艦隊は、大和、武蔵という世界最大の戦艦二隻を擁していたので、まずその巨大戦艦が標的にされ、武蔵が狙われて集中攻撃を浴び、満身創痍になりながら九時間耐えたが、一九三〇ごろ力尽きてシブヤン海に沈んだ。

この敵襲で、栗田艦隊は戦艦武蔵以下数隻を喪い、戦艦四、巡洋艦八、駆逐艦一一隻に減少してしまった。

栗田長官は、艦隊を西方に反転させてシブヤン海から南シナ海に出ると態勢を立て直し、夜陰に乗じて再び針路を東方に変え、サンベルナルジノ海峡突破を目指した。

今朝の戦闘で栗田艦隊は敗走したとみたのか、海峡を通過しようとしているのに阻む敵機も敵潜もなかった。

栗田艦隊は難なく海峡を通り抜けて、太平洋へ出た。

かたや西村艦隊は、二十四日早朝敵機の爆撃を受けたが、さしたる被害もなく一路スリガオ海峡を目指した。

だが、動静を把握している敵艦隊に先回りされ、スリガオ海峡の両側に駆逐艦を配置して待ち伏せられていた。

そうとは知らぬ西村艦隊は、スリガオ海峡に入った二十五日〇三〇〇ごろ、両側から一斉に魚雷攻撃を受けた。

闇に紛れて敵影は確と判らず、雷撃を躱す余裕もないまま僅か一時間の戦闘で、西村艦隊は全滅してしまった。

澎湖島馬公から南下してきた志摩艦隊は、西村艦隊が挟撃されているころスリガオ海峡入口付近に到達した。
いきなり魚雷を受けて出鼻を挫かれたが、海峡の中程まで進み、敵艦らしき艦影に魚雷を発射して引き返した。
志摩艦隊のこの反転遁走は、いまもって不可解である。
こうして、攻撃部隊は栗田艦隊だけになってしまった。
航空部隊は、この水上部隊の援護を命ぜられたのだが、二十三、二十四日の出撃とも失敗に終わっていた。
そして、十月二十五日の当日を迎えた。
早朝、太平洋上に出た栗田艦隊は、レイテ島の北に接するサマール島の東方海上を一路南下していった。
レイテ湾を目指す途次に、旗艦大和の見張員が東南遙か水平線上に敵艦隊らしき一群を発見して、緊張した。
それが空母数隻を含む敵機動部隊であることを知った栗田長官は、遭遇戦を避けられぬことを覚悟した。
栗田艦隊は、雷撃回避と空爆防禦をしながら敵機動部隊を追撃するという大童わな戦闘を余儀なくされた。
敵艦隊を捕捉出来ず、追撃を断念して集合したときには、すでに当初計画から十時間も遅れてしまったという。
いまさらレイテ湾に突入しても、湾内の第七艦隊も輸送船団も脱出して蛻の殻かも知れぬし、小澤囮艦隊の到着が遅れたので敵機動部隊がそこにいたとも考えられる。
栗田長官の脳裡をそんな思いが交錯したかも知れない。
となれば、先刻とり逃がした敵機動部隊を再度追撃して小澤艦隊と挟撃したほうが確実性がある。
栗田長官がそう判断したかどうかは定かでないが、とにかく艦隊はレイテ湾突入を断念して北転していった。
囮役の小澤艦隊のほうは、二十四日朝にはルソン島東北端のエンガノ岬沖に達して、索敵を開始していた。
そして、敵艦隊を発見するや直ちに六〇機を攻撃に向かわせたが、途中艦載機に待ち伏せされて遭遇戦になり、目標到達以前に過半数撃墜されて戦果なく終わった。
先制攻撃で捨て身の誘致をした敵機動部隊に、〇八〇〇ごろ猛攻撃をかけられ、一時間に及ぶ第一波攻撃で爆撃、雷撃を受けた空母千歳が二時間後、瑞鳳、瑞鶴が六時間後に沈没、軽巡大淀、多摩、駆逐艦秋月もやられた。
対空射撃以外に防禦方法のない小澤艦隊は損傷艦が多く、沈没艦の乗員救助が思うように捗らなかった。
第二波攻撃で千代田も沈没して取って置きの四隻を喪い、あとは大型客船の改造空母だけになってしまった。
こうしてみると、栗田、西村、志摩、小澤各艦隊が全般の情況をまったく把握していなかったことがよく判る。
もちろん、無線封鎖であったろうから連絡のとりようがなかったに違いないが、これでは連繋作戦はとれない。
原因は奇禍が起こったことにあるのだが、だから頭脳で考えただけの机上計画は齟齬を来す虞があるのだ。

二航艦特攻参加に追い込まれる

この水上部隊の潰滅を、航空部隊はまだ知らずにいた。
七〇一空は、二十三、二十四日の水上部隊援護攻撃失敗の焦りから、二十五日は水上部隊のレイテ湾突入に先駆けて、サマール島東方沖にいると思われる敵機動部隊攻撃のため、〇六三〇橋口又造大尉指揮の彗星艦爆六機をマルコットから、深堀直治大尉指揮の九九式艦爆三中隊二四機をマバラカット西からそれぞれ発進させた。
この日はようやく晴れたが、霧のような霞がかかったミスト現象で、視界はかならずしも良好ではなかった。
そのなかを、深堀隊は三時間ほど索敵したのだがついに発見出来ず、一〇五〇虚しくレガスビーに帰投した。
いっぽうの橋口隊のほうも、索敵虚しくレガスビーに帰投したが、六機のうち二機はついに還らなかった。
未帰還は四番機と六番機で、六番機の操縦員山奇一弘一飛曹と偵察員土持良博一飛曹が雑記帳に書いている。

①急降下する九九式艦爆機を鉛筆で素描(スケッチ)。
②日の丸の扇子を翳し、三味線を弾き、鼓を打って踊る鉢巻姿の大蛸を中心に据えて、狸、兎、徳利、貝類などが周りで乱舞している様子を、青と赤二色の萬年筆で描写。

艦爆機は獲物を狙う鷹を髣髴させ、大蛸は躍動感溢れていて、明朗で爽やかな人柄を偲ばせる　山奇一飛曹

支那の夜

一、赤いらんたん波間に揺れて
港上海白い霧
出船入船夕空の
星の数程あればとて
愛しの君を乗せた船
何時の日港に着くのやら
姑娘悲しき支那の夜
（以下は省略する）

土持一飛曹

土持一飛曹は、僧侶の子で眼の大きい色白の秀才型。言動が素直で育ちのよさを窺わせていたという。
この春、筑城基地（福岡県筑上郡筑城町）で降爆訓練中に接触事故で墜落、落下傘で豊後水道に着水して救助されたが、顔面火傷で入院していたので復帰が遅れた。
しかし、この日はこれで終わらなかった。
索敵攻撃に躍起になっている司令部は、
「サマール島東方沖に敵空母発見」
の報告を受けると、待ってましたと奮い立ち、昼食を終えて待機している深堀隊と橋口隊に再出撃を命じた。
一五〇〇に発進した両隊は、一六三〇ごろレイテ島東方でグラマン戦闘機群に阻止されて交戦、二機自爆した。

他機は不利な交戦を避けて、海面すれすれまで降下して追跡を遁れ、二〇〇〇以降相次いで帰投した。

新鋭機彗星四機の橋口隊は、全機無事であったが、深堀隊は二機を喪ったほかに、宮崎大尉の三中隊三小隊金山一雄飛長操縦の三番機が、二一一五ごろ着陸に失敗して炎上、偵察員藤井治二飛曹が脱出できずに死亡した。

この日、マバラカット東からも五島智勇喜中尉指揮の九九艦爆二機が出撃したが、うち一機が交戦自爆した。

七〇一空の正攻法大編隊攻撃は、またも失敗であった。

かたや、大西長官の一航艦は、昨夜福留長官に明言したとおり、敷島、大和、朝日、山桜、菊水、若桜、彗星の特攻七隊をすべて出撃させ、敷島隊が護衛空母一隻撃沈、三隻損傷、他隊が空母四隻損傷の大戦果を挙げた。

このことによって、大西長官は体当たり戦法に確信を抱き、福留長官は正攻法の限界を思い知らされた。

福留長官は、実績を上げた大西長官の説得に屈せざるを得なくなり、ついに二航艦の特攻参加を承諾した。

翌日、一航艦と二航艦が合体して第一連合基地航空部隊が新設され、二航艦摩下の主力航空隊七〇一空木田司令に第二神風特別攻撃隊編制が命ぜられた。

七〇一空は、一〇二、一〇三、五の三飛行隊で当日純忠、至誠、誠忠、忠勇、義烈の五隊を、二十八日に天兵、神武、神兵の三隊、さらに十一月六日に鹿島、神崎の二隊を追加編成して、二十七日から漸次出撃を開始した。

このうち、二十七日一六〇〇に第一ニコルスから出撃した深堀直治大尉指揮の純忠隊三機のうち三番機に搭乗した二人が、雑記帳に書いている。

○宮本孝一飛曹、米森義治一飛曹組。

敵艦高角砲に被弾してレイテ海岸に不時着。三十時間余り漂流後セブの暁部隊に救助され、十一月十七日にマバラカットに帰着した。

「お母さん」
はるかに呼べば雲とほく
まぶたに熱い母の顔
霜の白きをくしけづる
母幸くませいつまでも

「お母さん」
ふたゝび呼べば征きし日の
旗うちふりしその面輪
鬼をもひしぐ海鷲の
胸かきぬらす唯一人

「お母さん」
三たび呼ぶ夜の波の音
翼にしぶく闘魂は

敵撃滅に逸やれども
あゝ戦場に母こひし

宮本一飛曹

『雑記帳』のなかで、ただ一人〈詩〉を書いている宮本一飛曹は、満十九歳の甲飛一〇期生であった。

宮本一飛曹は、このとき負傷したらしく、以後編成表にも戦没者名簿にも記載がないので、消息はわからない。

軍國子守唄
一、坊やよい子だねんねしな
父さん強い兵隊さん
その子がなんで泣きませう
泣きはしませぬ遠い満州のお月様

（二～三番は省略する）

米森一飛曹

この人は鹿児島県出身で、宮本一飛曹と同期、同年齢。

この日以後、同い年の同県人丙飛一五期生前橋典美二飛曹と組になり、昭和二十年三月二十四日〇六〇〇沖縄那覇市小禄基地から小禄彗星隊として単機沖縄南方の敵機動部隊を目指して出撃し、発見電報を打ったまま帰投しなかったので、体当たりを決行したものと思われる。

十月二十九日〇九四五以後、至誠隊、神武隊とともにニコルスを出撃した藤本勇中尉率いる神兵隊は、途中敵戦闘機と遭遇したので三機が分離してしまった。

○藤本勇中尉、伊藤立政上飛曹組。

「敵空母発見突入」を打電してきたので、体当たりを決行したものと認められた。

第六艦爆隊の歌（松輪ぐらし）
一、暫し憩ひに朝霧晴れりゃ
いとし愛機に打乗りて
潜ぐる敵潜小癪めと
飛び立つ吾等艦爆隊

（二～四番は省略する）

五月二十日作

藤本中尉

その下に、色鉛筆で左肱を机に乗せて手紙を書いているおかっぱ頭の少女像が描かれ、純心と記載されている。

藤本勇中尉は海兵七一期、兵庫県出身の満二十二歳。

伊藤立政上飛曹は、雑記帳に書いていない。

十一月一日〇七〇〇ごろ、至誠隊、神兵隊とともにニコルスを出撃した土屋和夫中尉率いる天兵隊九九艦爆三機は、タクロバン付近の艦船攻撃に向かい、〇九三〇ごろ戦艦三隻を含む敵艦隊を発見した。

○江口源七上飛曹、土屋和夫中尉組。
これに壮烈な体当たりを決行して、戦艦または巡洋艦を撃沈した。
土屋和夫中尉は海兵七一期、静岡県出身、満二十二歳。雑記帳に書いていないが、真面目な人だったという。
操縦者は、乙飛一六期、長崎県出身、江口源七上飛曹。美少年で、佐伯基地時代下宿の娘に貰った守袋やマスコット人形を肌身離さず持っていたという。

君よ共に歌はん
一、聞けよ小風にささやく木の葉
語る言葉のよろこびに
雨も涙も今朝方晴れた
君よ歌はん共に歌はん
（二～四番は省略する）
江口一飛曹

○兒玉雄光上飛曹、遠藤博文一飛曹組。
隊長機につづいて体当たりを決行した。
二人とも雑記帳に書いている。

蘇州の夜
一、菱の實を摘む乙女の歌に
暮れてきらめく水色星よ
星をかぞへて河邊をゆけば
たそがれの泊船
蘇州なつかしい
（二～三番は省略する）

誰か故郷を想はざらん（ママ）
一、花つむ野辺に日はおちて
みんなで肩をくみながら
歌を唄ったかへりみち
おさななじみのあの友この友
あゝ誰か故郷を想はざらん（ママ）
（二～三番は省略する）
兒玉一飛曹

青春日記
一、初恋の涙にしぼむ花びらを
水に流してなき暮す
あはれ十九の春の夢
（二～四番は省略する）
昭和十九年七月十九日
「サイパン」の玉砕を聞く
兒玉一飛曹

出船の歌
一、出船の出船の「ドラ」がなる
都通ひの船が出る
さらばしばしの別れだが
せめても笑顔でゐておくれ
（二～三番は省略する）
昭和十九年七月二十一日
「Aパラ」の注射で頭をかゝへ乍ら
兒玉一飛曹

早川一飛曹が『新妻鏡』を書いた下段に
目んない千鳥
一、目んない千鳥の高島田
見えぬ鏡はいたはしや
曇る今宵の金屏風
誰のとがやら罪ぢゃやら
（二～四番は省略する）
兒玉一飛曹

操縦員兒玉雄光上飛曹は、甲飛一〇期、熊本県出身、満十九歳。笑うと雀斑（そばかす）の童顔から金歯がのぞく愛くるしい茶目っ気のある少年だったという。

チャイナタンゴ
一、チャイナタンゴ夢の歌
紅の提灯ゆらゆらと
風にゆれ歌にゆれ
ゆれて暮れ行く支那の夜
チャイナタンゴ雪の夜
チャイナタンゴ夢ほのぼのと
チャラメラも消えて行く
遠い赤い灯青い灯も
姑娘の前髪も
やるせなくなく夜が更ける
（二番は省略する）
遠藤二飛曹

偵察員遠藤博文一飛曹は、神奈川県出身。空吐（そらつ）き（冗談話）と銀蠅（ぎんばえ）（食料品などを裏口から要領よく入手する）の名人で、上官から愛されていたという。

十一月六日〇七〇〇、マバラカットから鹿島隊彗星三機が索敵攻撃に向かった。
三番機は途中敵戦闘機と交戦して自爆したが、一、二番機とも予定地点付近に到達して探索をつづけたが、敵影を発見出来ずにいったん帰投した。
午後、再出撃し、一番機は敵空母を捕捉して突入したが、二番機は敵影を発見出来ず、またも虚しく帰投した。
この二番機に搭乗していたのが、茨城県出身の操縦員小林正三上飛曹と鹿児島県出身の偵察員肝付良志上飛曹で、ともに満十九歳の甲飛一〇期生であった。

十一月十一日、天候が回復したので残存戦力を投入することになり、まず高田榮吉中尉の彗星一機が一二〇〇マバラカットを発進してマニラ東方の索敵に向かい、一四〇〇敵発見を報じたあと消息を絶ってしまった。

一五〇〇、神崎隊三機、神武隊一機とともに、小林上飛曹、肝付上飛曹組の鹿島隊最後の一機も、スルアン島南東の空母を含む護送船団に向かって飛び立った。

神崎隊の一機和久田上飛曹機、神武隊吉村二飛曹機とともに敵艦を捕捉して突入態勢に入ったのだが、そのとき宮本、肝付機はグラマンに狙われ、交戦して自爆した。

肝付上飛曹は戦死したが、小林上飛曹は失神中を敵潜水艦に救助され、戦後ハワイから送還されたという。

この二人が、雑記帳に書いている。

爆ちゃん節

一ツトセーエー
飛行機乗るなら艦爆に
気は優しくて力持ち
トコ爆ちゃん張切らうぞ
降爆巴も國の為

（二～一〇番は省略する）

小林一飛曹

「風は海から」

一、風は海から吹いて来る
沖のジャンクの帆を吹く風は
なさけあるなら教へておくれ
私の姉さん何処で待つ

（二～四番は省略する）

肝付一飛曹

十一月十三日、突然マバラカット飛行場に敵機が襲来し、K一〇二操縦員平山忠光上飛曹が至近弾で戦死した。

影をしたひて

一、まぼろしの
影をしたひて雨に日に
月にやるせぬ我が想ひ
つゝめば燃ゆる胸の火に
身はこがれつゝ一人泣く

（二～三番は省略する）

白頭山節

一、白頭御山に積りし雪は
解けて流れて相慣れの
可愛い彼の娘の化粧の水

（二～四番は替え歌、省略する）

十九・九・一日　平山上飛曹

雑記帳に書いている特攻隊員のなかで、最後に出撃したのは、京都府出身、甲飛九期生の湯浅正三上飛曹で、同乗の偵察員は、福岡県出身の飛練五期生田島一男少尉、ともに生き残りの熟練搭乗員であった。

七〇一空が特攻に参加せざるを得なくなった十月二十五日の出撃で、橋口又造大尉指揮のK一〇二彗星隊六機の二番機としてマルコットを発進、索敵攻撃に向かったが発見するにいたらず、いったんレガスビーに帰投した。

午後再出撃したが、やはり空振りに終わってしまった。

十一月十一日の出撃を最後にほぼ全滅した七〇一空は、内地で再建するため留守部隊のいる鹿児島県国分基地に還って猛訓練をつづけていたが、年が明けて桜が綻びはじめた昭和二十年三月十八日に、出撃命令が下った。

菊水部隊彗星隊と命名して第一国分を基地にしていたK一〇三は、〇六〇〇第一次攻撃隊八機を発進させた。

つづいて湯浅上飛曹らの第二次攻撃隊六機が、一〇四五九州南東沖に迫った敵機動部隊攻撃に向かった。

〇湯浅正三上飛曹、田島一男少尉組。

目標上空に到達すると、「我空母に突入す一三〇一」と打電して、体当たりして行った。

機上の唄

一、男ならこそ五十尺空の
雲の上から地上をのぞきや
島の緑もなつかしや
そこにや故郷も母も有

（二～四番は省略する）

湯浅上飛曹

（つづく）



特別寄稿

インドネシアの戦跡をたずねて

鈴木島吉

一、はじめに

私は昭和十六年十二月一日に、国民総動員により徴用土工員として、目的も行く先も知らされず、横須賀軍港を出港した。

太平洋上で開戦を知り、フィリッピンの南西ホロ島に上陸した。その後、アンボン島、西イリアン、セラム、ジャワ、チモール島など各地に分散し、空襲におびえ、猛暑の中で飢えに耐えながら、飛行場の建設、掩体壕、防空壕の造成に丸四年半も従事した。その間、多くの戦友を失い、命永らえて帰った者も、衰弱がひどく、世を去った者もある。

幸い生き残った者は、毎年集って、亡き戦友の冥福を祈り、当時の思い出を語りあっているが、ある時、

「一度、戦跡巡りをしてみよう」

という話になり、平成四年七月七日から十一日まで、五日間、かつての戦跡をたずねて歩いた。参加者は六名で、もちろん添乗員などはなく、元通訳の同行を頼りという若干不安な旅立ちであったが、しかし感慨深いものがあった。

二、出発

成田空港より、ガルウダ・インドネシア航空で、ジャカルタ経由、バリ島へ飛んだ。機内では二回の食事に、ビールの晩酌まで頂戴し、美人のスチュワーデスに一目惚れして、話しかけたりした。業務上で使う言葉は日本語が出来るので困らないようであったが、それ以外のこ

とになると行き詰まり、通訳をつれてきてくれた。こちらも知るかぎりの単語を組合せて、会話をたのしむことができた。

フィリピン上空を通過するときは、機密保持のためか窓は閉まり、その代わり映画を上映して見せた。赤道通過の記念として、赤道通過証と壁飾りをくれた。

バリ空港では、ホテルの日本女性と、通訳案内人（ジャリさん）が迎えに来てくれていて、車に乗った。

パンの木、アタップ葺きの屋根がなつかしい。

点々とあるホテル街をすぎ、寄せ棟朱塗りの中国風の、美しいリゾートホテルに着いた。

夜となったが、ホテルは大きな樹木の林に包まれているので、夜空も見えず、南十字星も見えなかった。

ロビーの大時計が夜の九時を指している。すると隣の小さな時計が、それぞれ東京は十一時、カリマンタンは十時を指し、さらにロンドン、ワシントンなどとの時差が、一目でわかった。

ひろい庭の中に、十二室ぐらいある独立した棟が、離れて、点々と、何棟も建っていた。

日本のホテルと変わらない部屋、ツインベットに風呂、トイレ、湯上がりタオルと揃っていたが、寝巻だけはなかった。

バリ島は仮の宿であったので、どこも見学せずに、翌日、朝五時というまだ暗いうちに空港へむかった。今度はメルバテイ航空九十人乗りで、アンボンへ向かった。

ウジュンバンダンへ寄航したが、飛行機は一度降りると、そのたびに検問を通らなければならないから、大変だった。予定より二時間ほど遅れてアンボン島へ着いた。かつて我々が造成したラハ飛行場に着陸したときは、感無量だった。

三、アンボン島

アンボン島は沖縄の真南の推定で南緯三、四度のところにあり、東西約六十キロメートル、南北三十キロメートルの、種子島よりやや大きい島である。

アンボン人は知能は高いといわれるが、しかし経済の主役は今も華僑である。

パンダ海の要地で、良港のため、産物の集積地として栄えた町である。しかしターミナルビルも、お粗末なトタン屋根も、かなり赤くなっている。近くの島へ通うというプロペラ小型機が二機見え、あの頃の戦闘機を思い出した。

しかし迎えにきていた車には、びっくりした。ボディはガムテープが張りめぐらされ、キーもなく、電線を指でよじって直結してあり、これで走れるのかと心配になる代物（しろもの）だった。しかし他の車も似たようなものばかりだった。しかしエンジンだけは完全に整備されていて、

快調に走った。

主要道路は舗装されていたが、広い道でもセンターラインはなかった。

人が歩き、その横をペチャという三輪車が走っていた。ペチャというのは、前輪二つの間を座席として二人乗りが出来、後輪の上に乗り、股で舵を取って進む、赤、白、黄の三色が、日替わりで操業するという、流しのタクシーである。バスはライトバンで十五人ぐらい乗れるが、中央のドアは開けたままで走っている。心配したけれども、馴れたもので、結構器用に運行していた。

湾のせまい所を、カーフェリーで三分、バックで乗り、前進した。この時もドアをこすり、蹴倒して閉めた。あきれて、ものも言えない。

工員宿舎のあったバトメラは、住宅が建ちならび、昔の面影はなかった。

ホテルは予想外に大きな建物で、六階建てのエレベーター付きだった。室内設備も日本と変わりなく、冷蔵庫、金庫、テレビ、エアコン付きの豪華さは、アンボン一と聞く。

休憩後、南部方面へ出掛けた。その昔アメーバー赤痢でお世話になった海軍病院は、今もそのままであった。その時のつらい闘病を思い出した。

ベンテン砲台は住宅団地となり、昔の面影はなかった。車をさらに進めていくと、湾の入口あたりには、トーチカが残っており、複雑な思いで眺めた。

ラトハラは、監視所と電探を据え付けにきたところだが、今は草原となり、何も見当らなかった。

この辺りには特産の、フトモモ科の熱帯常緑高木が多い。香料や油をとり、また乾燥した蕾を、床飾りなどの民芸品として作っている。独特の匂いが強すぎて、日本人には不向きであるが、見事な作品である。

帰途、波止場の近くの市場に立ち寄った。大通りの露天商は少しはよくなっていたが、裏側の魚市場などは、昔のままの悪臭で、いたたまれなく大急ぎで帰ってきた。魚は新鮮なのだが、市場の内部の不潔なのには、まいった。

あれから五十年。五十年という歳月は、裸足をサンダルや靴に変え、サロン（腰巻き）の姿も少なくなり、学生は制服にかわった。アタップ屋根もトタンや洋瓦へと変わった。ビクトリヤ兵舎の土塁はなくなって、営門だけが残っていた。だが、そこはいまも軍隊で、撮影は禁止されていた。その前の広場は野外運動場で、観覧席もあった。昔は民家にはなかった電灯が、いまは一般家庭にも灯り、朝まで灯ったままだった。

ホテルではじめての夕食になった。沢山のメニューはあるのだが、見本がないので、何を食べたらいいのかわからない。ナシゴレン（焼き飯）と、焼き鳥を食べた。星印のビールはうまかった。

次の日は北部へ出掛けた。遠く山の奥の火葬場にむかって、亡き戦友の冥福を祈って黙祷をする。ハロン水上基地はいまも軍が使用し、隊員の官舎らしい。バリケードで張りめぐらされていた。四発大艇の雄姿が、私の脳裡をかすめた。

海中温泉のトレフに向った。対岸に大きな工場が見えた。それは日本からの融資で造った合板工場で、停泊中の船は日本船だという。

満潮のため、温泉は見えなかった。突然、

「日本、こんにちわ」

と笑顔の老人が声をかけてくれた。

「どうして日本語を知っているの？」

と聞くと、戦争中は小学生で、日本語をおぼえたという。少しは日本語の字も書けるというし、なつかしい言葉だった。

「すぐそこに大きな鰻がいるから、見ていけ」

と言われて、立ち寄った。鰻のいる湧き水の下流では、水浴、洗顔、食器洗い、魚の料理、洗濯などを同じ流れの中でやっており、またその下には、豚やアヒルも来ていた。ここはまったく昔と変わらぬ風景だった。

鰻は手まねきすると、穴から出てくる。一メートル以上はあるであろう。生卵を器用に飲み込むショーを見せるのである。三、四回それを見せてから、今度は大物の鰻の写真を撮れと言って、二メートル以上もある大きい鰻を小脇にかかえて持ってきた。そして生卵をひと呑みにすると、すぐ穴の中に消えてしまった。観光料金は六千ピア（四百円）であった。

スリの農場は兵舎となり、兵隊が訓練をしていた。なおも進むと、道路拡幅と水道管理設工事をしているダンプも重機も、日本製だった。

高原の途中で、六、七人の娘たちと逢った。車から降りて、

「写真を…」

と言うと、大よろこびで並んだ。撮り終ると、

「この先まで乗せていってくれ」

と言って、すし詰めに乗り込んできた。独特の体臭にはちょっと困ったが、彼女たちはそんなことなどおかまいなしで、大はしゃぎである。お年ごろはいずこも同じで、木の葉がゆれても何とやらである。飴玉とタバコをあげて、別れを惜しんだ。

中華レストランでのパパイヤがおいしかった。

その夜も同じホテルに泊り、翌朝五時、カーフェリーが未就航のため、湾岸周遊道を車で迂回して走った。静かな海に街の灯りが映えて、さながら夜景を見るようだった。

戦争中、胸まで水に浸って上陸したヒトラマ海岸や、終戦後に襲撃を受けた製材班の宿舎タナカユーダ、最後の決戦に備えて昼夜の別なく穴掘りにはげみ、終戦に

なったソヤなどの地は、残念ながら時間がなく、訪れることができなかった。車中、運転手の、インドネシア独立の歌を口ずさむ姿は、植民地より独立国家となった、生気に充ちた明るさを感じた。

まる二日間、日本人には一人も逢わなかった。数多くの思い出を生み、新たな感動を胸に、アンボン島を離陸した。さようなら、アンボン。

四、帰路雑感

アンボン島にはなぜか農地は家庭菜園ぐらいしかないのだが、スラウエシ島飛行場近くになると、農地が見えた。田植え直後のものと、収穫後と見られる田で、桟上からだから定かではないが、水田のようだった。

ウジュンパンダン、スラバヤと立ち寄った。スラバヤの飛行場は大きく、きれいだ。

天気晴朗で、眼下に紺碧の海を眺め、遠く白雲の上に富士山に似た高峰が望まれ、さながら広重の絵を見るようだった。

ジャカルタ空港は、成田空港が立体構造なのに比して、広大な敷地にターミナルが幅ひろく拡っており、朱色の丸柱、寄せ棟のトンガリ屋根で、世界の人種が集る首都の表玄関にふさわしい美形だった。

ジャカルタ市街は遠く、高速道路を一時間あまり走ったところにあり、日本企業の看板も目立った。しかし片側六車線あるのに、渋滞すると、物売りが入ってくるのには驚いた。

現地人と結婚して十九年になるという日本女性が、案内人として出迎えてくれた。デパートへ行く。まったく日本と変りなく、大きい。通貨の違いで、定価を見ても、見当がつかない。店員が手ばやく計算器で換算して、購入をすすめる。独特なジャワ織物は、本当にきれいだ。

車が多い。ベモと呼ばれる、ペンキ塗りの真っ赤な三輪自動車のタクシーが流している。

高層ビルが立ち並ぶかと思うと、近くに赤茶けたトタン屋根の民家もある。オロナミン、水、コカコーラ、ファンタなどの清涼飲料水も売られていたが、自販機はみかけなかった。

日本を発つときは、若干不安を抱いての出発であったが、幸い天候にも恵まれ、過ぎし昔の自然はそのままに残り、また焼け野原が近代都市として生まれ変わった姿を見、そして純朴な住民に接することが出来て、最高の旅だった。こちらの車は、日本で解体場に野積みにされている車よりも、外観は落ちていると思えた。金持ち日本をしみじみと感ずるとともに、乗り物の時間がでたらめなのには、まったく困った。

亡き戦友の冥福を祈り、インドネシアの発展を願いつつ、無事な帰国をよろこび合った。

あとがき

三戸岡　道　夫

昨年（平成十五年）、郷里の小学校の同窓会に出席した（静岡縣周智郡森町小学校）。その席上で友人の村松又司さんから、「南十字星は知っている」という本を戴いた。出版は昭和六十年八月で、著者の鈴木島吉さんは、村松又司さんの義兄に当る方であった。

鈴木島吉さんは大正九年生れで、昭和十六年十一月に、国家総動員令による徴用令書により、土工員として、横須賀海軍建築部に徴用された。そして南海諸島において飛行場造成、整備などの工事に従事したが、戦後、その時の思い出を「南十字星は知っている」という一冊にまとめられたのである。

その内容は戦時中の南方にくりひろげられる軍事設備工事の苦労話や、時にはたのしい話などが巧みに書かれていて、非常に感動的であったが、その中にアンボン島のことがかなりくわしく書いてあった。

それを読んだとき、私の頭に紙透小太郎さんのことが浮かんだ。紙透寛夫さんが「まんじ」誌上に「紙透家の人びと」という題名で『父紙透小太郎の一生』を連載しているが、その中にアンボン島のことが書いてあったからであった。

紙透小太郎さんは憲兵として、戦争中、南方の島々を転戦し、アンボン島でも戦っていた。鈴木島吉さんがアンボン島にいたのは昭和十七年、紙透小太郎さんがいたのは昭和十八年であり、二人は一年違いで、同じアンボン島にいたわけである。共通した体験もあるであろうが、また、一方は憲兵、一方は工作員という立場の違いから、同じアンボン島の経験にも、おのずから異った面もあるのではないか。

これは『紙透小太郎の一生』の参考になるなと思い、私は「南十字星は知っている」を全ページ、コピーして、紙透寛夫さんにさし上げたのである。そして「まんじ」九十一号の「紙透家の人びと」（十九）が出来たのである。すると「まんじ」九十一号を読まれた鈴木島吉さんが、平成四年に思い出のアンボン島を訪れた「インドネシアの戦跡をたずねて」という記を送ってくれた。それが本文であり、特別寄稿として掲載させていただいたわけである。

紙透家の人びと（二十）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

五　セラム島ワルに派遣

軍命令によりワルに派遣と決まったのは、昭和十八年五月中旬である。セラム島はアンボン島の北に位置し、四国の半分くらいの島であるが、ワルはその東部にあり、ニューギニア並びにケイ諸島方面に対する輸送中継基地である。アンボン停泊場司令部の支所のある所であり、地図の上では大都市の◉印があるが、原住民の一部落に過ぎない。

分遣隊の新編成は、僕と、班長に佐々木要之助曹長、坂本順治軍曹、佐藤四郎、岩元利男、中島の三伍長、風戸文之上等兵、通訳の八名、他にアンボン人アブを連行した。

五日ほどで準備は完了。船は五、六〇〇屯の機帆船。セラム島を北回りして行ったが、進路を間違えてニューギニア・ハボの一寸手前まで迂回したとの事だ。糧秣その他二箇月分を携行した。アンボン出発時より、僕はデング熱で発熱して閉口した。

ワルに到着したのが二昼夜目で、午後五時ごろ。早速、停泊場支部に挨拶に赴く。支部長は中尉で鹿児島県人付き将校一名、下士官以下十五、六人で、皆、人の良いものばかりで、愉快に過ごせそうであった。その他に船舶隊の一箇小隊で大発が六、七艘あった。

早速設営だ。他の部隊はジャングルに入っていたが、憲兵隊は部落の中にいるように計画し、カパラカンポン（村長）に交渉して、支那（中国）人の家を空けて入ることにした。海岸から十メートルのよく眺望のきく椰子林の下で、お粗末ではあるが、村長の家を除いては、まず上等の家であった。三間に五間（一間は約一・八メートル）、床は四尺（一尺は約三〇・三センチメートル）ほど高く、アタップ（椰子の葉）葺きであった。一、二日かかって、どうやら住める様になった。デング熱はなかなかよくならず、五日くらい寝ていると、今度は坂本軍曹がデングで高熱が出た。

ここワルは部落戸数約三十の漁村で、インドネシアの原住民のほか、支那人一家族五名、犬が五、六十匹だけである。インドネシア人の大部は皮膚病で全員カサカサして、見るからに気持の悪いこと、着物はサロンといって腰巻だけである。村長だけは一寸した家に住み、洋服を持っていた。文化の程度はお話にならぬ程低く、村内は全く汚く、この村は全部回教徒で、豚は決して食わない習慣である。この汚い部落に当分いるのかと思うと、昭南（シンガポール）やスラバヤを見て来た我々には、堪えられないものばかりであった。

警備隊は我々と前後して一個中隊来たが、五師団の歩兵部隊でジャングルに入った。

停泊場に交渉して、ドラム缶を貰い、風呂を立てた。ここはキランと違い汚い水ながら、充分水はあったので、苦力に毎日専門に水汲みをやらせた。岩元伍長が苦力（原住民）に太郎と名前を付けた。

工作用の米、砂糖、タバコ、加給品の酒、ビール、甘味品も相当もらうことが出来て、その中にビールサッポロの黒があったのには驚いた。後日、山口亘利君が視察に来て、皆で飲んだ時の味は忘れることが出来ない。

ワル湾には、浅くて長い木橋があった。良い港ではないが、約五キロの沖に無人島のある、眺めの良い海であった。

まず、例により、海岸線付近の部落から踏査を始めることにした。約一か月、二組で各部落を一日乃至二日くらいで視察に行く。一か月後大体の調査を了し、状況報告を兼ね、連絡のためアンボンの本部に出張す。

お土産がないので中村隊長のご機嫌良くない。成果が挙がらないという理由らしい。彼はそういう男である。早急に功を急ぐ癖がある。基礎調査なくして成果の挙がるはずはないのである。学校や中央部で机上の研究ばかりに没頭したものには、第一線の勤務は分からないのだろう。今に成果を挙げるから待っていなさい、という気持で帰る。

七月末ごろから兵補隊がやって来た。隊長は日野某中尉、下士官以下約十名で、ジャワ兵補が約百二十名、アンボン人ばかり。

八月下旬、アンボンへ第二回の連絡に赴く。帰ると、兵補の集団逃亡事件が起っていた。百数十名全員がマタホテ部落キリスト教徒の煽動で、マタホテ山中に逃亡したことが判明した。このためセラム全島の捜査を開始したが、その際、初めて「鳥の羽」を使用する通伝法を利用した。

本部からの応援を求めたが、結局ワル分遣隊一手でほとんど逮捕投降に成功した。本捜査ではマタホテ山の捜査隊の派遣が一番大掛かりであった。彼等の足取りを追

跡して、僕は、坂本、佐藤、岩元並びに兵補隊長以下、計約二十名で山中に入った。しかし半日違いで、小屋は焼かれ逃走されてしまったが、その夜、マタホテ河畔の露営は比較的に呑気で愉快であった。マタホテ河は乾季で、水はほとんどなく、所どころに泉があったが、僕等の露営した下流約十五メートル付近に鰐がいたことを知って、翌日驚いた。帰途鹿の大群と遭う。射撃したが一頭も獲れなかった。

本事件は十一月、捜査報告をなした結果、軍律で全部死刑の宣告を受けた。

ゲッセル派遣隊　感状

セラム島東部約三十キロにゲッセル島がある。オランダ当時、オランダが管理官と部隊を派遣した。周囲約五キロの小島であるが、島の周囲は全部さんご礁に囲まれ、実に見事で、浦島太郎のおとぎ話にある竜宮城のような所だ。主に支那街で、物資の収集地であったのだ。某支那人はべっ甲亀を十匹ほど飼養していた、大きい奴は六尺くらいもあった。この付近は昔からべっ甲亀の産地である由。

昭和十八年十月、ワルから派遣隊を出せとの事で、佐々木曹長に中島伍長を付けて派遣した。当時同島には少尉を長とする、約十五、六名の警備隊がいた。

十一月初旬、佐々木曹長から、ワルの僕のところに特使が来て、落下傘による怪器投下の報告があった。直ちに便船で現地に行ったが、同器が不明のため、アンボン本部に護送して行く。軍司令部、海軍司令部より技術官の派遣を求めても不明。ようやく、海軍参謀により磁気機雷なること判明。大至急兵器廠にて処分することになった。怪物は長さ五間、径は二尺五寸、魚形水雷のようなものであった。嘗てニューギニア島ハボ港入口で、原因不明の輸送船沈没事件も、本器による被害と判断され、大本営にも報告した結果、五野憲（第五野戦憲兵隊の略称）初のワル分遣隊の感状を貰う。我等の得意思うべし。

香料群島バンダネラへ

約十五日間、アンボンに滞在し、十二月下旬、中村隊長に随行して、アンボン東方八十キロ、バンダネラ島へ行くことになった。佐藤徳次郎伍長が同行することとなった。

アンボン→バンダネラ→ゲッセル→セラムラウ→ワルの予定である。バンダネラは元ポルトガル領で当時の城壁はそのままで、六角形の周囲約二キロ、島の中央高台に偉容を備えて、日本軍占領後は海軍警備隊の監視哨があった。兵曹長を長として約十五名、大変世話になった。

バンダネラ本島から約六キロ離れた、周囲約八キロの全島香料の木の繁茂する島へ、視察に向かう。引き返し

バンダネラで二泊、ゲッセル島に向う。船が八時ころ着いたが、当時ゲッセルには中島伍長ただ一人、佐々木曹長はセラムラウ島へ派遣していた。ゲッセルには一寸立ち寄りセラムラウ島へ向かう。同島へ行くと、比島から濠州へ逃亡中の米兵一名を捕獲していたので中村隊長これを護送。

ワルに向かい、一日後、ワル着。僕はワルで隊長の巡視を受けて、別れたのであるが、その後、護衛の佐藤徳次郎伍長の油断から、米兵逃亡事件もあり、大分苦労したことを後日聞く。

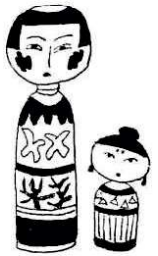
バンダネラから貰って来たマンゴーを大分食った。とても素敵な味の良い奴。ところが、すっかり顔中かぶれて、二、三日とてもかゆかったのも、思い出のものだ。

バンダネラの海の見事さ、セラムラウのこうもりの多い事、また、鶏が屋根の天辺に寝るのも、忘れられない思い出であった。

こうして、昭和十九年の正月もワルで迎えることになった。出征第一年次、仕事も多かったが面白くもあった。仕事の成果は大いに挙がり、隊下随一と、折り紙を付けられた。

ただ、若い人達には気の毒な程、殺風景な本当に野戦の生活で、ジャワや昭南のあの大都会、しかも不自由のない有り様を見てきたもの達には、堪えられない事であったろう。だが、皆自覚して変な噂さえなく、とにかく大任を全うした意味で、出来るだけ盛大な正月を迎えようと、酒とビールで過ごした事も、今は思い出の一つである。

（つづく）



漢詩

潮騒錄（卅九）

鯨游海

二宮金次郎之一生（十一）烏山藩復興事業
平成十五年五月

僧來懇願救家紋
答曰不能政是君
復到慨歎多餓者
直開倉廩濟全員
押韻・紋君員

〈二宮金次郎の一生（十一）烏山藩復興事業〉

僧来たりて懇願す「家紋を救え」と
答えて曰く「あたわず　政は是れ君なり」と
復た到りて慨歎す「餓うる者多し」と
直ちに倉廩を開きて　全員を済いたり

〔注　解〕

君＝主君。ここでは烏山藩々主大久保忠成公を指す。
倉廩＝穀物ぐらであるが語源的には倉は穀物を、廩は米を、庫は武器や道具、書物を入れる。藏は蔵う意。

烏山藩は小田原藩の支藩で、烏山地区四七ヶ村二万六千石余相模厚木地区一万三千石余合計四万石の大藩であったが、近年農地は疲弊し財政は逼迫、収米も半分以下に減少していた。要は政道が乱れていた。

天保七年東日本を襲った大飢饉で惨憺たる状況となる。忠臣菅谷八郎衛門は天性寺の和尚を見込んでかねて噂の高い金次郎の所に使者を立て、藩財政再建の教えを乞う。金次郎は厳しくいう。「君臣には君臣の道、僧には僧の道がある。飢饉に備える政治を行ってこなかったのは君の責任であろう」と取り合わず追い返して了う。

菅谷、円応和尚らは改めて藩主大久保忠成の直書を持って再び使者として金次郎を訪ね窮状を訴えた。

「餓死者が多い」と聞いた金次郎は直ちに倉廩を開く。

☆君臣の僧には僧の道あるも
　道より重き人のいのちぞ

二宮金次郎之一生（十二）小田原藩復興事業〔上〕
平成十五年七月

蒼皇君命救相州
天保七年飢饉秋
百姓歡迎藩士冷
炊烟無影蚤啾啾
押韻・州秋啾

〈二宮金次郎の一生（十二）小田原藩復興事業〔上〕〉

倉皇たる君命「相州を救え」と
天保七年　飢饉の秋
百姓歓迎するも　藩士冷ややかにして
炊煙の影なく　蚤しゅうしゅうたり

〔注　解〕

倉皇＝慌てふためく。蚤＝蚤＝蟋蟀とも書く。秋の夜美しくまたもの哀しく啾々と鳴く。鳴くのは雄という。

歴史に残る被害をもたらした天保（一八三六）の飢饉は金次郎の故郷小田原をも襲った。相模、足柄、東駿河、東伊豆に亘る十一万三千石の大藩だけに人口も多く、飢饉に苦しむ領民も数万に達した。

藩主で幕府老中主座でもあった大久保忠眞は、予てより金次郎の北関東復興事業の成果を高く評価していたので「自藩を救い更に財政を再建出来るのは彼しか居ない」と使者を送り、小田原への帰還を命じる。

金次郎は久しぶりに故里の土を踏んだ。懐しき山容は昔のままだったが河川は涸れ果てていた。村々から夕餉の炊煙が立ち昇ってこないのも哀しかった。

更に百姓達は彼を歓迎してくれたものの藩士らの彼を見る眼は冷たかった。荒田に立つ金次郎。蚤の声が啾々と胸を打った。

☆飢餓救う大命帯びて帰り来ば
　虫しゅうしゅうと古里寒し

二宮金次郎之一生（十三）小田原藩復興事業〔中〕
平成十五年七月

欲放米倉家老抗
君令未着不能開
當共斷食門前坐
俗吏恐惶俄撤回
押韻・開　回

〈二宮金次郎の一生（十三）小田原藩復興事業〔中〕〉

米倉を放けんと欲するも　家老抗う
「君令未着なれば　開くる能わず」と
「まさに共に断食し　門前に座るべし」
俗吏恐惶して　俄に撤回したり

二宮金次郎之一生(十四)小田原藩復興事業(下)

平成十五年七月

無慮三千三百俵
東奔西走馬車群
忙中一刻望千里
萬戸炊烟如瑞雲

押韻・群　雲

〈二宮金次郎の一生(十四)小田原藩復興事業(下)〉

無慮　三千三百俵
東奔西走す　馬車の群
忙中の一刻　千里を望めば
万戸の炊煙　瑞雲の如し

〔注　解〕

無慮＝およそ、だいたい。俵は「たわら」で米、炭、砂糖等を入れるわらで編んだ袋。但しこれは国字であり漢語としての意味は「分かち与える。散らす」。

米倉を開放するのを拒んでいた家老らは、金次郎の「断食」の気迫に圧倒され終に扉を開く。金次郎は直ちに緊急分を発送ついで飢餓の状況を調査すべく廻村し、程度により無難、中難、極難に三分類する等配分には細かい配慮を怠らなかった。

こうして給付貸与した米は、領内三百七ヵ村のうち百六十四ヵ村、八百八十九戸、三千二百七十五俵の多額にのぼった。彼の気迫ある行動により一人の餓死者も出さずに済んだのである。

しかしこの最中に藩主大久保忠眞が死去する。金次郎は彼を理解してくれた強力な後楯を失って茫然とした。

☆村々にかまどの煙のぼり立ち
　げに美しき瑞雲と化す

新西蘭土叔孫誕生卽事

平成十五年十月

飛來吉報叔孫生
閣筆遙望南斗晶
風起幻聽馳萬里
姦姦笑語一家聲

押韻・生晶聲

〈新西蘭土にて叔孫誕生す卽事〉

飛来したり吉報「叔孫生まる」と
筆を閣き遥かに望めば　南斗晶らかなり
風起ちて幻に聴く　万里を馳せし
姦々たる笑話　一家の声

〔注　解〕

叔孫は三番目の孫。伯仲叔季と熟して各々長子、次子、三子、末子の意で用いる。

一、二番の伯仲は本来は兄弟の意だが、転じて「よく似ていて然も実力が拮抗している」さまをいう。

所で五番目の子供が出来た場合は何と表現するのであろうか。宿題としたい。

また女性にも用いるのかどうか疑問があったが、これは用いる。晋の成公の長女は伯姫という（春秋左氏伝＝宮城谷昌光訳）。叔姫という名も多くこれも三女である。

斗は星座。南斗六星。この詩では南十字星の意で用いた。尚ＮＺの国旗の星は四ヶ、豪州のそれは五ヶである。

姦姦は、本来の漢語では「よこしまな、邪悪な」の意であるが、和語では加えて「やかましい、かまびすしい」の意味もある。姦＝侃＝喧の通用もあろう。

拙宅の孫が三人姉妹となったので、敢えて姦の字を用いたが、正規の漢学者からは排せられるであろう。これを和臭という。

しかし今あの家には母親と両家の祖母も来ているので正に六人の女性がいる。受話器の向うから彼女らの陽気な声が万里を超えて聴こえて来る。正に姦姦たる所以。

☆何時の日かサザンクロスを仰ぎつつ
　北斗の詩人を遠くしのばん

《漢詩の流れ30》北宋の巨星たち③

歐陽修（一〇〇七～一〇七二）。字は永叔。号は醉翁。時に六一居士とも称した。廬陵（江西省吉安）の人。

宋の仁宗から哲宗までの八十年間は天下太平の良き時代で経済的にも繁栄し大衆も生活力旺盛で芸術や文学も振興した。文人宰相となった欧陽修は文壇の領袖となり韓愈、柳宗元の後を継いで散文の改革、詩の革新に尽力先輩の梅堯臣を立てつつ西崑体の柔靡な詩風を一掃、王安石・蘇軾らの優れた詩人を育てた。

唐詩と一線を画した新風豊かな宋詩というジャンルを確立し、後世に大きな影響を及ぼした。七言二十四句の古詩、日本刀を詠んだ珍らしい詩を紹介しよう。

日本刀歌

（日本刀の歌）

昆夷道遠不復通　昆夷は道遠くして復た通ぜず
世傳切玉誰能窮　世々切玉を伝うるも誰か能く窮めん
寶刀近出日本國　宝刀近ごろ日本国に出で
越賈得之滄海東　越賈これを滄海の東に得たり
魚皮裝貼香木鞘　魚皮もて装貼す香木の鞘
黃白閑雜鍮與銅　黄白閑雑す鍮と銅と
百金傳入好事手　百金もて伝え入る好事の手
佩服可以禳妖凶　佩服すれば以って妖凶を禳うべし
傳聞其國居大島　伝え聞くその国は大島に居り
土壤沃饒風俗好　土壌沃饒にして風俗好し
其先徐福詐秦民　その先の徐福秦の民を詐かし
採藥淹留丱童老　薬を採りて淹留し丱童老ゆ
百工五種與之居　百工五種これと与に居り
至今器玩皆精巧　今に至って器玩皆精巧なり
前朝貢獻屢往來　前朝に貢献してしばしば往来し
士人往往工詞藻　士人は往々にして詞藻に工なり
徐福行時書未焚　徐福の行く時書は未だ焚かず
逸書百篇今尚存　逸書百篇今なお存す
令嚴不許傳中國　令厳しくして中国に伝うるを許さず
擧世無人識古文　世を挙げて人の古文を識るもの無し
先王大典藏夷貊　先王の大典夷貊に蔵す
蒼波浩蕩無通津　蒼波浩蕩として津を通ずる無し
令人感激坐流涕　人を感激せしめ坐に涕を流さしむ
鏽澁短刀何足云　鏽渋の短刀何ぞ云うに足らんや

（注）昆夷＝太古の西戎の国名。今の新疆省哈密の地。そこに産する刀は錬鋼赤刃で玉を切ること泥を切る如くであったから切玉という。越賈＝越の商人。丱童＝振り分け髪の少年少女。五種＝五穀の種。器玩＝器物骨董類。詞藻＝詩文。逸書百篇＝書經（尚書）はもと百篇あって全て古文（蝌蚪文字）で書かれていたという。秦の焚書にあった為現存するものは五十八篇で然もこの中には後漢以後の儒者の偽作が多数含まれる。先王＝孔子を指す。夷貊＝東夷と北狄＝日本を指す。鏽澁＝錆びついた。

中国の当時最高の知識人の古代後期の日本国観が判って興味深い。器玩精巧詞藻工みなり、は云い得て妙。

撞木

☆第二次世界大戦を経験した世代は少なくなった。太平洋を朱に染めて日米が戦った記憶は歴史の彼方に消え去られようとしている。だが、今日の日本の平和と繁栄は、多くの尊い人命の犠牲の上に築かれたものであることを忘れてはならない。

☆本誌連載中の「体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと」と「紙透家の人びと」は、実際に戦争に参加した人びとの体験や思いを余すところなく伝えている。「体当り」の筆者の千坂氏は、戦時中海軍の特別攻撃隊員であった。同僚が次々と出撃し散って行く姿を見送っている。紙透氏は、父が憲兵隊の将校で戦地から送られた父の手紙を通して常に戦場と向い合っていた。両氏にとって「戦争」は、風化させることのできないあまりにも衝撃的な出来事であったに違いない。

☆三戸岡発行人の計らいにより「紙透家の人びと」に関連し、鈴木島吉氏から特別寄稿を頂いた。同氏は、戦時中軍属として南太平洋のアンボン島に駐留し、戦後、生き残った戦友と共に再び同島を訪れ書いた手記をもとにしたものである。

☆イラクに自衛隊を派遣した昨今「体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人々」、「紙透家の人びと」及び鈴木氏の「インドネシアの戦跡をたずねて」は改めてわれわれに「戦争」の意味を問いかけてくれる。（O・S）

まんじ　第92号

平成16年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田　精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　田寺怜葦　画
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

まんじ

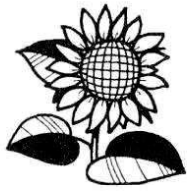
No. 93

2004.8.1

まんじ第九十三号　目次



錯覚……森　実与子…4
「かんだ」有情　―新天地時代―……大和禎人…25
古い物・遠い夢……忠内正之…30
　平凡な非凡手―我が友「陶工保田君」―
春のミニ花火ショー……吉田忠雄…34
ボランティア活動に携わって……鍋屋次郎…47
　ボランティア組織「NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ東横浜」の誕生から現在まで
保土田の古墳群……新井　宏…64
俳句　春風……大澤鷹雪…72
短歌　行雲流水（六）……石黒修身…74
小野小町物語（二）……島津隆子…78
義人・伊豆頭七異聞（二）……堀内永代…90
丙午の女（三）……太田和貞…110
妖星（四）……三戸岡道夫…116
遥かなるカメルーン（四）……太田精一…127
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十五）……千坂精一…137
紙透家の人びと（二十一）……紙透寛夫…145
漢詩潮騒録（四十）……鯨游海…149
撞木……編集子…154
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
　鈴木國男
　清水トム



錯覚

森　実与子

ガラス貼りの店の中から、ケイは外をぼんやり眺めていた。

窓ガラスに打ちつけるように、雨が吹きなぐっている。正月休みが明けたばかりの日曜の夜、道路は人影もまばらで、時折車が行き交うか、車から降りて小走りに走る人の姿が見えるくらいのものだった。

繁華街の喧騒から少しはずれたマンションの一室を使った居酒屋に、大沢由起夫と吉川ケイは夕食を食べに来ていた。玄関で靴を脱いでフローリングの廊下を進むと、間接照明だけのほの暗い部屋の真ん中に、大きなテーブルが一つあるだけだ。そのテーブルを囲んで、カップルや数人のグループなど十人ほどが、床の上の座布団に座っている。テーブルの一番はじに、ケイたちははす向かいに座っていた。

どしゃ降りだというのに、待ち合わせの公園に大沢は傘もささずにやってきた。しかも約束の時間に三十分も遅れて。

「本屋で時間をつぶしていたら、遅くなっちゃった」

ぶ厚いコートを着こんだ重装備のケイとは反対に、大沢は薄地のコートをはおっただけで、肩も背中も濡れている。ケイは傘を差し出した。

「時計を持たないからよ。仕事に支障をきたさない？」

「なくても平気さ。会社、駅、時計はどこにでもあるからね。……傘を持つのも嫌いなんだ。うざったいでしょ」

「小雨なら少しくらい濡れてもいいけど、今日は大雨じゃない。それに、夜には雪に変るかもしれないって、天気予報がいっていたわ」

ただでさえ痩せて小柄な大沢が、一段とうらぶれて見える。時間も雨もお構いなしで、日曜日もひたすら会社に出勤している大沢という男が、ケイは不可解な得体の知れない人間に思えてきた。雨はそんなケイの思いのたけをぶつけるかのように激しく降り、二人で一つの傘は足りない位だ。

勝手に濡れればいいんだ。そう思ってケイは差し出した傘をひっこめ、自分の頭の上に持ってくる。仕事帰りの大沢に合わせて六時過ぎに待ち合わせをしたが、こんな雨の夜は家にいた方がよかったと、少々不機嫌になっていた。

機嫌の悪いケイの様子を察してか、大沢もいつもにもまして口が重い。

ソーセージやサラダなど何品かの食べ物とお酒を注文したが、二人の間にはしらけた空気が流れている。

「正月に下村の家に行ってきたんだ」

大沢が、ポツリといった。

「下村さん、日本に帰っていたの？」

「ああ、あいつ、ついにマンションを買ったんだ」

「もう海外にはいかないのかしら」

「さあね。結構広くていいマンションだったよ」

大沢と共に大学時代のクラブの仲間だった下村洋次の近況は、大沢から時折聞いていた。ケイはもう十年以上も、下村に会っていない。

一流企業に就職し、三十歳間際で見合い結婚をすると、得意の英語を生かして海外駐在員となった下村は、いわば企業にとっての幹部候補生で、順調に出世街道を走っているらしかった。その彼が日本に帰っているというのは初耳だったし、海外赴任をへて、いよいよ日本に腰を落ち着ける年代に入ったのかという感慨があった。

「子供はもう小学生でね、なかなか可愛かったよ」

「女の子？　奥さんに似たのかしら」

ケイは記憶の糸をたぐり寄せ、学生時代の下村の面影を思い出した。小柄で、丸顔にちまちました目鼻立ちは、どちらかというとかわいいタイプだが、性格は男っぽくて我が強かったような気がする。

「そうだね、奥さんに似たんだよ。美人の奥さんだからね」

ボソボソと喋っていたのに、急に強い口調で大沢はいう。ケイは下村の妻に会ったことがないが、大沢はやけに力をこめて美人だと強調する。

「……男にすれば、やっぱり子供は女の子の方が可愛いね」

大沢は、この日ははじめて、にやっと笑いを浮かべた。そんな大沢の様子から、ケイは合点がいった。

「子供が欲しくなったのね」

「いや、そうじゃなくて、子供を持つなら、男にとってはやっぱり女の子の方がかわいいかなと思っただけだよ」

大沢の心情を察しながらも、ケイはわざとはぐらかす。

「そう。女の私が、男の子の方がかわいいかなと思うのと同じね」

「下村の奴、向こうで食器をたくさん買い込んできたらし

くて、食器棚にはウエッジウッドがずらっと並んでいたよ」
「そんなことまでチェックしてきたの？　いい暮らしをしてるのねえ」
「海外行って、金を貯めたんじゃないの。……うまくやってるなって感じだったよ」
「感想は？」
「だから、うまいことやってるなと思ったよ」
　そういうなり、大沢は俯いてしまった。
　薄灯りのなかに、大沢のとがった顎だけが見える。顔は見えないが、沈んだ表情に違いない。座布団の上で崩した足が微かに揺れ、貧乏揺すりをしているのがわかる。
　下村のマンションを見て、大沢は彼の暮らしがうらやましくなったのだろう。だから今日は、最初から口が重かったのだ。ローンでマンションを買って、かわいい子供がいて、そこそこに出世しそうな地位にいて、絵に描いたような幸福な生活。それを〝うまくやっている〟と憧れているのだろう。
　大沢だって、一度は結婚してマンションも買ったのに、その結婚はうまくいかなかった。すぐにマンションを売り払い、今は母親と二人、小さなアパートで暮らしている。家庭を持つのが望みなら、急いで離婚することもなかっただろうにと、ケイは思った。
　下村でなくても大学時代の同級生たちは、多かれ少なかれ、結婚して下村のような生活を送っているだろう。もう三十代の半ばに達したのだから、それが当たり前だ。むしろ大沢とケイだけが、例外なのである。
「日曜の雨の夜、こんな場所でデートしているのは、同級生のなかでも、きっと私たち二人だけかもね」
　ケイの言葉に、大沢はやっと顔をあげる。
「独身だからね」
「それがいいのか悪いのかはわからないけど、結婚しているから必ずしも順調ってわけでもないしね。幸福の求めかたや欲望のありかは、一人一人違うんだから仕方ないわね」
「うん、そうだね」
「一見うまくいっていそうな家庭でも、内側に足を踏み入れてみなければ実情はわからない。表面だけを取り繕っている夫婦も、案外多いんだし。……もしかして、下村さんの家にいってうらやましくなったんじゃないの？」
　ケイはわざと大沢を茶化していた。
「そんなことはないよ。自由な身だから、こうして吉川も僕と会ってくれるわけだし、気楽に週末を過ごせるんだもの」
　ボソボソと喋る大沢の言葉を聞きながら、
（それなら、もっと楽しそうな顔をしてよ。他人の生活をうらやんで陰気くさい顔をしていたら、気持ちが落ち込む一方なのに、意気地なし！）

　言葉にはしなかったけれど、ケイは心の中でそう叫んでいた。
　横の若いカップルは、仲良さそうに笑っている。向かいのグループも、大きな声を張り上げて話がはずんでいる様子だ。週末の夜、未知の者同士が一つのテーブルに座り、楽しそうに食事をしている。それなのに、今日の天気のようにじめじめとした態度なのは、自分たちだけではないか。せっかく食事にきたのに、なんだか肩身が狭いような居心地の悪さを、ケイは噛みしめていた。
　グラス片手に、ケイはひたすら降り続く雨を見つめた。激しい雨は、ケイ自身の心のなかに降っているのかもしれない。
「なんだか、寒いわ。これ以上いると震えがきそう」
「出ようか」
　雨のなかでタクシーを拾い、大沢は母の待つアパートへ、ケイも両親と同居している家へ帰っていく。
　しかしよくよく考えてみると、どしゃ降り状態なのは、ケイではなく大沢の心のなかなのだ。下村の家庭を見てうらやましくなった大沢は、できればケイと結婚して、下村のような家庭を築きたい、と思っている。それをわかっていながら、ケイは大沢をじらしてばかりいた。
　日曜の夜に会っても、食事をしただけで別れるなんて、いい年をして子供の付き合いでもなかろうに、大沢にしてみれば、面白くないに決まっている。二人の間が少しも発展しないことで、彼は萎縮してしまっているのだ。そのことを十分に承知していながら、はぐらかす自分は、薄情な女なのかと、ケイは自問してみた。
「もう、俺の人生の半分ちかく、吉川と付き合っているんだな」
　時々、感慨深げに大沢はいうが、実際、大沢とケイの付き合いは、かれこれ十五年になる。
　もともと、大学の〝怪奇クラブ〟の仲間だった。原因不明の霊能力や怪奇現象について研究する、一風変わったサークル。というのは表向きの看板で、実際にはミステリー小説を読んだり、ホラー映画を見たりする、軽い同好会である。
　ケイの一年先輩の大沢は地味で目立たない学生だったから、ケイの眼中には入らず、すぐに同学年のSという男と恋人同士になっていた。Sは美男子ではなかったが、自らミステリー小説や映画を製作するほど才気走り、ケイはその個性の強さに惹かれたのだった。
　存在感の薄い大沢は、学生時代、下村やSのような自己主張の強い男の後を、金魚のフンのようにくっついていた。
「大沢くん、もっとしっかりしてよ」
　下村たちにからかわれても別段気にかける風もなく、何となく無気力で、流れに身を任せているという持ち味

なのだ。痩せてとがった顔に、はっきりとした輪郭を持たないボーとした雰囲気は、個性の強い男たちの影のような存在となっていた。しかしその影の薄さを挽回するかのように、時に奇抜な行動をして皆を驚かせることがあった。

夏の合宿で、東北地方の片田舎に出かけた時のことだった。

じりじりと照りつける真夏の陽射しのもと、山間の川べりは心地よく、昼食にバーベキューをしようと、クラブのメンバー総勢二十人ほどで用意をしていた。それぞれがバーベキューの準備や川遊びに興じていた時、何を思ったか、大沢はいきなり洋服を脱ぎ捨て、全裸になって川で泳ぎだしたのだ。

「……みんな、大沢が脱いだぞ」

誰かの叫び声に、皆の視線が、一斉に大沢の上に注がれた。

「見たくないよ、大沢さんの裸なんて」

「また、大沢が変なことをはじめたよ」

「早く、写真をとれ。これは絶対、心霊写真になるぞ」

嬌声と爆笑の渦のなかでも、大沢は気にする様子もなく、股間をもろに晒した姿で川のなかにつっ立っていた。

「大沢さんて、しょうもない男だな。下村に馬鹿にされるのも当然だよ」

Sの言葉にケイも同調し、あきれながら笑っていた。

その夜の宴会で、

「大沢は、露出の趣味があるのか」

下村に問い詰められても、

「そんなんじゃないよ。気持ちがよくなっちゃって、脱ぎたくなっただけだよ」

照れもせず、あっけらかんと言い放つ。

そうかと思うと、カラオケもない居酒屋での宴席で、大げさなジェスチャーを交えながら一人で絶唱することもしばしばあった。酒に酔ったわけでもなく、おどけた風もなく、真剣にやるから、ケイたちはいつも呆気にとられた。

その意表をついた無防備な行動は、反面、サークル全体の雰囲気をなごませていた。普段おとなしい分だけ大沢の大胆な行動は奇異であり、次第に物笑いの種となり、大沢は、いわばサークルのピエロのような役を演じるようになっていた。クラブの仲間が学年を越えてうち溶けるには、大沢はもってこいのキャラクターであり、それはそれで愛すべき存在ともいえたのだ。

しかし、本人はいたって大マジメなのだ。もしかしたら、彼独特の自己主張なのかもしれない。人の後に隠れているようでも、やはり自分の存在を誇示したいという思いは、人一倍強いのだろう。だが、不器用だから不様な形でしか発揮できない、そんな風にケイはとらえていた。一風変わったキャラクターのせいで、逆に大沢は気

軽く話のできる先輩として、ケイは親しみを持つことができたのだ。

大学三年になって、ケイはSと別れた。

その別れに、決定的な理由などなかった。嫌いになったとか他に好きな男ができたとか、特別な原因はなかったが、二年半の付き合いで、はじめにケイがSに対して抱いていた男性像とS自身との間に、ズレができたことに気づいたからだった。最初は個性的な男に思えたのに、次第に平凡さが見え隠れしていた。

サークル公認の仲だったSとの別れを聞いた大沢は、何を思ったのか、早速ケイを誘い出した。ケイも誘われるまま、渋谷の喫茶店でお茶を飲んだ。

「S君の友人という立場からすれば、二人が別れたのは残念だけど、一人の男としては喜ぶべきことだな。吉川が晴れてフリーの身になったんだから……」

大沢の言葉に、何となくホッとしたケイは、

(案外、デリケートでやさしい男なのかもしれない)

大沢に対して、そんな感情を抱いた。

大学を卒業すると大沢は文具メーカーに、ケイは零細の出版社に就職した。

それ以来、男と別れた後のエアポケットのような時になると、何故だか決まって、ケイの目の前に大沢が現れる。その度にケイの話に耳を傾け、慰めてくれたり、気のきいた言葉をかけてくれるので、大沢と会うと肩の力が抜けるような安堵感があった。面白味や刺激には欠けるが、たまに会って食事をして軽くお酒を飲み、話をする分には悪くはなかった。大沢と会うのは、渋谷や原宿、青山など都心のちょっとお洒落なレストランや居酒屋だった。酒があまり強くない大沢と流行の店で食事をするというのが、いつの間にか、お決まりのコースとなっていたのである。

いわば気の置けない男友達として、十数年もの長い間、付き合いが続いてきた。二、三年の空白期間を何度か繰り返し、忘れた頃に大沢から電話がかかってくるという、細々とした友達関係が続いていたのだ。

三十四歳までずっと独身のケイと違い、大沢は二十九歳で結婚した。

結婚の一ヶ月ほど前に、二人は青山のレストランで大沢の独身最後のデートをした。

丁度、年の瀬も迫った頃だった。

「この年になると、そうそう新しい出会いもなくてね。回りも皆結婚していくし、ちょっと気が強い女だけど、年貢のおさめ時かなって」

結婚を控えているのにあまり晴れやかな顔つきでなく、大沢は弱気な言葉を口にする。

「そのマフラー、素敵じゃない。彼女からのプレゼント?」

ケイは、大沢が首に巻いているグレーのウールのマフラーを指していった。
「ああ、しないとうるさくてね」
「もう尻に敷かれているの。　大沢さんらしいわ」
ケイが声をたてて笑うと、大沢は縮こまってしまう。
「結婚したら、会えなくなるかしら」
「うん、結構チェックが厳しいから……」
「でも、学生時代からの友達なんだから、たまにはデートしましょうね」
「吉川さえよければね」
浮かない顔をしているのは、ケイの気のせいだろうか。回りの友達が次々と結婚していく年代に入って、ケイは自分だけが取り残されていくような気持ちに駆られた。しかも学生時代からのボーイフレンドに先を超されるとなると、わずかの失望感があったのも確かだった。
しばらく音沙汰がなく、それから一年半ほどたった時、久しぶりに再会した。
気の弱い大沢は妻に牛耳られているらしく、通勤に二時間ほどかかる郊外にマンションを買い、毎朝通勤がたいへんなことをぼやいた。そして話しているうちに、実は別居しているといい出したのだ。
「……本当は、実家に帰っているんだ」
「お母さんのところに？　家出なの？」
「そんなところかな。この前は、行くところがなくて山手線を二周したよ」
「まあ、今は男が家を出て行く時代だから、大沢さんは最先端を行っているんじゃないの」
ケイの冗談に笑いもしない。
「たまに荷物を取りに戻ることもあるけれど、口もきかないんだ」
結局、大沢の結婚はわずか二年ほどで破綻した。
「付き合っている時はよかったけど、一緒に暮らす女ではなかったな。貯金が趣味で、お金の管理がうるさくてしょうがなかった」
詳しい事情はケイにはわからなかったが、気の強い倹約家の妻に耐えられなくなり、逃げ出したらしい。おまけにローンで手に入れたマンションも手放し、慰謝料を払わなくてはならないという。
「浮気したわけでもないし、子供もいないんだし、大沢さんが慰謝料を払う理由なんてある？」
「それはそうだけど、裁判が長引くのがいやでね。逆にお金で解決できるんだったらいいやと思って、了承したんだ。マンションの頭金を払ったのは向こうだから、それを返すっていう形だよ」
「大沢さんが、そんなきっぱりしたことのできる人だとは思わなかったわ」
「いやとなったら、僕だって我慢できないよ。一刻も早くさっぱりしたいもの、お金には代えられない」

そして今、大沢が正式に離婚してから、四年たっていた。
二人の十数年の年月のなかで、一番接近している時といっていいだろう。
昨年の秋、二年ぶりに大沢から電話があり、夏に男と別れたばかりのケイは、なつかしさがこみあげて大沢と会っていた。久しぶりに会った大沢は、老けこんだといったらいいか、疲労感がにじみ、髪の毛も、よく見るとごま塩頭になっていた。
「仕事忙しいの？」
「まあね、土日も出勤しているんだ」
「大沢さんの会社、週休二日じゃないの」
「本来はそうだけど、平日だけじゃ仕事が終わらないから、自分だけ出社してるんだ。ダラダラ仕事しているのがいけないのかもしれないな」
「休みの日に会社に来る人なんている？」
「人がいないから、静かで仕事がはかどっていいんだ。……一人なのがいけないのかもしれないね。これで家庭があったら、休みの日には家族サービスに努めなければならないけど、それもないから。仕事が気休めだね」
「仕事熱心なのね。大沢さんは、仕事が趣味なのかしら」
特別に趣味もなく、相変わらず仕事がすべてみたいな生活を送っているらしい。食事をしてしたたか酔って、久しぶりに話もはずむ。
食事の後、新宿の高層ビルの最上階にあるホテルのバーに寄った。近隣の高層ビルが聳え立ち、車のライトやビルの灯りが、星屑を散りばめたように輝く。大きなガラス窓から見える夜景は、自分たちが都会の大きな渦のなかで暮らしていることを実感させてくれる。
そんなことをケイがぼんやり思っていると、二杯目の水割りを飲み始めた大沢は、居眠りを始めた。体が倒れんばかりに大きく揺れ出し、しかも涎までたらしている。口から糸をひいたように唾液がたれ、ワイシャツの上に染を作っていた。ケイはたまらなくなった。働き盛りの三十の男が、まるで八十才の老人のようではないか。嫌悪や憤りの感情は湧いてこなかったが、なんだか大沢がみじめに思えた。そして、大沢は心か体を病んでいるのではないか、と感じた。
「大沢さん、起きてよ。こんなところで居眠りなんて、恥ずかしいわ」
ケイが大沢の体を揺り動かすと、大沢はハッと目が覚めたらしく、慌てて周囲を見回した。自分が今どこにいるのか、確認しているのだろう。
「ごめん。今日は金曜だから、一週間の疲れがたまってるんだ。でも、もう大丈夫だよ」
「居眠りしたから、目が覚めた？」
「そうだね。……ところで、今、付き合っている男、い

る?」
「実はね、私、妻子持ちの男に半年もだまされてたのよ。独身だって嘘を突き通されたの。私って、ばかみたい。妻子がいるってわかった時、本当にショックだったわ」
ケイが別れた男の愚痴を話すと、
「男にすれば、嘘をついてでも吉川と付き合いたかったんだろう。わかるよ、その気持ち」
そんな淡々とした言葉を吐く。たまには大沢と会うのも悪くないと、ケイはちょっぴり甘い気持ちに浸っていた。
「ボーナスもらったら、何か買ってあげるよ」
十二月のクリスマスシーズンを前に、大沢は突然、そんなことを口にする。
「この間、街を歩いていて、吉川が似合いそうなマックス・マーラのコートを見つけたんだ。…まあ、コートじゃなくてバッグでも、アクセサリーでもいいし、欲しいものを買ってあげるよ」
「コートやバッグなんて、高価なものをいただいていいのかしら?」
「これだけ長く付き合っていて、今まで一度も吉川にプレゼントらしきものを贈ったことがなかったもの。奮発するよ」
はじめは大沢の言葉が半信半疑だったが、クリクマスプレゼントをもらうあてもなかったケイは、彼の好意を受けることにした。と同時に、この時はじめて、ケイは大沢の気持ちに気づいたのだった。
「……吉川をはじめて見た時、霊感が走ったというか、ああこれだ、と思ったんだ」
突然の告白に、ケイは面食らった。大沢とはじめて会った十年以上前の出来事など、ケイはまるで覚えていない。
「…そんな話、今はじめて聞いたわ。さすがミステリーサークル出身ね。霊感なんて、まさに怪奇現象じゃないの」
ケイの軽口も意に返さず、大沢は真面目な口調で続ける。
「あの頃は、今よりぽっちゃりしていたよね。かわいい女だなと思ったんだ」
「へえ、今ごろになってそんなことというなんて、変な人ね。もっと早く告白してくれればよかったのに」
「何度もいっただろ。僕と付き合ってくれないかって」
「そうだったかしら」
「その度にはぐらかされてきたんだよな。いつもタイミングが悪くて」
振り返ってみると、なるほど、大沢のいう通りなのかもしれない。
それはケイが、大沢の誘いをまともにとらなかったためでもある。学生時代からのともだちという気軽さから、

ケイに対して思わせぶりなことをいうのだと、大沢の言葉を本気で受け止めなかったのだ。しかし、よくよく考えてみれば、大沢は度々、それらしいことを言っていたのかもしれない。冗談のような会話の断片が、頭のなかを駆け巡る。
「僕にもっとお金があれば、今すぐにでも吉川をもらいにいくんだけどな」
「まあ、お言葉だけいただいておくわ」
「私はあんまり早く結婚したくないの。でも、そんなことをいっているうちに、私だけ取り残されちゃうかもね」
「その時は僕がもらいにいくよ」
「大沢さんは、私の最後の切り札かしら。四十才過ぎても一人だったら、一緒になってもいいかな。でもあなたとはずっと友達でいたいから、結婚なんてしないほうがいいと思うわ」
長年の慣れから、ケイは大沢に向かって度々戯れにも似た言葉を吐いてきた。大沢にすれば、ケイの対応は肩透かしの繰り返しだったろう。
接近して距離が近づき、交際を申し込むとケイに拒否される。すると大沢は潮を引くようにだんまりをきめこみ、いわば自分の殻に閉じこもってしまう。音沙汰なしの状態が一、二年続き、ほとぼりがさめるとまた会うという変則的な関係だった。
「いわれてみれば、そうかもしれないけど。でも……」
ケイにしてみれば、気心の知れた安心感から親しく接してきたが、ともだち以上の感情はもてなかった。恋愛や結婚の対象というよりも、たまに会って話をするだけの、親しい関係、それがふさわしいと思えたのだ。もちろん、友人から恋人に変る関係もあるだろうが、ケイたちの場合、ながすぎた春、いや長すぎた春夏秋冬なのだった。
一度だけ、ケイは大沢とホテルに行ったことがある。だが二人は一度もセックスしたことがないのだ。ベッドの上で戯れたものの、いざとなったら、
「緊張しちゃって、ダメみたいだ」
妙なことに、大沢は立たなかった。
肉体関係がないからこそ、これだけの年月、続いているといえるかもしれない。もしもセックスしてしまったら、二人の関係は壊れてしまうのではないか、そんな思いが暗黙のうちにお互いの中に芽生えていた。つまりケイにとって大沢由起夫という男は、学生時代以来、いろいろな男と出会いと別れを繰り返してきたなかで、過去から現在に至るまで、ずっとケイにつきまとっている唯一の男なのである。
告白されてから一ヶ月後、渋谷の街を二人で歩いた。
繁華街はすっかりクリスマス一色となり、街灯は、豆電球をあしらった小さなモミの木と赤いリボンですっぽ

りと飾られ、まるでおとぎの世界のなかにいるようだ。幻想的に輝く街並みは、一年のうちで今がいちばん浮かれた季節であることを意味している。

……青春時代から、何回も繰り返しめぐってきたシーズンであり、恋人と一緒の年もあれば、家で猫を抱きながら寂しく過ごした年もあった。さまざまなシーンが思い出されるが、振り返ってみると、どれも泡沫のようにはかなく消えている。今年はこうして大沢と一緒にいるけれど、時間がたてば、やはり夢のなかの出来事でしかなくなるのだろうか。

「何が欲しいの?」

大沢の声で、ケイはふっと現実に引き戻された。

「……そうね、バッグがいいかしら」

「じゃあ、デパートに行こうか」

大沢に物を買ってもらうなんて十数年の間でもはじめての出来事で、カップルでざわめくデパートのなかを一緒に歩いていることに、ケイはちょっとした違和感があった。だが隣にいる大沢は、いつもと同じ淡々とした素振りを見せる。

普通の恋人同士なら半年か一年くらいでたどりつく、クリスマスプレゼントの交換という行為が、自分たちの場合、十数年間の長い時間をへて、中年に入ってやっとたどりついたのだ。改めてそう考えると滑稽で、笑いがこみあげてくる。

「何、笑ってるの?」

「何となく、おかしいのよ」

ケイにつられて、大沢も笑みを浮かべる。何軒かのお店を回った挙げ句、結局、ショウウインドウに並んでいた、ロエベの小ぶりのベーシュのバッグを買ってもらった。

買い物が終わり、イタリアンレストランで食事をする。ケイは夏の海外旅行で買ってきたネクタイを渡したが、大沢は中味も見ずに受け取った。

「プレゼントをもらうよりも、女の子に、洋服や物を贈る方が好きなんだ」

「じゃあ、結婚していた時には、奥さんに洋服とかいろいろ買ってあげたんでしょ」

「それが、そういうことをいやがったから、何も買ってあげたことはないんだ。無駄使いするよりも、お金を貯めろって」

「堅実な女性だったのね。奥さん向きじゃないの」

大沢がケイに対してともだち以上の好意を持っていて、それがクリスマスプレゼントという形になっていることぐらい、ケイには十分過ぎるほどわかっていた。

食事を済ませ、軽くお酒を飲みにバーへ行った。

カウンターとわずかなテーブルだけの狭い店は、クリスマスの夜だけあって、混んでいた。人の話し声と音楽が混在して、何となく落ち着けない。カウンター席で

ビールを飲むケイに向かって、大沢が言葉を投げかける。

「今、付き合っている男いるの?」

音楽やざわめきで、よく聞き取れない。

「この前話したでしょ。妻子持ちにだまされて、夏に別れたばかりだって」

ケイはどなって答える。大沢が何をいいたいのか察したケイは、

「疲れたわ。出ましょう」

と促した。

店の外に出ると、ほてった体に冷たい空気がひんやりとしみて心地いい。人通りの途絶えた夜中の通りをしばらく歩いたが、やがて小さな公園の前で、大沢の足が止まった。

「もう少し話がしたいな」

大沢はそういって公園の中に入り、灯火の下にあるベンチに腰をかけた。ケイも後にしたがった。

「……付き合っている人がいないのなら、僕と正式に付き合って欲しいんだ」

ケイは深呼吸をする。なんと答えようかと、頭の中を言葉がめまぐるしく行き交った。

「結婚していた前の女とも縁が切れたんだ。もうお金は払わなくていいって。だから、今度こそ吉川と真面目に付き合いたいと思って」

「そういってもらえるなんて、うれしいわ」

「離婚してから、女性のことを考える精神的余裕がなかったんだ。仕事一筋でここ四年ばかりやってきたけど、やっとそのゆとりができてきた。僕は、やっぱり愛する女がいないとだめなんだ。……吉川のことを大切にしたいし、愛していこうと思っているんだ」

ケイは言葉につまる。

「……お付き合いするのは構わないけれど、先のことはわからないわ。…まだ、前の男とのことがしこりになって残っているのかもしれない。だから今は、結婚するとか先のことは何も考えられないの。ただ、自然な形でお付き合いできればいいとは思っているの」

自分自身でも何をいいたいのかよくわからずに、曖昧な受け答えをしていた。大沢の問いかけの答えにはなっていないだろう。大沢は、真面目な面持ちでケイの言葉を聞いているらしかった。顔が赤いのは、アルコールのせいだろうか。大沢の様子をうかがっていると、突然大沢は、ケイの肩を抱き寄せた。強い力でねじふせるように、激しく唇を合わせてくる。冷たい空気のなかで、ケイは大沢の熱い情念のようなものを感じて、一瞬恐ろしくなり、顔が離れると咄嗟に、

「少し、時間をくれない。……大沢さんとこれからどう付き合っていけばいいのか、冷静になって考えたいわ」

言葉がこぼれていた。

「……そうだね。吉川は僕の一番古い女ともだちだもの。

せっかくこれだけ長く付き合ってきたのに、親密な関係になって気まずくなって友達じゃなくなるのはいやだ。僕はきみのことが好きだけれど、無理にとはいわないよ」

今のケイには、大沢の申し入れを断る理由もなかった。新しい男を探してまたイチからスタートするのも億劫だったし、何せ、大沢は世の中でケイのことを一番よく知っている男なのだから、彼がそばにいるのは楽なことには違いない。男と女が平行線をたどったままでいるなんて、考えられないことであり、いずれくっつくか離れるか、二つに一つしかないだろう。ケイたちの場合、そのくっついたり離れたりの状態が、周期的に何度も続いている。しかしその関係も、もうクライマックスにさしかかったといっていいだろう。お互いもういい年なのだから、今度こそはっきり結論をださなければならない、という予感が胸をよぎる。ケイの煮え切らない返答を、大沢はどんな気持ちで受け取ったのだろうか。

……そして、年明けの雨の日のデートで、大沢が大学時代の同級生である下村の話を持ち出し、なんとなく気まずい雰囲気に陥ってしまった。

その夜、家に帰って、ケイは大沢の言葉を何度も繰り返していた。

「下村の奴、うまくやっているって感じだったよ」

「美人の奥さんだよ」

「女の子ってかわいいね」

自分に言い聞かせるように神妙に語った、大沢の姿を思い浮かべ、ケイが大沢と次の一歩を踏み出せないでいるのは、過去にこだわっているからではないのかと、自分自身の思いに突き当たった。大沢と下村、かつての恋人S、十数年前の学生だった自分たちの姿が、頭のなかでフラッシュバックする。下村とSはケイの記憶のなかで、当時の若いままの姿で生き生きとしている。そのなかで大沢だけが、年を重ねた生身の姿をさらしてケイの目の前に存在する。

今さらケイが大沢と恋愛し、結婚するなんて、彼らが知ったら面白がって笑い転げるかもしれない。引き合うものがあるのなら、こんなに遠回りしないでとっくの昔にくっついているはずだ。そう思う一方で、逆に、これほど長い年月つかず離れずつきあってこられたのだから、躊躇せずに大沢の懐へ飛び込んでもいいではないかとも感じる。ケイの心は正反対の二つの思いの間で、波間に漂う小舟のようにゆらゆらと揺れていた。

一週間後、ケイは仕事で熊本へ出張した。

ケイが担当する単行本の著者のもとを、取材を兼ねた打ち合わせのため、カメラマンとともに訪ねなければならなかった。

早朝の飛行機の中は、ビジネスマンで満席状態である。

窓側の通路側の席に座っていたケイは、ねぼけ眼の朦朧とした意識にもかかわらず、何か落ち着けないいらだたしさを感じていた。チラチラとした視線が、自分に注がれていることに気づいたためだ。二列前の中央に座る中年男が、時折、様子をうかがっている。

ケイの隣の窓際の席に座ったカメラマンは、離陸早々、熟睡状態だった。うつらうつらしながら、ハッと目を覚ますと、一人の男が後ろを振り返ってケイを凝視していた。

「ストーカー、まさかね。きっと、人違いをして私のことを見ているんだわ」

ケイは心のなかで呟き、この出張が煩わしいものにならなければいいと思った。

一時間ほどで空港に着き、足早に空港を出てタクシー乗り場に向かって歩いていると、

「吉川さん……」

呼び止められた。

「やっぱりそうだ、吉川ケイさんですよね」

振り返ると、さっきからケイを盗み見していた小太りの中年男が立っていた。紺色のスーツにカーキ色のジャンパー風の半コートを着こんだ、サラリーマン風の男が、愛嬌のある笑いを浮かべている。見覚えがあるような気はするが、記憶の線がはっきりと結びつかない。首をかしげていると、

「下村ですよ、大学時代の」

「…えっ」

ケイは絶句した。

「昔に比べて大分肥ったから、わからなかったかな」

「突然なので……」

「吉川さんは変わらないね。すぐにわかったよ」

肉がついて一回り大きくなったものの、丸顔にちんまりとした部品の作りは、確かに見覚えある下村の顔だ。

「仕事？」

「ええ、カメラマンと一緒に取材に来たんです」

「今日は泊りですか？」

「そうですけど」

「僕も、市内のホテルに宿をとっているんですよ。熊本城の真ん前のホテル。……吉川さんは？」

「さあどこかしら、熊本に来たのははじめてですから」

言葉を濁していると、下村はなおも続ける。

「ホテルの場所は中央に集中しているから、きっと近くですよ。……もし良かったら、夕食でも一緒にどうですか」

ケイが答に窮していると、

「僕の方は時間に余裕があるから、構わないんだけど」

てきぱきとした下村の誘い方は、有無をいわせぬ速球力がある。

「……じゃあ、キャッスルホテルのロビーに七時でどうですか。……待っていますよ。知っている店に案内します

から」

一方的に約束を取り決め、下村はさっさとタクシーに乗り込んでいく。

奇遇というには、あまりにも偶然すぎた。つい十日ほど前、久しぶりに下村の話題が出たばかりなのに、その噂の張本人に、十数年ぶりにバッタリ出くわしてしまうとは。下村に再会するなど、ケイは夢にも思っていなかったというのに。

それにしても、下村の風貌の変わり様には驚かされた。丸い顔は肉がついてより大きくなり、頭の毛は薄くなり、典型的な中年男然としている。しかし強引な話し振りや誘い方は、昔と変わらない。ケイにはよくわからないが、ああいう手合いが会社ではやり手の部類に入るのだろうか。

その日、仕事は順調に進んだ。熊本の大学教授である著者から、進行中の〝宇宙エネルギー〟に関する原稿を受取り、市内でUFOが現れると噂されている場所へ撮影に向かった。樹木がおい繁る小高い丘は平凡な田舎の風景だが、気のせいか、空気が張り詰めているような気がしてくる。

「この辺りは、何かのシグナルがあるんでしょうか」

「おそらく、宇宙に向かって信号のようなものを発信する神秘のエネルギーが漂っているんでしょうね。そういう強いエネルギーが引き合うことで、宇宙は、一定の法則を持って動いているんです」

初老の学者然とした相手は、神妙な顔つきで話す。その言葉に、ケイは思わず引き込まれていた。

「一定の法則？」

「つまり、この地球上のあらゆる出来事は、必然性を持っているんです。偶然の出来事というものはないんですよ」

その言葉が、ケイの心を突き刺した。

（大沢のことで思い悩んでいる渦中の私が、下村と出会うとは。これは運命のいたずらなのかもしれない。何かの力が、私を下村に引き合わせたのだろうか）

そう考えて、ケイはその晩、下村と会わないわけにはいかないと思った。

七時に指定されたホテルのロビーに向かうと、下村はソファから素早く立ち上がり、

「やあ、待っていたよ」

片手を上げ、ケイを歓迎する素振りを見せる。

昼間は穏やかに晴れ渡っていたのに、夕方から風が出てきて、外は真冬の寒さだ。町ゆく人たちは、皆コートの襟を立て、体を斜めにして必死に北風に逆らって歩いている。

「寒いから、近くに行きましょう」

商店街のアーケードを抜け、ホテル近くの焼肉屋に入った。

下村と向かいあって座ると、徐々に、昔の残像が目の前の男と結びついてくる。

「いやあ、吉川さんと会うなんて、何年ぶりだろう。……でも全然変わらないね。スタイルも顔も」

「何の進歩も変化もないってことでしょう。いつまでたっても子供っぽいんです」

「結婚は？」

「まだ一人なんですよ」

その時、下村の目がギラリと光った。

「いや、いつまでも若さを保てるっていうことはすばらしいよ」

明るくてきぱきとした物腰は、かつてと変わらない。その容姿だけが、年をとったのだろうか。いや、顔をつき合わせていくうちに、若い頃と少しも変わらぬ、まぎれもない下村自身であることをケイは感じた。

「下村さん、すっかり貫禄がついて立派になったわ」

ケイの言葉に、下村は満更でもなさそうな笑顔を見せる。

「……そういえば、正月に大沢の奴、うちに来たんだ。彼と会ったのも四年ぶりくらいかなあ。大沢くんもいろいろあったけど、昔と変わらないね」

よく食べ、よく飲み、唾を飛ばしながら喋る意気軒昂な下村は、快活なサラリーマンそのものである。

「私も、この前大沢さんと会って、下村さんの話が出たんですよ。……マンションを買ったんですってね。下村さんは素敵な奥さんと可愛い子供さんに恵まれて、順調に出世しているって」

「いやあ、今の時代、明日はどうなるかわからないよ」

「コンピューターの会社なんて、花形ですもの」

「うちの会社だって、いつ潰れるかわからないし、僕だって、いつリストラにあうか。時代が変わっているから、今までと同じ考えやり方では生きていけないよ」

なつかしさも手伝って、世間話に花が咲く。食事が終わると、

「もう一軒、付き合ってくれないかな。久々の再会を祝おうよ」

半ば強引に、ケイはカラオケの店へ引っ張っていかれた。

旧友とともに、したたか酔ってカラオケを唄うのも悪くはない。ケイもかなりリラックスしていた。下村は口調も歌いっぷりも堂に入ったもので、てきぱきとしている。サラリーマン生活で培った下村特有の処世術が見え隠れする。

「吉川さんは、憧れの的だったからな」

酔った口調で、からむように下村はいう。

「とんでもない」

「いや、S君と付き合っていなければ、僕も立候補したかもしれないのに。吉川さんのことは気になっていたのに。でも十年以上たって、偶然に再会するなんて、僕たち何

かの縁があるのかもしれないね。……僕は、過去の因縁とかにこだわるタチなんだ」

思わせぶりなセリフを吐きながら、下村はケイの手をとり、

「きれいだね」

と耳元に囁く。大きなお盆のような、下村の真ん丸い顔が間近に現れ、ケイは思わず吹き出してしまった。

「何かおかしいかい」

「昔のことを思い出したのよ」

「学生時代のこと？」

「ええ、一人でフラリと中近東にでかけたり、下村さんは行動的な人だったことを、急に思い出したんです」

そういえば、学生時代から垢抜けない男だった。外国生活で少しはスマートになったかと想像していたが、相変わらず容姿も振る舞いも田舎紳士みたいだ。さらに若い頃に比べて、世間ズレした厚かましさが加わったのだろうか。

「昔の話はやめましょう。…今の話を聞きたいわ。下村さんの家って、どんな家庭なの？　専業主婦の奥さんに、小学生の娘、マンション買って、絵に描いたような家庭なのかしら」

「そう、皮肉めいたことをいわないでくれよ。普通の退屈な家庭だよ」

酔いが回ったのか、下村はケイの肩にしなだれかんってくる。その厚かましい態度に、ケイは嫌悪感を覚えた。

「子供ができたら、女房なんて女じゃなくなっちゃうからね」

「あら、大沢さん、すごく美人の奥さんだって、うらやましそうにいっていたわ」

「隣の芝生はよく見えるものなんだ」

外に出ると、ケイの肩に手を回して、ますますベタついてくる。

「きみの部屋まで行っていいかな」

そんな露骨な言葉を吐きながら、ケイに抱きつかんばかりのだらしない格好になって、

「まあ、明日にさしつかえるでしょう」

冷ややかな口調でケイが答えると、

「じょ、冗談だよ。……吉川さん、十年ぶりに再会したからって、僕を誘惑しないでよ」

あっけらかんといいのけるそのふてぶてしさに、ケイの頭のなかには大沢の顔が浮かんでいた。大沢は、こんな醜態を晒す男ではないはずだ。

「でも、東京でまた会ってくれるね」

名刺を手渡すと、下村はそそくさと帰って行った。

ホテルの部屋に戻ったケイは、腹をたてながら寝支度をした。

大沢が繰り返しいっていた〝うまくやっている男〟とはこういう類を指すのか。いや、違う。下村のような男に比べれば、大沢はもっと紳士的でわきまえている。爪先だって意気ばってみせても、その心情は以外とやるせなく、むしろ下村の方が哀れなピエロのようではないか。ケイは下村の悲哀を感じていた。

次第にケイは、現実とはこんなものなのかと、落胆と安堵の入り交じった不思議な気持ちになっていた。過去の出来事は、いつまでも美しく懐かしい思い出として残っているけれども、過去を現実に引っ張ってみると、案外たいしたものではないのかもしれない。あれこれ頭で想像しているのと現実にはこんなにも落差があり、下村のような俗物に比べたら大沢も満更ではないと、いつのまにか大沢を見直している自分を感じた。

今、ケイの頭のなかでは、無声映画に音が加わったような感覚で、学生時代の記憶がより鮮明に甦っていた。

Sと下村は積極的で強引な、似たようなタイプの男であり、押しの強い彼らに比べると、大沢は正反対のおとなしい男だった。ケイは、下村やSみたいな強引な男に反発を感じ、大沢のような穏やかな男にひかれているのだろうか。だからこそ、大沢とこれだけの長い年月付き合ってこられたともいえるのだ。大沢は、確かにおとなしくて弱いところがあるけれども、女の言い分を聞く耳を持つ、落ち着いた男にはちがいない。もしもSと再会したとしても、今夜、ケイが下村に抱いたのと同じ気持ちに陥ることだろう。

大沢は、ただ単純に下村の家庭を羨ましがっているのではないのだ。

本心は、ケイと結婚して下村のような家庭を築きたいと思っているのに、そのことを口に出せずにいる。ケイに対して、結婚してくれと正面からはっきりいうことのできないのが彼の弱さであり、ケイが大沢に物足りなさを感じているのは、彼のそんなナイーブさのためなのだ。しかしその弱さも裏を返せば、大沢特有のやさしさだといえるのかもしれない。

下村に比べれば、まだ大沢の方が、若さや身軽さ、純粋さを失わずに持ち合わせている。現実の下村と会ったことで、過去の幻影が吹っ切れていくかもしれない。そう思えた時、ケイの心のなかに、一瞬、梅雨の合間の晴れ間のようなすがすがしさが駆け抜けた。

思わず、ケイはベッドの横の受話器を取り、大沢に電話をしていた。

「吉川の方から電話をよこすなんて、珍しいね」

いつもの大沢の淡々とした低い声が、耳朶をくすぐる。

「あのね、びっくりするようなことがあったのよ」

「何？」

「秘密……今度会った時に話すわ」

「お酒でも飲んでいるの？　声がやけに大きいし、陽気じゃないか」

「面白いことがあったの」
「それだけじゃ、わからないよ。何があったか話してくれないかな」
「あててみて」
わざとじらすようにケイはいう。
「何のことだか、全然わからないよ」
「未来に進むために、私は過去を呼び戻したのよ」
「そんな謎説きみたいな言い方しないで、早く話してくれよ」
「あのね、偶然、下村さんに会ったのよ。飛行機のなかで」
一瞬の沈黙の後、大沢は言葉を続けた。
「へえっ、すごい偶然だね。あいつ、大分変っていただろう」
「下村さんと夕ご飯食べて、カラオケにまでいっちゃった」
「……ああ、それでわかったよ。だからご機嫌なのか。下村と会って気分が良くなったんだな」
上機嫌のケイとは反対に、大沢は不機嫌そうな声を発する。
「そうじゃなくって……」
プツリと電話が切れた。大沢は受話器を置いてしまったらしい。
大沢の声を聞いて安心したくて、ケイは電話をしたのに、大沢は何を思ったのか、この電話の意味を逆に解釈してしまったようだ。
(まったく、私の気持ちがわからないのね)
一方的に電話を切られたことに苛立ちを感じながら、ベッドに横たわったケイは、すぐに眠りに落ちた。
翌日は、一月とは思えないほど暖かく、春を思わせる穏やかでいい天気となった。前日に引き続き、市内のミステリーゾーンを数ヶ所回って撮影すると、ケイとカメラマンは夕方の飛行機で東京に戻った。
その晩、大沢から電話はなかった。誤解をそのままにしておくのはよくないと思いながらも、仕事の忙しさにかまけ、ケイは電話のダイヤルを回さなかった。それに、電話を切ったのは大沢の方である。ケイがいやじいことを言ったわけでもないし、ケンカをしたわけでもない。向こうからかけてくるのが当たり前ではないか。そう思って、つい先伸ばしにしていたのだ。
一週間、大沢は沈黙を守っていた。さすがにケイは気になり、仕事の手が空いた平日の夕方、大沢の会社に電話を入れた。
「大沢は、退社しましたが……」
電話に出た女性社員の口から、予期しない答が返ってくる。
「えっ、いつのことですか?」
「少々、お待ちください」

茫然としながらケイが待っていると、電話の相手は大沢の上司らしき男に変わったようだった。
「大沢君は先週、家庭の事情で、急に退社しました。……うちでは、それ以上のことは申し上げられませんので」
仕事が趣味のような会社人間の大沢が、どうして突然、会社を辞めたのだろうか。退社するなどおくびにも出さなかったというのに、一体、何が起こったのだろうか。ケイには話せない、何か事情があったのか。彼の母親に、それとも大沢自身にか。腑に落ちないケイは、すぐに大沢の家に電話をした。本人が出るだろうかと、不安にかられながら受話器を握りしめたが、呼び出し音が虚しく響くだけだった。
その夜、ケイは大沢の家を訪ねた。十時を回っていた。一度だけ、車で送り届けたことのある大沢の家は、ケイの家から車で三十分ほどのところにあった。環七を少し入った路地を、地図を見ながら記憶をたよりに車を進めて行くと、見覚えのある木造のアパートが見えてきた。
「ここだわ」
はやる気持ちを抑えながら、ケイは恐る恐るアパートの敷地に入っていく。一階の四つの扉の一番奥のドアに、大沢と表札が出ている。玄関横のガラス窓から、ほのかに灯りが洩れている。なかに人がいるようだ。ケイは気持ちを落ち着かせるために、大きな深呼吸を一回してから、ドアを叩いた。
「ごめんください」
しかし、返事はない。ケイはもう一度深呼吸すると、先ほどより激しくドアを叩き、大きな声を出した。
「ごめんください。大沢さん」
しばらくの沈黙の後、人の動く気配がしてドアが開いた。出てきたのは小柄な老婆であり、大沢の母親らしかった。
「私、由紀夫さんの友人の吉川といいますが、大沢さんはいらっしゃいますか」
ほの暗い電灯のもと、母親の表情はよくわからなかったが、顔つきは陰気だ。俯いたまま、なかなか言葉を発しない。言葉がみつからないケイが、
「あの……会社を辞めたと聞いたものですから、直接、お伺いしてしまいました」
すると母親は、顔を上げてケイを冷たい眼でにらんだ。しかしその目は、すぐに宙を舞い、視線の定まらない虚ろなものに変わった。
「……由紀夫は、……由紀夫は亡くなりました」
そういうなり、くるりと後を向いてドアをばしゃんと閉め、家の中に入ってしまった。途端に、それまで張り詰めていた神経や全身の力が一瞬にしてはじけ、ケイは激しい眩暈に襲われた。訳がわからずに、ドアを叩きながら、
「どうして? 由紀夫さんは、どうして亡くなったのです

か？話してください」

問いかけるが、返答がない。しばらくドアを叩き、母親を呼び続けると、

「会社のビルから、飛び降りたんです。……帰ってください」

嗚咽が聞こえてくる。

（私のせいなの……私が下村さんと会ったから？まさかね。……どうして、こんなことになってしまったの。大沢さんて、なんてバカな人なの……）

ケイの両頬に涙が伝わった。ケイはその涙を拭おうともせず、よろめくような足どりで夜道を歩き始めた。街頭だけが青白く光る路地には、誰も歩いていない。と、その時、後からコツコツという足音が近づいてきた。振り向くと、背広姿の男が歩いてくる。

「大沢さん、大沢さんね。やっぱり、元気だったのよねえ」

ホッとしながらケイがそう呼びかけた瞬間、男の姿は跡形もなく消えていた。

見上げると、真っ暗な空を雲が流れていく。風が出てきたようだ。冬の冷気がケイの全身を撫でるように包み、鋭利な刃物で切り刻まれたように、胸がヒリヒリと痛む。

学生時代からひきずっていた青春の残滓が、今燃え尽きたことを、ケイははっきりと感じていた。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

「かんだ」有情（うじょう）

―新天地時代―

大和禎人（おおわよしと）

ひら仮名で「かんだ」と呼ぶ訳あいは険しい世相の中にそこだけは優しく、若い人たちにとって貴重な小天地が存在した事実を炙（あぶ）り出そうための筆者の配慮である。「新天地」と呼ばれた一角がそれである。神田神保町、すずらん通りの裏道を占めて若者たちの足繁く通った世界がそこにあった。学生の町に相応しく、折からの世情に叛くかに一時代の殷賑を見たのだった。まさに呼んで「新天地」、穏やかにその世界を指して、ここではさりげなくその所在を「かんだ」と呼びたいのである。

それは昭和十年前後の頃という昔話である……。

純喫茶と呼ばれる店が一時期の繁栄を見、櫛比（しっぴ）したのだった。ルンバ、タンゴといったその頃欧米で流行を見た舞踊曲が店の外にまで流れ、若者を誘うのであった。やがては敵性音楽として指弾される予見は不思議なことに気配すらまだなかった。

ウェートレスは美人揃い、婀（たお）やかなサービスをたてまえとして人気を呼んだものだった。

客の人影を見ると扉を開けて、巧みに誘い入れる。客筋は学生とは限らないが、営業時間の昼日中、学生街を控えて、当然そうした立地を当てこんだ営業だから大方の客はそうした関係にしぼられる。

純喫茶と、純を冠し、それを誇りにもした商売だからメニューにはアルコール類はない。少なくとも若い学生紳士たちを相手の商いである。

ウェートレス採用には苦心があったと想像され、良家の子女とは言わないまでも、気品と教養を具え、酔客を相手としない条件のもとに、営業時間も宵の内に限る条件で採用するなど、経営者の腐心があったはずである。

東京中の喫茶店は約一万五千、その中にいわゆる純喫茶といわれるものが三千、そこに働く女性は五万という数にのぼる。東京全市を通じて喫茶店のない街はない。最近はコーヒーなど

を飲ませ古典音楽や軽音楽のレコードをかけている、いわゆる純喫茶が続出しているが、これがバーやカフェから転じた特殊喫茶、社交喫茶と区別されて、独立して存在しだしたのは、もうかなり前からである。

（明治・大正・昭和世相史）

カメレオンのY、ビリケンのKの二人はこの「新天地」の常連だった。「白門」という私大の夜間部の学生だったから、精勤をこの方面に振り向け、程よい精神の高揚を図り、ひっさげて夜の講座を受けるため駿河台の坂を登るという毎日に恵まれていた。

「おい、ビィナスに新しい娘が入ったのを知ってるだろう、醫のある、チビさんだけど、なかなか愛敬があって良い」

「うん、あれか」

そんな会話が交わされる。

「それはそうとして、Aのやつ、さっき青い顔をして学生課へ、赤紙がきたって言うんだ、気の毒に徴集延期の手続きをしてなかったらしい、うん、おれ今日は研究室に用があってお茶の水駅から一度大学へ寄ったのさ」

「Aがそうか、ノンビリしてるからな、そりゃあ痛棒だな、気の毒に」

「それから後、Aは応援団に取り囲まれて玄関ポーチに現れた、校歌、応援歌による壮行の即席セレモニーなんだ、近ごろ、珍しくないケースなんだろうな、大学の方の手慣れた処置さ」

「なるほどな、ござんなれというところか」

「人ごとじゃなく、おいらもそのうちかも、とくに君は甲種だから危ない」

「最悪、脅すなよ」

昭和十年徴集でKは胴長短足で丙種で、Kに譲る悔しさを抱えていた。この徴集翌年にはあの二・二六事件が突発しており、YやKに同じ中学仲間の一人、Sは反乱軍の渦中、麻布三連隊の初年兵として警視庁襲撃に与したかどで、事後処理の懲罰的意味合いで、関東軍に派遣され、同窓中の戦死第一号になっている。

さて、Yはその二・二六事件が勃発し雪に明けた朝、たまたま出勤の途上、事件の現場至近を通るめぐり合わせを体験することになる。

（ことによると流れ弾が当たるかも知れません）

翌朝になると、こんな穏やかでない緊急報道まで流れて、交通機関すべてが途絶。市民は声を呑んでラジオから繰り返し流れる戒厳司令官による（兵に告ぐ）という、悲愴なアナウンスを聞いた。蹶起部隊は反乱軍として鎮圧に踏み切られたのだった。

Yは中学校成績ではつねに五指に入る優等生だったが家の事情で府の雇員試験を受けて、D局に入り、大学は二部の予科に籍を置いていた。予科生は角帽資格に欠けたはずだが、あえて着用する茶気満に対し、一方のKは予科生らしい蛇腹の丸帽着用という相違があった。二人は親密だが、このへんにかれらなり信念の相違があった。二部学生は比較的フリーだったが、一般に学帽着用が当然の時代であった。

ところで二・二六事件当日の朝のことだが、Yの乗った日比谷行きの市電は錦町河岸まで達して、突然折り返し運転を告げられ、

「この先に喧嘩かなにか起こっているらしい」

一ツ橋を過ぎてから急カーブを左折したところに折り返しのポイントがあって、車掌は架線を切り替えるためのポール操作を急ぎながら、言い訳をした。

Yはそこから深雪を踏みしめ歩いて府庁の方向へ向かっている。和田倉門を通るところで、皇居外苑に剣付銃を構えて兵士らが立ち、前面にはコイル状のバリケードというものものしい光景を雪の舞う中、シルエットのように目撃している。ただならぬ騒擾のニュースはようやく庁舎に入ってから聞いた。事態に帰宅を促され、東京駅からまだ運行中の国電に乗った。だが、彼は家路をたどる前に次の神田駅で下車している。少々遠回りだが、新天地を目指したのだった。

「ムッシュー・Y」

Yの意中にあり、Yが独自にメッチェンと呼んで、Kとの噂話に登場する女性がドァーを開けて迎え入れてくれた。

「本日は休ませていただきます」

衝撃的な事件の報道で、多くは時ならず店を閉じて、新天地の一角は人影がなかった。それが当然の判断であったはずであった。だが、例外もあり、純喫茶街の対応はまちまちだったのだ。YとKが日ごろ愛用してやまぬ「ビィナス」は店を開けていたのだ。

間口わずか二間ほど、奥行きは二十間ほどあったろうか、たばこに煙む不健康な空間がそこにあった。

だが、尺土を占めるこの空間こそは若者たちにとって先行き不透明な時局の埒外に与えられた奇跡の楽天地なのであった。

「よく今日のような日に店を明けて…、ここまで必死の思いだった、ああ、来て良かった、Kは来なかったかい」

「ええ、お出でではありません」

さすがに客席は寥々としていた。

クラシックであれ、軽音楽であれ、レコードをかけて

室内のムードを高める。コーヒー通がいる。ココア党がいる。ことさら日本茶を選ぶ者もある。

クリームソーダ、ピーチエードとコーヒー党を尻目にチョッピリ貴族を気どる手合いもいる。

曲目のノミネートもクラシック通を任じた者がこれも少々得意気な声音でウェートレスに注文する。

しかし、若者たちの扇情ムードを誘う人気はやはりワルツであり、タンゴであった。この先何年かすれば抹殺されるであろうあの曲であった。その点ではクラシックにしても同然、風前の灯火の危うさにあることをかれらはまだ知る由もないのであった。

サービスにつとめ、狭い通路を遊弋してサービスにつとめる美女たちもまたさしずめ明日を知らぬ仇花だったのだ。ウェートレスたちが狭い通路を行き来する時、若者たちは熱っぽい眼差しで、その後ろ姿をひそかに追い求める。それとない姿態のうち、とくに彼女たちのピッタリと着こなしたタイトスカートの腰部あたりの曲線に魅かれ追いすがるのだ。

純喫茶というステージ上に身をおく彼ら若者たちにとって、それはせめてものこと、つつましくも許されたいじらしいエチケットの範囲なのだ。あくまで紳士でなければならない、純喫茶の純という一文字の魔力に縛られた神妙さであった。言い換えるなら、この種の営業が成り立ち、時代の落とし子として、厳しい世相の淵瀬に一時期の繁栄を見た所以であったろう。

常連の指定席はほぼ一定している。飲み物を受け渡しする小窓の下、一番奥まって椅子を選ぶその若者は常連中の常連、哲学的瞑想に終始して無言のまま長時間を過ごす。おそらく開店一番の客であったろう。牢名主のように時折チラと新たな客と見ると、観察の視線を走らせる。ノート整理に時間を過ごす者、なにやらレポート用紙に忙しくペンを走らせる者、時には友人を待ち合わせる客、まさに若者の百態がここにあった。

片側一列、二人掛け十席、これが精一杯の配置だ。満席で二十人だが、客数は平均十人程度だ。営業採算を考えると、よくぞという感を免れない。気まぐれな時代の申し子であったろうか。

「おい、第二新天地が出来るの知ってるかい」

「そうらしいな、チラシを配っている、めでたい話じゃないか、おれたちの青春万歳だ」

予告は二、三件の店名を連名したチラシであった。すずらん通りから一ツ橋に向かって二側目の路地に出店するというものであった。

YとKは連れ立って踏査におよんでいる。

「モロッコ」という店がある、傑作だな、クーパーとディートリヒに会えるかもな、あれは武蔵野館で感激したよな」

「うむ、おれはあれから神田で二度目を見ている」

「東洋キネマでか、あれは傑作だった」

二人はご苦労にも実地踏査の労を惜しまなかった。

門構えの仕舞屋が玄関に至る通路一杯、多分母屋の玄関へかけてであろう。建築屋の手が入ってやり型の杭打ちが始まっている。運びこまれて積み上げてある資材を見ると、粗末さに驚く。施主はかならずしもこの家の主とは限らないであろう。

「女性募集、委細面談」

不動産屋が代行して資金主は多分背後に隠れているのであろう。

十五年戦争はついに日米が戦端を開き、太平洋を覆う戦略、死闘のあげくサイパン島失陥という致命的局面を迎え、わが本土空襲必至の戦況を迎えた。米国は昭和十八年末には「超空の要塞」ボーイングB29を完成していてわが東京まで約2、250KMの射程、最大時速580KM、航続6、600KM、東京まで往復十五時間、積載量10tという性能、B29一機がばらまく焼夷弾は3、840発だった。米空軍のこのB29による空襲は昭和十九年十一月二十四日に初空襲、以後執拗に空襲は繰り返された。B29に加えて艦上戦闘機グラマン、硫黄島からのP51戦闘機ムスタングの超低空機銃掃射が市民を恐怖に陥れた。最初に錦町二、三丁目方面、二十年春になって三崎町、小川町方面がターゲットにされた。

不幸中の幸いは古書肆街の中心だった神保町は難を逃れて、終戦を迎えている。非戦闘員市民の犠牲九四、二二五と記録される。

青春のつわものどもの夢の跡。「かんだ」に一時期簇生、出現した「新天地」、ついには第二「新天地」まで誕生を見たあの純喫茶群はいったい命脈をいつまで保ったのであろうか、その運命は定かではない。

府庁D局にあったYはあれから高文試験をうけながら一方、三菱重工業（航空機部門）の採用試験に合格し、名古屋に赴任している、時流に赴いた彼はそのために夭折の運命を招いた。肺を冒され、鎌倉に転地療養した束の間、昭和十六年一月、生涯を閉じている。Kは昭和十三年に応召し、南満ノ綏芬河（ポクラニチァ）駐留部隊に属したが、無事帰還、地方公務員の職に復し、先年没している。

（H一六・六・一七）

補註　東京都政の施行は昭和十八年七月一日。府庁は都庁、市電は都電に呼称の変化があった。

古い物・遠い夢

忠内正之

第九章　平凡な非凡手
―我が友「陶工保田君」―

この章は骨董に関する話ではなく、現代作家で極く親しい陶芸家保田君を紹介する。彼の古陶に迫まる程の作陶技量を評価すると共に真摯な生き方に心から共感を覚えるからである。

保田君は私と大学同期の卒業である。同窓生の中で陶芸を業としているのは彼のみである。尤も先輩では宮之原謙、藤原啓、沈寿官等著名な存在があるが近頃では希れである。

保田君は学術極めて優秀であった。特に簿記や会計学に堪能で大学在学中から母校の高校で教鞭を執るユニークな存在であった。大学の同期生にプロ野球の選手となり後に巨人のコーチとなって王選手を育てたA君が居たが、保田君はA君とは高校からの親友であったので野球練習に多忙なA君の学業の応援をしていた。時たま私の処にも影響が来て代返等を引き受けた事もあり、当時希少価値だった早慶戦の入場券を貰う等の恩恵に浴したこともあった。A君が無事卒業出来たのは保田君の協力がかなり貢献しているものと思う。想えば貧しくとも心はゆとりの持てる良い時代であったが就職難であった。

保田君は大学に残って教師への道を奨められたが家庭の事情もあって固辞し逸早く当時トップクラスの精密工業会社に就職した。彼の替わりに助手となった同級生は後に教授、部長と進み褒章を受けている。

入社するや保田君は得手の会計学と経営学を生かして管理部門で重用され活躍していたが、不幸にして勤務先が会社更生法第一号になってしまった。(現在は立派に再建されている)再建策を企画実行した彼は多数の社員を整理した心の責めを負って自らも辞任してしまった。会社は彼を必要としたのだが新経営者との確執もあった様だ。冷酷な合理主義に徹するトップと正義感の強い彼とは所詮合わなかったのであろう。

退職後十数年間は社団法人日本能率協会に勤めたり会社を設立してコンサルタント業務に従事して来たが、かなりの辛酸をなめた。昭和四十九年六月(当時四十五才)突然のように美術陶器製作に入る決意をした。もともと画家志望ではあったが、戦後の家庭事情から諦めて商業科へ進んだのであってかねて美術にあこがれていた。たまたま美術陶器や陶土の美しさに触れるチャンスがあり之に魅せられてしまった。一度しかない人生ならば好きな事に打ち込んでみたいものと奥さんと相談の上陶芸への道を選んだのであった。

陶芸家への道を選んだものの決して平坦な道では無かった。まして素人が中年からの転職であったので困難を極めた。経済面でも技術面でも大変な苦労をした。陶芸家としての心得は「宮之原謙」に、そして技術面は日展系作家「山本正年」に師事したがいずれも短期間であった。彼の言に依ると人の数倍は努力したと言う。陶窯も自分で設計製作にあたり、幾度か失敗したのち出来上った。数十種類に及ぶ釉薬も研究開発した。理数系に強い特性を生かしコンピューターを駆使して多種類の絶妙な色彩を出す事に成功した。そして遂に念願であった木の葉天目焼成を実現した。(註)

平成五年飴釉木葉天目平茶碗を三井の小山五郎氏に納入することが出来た。更に木葉天目の美しい作品がより高度で新鮮な形で生まれ續け中国や台湾から技術指導の要請を受けた。特に平成八年台湾からは国立国父紀念館で日本人初の個展が実現する等国際的評価が国内に先行するに至った。平成十一年五月「黒橘皮釉木葉天目大皿」の大作を母校會津八一記念館に作陶二十五年記念として贈呈した。この作品は極めて完成度の高い出来で記念館に永久収蔵とされ随時展示されている。

(註)(「木葉天目」は陶器表面の釉の上に「木の葉」そのものを直接焼き込んで模様としたもの。窯内で木の葉が燃えて灰となりその灰が釉に溶け込んでその部分の陶質が変り発色も変化して葉の模様が表面に現れたもの。)

木葉天目は中国の宋代に江西省吉州窯で茶碗として焼かれたが宋王朝の滅亡と共にその技術も滅亡し幻の技術となっていた。保田君はその技術の再現に成功した。なお現在大阪市立東洋陶磁美術館に重美指定の木葉天目茶碗(本歌)が所蔵されているので参考まで。

私が彼と再会したのは十五年程前である。日経新聞のコラムに彼の事績に対する賞讃の記事が載ってたのを讀み驚ろいて日比谷のギャラリーに足を運んだ際である。深く刻まれた顔の皺、腕や手の厚さ等に彼が嘗めた辛酸の度合いを知った。その時柿釉の抹茶茶碗を購入したのが始めで、その後毎年秋に開かれる展示会は欠かさず出

かけている。

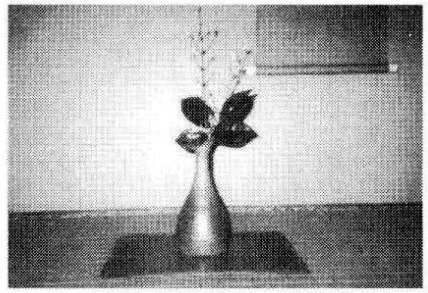
三年前から認められてMデパートで毎年個展を開ける様になった。漸やく陶芸家としての遅咲き乍ら道は開けて来たが矢張り経済面では楽ではなさそうである。実力はあっても世襲作家と違って地バンも看バンも無い。まして中年からのスタートである。又彼の持つ生一本な性格から業界既成団体の特異な体質になじめず一匹狼を續けている立場としては更に険しい道の様である。昨年房総の上総一宮に移転し新しく築窯も出来たので落ち着きを見せた。今年の秋は新しい芸域を見せて貰えるものと楽しみにしている。

彼の作陶ジャンルは多岐に亘り備前・志野・瀬戸・唐津・信楽・青磁等何でもこなす。轆轤は極めて上達である。釉薬も多彩で既述の天目釉・柿釉・灰釉・織部釉等を使って練達度の高さを示す立派な作品を焼成している。

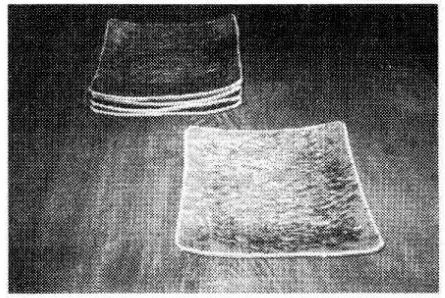
毎年開かれる個展には欠かさず駈けつけているので私宅に作品はかなり溜っている。志野水指・瀬戸黒花入・粉曳茶碗と徳利・柿釉の茶碗・青磁茶碗・木葉天目のぐい呑、等々である。妻の茶会の数茶碗をお願いしたこともある。

一昨年は信楽の花入、昨年は織部の四方皿セットを購入した。(当初は友情からの協力であったが後では彼の作品の素晴らしさに圧倒されての執心となった。)写真掲載の品である。信楽の花入は端正な出来で本人も自信作との由。織部の四方皿はどっしりとして重量感がある五枚組。釉薬のテクニックを駆使しての快心作と認められる。

余談だが過日Sデパートの美術品賣場に、永仁の壺を造ったと称されるある極めて高名な物故作家作の織部皿五枚が並べられていたが造形は弱々しく色調の上りも今一つで失望させられた。(若年時代の作でもあろうか?)しかも賣値は保田氏の作品に比べ約五〇倍の高値であった。桃山古陶の絶品ならばとも角近代作家が唯高名なだけで法外な値がつくことは(多分賣れないとは思うが)、「目利き」の少ない世の中とは言え極めて理不尽だと思われる。



信楽の花入



織部の四方皿

私をはじめサラリーマンとなった同期生たちは極く一部の人物を除いて既に第一線を退いている。こののち保田君は毀誉褒貶にこだわらず宮之原先生から受けた教訓「どこまでもアマチュアリズムに徹しなさい」との金言を守って生涯現役として着実に作陶に励むものと思われる。

保田君は本来画家志望であっただけに絵が巧みである。書の方も達者である。今後はこの特技を生かし更に作品に新味を出して欲しい。思うに保田君は天才とは言えないであろうが中年から斯業に入っての涙ぐましい迄の努力と研鑽によって磨かれた逸材である。加うるに作品に人柄が強く投影して品格を高めている。私は平凡にして非凡手保田君の一層の活躍発展を念じてひき續き惜しみない声援を送りたい。



春のミニ花火ショー

吉田忠雄

一　はじめに

足利の夏の花火大会は百年の歴史を持ち、地方の花火大会としては、質、規模、観客動員数いずれをとってもなかなかのものである。毎年八月の第一土曜日に広い渡良瀬川河川敷で打ち揚げられ、約三十万人の観客を動員する。

十号玉（直径三十センチの花火玉）とスターマイン（速射連発花火）のコンクールが行われ、栃木県と茨城県の花火師がこれに参加する。

昨年は、一発二万円の奉納花火の寄付が募集され、すぐに売り切れた。女性アナウンサーが寄付した人の住所氏名と奉納の目的、たとえば「山田太郎さんと愛子さんの結婚を祝して」を放送し、最後に「ご奉納！」と叫んで、奉納花火が打ち揚げられた。これが観客、特に子供を喜ばせた。

昨年はまたミレニアム花火と称する一連の花火が、コンクールとは別にうちあげられた。そのストーリー性、個々の花火の良さ、全体の個性が素晴らしいものであった。

この足利の夏の花火とは別に春のミニ花火ショーが昨年計画され、実施され、今年二年目を迎えた。二宮金次郎の信奉者であるわたしは、この花火を密かに推譲花火と呼んでいる。これらの花火は、分度を守って生活し、余剰金を得た有志が推譲の気持ちでお金を出し合って成立した花火大会であるからである。市民に喜んでもらい、町の活性化に役立てばとの思いではじめられた。

同じく二宮金次郎の信奉者である「二宮金次郎の一生」の著者三戸岡道夫先生と福田昭夫栃木県知事からは励ましのお手紙をいただいた。

二　いきさつ

平成十五年の早春、足利の花火師須永幸彦さんが私のところに訪ねてきた。毎年四月の第一日曜日に行われている足利工業大学「風と光の広場」花見大会に合わせて、その日の夕方に「春のミニ花火ショー」をやりましょうという提案であった。

足利に須永花火という花火会社があることは前から知っていた。しかし親しい付き合いはなかった。約十年前に私が足利花火大会のコンクール審査委員長を務めるようになってから、徐々に親しさを増していった。しかし、審査委員長としては、他の花火師に対して不公平にならないように心がけてきた。

毎年十一月のはじめに行われる足利工業大学の学園祭であるわたらせ祭では、その後夜祭で毎回須永花火に頼んで花火を打ち揚げている。二年前のこの花火打ち揚げをより有意義なものにしようと思い、須永花火の副社長で打ち揚げ担当の須永幸彦さんに相談した。

須永幸彦さんは熱心な花火師で、この学園花火をより良いものにしようと提案してくれた。調べてみると、須永花火は日本を代表する技術花火大会の土浦花火大会や大曲花火大会の各部門で優勝や入賞したりしていることもわかった。

平成十四年のわたらせ祭後夜祭の花火は立派なものであった。私はこの花火にマイクを使って解説をつけた。しかし、当夜は寒さが激しく、きつい頭痛がして、途中で私はしゃがみこんでしまった。非常に残念であった。平成十五年のわたらせ祭後夜祭の花火は、体調不良のため見られなかった。

「春のミニ花火ショー」の提案に対しては、私はまず「大学からは金は出ません」といって断った。ところが須永さんは、「打ち揚げ費用は須永花火で持つから、主催者として名前を貸して下さい」といってきた。私は二十万円のポケットマネーを出して承諾することにした。

この件は、足利工業大学「風と光の広場」花火大会の共同主催者である学校法人足利工業大学理事長岡平悟朗さんに報告した。岡平さんは「二人で半分ずつ負担しましょう」と言ってくれた。

結局二人で各十万円ずつ拠出し、岡平理事長と吉田学長の共同主催とし、実施者は須永花火ということで話はまとまった。後で須永幸彦さんから聞いた話では、この花火ショーは二百万円かかったということであった。

三　第一回春のミニ花火ショー（平成十五年早春）

花火打揚に当っては監督官庁の許認可が必要である。栃木県、足利警察署、足利市消防署、国土建設省渡良瀬川管理事務所、足利市公園緑地課、足利市公園緑化協会の許認可を受けた。このためにこれらの機関の担当者と

ともに現地調査を行い、花火会社が説明を行った。

いろいろな質問が出た。花火会社の担当者は根気良く説明した。又近くの住民に対する説明が必要なことも強調された。これに対しては、花火会社がチラシを作り、自治会長さん宅を訪問して了解を得た。

花火大会を開催して一番負担の大きいのは警察と消防である。交通整理と火災対応である。このことは隅田川花火大会や夏の足利花火大会で私も見聞してきた。又昔花火の保安距離を決める実験の委員長を務めたとき、警察関係者の発言が重きをなしていることを感じてた。

渡良瀬川南岸の二本杉そばの花火打揚会場予定地での関係官庁の人々との話し合いの中で、警察関係者から足利工業大学応援団の応援が得られないかとの打診がなされた。

隅田川花火大会では、商店街の人々が交通整理の応援を買って出ている。足利花火大会では多くの市民が花火大会の跡の片付けを買って出ている。

足利工業大学の応援団はユニークな応援団である。スポーツ大会の応援よりは、社会奉仕で有名である。老人施設の慰問、チャリティ活動、公共活動への協力など社会奉仕活動をしてきた。

それらの活動は評価され、足利市長表彰、足利市福祉協議会長表彰、日本善行会長表彰などを受賞してきた。私は、足利警察署も見るところはよく見ているなと感心した。

最終的には、警察の交通整理に足利工業大学の応援団を出したことで警察が許可を出してくれることになった。他の諸機関もこれに習った。

いよいよ平成十五年度「春のミニ花火ショー」は晴れて開催の運びとなった。当日は晴れで、桜は満開であった。ただ、気温は上がらず、風がやや強かった。十一時から始まった「風と光の広場」花見大会は成功といってよかった。

外から来た花見客は、午後三時ころ会場をニューミヤコホテルに移し、適当に時間をつぶし、午後五時から宴会場で二次会が始まった。メンバーは東大吉田研究室グループ、火薬学会グループ、法政吉田研究室グループ、足利小・中・高校卒業生グループと水曜会グループであった。私は花火会場に行くために中座した。

定刻七時に待望の「春のミニ花火ショー」が始まった。打揚場所は、渡良瀬川中橋と渡良瀬橋中間南岸の通称二本杉近くの河川敷公園である。

約二十分間かなりの量の花火が打ち揚げられた。ミニ花火ショーは地上付近で開華するものが多く、大型花火大会では見られない趣がある。

隅田川花火大会でも、保安距離の関係で五号玉（直径十五センチ）までの花火しか打ち揚げられない。この場合は、遠くから見物する人も多いので、花火は高く打ち

揚げられる。

足利の「ミニ花火ショー」では河川敷が広く、近くから地上と上空を同時に見ることができる。私見では、足利の「ミニ花火ショー」の場合、上空で開く花火はあまり高く上げないほうがバランスが良いように思われる。

当夜は西風が吹き、やや肌寒い夜であった。

平成十五年の「春のミニ花火ショー」はかなりの反響があった。実際に見た人は「良かった」といってくれた。見ることのできなかった人からは「事前に広報をしたほうが良い」と忠告を受けた。翌日には一つのメールが入った。「家に花火の燃え殻が落ちた。安全は大丈夫か」というものであった。これに対しては須永花火師と相談し、その家に説明に行ってもらった。

四　第二回春のミニ花火ショー（平成十六年春）

平成十五年の第一回の「春のミニ花火ショー」は無事終わった。しかし、須永花火には費用負担の借りが残った。平成十六年の第二回の「春のミニ花火ショー」でこの借りを少しは返さなければならない。しかし無理はしたくない。

思いついたのは足利で新しくできた友人たちである。私は足利で生まれ、小、中、高校を足利で過ごした。その後、東大学生、日本化薬社員、東大教員、法政大教員と約五十年間足利の外で過ごした。

五年前に足利の恩師の招きで、足利短期大学の学長になり、その一年後に偶然の縁で足利工業大学の学長になった。

仕事の縁で、学校法人足利工業大学理事長の岡平悟朗さんと親しくなった。新米の足利短期大学学長は困ったことやわからないことがあると何でも岡平理事長に相談した。理事長は親切に対応してくれた。

足利工業大学の学長と理事長は大学の運営について意見が合い、良い協力関係を作ることができた。そんなことで「風と光の広場」花見大会も食べ物は岡平理事長、酒は吉田学長が負担して、共催してきた。

私は約十年前に夏の足利花火大会のコンクール審査委員長となり、そこで同副委員長の両毛新聞社長の岡部功さんと親しくなった。岡部さんは私の中学、高校の二年後輩で、そう言って私を立ててくれる。それからいろいろなことでお世話になっている。

岡部さんは野球やソフトボールの現役選手で、今でも毎日曜日どこかでプレーしている。私も一度岡部さんのチームで試合にださしていただいた。幸いにヒットを打ち面目を保ったが、ついていくのは無理だと悟り、それ以来野球の付き合いはやめた。

岡部さんは老人施設を二つ経営する福祉法人の理事長でもある。また両毛育英会の理事長でもある。この方面では私もささやかな協力をさせていただいている。

もう一人の新しい友人は、足利市駅前のニューミヤコホテル社長の小幡洋次郎さんである。小幡さんは旧姓上武で、知る人ぞ知る東京、メキシコ両オリンピックのレスリングの金メダリストである。

四年前、小幡さんと私は、足利市とスプリングフィールド市の姉妹都市締結十周年を記念した訪米団の一員としてスプリングフィールド市を訪問した。小幡さんは足利市の教育委員長として行かれた。私はスプリングフィールドにあるイリノイ大学スプリングフィールド校とリンカンランド・コミュニティ・カレッジとの姉妹校協定締結のために行った。

話はそれるが、現在日朝交渉の立役者である藪中三十二外務省アジア太平洋局長（当時シカゴ総領事）がカレン・ハサラ・スプリングフィールド市長と共に姉妹校協定締結調印式の立会人となってくれた。

小幡さんとはこの旅行で親しくなった。帰国後足利短期大学で学生の為に、小幡さんがいかに高校時代レスリングで一流選手への道を歩んだか話してもらった。また、志まやという蕎麦屋で毎水曜日に開かれる気の置けない人たちの飲み会、水曜会に入れてもらったりするようになった。

この三人に相談したところ話は簡単にまとまり、まず、この四人が発起人となり各十万円ずつ拠出することにした。そして、会の名前は岡平理事長の提案により「春の花火を楽しむ会」とした。四人が分担して、それぞれの知人から計百万円を目標として募金の有志を募ることにした。

まず、水曜会のメンバーである石川尚志足利ガス社長に小幡さんと私で頼み快諾を得た。石川さんは小幡さんの早稲田大学の一年後輩である。安全運転管理者足利地区協議会の会長で、私も足利工業大学の学長として石川会長から交通安全の表彰状を貰っている。

浅沼会計という会社の女性経営者である浅沼公子さんには岡部さんと私でお願いした。そして直ちに快諾していただいた。浅沼さんとはある新聞社の座談会で岡部さんと共にご一緒したのがお付き合いの始まりである。

その後浅沼さんが発行している「活力経営」という雑誌に寄稿を頼まれ、「教訓から得たいくつかの教訓」という文章を載せていただいた。熱心な経営者として尊敬している人である。

もう一人の賛同者は、足利赤十字病院院長の福内靖男先生である。福内先生は一年前に慶応大学医学部教授から前任者奈良昌治先生の推薦でこられたスマートな紳士である。

赴任直後に私は行き付けの飲み屋で福内先生と偶然にとなり合わせた。これで福内先生は酒が好きなことがわかった。その後そこでは会っていない。

つぎに福内先生の人柄に触れたのは、前足利警察署長

が辞めるときである。私たちは「足利警察官友の会」でたまに顔を合わせる。そのとき福内先生は私のところに来て、「吉田先生、ふたりで木村署長の送別会をやりませんか」と言ってきた。私にはいやもおうもない。「はい、やりましょう」と答えた。「ただし、費用は二人で割り勘ですよ」と言ったところ、「勿論です」と言う答えが返ってきた。

私は、福内先生が足利の社会に溶け込もうとしている意気込みを感じた。これが福内先生に迷惑を掛けるきっかけとなった。すなわち「春のミニ花火ショー」の賛同者として出資をお願いしたのである。私は「足利赤十字病院としてではなく、個人でお願いできませんか」と言ったところ、「それなら賛同します」と言って、私たち発起人と同額を振り込んでくださった。

岡平理事長は関係者に働きかけてくれた。まず、真秀徹真進建設社長から賛同を得た。さらに真進建設傘下の各社からも分担賛同を得た。又足利工業大学同窓会並びに同会長、副会長、理事長からも賛同を得た。

さらに、両毛ヤクルト販売、足利商工会議所、足利信用金庫、ＪＴＢツアーズ、みずほ銀行、増田造園、などから寄付をいただいた。その他多くの方々から寄付をいただいた。

結局、推譲金は当初百万円の目標が百数十万円に達した。

資金についてはめどが立った。次ぎは花火打揚場所の使用許可である。

花火打揚げ現場の実地調査は、関係官庁立会いのもとに平成十六年三月二十四日十時から前回打揚げと同じ二本杉の近くで行われた。昨年既に経験しているので、この手続きは比較的順調に進んだ。

昨年の「春のミニ花火ショー」では、足利工業大学応援団が警察の交通整理に協力した。これが好評で、今年は警察に頼まれて応援団は地域安全のための地域パトロールをすることになっている。そんな事情もあり、警察からすんなりと許可が出た。その他の官庁からも許可が出た。

いよいよ四月四日、「風と光の広場」花見大会と「春のミニ花火ショー」の当日となった。自然は私たちの期待を斟酌してくれない。当日は朝から雨であった。夕方も天気は回復しないとの予報であった。

当日、私は朝七時半に大学に行き、関係各所に連絡を取った。まず、屋外での「風と光の広場」花見大会は中止し、総合研究センターの多目的室での「残念会」に切りかえることを岡平理事長と相談して決めた。また、このことを花見会場の世話をしてくれる田村晴勇さんに伝え、関係者に連絡してもらった。

夜の「春のミニ花火ショー」については、まず須永幸彦さんと相談した。ただちに、四月四日夜の「春のミニ

花火ショー」は中止が決定された。続いて須永さんと相談して次ぎの開催日は五月連休中ときめた。このことは岡平、岡部、小幡の各発起人に報告した。岡平発起人と相談して花火ショー中止の文書を作り、「春の花火を楽しむ会」全賛同者に手紙とファックスで通知した。数日後には両毛新聞紙上に広報された。

その後、足利商工会議所中島粂雄専務理事に電話して、五月連休の足利まつり期間中に「春のミニ花火ショー」をやっても良いかと打診した。「歓迎します」とのことであった。そして「人の多く集まる四月二十九日が良いでしょう」とのことであった。この情報はただちに須永花火師、全発起人に流し、次回は四月二十九日午後七時開催と決まった。

五　二度目の第二回春のミニ花火ショー

平成十六年四月十九日には、再度関係五機関による実地調査が行われた。前日の十八日には、打揚場所の前の川州の葦原が火事となり、その実地検証の為に消防士がきていた。タバコの吸い捨てによる火災だったらしい。

枯れ葦原の約三分の一が焼けていた。花火の火が飛び込んで、残りの葦原が燃えたら困るな、とふと思った。これが現実になるとは、そのときは思わなかった。

そのときの須永花火師の話によると、五月五日に足利の名所の一つである織姫山で花火を打ち揚げる予定があるそうである。林さんを会長とする織姫神社奉賛会が、織姫神社創立七十周年記念行事の一つとして花火を奉納するそうである。私は、足利の活性化につながるこのような行事が増えることは良いことであると思った。

花火打揚予定日前日の四月二十八日には、足工大建築学科の和田昇三教授と宇都宮駅で待ち合わせて、宇都宮工業高校の岡田義治校長を訪問した。岡田校長は昨年度足利工業高校の校長であったので、私も面識があった。

岡田校長は建築学の工学博士であり、宇都宮工業高校には他にも工学博士が何人かいるということであった。その中の一人の先生も加わって話が弾んだ。

折角宇都宮に来たので、作新学院高校の三つの学科に寄り、ご挨拶した。みなさん快く対応してくださった。

足利への帰路、途中にあるお得意様の佐野松陽高校の宇賀神校長を訪問した。宇賀神校長とは、先生が栃木工業高校の教頭をしておられる頃からの旧い付き合いである。いろいろとそれぞれの学校の事情を語り合った。

その日の最後の行事は足利警察官友の会で、会長交代式と新署長歓迎会であった。足利警察官友の会は、会員五十名にかぎられ、悪い人は入れない会である。安心して会に出られる。

年に一、二回開かれるが、会うのが楽しみな方がおおい。中でも谷二郎先生は、ご一緒してお酒を飲んでいるといつも楽しくなる方である。歳をとったらこういう人

になりたいと思っている。

先生は八十四歳の高齢であるが、警察医として夜中でも呼び出されれば警察に出向いて仕事をされてきた素晴らしいお医者さんである。さきに出てきた小幡さんや石川さんとともに私は谷先生を囲む人の一人にさせていただいている。

この方がたと飲む酒はうまく楽しく、必ず二次会になる。谷先生には中井さんというお付き武官がついている。この人を含めて谷先生の行きつけの店に行くことになる。酒好きの私としては、それはそれで楽しい。

四月二十八日は長い日であったが、午後十二時をもって終了し、翌日の「春のミニ花火ショー」を夢見て、ニューミヤコホテルの八〇六号室で床についた。

四月二十九日は快晴であった。ゆっくり起きて、ニューミヤコホテル九階のレストランで朝食をとる。眼下には渡良瀬川と河川敷の公園が見える。対岸の公園で今日の足利まつりのイベントが行われる。午前八時、イベントの準備をする人が集まってくる。食事をしているテーブルの窓からは見えないが、左方の手前岸の公園が今日の花火の打揚場所である。

十時に足利まつりイベント会場に行く。十時半から開会式。主催者足利商工会議所板橋敏雄さんの挨拶、続いて足利市長吉谷宗夫さんの祝辞があった。両氏とも小・中学校が私と同窓・同期である。

十一時、八キロの渡良瀬川堤防上を歩く「わたらせウォーキング」に出発。ゆっくりと歩く。途中に、昭和二十三年九月のカサリン台風による大洪水の受難慰霊碑がある。手を合わせる。中間点は父の故郷の近くである。昔は叔母や姉とともに墓参のため通ったところである。

約一時間半でコースを歩き終わり、イベント会場に戻り、完歩証をもらう。そこで缶ビール一缶と大きな焼き鮑を買い、昼食とする。そばで若者が水風船釣りの風船を作っていた。聞けば足利工大の都市環境工学科為国研究室のボランティア学生である。写真を撮り、あとで送った。

午後は花火の打揚げ現場に行き、打揚げ筒の写真を撮らしてもらった。一〇〇メートルの幅にわたって、ミニスターマインから四号玉までの十本組の打揚筒が、グループに分かれて配置されていた。

また枠仕掛花火の一メートル四方の木枠が五枚置かれていた。そのままではどのような図柄かわからなかった。後の打揚で「春のうたげ」とかかれていたことがわかった。

午後五時三十分、ニューミヤコホテルに戻り、小幡社長に頼んで軽く腹ごしらえをした。六時に足利市駅前交番に行く。そこには、交通整理の手助けをする足利工大応援団と同附属吹奏楽部の学生たちがそれぞれのグループに分かれて待機していた。それぞれをねぎらい、写真

を撮った。

それから、打揚現場正面の対岸の土手の上に行く。須永花火師と永井営業部長が、それぞれ、静止カメラとビデオカメラをセットして打揚を待つ。いつも手伝ってくれる甥の吉田豊もビデオカメラを持って待機する。土手の下には、地元わたらせテレビのカメラマンがビデオカメラをセットして打揚を待つ。発起人の岡平理事長も岡部社長も来た。

六時四十分、須永花火師の携帯電話による打揚開始指令により信号雷が打ち揚げられた。花火ショー開始の予告である。次に前座花火の青柳・花雷が三十発打ち揚げられた。

ここで問題が起こった。青柳の星約十個が燃えながら川州の枯草の中に飛び込んだのである。火が枯草に燃え移らなければ良いがと願った。しかし、現実には火の落ちたそれぞれの場所から枯草が燃え出した。

須永花火師は直ちに携帯電話で打揚現場に消火活動に入るように指示した。しかし、火災は延焼を続けた。直ちに、待機していた消防車が活動をはじめた。さらに市内から応援の消防車が駆けつけた。

七時三十分、打揚現場にいる警察責任者から須永花火師に電話が入る。花火ショーを再開するか中止するかの判断を求めてきた。主催者にも意見を聞けということで、私は主催者としての意見を求められた。岡平理事長と岡部社長の意見を聞いた。私に任せるとのことであった。

私は須永花火師とともに中橋を渡って対岸の打揚現場に急いだ。途中には足利工大の応援団の学生たちが所々に立ち、交通整理の手伝いをしていた。声をかけてねぎらいながら現場に急いだ。現場近くには、打揚現場付近の保安監視を手伝っている足利工大自治会の学生たちにも会った。声をかけてねぎらった。

打揚現場では、警察、消防の責任者と私たち四名で、現状をどう理解するか、どう対処するか相談した。そのときに、吉谷宗夫足利市長が現場に現れて、我々を励ましてくれた。問題が起こったとき現場に現れて関係者を励ます市長を見て見直した。

火災はほとんど鎮火した。しかし、約三分の一の枯草が残っている。火災に際しての最大の当事者である消防官の意見が最も大きな影響を与えた。消防官の見解は「花火ショーを再開すると再度火災を発生する可能性がある。再度火災が発生すると大問題になる」というものであった。

私は主催者の代表として、花火ショーの再開は無理と判断して中止を決断した。他の三人も同意した。見物人に対する花火ショー中止の広報は警察がやってくれることになった。「春のミニ花火ショー」は二回にわたって中止された。

ニューミヤコホテルに戻ると、友人たちはまだ宴会の

続行中であった。「吉田先生、がっかりしたでしょう」と慰められた。

翌四月三十日には、全国火薬類保安協会で会議があった。その会議の前に須永花火師に電話して、善後策を協議した。花火ショーを行うためには、焼け残った枯草を処理しなければならない。

枯草の屋外焼却（野焼き）は禁じられているとの話も聞いた。そういえば、家で買った家庭用ごみ焼却炉はしばらく使った後に使用を禁じられた。一方では、渡良瀬川遊水池の枯れ葦原では野焼きが行われている。また、奈良の若草山や山口の秋芳台では野焼きが行われている。

一方、四月二十九日の夜の席で、ある会社の人から、ブルトーザーを使って川原の枯草を処理したことがあるとの話を聞いた。早速、「春の花火を楽しむ会」の賛同者である真進建設社長の真秀徹さんに電話して、残った枯草をブルトーザーで除去する費用の見積もりをお願いした。

真秀社長は直ぐに現場に行き、概略の見積もりを教えてくれた。枯草を除去するだけで約百万円かかり、跡の整地を入れると更にかかるということであった。

次に吉谷市長に電話し、枯草が残っていると花火ショーができないので、枯草の除去に協力してくれるようお願いした。費用について市に要求することがなければ、協力しましょうとのことであった。私としては、この「春のミニ花火ショー」は、有志の推議金によって運営されるもので、その他からの金銭的な補助は受けないので、市に金銭的な負担は掛けないと伝えた。

須永花火師は先ず渡良瀬川管理事務所と交渉し、枯草除去の許可を得た。次いで、足利市消防署と交渉して、残った枯草焼却の交渉をした。その過程で、市役所の秘書課から消防署に電話が入ったそうである。

五月一日午前十時から約二時間かけて消防署が協力して、須永花火の従業員により残った枯草は焼却された。私は甥とともにこの焼却作業を見学させてもらった。

焼け残った枯草原の風下側のあるところからトーチによって点火された。ある地域が焼け終りそうになると、さらに風上に点火して、火炎量を調整した。各人ウオター・ジェットシューターという水袋を背負い、焼け跡の残り火を消した。

花火の残火火災のときはよく燃え、延焼した。焼却の目的で点火したところ、それほどよく燃えなかった。枯草だけが茂っているところと、玉石や砂の多いところでは燃え方が違うらしい。いずれにしても、花火打揚場所近くの枯草はなくなり、次回の花火打揚は安心して行える状態となった。

次は、次回「春のミニ花火ショー」の開催日時の決定である。申請した花火ショーの許可期限は五月九日であった。須永花火師と協議して次回開催日時を五月八日午後七時からとした。このことは、「春の花火を楽しむ

会」発起人並びに賛同者全員に伝え、須永花火から関係各機関と報道関係者に伝えた。

六　第二回春のミニ花火ショー
三度目の正直

平成十六年五月五日午後七時には、織姫神社奉賛会の奉納花火ショーが織姫神社正面の渡良瀬河川敷の公園で行われた。私と甥は夕方簡単な腹ごしらえをしてから、午後六時半対岸の土手の上で見物した。マツモト写真の松本拓也氏その他のカメラマンがカメラを構えて待っていた。

それなりの趣のあるものであった。私はインスタントカメラで撮影した。このような推譲ミニ花火ショーが足利に続々と生まれると、これらが足利の名物になり、足利の活性化につながると思った。

待望の五月八日がやってきた。午前中は前任校足利短期大学で看護科学生の戴帽式「ウパスターナ」が行われ、これに列席した。厳粛で良いものであった。記念講演は、元飯田女子短期大学教授藤腹先生の「仏教と看護」であった。

飯田市にはアルプス煙火という花火会社があり、法政大学出身の横尾君がいる。飯田の花火について藤腹先生に伺ったところ、四六時中花火が上がっているということであった。

前回と同様に五時半にニューミヤコホテル四階のテラスで軽い食事をし、それから、花火打揚現場の南側の土手の上を中橋から渡良瀬橋に向かって歩いた。火災を出した川州は緑の絨毯になっていた。

打揚場所には、花火打揚従事者たちと保安監視を手伝う足利工大わたらせ祭実行委員の学生たちがいた。彼らが土手の上に配置につくのを待って写真を撮り、あとで送った。

渡良瀬橋を渡って、打揚場所対岸正面の土手の上に行った。常連の須永花火師、その両親の社長夫妻、岡平理事長夫妻、私の甥、澤畑教授、わたらせテレビその他がきていた。私も三脚を立てて花火の写真を撮ることにした。

六時四十五分、須永幸彦花火師は予定表を片手に携帯電話で前座花火打揚を指示した。直ちに前座花火が打ち揚げられた。今回は前回のような燃えながら星が落ちてくることはなかった。まずまずのスタートであった。

いよいよ本番ミニ花火ショーである。まず、それぞれ、五十メートルおき三箇所にセットされた紅尾紅菊、緑尾緑菊、銀尾銀菊が次々に点火され花開いた。次いで、三十メートルおきに三ヶ所にセットされたミニスターマイン大笑星と緑拉手が花開く。

残念ながら全部の説明はできない。テレビ画像が記録されている。それを見ていただき、納得していただくしかない。三回目の正直で打ち揚げられた「春のミニ花火ショー」は素晴らしいものであった。今まで見てきた大形の花火大会とは趣の異なった花火大会であった。最大の特徴は、地上付近で開く花火が重要な役割を果たすことである。新しい花火ショーの魁となるものと思う。

フィナーレの近くでは大空全体を使った豪快なスターマインが打ち上げられ、大形花火大会に劣らない幕切れを飾った。関係者一同喜びあい、付近にいた見物人からは惜しみない歓声と拍手を受けた。

岡部社長のグループが来て、小幡社長の待っているニューミヤコホテルに行くことになった。岡平理事長夫妻もお誘いしたが、お酒の飲めない岡平理事長は「勘弁してください」といって参加されなかった。私の甥も誘ったが、弟夫婦も来ているので、家族で食事をするというので、別かれた。

その場で、須永花火師に花火師の卵を紹介された。御茶の水大学四年生の吉津亜由美さんである。来年大学卒業とともに須永花火に入社するそうである。日本の花火の発展に貢献してくれることが期待される。

岡部社長のグループにはヨン・キョンヒさんがいた。ヨンさんは足利工大の非常勤講師で「国際比較文化論」を講じている。特に韓国文化を具体的な資料を使って教えている。良い先生を得たと私は喜んでいる。一次会会場につくまで、講義についていろいろ話し合った。

ニューミヤコホテルの四階屋上のテラスに着くと、幾つかのグループが盛り上がっていた。皆が今回の花火ショーの成功を祝して私に握手してくれた。「今日の花火は良かった。おめでとう」と声を掛けてくれた。「前回は吉田先生は沈んでいた。今回は嬉しそうですね」やはり、気分の良い悪いは態度に出るものだということを知った。

水曜会グループ、小幡同級生グループ、谷先生グループ、小幡家族グループ、岡部グループと花火の余韻を楽しみながら酒を酌み交わした。九時過ぎにこの会は一応お開きにした。その後谷先生のお供をして、織姫会館内の飲み屋「えびす」に行った。ホテルに帰って寝たのは十二時であった。

翌朝電車で越谷の家に帰った。新越谷駅前のスピード写真屋で写真を現像した。十時には行きつけの県営プールに行き、五〇〇メートル泳いだ。昼にはビール一本飲みながら食事をし、それから昼寝した。三時には目を覚まし、昨夜の花火の写真にテプラーで説明をつけた。また、発起人並びに賛同者に対する「春のミニ花火ショー」終了報告書をタイプした。

五時半には、晩酌をやりながら、愛視番組「笑点」を見た。なんだか疲れがドットでた。それから直ぐに寝た。

五月九日（日）、朝電車で足利に行き、マツモト写真で花火の写真の焼き増しを特急で頼んだ。別の服を着ていったために、大学の学長室の鍵を忘れてしまった。職

員の穴原さんの家に行ったが、連休中で穴原さんは外出中とのことであった。

次いで、岡平理事長のお宅である三宝院に行った。理事長は出張中とのことであったが、ご子息が居られ、対応してくださった。田村庶務課長が大学の近くに住んでいるので、電話してもらった。私が十五分後に大学に行くので、学長室の鍵をあけて置くように頼んだ。

学長室に着くと、まず、「春の花火を楽しむ会」名簿を調べ、高額拠出者に礼状を書き、封筒に宛名を書き、花火の写真の説明ラベルをテプラーで作った。十時過ぎると穴原さんが来て、宛名住所を調べるのを手伝ってくれた。

昼には以上の作業が終わったので、タクシーを呼び、マツモト写真に行って焼き増しした花火の写真を受け取った。その後足利市駅近くの蕎麦屋「あらき」で美味い盛そばを食べてから電車に乗り、越谷に帰った。

家では、写真に説明テプラーを貼り付け、報告書とともに封筒に入れて世話になった方々に送った。

翌五月十日(月)午後には大学で岡平理事長に会い、経過を報告した。協賛者全員に対する礼状は理事長が書き、理事長のほうで発送してくれた。他の二人の発起人に対しては、理事長がその場で電話し、私もその電話に出て、「春のミニ花火ショー」終了の発起人会とした。

「春のミニ花火ショー」は好評であった。五月十日の下野新聞は

これぞ三度目の正直―

足利で「春の花火ショー」

という見出しで、写真入で紹介してくれた。

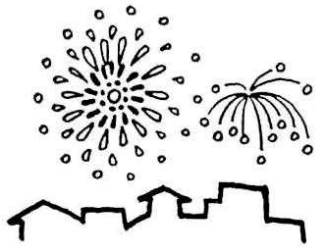
五月十一日の両毛新聞には、

夜空に願う〝足利活性化〟

観客から盛んな歓声と拍手

足利のミニ花火ショー

の見出しで、同じく写真入で紹介され、この花火ショーの定着を望む市民の声が載せられていた。



ボランティア活動に携わって

ボランティア組織「NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ東横浜」の誕生から現在まで

鍋屋次郎

(一)NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブとは

NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ(略称ナルク・・・ニッポンのN、アクティブのA、ライフのL、クラブのCをとってNALC・・・以後ナルクと略します)は、一九九四年に大阪で産声を上げたボランティア団体です。

特色は、企業を定年になったシニアとその夫人を主要メンバーとし、会員の自立と会員相互の奉仕・助け合いをモットーとして、ボランティア奉仕活動対価に時間預託制を採用することを特色としています。時間預託制とは、会員が一時間ボランティア活動を行うと、預託時間一点が付与され、自分が介護・介助支援を受けるとき、その預託時間を引き出して使うことが出来るシステムです。預託時間がない人が介護・介助を受ける場合は、一時間あたり五百円相当の組織維持寄付金を支払うこととなっています。それが組織活動の原資になっています。従って、自分がボランティア活動を行って預託時間を貯めれば、その分だけ無料でサービスを受けることが出来るシステムで、その預託時間は、自分自身はもとより両親・配偶者相互間・子供等が介護・介助を受けるとき引き出して利用できます。各人には時間預託手帳が交付され、郵便局の普通貯金通帳同様に記帳されます。

ナルクは現在日本国内各地に百以上の活動拠点を有し、会員は一万二千名を越しています。東横浜も、その組織内の活動拠点の一つです。

そのように全国各地に活動拠点があるので、例えば、本人が東京住んでいて両親が大阪にいる場合、本人が預

託点数を貯めていれば、それを引き出して、大阪活動拠点の会員に両親を支援して貰うことも出来ます。これは「遠隔地介護」と称してＮＨＫテレビなどで再三放映されました。新聞紙上でも、「東京から大阪の両親のところへ毎週通うと、新幹線代だけでも一人一ヶ月十万円はかかり、夫婦で行けば二十万円必要となります。それを、大阪の会員にサービス提供をお願いし、あとは電話などでサービス提供者や親とのコミュニケーションを図れば安心もできますし、そして、月一回介護・介助のために親の顔を見に行くこととすれば、経済的にも大幅に負担が軽くなります」と報道されています。

そして、会員が行うボランティア活動は、自分の活動できる時間帯の中で、自分の能力の範囲内で、自分のやりたいことを選択できます。時間でも、活動種別でも、無理をしたら長続きできません。一般市民が安心して気軽に参加できる仕組みになっています。

(二) ナルク東横浜について

① 設立経緯

一九九六年九月、ナルク横浜拠点（前年九月設立し、横浜市全域をエリアとしていた）に所属していた横浜市港北区・鶴見区・神奈川区在住の会員が、地域的活動グループを作って活動を開始したのがそもそものスタートで、その後二〇〇一年十月にナルク横浜拠点より分離独立して、ナルク東横浜拠点を設立して現在に至っています。

② 現在の状況

一九九六年九月、横浜市港北区・鶴見区・神奈川区三区在住会員で地域活動グループをスタートしたときは、集まってきた会員は十人以下で、それが現在では会員数は百八十名を越し、年間活動時間は一万時間に達しています。ナルク全国活動拠点の中で、活動の量と質において屈指の活動拠点となるまで成長しました。

主な活動内容は、施設内ボランティアとして会員美容師による理美容、話し相手、入浴後のドライアー掛け、車椅子清掃、シーツ交換その他入所者のより快適生活の実現を支援しており、地域内の在宅支援活動としては、障害者・高齢者の病院・リハビリ機関・授産施設等への送迎、家庭での庭植木の手入れ、清掃、炊事・買い物手伝いなどの生活支援や、木工部門として木のオモチャ作り、家具の修理など幅広い活動を展開しています。

また、特色の一つとして「子育て支援」があります。これは子育て中の母親達が、育児の悩み・ストレスから解放されて、少しでものびのびと明るく育児が出来るようにと、零～三歳児までの子供と一緒にいつでも来ることの出来る「もう一軒の家・親子のひろば」を、自らも子育て中の港北区在住の母親達が、二〇〇〇年二月に設立した「ＮＰＯ法人びーのびーの」への支援活動です。

そこでは子育てを終わったナルクの婦人会員を中心に、最近では七十歳を越した男性会員も、孫世代との遊びを楽しんでいます。また、木工部門男性会員が木のオモチャを作ったり、竹とんぼ教室を開催したりして参加しています。そのようなナルク会員の参加の場では、世代を越えた「地域三世代間交流」が実現し、若いお母さん達がニッコリとして、そして幼い子供達が「おばちゃんまた遊ぼうね」等と元気に手を振って帰ってゆく姿が、サポートするナルク会員には、自分の心の充実と喜びの源泉になっています。

(三) ボランティア・グループの発祥まで

私自身が何故ボランティア活動へ参画するようになったかを振り返りながら、一九九六年九月に、先に述べた地域活動グループが発足するまでの経緯を述べてみたいと思います。

① ＮＨＫ学園専攻科「社会福祉コース」に入学

一九九三年正月過ぎ、六十歳まで後二年少々の頃、何となく定年後の生活のあり方を考えていたとき、机上に広げた日経新聞広告欄の「ＮＨＫ学園専攻科社会福祉コース」生徒募集の広告が目に飛び込みました。その時点では、概念的な福祉は頭の中で分かるけど、自分自身が、社会的に必要な福祉に対する実践もなければ、理論武装も全く出来ていないことに気づき、「先ずは、やってみるか」というような軽い気持ちで二年の通信教育課程に申し込みました。

その後、毎月二～四通のレポートを提出、半年毎のスクーリングは青山学院大学を会場としたスクーリングを受講しました。

今振り返ると、この学びを通して、福祉に関する専門的教科の学びは別として、福祉社会のあるべき姿、と言うか、今ある社会が機能的に便利になりすぎていて、社会の全てが効率的機能主義の縦型社会（個人と病院・個人と葬儀社・個人と結婚式場等）になっていて、本来あるべき地域社会の横のつながりから発生する「人間としての温もり」が完全に忘れ去られている現実を発見しました。

私なりに時代を振り返ってみると、太平洋戦争が始まる頃までの社会は、少なくともいわゆる「村社会」的な温もりがあったと思います。病人がでる、葬式がある、結婚式がある・・そのようなときは地域が一体となって協力し助け合って、それによって社会が成り立っていたと思います。子育てにしても、私自身の幼いときは、私も隣近所のおじさんによく叱られました。社会がみんなで子育てをしている、と言うか、地域の大人が地域の子供達に責任を持っていたような気がします。

私が幼いとき、次のような温かい風景があったことを

思い出します。それは、私がまだ幼稚園の頃かと思いますが、私の育った片田舎で、今で言うと精神発達遅滞の青年（私の周りでは、その青年をシンミチノイッチャ・・・新道の一チャン?・・・と呼んでいました）が何かつぶやきながらニコニコして通りを歩いていました。すると、その辺の家から大人が出てきて

「イッチャ、風呂の水を汲んでくれゃ」

「イッチャ、薪を割ってくれゃ」

と用事を頼んで、少しばかりのお小遣いとおやつをあげていました。私が子供の頃のことですから、私自身はその時は何とも思いませんでしたが、今その風景を思い出すと、障害を持つその青年と家族に対して、素晴らしい温もりのあった時代であり地域社会であったと思います。

それからNHK学園の実習を通して、忘れることの出来ない学びがありました。

それは、学園から介護・介助の実地訓練を義務づけられ（それをしないと単位が貰えない）、指定された特別養護老人ホームに、十日間実地訓練生として派遣された時のことです。当時私は銀行勤務を終えた後の第二の職場にいましたので、平日は勤務があり連続十日間は無理でした。従って年末年始と彼岸と五月の連休を使って何とか十日間の日数はこなしました。その時のことです。

ある日、

「今朝は十時までに、この棟の皆さんの爪を切ってきてください」

と、指導してくださる若い職員から指示がでて、端の部屋から順番に爪切りをしました。ある部屋で、左半身麻痺のご婦人（これからAさんと言います）が、「麻痺状態」になった左手が握りしめたままでしたので、その握りしめている指を一本一本開いてゆくと、指には爪が伸びていました。そして一本一本指を伸ばしては切っているうちに、Aさんが突然

「あ!」

と呻くような声を出して、顔をしかめました。私はなんとAさんの薬指の皮を爪切りで挟んでしまいました。血が指の表面に滲んできました。

私は急いで持っていたティッシュで血をふき取り消毒薬を取りに行きましたが、幸い傷は小さく、ティッシュで拭いただけで出血は止まりました。

その日は、帰りまでに何度もAさんのところに行き、傷口を見せて貰い、その後出血していないことを再三確認しながらお詫びしました。

その後、研修に行った度にAさんに傷口を見せていただきましたが何ともなっていませんでした。

驚いたのはそれからです。二ヶ月くらい後に、また爪切りの指示がでました。その時は福祉専門学校の訓練生と、その棟の左右の端の部屋から二人が同時に爪切り作業をスタートしました。丁度真ん中あたりで爪切り作業が終わり、私は専門学校の訓練生と「爪切り」を片づけに行こうとしました。そこは多目的ホールに面した廊下で、そのホールの中程から、なんとAさんが右手一つで車椅子を動かしながら私めがけて進んでくるのです。Aさんの部屋は専門学校の訓練生の持ち場にありましたが、私のところに来るなり不自由な言葉で

「太田さんに爪を切って欲しいの」

と言って私を見つめました。

私は咄嗟に声が出ませんでした。私に痛い思いをさせられたAさんが、なんと・・・・。

私は、高齢者・障害者・痴呆の方々に対して、介護・介助の現場で、

「してあげるのではなく、させていただく気持ちが大切」

を学んで知識としては知っていましたが、その時、脳天を「ガツーン」と殴られたようなショックで、

「痴呆症その他全ての被介護者を絶対に見下げてはいけない」

「常にさせていただく謙虚さを持ち続けなければいけない」

ことを身をもって体験しました。

② 北欧福祉事情視察研修スクーリングへの参加

NHK学園専攻科二年間の学びを終えて、一九九五年五月、一緒に学んだ仲間五十人と共に、NHK学園主催の十日間の北欧福祉事情視察海外研修に参加しました。

訪問先はデンマーク・スエーデンを中心にイギリス、フランスも回りました。

高齢者・障害者・痴呆の高齢者など全ての人の個人の尊厳を徹底的に守っている社会とその仕組みに、ただただ感心しました。

軍国主義華やかな私が子供の時代、それから日本の高度成長時代、高齢者や障害者に対してどんな社会だったでしょうか。我が国社会の多くの人が、傾向として

「役立たずの厄介者は大人しく引っ込んでいろ」

とか、ひどい表現では

「穀潰し」

等と、一段見下げるどころか、今では絶対に許されない見方や対応をしていたのではないでしょうか。

何でこんなに違うのか?が私の持ち続けた疑問でした。

「デンマークもスエーテンも、キリスト教（プロテスタント）を国教とする社会だから?」

確かに底辺には宗教的な面があることは否めませんでしたが、それだけではないと思います。それは幼いときから教えられ、身についた、相手の人権尊重への思いではないでしょうか。

この視察研修の中での、私の失敗質問例を一つ紹介します。それは今日の日本での福祉に対する見方を基準に

した質問でした。

それは、ある痴呆症高齢者を介護・介助している入所施設を見学したときでした。施設の周囲を見て回ると、近くには三階建て程度のマンションが並んでいて、その施設は住宅地の真ん中にあって、施設の庭には美しい花壇があり、接している道路との境界には、花壇用の高さ二十～三十センチメートル程度のきれいな柵があるだけで、入所者は自由に庭に下りることが出来るので、施設から出て行こうとすれば自由に出られる環境にありました。私の質問は

「入所者が逃げ出したらどうするのですか？地域の人々から苦情は出ませんか？」

この質問に、施設側の説明者は、私の質問趣旨が理解できません。怪訝な顔をして私を見ています。私は

「入所者が逃げ出したら大変でしょう。管理上も問題があるのではないか」

と言いました。この私の質問は日本では常識です。これに対して

「逃げ出す？逃げるのではなく外出するのです。近所の方々が電話をしてきて、一緒に手をつないで連れてきてくれます。何も問題にすることはありません」

「・・・・・・」

この答えに私は返す言葉がありませんでした。その時、北欧諸国と我が国の痴呆症障害者への対応の「社会の熟成の較差」を痛感しました。

次に驚いたのは、希望者は無条件で在宅のまま支援を受けることが出来ることです。

つまり、今まで在宅で介護・介助を必要とするようになく生活していた人が、介護・介助を受けることになったときの対応です。これを行政の担当者に質問したところ、

「在宅生活を続ける上で支援を必要となった方々に、施設入所を希望するか、それとも在宅支援を希望するかは、本人の希望次第で決定されています」

の回答に、在宅介護がそんなに希望通りに出来るのか！と驚いていた小生でした。

そして在宅介護・介助のフォローシステムとして、二十四時間体制の在宅介護訪問支援センターが、日本で言うと中学校エリア単位に出来ていて、在宅支援を求める方々が配布されている非常連絡用ブザーを押すと、センターのテレビ画面にその方の最新のカルテが表示され、それを見た担当者が、夜間は二人一組の訪問介護チームに対して、訪問に当たって持参する介護・医療用品を指示して訪問させるシステムとなっていて、訪問後はカルテを最新版に書き換えていました。そうすれば常に最新のカルテが表示されることとなります。

その日、ホテルに帰ってから、同行の仲間とこの辺の我が国との違いについて議論した結果

「税金の配分の問題で、どこにウエイトを置くかの政治の問題」

と結論しました。勿論、国民の意識の問題が優先しますが。

イギリスではロンドン郊外にあるステインズ・デイセンター（一人住まいの高齢者が、三々五々集まってきて、昼間、撞球をしたり、本を読んだり、コーヒーを飲んだりして気軽に過ごすことのできるセンター）を見学した後、そのセンターを運営しているボランティア団体「AGE・CONCERN」の皆さんと半日懇談しました。その時

「ボランティア活動を行うことによって、心豊かな人生を送ることが出来、その上沢山のお友達が出来る」

と説明され、

「心豊かな人生を送ることが出来るのは理解できるが、なぜお友達が沢山出来るのか」

が理解できませんでしたが、なんと、今は私はボランティアを通して出来たお友達が一杯です。

③　ナルク横浜拠点の設立と私自身の参加

北欧視察研修から帰ってきて、一通りのまとめを終えた秋口、新聞紙上で「横浜に時間預託ボランティア団体設立・・・設立総会場は新横浜ラポール」の記事を読み、確か日曜日の午後だったと思いましたが、何はともあれ行ってみました。総会の中で趣旨をお聞きして、入会申し込みをして帰りました。

ところが、ボランティア団体が結成されて、実際の活動を伴った船出をする為には、内部管理事務システム体制をしっかり作り上げる必要があったり、対外的に最も必要なコーデイネーター要員の養成確保など多くの準備が必要で、横浜を五つの活動地域ブロックに分けて活動開始するまでに一年を必要としました。

その準備期間の間は、最初の設立発起に参加していなかった関係から、私は「船を漕ぐ準備をしている人たちに対岸でエールを送る」ような、一歩措いたところで参加していましたが、入会して一年を経過したところで「運営委員」就任の要請があってお引き受けし、直後に、私の呼びかけで、ナルク横浜会員の中で港北区・鶴見区・神奈川区在住会員でもって、今のナルク東横浜の前身の「ナルク横浜Bグループ」を組成して活動を開始、翌年には、私はナルク横浜全体の副代表に選任され就任しました。

④　「ナルク横浜Bグループ」

十人満たない状態での船出

一九九六年九月、私の住んでいる町内の「障害者施設ライズ」の会議室をお借りして、地域活動組織としてナ

ルク横浜Bグループの旗揚げをしました。
その時のメンバーは殆どの方々が現在でも積極的に活動しています。鶴見区のNさん夫妻，港北区のKさん夫妻、同じくIさん等々。
幸いというか、スタート直後に「ボランティアの助けを欲しい」と言う要請が二つはいりました。その時、理論では分かっているコーディネーターの現実の苦労を初めて味わいましたので、少しお話ししたいと思います。

一つは、私の銀行時代の仲間のSKさんの奥さん（私の薦めでNHK学園専攻科受講）から
「近所に障害児がいるご家庭があって，そのお子さんが鶴見区の養護学校に通学しているので、その送迎ができないか」
と、私の自宅に電話がありました。早速翌日の夜SKさんの奥さんと二人で障害児Dさんのお宅に伺い、お母さんから詳しい事情をお聞きして、私たちがどのようにお手伝いしたらいいのかを教えていただいて、障害児Dさんにも会いました。
翌日、私はお母さんが行う送迎にご一緒させていただいて、「Dさんの送迎」のやり方を学びました。
Dさんは養護学校に通う高校一年生。言語によるコミュニケーションは不可能。歩行もゆっくり。左腕にやや麻痺がある様子。養護学校のスクールバスは、中学三年生までの義務教育生徒が優先のため、満員の時はDさんはスクールバスを利用することは出来ない。朝の通学は従来からの別のボランティアさんがいるので、私たちへの要請は午後二時半に学校に迎えに行って自宅まで連れ帰ることでした。
その翌日からが大変でした。ナルク会員はもとより多くの方々に「Dさん送迎協力」を呼びかけました。ボランティア団体として送迎協力はすべきである・・ここまでは全ての会員は理解し賛成してくれるますが，「では貴方は」と言うことになると「障害児を扱ったことがない」とかいろいろな意見で、一歩踏み出してくれない。
Dさんのお母さんは
「太田さん、無理しなくていいんですよ。お手伝いしましょうと言って息子のDと会って、そのまま来ない人を何度も見ていますから」
と言って私を慰めてくださる。送迎ボランティアを探し始めて、既に一ヶ月半は経過している。
そこへ一通の葉書が舞い込んだ。グループ旗揚げもご一緒だった鶴見区のNさんからだ。葉書には
「小生でよければ毎週火・水・木とDさんの送迎をやりましょう」
と書いてある。私は小躍りして、直ぐNさん宅に電話して車を走らせた。
早速翌日Nさんと一緒に、お母さんによるDさんの送迎に立ち会って、Nさんから
「大丈夫です。来週からでもやらせていただきましょう」
の言葉をいただいたときは、心から
「よかった」
と思いました。
そして、月曜日H夫人、火～木曜日N氏、金曜日M氏と一週間全ての日の担当が決まり翌週からスタート、その間担当者の入れ替えはありましたが、担当者の都合の悪いときは交代応援者が行いました。やがて高校を卒業したDさんはT授産施設に通うこととなり、私達は引き続きT授産施設への送迎を続け、二〇〇四年五月から授産施設が送迎バスを出すことになって、七年六ヶ月続いた私達の送迎は終了しました。
この間、Dさんは、N夫人が自宅で焼いたパンケーキを美味しそうにいただいたり、N氏夫妻のご自分の孫に接するような対応が続くと、やがて家族にも滅多に笑顔を見せないDさんが、Nさんだけには笑顔を見せるようになって、NさんとDさんの素晴らしい心の交流もあって本当に微笑ましい送迎が行われていました。

もう一つの仕事は、脳梗塞を患ったIさん（七十歳過ぎ）が退院し、嚥下力に心配があることから、Iさんの昼食時の見守りを依頼されたことです。
Iさんには同居する息子さんと娘さんがいましたが、二人とも勤めに行かなければ家庭は成り立ちません。そこで、朝、娘さんが作っていった昼食を、Iさんが昼に食べるのを一時間見守っている仕事です。仕事は簡単ですが、三年半、雨の日も雪の日も毎日行いました。月曜から金曜日まで、担当者を曜日毎に決めて、行っていただきました。毎日継続と言うことは、ボランティアの方にも、例えば「孫が熱を出したから」または「兄弟が亡くなったから」とかいろいろな理由でお休みの申し出が入ります。それへの対応として予備のスタッフも用意しておかなければなりません。

ボランティア活動グループのスタートとほぼ同時に、先ほどのDさんの送迎と、このIさんの見守りが発生したことは私達に素晴らしい学びを与えてくれました。
この二つのボランティア活動を行うことを通して、ボランティア団体の管理の必要性、及び、ボランティア・サービスの本来あるべき姿、つまりサービスを受ける方も、サービスをさせていただく方も、双方が共に感謝と喜びを持ち合うこと、そしてその状態をいつまでも持続すること、ここにボランティア活動の「生命」があることを会員皆さんと共に学び、そしてその手法を学び取って、自分達のものとして理解することが出来たことは大きな収穫でした。

（四）子育て支援活動へ

少子高齢化の波が高まりつつある現実社会に、我々シニアはどのように対応すべきか。それは、老・熟・壮・青・幼の多世代が共に相互理解をする中で、シニアが多年培ってきた経験を通して、若い世代にとって、より住み良い社会を作っていくことではないでしょうか。

たまたま、一九九八年から九九年にかけて、当時の文部省後援のもとに、若い母親世代が目指す自己実現を、横浜の社会経験豊富なシニアがそれを支援する目的での「横浜異世代交流会」が、ランドマークタワーを会場として毎月開催され、私も依頼を受けてシニア・メンバーとして、出席していました。

そこに奥山千鶴子さん（このあと設立された子育て支援ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）が出席していて、その会合が始まって半年くらい経ってからのこと、奥山さんが、きちんと綴じられた「子育て支援事業プラン」を持って

「この計画を実現したいので協力してください」

と、真剣な面持ちでそのプランを私に差し出しました。

正直に申し上げて、最初の頃自己紹介がありましたが、私はその時奥山さんをよく知りませんでした。奥山さんの表情のあまりの真剣さに

「では家に持ち帰って読ませていただきます。お預かりしていいですか」

と言って、ともかく預かって家に帰りました。

読んでみると、若い母親の育児の悩み、それを受け入れる社会体制が出来ていないこと等が指摘されて、同世代の母親として、官設官営の子育て支援事業である「吉祥寺〇一二三」をモデルとして、子育てに悩む母親が、自らの安心を求めて幼児と一緒にいつでも自由に来ることが出来る常設の「もう一軒の家・つどいの広場」を作りたいと言うことがしっかりと書かれていて、奥山さんの熱意がそのまま伝わってくるような感じでした。

私は、地域の若い母親達が、同世代の育児に悩む母親達の為に立ち上がろうとするその意気に感激して、協力を約束しました。それと共に、日本の現在の政治において、子育ては勿論のこと、福祉関係で社会一般が必要とする事柄についての「社会政策としての政治」の貧困さを痛感しました。

奥山さん達のその計画は、商店街の中で閉店した生鮮食料品店を借りて、内装を施してスタートすることにしました。立ち上がり資金は、奥山さん達が結婚する前に蓄えていたお金を持ち寄っていました。

そして、その運営母体としてＮＰＯ法人「びーのびーの」の設立，会計決算と税務問題その他若い母親達での社会経験の中では実行困難な事柄を引き受け、要請を受けて法人の監事に就任しました。

またナルク東横浜の月例会に来ていただいて「びーのびーの」の活動趣旨説明をお願いした結果、ナルクの婦人会員が三々五々お手伝いに行くようになり、その後男性も木のオモチャの制作その他家具修理などお手伝いに行くようになりました。

「びーのびーの」は、現在では厚生労働省の子育て支援モデル事業として脚光を浴び、そのような施設の社会的必要性を感じた厚生労働省が、「びーのびーの」と同じような「つどいの広場」を全国五百カ所設置するための運動を始めて、支援予算も計上しました。また、厚生労働省はその運動支援のために、二〇〇四年度に「全国つどいの広場連絡協議会」の設置を支援し、奥山さんが初代の代表世話人に就任しました。

（五）ナルク東横浜拠点の設立

① 新組織の誕生

二〇〇一年十月二十一日、ナルク横浜Ｂグループは、ついに「ナルク東横浜拠点」として、ナルク横浜組織から独立して新組織を設立しました。独立した目的は、より一層地域社会と密接な関係を構築して、地域社会から頼られ、信頼される活動を推進実現するところにありました。

この時点で、私達グループの会員数は念願の百名を少し越えていて、ようやく地域にもその存在が知られるようになってきていました。

会員の喜びと期待のもとに独立が実現し、私は初代の代表に、また鶴見区のＮさんは副代表に、港北区のＫさんは一番大変な事務局長を担当してくださり、その他枚挙に暇がないほど多くの会員の協力の下に新組織として船出をすることが出来ました。

同時に、それまで私が一手に行っていた内部的な管理事務を、新組織が分担して行うことにより、組織運営上、素晴らしく且つ力強い組織を生み出すことが出来たことは、多くの会員の献身的な協力の賜であり、深く感謝しています。

② 活動を通して感ずること

イ 重度障害者との出会い

重度障害者として、行動面でのハンデキャップを自力で克服しようと、懸命に努力しているＹさんと出会って、お手伝いが始まりました。Ｙさんは、数年前に事故で四肢が不自由になり、その後ご主人に先立たれ、現在は一人での車椅子生活となっています。お子さま方もいますが、たまに遊びに来る程度の距離を置いて頑張っています。

Ｙさんは一ヶ月の内、半分は外出します。リハビリのための病院通い、リハビリのための障害者用プールへ、買い物、ご主人の墓参り、お友達との会食・・・。障害

克服への戦いとその積極的な生活は、Yさんの強烈な意志に支えられていました。そして今、私達はYさんの外出お手伝いを数人の仲間と行っています。

過日、私は神奈川県丹沢にある障害者施設「レジデンシャルホーム」(交通事故で脊椎障害を負った方々も入所している)を訪ね施設長さんと話し合った時のこと、施設長さんは

「障害者が何を求めているかを、社会はもっと理解して欲しい。勉強して欲しい。そうすれば、今入所している障害者の何割かの方々は、夢にまで見る在宅生活が出来るはずだ」

と強調された。

Yさんのお手伝いをしながら、この話を思い出した。また、そのような障害者が、元気で在宅生活に挑戦しようと励まし合って努力している障害者団体もある。

ある日、その団体の代表の方とYさんから

「福祉車両を見に行きたいので送迎をして欲しい」

との依頼があり、Yさんには私、その代表の方にはヘルパーさんがついて、私の運転で世田谷にある福祉車両中古車センターに行ったときのこと、一通りの車両説明が終わった後、Yさん達から次の質問が出されました。

「でもね、運転手さんが仮に仮死状態になって動けないとき、私たち車椅子に乗ったままよね。どうしてリモコンで私達の手で私達が出られるようになっていないの?何故?私たちは、自分で車椅子のベルトは外すことはできても、それ以上は動けないでしょ。あなた方だったら立ち上がって窓を壊して逃げ出せるでしょうけど」

と。

説明担当者は困った顔をして、回答は出来ませんでした。ことほど左様に、健常者の私たちは、障害を負っている方々が何を思っているのか、何にも考えていないんだなーと言うのが私の実感でした。

ロ　一人住まい高齢者の安心

それからあと一つ紹介します。

それは私の家の近くのマンションに、八十歳になるご婦人のWさんが独りで住んでいました。近くの障害者施設長夫人から私のところに電話があり

「太田さん、あそこのマンションの○○○号室にWさんと言うおばあちゃんがいるんだけど、電話して置くから時々顔を出してくれない?」

と依頼を受けました。

早速訪問しましたが、最初は安心できないのか打ち解けてくれませんでした。

大変お元気な方で、私が朝晩犬の散歩する時にも、散歩しているWさんをお見受けしたり、何度か伺ううちに、ようやく家の中に招き入れられる様になって、傷んだガスフードの取り替え、古くなった蛍光灯の取り替えなどお手伝いさせていただき、Wさんの身の上話など、問わず語りにお聞きできました。

ある朝、八時頃Wさんが嗄れた声で

「太田さん、わたし昨夜一睡もしていないの。喉が痛くて水も飲めない。唾も飲み込めない」

とのこと。

たまたま外出予定がなかった私は、早速Wさんを迎えに行き、Wさんが掛かり付けの、東横線日吉にある耳鼻咽喉科に連れて行きました。診察の結果

「脱水症状を起こしている。紹介状を書いたから、直ぐN大学病院に行きなさい」

と言うこととなり、そのまま武蔵小杉のN大学病院に即入院。

一通りの診察を終え、事務的な入院手続きも終わって、Wさんと私は看護婦に伴われて病室に行きましたが、着替えもなければ何も入院準備はしていません。病院から我が家に連絡して、家内の古くなった浴衣やバスタオルなど、取り敢えず必要とするものを大きな風呂敷に包んで貰い、私は一旦それを取りに自宅に戻って、再びN大学病院に向かいました。途中で気がついたことは

「Wさんはお年とはいえ女性である。私には着替えはお手伝いできないし、病院の売店での下着の買い物に一緒に行くわけにも行かない。どうしよう」

そこで、早速携帯電話で連絡を取って、ナルク会員のK夫人にお願いしてご一緒していただきました。

退院してから半年くらい経ったある日のこと、夜の九時近かった。Wさんから電話がありました。

「太田さん、わたし一週間風邪で熱を出して寝ていました。だけどね、太田さんはじめナルクの人に電話すれば直ぐ来てくれると思うと、安心して寝ていました。もう熱も下がったから電話しているの」

その時の電話はなんと先方が一方的にしゃべる一時間以上の長電話でしたが、あとで思ったことは

「私たちボランティア組織の存在と活動が、そんなに安心していただける機能を果たすとは考えてもいなかった」

と、改めて我ながら驚き、この効果は会員皆さんに是非お知らせしようと、早速このことを私達の機関誌に書きました。

③　管理体制の充実化

生まれたボランティア団体が、順調に発展するか、停滞して消滅するかの分かれ道は、財政面での自立と管理体制マネージメントの両面が、恰も車の両輪のようにしっかりしているか否かであって、どちらが欠けてもボランティア団体は存立し得ません。

財政的には、電話・郵便・交通その他必要事務費を賄うことが出来なければ、組織は動きません。幸いに私達は時間預託点数を持っていない会員に対するサービス活

動が、設立当初から月間百時間以上ありましたので、一時間あたり五百円を目処とする組織維持寄付金も、月間五万円以上となって、先ずは財政面ではクリアー出来ました。

事務管理面でも、会員管理と事務的に手間がかかる預託時間の会員別管理をパソコンでできる体制と、会計面でNPO会計ソフトを導入して、取引を入力すればリアルタイムで関係帳簿が出来るという体制を立ち上げ、運営上基本となる管理体制は、ナルク東横浜拠点としての新組織組成と同時に確立できました。

(六) ナルク全国組織との関わり

平成十四年には、私はナルク関東各地の拠点を代表する形で、NPO法人ニッポン・アクテイブライフ・クラブの理事に推され現在に至っています。

理事としての私の主な仕事は、ナルクの理念と活動に共鳴して、関東を含め東日本各地に誕生した「ナルク活動拠点」の活動の指導支援を行うと言うことになっています。

指導支援は文字上のことで、実際にそこの地にお伺いして、責任者をはじめ多くの方々と終日語り合うのが主な任務です。そして、その語り合いを通して、そこの皆さんのボランティアに対する情熱を、いかに現実の活動に転化して行くことが出来るか、そのためにその地でどのように前進してゆくべきか、等について話し合うことです。今まで数多くの拠点にお伺いしました。遠くは北海道十勝帯広、青森県八戸、茨城県鹿島、長野県御代田、静岡その他栃木・群馬・埼玉・千葉等関東近辺の多くの拠点の皆様にお目にかかりました。その後、それら拠点が活発に地域で活動を展開しているのを眺めることは本当に楽しく嬉しいものです。

二〇〇四年五月には、東京日比谷公会堂を借り切って、ナルク創立十周年の記念総会を行い、北は北海道、南は九州から、全国各地拠点から一千五百名近いナルク会員が集まって来てくれました。関東各拠点の皆さんが一年以上かけて、心を込めた準備をして下さったお陰で、無事総会を開催することが出来ました。

開催当日朝、空はきれいに晴れ上がり、鮮やかな緑の樹木に覆われた日比谷公会堂周囲は、公会堂が開くのを待っている人で一杯でした。開会時に、開催地を代表して歓迎の挨拶をさせていただいたときは、

「全国各地から思いを同じくする方々がこんなに喜んで沢山集まってきて下さっている」

と思うと、瞬間、胸が熱くなって参りました。

(七) 将来を展望して

① 既に社会の公器として

一般市民の方々が自由に参加出来る、またそれを呼びかけてきた経緯から、ナルク東横浜組織は、既に社会の公器となっている状態だと思います。つまり市民の共有物となっていると考えます。

会員増加の原因を分析してみますと、私達の活動を知った方々が、少しでも、自分の出来る奉仕活動をして、自分なりに心豊かな日々を送ってゆきたい、との思いから参加している方々が圧倒的に多いと思います。

運営も市民レベルの目線から行ってゆく必要がありますし、活動の全てを地域社会に発信して、支援を求める人、サービス提供活動を希望する人、それぞれがいつでも自由にナルク東横浜事務局を経由して、支援を求める人には速やかなサービス支援を提供し、また活動を希望する方にはその方の能力や希望にマッチした活動の場が提供されなければなりません。

私が一通り福祉の勉強をした結果の結論は

「ボランティアをやりたいという一般市民が、愉快に楽しくボランティア活動ができる舞台を作って、一人でも多くの市民が、その舞台の上で輝くことができれば」

と言うことでした。

そこで、一般市民が自由に参加できるボランティア活動の場を作ることに取り組み、その目的を実現しようと言う思いで今までやってきました。

② 次世代へつなぐ使命

組織は、次々と若い世代(と言っても企業を定年になったばかりの世代)が加わっていかないと、必然的に老化してゆきます。その点、大変有難いことは、ご主人が定年直後、または目の前に定年を控えているご夫妻が、新聞・テレビまたは友人知人の紹介で新規に加入される方が現れていることです。

新しく加入された方には、可能な限りお目にかかって、ナルクのことを詳しく説明し、ナルクについてより一層理解を深めていただいた上で、活動に参加してもらっています。

組織の老化と硬直性を排除するためには、組織を担っていく方々もその役割を次々とバトンタッチしてゆくことが必要で、バトンタッチした先輩は、「それでサヨナラ」と言うことではなく、しばらくは一緒に担って歩いてゆくことが大切なことと思い、これからしっかりとその路線で進んで行こうと思っています。

③ NPO税制への苦言

内閣府を中心に、NPOに対する税制はいろいろと考えてくれていますが、現状は一言でいって「お役人は分かっちゃいない」と言うことです。

草の根ボランティア団体はどこも財政的には苦しい状態です。今、貴方が少しでも支援しようとして、ボランティア団体に寄付をした場合、本来は貴方の課税所得額

からその額の全額を控除すべきと考えます。そうでなければ、法人でも個人でも喜んでポンと迄は行かなくても、寄付していただけません。しかし税制は、寄付を受けるボランティア団体が行政からの「税制優遇団体認証」を受けた団体でなければならない、と言う法律になっていて、その認証基準が、NPO法人については、社会から小口で多くの寄付金をいただいて運営している法人に限られることとなっています。一般市民が立ち上げたローカルな草の根団体が、例えば日本赤十字社のように、多くの市民から寄付を受けられるわけがありません。だから、皆困っています。例えば活動実績が一定水準以上であれば税制優遇団体として認証するなど、その認証基準の緩和を切に願っています。

今ひとつは、道路運送法の解釈です。その八十条に、「マイカーでお金を取って他人を乗せてはいけない」ということが書いてあります。私達は、高齢者や障害者のご家庭で、ご自身が動けないから、または家族に手がないから等の理由で外出できない時、家族の「代わり」にお手伝いして、ガソリン代の実費（走行一キロ当たり三十円）と、組織維持費として一時間当たり五百円相当の寄付をいただいていますが（運転者にはガソリン代が実費として渡されるのみで、運転者はそれ以外の現金収入はない）、どうもこの解釈が「業として、許可なしにマイカーで他人を乗せている」と解釈されそうな気配があります。

これに対して、相互助け合いの社会構築を進める上で、送迎支援組織を維持してゆくためには、最低の寄付金（最低賃金よりも安い）をいただくのは当然であって、このように業としていないものまで規制する必要はない。行政は福祉社会のあるべき形態を認識すべきだ、と反論を展開中です。行政側には、タクシー会社等の既存権益を守るなど、いろいろと考えがあるのでしょうが、困っているのは高齢者であり障害者であるのです。私達はそこのところを強く主張しています。

(八) 終わりに

最後に、私達のボランティア基本原則の一部分を、多少解説をつけて説明したいと思います。

① 「してあげる」でなくどこまでも「させていただく」心構えで対応すること。

② 時間など約束事は絶対に守る。「商売ではなくボランティアだから、少しの遅刻は許される」の甘さは絶対禁物。

③ 「自己決定権の原則」を守る。介護でも介助でも、何をして欲しいかを決定するのは、介護・介助される本人である。介護・介助のサービス範囲が、それよりも少なくてもいけないし。多くてもいけない。

④ コーディネーターの役割

イ 援助を受ける方が「何を望んでいるか」を的確に把握する。

ロ 必ず本人と、また本人がご家族と同居であればご家族とも話し合って、介護・介助のサービス範囲を決定する。

ハ 援助を受ける人のところへ、まだその方の援助をしたことのない人を一人で行かせない。コーディネーターまたは経験者が必ず同伴して、仕事の範囲を含めてそこで行うサービス活動を説明する。

ニ サービスを提供するボランティア会員とサービスを受ける双方が、サービスをさせていただいて喜びを感じ、サービスを受けて感謝する、と言う双方が満足するコーディネートを行う。

⑤ 当然ですが、プライバシーを尊重・厳守する。

⑥ 相手の個人の尊厳を絶対に傷つけない。

⑦ 困ったときは、勝手に解決したりしないで、必ずコーディネーターに話をして意見を聞くこと。

⑧ 組織内は皆平等で、上下関係は絶対に作らない。前歴（例えば上場会社役員など）は忘れること。

その他、まだまだ沢山ありますが、ご紹介はこの辺にします。

終

注記

NPO法人ニッポン・アクテイブライフ・クラブは、一九九四年四月、大阪の地で生まれました。その時は長寿社会文化協会の傘下で、ワンダフル・エージング・クラブ／アクテイブ・クラブ（WAC／AC）と称していました。その後、NPO法人制定と同時NPO法人となり、名称を現名称に変更いたしました。文中にはこの経緯を省略してあります。

なお、本稿に対するご意見・ご質問は左記にお寄せ下さい。

mail: ytyai@hkg.odn.ne.jp

FAX: 045（544）5947

太田善朗

保渡田の古墳群

新井宏

群馬県倉賀野の小さな信仰寺、日蓮宗妙法寺。縁あって妻がその早朝勤行に参加したいと言う。しかし往年の中仙道宿場町、倉賀野宿には旅館もビジネスホテルもないらしい。「高崎ならたくさんホテルがあるよ」と言ってはみたものの、女ひとりで泊まるのは心細いという。結局、「勤行には付き合わないよ」との条件で、前夜から同行することにした。早春の一日、前方後円墳の里、群馬を散策するのも悪くはあるまい。

その古墳散策が、またもや我が古韓尺研究に大僥倖をもたらすことになる。それはどう考えても、もう地道な努力の成果などというレベルではない。つき過ぎだ。つき過ぎている。ニッチな「ものさし」の研究をはるかに越えて、古代史の壮大な学説として飛躍する大成果だ。心が高揚して躁の状態が止まらない。

そういえば、既に同じようなことを、もう二度も『まんじ』に書いている。その都度、躁の状態で、僥倖に感謝し、わが研究成果を謳いあげている。

最初の時は「……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……」と叫んだ。二度目には「……ついている……ついている……本当についている」と叫んでいる。それは三度目を書くことなど夢想だにしていなかった証拠でもある。それなのに、三度目の成果は、今までをはるかに越えて、東アジアの古代史に想像もしていなかったような新事実を提供するものだ。この心の高揚をどう表現したら良いのだろうか……。しかし古韓尺と共に歩んだ我が心の旅路は、もうみんな書いてしまった。それでも書く。書きたい。

一昨年の時はこうだった。韓国の古都慶州を散策中に突然着想を得た。近年の発掘調査結果と『三国史記』や『三国遺事』の記載を対比すれば慶州にあった新羅王京の完全復元が可能なのではないか。それは我が古韓尺学説を文献学的に実証することになるのではないかと。

ところがそれは全くの誤解に過ぎなかった。そして深い挫折の後に、再びもっともっと広い世界があることに気づき「新羅王京論文(韓国語)」として『百済研究』に発表した。それは状況証拠のみによって成立していた私の古韓尺学説に、基本文献による裏づけを与えた瞬間であった。その時、私はもうこれで十分いや十分過ぎるとさえ思った。そしてその心の弾みを「誤解から始まる」に書いた。それは三十年にも及ぶアマチュア研究歴をサラリーマンの喜怒哀楽と共に描くことでもあった。

ところが昨年の初めになって、再び同じようなことが起った。釜山の景勝地、海雲台冬柏島を散策中に、新羅末期の大学者崔致遠の銅像に再会したのがきっかけで、彼の崇福寺碑文に「一結九千歩」を意味する重大な記事を発見する。それは朝鮮半島の土地制度の疑問を全て解く鍵であった。いままで実態の良く分っていなかった朝鮮半島の土地制度「結負制」について、一気に解明し「結負制論文(韓国語)」として『韓国古代史研究』に発表する。

それは方三十三歩(すなわち千八十九歩)を一結とする不自然な制度の起源を明快にしたばかりでなく、結負制が古韓尺を基にしていたことを明瞭に示していた。しかも結負制の面積の名称も実面積も日本古代の代制と全く同一ではないか。それはもう尺度史という世界に留まらず、日本と朝鮮半島の古代史全般に大きな影響を与えることであった。そしてその気持ちの高揚を「崔致遠の碑文」に書いた。その時も、もうこれで十分という気持ちであった。

そして三度目である。もうこれ以上望むべくもない形で、我が古韓尺研究は壮大な学説として結実する。それは朝鮮半島の結負制で用いられていた計測システムが大化前代の代制で用いられていたばかりでなく、前方後円墳の築造企画にも用いられていた事実を、膨大な古墳の計測資料が明示したことである。

機が熟していた。何よりも群馬県の大型前方後円墳群の発掘調査結果が我が研究を後押ししてくれた。そこに盛られた研究成果は、まさに結負制の計量システムそのものを意味しているではないか……。それをきっかけに、全国の発掘調査を経た大型前方後円墳を調べて見れば、みな同じ基準で理解できるではないか……。

しかもそのことは、天皇陵等の超大型前方後円墳の築造企画にも共通している。どの天皇陵も、どの天皇陵も結負制の単位に見事に合致しているではないか。そして、わずか一ヶ月間で三十ページほどの「前方後円墳論文」を纏め上げ、急いで日本考古学会に送った。こんどは日

本語の論文だ。これで安心して飛行機に乗れる。

これまでの研究で明らかになったことは、まとめてしまえば簡単である。四世紀から八世紀の日本と朝鮮半島で、古韓尺システムすなわち尺(二十六・七センチ)、歩(六尺：一・六〇米)、量田歩(三歩：四・八〇米)、里(三百歩：百量田歩：四百八十米)の計量制度が行われていたこと、それにつきる。

しかしそれは、まったく何も無いところから生じた研究である。先行研究もなければ、後続の研究もない。もちろん文献史料にも記載がない。まったく無から生み出されたものなのだ。したがって常に不安定な学説としての地位に甘んじていなければならなかった。

十数年前、吉川弘文館から『まぼろしの古代尺』を出版した時は、数多くの寺院、宮殿、古墳等を解析した結果とは言え、いわば帰納的に古韓尺の存在を見出したに過ぎなかった。なるほど良く合うには合うけれど、何の証拠もないではないか。それが専門家たちのクールな意見であったように思う。まだ片足立ちの不安定な状況であった。

だから「新羅王京論文」によって、考古学的な成果と『三国史記』などを対比して、古韓尺を文献によって検証できた時、やっと二本の足で立てた充実感があった。しかし残念ながら『三国史記』は、原記録があったかも知れないが十二世紀の文献である。有力な証拠ではあるが、ひとつの推論に過ぎないと見なされるかも知れない。まだ不十分である。

そして「結負制論文」で初めて、朝鮮半島の結負制の復元を行い、その基本単位の束が量田歩(三歩)の正方形で定義されていることを見出した。そしてその歩が結果的に古韓歩と一致している上に、その面積単位の束が日本の代制の束代と面積的に完全に一致していることも突き止めた。いわば全く独立の研究結果が古韓尺学説を三本目の足として支えることになった。もうこれで十分だ。

新史料発見が期待薄である古代史の分野においては、個々の推論に多少の危うさが付きまとうのは止むを得ない。しかしそのような危うさを伴う新学説であっても、相互の研究結果が三本足のように支えあうようになると、にわかに強固な学説になる。それぞれの研究が内包している危うさが消えて、大地に足をおろせるようになる。それが「結負制論文」の役割であった。

その上に、更に今度の「前方後円墳論文」である。もちろんある意味では、この研究も結負制、代制に関する学説を強力に支えるもののひとつに過ぎないかも知れない。しかし、百家争鳴の感のあった古墳の尺度問題に整合性のある答えを与えたことだけでも、ひとつのエポックである。

従来の古墳尺度研究は、計量史の大家小泉袈裟勝氏が嘆くように「都合の良い数字だけを選んで自説を立てる人が跡をたたない」状況で、中国の計量史も参照せず、ましてや朝鮮半島の制度とは無関係に進められてきていた。それに対して数値的な適合度はもとより、歴史的な背景を踏まえての決定的な提案となるのが今度の論文である。しかも古韓尺説とも完全に整合する。したがって四本足目の結論は、東アジアの古代史に重大な影響を与えることになるであろう。古代史分野で、これほどの事実が明らかになるのは、いわば奇跡的なことなのだ。

そもそも私が「ものさし」の研究というニッチな世界に目を向けるようになったきっかけは古墳の尺度問題である。それは昭和五十年に森浩一氏の『古墳の発掘』を読んだ時であった。氏によれば大型前方後円墳の多くが晋尺(二十四センチ)の百尺(二十四米)を基準単位としているという。まことに美的な推論には圧倒される思いはあったが、良く見ると矛盾も多い。そして尺度問題にのめりこんで行った。

だから古墳の尺度問題は私の研究の原点である。しかし私は、今まで数多くの論文を発表しながら、古墳問題を取り上げたことはなかった。それは小泉氏の言うような議論に陥るのを厳しく自戒していたからである。それなのにどうして、「前方後円墳論文」を書くに至ったのか。ここでやっと、倉賀野に戻る。

高崎駅前のホテルを五時に出る頃は、まだうすら寒かった。上着を羽織ってくれば良かったかな思いながら、タクシーの運転手に大鶴巻古墳の近くまでと言うがどうも要領を得ない。古墳の名前はもう地名としては通用しないのかも知れない。その大鶴巻古墳の南三百米くらいのところに妙法寺はある。

妙法寺は普通の葬式寺とは異なり、今どき珍しい信仰寺である。十年ほど前に、信者たちが集うのに不便だというので、金井賢秀・妙淳先生ご夫妻が築き上げたお寺である。最近、信仰一筋の人生をおくる義母が何かと寺を支えているようで、その関係で妻も時折通っている。

私のように、信仰へのあこがれを持ちながらも、小理屈がそれを阻んでいて、まだ遠くをうろうろしている者にとっては、微妙な場所である。しかし、このところ順調すぎる我が研究が、何かのお陰であることは確かなことなのだ。妻はかねてから私が「お坊さん」に向いているという。そんな気もする。

しかし今日は引き留められてしまうわけには行かない。妻を送り届ける早々に、これから古墳を見てまわるのでと言って辞する。そしていつものように地図も持たず歩きはじめる。目指すは大鶴巻古墳と浅間山古墳、いずれ

も倉賀野の代表的な古墳で、墳丘長が百二十三米と百七十二米となっている。しかも周堀を備えた堂々たる古墳で、浅間山古墳は全国でも六十位くらいにはランクされる大きさである。

日曜日の早朝のこと、誰の許可も得ずに私有地の古墳に立入れる。しかしまさかスコップを片手にと言うわけにも行かない。写真は随分とったが、それで何か判るほどではない。現地で見る古墳はなんと言ってもその立地条件が中心であって、資料がないと墳丘長ひとつ判らない。

そういえば、高崎の図書館にはまだ行ったことがない。大鶴巻古墳や浅間山古墳の資料漁りに行ってみるのも良いかも知れない。何よりも、日曜日の日課、三万歩を消化するのにはもってこいの距離だ。ああ、そうだ。保渡田古墳群の発掘調査資料もぜひコピーしたい。

しかし二時間ほどで辿りついた市立の図書館はたまたま蔵書整理中で休館日であった。せっかくの思いつきが一頓挫してしまったことに不満が残るが、明日にでも国会図書館で調べればよいではないか。

ところで、日本にはどのくらい古墳があるのだろうか。通常言われているのは三十万個であり、その内、前方後円墳は六千個である。それでは前方後円墳が一番多くあるのは何県であろうか。この質問に大多数の方が奈良県または大阪府と答えるに違いない。

確かにその通りであり、墳丘長百米以上を対象とすれば、全国に約三百個あるうちの半数近くが奈良と大阪にある。次に多いのが実は群馬県なのだ。しかし、中小規模の前方後円墳を含めると事情が様変わりする。一位千葉県、二位茨城県、三位群馬県と関東勢が上位を占め、以下岡山県、鳥取県、栃木県、広島県と続き、その後にやっと奈良県が出て来る。したがって群馬県は大小バランス良く前方後円墳が存在している点では、奈良県よりもむしろ典型的な古墳地帯なのである。そのひとつの代表例が保渡田古墳群である。

保渡田は妻が疎開していたところ。かって私が古墳の調査に夢中になっていた頃、妻が良く言っていた。保渡田にもそんな古墳なら沢山あると。しかしそのころ古墳尺度の研究と言えば、均整のとれたいわゆる天皇陵が中心で、地方の古墳などその外形さえきちんと記録されているものも少なく、あまり関心をもたなかった。

しかしもう十年くらい前になろうか、早春の日曜日、思い立って妻と保渡田に向かう。保渡田は群馬県群馬郡群馬町という珍しい地名のところにあるが、そこには、信越新幹線の工事で見つかった三ツ寺遺跡という豪族の館跡がある。専門家にとっては有名な遺跡であるが、地元では誰も知らない様子。新幹線沿いに歩いて行けば簡単に見つかるとの目論見は見事にはずれ、気がつくとそこはもう保渡田であった。そこで全く偶然に妻の知人「新宅のおばさん」に出会う。「新宅」は古墳群に隣接していて、古墳群の地主のひとりでもある。

保渡田古墳群は、二子山古墳(墳丘長百十一米)、八幡塚古墳(九十六米)、薬師塚古墳(百五米)で構成されている。いずれも五世紀の古墳で、三ツ寺の豪族たちの墓といわれている。平面図を見れば、周堀を巡らせた大規模の古墳であるが、その時の印象ではローカルな古墳群にすぎなかった。ただ「新宅のおばさん」が薬師塚古墳内に居を構える西光寺に案内してくれて、古墳出土の馬具類を拝見することができたのが大収穫であった。古墳出土の馬具としては日本でも有数のものだった。

この西光寺には後日談がある。わが知人、田村家範氏が、西光寺にある古墳出土の金属佛をぜひ一緒に見て欲しいというのだ。私は金属考古学分野では多少知られていて、このような依頼を受けることがよくある。歴史や考古学の専門家たちは古墳から仏像が出るわけがないと一蹴しているが、群馬県下には類似の仏像がかなりあるという。そう言えば朝鮮半島にも似た小銅佛がある。いずれ金属分析などを利用して、解明したいテーマであるがいまは先を急ごう。

その西光寺を江戸末期の学者松崎慊堂が訪れていることをたたまたま『慊堂日暦』で読んでいた。松崎慊堂は蛮社の獄の時、渡辺崋山を断固として庇った人物、我が敬愛する狩谷棭斎の親友である。由緒ある西光寺の住職も案の定そのことを知らなかったが、寺の歴史の一ページを飾れると喜んでくれた。

その頃ちょうど、八幡塚古墳の発掘調査が終わり、その一帯は「上毛野はにわの里公園」として整備され、「かみつけの里博物館」もオープンしていた。妻が気安く「新宅のマーちゃん」と呼ぶ「おばさん」のご子息も公園整備や博物館開館に大きな役割を果たしたらしい。

このように何かと縁のある保渡田古墳群が今回の僥倖を与えてくれた主役である。国会図書館でコピーした八幡塚古墳整備報告書を見ると、そこには均衡のとれた美しい復元平面図とともに、主要な計測値の全てが、結負制の基本単位すなわち古韓歩と量田歩で設計されたことが明示されているではないか。

もちろん報告書に古韓歩とか量田歩などという言葉が出ているわけではないが、報告者の若狭徹氏によれば、主な築造企画は二十四米単位、細部は一・六〇米の単位によっているというものだ。言い換えれば、基本企画は量田歩の五歩、細部は古韓歩によって企画されたということである。それが発掘調査によって得られた精緻な計

測値を基に、古韓尺を知らない研究者によって割り出されていることに大きな意義がある。

それからは芋づるであった。良く調べてみれば、群馬県の古墳研究第一人者の梅澤重昭氏も、綿貫観音山古墳発掘調査報告書で「使用された基準尺度(モジュール)は、墳丘や周堀各部の計測値に包含されているものと考えられ、その公約数値から帰納すれば、(晋尺)二十尺＝四・八〇米であろうと推定している……この基準尺度は、一尋＝一・六〇米とした場合の三尋＝四・八〇米とする可能性もある……」と指摘している。

そうなのである。調べてみれば群馬県で発掘調査された全ての大型前方後円墳の企画が、古韓歩と量田歩によって、見事に再現されるのである。

そればかりではない。南関東最大の千葉県内裏塚古墳も、東北地方最大の宮城県名取雷神山古墳も見事に一致している。兵庫県で発掘調査された五色塚古墳もしかりだ。

そうなると欲が出る。未発掘ではあっても墳丘長二百米を越えるような天皇陵等なら、多少の誤差があっても、議論に耐えうるだろう。そう考えて、データを整理して見てまたまた驚く。実にきれいに整理できるのだ。

例えば、墳丘長だけを対象として量田歩で示すと、日本最大の古墳、仁徳陵は百歩すなわち一里(四百八十米)、二番目の応神陵は九十歩、三番目と四番目の履中陵、岡山造山古墳は七十五歩、五番目の河内大塚古墳は七十歩、そして七番目、八番目、九番目、十番目の景行陵、土師ニサンザイ古墳、岡山作山古墳、仲津媛陵はいずれも六十歩で復元でき、その誤差はすべてほぼ一パーセント以内に納まっているのである。ある意味では発掘され古墳以上に良く合致している。

どうしてこんな簡単なことにいままで誰も気がつかなかったのであろうか。いや、もちろん気づいていた人は多くいる。森浩一氏をはじめ多くの研究者がこれらを晋尺の百尺単位(二十四米)で設計されたとしていたのである。晋尺百尺は量田歩の五歩の長さに等しい。

ところが、晋尺を基準にすると非常に良く合うデータが多くある反面、全く合わないデータも数多くあり、そこには極端な差異があるのだ。それは古墳の築造企画には量田歩を基本として使用しながらも、古韓歩の百歩(百六十米)、八十歩(百四十四米)なども用いられていたからである。これらはどうしても晋尺のきれいな整数倍では示せない。しかし結負制の基本単位なら、この問題を簡単にクリアーしてしまうのである。

その上、晋尺説にはもっと大きな問題点があった。それは、古墳のような大型工事に果たして尺の単位を使用

したかの問題である。周知のように古代中国では土地を測るのは歩が原則である。もちろんその歩は六尺のことで尺と無関係ではないが、晋尺で二千尺とか千尺と述べるためには、尺が土地の計測に直接使われた事例を中国に求めなければならない。しかし中国では土地制度の基準単位はあくまで歩であり、これは墓地の大きさを示す時も例外ではない。例えば、中国河北省から出土した中山王墓の銅板設計図にも墓域を示すには歩単位を用いており、『後漢書』『魏書』にみられる皇帝陵もみな歩で示されている。

更に言えば、晋尺を二十四センチとする議論そのものにも問題がある。中国では晋代の「ものさし」が六本見つかっているが、その半数は二十四・五センチであり、決して二十四センチではないのである。だから古墳設計に晋尺を用いたとする議論には致命的な欠陥がある。

ちょっと力み過ぎたかも知れない。しかし、私の古韓尺研究の原点はもともと古墳尺度研究にあった。それは簡単に解けそうでいて手強かった。しいて答えを求めると、雨後の筍のような研究者たちの論理に堕してしまうおそれがあった。それはとても我が矜持が許さなかった。そして実証的な研究を目指す過程で、統計学理論を応用し、古韓尺を帰納的に発見したのだった。

しかし古墳尺度研究にはやはり未練があり、相次いで発表される新説には目を通していた。けれどもそれらの多くは、むしろ当初の提案よりも恣意的で議論の水準も見劣しており、内心苦々しく思っていたが、いまさら古墳尺度の論争に参加することもあるまいと傍観していた。そこに今回の発見である。

思えば遠回りをしたものだ。しかしその遠回りが古韓尺を発見させ、朝鮮半島の土地制度「結負制」を解明させ、そして代制と結負制が同じシステムであったことを突き止めさせてくれた。その結果が今度の古墳尺度の解明につながっている。

さあ、これからこの新発見を歴史学者たちがどう扱ってくれるか、期待がふくらむ。

かくして我が尺度研究の旅は原点に回帰する。思えば不思議な邂逅であった。それは全て神仏に導かれたものであったのかも知れない。

新羅王京論文「三国史記遺事記事による新羅王京復元と古韓尺」『百済研究』三十六号。結負制論文「結負制の復元と代制の起源」『韓国古代史研究』三十号。前方後円墳論文「古墳築造企画と代制結負制の基準尺度」『考古学雑誌』投稿中

俳句

春風

大澤鷹雪（おおさわようせつ）

腕折れし　女将の焙る　干鱈かな
初蝶に　木喰仏の　笑顔かな
笛の音に　目白寄り来る　日和かな
頭より　洗礼のごと　垂り雪
雪深し　猿も入りたる　露天風呂
春風や　身体の幅も　人柄も
春疾風　農水省を　襲ひけり

ワイパーを　止めて受けたる　春の雪
名水と　なれば値の付く　雪解かな
降りかかる　火の粉を求め　御水取
棚下や　藤のシャワーを　浴びるごと
春愁や　思ひを遂げし　その果に
花散らす　破戒坊主の　凄みかな
宙乗りの　天女の眺む　花衣

吹き上げし　水の行方や　花筏
ほととぎす　胸の模様の　恋の数
ほととぎす　村は湖底に　沈みけり
山法師　咲く叡山の　けものみち
昏れ迫る　湖畔に著き　山法師
夏帯や　似合はぬものに　告訴状
夏帯に　手挟む笛や　一門会
夏帯を　締めて白壇　香りけり
朴の花　なかに仏陀の　おはすごと
ゴンドラの　目を奪ひけり　朴の花
エアコンを　嫌ひ風鈴　吊しけり
天道虫　吉凶いづれ　背負ひ来し
棟梁の　機嫌良きかな　天道虫

祝出版

二宮金次郎と13人の世界人

栄光出版社
三戸岡道夫　編　　1400円＋税
著者　三戸岡道夫、富国重道、滝澤中、丸山暢謙の四人で執筆
JF・ケネディ、小泉純一郎、マーガレット・サッチャー、豊田佐吉、松下幸之助、ベートーベン、ドラッカーなど金次郎と志を同じくする内外の著名人13人に肉迫する

短歌

行雲流水（六）

石黒修身

去る五月下旬から二週間余り、北イタリアを巡る旅をした。

本来観光旅行を短歌に詠むのは難かしく、〝絵葉書を見るようだ〟と酷評する評者も居る。

筆者が敢えてこの旅行詠を掲載するのは、次のような理由がある。

当代を代表する歌人の一人である岡井隆が、イタリア紀行を、短歌と言うよりも散文か詩のような短行にまとめ、本年二月に「伊太利亜」として上梓した。

それは、所謂専門歌人らしい、高踏的で難解な表現が多いが、その底流にあるものにはある程度共感が持てたと思う。

それに触発された訳ではないが、筆者は市井の歌詠みらしく、通俗を恐れずに旅の印象を平明に詠もうとしたのが以下の十五首である。

その他に、画家の安野光雄の画文集や、かねてから親しんでいる塩野七生の著作等に、想を得たところも多い。

旅行詠につき各々に若干の詞書を付した。

岸辺には館（ヴィラ）が綺羅を競えども
太古の湖（うみ）は鎮まりており

コモ湖の湖畔には、華やかな避暑地が拡がるが、このアルプス山麓の氷河湖は、俗化の気配はなく、歴史の重みを示すごとく端然と鎮まっている。

暫くは「最後の晩餐」に見入りたり
使徒十二人ユダは何処に

ミラノ・サンタマリア・デツレ・グラツイエ教会の食堂にある、レオナルド・ダ・ヴィンチの壁画に見入る（制限時間十五分）

ロミオとジュリエットの恋語られる
北辺の古都ベローナに居て

このシェクスピアの作品は、13～14世紀に、自治都市としてスカラ家支配下に繁栄した時代を背景とする。ジュリエットの家や二人の像のある広場には、人々が集まる。

ドウモウの時鐘（かね）を聴く朝ひと時の
旅愁を覚ゆボルツアーノの宿

北部トレンテイノ・アルト・アデイジエ州の首都でドロミテアルプスの観光地、歴史的にオーストリヤとの関係が深く、チロルの風情の濃い町である。

コルチナの邑はチロルの風情濃く
ドロミテに抱かれたいらぎて居り

コルティナ・ダンペッツオは北東のドロミテ峡谷に囲まれた、スキーリゾート地で、かつて冬期五輪が開かれたことがある。

国境を接するオーストリヤのチロル地方と景観が似ており、美しい小邑である。

ゴンドラに揺られしばしは夢の中
ヴェネツィアの運河（かわ）にカンツォーネ聴く

極めて月並みではあるが、運河を遊覧する観光用の舟である。この地の独特な風物として素直に楽しんだ。船頭が唄うのは、舟唄ではなく民謡であった。

サンマルコ・カフェテラスで楽を聴き
「旅情」の情景（シーン）を想い居るかな

ヴェネツィアの中心的な広場サンマルコは米映画「旅情」の舞台となった。

カフェ、フローリアンのテラスで暫時過したが、ここ

から見る広場の光景は絵のようだ。

リド島の旧きホテルに遺されし
　哀しき小説（ふみ）は「ベニスに死す」

このトーマス・マンの小説（日本版は、実吉捷郎訳、岩波文庫）は、映画化され評判になった。五十過ぎの老小説家の美少年への愛は不幸な結末であった。
筆者が宿泊したホテル・デ・バンが、小説の主な舞台になったと言われている

憧れしサンマリノには寄らずして
　吾が旅の経路（みち）憾（おもい）を遺（のこ）す

世界最古の共和国（都市国家）サンマリノには、かねてから憧れていたが、ツアーの旅程から外れており、残念な思いをした。

遂げざりし恋は如何にか故郷を
　追われしダンテ、ラベンナに眠る

ダンテはフィレンツェに生まれたが、政治がらみで永久追放され、ラベンナで生涯を閉じる。町の中に墓所がある。
「神曲」の中の天使ベアトリーチェは同名の初恋の人がモデルと言われている。

ゆるやかな傾（なだ）り連なるトスカーナ
　鄙（いえ）びたる農家点々として

車窓から見る田園風景は、この地方独特の長閑さがある。プロ・アマチュアを問わず画家が好んで描く所以かも知れない。

同胞の司祭が居りて懇ろに
　教え賜びしアッシジの院

アッシジは中世以来の巡礼地で、今も観光客に混じり巡礼の姿を見る。
聖フランチェスコ大聖堂の壁画の説明をして呉れたのが、滝さんと言う日本人の司祭で、懐しさを感じたものである。

中世の競技そのまゝ、競馬（パリオ）祭
　シエナの広場は民の坩堝に

シエナでは、パリオと称する古典競馬祭が、今も年二回町を挙げて行われている。
町の中心のカンポ広場は旗に名誉をかけた市民が熱狂すると言う。中世がそのまゝ残っている町である。

ローマなるスペイン広場の街路にて
　塩野七生に出逢わぬものか

在ローマの作家塩野七生は、スペイン広場近くの通りを散歩がてらにウインドウショッピングすると言う。
所謂ブランド店が並ぶので、妻には付き合わざるを得ない。

いささかに食傷気味の「イタ食（めし）」に
　烏賊墨パスタのいかすみが良い

連日のイタリヤ食事には食傷し、ワインばかりを飲むようになる。いかすみは生の魚の味覚があり、一時の食欲が甦る。

祝 出 版

関東古墳散歩

相原精次　　彩流社
三橋　浩　　1900円＋税

関東80ケ所の大小300以上の古墳を踏査した記録。関東の古代研究には必携の書。カラー写真により実物を紹介。古墳を通じて関東の古代文化を改めて見直す絶好の書。

小野小町物語（二）

島津隆子

六　蝶のような

小町が業平に巡り逢ったのは、一つの邂逅ともいうべきものであった。お互いに似たような過去をもった絶世の美男美女、そして、ともに天才的な歌人の出逢いである。

起きもせず寝もせで夜を明かしては
春のものとてながめくらしつ

起きるでも寝るでもないうたた寝に夜を明かしては、このよい季節の春の下で、何となく眺め暮らしています。あの高子との深刻きわまりない恋の傷心はどこえやら、「寝もせで夜を明かしては」にほんの少し官能の誘いを匂わせて業平が詠いかけると、小町も、

うたた寝に恋しき人を見てしより
夢てふものはたのみそめてき

私も同じようにうたた寝の中で恋しい人を見てからというもの、夢というものは、まぁ何と頼りにならないものでありましょうか。

と誘いに応じるような、応じないような、何気なく官能の抑えを詠じている。しかし、この業平との出逢いは、小町の誇りと貞操堅固によりいっそうの拍車をかけてゆく。

京都の下出雲寺で行われた知人の法要のあと、同席した小町を慕う歌人の一人安倍清行が、

包めども袖にたまらぬ白玉は
人を見ぬ目の涙なりけり

と、その哀切な真情を吐露したのに対して、

おろかなる涙ぞ袖にたまはなす
我は堰きあへずたぎつ瀬なれば

と小町はまことに手きびしく突っぱねている。

小町より十歳年下の安倍清行は、大納言右近衛大将安倍安仁という思慮深く威望のあった人物の子である。子息の彼もまた人品の賤しくない優れた人であったろうと思われる。

さらに、芸術至上主義者で至純一徹な大伴黒主が、

思いいでて恋しきときは初雁の
泣きてわたると人知るらめや

思い出すままに恋しいときは、初雁が啼いて空を渡るように、私も泣いてあなたの辺りを彷徨っていることを、あなたはご存知でしょうか。との呼びかけに対しても、

海松布なき我が身を浦と知らねばや
かれなで海人の足たゆく来る

海松布も生えない海に、おろかしくもしきりに出かける漁夫のように、あなたを見る気もしない私の所に、よく足しげく通って来られますこと。

とすげない。小町は大変正直な女性であったのだろう。ただでさえ言い寄る男性が多く、煩わしいことの多い身辺で、好きでもない人に曖昧な素振りをして面倒を引き起こしたくなかった。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌いと割り切った態度を、すっきりしていて良いと思うのは、直接かかわりのない人々だけで、当時、小町の周りの人たちには、美人であるだけにいっそう傲慢な女との評判がさかんになった。

大伴黒主は近江国志賀郡大友郷の人で郡の領主であったが、安倍清行同様身分は低く、従八位の人であった。それでも小町を諦めきれない黒主はうらみがましい歌を連綿と送ってくる。それに対し

海人のすむ里のしるべにあらなくに
浦見むとのみ人の言ふらむ

自分は海辺の里の案内人でもないのに、なぜ浦見むー恨みむとばかりおっしゃるのでしょうか。

とすげない返歌をする小町である。

このいいようのない誇りは虚勢なのか、生まれながらの貞淑さゆえなのか。

小町を知る人たちは次第にかつて小町が宮中で噂され

たのと同様の陰口を囁くのだった。
「あの女は、女として持つべきものを持っていない」
「宮中の噂はやはり本当であった」などと。

だが、良峰宗貞はそんな噂を一笑にふした。果して女の機能を欠くとしたら、あのように悩ましいあでやかさが、肉体に滲んでいるはずがない。女として当然悲しいはずの噂の渦中で、平然としていられるわけがない。

まして自分と同格の身分である蔵人頭の業平とは、艶然と心地よげに戯れているではないか。

散りぬればのちは芥になる花を
思い知らずも迷う蝶かな

宗貞は彼一流の皮肉っぽい軽妙洒脱さで、さ迷える小町という蝶に、二三度は言い寄ってみたが、結果はやはり他の男の場合と同じであった。

白いか弱そうな腕に触れれば、すぐにも落ちそうな風情を見せながら、だが、決して落ちないのだ。宮中では帝が小町に思し召しがあるとわかったので、当然の礼儀として遠慮したまでのこと。今や、小町は帝の許を辞した自由の身である。誰に遠慮気兼ねの必要があろうか。

宗貞はそう思うと、心に勇躍するものを感じて愉快であった。

七　良峰宗貞の戯れ

さて、宗貞が五条の女と始めて会ったのは、去年の春もまだ浅いある日のことであった。

用事があって供の者一人を連れ、馬で五条の辺りまで来たときのこと、どんよりと曇った空からひとしきり霙が降り、やがて雨に変った。途方にくれて飛び込んだのが、檜皮葺きの一軒家であった。

荒れた庭の桃の蕾はまだ固く、梅の花は終りに近かった。泥にまみれた花弁を踏んで、宗貞は家の中に向かい声をかけた。だが、何の返事もない。

宗貞は遠慮なく縁に上がって雨を避け、簾越しに中を覗くと、几帳もない貧しい居間に、若い女が火桶を抱えるようにして坐っている。幽鬼さえ漂う暗い空気のなかに、濃い桜色に重ねたみどり色の絹の帳が、家の様子と不似合いに婀娜っぽい。そこに浮いた女の白い横顔が美しい。

「突然の雨に困っておる。しばらく雨宿りをお願いしたいのだが……」

やはり返事がない。宗貞は仕方なく小降りになった雨脚を眺めたが、心はもうそこにはない。呼吸さえ慎ましやかに坐っている女の他には人の気配もなさそうだ。

二度まで声をかけたのに返事のないところをみると、この女はもしかしたら唖ではなかろうか。唖なら唖でこ

れもまた一興というもの。

天性の好き心が波のように高まって、宗貞は自分を抑えることができなくなってきた。

いや、別に抑える必要もないのだ。

「外はまことに冷えまする。いっそお部屋を貸していただきましょうか」

遠慮会釈もなく簾を上げて部屋に入ると、女は始めて驚いたようにぎくりとして中腰になった。

不躾を責める気配がその眼差しから体全体に動いたが、そんなことで物怖じする宗貞ではない。すかさずその華奢な手を握って、

「遠慮なさることは何もございませぬぞ」

臆面もなく主客の立場を逆転させる早業で小柄の女を掻き抱いた。女は身体を固くはしたが、強いて振り放そうとはしなかった。

宗貞は小刻みに震える温かな生きものを両腕と胸の膚に感じた。ほどよい形をした耳朶に血の色を滲ませて、触れた頬が燃えるように熱い。

「そなた一人でお暮らしか？」

「母と二人でございます」

始めてきく女の消え入るような声である。

唖ではなかった。こうなれば万事は快調というものだ。すぐ向うの障子の陰に女の母親が息を殺し、うさぎのように耳をそば立てているとしても、それが何の障害というえようか。

宗貞は片手で女の手を握ったまま、一方の手で烏帽子を脱いだ。にわか雨が結びの神であった。

思いがけず若い女を手に入れ、宗貞は久しぶりに新鮮な生き心地を味わった。漁色家のあとには思いやりの深い人情家になるのもこの男の特色である。

女と母親のもとへ溺れるように通いつめて、家を建て増し、召使も置かせ、部屋の調度品も整えてやった。

だが、情事はいつも拙く哀れである。きわめて自然な成り行きとして、女は身籠り、目にみえる腹の子の成長とともに、女の瑞々しさは消えてしまった。豊かだった頬はそげ、見事にこじんまりと固かった乳房はゆるみ、その先についた真紅の木の実も蝕まれたように黒ずんで乾いた。およそ女の青春は瞬く間に飛び去って、同時に宗貞も自分の注いだ情熱の行方に戸惑うのだった。

ああ、これこそ無常の風というものではないのか。

いつもながら情事の快楽の後に必ず実感する宗貞の慨嘆である。だが、今度の場合はいままでとはどこか違う、ともすれば深手にも似た火傷を負いかねない危険を本能的に感じるのだった。

女と始めて会った日と同じ供の者が、今日も宗貞の乗る馬の手綱を取っている。

空はどんよりと曇っているが、あの日のようなとげと

げしさはない。春は今まさに爛熟して、生暖かな微風は自分が蕩かせた女人どもの膚のように甘い、と宗貞は感じている。

そして、ここしばらく五条の女の処に足が遠のいているが、女の方から音沙汰がないのは、まだ、子供が生まれていないのであろう。宗貞はしばらく振りに女の家により、様子を見ようという気になった。

女の家に近づくと馬の蹄の音を聞きつけた小童が門の外に走り出てきた。

「どうじゃ、子供は生まれたか？」

宗貞が囁くように尋ねると、十一、二歳になったばかりの小童は、項に結んだ垂れ髪を撫ぜて、もはや一人前の女らしい媚びた目つきをして言った。

「ご難産でございます」

宗貞は意味もなく狼狽した。

女の母親に来訪を告げようと、宗貞は馬を降り、垣根の内に入った。

なるほど、新しく建てた産屋の方から陰陽師の加持祈祷が聞こえる。母屋の方からは一心不乱に無事安産の呪術を唱える母親の声がして、陰陽師の声と交錯する。

母親の声の方が狂気じみて甲高い。宗貞は枝を広げた梅の木の下に立って、際限のない、意味のとれない文句の繰り返しに耳を傾けていると、地獄の生暖かい風に吹かれているような陰惨な気分になった。

時おり鶯の声もする春風駘蕩の天地で、この場所だけが、なぜか暗く湿った穴倉のような雰囲気に感じられる。苦しみ喘いでいる女の姿が彷彿としてきて、女の持つ抜き差しならない宿業が重く迫ってくる。

宗貞は訪ねてきたことを後悔した。母親に気づかれないうちに引き帰そうとしたとき、西の軒先にぶら下がっている小さな紅色の袋が目に入った。そして、それが何であるか、すぐに了解できた。

袋の中には鳩の脚が入っているにちがいない。男の気持をこの家に繋ぎとめるための、当時流行った一種のまじないである。男の足が間遠になりはじめると、流行のように、女たちはこぞってこれをするのである。

だが、女がいくらまじないをしようが、宗貞にかぎって効力は期待できそうにもなかった。

宗貞には正室に二人の子供がある。それにさえ特別な愛情を持たないのだから、三人目の子供などに興味のあろうはずはない。それにもかかわらず、この日、女を見舞ってやろうという殊勝な了見を起したのは、しばらくのご無沙汰が何となく引け目となって、心のどこかに引っかかっていたからである。

つまり、宗貞は厚かましい漁色家であり、艶聞家であり、粋人であると同時に、なかなかの人情家でもあるという、大方の優雅な殿上人の例にもれなかった。

宗貞は桓武天皇の皇子で有名な漢文学者の良峰安世の子である。現在、仁明天皇からのおぼえもめでたく、従五位蔵人頭、左近衛少将良峰宗貞であることはいうまでもない。平安時代前期を代表する歌人であり、後の六歌仙の一人である。学問に優れ、機知に富み、軽妙洒脱な歌風を得意としていた。

天つ風雲の通い路ふきとじよ
　おとめの姿しばしとどめん

空を吹く風よ、雲の通う路を吹き閉じておくれ。おとめの姿をしばらくもとどめ眺めおきたいから。

という百人一首の中の歌の詠み人としても、つとに有名である。

家の中に入ろうとしていた宗貞が、体の向きを変えた気配を察した供の者が聞いた。

「お屋敷へお帰りでございましょうか」

「いや、寺に詣でる」

と宗貞は答えた。

やはり自分が来ないことに、女が不安を感じていたのだと知ると、宗貞は急にその心根が哀れになり、寺へ行って安産の祈念でもしようと思いついたのだ。

もっともそのような殊勝な考えばかりではなかった。お寺は気晴らしの場所でもあり、ことに春の花々の香気が漂う心地よい日和には、臈たけた女人の参拝も多かろう。宗貞はそう思うと、急にそんな華やいだ空気に浸って、陰陽師や母親の陰気くさい声を忘れてしまいたくなった。

八　寺での出逢い

お寺は宗貞が想像したように華やいで、朗々と聞こえる読経の声は聞く者の心に安らぎを与えてくれるようであった。宗貞は安産の祈祷を頼んでから、寺の回廊を一廻りした。

馬待ち場を向うに見て、内庭に下りようとすると、散り敷いた花びらを拾い集めている、派手な衣装の小童が目についた。小町が召し使っている小童である。

「小町が来ているのか……」

そう呟いたとき、今までこびりついて離れなかった五条の女の陰鬱な姿が、宗貞の脳裏からたちまちに消え失せた。

宗貞は弾む思いを抑え、小童に近づいていった。

小町と身近に接する機会を狙っていたのに、こんな処で逢えるとは、何と幸運なことであろうか。与えられたこの偶然の好機を逃したら、それこそ神にも仏にも面目ないというものだ。天地の初めから、この世で一番偉いお方である天皇さえ及ばなかった女人を、今日こそはこ

の己の才智と力にかけて、是が非でもものにしてみせる。
と宗貞は張り切った。
宗貞は小童になにがしかを与えて手懐け、自分は向うの池のほとりで待っているからと、小町に伝言させた。
小童が訳知りな素振りで去ると、宗貞は身を翻して内庭を抜け、池のほとりに出た。そして、緑の苔におおわれた石の一つに何食わぬ顔をして腰を下ろした。
大きな目を閉じ、ノーブルな鼻の頭に人差し指をつけると、まるで一首、歌でも詠むような風情にみえるのだが、宗貞はぜんぜん違うことを考えていた。
……二三ヶ月前のことである。一人の農夫が外出中の美しい上臈を盗んで他国に逃れたという事件が、宮中の話題をさらった。賤しい階級の下郎どもが女の掠奪を半ば公然と行う、物騒な世情ではあったが、余りにも身分の違う女を平然と盗むという、思い切ったやり口は珍しかった。
その話を聞きながら宗貞の脳裏を去来したのは、その農夫が美しい上臈を横様に抱いて、山野を彷徨する姿であった。身の程も知らぬたわけた妄念ではあったが、その農夫こそ最も幸福な男であるように思えて、宗貞は羨ましかった。
情事の醍醐味は殿上人の身についた気取った気分の取引きにあるのではなくて、そういう強引な荒々しさの中にこそあるのではないかと思えた。
いわば野生の中にである。宗貞は今、自分の頭の中で羨望に耐えないほどに伝説化している、その農夫の行為の真似事でもしてやろうかと、決心していた。
小町がやってきた。艶然と微笑さえ洩らして……。小童を連れなかったのはほんの礼儀であった。まさか宗貞にそれほど大胆な度胸があるとは思えなかったし、そんな一大決心をしているなどとは、小町が知る由もない。
あたりの人気も薄れ、どちらかといえば悟りすましたような閑寂な雰囲気が漂っている。しかし、まばらな緑の木立の間に小町の姿が現れると、そこには悪戯っぽい灯が点じたような明るさが感じられた。
「お久しぶりでございます。その後いかがお過ごしでございましたか」
宗貞が立ち上がって言うと、
「あなたこそ、いかがお暮らしでいらっしゃいましたか」
小町は口元に微笑を絶やさず、揶揄するように応じた。
「いや、私は別に、いつもと変りませんでしたが」
「いつもとお変わりなく、さ迷える蝶など追っていたのではございません」
小町のからかいに、
「いや、これは手きびしいことを」
宗貞は烏帽子に手をやって笑ってみせる。
だが、その屈託のない笑いの中に、怜悧な計算が素早く意図される。

女の警戒心をここまで和ませれば第一段階は成功というべきだろう。しかし大方は、和ませたのはいいが、後がそれっきりになりやすいのだ。ここで一転、がらりと雰囲気を変えねばならぬ、いとも自然に。
「この裏山でも歩いてみませんか」
ごく気軽に誘うと、小町も気楽に応じた。
「私もこのお寺にはよく来るのですが、ここから上へは参ったことがございませんので、一度歩いてみたいと思っておりました」
二人がそこから緑の木立の間を爪先あがりに登って行くと、寺の裏山に出た。林も深く竹林もあって、何をしようと人目につく場所ではない。
宗貞は先を歩きながら、後からついてくる小町を確実に射落とす知的ゲームの構想に耽っている。

九　秘め事

それはもちろん誰憚るところのない宮廷外のお遊びである。あえかに美しい白昼の情事のパターンを逸脱した、豊饒な野性味に満ちているのがいいではないか。
「いやぁ、かなりの登りぐあいですな。お疲れではございませぬか」
何気なくそう言って、宗貞は小町を振り返った。
「いいえ、それほどでもございません」
小町は手がとどく、散りかけた山椿の花びらを取って唇に当てた。すると、真紅の一片が光るような小町の皮膚の白さを際立たせた。その言うに言われぬ女の絵になるポーズに、思わず宗貞の喉仏が動く。
「では、戻りましょうか。そろそろ風が出てきたようでございます。あまり強くならないうちに……」
小町は余裕を示すためにそんなことを言ったのだが、その言葉に誘われるように、湿気を含んだ峰風がざわざわと頭上の繁みを鳴らした。
かぎられた人智には常に予期しないことが起こる。まして天候の異変においては。
風が強く吹いてきて、笹の葉が波のようにゆらぎ、重たげな山椿の花が三つ四つぽたっぽたっと落ちる。中の一つが小町の青い唐衣の肩に触れる……。
「山はもっと風が強くなった方が、凄味がでるというものですぞ」
小町の流し目が宗貞を捕えて言う。
「いかなる花も散りますゆえに……でございますか」
小町はそこから登る気配を見せないで、表着の裾をつまんだ。逆戻りをする姿勢なのだ。そして細い指先につまんでいる褄を弄ぶようにひらひらとさせた。
もはや自分の企みを見抜いているらしい。
宗貞は断乎として第三段階の作戦に出た。しっかりと小町の片袖を掴んだのだ。そして言った。

「今日は逃しませんよ」
小町が、やや後ろ向きにした腰を廻さなければ、宗貞は強引に引いてゆく心算である。小町だって片袖をもがれたら身の処置に困るだろう。
だが、小町は少しも狼狽えるようすを見せない。
「逃げるなんて、誰のことでございますか。いつもお逃げになるのは、少将さま、あなたさまの方ではございませぬか」
さかしい女の逆手である。小町の目は露骨な媚に光る。
宗貞は意表をつかれたが、
「だから、今日は私も逃げないというものじゃ」
つとめて落着いた厚かましさを装いながら、さらに膝もとにある手を握ると、小町は強く握り返して、同時にしなやかな全身を崩れるように傾かせながらも、
「このようなこと、お急ぎになるものではございませんわ、少将さま」
とたしなめる口調で言った。
「いやいや、この峰おろしの強い風では急がねばなりますまい。花は散り急ぐことこそ風情と申すもの」
「いいえ、少将さま、もっとゆっくりできる、人目を忍べる場所で……」
小町の言葉が宗貞の首から胸に吐息のようからみつく。
「山の中、林の中、風の中で散るべきときに散るのが、花のもつ雅と申すものじゃ」
宗貞は小町の腰に手を廻し、いちだんと力を強める。
「いいえ、お急ぎになるものではございません。もっと落着いた閑静な処で。その機会は必ず私がつくりますゆえ……」
小町は秀でた額にわずかにかかった髪を乱して、宗貞の胸の中で、恥じらいをふくんだ姿態をみせる。
それは確かに女の悩ましさの頂点であった。握り合う手には汗が滲んでいる。少将という位の殿上人の体面を重んじるとしたら、これで満足して小町がつくるという機会を待つべきであった。
だが、宗貞は薄笑いの中で頑なに拒絶の態度を示した。
そこには歌人宗貞の洗練された情緒に相応しいものは微塵もなく、力で女を組み伏せる夜盗にも似た下郎の卑しい顔があった。
「さぁ、参りましょう」
そのときになって始めて狼狽の色が小町をかすめた。
「まぁ、何というお方でございましょう」
小町は呆れ果てたという流し目で、少しこわばった笑いをみせる。素直に従うとみせて、なお逃れる隙をうかがった。
言葉を探して戸惑い焦っている風がみてとれる。隙さえ与えなければ女はもはや従順になる以外にない。
宗貞は最後のとどめに転じる。しっかりと掴んだ袖にさらに力を加え、左右に逃れようとする小町の唇を捕えた。

間昼間、お寺の裏山での冒険的行為は成功した。宗貞は数多いこれまでの情事の中で、これだけは生涯忘れることができないと思うほどの満足を得た。
お尻を押されながら、苔のある小径を危なっかしい足取りで歩いた小町。
だが、密生したほの暗い竹藪に入ると、こんな処で大声でも出して情事の顛末に傷でも負っては、と大人らしく判断したのか、もはや逃れられないと観念したのか。
悪びれない女として、あるいはそれ以上の積極性をみせて小町は男に立ち向かっていった。すくなくとも、その場で小町は、宗貞と対等の快楽者に変身した。
男の強引さに屈服した女と思われたくないという自尊心を示したのだ。
しかし、そんな小町の負けん気が宗貞にはかえってますます可憐な蝶と映った。
そしてそれは、完全に二人だけの秘密に終った。
小町が連れていた召使の小童さえ、ほんのわずかな時間にそんな処で秘め事が行われたとは考えるはずもなかった。
翌晩、菅原道真邸で催された歌合せにも、二人は何食わぬ顔で出席し表情ひとつ変えなかった。小町の歌にもそのことの痕跡は見られない。
宗貞は、

あさ緑いとよりかけて白露を
玉にもぬける春の柳か

浅緑色の糸によりをかけて、それに白露を玉にして貫いたとでも形容すべき春の柳であることよ。
何事もなかった顔で平然と即興の秀歌を詠んだ。
宗貞はほとんど即興歌をもって美的なものを客観的に詠うことを得意とした。その点では他の追随を許さない。春雨に濡れる青柳の風情を真正面から詠まないのだ。白露を宿してひょうひょうと靡く柳の枝を、浅緑の緒に貫く一連の珠玉に譬えることによって、優美さを盛り上げている。緒に通した玉を美しいものとした時代の好みの上に立って、知的技巧をふるっている。だが、技巧に堕さず余情ある秀歌としているのは、さすが宗貞の天才的な力量であるとは、その夜の判定主任者である菅原道真の評価であったそうな。

十　その後の宗貞

宗貞にとって五条の女の難産も、子が生まれてみれば大したことではなかった。

初めての子を産んだ後が女のいちばん美しい時期だというが、その通り女は疲労が回復するとめきめき容色を取り戻した。宗貞は女のもとにまた通い出した。

習慣的に新しい女にも手を出した。だが、どの女にも、これまでのような満ち足りた気持は味わえなくなった。小町に比べれば他の女は光を失い、味もそっけもなくなってしまうのだ。

それにしても、小町はこの自分のことをどう思っているのだろうと、宗貞はふっともの思いに沈むことが多くなった。

始めのうちは他を憚った素知らぬ表情のうちにも、通い合う何かを楽しんでいた。

今度は必ず機会（チャンス）をつくると言った、その機会を、宗貞は首を長くして待っていた。しかし、そんな気配どころか、そのうちに小町は二人だけになるのを明らかに避け始めた。

人前で合う眼差しは思い入れた妖しさに色めくほどなのに、ただ、それだけのことである。小童に恋文を渡したが、返して寄こした歌は、漠然としてとりとめのないものであった。小町の家にも訪ねて行ってみたが、逢おうともしない。

「なぜ、帝（みかど）のお言葉に従わなかったのです」

あの時、行為の後、竹薮を出て木立の間を歩きながら、宗貞は埒もない質問をした。

「もったいないからでございます。私はもともと我がまま者で、私以外に女を持つ男（ひと）が我慢ならないのでございます」

帝をただの男性としか見ていない小町の無作法に宗貞は驚いた。

何という高慢。帝は別格としても、ただ一人の女を守って満足している男がいるものか。食うや食わずの農民や浮浪者の階級ならいざ知らず、殿上人にそんな男のいるはずがない。そんな阿呆は地獄にだっているものか。女だってそうではないか、似たりよったりというものだ。

「それなら、あなたご自身も始めから終わりまで、ただ一人の男を守るとおっしゃるのですか」

宗貞が真剣な表情で聞くと、小町は澄んだ笑い声を上げて、

「それはお話がちがいましよう。私、これでも女ですもの、男性が一通りはなさる浮気ぐらいしてみとうございます」

これでは何となく理屈に合わない。男の浮気は封じて、自分の浮気は承認させようとする魂胆か。もっともこれは強引に自分と関係する羽目になった後での、八つ当たりの放言だろう。

と宗貞は解釈した。

しかし、後になって考えると、それは宗貞に対する批判であり、同時に以後の付き合いの縁切りを宣言する言

葉だったと思えた。

二日三晩熟考した宗貞は、再び小町宛に手紙を認めた。

正室は仕方がないが、それ以外の女とは手を切るから、逢って欲しいという要旨の文を書き連ねたのである。

明らかに嘆願である。かつてこんな不見識な文を書いたことはなかった。第一、女に対してこんな卑屈きわまりない立場に立ったこともない。宗貞にとって女は蜜蜂に吸われるために咲き誇る花のような存在だ。

蜜蜂は花から花えと飛び廻る地位と自由を持っている。花にとっても吸われることによって快楽を味わうのではないのか。

宗貞は確かに蜂のように気軽く明るい性格であった。人の心の奥底を探ってみるというような面倒な興味はなかった。それゆえにこそ、このような文は宗貞の自尊心をはなはだしく傷つけたが、小町に逢いたい気持の激しさに負け、恥を忍んだのだ。

ところが、その文には次の歌が返されてきた。

いとせめて恋しき時はうば玉の
夜の衣をかへしてぞ寝る

ふとまどろんで何となくやるせなく恋しいときは、夜の衣を裏返して寝ております。

真意のつかみきれないこの歌に、宗貞はとうとう腹を立ててしまった。それ以後、宗貞は余り外出をしなくなった。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

義人・伊豆頭七異聞（その二）

堀内永代

前号のあらすじ

勇気と思いやりがあって気前がよい裕福な本百姓・伊豆国仁田村の清六（村役人）の長男稲七（とうしち）は、十二歳の時、五人力の腕力で、痴漢五人に襲われた東の鍛冶屋弥吉の孫娘お春（十七歳）を助けた。後の韮山代官江川太郎左衛門英龍と江戸三剣豪の一人、神道無念流の達人斎藤弥九郎善道（韮山代官所手代）は、稲七の非凡な才能を見込んで剣の修業を命じた。稲七は苛酷な修業に耐えて剣の腕をあげていった。代官所で働くみなし子の久恵（十五歳）雪恵（十二歳）姉妹は、何くれとなく稲七の世話を焼いていた。

第三章　二つの悲愁話

（一）

文政十年（一八二七）三月上旬、江戸から韮山に戻ってきた斎藤弥九郎善道は、旅装を解くのももどかしげに稲七を庭先に呼び出した。

「稲七、ちょっと見ぬ間に逞しくなったな。素振りの稽古はいかがであった」

「ハイ、先生、始めはとてもきつくて何度もやめようかと思いました。でも、もう大丈夫です」

「ヨシ、よくやった。では明日から立木を相手に稽古をせよ。ただ力任せに立木に打ち込んでも木刀を折るだけだ。それだけではない、腕もいためる。そのことをよく頭に入れて稽古せよ」

「ハイ、かしこまりました」

その翌日から、稲七の立木相手の稽古が始まった。稲七は江川邸の南側の通称「江川砦」と呼ばれる高さ六十間（百メートル余）の山の頂上にある鎮守社と呼ばれている八幡神社に参詣してから、鳥居横の欅の大木に向かって木刀を構えた。

前日、弥九郎から受けた『力任せに立木を打ち込むな』という注意を思い出しながら、木刀を正眼に構え、目を閉じて整息した。すでに一日三百回、三カ月間の木刀による素振りの稽古を終わっている。木刀を打ち込む要領は会得しているつもりだった。

「キェー」

気合を入れて力まかせに打ち込んだ。

「ガッ」

欅の大木を打つ音と共に木刀は右方向に弾き返されてしまった。

木刀が欅の大木に当たったときの衝撃で、稲七の両手はビリビリッと痺れ、木刀を持つ手の感覚がなくなってしまった。

「ウウッ……」

あまりの痛さに呻き声が出た。

「駄目だ……こんな打ち込み方では駄目だ」

幸い木刀が弾き返されたので手が痺れただけで済んだが、さもなくば、木刀が折れるか、腕を痛めるかのどちらかである。

「どうしたらよいのだろうか」

稲七の経験不足の頭では良い知恵も浮かばない。はて、どうしたものか。

この山中では、知恵を貸してくれる人もいない。思案しながら山中を歩いていると、バタバタと山鳩が飛んで来て、稲七の目の前の細い小枝に止まった。小枝はしなって大きく揺れたが、折れることもなく、山鳩も跳ね飛ばされることもなかった。この情景を見て稲七は、

「そうだ、大木を相手にするのではなく、細い立木を相手にしよう」

細い立木ならば自分の腕を痛めることもない。

稲七は、比較的足場のよいところを選んで、細い立木を相手に打ち込みの稽古を始めた。しかし、細い立木相手の稽古も、一か所だけでは長く続けられなかった。十数回の打ち込みで、たちまち細い立木の樹皮は剥がれ、枝は折れて廃木になってしまう。通称江川砦の手頃の木々は一週間も経たないうちに、全部稲七の木刀の洗礼を受けてしまった。

江川砦の次は韮山城址の山々だ。この山は江川砦の数十倍も大きく深いので、山を一巡するのに一カ月ほどかかった。稲七は韮山城址の山々を駆け巡り、谷から峰に、峰から頂へ、あるときは駆け登り、あるときは滑り降りて稽古に励んだ。頭髪や着物は木の枝、茨に引っ掛かり、引き裂かれてぼろぼろになってしまった。

立木相手の稽古を一カ月ほど続けたときに、稲七はあることに気がついた。立木に木刀が当たる紙一重のところで木刀を静止すれば、立木を傷つけることもなければ、木刀も折れず、自分の腕も痛めない。静止する位置を意のごとく出来れば、真剣で打ち合ったときに、相手を

威嚇することも出来るし、斬り倒すこともできる。

「そうだ。間合いを見切ることだ。間合いを見切り、自分の思うところで剣を止めることができるようになれば最高だ」

稲七は間合いを見切ることに気づいたが、実際にやってみてそれが非常に難しいことが判った。今度は大木を相手に間合いを見切る稽古を始めた。大木の生えている場所によっては足場が悪く、木刀を構えることも容易ではない。ひと振り、ひと振りに工夫を凝らした。

それから二カ月が経過した。稲七は、五百町歩にも及ぶ江川家の山林を隈無く踏破した。江川家に仕える誰よりも山林に詳しくもなった。それ以上に稲七の身体に大きな変化が生じた。うっすらと不精髭が生え、面構えも精悍になり、腕も、脚も、胸も、腹も、背もすべての筋肉が逞しく鍛えられ、十三歳とは思えない立派な武者振りである。

誰の手も借りず、自分自身で鍛え上げた稲七を見た斎藤弥九郎は、

「でかしたぞ、稲七……。よくぞここまで一人でやったな。見事だぞ」

稲七は、自分の努力に対する師弥九郎の賛辞を聞いて、胸が熱くなった。

「先生、ありがとうございます……」

稲七は両手のこぶしをギュッと握り締め、顔を紅潮させて溢れ出てくる感激の涙をこらえた。

稲七は、もともと父親清六譲りの見事な体格であったが、暫く見なかった人は稲七の変貌ぶりに驚嘆の声を上げた。代官見習の江川英龍もその一人であった。

「斎藤先生、稲七は先生の見込んだとおりの若者になりましたな。稲七の努力と創意工夫もたいしたものだ。斎藤先生、ありがとうございました」

「恐れ入ります。殿からお褒めの言葉をいただき恐縮に存じます。稲七にもよく殿のお言葉を申し伝えます」

弥九郎は、人を見る目の正しかったことに満足すると同時に、非凡な稲七の天分にある種の恐怖すら覚えた。

「稲七は将来どんな人間になるだろう。この優れた才能を正しい道に使えば、後世に名を残すだろう」

弥九郎は大いに期待する一方、敵方に廻ったときの不安を消し去ることができなかった。

稲七は、剣の技こそ未熟であるが、打ち込み、斬り下げ、斬り上げ、横薙ぎ、どの動作も敏捷で、力を入れる時宜、加減が実に理に適っている。まさに『理気合一』である。

山中での三カ月の修業中、木の枝で顔を払われて目を痛め、あるときは、万丈の山、千仞の谷を駆け巡り、衣

服は破れ、手にも足にも生傷が絶えることはなかった。

稲七の衣服が破れればこれを繕い、怪我をすればこれを手当するのは、いつも久恵、雪恵姉妹であった。遠慮する稲七から破れた衣服を無理やり脱がせては繕い、消毒用の焼酎の焼けるような傷の痛みに悲鳴を上げる稲七を励まして手当をする久恵のいじらしい尽くし方に、周囲は驚きと感嘆の声を上げてこれを暖かく見守っていた。

「久恵姉ちゃん、稲七さんはあんなに激しい稽古をして大丈夫かしら……」

「大丈夫よ……稲七さんは強いから……」

「久恵姉ちゃん、稲七さんが本当に好きなのね」

「何を言うの……雪恵だって稲七さんが好きなんでしょ。二人で稲七さんを応援してあげよう」

久恵には、稲七が三つ年下という感覚はなかった。既に背丈は五尺五寸（一・六五メートル）となり、不精髭も生えた精悍な稲七は、久恵の心の中に愛の対象としてしっかりと生きていた。

一方、雪恵とて同じ思いである。屈託のない明るい笑顔ではしゃいでいるが、稲七を姉の久恵に奪われてはならないと、恋の競争心を燃やしていた。

(一一)

汗ばむような陽気のある日、稲七は代官所の用事で修善寺温泉の名主・野沢屋旅館野沢善大夫方を訪れた。野沢屋旅館は天長年間（八二〇年代）に創業したといわれる修善寺温泉きっての老舗旅館である。離れ形式の座敷が多く、静かな処を好む温泉客や人目を避けて逗留する客が好んで宿泊した。修善寺温泉には、野沢屋旅館のほかに建長風呂と名付けた鎌倉時代風建築の三層の甍を誇る老舗新谷旅館がある。野沢屋旅館は修善寺村を縦に流れる桂川の下流に沿って建てられていた。一方、新谷旅館は桂川の上流、奥修善寺と呼ばれているところにあった。野沢屋旅館は、後年、東の鍛冶屋の孫娘お春が身を寄せることになる畑毛温泉の旅館「駒乃湯本家」の縁者でもあった。

稲七は、代官所から渡された書状を名主・野沢善大夫に届け、その返書を持ち帰るよう代官所の役人にいいつかっていた。この日は運悪く、善大夫が所用で外出しており、帰宅したのが日没後であったため、稲七はやむなく名主宅に一泊することになった。

稲七は、名主宅の家人にすすめられて、湧出量の豊富な野沢屋旅館自慢の大風呂に入って汗を流し、遅い夕飯を食べて離れの客間で就寝した。

どのくらい眠っただろうか、隣の座敷からささやくような小声が聞こえてきた。若い男女の声のようだ。今頃誰だろう、何事だろう。不審に思った稲七は、それを確かめようと身を起こしたが、隣からの話声はぷっつりと途絶えた。稲七は自分の耳の錯覚かと思いそのまま布団

をかぶって寝てしまった。韮山から修善寺まで三里半（約十五キロ）を急ぎ足で歩いた疲れが出て、そのままぐっすり寝入った。

稲七の寝ている座敷と壁で仕切られた隣の部屋は、野沢屋旅館の一人娘理恵が寝起きしている部屋であった。ささやくような女と男の睦言は、稲七の空耳ではなかった。

「理恵さん・・・・会いたかった」

「光次さん・・・二カ月ぶりよ、わたしが嫌いになったの、それとも誰か好きな人ができたの・・・」

「そんなことはない、俺は理恵さんが好きだ、だからこうしてやってきたんだ」

「嬉しい・・・ほんとね。わたし嬉しくって胸がどきどきしているの・・・こんなよ・・・」

理恵は光次の右手を取って、丸く大きく成熟した胸に誘った。

理恵の誘いで乳房にふれた光次は、思わずその手の動きが止まった。理恵の乳房は、光次の手のなかには包み込めない大きさで息づいていた。

「ねぇ光次さん、あの時からわたしのからだは光次さんの物よ。それなのに光次さんたら二カ月も来てくれないんだから、わたし気が狂いそうになっていたの」

「俺だって理恵さんに会いたかった、だけど、おとっさんの目がうるさくて家を出られなかったんだ」

「光次さん・・・しっかりわたしを抱いて」

光次は左手で理恵を抱き締め、理恵の胸に当てていた右手で弾力のある大きな乳房を包み込んで揉み上げた。理恵はあえぎ声をあげて光次に抱き付き、大胆にも口を吸ってきた。光次も口を吸いながら、理恵の胸元を広げた。理恵の見事な二つの乳房は、天井を向いて乳首をツンと立てていた。光次はたまらず乳首をくわえて舌先で存分に吸い上げた。舌先が左から右の乳房に移ったとき、胸の谷間を舌先がなぞった。その瞬間、

「アァッ・・・」

理恵の口から悲鳴ともつかない愉悦の声が鋭く洩れた。二つの乳房の谷間に理恵の性感帯があったのだ。光次は乳首を口に含み、右手の人差し指で巧みに谷間をなぞった。喜びの声をあげる理恵、飽くことなき愛撫を重ねる光次、汗ばむ晩春の夜のとばりのなかで、二人は布団をはねのけて四肢をからめあった。

理恵の胸と腰はむっちりと肉づいている。理恵は火照ったからだをくねらせ、豊満な腰と太ももを、光次の若駒のようにバネのある下半身に密着させて激しく動いた。

光次の体が理恵を貫いた。二カ月間押さえに押さえていた理恵の感情が、いっきにほとばしった。

「光次さん・・・光次さん・・・」

激しい高まりが続き、理恵は光次の体を堪能した。二カ月間の悶えを埋めるのに十分過ぎる愉悦であった。

それから四半刻（約三十分）、うとうとしていた光次は、下腹部に柔らかい女の手の動きを感じた。理恵は半濁した意識のなかで光次を求めて手を動かしていた。光次の気力は前にもまして大きくなってきた。光次は理恵を抱き締めた。二人は肌と肌でお互いの愛を入念に確かめあって、時の過ぎるのを忘れていた。

「理恵さん、俺は理恵さんが好きだ。もう別々に暮らすのは嫌だ、夫婦になろう。必ずおとっさんにうんと言わせるから」

「嬉しい・・・ねぇあなた・・・理恵と呼んで・・・」

「理恵・・・俺は理恵を離さない・・・」

時刻は丑満時（午前三時半）を過ぎていた。理恵は光次の全身に愛撫の手をからめて離そうとしなかった。それから、また小半刻が過ぎた。光次は名残惜しげに理恵のからだから離れた。

壁ひとつ隔てた隣の座敷で稲七が何事も知らずに寝入っていた。稲七と光次は、それから数年後に死闘を演ずることになろうとは知るよしもなかった。

理恵は、野沢屋旅館の一人娘で、二十になったばかりである。聡明で気立てもよく、修善寺小町とうわさされる器量良しであった。ただ、野沢屋旅館が修善寺温泉で一、二の老舗であり、父親善大夫は名主で資産家でもあるため、釣り合いの取れた婿がなかなか見つからなかった。普通であるならば、とうに縁付いてもよい年頃であるが、家格が良すぎることがかえってわざわいしていた。

理恵と光次は、当地の名刹修禅寺恒例の秋の勧進大相撲で知り合った。修善寺温泉では、力士の身辺を世話する女子衆を各集落から輪番で出すしきたりがあった。今年は野沢屋旅館のある集落では、理恵のところにその当番が回ってきた。

理恵は、新谷旅館の次男光次の世話係を自ら買ってでた。周囲の人々は、理恵が野沢屋旅館と折り合いが芳しくない新谷旅館の次男をなぜ選んだのかと不審に思ったが、名主の一人娘のやることに口出しする者はだれ一人いなかった。

勧進相撲は一日興業が普通であったが、四年に一度、三が日興業が行われた。今年はJ度大相撲の年に当たっていた。新谷旅館の次男光次は、毎年優勝候補の一角に挙げられていた。特に今年は気力体力共に充実し、本命視されていた。光次は、二十一歳、身長五尺八寸（百七五センチ）、体重二十五貫（九十キロ）、惚れ惚れするような力士振りで、温泉場の女たちの一番人気であった。

相撲は、予選は抽選で決まった取り組による三番勝負の勝ち抜き戦で、千秋楽の決勝戦は二十人による総当たり制であった。相撲は予想通り本命の光次が優勝した。

光次の世話係を買ってでた理恵は、親身も及ばぬ尽くし方で、周囲の人々を驚かせた。

理恵は、始めのうちは興味本位に人気者光次の世話をしていた。中日の取り組み終了後、光次の周囲へ尽くす気配りに、理恵は冷ややかな言葉をかけた。その時光次は理恵を厳しくたしなめた。

「周囲の人々はすべて目上の人である。たとえ、自分は老舗旅館の次男で、横綱を張る身であっても、長幼の序はいかなる場合でも守るべきだ」

理を尽くして真摯に諭した。一人娘に甘い両親、いつもへり下だって追従ばかりいう奉公人の中にあって、始めて受けた叱正、厳しく理非を諭す光次の姿が理恵には輝いて見えた。理恵の心は一気に光次に傾いていった。

千秋楽の直会が終わったあと、二人の体が一つになるのに時間はかからなかった。

(三)

斎藤弥九郎は、江川代官の支援を得て、江川邸に隣接する金谷部落にある江川家歴代の菩提寺本立寺境内の一角に剣術道場を構え、金谷衆十三家を始め韮山代官所の役人や近傍の若者たちに剣術を教えていた。

稲七はこの道場でいよいよ剣道具をつけての打ち合いの稽古を始めた。半年以上の一人修業を積んだとはいえ、人を相手の稽古となれば様子が全く違った。樹木は向こうからは襲ってこない。人を相手にすれば少しでも気を抜けばたちまち打ち込まれてしまう。

稲七の稽古相手になったのは代官所手代松岡哲平の長男達之助だった。松岡達之助は稲七より二つ年長で、既に元服式を済ましていた。代官所には身寄りのいない稲七を弟のように思い、何くれとなく面倒を見てくれた。特に剣術の稽古や塾の間で学ぶ時などは頼りがいのある先輩でもあったし、良い競争相手でもあった。お互いに競い合い、励ましあって剣を学び書物を読んだ。

剣術の稽古では、始めのうちこそ達之助に太刀打ちできなかった稲七だったが、三月、半年、一年と月日が経つうちに、互角の勝負ができるまでに上達した。江川家で働く人達は、稲七と達之助の二人は、やがて韮山代官所を背負って立つ重要な人物になるだろうと噂していた。

稲七の剣術は少々荒削りであったが、三カ月間の素振りの稽古に続いて、三カ月間の立木相手の山中での苛酷な修業が功を奏し、加えて弥九郎の理に適った名指導によりめきめき上達していった。

弥九郎は江戸の練兵館の門人たちの稽古を指導した後、文政十一年(一八二八)三月上旬に韮山へ戻って来た。早速道場に姿を見せ、稲七と達之助の稽古振りをじっと見ていた。

「達之助、稲七、今日は俺が稽古をつけてやる。二人同時に打ち込んで参れ」

弥九郎は胴、籠手、垂れの防具こそ付けているが面は被っていない。

(先生は面を付けていないが大丈夫か。もし二人のうちどちらかの竹刀が先生に当たって怪我をさせてしまっては大変だ)

そう思った稲七と達之助は一瞬躊躇した。

「何をしている…二人とも臆したか……ではこちらから参るぞ」

弥九郎の声が終わらないうちに、

『バシ、バシッ』

という激しい竹刀の音がして、稲七と達之助の頭上に弥九郎の物凄い『面』が決まった。二人は一瞬頭が『がーん』として、立ち眩みするほどであった。

「二人とも何をしている…今一本いくぞ」

弥九郎の鋭い叱正が二人の頭上に飛んだ。今度は棒立ちの二人に電光のごとき早業の『突き』が襲って来た。

『バキッ、バキッ』

弥九郎の竹刀の切っ先が二人の喉元に決まった。

『ヅドーン』『ドドドーン』

二人は二間ほど吹っ飛び、いやというほど道場の床に叩き付けられてしまった。さすが江戸三剣豪の一人といわれる達人弥九郎の『突き』である。

弥九郎が稽古をつけるときは、稽古をつけてもらう弟子以外はすべて下座に控え、師匠の指導を一手たりとも見落とさないように、固唾を呑んで師匠の指導を見つめていた。

この道場は、間口十間(約十八メートル)、奥行二十五間(約五十メートル)の堂々とした建物である。さすが伊豆、駿河、甲斐、相模、武蔵を支配する韮山代官江川家肝入りの道場である。四、五十人が一度に稽古ができる広さがあった。

弥九郎が防具をつけて道場に立つのは三日に一度位の間隔であった。江川英龍が江戸本所の代官所に滞在することが多かったので、弥九郎は同僚の手代松岡哲平と共にその留守を守って、代官所に出仕していることが多かった。江戸の練兵館には、塾頭桂小五郎を始め多くの俊英がいたので、弥九郎がいなくても道場の運営には全く支障がなかった。

弥九郎は一年のうち半分以上は韮山に滞在し、代官所の仕事の合間を見ては道場で門人たちに稽古をつけていた。

弥九郎の稽古は、力の斎藤といわれるだけあって、評判通り峻烈な稽古であった。稲七と達之助を打ち込んだ鉄撃の『面』『突き』を、容赦なく門人たちに打ち込んだ。あまりの激しさに、弥九郎が道場に姿を見せると、門人たちはぴりぴりと緊張した。

しかし、弥九郎は一旦稽古が終われば別人のように優しくなり、ねぎらいの言葉をかけ、稽古で受けた門人たちの傷を手当したり、門人が望めば嫌な顔ひとつせず、五経四書の手ほどきもした。誠意のこもった弥九郎の指導により、門人たちは厳しい稽古にも耐え、誰一人落伍する者はなかった。門人たちの上達に遅速はあったが、誰も彼も一様に上達していった。

弥九郎は、稲七と達之助の二人に免許皆伝を与える日が近いことを感じていた。

(四)

文政十二年（一八二九）四月、半年振りで江戸から韮山に帰ってきた江川英龍は、代官所手代斎藤弥九郎と松岡哲平を自室に呼んで二人に次のことを頼んだ。

「仁田稲七のことについて、両親の清六・おかね夫婦と話をしたい。ついては五月五日端午の日の明け四つ（午前十時）頃までに、代官所まで来るように使いを出していただけないか」

弥九郎と哲平は、英龍が帰国早々に二人を自室に呼んで指示を出したその理由を訝った。英龍の自室を退いた二人は、やがてあることに気が付いて、顔を見合わせてにっこりと頷いた。

韮山代官所からの突然のお召しに仁田村の清六・おかね夫婦は、何事だろうかと驚いた。日頃無鉄砲な稲七が、大きな不始末を引き起こしてそのお咎めを受けるのではないか、いやいや弥九郎先生の薫陶を受けて成長著しいという噂を聞いているから、何か良いお話があるのではないか、などあれこれ思案しながら五月五日を迎えた。

清六・おかね夫婦のところへ、代官所から英龍直々の呼び出しがあったという話は、あっという間に仁田村中に広まり、名主仁田利左衛門も当日の早朝に清六・おかね夫婦の家に駆けつけた。

「清六・おかね、代官様からの急なお呼び出しとは何事だろうか…清六は日頃からわたしを補佐して村のため、人々のために尽くしている。よってお褒めがあるのではなかろうか」

「いやいや名主様、お褒めを頂くならば名主様もご一緒の筈です」

「まさにその通りであるな。では稲七のことだろうか…」

名主を始め村人たちは、あれこれ心配しつつ清六・おかね夫婦を送り出した。

紋服袴に身を整えた清六と、清六のところへ嫁いでから初めて袖に手を通したという式服を着たおかねの夫婦は、決められた時刻の少し前に代官屋敷の裏門をくぐった。恐る恐る勝手口の障子戸を開け、腰を二重に折って、

「もーし…お代官様のお召しがござりましたので、仁田村の清六・おかねがまかり越しましてござりまする。なにとぞお代官様にお取り次ぎをお願い申し上げまする」

「おぉ、お見えになられたか、お待ちしておりましたぞ…すぐに松岡様にお取り次ぎしますからしばらくお待ちを…」

応対に出た代官所の下役人は、にこにこと愛想よく声をかけて奥に入った。

清六とおかねは、英龍からの直々のお呼び出しということで、勝手場の土間の片隅に身を固くして役人が戻ってくるのを待った。

「いやいや、お待たせした。殿様のお申し付けである、表へ廻られよ」

「えエッ…」

清六とおかねは、一瞬、役人の言葉を聞き違えたかと錯覚した。

「驚かれるのも無理なかろう、殿様がそのように仰せられておる。稲七も表玄関で待っておる。急いで参られよ。誰か案内してあげよ」

一介の村役人の清六夫婦が、代官の公邸兼私邸たる江川邸の表玄関に召し出されるとは何事だろう。たとえそれが内玄関といえども、そのようなことは、韮山代官所ではかってないことである。しかも稲七が表で待っているとは…。

清六とおかねは、気も動転し、無我夢中で、勝手場で手足を拭い、埃を払い、襟を正し、江川屋敷の下男の案内でいったん裏門を出た。濠端をぐるっと廻っていかめしい茅葺き門をくぐり、正面玄関前に腰を屈めて控えた。式台の片隅には、先程から稲七が片膝ついて待っていた。

「父上、母上、おいでなされませ。殿様がお待ちでござります」

僅か三年間見ないうちに、稲七は見違えるように成長していた。もともと上背があり、肩幅も広く大人を凌ぐほどの体格であったが、斎藤弥九郎を始め先輩の指導と同輩達との切磋琢磨で、顔や体もぐっと引き締まり、日焼けした手足とともに立派な青年になっていた。

清六とおかねが稲七に声をかける間もなく、奥からサッサッと足音がして、

「おぉ…見えられたか、清六どの、おかねさん、おめでとう。さぁさぁ上がられよ、殿がお待ちだ」

とにこやかに代官所手代松岡哲平が声をかけた。遠慮して二人が躊躇していると、稲七が、

「さぁ、さぁ、父上、母上、早くお上がりなされ。殿様をお待たせしてはご無礼でござる」

『老いては子に従え』という言葉通り、稲七に急き立てられて二人は高い式台の階段を一段一段上がった。

清六とおかねは、英龍の自室の前まで哲平に案内され、後ろには稲七が付き従っていた。英龍の自室の障子はいっぱいに開けられ、廊下には哲平の長男達之助が控えていた。

「殿がお待ちになっておられる、ご挨拶されて中に入られよ。気を楽にされてな…」

哲平に促されて、二人は敷居から離れた廊下に両手を付いて、

「へへへー…」

二人は平蜘蛛のように平伏した。お殿様の面前に出るなどかってないことなので、身を堅くして挨拶した。

「おぉ、朝早くからご苦労でした。用件を伝えずに呼び出して相済まなかった。これには少々訳があってな。さぁ、さぁ、さぁ…中にはいられよ。遠慮せずにな」

英龍に優しく声をかけられても、清六とおかねは、緊張のあまりガタガタと小刻みに体が震えて動けなかった。部屋の中には弥九郎も座っていた。弥九郎も中から声をかけ、

「清六どの、おかねさん、殿がそうおっしゃっておられる。遠慮せずとも中に入られよ。そこに畏まっておられては、殿もお話ができないでしょう。さぁ、さぁ…」

清六とおかねには、その場の雰囲気がなんとなく和やかに感ぜられた。やや緊張がほぐれてきた清六とおかねは、おずおずと膝行して座敷の端し近くに平伏した。

「まぁまぁ…手を上げられよ。そう固くなっておられたのでは、話ができぬは」

英龍に促されて二人は恐る恐る顔を上げた。英龍は胸を反らせ『エヘン』と一つ咳払いをして、

「今日、その方たちを呼んだのは稲七のことであるが、稲七も当代官所に参ってから三年経ち、年も十五歳とあいなった。剣術も斎藤先生のご指導で上達したということだ。わたしも一度立ち会ってみたいと思っている」

「ウヘェー…もったいないお言葉でござりまする」

「いやいや、剣術だけではない。学問も先生のお陰で進歩したそうである。どうでしょうか斎藤先生」

弥九郎は、英龍にとっても剣の実質的な師である。剣だけではない。学問においても師であった。神道無念流岡田道場では、弥九郎は師の岡田十松に代わって、門人たちのすべてについて指導する立場にあった。英龍は、代官所にあっては当然身分は上位であるが、役目を離れたときには一歩下がって弥九郎を師として尊敬していた。後年、英龍が名代官と敬われた資質は、すでにこの頃から培われていた。

「ハハッ…殿の仰せの通りでございます。稲七は立派に成人いたしましてございます」

「のぉ清六、稲七は体も一段と逞しくなった。そこに控えておる松岡達之助も既に元服しておる。そこでだ、今日はわたしが烏帽子親になって、稲七の元服式を執り行いたいと思って、その方たち夫婦を呼んだのだ。あらかじめ稲七の元服式のことを伝えたのがよかったであろうが、それではその方たちが遠慮して、ことが進まなくなると思ってな。斎藤先生も松岡殿もそれに同意して下さったので、このような仕儀になったのだ。驚かせて済まなかったな」

松岡哲平も弥九郎と同様に、英龍の補佐役として英龍の父英威が招聘した人物である。

「ウヘヘェー…恐れ多いお言葉でござりまする。稲七めにはもったいないお言葉でござりまする。今までお目にかけていただいただけで充分でござりまする……そのうえ烏帽子親様までとの仰せでは…ウヘヘェー…」

「よしよし判った。その方たちが遠慮するのも判らぬではない。しかし、稲七にはこれから私のために、いや、支配地住民のために存分に働いてもらいたいのでな。斎藤先生いかがでしょうか」

「殿の仰せのとおりでございます。清六どの、おかねさん、殿がそうおっしゃっておられる。お受けした方がよいのではないか。稲七のためにもなるであろう」

このような時には意外と女の方が度胸がある。おかねは清六の袴の裾を引っ張り小声で囁いた。

「お前さん、お殿様の仰せであられる。斎藤様も松岡様もあのようにおっしゃって下さります。お受けした方がよくはないでしょうか。ねぇ、お前さん」

「……」

真面目な清六は、平伏したまま顔を真っ赤にし、額には汗がいっぱいだ。弥九郎が清六の緊張振りを見るに見兼ねて、

「清六どの…もう少し気を楽にされよ、さぁ手を上げられよ。さぁさぁ…」

弥九郎の声かけで清六もハッと我に返り、

「恐れ多いお言葉でござりまする。稲七めには過ぎたるお話でござりまするが、お殿様の有り難いお言葉でござりまするによって、謹んでお受けさせていただきまする。稲七めは誠に冥加者にござりまする…」

善は急げとばかりに、江川邸では大急ぎで元服式の支度を始めた。あらかじめ内々で英龍から命ぜられて用意をしていたので、手際よく支度が調った。お女中衆も人気者稲七の元服式だから大張り切りであった。勿論久恵、雪恵姉妹も接待係の中に入っていた。中でも芳紀まさに十八歳、娘盛り久恵の入れ込みようは大変であった。美しく化粧をし、きらびやかな着物を着付け、輝くばかりの美女振りである。美しく装った久恵を見た英龍は、

「久恵、今日は一段とめかしたな。そちも嬉しかろうな…粗相無く相勤めてくれよな」

久恵は、殿様にわが心の中を言い当てられたと察して、嬉しいやら恥ずかしいやら、袖で顔を被って真っ赤に

なって立ちすくんだ。
「よいよい…久恵も今が花の真っ盛りだ、胸の中は熱くなっておろう。その胸の中に『愛』が飛び込んで燃え上がった。これを消すのは稲七以外には誰もできなかろうって…」
殿様もなかなか粋なことをおっしゃる。
そうしているうちに万端支度が調い、それぞれ所定の位置に座った。
「支度ができたようだな、清六、おかね、稲七、今日はわたしが烏帽子親である。よってわたしが稲七の名前を付けることになる。よいな…」
「ありがたいお言葉でございまする」
元服式の烏帽子親は、父親より地位が上位の者がなるのが通例である。一介の村役人の清六、稲七親子にとって、将来の韮山代官たる英龍が烏帽子親になるということは、これ以上の光栄はない。如何に稲七への期待が大きいかということの表れである。
「では、わたしが稲七の名を付けよう。英龍の一字『龍』と斎藤先生の弥九郎の『郎』を一字いただいて『龍郎』とするが如何かな。龍は神聖で、かつ、瑞兆のしるしといわれる縁起物じゃ。『郎』は立派な男子という意味じゃ」
「ウヘー…稲七めにはあまりにも恐れ多いことでござりまする…」
「斎藤先生、先生のお名前の一字『郎』をいただきたいがお許しいただけますか」
「殿の仰せのとおりで異論はございません。喜んで…」
「よしよし、これで決まった。これからは龍郎であるぞ」
稲七の元服式も滞りなく終了した。
それから三年後、清六一家と稲七の上に大変な悲劇が起ころうとは、神ならずとも知る由もなかった。

(五)

『好事魔多し』というが、鍛冶職人喜三お春の若夫婦にある事件が突然襲って来た。まさに悪魔との遭遇である。
事件は農繁期を前にした五月上旬に起こった。東の鍛冶屋をお春の祖父弥吉から引き継いだ喜三は、予てから注文を受けていた鍬、鋤などの農機具を、注文主の農家に届けに行っている最中の出来事であった。
喜三は弟子の松蔵と為吉を連れて、仁田村に隣接した畑毛村の温泉場付近を通りかかった。その時前方から、とてつもなく巨大な黒牛が、鼻輪に通した引き綱を引き千切って、ダダダダッと物凄い勢いでこちらへ向かって突進してきた。
農道沿いに建っている物置小屋の前で、その家の子供なのか男の子と、女の子が二人遊んでいた。二人の子供は暴れ牛の勢いに驚き、恐怖のあまり顔は引きつり、逃げることも出来ず、身を固くして立ち竦んでいた。
「危ない…」

暴れ牛の蹄に蹴られればひとたまりもない。喜三は咄嗟に子供を背にかばい、暴れ牛の方を向き、持っていた商売用の鋤を両手にぐっと握って暴れ黒牛に立ち向かった。
「親方…危ない、逃げろ」
二人の弟子は同時に叫んだ。その瞬間、
『ガキッ…』『バシッ…』
暴れ牛の太い大角が喜三の胸板に突き刺さった。喜三は暴れ牛の四斗樽ほどもある太い首に、鋭く鍛えあげた真新しい鋤を渾身の力をこめて打ち込んだ。だが、喜三は暴れ牛の頭突きをくらって道端の物置小屋まで一気に押し込まれた。喜三も負けてはいない。小屋の壁まで押し込まれながらも、両手で持った鋭い鋤の刃先を暴れ牛の首に突き刺し、グイグイと押し込んだ。
「ウワァー…親方…」
松蔵と為吉は、無我夢中で鍬や鋤で、暴れ牛の前脚、後脚、胴体と、ところかまわず力一杯殴りつけた。
人間三人対牛一頭の物凄い死闘が続いた。怒涛のような暴れ牛の圧力で、物置小屋がミシミシ、ぐらぐらと家鳴りがして、屋根藁がバラバラ飛び散った。小屋の中では農機具らしきものの倒れる音が外に響いてきた。二人の子供は泣き叫び、阿鼻叫喚さながらの生き地獄である。近くにいた農民が何事が起こったのかと思って駆けつけて来た。農民たちも寄ってたかって暴れ牛を殴りつけた。
闘うこと幾十合、暴れ牛は脚を殴られて骨が折れたのか、
『グモーン…モォーン』
物凄い唸り声をあげ、ドドドッ…と巨体を震わせて左後脚から崩れるように横倒しに倒れた。
喜三は、暴れ牛の首に突き立てた鋤の柄を握り、断末魔の怒鬼のように真っ赤な顔をして激痛に耐えていた。喜三の仕事着は、胸から腹にかけて暴れ牛の大角に抉られ、鮮血で真っ赤に染まっていた。
「親方…大丈夫ですか」
「親方…しっかりしておくんなさい」
松蔵と為吉は、同時に声をかけた。喜三はこれ以上踏ん張り切れず、膝から崩れるように暴れ牛の頭の上に倒れていった。
「為吉さん、早く妲さんに知らせてこいや」
松蔵にいわれてハッと我に返った為吉は、あたふたと仁田村の東の鍛冶屋へ向って脱兎のように駆けて行った。
痩せ型ですばしっこい松蔵と、太って背が低く、ちょっと動きの遅い為吉の二人であったが、この一大事をお春に知らせることに気がついたのは松蔵であった。松蔵に言われて遅足の為吉が知らせに行くとは、その場にいた人達の気が動転していた証拠だった。
この大事件のあった畑毛村の温泉場から、東の鍛冶屋まで半里(約二キロ)、為吉は近道をして田圃の中を駆けて行ったが、脚が縺れて体が思うように前へ進まなかっ

た。ようやく東の鍛冶屋までたどりついた為吉は、
「妲さん…た、た、た、大変だ…」
息が弾み、喉が引きつって声が出ない。
「為吉…どうしたの…」
お春は勝手場の水瓶から柄杓に水を汲んできて為吉に飲ませた。
「さぁ…水を飲んで落ち着いて話をしてごらん」
「ゴクゴク、ゴク…フゥ…妲さん大変だ。親方が暴れ牛の角に引っかけられて、大怪我を負ったんだ」
「それって本当…どこで…どんな怪我…」
「注文の鋤や鍬を届けに畑毛の温泉場を通っていたら、牛が暴れて子供が危なかったもんで、親方が子供を助けようとしてやられたんだ、すぐ行こう」
びっくり仰天したお春は、着物の裾を乱して駆け出した。
為吉がお春のところへ注進に向かった時は、喜三はまだ息をしていたが、お春が現場に着いたときは既に息を引き取った後であった。
「お前さん…しっかりしておくれよ…目を開けておくれよ…」
お春は金切り声をあげて喜三にすがりつき、喜三の体をゆさぶったが、喜三は二度と目を開けることはなかった。
お春は弟子や村人の慰めの言葉も耳に入らず、がっくりと肩を落とし、喜三の遺体に取りすがって東の鍛冶屋に帰ってきた。
夫婦仲も良く、仕事も順調であった喜三・お春の夫婦に突然襲った悲愁話であった。
喜三の死は、お春の祖父弥吉が死んでから二年後のことであった。喜三は享年二六歳。お春は二一歳の若さで寡婦となった。

夫の喜三と死別したお春は、これを不憫に思った畑毛温泉の老舗旅館「駒乃湯本家」の主人鉄造お銀夫婦に引き取られ、仲居見習として働くことになった。幸いお春は、遠縁に当たる鉄造お銀夫婦の好意もあって少し落ちついたが、突然の悲しみからなかなか立ち直れなかった。
お春は、喜三が事故で急死した痛手から立ち直れないまま一年が経過した。お春は、喜三の弟子松蔵と為吉の二人を親元に帰し、東の鍛冶屋は後継者もないまま心ならずも廃業した。
祖父弥吉の死に続いて夫喜三の急死という精神的な痛手を受けて、お春はかってのお春とは別人のように無口な女になってしまった。
溌剌として笑顔を振りまく明るいお春の姿は全く影を潜め、木綿の御仕着を着て、化粧っけのない顔で人目を避けるように目立たない日々を送っていた。

畑毛温泉は、鎌倉時代に源頼朝が軍馬の傷をこの温泉で治したと言い伝えられており、十五軒の旅館の湯は、それぞれ切り傷に効能があり、また、湯にゆっくり浸かって体をあたためれば子宝にも恵まれると評判も高く、温泉場は常に湯治客などで賑わっていた。
温泉場には、湯治客の癒しの場としてつきものの湯女を置く旅館も多く、時には客の求めで躰をまかせる女の露骨な嬌声も聞こえた。また、子宝を望む中年夫婦の微笑ましい性の営みもかいま見られ、少々淫靡で華やいだ温泉場の風景があった。
年の瀬から逗留して正月を温泉場で過ごす裕福な分限者や、暮れから正月を忙しく働いた商人が家族連れで長逗留したり、花見などの行楽客や農繁期を終わった仲間同士の湯治客など、さまざまな温泉客が四季を問わず宿泊していた。

それからさらに一年が経過した。喜三お春の若夫婦の上に、突然起こった不幸な出来事から、日陰の人のように目だたなくなっていたお春も、駒乃湯本家の主人鉄造お銀夫婦の思いやりと周囲の暖かい励ましで、少しづつ生来の明るさを取り戻していった。お春は二三歳になっていた。

(六)

『吾妻鏡』文治三年（一一八七）七月十八日の項目によれば、源頼朝の家臣伊豆国仁田郷の仁田四郎忠常は、源範頼の麾下に入り平家追討軍に加わって九州を転戦した。寿永四年（一一八五）、おごれる平家は遂に滅亡した。平家滅亡後、仁田四郎忠常は、伊豆国仁田郷、即ち、この物語の主人公仁田稲七の生家のある仁田村に帰陣した。
それから二年後の文治三年、忠常は生死をさまようほどの大病に冒された。さしもの勇者忠常も病には勝てずどっと床に着いてしまった。忠常の妻菊は、幼少より信仰心が篤く、三島大明神に帰依し、毎月一度三島大明神へ参詣していた。大明神への道程は一里十町（約五キロ）で、屋敷の近くの江尻の渡し場から、小舟に乗って大場川を遡上って参詣した。
妻菊は、夫忠常の大病の平癒を祈って『我が命に代えて夫忠常の命を扶け給え』と祈願書を捧げて懸命に祈願した。菊の祈りが功を奏し、忠常は病も癒え、元の元気な体に回復した。
信仰心の篤い菊は、お礼参りのため、毎月決まっている参詣日、七月の十八日に小舟に乗って三島大明神へ参詣した。この日は大変天候が悪く、豪雨が前夜半から降り続いていた。お礼参りの日延べを薦める周囲の声を押さえての参詣であった。
いつも通り小舟に乗って大場川を遡上って大明神への参詣を終えて帰路についた。我が家近くの江尻の渡し場まで着たとき、突然小舟は転覆し、供の者数名と共に

あっという間に菊は激流に呑み込まれてしまった。やがて供の者は浮き上がって自力で川岸に這い上がり、九死に一生を得たが、どうしたことか菊は遂に浮かび上がってくることができず、黄泉の道へ旅立ってしまった。

仁田四郎忠常の妻菊の事件は、三島大明神が、妻菊の『我が命に代えて夫忠常の命を扶け給え』と祈った願いを納められ、小舟を転覆させたのではなかろうかと人々は話し合った。『我が命に代えて…』と祈った夫思いの菊の心情に、世の人々は心を打たれ、鎌倉武士の妻の鑑みと称えられ、貞女として後世にその名を残した。

仁田稲七の父親清六は四四歳、名主仁田利左衛門を補佐し、筆頭組頭として、仁田村になくてはならない村役人として重きをなしていた。清六は、清廉潔白、温恕な人物で、責任感が強く、勇気があって気前がよく、農民や町人、職人たちから等しく敬愛されていた。

清六は、背丈は五尺八寸（一・七メートル）、体重三十貫（一一〇キロ）と堂々たる偉丈夫であった。また信仰心も篤く、『村人に大災異ありたるときは身命を捧げてこれを救わむ』と誓詞を三島大明神に差し入れていた。

仁田四郎忠常の妻菊の事件があってから六四五年後、すなわち天保三年（一八三二）九月二十六日、仁田龍郎稲七が元服式を行った日から三年目のことである。

この年は、春から夏にかけて天候に恵まれ、米を始め農作物は順調に生育して近来にない豊作が予想されていた。しかし、九月に入ってから小さな台風が続き、山野はたっぷりと水を含み、山崩れ崖崩れが随所で発生し、河川も氾濫して、堤防が各所で決壊するなど被害が続出していた。伊豆の暴れ太郎の異名をもつ狩野川は、大河なるが故に流域に及ぼす被害も尋常ではなかった。

この日（天保三年九月二十六日）、伊豆地方を襲った台風は、百年来の集中豪雨を齎し、豪雨は前夜より降り続いて狩野川は増水に増水を重ねていた。仁田村も対岸の日守村も、船着き場の桟橋や荷揚場倉庫などの流失に備えて村人は総出で警戒に当たっていた。特に仁田村は、支流の大場川、来光川、柿沢川の合流地点にあるため、洪水に対する恐怖と不安で全村がおののいていた。

集中豪雨は止むこともなく降り続け、天城山中の支流大見川の筏場の貯木場が、鉄砲水をまともに食らって筏流しの前の材木数百本が流失したという噂が流れてきた。さらに狩野川源流に近い木谷川と持越川の合流する湯ヶ島温泉場では、川の両岸が濁流に削り取られ、旅館数軒が倒壊し、民家数十軒と共に増水した川に呑み込まれ、多数の死者、行方不明者が出たという話が広まって、流域住民を恐怖のどん底に陥れた。

暮五つ（午後八時）頃になると、狩野川の大洪水は、暴

れ太郎の異名通り、ごうごうと不気味な水音を夜空に響かせて、下流流域の村々に襲いかかった。堤防を決壊し、畠といわず、田圃といわず、民家といわず、すべてを濁流のなかに呑み込んでしまった。

修善寺温泉入り口付近の瓜生野、熊坂、牧之郷、神島の村々には、次々と流木や倒壊した家屋が濁流と共に流れて来て民家を壊し、家もろとも人も牛も馬も呑み込んで下流に押し流していった。下流の住民は篝火を焚いて流れを照らし、戸板にしがみつき、柱に荒縄で体を縛り付けて助けを求める被災者を救わんと懸命になったが、川幅は広く、なすすべはなかった。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであった。

仁田村の船着き場には、大小三つの荷揚げ桟橋があり、上流の大桟橋は、幅八間（十四メートル）、長さ二十五間（四五メートル）あり、絶えず両側に五十石船が接岸しており、牛車、馬車を乗り入れることができる広さがあった。この日は洪水に備えて船はすべて堤防の上に引き上げてあった。

大桟橋のすぐ上流に、石積みの突堤が設けられており、洪水から桟橋や船を守っていた。

仁田村では大桟橋が洪水で流失すれば村の大損害となり、さらに、付近の堤防も同時に決壊して平地の多い仁田村にかってない大被害を及ぼすため、船着き場付近には、名主を始め村役人など大勢が詰め掛けて警戒に当たっていた。

暮五つを四半刻（午後八時半）過ぎた頃、ひときは風雨が激しさを増してきた。濁流は荒れ狂い、流れくる材木や押し流されてくる家屋の量はおびただしく、船着き場の川上にある防護突堤も濁流に抉り取られ、流れくる流木が直接大桟橋に激突し、水しぶきと共にギシギシと軋み音を立てていた。

その時、暗闇の中から誰かが叫んだ。

「おぉーい、大桟橋が流されるぞ…太縄で大桟橋を松の根っこに縛りつけろ…」

大桟橋の上を濁流が洗い始めていた。村人たちは総出で近くの船道具小屋から麻の太縄を持ち出して、これを繋ぎ合わせてその一方を、数本の松の根っこに縛りつけた。村役人の一人が、

「伝吉、由造、お前ら二人でこの太縄を大桟橋の柱に縛りつけてこい…」

「おらぁ、怖えだ」

と尻込みするばかりだ。

「日頃でかい口をききおって、度胸のないやつらだ。鉄次、留吉、お前らやって来い」

「…」「…」

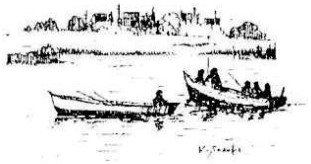
「早く縛らないと手遅れになるぞ…誰かいないか…」

物凄い濁流に恐れをなして、誰一人名乗り出る者はな

かった。その時、暴風雨の暗闇の中から、
「俺がやる…命綱を誰か持っててくれ」
「おぉ、清六さん…なにも組頭筆頭の清六さんがやらなくてもいいじゃぁないか」
「ぐずぐずしてはいられない、太縄を二本よこしてくれ」
清六は、丸く束ねた太縄二束を両腕に通し、濁流が流れる大桟橋の厚い板の上を、足元を確かめながら舫柱(もやいばしら)を目がけて進んでいった。
「おーぃ清六さぁーん…大丈夫か…」
村人は口々に清六へ声を掛け合ったが、ビュービューと吹く暴風雨の風と雨の音、ゴォーゴォーと音を立てて流れる水音に村人の掛け声も吹き消されてしまう有り様だった。
責任感が強く勇気があって、日頃から信仰心が篤い清六は、『村人に大災異ありたるときは身命を捧げてこれを救わむ』と誓詞を三島大明神に差し入れていた。この清六の信仰心が三島大明神に通じたか、神の御加護があって、太縄二本は大桟橋の舫柱に縛りつけられた。
「よし、これでよし…命綱を引っ張ってくれ…」
清六は、あらん限りの声を張り上げて岸辺に向かって叫んだ。その時大きな波とともに大木が流れてきて大桟橋に激突した。その瞬間、流木の太い枝が清六を『ばぁしーん』と払った。
太枝の一撃を受けてはさしもの偉丈夫も堪えられず、濁流に叩き込まれてしまった。
水流の勢いが強く、命綱は清六の体もろとも、村人の手からもぎ取られてしまった。
「しまった…大変だぁ…清六さんが流されたぞ…」
清六の姿はアッという間に、暗闇の濁流に呑み込まれていった。
翌二十七日は台風一過、秋空高く富士の霊峰が仁田村のはるか北方に静かに聳えていた。
それから一週間後、多くの被災者の死体と共に、清六の遺体も沼津片濱海岸に打ち上げられた。
狩野川台風による被害は、死者千二百余人、流失家屋八千余棟、被災者十万余人とかってない大災害であった。
仁田の村役人清六の貴い犠牲は、六四五年前、大場川で命を断った貞女お菊（仁田四郎忠常の妻）の事件を思い起こさせた。
一旦荼毘(だび)に付されていた清六の葬儀が、一ヶ月後、菩提寺の慶音寺において村人の手により盛大に執り行われた。斎藤弥九郎は江川英龍の名代として参列した。江戸三剣豪の一人として名高い弥九郎が弔問のため姿を見せたので、参列者の耳目は弥九郎に集中した。

仁田清六の命と引き替えに、仁田村船着き場の桟橋は無事元の姿を保っていた。清六の享年は男盛りの四四歳、妻おかね三九歳、稲七は十八歳、お春二三歳、久恵二一歳の年の出来事であった。
清六の死は、お春の夫喜三の不慮の死に続いて、この物語、二つ目の悲愁話であった。

（つづく）



丙午の女（三）

太田和貞

暖簾

「桂女さんが俳徊を始めた」

院長からの電話を受けて、長女の亜季はいちばん恐れていたものが、ついにやってきたことを悟った。

俳句を作り、早朝からの築地魚河岸での仕入れ、店に帰ってからの仕込み、小料理屋「蛍火」の接客と、体と神経とを磨り減らしてきた母だから痴ほうや徘徊とは全く無縁だと思っていた。

しかし、その母が徘徊を始めたと聞かされて、亜季は母の俳句を思い出した。

蜆汁　死よりも老いを　恐れけり

句集で読んだときと徘徊が始まったと聞いた今とでは、「死よりも老いを恐れけり」の意味が全く違っているのに気付いた。

小料理屋の店の名前を「蛍火」と名付けるほど、母は恋の遍歴者だった。

蛍火や　女の道を　ふみはづし

悪女といわれ、奸婦とののしられても母は背骨をしゃんと伸ばして俳句にのめり込んでいた。

天性のおおらかさが句の明るさと品のよさを産み出していた。

母は母、わたしはわたしと割り切ったつもりでいても、母の俳句を素直には読めなかった。

母の句集に目を通すようになったのは、亜季が六十の坂を越えてからだった。

画商の仕事を大急ぎで片付けて、その日の午後の新幹線に亜季は飛び乗った。

シートに身を沈めながら、母はわたしにとって、なんだったのだろうかと考え始めた。

（母は丙午の女だから、……）

これまでの母と亜季との人生をなぞると、いつもの結論に達するのだった。

丙午の女は亭主を食い殺すという迷信を亜季は信じている訳ではなかったが、「丙午の女」というライトを当てると、どろどろした母の人生が浮び上がってきた。

亜季が三歳のとき、実父慶治郎が突然に失踪した。

父がなぜ、失踪したのか、母は何も話してはくれなかったが、母の勝ち気さが、そうさせたのだと亜季は思うようになっていた。

日本橋横山町の織物問屋の次男に産まれた慶治郎は内気な男だった。

結婚して母の勝ち気に驚いた慶治郎は離婚も考えたが、亜季のことを考えてじっと我慢した。

「お父さんお家に帰ってこないわね。どうしてなの」

亜季がそう聞いても、母は何も答えなかったが、母の顔がみるみる険しくなったのを覚えていた。

それから間もなく、母は千葉県鴨川の実家の旅館に戻され、亜季ひとりが日本橋の問屋街の家に残された。

旅館を継いでいた長姉が肺炎で急逝し、あとに残った長女（小六）、長男（小四）、次女（小二）、三女（幼稚園）の面倒と長姉の旅館を継ぐことを父母の説得に負けて、母は一回りも違う義兄と再婚させられた。

思いがけず、旅館の女将となったのは、母が三十歳のときだった。

その翌年、この旅館にたまたま止宿した七歳年下の海軍青年将校と母は恋におちた。

まさに、火の女であった。

その青年将校が長崎県大村に転属になると、鞄を一つ持って会いにいく大胆さも持ち合わせていた。

このように、桂女は恋の遍歴を続けていたので、亜季はいつもひとりだった。

罪障の　ふかき寒紅　濃かりけり

母の女の性に圧倒された亜季は、それだけ父慶治郎を恋しがった。

（いつか、父に会いたい）

そんな夢を抱き続けていた亜季が父に会えたのは、亜季が三十八歳のときだった。

父が失踪して三十五年もの歳月が流れていた。

父と母の真ん中に川の字のように、ねてみたいという思いは小さいときから持っていたこともあったが、とうの昔に捨てていた。

（わたしが産まれたとき、父と母は愛で結ばれていたはず）

亜季は、そう信じていたときもあった。
それに、母が父にあったとき、どんな顔をするのか見てみたいという思いもあった。
三十五年振りに会った父は、長身ではあったが、肥えて下腹が出ていた。
「今更、会ってどうするの」
嫌がる母を説き伏せて、亜季は父と母とのために一席設けた。
暑い夏の夜であった。
女中に案内されて母は入ってきた。
(来ないかもしれない)
と、半ば諦めていた亜季は、ほっとした。
「お久し振り。もう何年になるのかしら、……。わたしが三十四歳だったから、三十五年になるわね。別かれていたから、三十五年はあッという間だったけど、もし一緒だったら、三年はもたなかったわ」
母は部屋に入るなり、辛辣な言葉を吐いた。
母の口許を見ていた慶治郎は亜季の顔を見た。
(会ったって、しょうがないと言ったろう)
慶治郎の目は、亜季にそう言っていた。
「おとうさんとおかあさんが仲がよかったから、わたしが産まれたんじゃないの。三十五年振りで会ったのだから、もう少し楽しくお話をしましょうよ」
亜季は父と母の間を取り持つように、両親にビールをすすめたが、ふたりともビールを受けるだけで、そのままコップをテーブルに置いてしまった。
コップの口に盛り上がっていたビールの泡が次第に小さくなるのを見ながら、
(三十五年間の心の空白は埋められない)
と亜季は思った。
「それじゃ、わたしこれで」
突然、母は立ちあがりながらそう言った。
「おかあさん、もう帰るの……」
亜季は非難めいた言葉を口に出したが、(仕方がないわ)と心の中では諦めていた。
これが父と母との再会であった。その後、二度とふたりは会うことは無かった。
亜季も二度と父と母とを会わせようとは、しなかった。

やっと探し当てた父を母に会わせたことは失敗だったと思い返しているうちに、眠ってしまったらしく、東京という車内放送で亜季は起された。
連日の疲れが車中の仮眠でとれたようだった。
(父を虚仮にした母が徘徊を始めたのは、父の罰が当ったのよ)
そんな思いも亜季にはあった。
病院に着くなり、亜季は院長室に直行した。
「やあ、遠いところをご苦労さん」

院長はコーヒーをいれているところだった。
院長室にいい薫りが漂っていた。
「ご迷惑をお掛けしました。」
亜季は素直に頭をさげた。
「迷惑だなんて、思っておらんよ。迷惑と思ったら入院許可はしなかったさ」
院長がいれてくれたコーヒーを一口、飲んで、「ああ、おいしい」と亜季は言った。
「ね、おいしいだろう。わしはそこらのコーヒー店には、引けはとらんと思っておる。ところで、残念だけれど桂女さんはアルツファイマー病だから、これから物忘れがひどくなると思うな。悪くなることはあっても直ることは無いね。だんだん、桂女さんが惚けていくから覚悟して置くことだ」
「はい。九十五歳まで生かしていただいたので、年には不足ありませんが、母が惚けていくのを見るのは悲しいです」
「それも子供の務めだよ。わしなんか何人の死に目に立ち会ったか分からん。医者の宿命だ。死に目に会う度に、こんなことにならんように努力はしてきたがね」
「先生のコーヒーをいただいたら元気が出てきました。今晩は母の病室に泊めていただいて、あす帰らせていただきます。ご連絡があれば、いつでも飛んできます」
「そうしてください。患者さんにいちばんの薬は身内の見舞いだよ。医者でも、薬でもないんだ。身内の見舞いがいちばんなんだ」
院長のことばが亜季の身にしみた。
院長に言われたように、婦長室に寄って礼を述べてから母の個室にいった。
母は留守だった。ベットの脇のカーテンレールに色鮮やかなジャージーが四着、吊り下がっていた。
(ああ、これね)
亜季の顔に思わず笑いが浮かんでくる程、四着のジャージーは可愛いいものだった。
「申し訳ありませんでした。いつも和服をお召しになっている方が、まさかジャージーを着るとは、思ってもみませんでしたので病院を抜け出されてしまいました」
と婦長に謝られたのだった。
亜季はそのことばを押しとどめて、
「こちらこそ、よろしくお願いします」
と丁寧に頭をさげた。
亜季は個室の入口に、紺地に大きく「ゆ」と白く染め抜かれた暖簾をさげた。
個室のドアを閉ざしているよりは、暖簾をさげた方が開放的で母にきっとよい効果をもたらす筈だと思った。
母が看護師斉藤真紀と一緒に個室に戻ってきた。
「おかあさん、こんにちは」
母にあいさつして、真紀に小声で今回のことを謝った。

「あらッ。どちらさまでしたかしら、……」
母は亜季の顔を見詰めながらそう言った。
亜季は、このことばが自分に向けられたものだとは思わなかった。
「どちらさまで？」
大きなトンボ眼鏡の奥から、しげしげと見詰められて亜季はうろたえた。
「きのうあたりから、急に記憶が乱れましたの」
真紀が小声で教えてくれた。
「……」
娘を忘れてしまうほど、母の頭が乱れてしまったとは亜季は思いたくなかった。
なんと言っていいのか分からずに、亜季はただ母の顔を見ていた。
「おかあさん、冗談を言うのはやめてよ」
そう言おうとしたが、亜季を見詰める目が真剣だった。
「丙午の女」、「亭主を食い殺す悪女」と罵られようが、ピンと背筋を伸ばして俳句界に君臨していた母の面影は無かった。
「脳の神経の回路がつながると、ハッキリするときもあります」
そう慰めてくれた真紀の言葉に、亜季の涙がいっぺんに溢れ出した。
「なにを泣いていらっしゃるの？」
母が亜季の顔をのぞき込むようにして言ったので、亜季は両手で顔を覆って個室を出てしまった。
化粧室で顔を洗い、化粧を直して、鏡の中の自分に、
（しっかりしなさい）
と、気合いを入れた。
「それも、子供の務めだよ」
と院長に言われた言葉の重みが、改めて亜季の体に伸し掛ってきた。
個室の入口の暖簾を母と真紀が眺めていた。亜季の足音に気付いた母が振り返った。
「あら、亜季、いつ帰ってきたの。電話をくれれば、迎えにいってあげたのに、……」
母になじられて、亜季はびっくりした。
（この人はわたしを試めしているのかしら、……）
と疑ってみた。
つい、さっきまでは娘の顔も分からない振りをして、さんざんわたしを泣かせたくせに、化粧を直して戻ってくれば、
「あら、亜季、いつ帰ってきたの」
と、娘の顔をはっきりと覚えていた。
そのときの都合によって、脳の神経細胞がついたり、離れたりするものなのか、亜季には分からなかったが、そこに母の底意地の悪るさが感じられて、亜季は我慢ができなかった。

（あの母なら、やり兼ねない）
という思いもあった。
暖簾について話し合っている母と真紀の脇をすり抜けて、亜季は個室に入った。
ジュースでもあればと、冷蔵庫を開けてみたが、何も入っていなかった。
「ひとの冷蔵庫を無断で開けるものではありません」
目敏とく見付けた母が亜季を叱った。
「あらッ。ここにお泊まりの吟行会の方々は、どちらへいらっしゃったのかしら、……」
母は真顔で聞いた。亜季には母の言っている意味が分からなかった。
「はい。お散歩におでかけになりました」
真紀がそう答えた。
「あ、そう」
母はこの返事で満足したようだったが、納得した顔ではなかった。
亜季が母のために買ってきた「ゆ」と白く染め抜かれた暖簾が母を草津温泉での吟行会へと迷い込ませたようだった。
「ちょうど夢を見ていらっしゃるのと同じですから、決して反対しないでください。その夢にわたしたちも入っていくのがいいと思います」
真紀は亜季に、そう呟いた。
あの厳しかった母が病いに犯されて崩れていくのを見るのは、娘としてつらかった。
入院して間もないのに、こんなに変貌した母に、
（もしかしたら、この病院があわないのではないか）
と思ったりもした。
しかし、院長が母の俳句仲間であり、世話をしてくれる看護師の真紀もやさしい若い女性だった。
（病院に対して、不満を持っては申し訳ない）
亜季は、一瞬でもそう思った自分を恥じた。
亜季はまえから、母が「蛍火」を畳んで京都で亜季と一緒に暮すことを望んでいた。
「そう言っていただけるのは、本当にありがたいわ。でも、わたしは人生の最後は自分で決めたいの。わたしの頭が惚けて分からなくなったら、そのときはお願いするわ。亜季や夫にそむいたわたしですから、いい死にざまでないことは分かっています」
そう言って亜季のことばをはねつけてきた母だった。

去るものは　去りたり　衣更へにけり

この物語はすべてフィクションですが、文中の俳句は、『鈴木真砂女全句集』（角川書店）からお借りしました。

妖　星（その四）

三戸岡道夫

（一）信貴山籠城

石山本願寺を攻撃するための天王寺の布陣から、久秀が突如脱出して、信貴山城へ帰ってしまったとき、信長は安土城にいた。

京都所司代村井貞勝の使者が、その久秀の動静を知らせるために、早馬で安土城へ駈けつけて、

「松永弾正久秀が八月十七日に謀叛を企てて大坂表を引きはらい、大和信貴山城へ帰り、立てこもりました」

と報告すると、信長は、

「爺め、やっぱり、やりおったか」

と、ふんと鼻先で笑った。しかし、

（久秀の奴め、おれが読んでいた時点よりは、少し早いな）

と警戒する眼になった。

信長にとって久秀は、どうしても欲しい味方ではない。しかし、敵に廻せばうるさい相手である。いま信長は、石山本願寺、雑賀衆、上杉謙信、毛利輝元と、四勢力に取り囲まれ、あまつさえ石山本願寺を攻めあぐねている。うるさい敵は一人でも少い方がいい。久秀はいつかは謀叛する人間だという覚悟は、信長の中に出来てはいる。しかし、今は時機が悪い。そういう意味で、少し早いな、と警戒したのである。

そこで信長は、久秀と親交のある堺の松井友閑のところへ使いを出し、久秀を翻意するように命じた。

松井友閑はただちに信貴山へ行き、久秀に会って、懸命に諭した。

「この時になって信長公に弓を引くとは、いかなる魂胆か。叛いて勝てる算段があるのならまだしものこと、勝てるわけがない。いかにこの信貴山城が名城だといっても、信長軍に攻撃されたら、ものの一カ月も持ちこたえられはしまい。だから、お詫びをした方がいい。わしが間に入って取り次げば、必ず信長公は許してくれる。条件としては、おぬしが高野山へ隠居することと、平蜘蛛の茶釜を差し出すことじゃ。悪いことは言わぬ。ぜひ、そうされよ」

懇懇と話したが、久秀は説得に応じようとはしなかった。久秀の腹はすでに決っていたからである。

「友閑殿、そなたの御意見はありがたい。が、わしはこれまで自分の胆力で浮世の荒波を乗り切ってきた。その世渡りのために、時には心ならずも信長に服従の態をよそおうてきたが、いつまでも己れをいつわって、信長にひれ伏して生きることは出来ぬ。わしも、もう六十八歳じゃ。自分の人生は、自分の意思で生きてみたい。もう偽りの人生は、生きたくない。たとえそのために、自分の人生が滅びようとも、少しも悔いはない。男は自分の一生の締めくくりを、自分の手でつけなくてはならぬ。その時が、わしには来たのだ。信長に情けを乞うて生きのびたとて、それが何になるであろう」

そこには久秀の人生を賭けた決意が吐露されていた。

久秀はさらにつづけて、

「友閑殿、悪人にも、悪人としての本性があるのでござるぞ」

そう言って、は、は、はっ、と笑った。それは友閑にむかって言うというよりも、信長にむかって叫んでいるかのようであった。そして最後に久秀は、ぽつんと一言、

「友閑殿、わしはな、一度だけ、信長に反抗してみたかったのじゃ。ただ、それだけのことなんだよ」

久秀は宙の彼方にむかって、虚無的に笑った。

「友閑殿、おぬしとは長い間のよき朋友として、厚くお礼を申す。じゃが、これが今生の別れだ。安土城へ戻って信長へ申してくれ、『久秀はもう信長のところへは戻りませぬ』とな。わしは逃げも隠れもせぬ。この城におる。信長に、存分に討ち果たせ、と申してくれ」

そこまで久秀の決意が固ければ、それ以上友閑は言うべき言葉を持たなかった。

「わかりました。立派な覚悟でござる。感服いたした。たが久秀殿、一つだけ配慮した方がいいことがある。それは平蜘蛛の茶釜じゃ。平蜘蛛の茶釜だけは、信長殿に献上された方がいい。あれは天下の名器、世に残し、後世に伝えてこそ、価値がある。信長殿の手に渡れば、平蜘蛛の名器も、後世に末永く残ることで出来るであろう」

久秀は当時の武将の心得として、茶道にも通じ、高価な名物茶器も秘蔵していた。その中の代表的なものが「平蜘蛛の茶釜」と「つくも茄子の茶入れ」であった。中でも平蜘蛛の茶釜が最高のものであった。

二つの秘蔵品の中の「つくも茄子の茶入れ」は、すでに久秀が信長に服従を誓ったときに（永禄十一年）、信長に献上してしまっていた。最高級品である平蜘蛛の茶釜の方は、手許に秘蔵して手放していなかった。

平蜘蛛の茶釜というのは、平釜の一種で、ちょうど蜘蛛がぺったりと地面にへばりついたような恰好に見えるところから、平蜘蛛という名前がつけられたもので、名器中の名器と評判が高かった。

（その茶釜を信長に差し出せ）

というのである。信長は平蜘蛛という名器を欲しいこともさることながら、久秀が最高品として愛蔵しているものを、久秀から取り上げたいのだった。

久秀は首を横に振った。

「信長があの茶釜を喉から手が出るほど欲しがっているのは、重々承知している。しかし信長が本当に欲しいのは、茶釜ではなくて、茶釜を差し出すわしの『心』が欲しいのだ。だが、わしは『心』を信長へは渡さぬぞ」

信長は茶道具の名器に眼を光らせ、名器集めに異常な熱意を示していた。そのため諸大名、諸武将は、きそって所有の名器を信長に献上していた。

信長が名器を集めるのは、その名器を欲しいというよりも、誰が、どの名器を差し出すか、その各人の覚悟のほどを知りたいのである。一番大切な名器を差し出すか、一番目のものは隠しておいて、二番目、三番目のものを差し出すか、それによって信長への忠誠度が判るのである。

したがって信長が名器を並べて茶会を開くのは、茶会が好き、名器が好きというよりも、集めた名器を人々に見せびらかすことによって、

（これは誰が差し出した茶碗、これは誰が献上した茶入れ）

と、大名の名前を見せびらかすのが目的だった。そして、

（これは誰々の一番の宝物だ）

（これは誰々の宝物といっても、二番手のもので、一番手ではない）

と、宝物のランク付けを無人の眼に示すことによって、

（だから、誰々の忠誠心は一級で、誰々の忠誠心は二級だ）

と、信長への忠誠心の度合いを発表しているのだった。

久秀は信長へすでに「つくも茄子」の茶入れを献上しているが、それは久秀にとって二番目の宝物である。それが信長には不満なのだった。だから一番目の平蜘蛛の茶釜を要求しているのである。しかし久秀は、

「わしの白髪首と、平蜘蛛の茶釜は、わしが冥土への土産なのじゃ。いかなることがあろうとも、信長へ渡すわけにはいかぬ。もし、どうしてもと言うのなら、信長自身がこの場へ来るべきではありますまいか」

断固と拒否した。

そこまで言われては、友閑も引き下がらざるを得なかった。

友閑が安土城へ戻り、その旨を信長に報告すると、信長は眼を閉じ、

「……」

無言でそれを聞いていたが、ややあって、

「爺め、立派な心境になりおったな、気に入ったぞ」

と、うめくように言った。が、

「しかし戦乱の世じゃ。みせしめは、きっちりとつけねばならぬ」

そう言うと信長は、ただちに、久秀から預っている人質の成敗を部下に命じた。

人質になっている二人の少年は、久秀謀反のみせしめに、翌日、京都の六条河原へ牛車で曳かれ、磔にかけられた。

（二）謙信の動向

久秀は上杉謙信の西上を待ちわびていた。

久秀が信長への謀叛に踏み切ったのは、反信長戦線の中心として、上杉謙信の活動が期待されるからだった。

その久秀の期待通りに、上杉謙信は天正五年七月には、能登の七尾城を陥し、さらに加賀の尾山城を包囲した。能登、加賀を席捲した上杉軍へ、さらに地侍が続々と加わったので、総勢で三万余にふくれ上った。それを聞くと、久秀は、

（謙信め、なかなかやるわい）

と満足した。

謙信は七尾城につづき、尾山城もたちまち降参させた。そしてさらに越前へと転進し、信長軍と戦った。上杉軍は優勢なので、信長軍はじりじりと押され、近江まで引き下ってしまう始末であった。久秀が、

（うむ、これは調子がいいわい）

と思っていると、どうしたわけか、九月下旬（天正五年）になると、謙信の軍がぴたりと止ってしまったのである。止ったどころか、上杉軍は越中に後退してしまった。

間もなく雪の季節である。北陸は冬になると、雪が降りしきる。雪では戦争が出来ない。

（上杉謙信はいったん越後の春日山へ凱陣し、来年春の雪どけを待って、ふたたび兵を出す）

ということのようであった。久秀は、

「なんてのんきなことを言っているのだ」

と地団駄を踏んだが、どうしようもなかった。

しかし謙信の退却の理由は、たんにそれだけではなかった。相模の北条が関東へ出撃してきたので、謙信が

本国越後を留守にしていては、危うくなってきたからである。関東、越後を、北条から守るための撤退だったのである。

「うーむ」

と久秀はうなり、

（信長め、北条をそそのかして、上杉謙信の背後を攪乱させたな）

と、怒りが身体中を熱風のように駆けまわった。

やにわに久秀は、ピラニアの入ったギヤマンの水槽に駆け寄ると、

「やい、信長猫を持て！」

と叫び、家臣が持ってきた飼い猫を、

「信長猫め、食われて死ね！」

と、水槽の中へ突っこんだ。

ギャー

叫びもがく猫の周辺で、ピラニアの群がキラキラと金属片のように光ったかと思うと、猫は殺人魚の群に食いつかれて、ぴたりと動きを止めた。

久秀はしばらく水中の猫の死骸を眺めていたが、

「信長め、腹が立つが、まあ仕方がない。こうなったからには、信貴山城に立てこもり、石山本願寺と毛利軍の援軍を頼みに、来春まで頑張るだけだ。わしの造ったこの信貴山城は堅城じゃ。弾薬や食糧も十分たくわえてある。必死になって守れば、どんな大軍に攻撃されようとも、半年や一年は大丈夫持こたえられるわ。それに信長だって、この信長猫のように、いつピラニアに襲われて死なぬとも、限ったものではない」

（二）信貴山攻撃

天正五年九月、信長は大和の筒井順慶に、信貴山城攻撃軍への参加を命じた。

筒井順慶は大和への支配権をめぐって、たえず久秀と雄雌を争っていた武将である。久秀が信長に叛いたと見るや、いちはやく信長はその筒井順慶に目をつけて、久秀を攻めさせたのである。信長の臨機応変の手腕も、並大抵のものではない。

信長の命を受けると筒井順慶は、

（これこそ大和の支配権を久秀から奪い取る絶好の機会だわい）

と、勇みたち、五千の軍勢をひきいて、信貴山城攻撃に出陣した。

信貴山城攻撃軍四万の総代将は、信長の嫡男の信忠である。それに明智光秀、細川藤孝、筒井順慶などが従っている。その信長軍は、まず久秀の支城である片岡城を陥すと、十月三日に信貴山城に着陣し、攻撃を開始した。

その夜、信貴山寺の毘沙門堂が焼かれ、攻撃は十月五日から始った。

攻撃の先陣は筒井順慶がつとめ、順慶は信長から報賞を得ようと、激しく攻撃した。

それを迎て撃つ久秀の軍勢は、主君の久秀の性格を反映して獰猛で、攻め寄せる信長軍に、凄まじい勢いで立ちむかった。その決死の防戦のために、信長軍はたじろぎ、攻撃はいったん頓座した。

その戦況を眺めながら、久秀はにんまりと笑うと、

「うむ、しめしめ、目算通り優勢だわい。しかし油断は禁物、合戦の本場はこれからじゃ。とにかく、石山本願寺と毛利軍に連絡して、援軍を急がさせねばならぬ」

と、森好久という武将を、密使として石山本願寺へと走らせた。

森好久はかって筒井順慶の譜代の家臣であった。それが筒井順慶が久秀に攻められて、筒井城を失い、逼塞（ひっそく）すると、筒井順慶を見限って、久秀へ寝返った人物だった。目先を読むのが敏捷な男である。

森好久は石山本願寺へ走るべく、信貴山城を出た。

しかし、信貴山城を取巻いて山野を埋める、信長軍の巨大な軍勢を眼にすると、

（これは城内から見ていた情勢とは大違いだわい。これではとても久秀側に勝ち目はないぞ。この辺で、信長軍の方に付いた方が得かもしれないぞ）

と、勝敗の行き先を読んだのである。

そう判断すると、行動はすばやかった。森好久は、久秀の指示した石山本願寺へは行かずに、信貴山城を包囲する筒井順慶軍の、松倉右近の陣所へ駆けこんだ。ふたたび森好久は寝返ったのである。

「や、や、おぬしは森好久殿……」

と松倉右近は驚いたが、すぐ事情を察知すると、

「わかり申した。すぐご案内つかまつろう」

と、森好久を筒井順慶の本陣へ案内した。

筒井順慶がどう反応するか、森好久には心配であったが、今の戦況では森好久の寝返りは、順慶にとっても大歓迎である。順慶は、以前の森好久の寝返りをとがめることもなく、

「うむ、好久、よく戻ってきてくれた。褒美を取らせようぞ」

そう言って、金子三十両を与えた。二人はしばらく、ひそひそと密議をこらしていたが、

「うむ、それがよかろう。それで行こう」

と筒井順慶が膝をたたいた。その作戦というのは、（筒井順慶が精兵二百人を信貴山城内へ侵入させるのに、石山本願寺の援軍だと偽って入れる。森好久がその導入の便宜をはかる）

という策略であった。

「しかし、ここの陣営からまっすぐに信貴山城へむかっては怪まれるから、面倒でも、いったん精兵二百をひそかに河内の平野まで移動させ、そこから石山本願寺援軍

のふりをして、信貴山城へ向かうのがよかろうと思う。信貴山城へ着きましたら、わたくしめが手引きをいたします」

森好久はそう筒井順慶と密謀を練ると、石山本願寺へは行かず、そのまま信貴山城へ戻った。そして何食わぬ顔で久秀に、

「ただいま戻りました」

「うむ、御苦労であった。どうであった？」

「石山本願寺にまいり、顕如上人に会って、援軍のことをよくお願いいたしました。顕如上人は心よくご承知下され、さっそく援兵二百人を送って下さるとのことでござりまする」

森好久は臆面もなくそう答えた。嘘がすらすらと、自分でも不思議なほど、喉の奥から出てきた。筒井順慶への再寝返りが、森好久の心を安定させているのかもしれなかった。

「うむ、うむ……」

この時の久秀には、その森好久の言葉を疑う気持がなかった。それほど石山本願寺の顕如を信ずる心が、強かったのである。

そんな頃からであった。

毎晩のように、西南の夜空に妖星が現われて、異様な光の尾を引きはじめていた。

妖星の中心部は桃色で、周囲は緑色に輝き、三尺ばかりの青白い光芒をひいて、音もなく夜空を横切っていく。それは彗星（箒星）であったが、人々はその異様な星のただずまいに、

「あれは、いよいよ松永弾正久秀が滅亡する前兆だ」

と、さわぎたて、この妖星を、

（弾正星）

と呼んだ。

天正五年十月九日の夕方、石山本願寺から信貴山城へ二百人の援軍が到着した。もちろん、森好久と筒井順慶の仕組んだ、偽の援軍である。

森好久がただちに久秀へ、

「約束した石山本願寺の援軍が到着しました」

と報告すると、

「うむ、ただちに城内へ入れろ」

偽せの援軍はうまうまと、信貴山城の中へ侵入することが出来た。

筒井順慶は、城内へ侵入した二百人がどんな行動を起こすか、心待ちにしていた。

すると夜に入って、信貴山城のあちこちの曲輪から、火の手が上った。

そして、それがきっかけになって、十月十日の未明から、筒井順慶軍の猛攻撃が開始された。

筒井勢は関の声をあげて、山上に迫った。それに対して松永勢も荒れ狂って防戦し、筒井勢に甚大な損害を与えた。

その時であった。

城内の煙硝倉が轟音とともに爆発し、城内からいっせいに火の手が上った。城内に入りこんだ偽の援軍の、内部破壊行動が始ったのである。

「寝返りだ！」

「裏切者が出たぞ」

城兵たちは、たちまち浮き足立った。

城兵が、本丸に控える久秀のところへ、

「森好久が導入しましたのは、石山本願寺の援軍などではありませぬ。偽の援軍です。本当は筒井順慶の鉄砲隊にござります」

と報告に走った。

久秀の顔はにわかに引きつり、

「なに、好久に謀られたのか…」

血を吐くように叫び、

「好久め、まだ筒井順慶と手が切れていなかったのか」

と、すさまじい勢いで宙の一点を睨んだ。

だが、久秀の怒りはすぐ、

「ふ、ふ、ふ…」

と不気味な笑いとともに、平静に戻った。

（おれも散々やってきたことだ。そして今、それをやられているのだ。好久もおれと同じことを、やっているだけのことではないか）

死を決している久秀の心は、不思議と平静であった。

（四）信貴山城炎上

偽の援軍として城内に入った筒井順慶の軍勢によって、信貴山城内は混乱に陥り、それを合図にして、信貴山城を取り巻いていた信長勢がどっと城内に押し入って、阿鼻叫喚の死闘が終日つづいた。

久秀は本丸の天守の広間に陣取っていた。

が、不思議なことに、信貴山城に立てこもってからの久秀は、まるで憑きものが落ちたように、生き生きとしていた。それは信長への偽りの服従、偽りの生き方から脱して、自分本来の姿に戻って生きているという、生命の充実から来るものだった。

これから城といっしょに死ぬのだというのに、生き生きとしている。それは「死ぬ」ことによって、自分本来の生き方を生きているという、生命の燃焼なのだった。

すでに日は暮れて、信貴山城は夕闇に包まれ、闇の中で炎上する曲輪の炎が、あちこちに見られた。

久秀がその炎と、夕空とを等分に眺めていると、家臣が、

「殿、あれに弾正星が現れております」

と、夕空の一角を指さした。すると久秀は、
「なに、弾正星とな。そちは世間で噂しているように、『松永弾正久秀の滅亡の前兆として妖星が光っている』と、そう言いたいのであろう」
と、家臣と弾正星とをじろりと睨んで、
「この久秀が滅亡だとな…？　馬鹿なことを言うな。わしは滅亡などせぬわ。わしは自分の意思で死ぬのだ。星などのせいではない。弾正星などというものが、あるものか。ただの星にすぎない。天体の現象によって、ただの彗星が光っているにすぎないのだ。わしの運命などと、何のかかわりがあるものか」
弾正星などというものは、たんなる天体の物理的現象にすぎないと、言い切ったのである。戦国時代には珍らしい、神や仏を信ぜぬ、合理主義者、唯物論者である久秀の、面目躍如とした発言であった。
そしてこうした面は、久秀と信長の共通した性格でもあった。そうした意味で信長と久秀の攻防は、似た者同志の愛憎劇だったのではあるまいか。
西南の夜空にかかる妖星から眼を離すと、久秀は冷静な口調で、
「灸の用意をせい」
と命じた。久秀は中風の予防のために、灸を脳天にすえるのを日課としていた。しかし、死を前にして中風の予防でもあるまいと、家臣たちは不思議に思い、
「えっ、灸でございますか？」
と顔を見合せた。すると久秀は、けらけらと笑って、
「腹を切るときに、中風の発作が起って手許が狂っては、末代までの恥となる。それで用心するわけよ。さあ、早くせい」
側女が後にまわって、ふるえる手先に線香を持って、灸に火をつけた。
やがて白い煙が頭頂からまっすぐに立ちのぼると、久秀は眼をつむって、じっとその熱さに耐えていたが、その泰然とした態度は、家臣たちの眼には、死を前にした久秀の秘儀のように映った。
あたりは森閑として、敵軍に包囲された城の中で行われているとは思えないほどの、静寂さであった。
やがて灸の煙が消え去ろうとしている頃、広間の一角から、
シュン、シュン、
という清冽な音が聞えてきた。
久秀はうすく眼を開けてその方を見た。久秀はこの世の名残りに、天守の広間で茶を点てようと、風炉に平蜘蛛の茶釜をかけておいた。その湯がわいたのを、告げているのだった。
久秀は席を立つと、風炉の前に座った。
まもなく茶釜の湯は沸騰して、蓋が小刻みに鳴り出していた。蓋の音はときどき中断して、煮えたぎる湯の音だけになったかと思うと、また強く湯気をふき出して、蓋を鳴らした。
その茶釜の姿は、あたかもその場に身を構たえた大蜘蛛が、熱さに身もだえして、這い出そうとしているかのようだった。
すると、その釜鳴りの音は、久秀の耳には、
(信長死ね…)
(信長ね！)
と聞えてくるのだった。その幻聴を聞いたとき、茶を点てようとする久秀の気持が、突如、あらぬ方向に変った。
久秀は興奮した声で、
「急いでピラニアのギヤマンを持ってこい」
と命じた。家臣たちが、
「えっ、なぜ？」
という質問を許さす強硬な口調に、家臣がピラニアを飼っているギヤマンの水槽を広間に運んできた。
久秀はやにわに水槽を横に押し倒すと、水を床の上にぶちまけた。放り出されたピラニアの群が、床の上でピチピチと跳ね廻る。
久秀は茶釜の蓋を外した。
そしてピラニアの一匹を指先で捕えると、煮えたぎる湯の中へ、
「信長め、死ね！」
叫んで、投げ入れたのである。人が恐れる殺人魚も、熱湯にはかなわない。ピラニアはあっという間に、熱湯の中で死に絶えた。
「思い知ったか、信長め！」
久秀は床の上で跳ね廻るピラニアを次々に掴んでは、茶釜に投げ入れた。
それはあたかも大蜘蛛が、次々に殺人魚を食べつくす様にも似ていた。
ピラニアが一匹ずつ、熱湯の中に消えるたびに、久秀の脳裏には、熱湯に焼けただれて絶叫する信長の姿が、鮮やかに浮かび上ってくるのだった。
ピラニアはすべて死に絶えた。
そのとき広間の中へ、三の丸や馬屋丸の方から流れてくるきな臭い煙が、しのび込みはじめた。
それは信貴山城の最後が近いことを告げていた。
広間の壁ぎわには、かねて火薬庫から運びこまれた火薬樽が、積み上げられていた。久秀は眼でその樽の数をもう一度確認して、
(これだけあれば、おれの首も、この平蜘蛛の茶釜も、木っ端微塵まちがいない)
とつぶやいた。
久秀は死後、自分の白髪首と平蜘蛛の茶釜を、意地で

も信長の手に渡したくないのだった。火薬で木っ端微塵にしてしまえば、信長の手に渡らなくてすむ。平蜘蛛の茶釜を冥土の土産に持っていくことが出来る。それが死に際しての、久秀の作戦だった。

寄せ手の攻撃も、一瞬手を止めて、静まり返っている。それは久秀の最後を待っている、一瞬の静けさのようであった。

久秀は家臣に命じて、天守閣に火を放たせた。

そして、その炎が次第に燃えひろがってくると、久秀はおもむろに火薬樽に火を放った。

瞬間……、

天地も引さく大轟音とともに、四層櫓の天守閣は空中に飛び散り、久秀の身体も、平蜘蛛の茶釜も、跡かたもなく微塵に砕け散ってしまった。

こうして妖星松永弾正久秀は、信貴山城の炎の中で、六十八歳の凄絶な最後をとげたのである。

そして奇しくもこの日は、十年前に、久秀が奈良東大寺の大仏殿を炎上させた日（永禄十年十月十日）と、同じ日であった。

（五）エピローグ

久秀が死んで五年後の、天正十年（一五八二）六月。信長は毛利攻めの途中、京都の本能寺において茶会を開き、明智光秀の襲撃によって、この世を去った。

その茶会の席に信長は三十八種類の名器を並べたてたが、その中には、かつて久秀が信長に献上した「つくも茄子」の茶入れもあった。

久秀は平蜘蛛の茶釜とともに、炎の中でこの世を去り、信長もつくも茄子の茶入れとともに、同じく炎の中でこの世を去った。

「つくも茄子」の茶入れが信長をあの世へ導いたなどという因縁めいたことを言えば、合理主義者、無神論者の信長も久秀も、からからと大笑いすることであろう。

（終）



遥かなるカメルーン（四）

太田精一

（十八）

デイコンゲは、ブカリを訪ねた。ブカリは第一夫人の長男でクンボにとっては義理の息子に当る。年は、クンボと同じ二十五才。父親の後を継いで家長となり、一族を束ねていた。

「妹のクンボは、あんたの一族の誰れとも結婚する意志はないようです。妹はすでにあんたの一族に子供を残している。婚資を受け取ったわしの父も死んだ。だから婚資を返せとは言わないで欲しい。あんたの一族で妹の今後の身の振り方を心配して頂けるのは大変有難い。だが、妹の行く末については、わしも考えているのでこのまま妹を引取らせてくださらんか」

カメルーンでは、離婚の際、子供のある場合には、婚家先に子供を残す。その代りに、婚資は返さないのが通例となっている。

デイコンゲは、妹に恋人のいることを伏せて離婚話を進めようとした。

「分りました。しかし、義母には、好きな男がいるとの専らの噂がありました。私たち一族にとっては不名誉なことなので迷惑をしています。父も高齢であったので、仕方がないと目をつぶっていた次第です。それでも義理の息子の私にとっては、不愉快な話しです。本来であれば婚資を返して頂きたいところですが、義母は、われわれ一族のためによく働いて、男の子も残して呉れましたので、婚資の返却は求めないことにします」

ブカリは、クンボに対する一族の思いを素直に語った。デイコンゲは、何もかも承知しているブカリとは、本音で語り合うことが得策であると判断した。

「どうも有難う。大変助かる。実は、妹があんたの叔父さんとの再婚話しがあった時に何故断ったのか解せなかった。まさか好きな男がいるなんて想像もできなかったの

だ。だが、考えてみれば、妹も不憫な奴。親子ほど年が違い、しかもすでに妻のあるあんたの父親のところに十五で嫁に出されずっと働き続けてきた。しかも夫は年であまりかまって貰えず、わずか十年で未亡人になってしまったのですからなあ」

「だから親切で若い男が目の前に現われ、優しくしてくれたのでそっちの方に気持が傾いたのも無理もないと言いたいわけですか」

「そう言うことですなあ。妹は、これまで恋愛経験もなかった。恐らく若者と出合うまでは、女であることさえ忘れていたと思っちょります。そんな時だったから男の愛情がひとしお身に染みて感じたのではないですかな」

「婚資については、どんな話をしているのですか。若い男では多額の婚資を要求することは難しいでしょう」

「実はわしも手工芸品（アルティザンナ）の商売をしていて資金がいるもだから妹の婚資を当てにしていました。だが残念ながらその思惑は、外れてしまったようです。しばらく妹の話を聞いているうちに、妹の幸福をまず第一番に考えなければならないと思うようになりましたからな」

デイコンゲは、ブカリの理解ある態度に感謝し、彼の家を辞した。

その後、ブワンガは何とか婚資を捻出しそれをデイコンゲに現金で支払った。それは彼の運転手としての収入の三ヶ月分に相当するものだった。

（十九）

クンボは晴れてブワンガの家族の一員となった。キリスト教徒のブワンガは、夫婦は一つ屋根の下で暮すべきであるとかねてから考えていた。

ブワンガは、兄弟や叔父たちの協力を得て、わずか一ヶ月足らずのうちにトタン葺き板囲いの小屋を建てた。五十平方メートルにも満たない一部屋だけの新居である。

部屋の片隅に、ベットが二つ並べて置いてある。テーブルを囲んで椅子が四つ、そのテーブルの上には真鍮（しんちゅう）製のローソク立てがひっそりと立っている。電気はない。窓から見える夜空には満天の星が輝き、地上にかすかな光を投げかけていた。二人は幸福であった。

クンボは、生まれて始めて自分が女であることを感じた。逞しい若い夫の胸に顔を埋め、その発散する汗の匂いに酔ったクンボは官能を擽（くすぐ）られいつの間にか夫と一つになって行く自分を愛おしく感ずるのであった。

激しく求め合い、睦み合って激情の中に身を沈めた。

「好きだって言うことは、こんなにも燃えるものかしら。今まで男の人は遠くにいて、何となく近付き難いものだと思っていた。でもあなたは違う。こんなに身近にいていつも私を見ていて呉れるかけがえのない人なんだもの」

そう言って、クンボはブワンガの手を取り自分の胸に

押し当て、うるんだ目を向けた。ブワンガはクンボの胸をやさしく弄（まさぐ）りながら、クンボと結婚できた喜びをしみじみと感じていた。

「君と結婚できて本当に良かったと思っているよ。君の兄さんのディコンゲさんに感謝しなければならないね」

小屋のローソクの灯に照らされて男と女であることを確かめ合う二人のシルエットが、板壁に漂うように揺れていた。

デイコンゲは、クンボの結婚した一ヶ月後に桂木の事務所にやって来た。

「クンボは、無事結婚したよ。実は、あんたを結婚式に招こうと思っていたんだが、ブワンガも金がないので、質素にやろうと言うことになり失礼した。いろいろ煩わせて済まなかった。クンボがあんたと結婚すれば、俺も少しは潤おうし彼女にとっても金持の亭主を持てば幸せになれると思ったのだ」

「なにはともあれ、まずはお目出とう。ぼくには妻がいるんだから始めからクンボと結婚するつもりはなかった。実のところ、この話を持ち込まれて辟易していたところなんだ。ところで式は何処で挙げたの」

「ブワンガは、キリスト教徒なので、親類や知人が集まって教会で式を挙げた。クンボは再婚だし、それだけで済ませたよ」

「そう、まあ妹が幸福になって君も良かったじゃないか。ぼくから金を引き出そうとした計画はうまく行かなかったと言うわけだ。それはそれとして、商売は順調に行っているのかね。日本への輸出はできるようになったの」

「手工芸品の日本向け輸出は難しい。ヨーロッパならアフリカ人も多く住んでいるので彼等のルートでもある程度売れるのだが、日本では誰れも知人がいないしね。出掛けるにしても遠すぎる。この前やっと一通だけ返事が来て、今その商談をしているところだ」

「うまく成約できるといいね。成功を祈っているよ」

「有難う。でも値段の開きが大き過ぎて成約できるかどうか。まあ根気良くやってみることにする」

そう言い残してデイコンゲは、事務所を出て行った。しかし、その後彼からは何の音沙汰もなかった。

（二十）

在ガボン日本大使館の中谷参事官が、三ヶ月振りで桂木の事務所を訪れた。一九七四年四月末、乾季も終りに近い頃であった。当時カメルーンには大使館はなく、在ガボン大使館が管轄していた。館員の中谷参事官がときどきカメルーンを訪れ、政府との折衝に当っていた。

中谷参事官は、アフリカをこよなく愛し、アフリカ通である。流暢なフランス語を駆使してカメルーン各地を訪れ、民衆の中に入り込み、日本のプレゼンテーション

を高めるため、意欲的に活動していた。

しばしば桂木の事務所を訪れ、カメルーンの政治、経済、貿易について桂木との意見交換を行っていた。旧仏領ブラックアフリカ全般の政治、経済動向に関しても桂木に情報の提供を惜しまなかった。中谷参事官は、すでに五十代半ばを過ぎ、髪は白くなっていたが、情熱はいささかも衰えることなく、アフリカについて語る口調は、三十代の青年のようであった。

桂木は、中谷参事官を兄のように慕って、敬愛していた。二人は連れ立って、車でよくカメルーン人のマーケットに買物に出掛けた。マーケットには駐車場らしい駐車場はない。到着すると子供達がどこからともなく寄って来た。

「ジュ・ガルドゥ、ジュ・ガルドゥ」

〝車の監視をぼくがする。ぼくにやらせて呉れ〟と言って寄って来る。子供の小使銭稼ぎには適当な仕事である。誰れを監視役にするかは、車の所有者が決め、車を動かす時に何にがしかの小使銭を渡す。

監視役となった子供は、仲間に監視役となったことを告げ、車に傷を付けたり、悪戯をしないように頼む。車を駐車する時に監視役を指定しなかった場合は、車を動かす時に子供たちが寄ってきてそれぞれ監視していたことを主張する。そのため各人に小銭を渡す破目になることも少なくなかった。子供たちに支払う監視料は、何時間でも一律二十五CFAフラン（三十円）程度であった。有料駐車場のないカメルーンでは、監視料が駐車料金と考えれば安いものだ。

ドアラの街は、子供と若い男女が実に多い。スーパーマーケットや土産物屋の周りにたむろしている。物売り、車の監視をする子供、広場や道端でサッカーボールを蹴り合う少年たち、野菜や果物市場で母親の手伝いをする少女、皆んな薄汚れた服を着て貧しかった。だが、今日という日を生き抜こうとする力強さに溢れていた。目はキラキラと輝き、明るかった。

夕闇の迫る頃になると街角のあちこちに若い男女が集まって来る。明るい街灯の下で音楽を聴きダンスに興ずるためだ。引き締った筋肉質の黒光りのする体を操り、リズムに合わせ踊る男女の嬌声は、深夜まで続く。

カメルーンの若い女性は、素晴しいスタイルをしている。背筋が真直ぐに伸び、張りのある乳房が上向き加減に突出していて、腰のくびれからお尻がキュッと上にあがって後に張出している。足は細く長い。恐らく子供の頃から頭に物を乗せて運ぶ習慣が、美しい体型を形造ったのであろう。歩き方もまるでファッションモデルのようだ。

だが、そうした美しい肢体も若いうちだけだ。子供をたくさん生むためであろうか。お腹とお尻が縦、横にふ

くれ上がり乳房は垂れ下がる。たくさんの子供に乳を吸われ、乳房が薄く干からびてしまった母親も少なくない。

男女とも日本人に比べ老化が早いようだ。桂木は、いつも年よりは五～六才若く見られた。

（二十一）

「桂木さん、一度カメルーンの西北部バメンダ高地にあるバミリケ地方に行ってみませんか。その有力都市バムーンには、最近まで王国があって、ドイツの統治時代の王様ンジョヤの館があります。ドイツ総督府を模した王宮で、ブラックアフリカには珍しい建物だと聞いています」

「それは面白そうですね。そのバムーン王国の見学を兼ねて、バミリケ地方最大の都市バフサンにある工芸センターのワークショップもついでに見てみましょう」

桂木は中谷参事官と共にドアラから約三百キロメートル離れたバミリケ地方への旅行計画を立て、家族も一緒に連れて行くことにした。

車は桂木が運転し、助手席に中谷参事官、後部座席に妻の由美と子供たちが乗り、ドアラの街を朝八時半頃出発した。一泊二日の旅である。

バミリケ地方は、肥沃な土地で、古くから農業が栄え、人口密度もカメルーンで一番高い。重要な輸出品であるコーヒー、ココアのカメルーン最大の産地である。

道路はアスファルト舗装されており、両脇には、バナナ、パイナップル、コーヒーなどのプランテーションによる大きな畑が広がっている。バフサンに近ずくと高い山が幾重にも重なっていた。その山を上り下りする。平均高度千メートルを超す高地のため涼しく快適な旅だ。荷物を頭に乗せ、裸足で道路脇を歩く女性の姿が目につくだけで、日中の人影はまばらであった。

桂木の車は、昼頃にバフサンに着いた。一九七四年当時で人口約十二万人。ドアラ、ヤウンデに次ぐカメルーン第三の都会である。湿気は少なく、日差しは強いが爽やかな風が吹いている。

早速、ホテル・プレジダンにチェックインした。第一級のホテルではないが、バフサンでは最大のホテルで部屋数もかなり多い。数人のビジネスマン風のヨーロッパ人が宿泊していた。

中谷参事官と桂木は、昼食後、妻と子供たちをホテルに残し、コーヒー農園を見学した。農園主から高級品種のアラビカ種の育成に力を入れているとの説明を受けた。

二人はホテルに帰り、しばらく休んだ後、四時頃妻と子供を伴って、工芸センターを訪れ、ワークショップを見学した。小刀一本で、木を刻み彫刻品を仕上げて行く。桂木は、かつて訪れたことのある高山の一刀彫を見ているような思いがした。ただ、バフサンの彫刻のほうが荒っぽく、キメ細かさに欠けるようだ。桂木は、この彫

刻を見て民族性の違いを感じた。
翌日の早朝、桂木たちは、バミリケ地方のバンジョウンの前部族長の居宅跡に立寄り、その見学を終えた後バムーンに向けて車を走らせることにした。

（二十二）

バンジョウンの前部族長の居宅は、バフサンから二十キロメートル離れたところにある。周囲はバナナの樹が生い茂っている。フェンスの周りの曲りくねった道を辿って居宅の前に出た。
居宅は、二百年前に建てられ、必要に応じて補修が行われてきたと言う。正面に人物像の彫刻のある曲がった柱が数本立ち並び、植物繊維で編んだ竹と幾何学的な文様の施されたパネルが入口を取り囲んでいる。
二階建ての茅葺き屋根で、雨には十分耐えられるだけの厚さがある。
入口には四十才前後の男がいた。
「中に入ってもいいですか。今でも人が住んでいますか」
中谷参事官は、興味深げに中を覗きながら男に訪ねた。
「どこのお国から来なすった。中国の人かね。案内ならわしがしてあげる」
「日本人ですよ。私は、ガボンから、この人はドアラから来ました」
すかさず中谷参事官は答えた。男は、しばらく桂木たちの顔を見て、ゆったりと腰を上げ、ついて来るよう身振りで示し、中に入って行った。
居宅の中は薄暗く、目が馴れるまでじっとしていなければならなかった。下は土間になっていて、部屋は円型でガランとしていた。この円い大きな部屋をとり囲むようにして通路があった。空気はひんやりとしていて涼しい。人は住んでいないが、収獲した穀物を二階に保存していると言う。
「前部族長が住んでいた頃には、この部屋は絨毯が敷き詰められ、木彫りの椅子や像が置かれていましただ。あなた方もすでにご承知のことと思いますだが、小さな小屋みたいな家が両脇に並んでいたのを見なすったでしょう。あれは全部バンジョウンの前部族長カムガ二世の奥さんたちの家ですだ」
そう言われて桂木たちは、外に出た後、改めて周りを見渡した。前部族長の家の前の通りを挟んで左右対称に茅葺きの小さな家が連なっている。左右合わせて十軒余りある。桂木は始め小作人の家かと思っていた。ところがそれはすべて奥さんたちの家なのだ。
「前部族長カムガ氏は、何十人もの妻を持ち、二百五十人の子供がいたと言われていますだ。今では、そんな力のある部族長はいませんがね」
「奥さん同士で、嫉妬し合って喧嘩することはなかったですか」

「喧嘩もまるっきりなかったわけではないだが、気の合った奥さん同志が食べ物を分け合ったりして、傍で見る程仲が悪いわけではなかったようですだ」
桂木たちは、薄暗い小屋の中で、子供に乳を与え布を織っている女たちの姿を思い描いて、中を覗いてみた。ガランとした小屋は、ひっそりと静まり返りただ冷たい空気が流れていた。
十時頃バンジョウンを後にしてバムーンに向った。

（二十三）

バムーン王朝は、十四世紀末から十五世紀の始めにかけて、ンチヤレ・イエンが創設したとされている。
歴代王の中で、最も偉大な王は十七代ンジョヤ王である。彼は十九世紀末から二十世紀の初めにかけて活躍した。
彼の父はンサングウと言い近隣諸国との戦いに明け暮れていた。
ンサングウは、ある日戦いに出発する前に胸騒ぎを感じた。
（今度の戦いでの生還は期し難い。そうであれば、後継者を決定しておかなければならない）
彼は、成人した息子が四十人もいるにもかかわらず、わずか四才のンジョヤを後継者に決定した。
ンサングウの、悪い予感は適中し、戦場で帰らぬ人となった。
四才のンジョヤには、まだ統治能力はない。そこで母親が摂政の地位に就いた。彼女は、冷酷で権威主義的な女性であったため、周りの人びとからひどく憎まれていた。
ンサングウの他の子供たちは、母親から政権を奪おうとし反乱を起したためバムーンでは二年間内乱状態が続いた。彼女は、隣国フルベ族の騎兵隊に応援を求め、反乱を鎮圧し秩序を回復した。
ンジョヤは、十五才になった時に、母親から政権を譲り受け、名実ともにバムーン王となった。彼は、母親の血を引継ぎ、権威主義的で野心家であったが、好奇心に溢れ、豊かな想像力を持った人物で、文化人でもあった。
彼は、独自の宗教を起し、文字を考案している。
バムーン族は、もともとアミニズム信仰であった。だが、ンジョヤは、ナイジェリアのプロテスタントとムスリムの感化を受け、この二つの宗教のどちらを信ずべきか迷った。
最初彼は、フンバンにモスクを建て、そこにイスラームの修道院を併設した。しかし、イスラームの教えは彼の心に安らぎをもたらさなかったのか、あるいは、バミリケ地方を植民地とするドイツの政策に迎合するためだったのか、モスクや修道院を壊し、プロテスタントの

教会と学校を建てた。

ところが、数人の妻と、多数の子供を持つ彼にとっては、一夫一婦制を強調するキリスト教は、窮屈な教えであり、邪魔な存在でもあった。

彼は、宣教師を追放し、再びイスラームの修道士を引き戻したのである。イスラームの信仰心に厚かったわけではなかったが、スルタンの称号を得た。それでも彼は現実の社会と宗教の異和感を解消できず、精神的な満足は得られなかった。

そこで彼は、イスラーム、キリスト、アミニズムを複合した独自の宗教を興した。そしてその宗教を国中に広めようとした。だが、民衆に浸透することなく、彼の死後は、忘れ去られてしまったのである。

その後、紆余曲折を経て、イスラームはバムーンの社会に深く浸透し、今日ではこの地方の住民の多くがイスラーム教徒となっている。

また、ンジョヤ王は、文字を創造した。

彼の著書「バムーンの物語と習俗」に、その文字創造の由来が書き込まれている。

「木の板の上に手を添えて〝何か書いて欲しい〟と誰れかが求めている。私は、思いつくままその板の上に書いてみた。すると〝その書いたものを洗い流しなさい。そして、その洗い流した水を飲みなさい。そうすれば、文字を考案するために必要な力を得ることができるでしょう〟と言うお告げを夢の中で聞いた」

彼は、目覚めると直ちに宮廷の高官を召集した。夢について語り彼らに協力を求めた。それはいろいろなものを描き記号化することであった。数百個集まった記号を分類し整理し独特のバムーン文字を創造したのだ。

二十年後には、更に改良を加え、八三の記号にまとめた。そのうちの十個は数字である。ンジョヤ王は、この文字をさらに国内に普及させようと考え、印刷できるよう工芸家に印刷機の製造を命じ、本を作っている。

加えて、ンジョヤ王は、文字を教える学校を建て、行政文書や会計記録を保存するシステムも立ち上げ、国家組織の整備を図った。それだけではない。彼は、自分の生み出した宗教や国の歴史、風俗習慣を書いた論文を含め数冊の本を自分の考案した文字で著している。

第一次大戦後、バムーン王国の宗主国は、ドイツからフランスに変った。ンジョヤ王は晩年になるに従い、ますます植民地化する国の状態を憂い、反植民地的行動が目立つようになった。

ンジョヤ王の存在は、フランスの植民政策にとって、妨げとなるものでしかなかった。フランス総督府は、一九二三年彼を退位に追い込み、バムーン王国は分割された。彼は一九三一年ヤウンデに追放され、三年後に帰らぬ人となった。カメルーンの独立する二十六年前のことである。

(二十四)

桂木の家族と中谷参事官は、ンジョヤ王の王宮の跡を訪れた。

王宮は、ドイツ総督の建物を模した石と煉瓦の建造物で、これまでの木造茅葺きの建物とは異なり耐火性の優れたものだ。初めての西欧風建物であるため、材料の生産、調達から建築まで困難が多く、数年がかりでやっと一九一七年に完成した。一見バロック風だが東洋風、地中海風の様式をとり入れ、他のアフリカ諸国にも類を見ない独特の建造物である。

三階建てで、三階はやや引っ込めて建ててある。中央にバルコニーの付いた塔がありその塔の入口が玄関となっている。中に入るとレセプション・ルーム、高官たちの部屋、王の執務室などがある。天井は四本の巨大な柱によって支えられており、バルコニーは彫刻された木材で囲んであった。

ヨーロッパや東洋の王宮に比べると小規模で、質素な造りであるが、住民の協力によって建てられたと言う。桂木たちが訪問した当時はユネスコによって修復作業が行われていた。

王宮見学後、桂木は家族や中谷参事官と共に博物館へ向った。

「この博物館は仮の建物で、宮殿が修復されればそこにこれらの展示物は戻されることになります。歴代の王の個人の所有物が主に展示してあります」

博物館のガイドは、そう言って薄暗い館の中の展示品を手にとり一つ一つ説明した。歴代バムーン王のコレクションが雑然と展示されている。ただ、見学者にとって有難いのは、展示品の一つ一つを手に取って見ることができることだ。

十七代続いたバムーン王朝の王冠に代わる頭髪りがあった。タカラ貝の貝殻、ビーズ玉で装飾された玉座、武器、楽器、鎧、彫刻、絵画、ンジョヤ王の著書などが展示されていた。

だが、なんと言っても圧巻は、二・五メートルにも及ぶ巨大な一対の象牙である。左右対称に立てられ上方でその先端が交り合い、一対がまるで円を描くように展示されていた。大統領宮廷にある象牙も巨大なものであるが、それに優るとも劣らぬほどであった。巨大な象がアフリカの草原を闊歩していた時代の産物に違いない。

ガイドは、案内かたがたバムーン王朝の創成期について語った。

「テイカール部族長の息子ンチャラは、部族の一部を率いて南方の土地を征服するため集落を出た。六百年も前のことだ。征服を重ねるにつれ、彼は引き連れて来たテイカール族やバミリケの重臣や戦士が疎しくなり追放して

しまった。その上で新しく臣従するようになった十八人の部族長を従え、バムーンから二十キロ離れた場所のフンバンに王国を築いた。それがンチャラ王朝の始めで、後にバムーンに王都を移転したため、バムーン王朝とも言われている」

歴代の王の中で極だった活躍をした王のコレクションには、特別展示室が設けられていた。その中でも、伝説的な巨人ムブウオムブウオ王とンジョヤ王の展示室は、博物館の重要な見学スポットであった。

ムブウオムブウオ王（一八一四～一八一七）は、偉大な戦士であった。

彼は、王国の拡大に成功し、フンバン防衛のための堀と砦を築いた。そのうちの一部は、今日でも残っている。これによって彼は、強力なフルベ（北カメルーンの部族）の騎馬軍団の攻撃を撃退し、国の独立を守った。

その彼の玉座、パイプ、杖、盾、衣服、敵の顎骨で縁どった水筒、肖像画などが並べてあった。ムブウオムブウオ王は巨人として伝説的な人物である。そのためどの品物も異常に大きく造られている。桂木は、二メートルは優に超える巨人であったと想像した。

ンジョヤ王（一八八九～一九三三）の所有物は、伝統的なアフリカの製品だけではない。植民地時代の名残りを留めた品物も展示されている。真珠を散りばめたパイプ、玉座、衣服、鉄砲、彼の著作物、とうもろこしを砕くための機械、階級ごとに定められた官僚用バッジ、ドイツ帝国軍中尉であった頃の彼の軍服姿の写真、などである。

「バムーン王国では、犯罪者はどのような扱いを受けていたの」

桂木は、ハイエナが罪人の死にかけた体を貪り食うさまを描いた小像を見て案内人に聞いた。

「強盗、殺人はもとより、泥棒も姦通者も例外なく絞首刑でした。強盗、殺人などの場合は、四人を首まで埋めハイエナの餌食にすると言った刑を科したようです」

民主主義の定着していなかった当時のブラック・アフリカでは、一般に犯罪に対する刑罰は厳しく、多くの首長国や王国が犯罪者には、極刑を持って臨んだと伝えられている。

桂木は「ブラックアフリカの中で文字を創造し、自からの文化を伝えようとしたンジョヤ王が、百年早くバムーンの地に誕生していたなら、カメルーンの植民地化も、もう少こし違ったものになっていたのではないか」と考えながらドアラへの帰途に着いた。

すでに夕暮れが迫っていた。

体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと（十五）

千坂精一

フィリピン戦線撤退

雑記帳に『影をしたひて』と『白頭山節』を書いた平山忠光上飛曹がマバラカット飛行場に来襲した敵機の至近弾で戦死した日に、残存戦力で第四神風特別攻撃隊湊川隊が編成され、明朝彗星三機が出撃することになった。

ところが、発進寸前になって突然中止命令が出た。

混乱したのは、連合艦隊司令部が敗退決定的になったフィリピンでの徹底抗戦を断念して、本土防衛に戦力を温存しようと図って中止させたのだった。

刀折れ矢尽きた七〇一空は、ついに生存搭乗員八名と使用に耐えない艦爆数機だけになってしまっていた。

フィリピンにおける戦闘は、事実上この日で終わった。

『雑記帳』に書いた二十九名のうち、特攻編成直前の十月二十四、二十五日の戦闘で戦死または重傷した隊員九名、特攻で戦死または重傷した隊員は十一名であった。

あとの九名の隊員は、

○二飛曹新田（『美幌ブルース』）

○一飛曹下小（ママ）その、十九年七月二日於松輪（『月が鏡であったなら』）

○十一期甲飛池尻大臣（若いパイロット今宵の夢も又懐しい故郷の夢であろう）

○最後だと歌ひし君の声なつかしや、椎田、中野（『妻戀道中』『支那の夜』）

○緒形少尉（踊る芸者の背後姿を描く）

○田中一飛曹（『思ひ出』）

○十九年七月十六日阿波の十郎兵衛の孫二飛曹岡村、於美幌基地（『さらば美幌よ』）

○早川一飛曹（『懐しの歌聲』『男なら男なら』『飛行道中』『青い牧場』『新妻鏡』）

なのだが、『戦記』に記載がなく、消息不明である。

これで『雑記帳』に署名のある全員を紹介し終えた。
なんども躊躇っていたので、踏ん切れて吻とした。
というのは、当時手許に『歌謡曲集』などあろうはずがないのに、書かれている歌詞がみな正確なのである。
それも一節だけでなく、二節も三節もなのだ。繰り返し口遊(くちずさ)んでいなければとても諳記できるはずはない。
だとすると、その歌詞になにか特別の想いが秘められていて、ふと未練に心が揺れるとき鼻唄で反復していたのかも知れないと思われ、発表が憚られたが、しかし、たとえ歌詞を通してなにかを訴えようとしたのだとしても、深層に潜む情念など他人に判ろうはずはないから差し障りはあるまい、と思い直してみたりもしていた。
そうしているうちに、いつかそれは私の思い過ごしで、そう深刻に考えずとも、飛行機乗りは戦闘で撃墜されれば骨も遺らぬから、生きていた証しの心算で気楽に書いただけのことかも知れない、という結論に達した。
『戦歿者名簿』には、確かに氏名と戦死年月日は記載されているが、そこから残像は浮かび上がってこない。
だが、『雑記帳』には生存した息吹が凝縮されている。
ならば、私が死んだら永久に埋没してしまう二十九名のこの筆蹟を、遺書ではなくとも確かに生きていたことの証しとして伝えねばならぬという衝動に駆られた。
話を戻そう。
七〇一空が参加を命ぜられたフィリピンの特攻戦は、十六日間で九十名の若者が帰らぬ人となった。
第一神風は、敷島、大和、朝日、山桜、菊水、若桜、彗星、梅花、初桜、葉桜、左近十一隊で戦死者四十二名。
その内訳は、士官五名、下士官、兵三十七名。士官以外の約九割はまだ成人に達しない紅顔の美少年であった。
七〇一空の第二神風のほうは、純忠、至誠、天兵、神武、誠忠、神兵、忠勇、義烈の八隊で戦死者四十八名。
その内訳は、士官七名、下士官、兵四十一名。こちらも第一神風とおなじく、九割近くが未成年であった。
いっぽう戦果のほうは、アメリカ側の資料によると、正規空母イントレピレットに一機命中、被害大。
同フランクリンに一機命中、被害甚大。
同レキシントンに一機命中、被害大。
護衛空母サンティに一機命中、被害大。
同スワニーに二機命中、被害大。
同サンガモンに一機至近。
同ペトロフ・ベイに一機至近。
同セント・ローに一機命中、沈没。
同カリニン・ベイに二機命中、被害大。
同ホワイト・プレインズに一機至近。
同キトカン・ベイに爆弾一発命中、被害中。
軽空母ベロウ・ウッドに一機命中、被害大。
同サン・ハーシントに一機至近、被害小。
軽巡デンバー損傷。

駆逐艦アブナー・リードに一機命中、沈没。
同クラックストンに一機命中、被害大。
同アンダースンに一機命中、被害甚大。
同アンメン損傷。
搭載機損害一二八機。
となっている。
この久々の画期的戦果を知って、軍令部参謀たちは特攻戦法の成功を雀躍(こおどり)して喜び、その意気は天を衝いた。
零戦四十数機、艦爆二十数機と爆弾六十数個でこれだけの戦果を挙げたのであるから、まさに驚異的であった。
ただし、人命はまったく顧みられることがなかった。
明治十五年(一八八二)、明治天皇が陸海軍軍人に対して発布された『軍人勅諭』第一条〈忠節〉の末尾に、

義は山嶽より重く、死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ。

とあるように、人命軽視は当然の風潮であった。
大西長官は、十死零生の特攻戦法を実施するにあたり、
「これは統率の外道だよ」
と自嘲したというが、隊名に〈特別〉を冠したのだからレイテ海戦だけの心算だったのだろうが、大戦果で調子に乗った軍令部は歯止めがきかなくなり、最後の沖縄戦では形振り構わぬ全員特攻に拡大(エスカレート)してしまうのである。

七〇一空内地で再建

フィリピンが攻略され、本土防衛が急務になったことから、十一月十五日戦時編制の大改訂が実施された。
七〇一空は、木更津に司令部をおく三航艦司令長官寺岡謹平中将麾下の二五航戦に編入され、K一〇二は香取基地、K一〇三は国分基地で再建となった。
十八日、K一〇三の生存搭乗員八名は、一式陸攻に同乗して、昨年十月に香取から国分に移動して台湾に出撃するおりに、海兵七二期石坂美男、坂田明治、藤田春男中尉をはじめ錬成教程中だった一三期予備学生、甲飛一一期、乙飛一七期、特乙飛一、二期生の総勢百余名が残留して猛訓練に励んでいる国分の原隊に帰還した。
いっぽう、K一〇二は香取基地で再建すると、十二月十日付で一航艦七六一空に編入され再び台湾に進出した。
アメリカ軍は十五日にフィリピンミンドロ島に上陸し、年が明けるとこんどは台湾や南西諸島に来襲した。
そして、九日にルソン島に上陸を開始すると、翌十日にはマッカーサーの本隊が西部のリンガエンに上陸した。
K一〇二は、旭日、新高、忠誠特攻隊を編成すると、一月から五月にかけてフィリピンスリガオ海峡、イバ沖、ミンダナオ海峡、リンガエン湾、台湾台東沖、沖縄島周辺、宮古島、石垣島南方、種子島東方、慶良間列島周辺の敵機動部隊に体当たり攻撃を繰り返して全滅した。
『雑記帳』に書いた人たちで消息が確認できた二十名のう

ち、K一〇三の隊員は僅か三名しかいないから、所有者はK一〇二の隊員ということになるだろう。

だが、私が七〇一空に配属されて国分基地に着任したのは昭和二十年一月で、そのころK一〇二はすでに台湾台中基地にあって、特攻出撃の最中であった。

となれば、あとはK一〇三隊員か七〇一空間接部員のフィリピン戦生存者ということになるのだが、いつ誰から渡されたのかまったく記憶がなく、思い倦ねていると、フィリピン海溝深くに眠る先輩たちの霊が現われて、

「貴様の衣嚢の底に入れておいた『雑記帳』を調べて、俺たちのことを語り継いでくれ」

と耳許で囁かれているような幻聴幻覚に囚われるのだ。

もし、それが先輩たちの願望だったならば、ここに紹介したことによって私は責めを果たしたことになる。

私が国分基地に赴任したとき、K一〇三は猛訓練の真っ最中だったことはまえに触れたが、フィリピン戦の生存者が極少数だったせいか、特攻戦歴は知らされなかったので、新編制の飛行隊だとばかり思い込んでいた。

国分基地は、駄いたことに飛行場に滑走路がなかった。

飛行場にはかならず長い直線の舗装滑走路があるはずなのに、国分基地は一面芝生で蓋われているのである。

だから、離陸はどの方向へも自由自在にできた。

飛行場を使用不能にするには滑走路を爆破すればいいのだが、国分基地の場合は芝生全域だから手間がかかる。

私が赴任した当初はまだ敵襲もなく、至極暢んびりしていたが、飛行場だけは降爆猛訓練で張り詰めていた。

高度三五〇〇から約四五度で急降下し、八〇〇で爆弾投下して機を引き起こすことを繰り返し訓練していた。

これができなくては実践で爆弾を命中させることは叶わないし、まして体当たりの成功などはとても覚束ない。

国分沖の錦江湾に浮かぶ軍艦に似た形の沖小島を標的にして、上昇、急降下、反転上昇を繰り返す訓練だが、江間飛行長は、伎倆未熟を補い命中率を上げるために、引き起こし高度を八〇〇から六〇〇まで下げさせた。

二〇〇の延長は、加速の圧力でさらに機体が沈み込む。操縦桿が重く、力一杯引かないと上昇に反転しない。

引き起こしと同時に機体が空中分解してしまったり、引き起こし高度まで下がっても反転しないでそのまま大地に突っ込む事故が起こって、殉職者が続出した。

こうして、K一〇三飛行隊は、一日も早いフィリピン戦線への復帰を目指して、苛烈な訓練に明け暮れていたが、連合艦隊司令部は東シナ海周辺地域を含む西日本防衛担当に五航艦を新設して、中国、四国、九州地区の各航空隊を麾下に取り込み、新編制することにした。

司令長官に親補された宇垣纏中将は、二月十四日厚木から輸送機で夕刻鹿屋の五航艦司令部に着任した。

七〇一空は、三航艦から五航艦の麾下になると同時に、新たにK一〇五が編入されて、二飛行隊編制に戻った。

K一〇五は、七〇一空とおなじく南方戦線を転戦したのちに、フィリピンでの特攻に参加して保有機彗星艦爆の大半を喪い、一月香取基地に集結したフィリピン引き揚げ組に一三期飛行予備学生が加わり、隊長北詰實大尉、分隊長伊藤直忠大尉、梅田章大尉を中心に再編成されて、利根川に浮かぶ小舟目掛けて降爆猛訓練に励んでいた。

国分への移動準備をはじめたところへ、敵機動部隊が硫黄島に迫り、〈捷三号作戦〉発令で暫時三航艦指揮下に留め置かれ、さっそく索敵攻撃に駆り出された。

十六日早朝、敵機動部隊攻撃命令を受けたK一〇五は、一〇三〇伊藤分隊長を指揮官に七機が香取を発進したが、途中敵戦闘機の迎撃を受けて分散してしまい、三機は敵艦発見にいたらず帰投したが、四機は還らなかった。

一三四五、三機が再出撃したが、一機は帰投したものの、二機はついに還らず、六機と十二名の若者を喪った。

一日遅く、司令部は戦力温存策に方針変更して出撃を中止させたので、K一〇五は三航艦の麾下を解かれた。

そこで、K一〇五は遅れた移動準備を急ぎ、二十八日までのあいだに順次香取基地を発って国分基地に到着した。

この間、国分基地のK一〇三は、十四日に南西諸島地域警戒強化のため彗星六機を沖縄小禄基地に派遣した。

この日、昨年十一月十一日にフィリピンから出撃して、全機体当たりを決行したものと思われていた神崎隊の指揮官K一〇三隊長柏井宏大尉が、途中発動機不調でミンダナオ島スリガオに不時着していて、操縦員北村良二上飛曹（甲飛一〇期）とともにひょっこり還ってきた。

国分基地では、この柏井隊長の奇跡的生還に沸き立ったが、もっとも欣んだのは江間飛行長だったであろう。

七〇一空は、フィリピン特攻でK一〇二隊長松井清大尉、分隊長深堀直治大尉、分隊士團野功雄中尉、K一〇三隊長柏井宏大尉、分隊士藤本勇中尉を喪っていた。

その五人のうちの一人が眼のまえに現れたのである。

柏井大尉は、十月二十九日に神武隊を率いて出撃したが、途中敵戦闘機の迎撃に遭って操縦員山崎武男飛曹長が負傷したので、やむなく基地に引き返した。

二度目は、追加編成して十一月七日に出撃したが、このときは視界不良で目標を発見できず、虚しく帰投した。

そして、三度目の十一日も不時着して死期を逸した。

指揮官でありながら三度も生き恥を晒したことで慚愧に堪えず、複雑な心境で足取り重く表情が冴えなかった。

江間飛行長は、そんな柏井大尉の胸中を察して、預かりおいたK一〇三飛行隊長を再任命すると、再建急務の発破をかけて督励し、懊悩する余裕を与えなかった。

K一〇三は、翌日から連日都井岬南東海域の哨戒に当たるとともに、降爆猛訓練にいっそう拍車を掛けた。

宇垣長官は、開戦時は連合艦隊参謀長であった。

昭和十八年四月十八日、山本長官と一式陸攻二機に分

乗してラバウル基地から前線視察に赴いた途中、ブーゲンビル島上空で待伏せていた敵戦闘機に撃墜された。
山本長官搭乗の一番機は全員戦死したが、二番機は宇垣参謀長他二名が辛うじて救出され、内地送還された。
宇垣中将は、連合艦隊参謀長を解かれて重傷の床にあったが、翌年二月二十五日第一戦隊司令官に返り咲いた。
第一戦隊は、大和、武蔵、長門の戦艦隊であった。
そして、栗田艦隊（第二艦隊）の第一部隊に編制されると、戦艦大和に坐乗してフィリピン沖海戦に出撃した。
このとき、二〇一空の零戦を爆装させて体当たり攻撃をかけたのが同期の一航艦司令長官大西中将であった。
宇垣中将は、五航艦司令長官を拝命したとき、航空部隊統轄では先輩の大西中将のことが思い出された。
あの大西長官の採った二〇一空爆装零戦の体当たり戦法は、これまでの艦隊決戦より数倍の戦果を挙げた。
戦局は、四ヵ月まえのあのときよりさらに切迫してきていて、本土防衛態勢にまで追い詰められていた。
宇垣中将は、
（五航艦麾下全飛行隊搭乗員、全員特攻もやむなし）
と臍を固めた。
宇垣長官は、二月十四日一三三〇輸送機に搭乗して厚木基地を進発すると、一七五〇鹿屋基地に到着した。
翌日、宇垣長官は麾下全航空隊の司令を集合させると、
「特別攻撃隊編成」
を命じた。

七〇一空飛行長　江間保少佐

七〇一空司令木田達彦大佐は、鹿屋の五航艦司令部から国分に戻ると、副長宮内七三中佐と飛行長江間保少佐を司令室に呼んで宇垣長官の命令を伝えた。
七〇一空は、沖縄本島攻略阻止の〈菊水作戦〉に因んで、K一〇三、K一〇五両飛行隊を『神風特別攻撃隊菊水部隊彗星隊』と命名することにした。
比較的練度の高い五航艦は、機動部隊を目標にすることになったので、国分ではさらなる猛訓練が開始された。
彗星隊の成果を左右する責任者は、江間飛行長である。
江間保少佐は、大正二年静岡県周智郡森町生まれであるから、今年満三十二歳になる熱血指揮官であった。
海兵六三期だから昭和十一年三月卒業。一年後に飛行学生になったとして搭乗歴八年の超熟練搭乗員である。
飛行長は、司令、副長に次ぐ航空隊の三役で、私たち少年兵からみれば先任下士官、分隊士、分隊長、隊長のそのまた上位の人であるから、高く眩しい存在であった。
江間飛行長は大柄な人で、柔道五・六段の猛者、兵学校一の暴れ者だったそうで、殴られたら立っていられる者はいなかったと言われるほどの偉大夫と伝えられる。
閻魔、鬼少佐と称ばれる軍規に厳しい人であった。

揉み上げから顎にかけてと、口の周りにぐるりと鬚を蓄えていて、達磨大師そっくりの容貌であるが、鬚を剃り落とせば眉毛の濃い整った顔立ちで優男風だという。
鬚面の人は童顔が多いというが、江間飛行長の鬚も美貌隠しだったのか、閻魔も江間を捩った異名だそうだ。
江間飛行長は、フィリピンですでに特攻隊編制を経験していたが、体当たり戦法については否定的であった。
（機材も惜しいが、それよりなにより、鍛え上げた搭乗員を喪うのはもっと惜しい）
勿体ないという観点からの批判であった。
フィリピン戦で使用した九九式は、一二〇〇馬力、最高時速四二八キロ、爆装は二五〇キロ×一、六〇キロ×二だったが、現在保有している彗星は、一三四〇馬力、最高時速五五二キロ、爆装は八〇〇キロ×一である。
これほどの高性能機と、鍛え上げた部下は繰り返し活用してこそ効果が上がるのであって、一度限りの体当たり攻撃で喪うなんてとんでもないと考えたのであった。
江間飛行長は、全隊員を集合させると、木田司令、宮内副長のまえで、
「全員特攻」
を伝達したあと、一拍おいて、
「特攻といっても体当たりするだけが能ではない。効果を考えればまず爆撃することだ。体当たりはその後で考えればよい。命中させる確信があれば爆弾を投下して還ってこい。そして、再度出撃せよ。確信が持てないときには体当たりを決行せよ。体当たりなどはどうしてもだめなときだけだ。とにかく爆撃でやっつけて還ってこい」
そう言い切ると、これまで引き起こし高度を八〇〇から六〇〇に下げて訓練を重ねてきていたのを、さらに四〇〇まで下げて、必中を期すように指示した。
これは異例の命令である。宇垣長官は、
「全員特攻隊となって、体当たり攻撃せよ」
と命じているのに、
（体当たりなどは、下策の下策だ）
と艦爆乗りの信念を披瀝して反論したのだ。
この命令違反ともとられかねない江間飛行長の言動を、司令も副長もその場に立ち合っていながら黙視した。
飛行科の出身ではない二人には、幾多の修羅場を潜り抜けてきたこの歴戦の勇士の合理的発言を、抑えるだけの説得力を持っていなかったのだ。
軍人となったからには、死ぬことは覚悟している。
だが、それがいつなのかは漠然としていて判らない。
死期を知ることができないから、暢んびりしていられるのであって、それが判ればとても平静ではいられない。
飛行機乗りは、艦船勤務より死を身近に感じていた。
どの機種も故障が多かったから、訓練飛行でも朝食時に同僚と水盃を交わして、この世の終わりを覚悟した。
とはいっても、特に切迫感があったわけではない。

それが、特攻出撃となれば、生命の終わりが予め判る。出撃日時の発表は、即ち死亡時刻の宣告であった。

五体満足で健全な若者が、動揺しないはずはない。今際が迫りくる恐怖感で精神が錯乱し、苦悩に陥る。

江間飛行長は、部下をそんな窮地に追い詰めなかった。

「必中の確信があれば急降下爆撃せよ。自信がなければ体当たりせよ」

若者たちは、江間飛行長の通常となんら変わらぬ異例の特攻命令によって、どんなに救われたか測り知れない。

特攻隊編成後の三月初めに、K一〇五は二国（第二国分）へ移動することになり、私たち数名も随行した。

二国は、国分の町から二里（八キロ）ほど山道を上った標高三〇〇メートルの台地十三塚原に急造された基地で、真新しい滑走路が一本だけぽつんと敷設されていた。

もう一本造るらしい縄張りがあって、飛行場を使用開始してから着工されたのだが、まもなく敵機の空襲が激しくなったために未完成のまま放置されてしまった。

飛行場には掘建小屋のような粗末な指揮所があるだけで、近くに電信室はあるのだが地下室なので見えない。

遠く離れた松林や雑木林のなかに隠れるようにして司令部、宿舎、烹炊所などが広範囲に点在していたが、娑婆とを隔絶する塀はなく、諸施設も雑然と置かれているようで、慌てて造られた不備の感は否めなかった。

戦後、鹿児島市鴨池にあった鹿児島基地が民間航空の空港になったが、巨大機の就航に伴い二国基地とその周辺が開発されて、現在はこの溝部町に移っている。

二国から一時間ほど山道を下ってゆくと、大隅国一の宮鹿児島神宮のある隼人町に出るが、その途中の日當山温泉に海軍の指定倶楽部大正館があった。

そのほか、あれやこれやが断片的に思い出されるが、横道に逸れてしまうので、機会を見て触れることにする。

とにかく、菊水部隊彗星隊員は、江間飛行長の方針で爆弾を必中させさえすれば堂々と生還できることになったので、体当たりとおなじ効果を挙げるために、引き起こし高度を四〇〇メートルに下げる猛訓練に励んだ。

だが、ようやく体で覚えた六〇〇よりさらに二〇〇も降下させることは、より荷重が加わるから、操縦桿を力任せに引かないと引き起こしが難しく、危険であった。

無理な引き起こしで機体が空中分解したり、瞬間がずれてそのまま地面に突っ込む事故がますます多発した。

だが、十死零生の体当たりを免れるためには、高度四〇〇メートルまで降下して爆弾を投下し、命中させる高等技術を習得しなければならないのだから、生き残るために不可能を可能にする懸命の努力がつづけられた。

（つづく）

紙透家の人びと（二十一）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

六　昭和十九年二月　副官補任

編成当時からの赤穂中尉副官も長かったし、暗号事件もあり、後任として僕が副官に転補され、同時に中尉に昇進し、岩元軍曹を連れて、アンボンにあった第五野戦憲兵隊の本部に、二月上旬、出向した。

途中、プルワジュ（七つの島）の一番大きな島へ立ち寄った。支那人に大分、厄介になり、小憩の後、辞したが、その後、その華僑に遭う機会はなかった。また、再びプルワジュに立ち寄る機会もなくなった。

アンボン着と同時に、内地から増加要員として、古川、橋本両分隊が来た。友部安五郎、樺沢静茂両准尉も来た。早速、友部君には本部付きとして庶務をやって貰うことにした。

各分隊の編成、新分隊の配置、その他、てんやわんやであった。

そのころから、戦況はわが軍に不利となり、敵の空襲は熾烈をきわめ、毎日、空襲のない日とてはなく、夜は必ず一度は防空壕に入った。

濠州作戦のための第十九軍は転進作戦と一変してしまった。（転進とは本来、進む方向を変えることであるが、旧軍隊では『退却』の代わりに用いた言葉）

アンボンの憲兵隊本部は、埠頭近く街の中央にあるし、危険は刻刻と迫ったかの感であった。

軍司令部は、既に、アンボンから同島の中間ネグリラマへの移動を準備し、同年四月ごろから、憲兵隊本部も軍司令部所在地へ、設営隊を派遣して、防空壕、宿舎、庁舎の準備をして雨期前に移転すべく計画された。こうした情況下、矢沢中尉と二人で、夜遅く気晴らしに港に飲みに行った事も、二か月のアンボン生活の思い出となってしまった。

当時の第五野戦憲兵隊本部は中村通則中佐隊長、紙透小太郎中尉副官、中村勇中尉（軍司兼任）、矢沢主計中尉、山田軍医大尉、友部准尉。あと田中一馬中尉がニューギニアから帰ったが、ほとんど神経衰弱になっていた。山口亘利中尉はスンバア島へ転進で、飛行機で赴任してしまったあとであった。油谷少佐はチモール、沼田大尉はアンボン分隊長、古川中尉はセラム島ピル分隊長であった。

ネグリラマへの転進は五月初旬であった。そのころ、後方ジャワ方面からの輸送も途絶して、食糧その他の補充は極度に困難となってしまい、現地自活体制を命ぜられたのである。

ジャングル地帯の寸土と言えども重用性を来し、各隊は懸命に開墾作業隊を編成して現地自活に突入した。我が隊も付近のジャングルから鍬を入れた。まず、カスビ（木の根にサツマ芋様の芋が出来る）の植え付けをしたのであるが、事務の傍ら作業隊を編成して、僕は作業隊長となって連日開墾に参加した。その結果、二か月で約一町歩を開墾、植え付けを終えた。（父小太郎は、兵役につくまで、生家で農業をしていたので、農作業の玄人としての自信をもっていたと思う）

カスビの他、里芋、サツマ芋、パイン、これが後日、沼田分隊の主要糧秣となったのである。

アンボン大空襲

昭和十九年八月末、B24六十五機の大編隊による、大空襲を受けて、一時間にして旧海軍司令部の一部（当時、沼田分隊庁舎）のみを残し、壊滅してしまった。

『まんじ91号』で述べた『南十字星は知っている』の著者鈴木島吉氏は、アンボン島へ再上陸したころを次のように回顧している。

（帰り来しアンボン……懐かしきバトメラに落ち着き瓦礫の山と化したアンボン市街を見るたびに、爆撃の物すごさを、思い浮かべるのでした。……食糧の補給は断たれ、離島より集まった人々で人口は増加、先行き見通し立たぬ情勢なれば節食も止むなく、一人一日一合となり、朝が芋粥、昼一食が米、夜は芋二、三個のみ、しかも芋は腐っている時もあり、労働者にとっては、堪え難い量となってしまった。

そこで防衛策として、食事直後、幾分満腹感のあるうちに、急いで作業を済ませ、後は野草の採集をするようになった。）

セラム島ピルへ転進

敵の反攻いよいよ急であって、陸軍はアンボン島を放棄してセラム島へ転進し、最後の拠点とすべく昭和十九年九月ごろから移動を準備した。ピル市郊外三キロのジャングル地帯に、軍司令部は既に移動を完了。憲兵隊本部も、これに追随した。設営隊として福永栄中尉が先行して、バナナ畑に隣接したジャングル地帯に兵宿舎を造った。

アタップ葺き（椰子の葉で葺く）、柱は木や竹で、床はサゴ椰子の皮で造った、極めてお粗末なものであった。幸い常夏の国であるので、住居は簡単であった。完成までは中村隊長以下アタップ造りをした。

輸送は海上輸送隊の大発のみであり、昼間の航行は空襲で不可能。夜間航行のみ。トレフ港（アンボン島）からピル港（セラム島）へ行く七時間、生死をかけた航行である。そのころは、もう完全に制海権、制空権共に敵手にあり、危険そのものであった。十月初旬本部はピルに転進を了した。

アンボンには、取りあえず田中中尉が残留隊長として跡始末をする事となった。折角開墾した土地も三か月足らずして転進することとなり、何ものも口にすることは出来なかった。ピル郊外に移動したものの、ここは奥地に入るほんの足留まりに過ぎなかった。約三か月後、ピル川上流の地に最後の拠点として軍司令部の転進は決定されていたのである。

ピル大空襲

昭和十九年十月中旬、敵機の二十数機による空襲で、ピルは、一日にして廃都と化してしまった。当時、最後の拠点、ピル川上流には各隊より作業隊編成せられ、道路建設に必死の努力は続けられた。

ピル川上流奥地へ転進

ピルより約四十キロ山中に、最後の拠点として軍司令部は転進し、憲兵隊本部も、また、本年中に移動の命令があった。設営隊福永栄中尉以下、十一月初旬先発、十二月二十九日、軍司令部と前後して転進した。早速、本格的な現地自活体制を採らなければならない。僕は本職のほか、本部の自活隊長となり、ジャングルの開墾に当たった。巡視の結果、兵舎付近は全部開墾して約五町歩を得る目安の下に、その一角に鍬を入れた。

年が明けて昭和二十年一月二日。

まず、第一日は樹木を切り倒し、草を刈り取り、竹藪を起こした。一日おいて、スコール（夕立）の合間を見て焼き、その跡をスコップ、鍬で掘り返し、苗を植える。スコールがくる、二、三日で根が生ず、その過程を反覆して、逐次拡大するのである。その間十日すると植えたサツマ芋のつるは伸びてくるので、そのつるを切って次に植える。こうした苦闘を経て三か月目には約五町歩全部にサツマ芋を植え終ったのである。一部には里芋、茄子、煙草、ショーガを植えることも出来た。主にこれは佐藤四郎軍曹にやらせたが、成績は優秀であった。パパイアも点点と植えた。ところが、この地方は野豚の多

い所で、芋が出来ると荒らされるので周囲全部に木柵を造った。これは三間丸太を五寸乃至八寸間隔に立て、置くのである。また、竹藪は内地のそれと違って大きな株になっているのである。孟宗竹のように太いので、半径五寸から八寸くらいのすごいのもあり、長さは十間くらい素敵に大きい。間断なく竹の子は出て来るので、この竹の子は大分副食物になった。

マラリア罹患

恐ろしいマラリアは、体力が充実している時は大丈夫であるが、一度罹ると命を取られる恐ろしいものだ。熱帯性と三日性の二種類で、熱帯性は恐ろしい。白血球が破壊されるので熱発して倒れる。昭和十八年度は大したことはなかったが、十九年度に入り、隊員の九〇%はかかってしまった。僕も遂に十九年、セラムに渡ってから罹ってしまった。幸い三日性の普通のものであったので大したことはなかったが、就床することも時にあった。

この悪条件下で、食糧確保には懸命の努力をしなければならなかった。隊の糧秣は一人一日百瓦として、二か月分しかなくなってしまったので、後はサゴ澱粉とサツマ芋より食うものはない。入院者は続出して、戦病死も出て来た。サゴ澱粉が主食になったのもこの時期であった。

こうした苦闘も僅か一反歩の芋を食ったのみで、五月初旬、急にセレベス島へ転進の命令があった。戦況はますます不利。濠北派遣軍は転進また転進。ほとんど馬来方面に派遣され五師団を以ってセラム島を防衛させることとなり、第二軍の新設軍はセレベス島へ退却することとなったのである。

（つづく）



漢詩

潮騒錄（四十）

鯨游海

問答鬼　　平成十六年一月

一人復少同窗會
二狀更無年賀書
鬼問汝何時欲去
佳詩未得當分居
　押韻・書　居

〈鬼と問答す〉

一人また少けたり　同窓の会
二状さらに無し　年賀の書
鬼は問う「汝何れの時か去らんと欲するや」
「佳詩いまだ得ざれば　当分居たし」

〔注　解〕

鬼はわが国の文学上時に詩を理解し感泣する。そういったのは江戸末期橘曙覧である。子規が「曙覧の歌集をみて、始めてその尋常の歌集に非ざるを知る。万葉集源実朝のあと唯一人曙覧あるなり……」と絶賛した。

曙覧は鬼を詠んだ。「人臭き人に聞かする歌ならず鬼の夜更けて来ば告げもせむ」「灯火のもとに夜な夜な来たれ鬼我が秘め歌の限り聞かせむ」……。

起句の「一人また少く」は王維より借りた。「九月九日憶山東兄弟（九月九日山東の兄弟を憶う）」より。

獨在異鄉為異客　独り異郷に在りて異客となる
毎逢佳節倍思親　佳節に逢う毎に倍々親を思う
遙知兄弟登高處　遥かに知る兄弟高きに登る処
遍插茱萸少一人　遍く茱萸をさして一人を少かん

王維が進士の試験を受けるべく洛陽に留学していた時、九月九日の重陽の祝日に近隣の丘に登り、遥かに故郷を想って詠んだ。自分の不在を「一人少く」と表現した。

☆詩になみだ夜更けて歌う鬼ありき
　人臭き人鬼に愧じなむ

二宮金次郎之一生（十五）相模片岡村復興事業

平成十五年十月

一戸財成萬戸枯
助言當減分與租
不均憂是不憂寡
長者賢明村忽蘇

押韻・枯 租 蘇

〈二宮金次郎の一生（十五）相模片岡村復興事業〉

一戸財成り　萬戸枯る
助言す「当に　分と租とを減ずべし
均しからざるを是れ憂え　寡きを憂えず」と
長者賢明なれば　村たちまち　蘇える

〔注　解〕

起句は晩唐の詩人曹松の己亥歳「一将功成萬骨枯」をもじった。分は金次郎の藩政改革の柱となった分度即ち身分相応の生活をする事。転句は論語「不患寡而患不均」より引用した。

この頃、領外片岡村の名主大沢市左衛門から金次郎は相談を受けた。二度の飢饉で彼の村は疲弊し、不作→年貢未納→督促→借金→貧困→やる気喪失という悪循環に陥ち入り悲惨な状況にあるという。

金次郎が調べてみると大沢市左衛門は、村の四割強を所有する大地主であった。金次郎は諄々と説いた。

「物事の衰退には必ず原因がある。その基は『道』である。道が盛んなら栄え、逆なら衰える。道とは人が助け合う事で、一円融合という。

村の石高は七二八石。四九軒で割ると一軒十四石八斗となる。これ以上を富者、これ以下を貧者とし富者が貧者を救けるのが人の道というものであろう」と。

大沢市左衛門ははっと気付く。

自分の持ち分を除いて計算すると一軒当り八石五斗に過ぎない。富者とは自分一人だけである。つまり自分が村民全員を助けるしかない。

金次郎の眞意を悟った彼は英明で徳ある人であった。借金有る者には無利息で肩代りし、田地を無償で貸し与え、又比較的富める者には小作料を軽減してやったりと尽力する。勿論自分や一族の生活は分度を切り下げ倹勤に励む。租の年貢米も軽減してやり、不足分は自から拠出して小作人の実力養成に努力した。かくして見事にこの村は復興していった。

☆人なれば人の道こそ楽しけれ
長者なりせば万戸助けむ

二宮金次郎之一生（十六）大磯之仕法

平成十五年十一月

群衆狂奔一揆哀
壞倉奪米燒家財
諄諄説諭因果報
奸賈改心仁里魁

押韻・哀　財　魁

〈二宮金次郎の一生（十六）大磯の仕法〉

群衆狂奔せる　一揆は哀し
倉を壊し米を奪い　家財を焼く
諄々と説諭す　因果の報いを
奸賈心を改め　仁里の　魁　たり

〔注　解〕

奸賈とは、よこしまな商人。悪徳な米問屋。

仁里とは論語より。仁者の集まっている村。風俗習慣の美しい村ざと。「里仁爲美　擇不處仁　焉得知」＝仁に里るを美と為す。択んで仁に処らずんば、焉んぞ知を得ん＝荻生徂徠。朱子の新注では「里は仁を美しとす」。

片岡村の復興の目途がついた頃、大磯町で暴動が起こった。同町の米問屋川崎屋孫衛門が打ち壊しに遭ったのである。数年来の凶作で米価が急騰し、引下げを要請したが容れられず、遂に群衆が一揆に及んだ。被害は甚大であった。

相談された金次郎は諄々と説く。「かつて飢饉で皆が困っている時、米価を上げて大儲けした事を人々は覚えている。因果応報というべきである。又皆が困窮している今こそ憐みをかけ助けるのが人の道なのに、我欲を張るのは天道廃絶である。

これを脱するには、私財を投げうって無から再出発するしかなかろう。そうすれば人々が同情し助けてくれるであろう」。

孫衛門は納得し心を入れ換え、私財を提供、善を積み人望と評判を回復した。禍を福に転じたのであった。

☆人飢えて独り富むこそ虚しけれ
我れ積善の　魁　たらむ

二宮金次郎之一生（十七）韮山之仕法

平成十五年十一月

貸借貨泉魔性神
一時安堵永年辛
而猶浮世必須事
報德基金又救人

押韻・神　辛　人

〈二宮金次郎の一生（十七）韮山の仕法〉

貨泉を貸借するは　魔性の神

一時の安堵　永年の辛
而もなお浮世　必須のこと
「報徳基金」　また人を救いたり

〔注　解〕

貨泉とは貨幣の別名。新の王莽の時に使われた硬貨。

韮山の豪商多田彌次衛門は、古金銀引替御用を務め、駿河、遠州、伊豆、相模に広範な商圏を有していた。

古金銀引替とは幕府が新貨幣を発行する際、古い貨幣（金銀）を回収する業務でいわば官指定の特権を持つ銀行であった。

幕府に収める間の運用は自由という点を利用し多額の金を貸していたのだが焦げついたのである。古来金を貸すのは簡単だが回収が難かしい。折からの飢饉の影響もあり、小作料等も未納が多く窮して了った。代官江川太郎左衛門も領内統治上捨てておけず、報徳金の事を聞き及んでいたので熱心に借入れを懇望した。

金次郎は両人の熱意に動かされ又公の事でもあるので千数百両という多額の金を無利息で融通し、そのお蔭で危機を脱する事が出来た。然し回収には約束の十年が守られず、結局二十数年を要したのであった。

現代の銀行経営者も他山の石とすべきである。

☆借るる人夢な忘れそ貸の魔性
　天にも昇る心地こそすれ

二宮金次郎之一生（十八）下館藩復興事業
　平成十六年一月

分度斷行三割減
君臣心一氣愈軒
民尊勤勉士辭祿
報德魁哉下館藩
　押韻・軒　藩

〈二宮金次郎の一生（十八）下館藩復興事業〉

分度断行す　三割減を
君臣心は一つにして　気いよいよ軒なり
民は勤勉を尊び　士は禄を辞す
報徳の魁なるかな　下館藩は

〔注　解〕

常陸の下館藩は借財が累増し年貢収入のみでは利息も払えない窮状にあった。隣接の桜町領での成功を知る藩では金次郎に復興を依頼したが謝絶される。実は「どの位眞剣か、藩主の覚悟の程は」を試していたのである。

再三の熱意に遂に動いた。「仁政が欠けている。困窮者を救う事から始めるべし」と一三七俵の米を送る。次で借金を低利や無利息のものに切り替え、圣費と分度の三割カットを断行した。武士は禄の辞退を申し出る等挙藩一致して復興が進んだ。

かくして下館の報徳社は、わが国報徳運動の魁となったのである。

☆仁政に人の心ぞ育くまる
　下館に咲く徳のさきがけ

《漢詩の流れ31》北宋の巨星たち④

王安石（一〇二一～一〇八六）。字は介甫、号は半山。江西省撫州の人。進士及第後、皇帝神宗の信任を受け宰相となった。傑出した政治家且つ詩人、文章家である。

財政改革の為、種々の新法を起こして弊政の建直しを図ったが、保守派の反対により下野して南京に隠栖した。

何時の世も、何処の国でも似たような事件が起こるものである。この新法党と旧法党との抗争は、政界を二分しまた国論をもまっ二つに別った激しいものとなり、二転三転する事態となり、ひいては国力そのものを減退せしめる要因となったのである。而も先輩の欧陽修、後輩の蘇軾らと政治上は鋭く対立したが彼らとの友情は終生失なわなかったといわれる。

人間社会に投じた諷刺の詩がある。

禿山（とくざん）

吏役滄海上　吏として滄海の上に役し
瞻山一停舟　山をみて一たび舟を停む
怪此禿誰使　この禿なる誰か使めたるかを怪しむに
鄉人語其由　鄉人其の由を語る
一狙山上鳴　一狙（猿）山上に鳴き
一狙從之遊　一狙これに従いて遊ぶ
相匹乃生子　あい匹いて乃ち子を生む
子衆孫還稠　子衆ければ孫また稠し
山中草木盛　山中草木盛んにして
根實始易求　根も実も始め求め易く
攀挽上極高　攀挽して上り高きを極め（挽は手をひく）
屈曲亦窮幽　屈曲してまた幽きを窮む
衆狙各豐肥　衆狙おのおの豊かに肥え
山乃盡侵牟　山乃ち尽く侵牟さる（牟はむさぼる）
攘爭取一飽　攘争して一飽を取る
豈暇議藏收　あに蔵収を議るに暇あらんや
大狙尚自苦　大狙も尚自から苦しみ
小狙亦已愁　小狙も亦すでに愁う
稍稍受咋嚙　稍々咋嚙を受け（喰い荒され）
一毛不得留　一毛も留まるを得ず
狙雖巧過人　狙は巧なること人に過ぐると雖も
不善操耡耰　耡耰（農耕の道具）を操るを善くせず
所嗜在果穀　嗜なむ所は果と穀とに在り
得之常以偸　これを得るに常に偸（盗）を以ってす
嗟此海中山　ああこの海中の山
四顧無所投　四顧するも投ずる所なし（逃げ場がない）
生生未云已　生々未だ云に已まずんば
歲晚將安謀　歳晩（年の暮）将た安にか謀らん

撞木（しゅもく）

☆二宮尊徳の報徳思想が中国で注目されている。中国は、儒教や道教を生み三千年来東アジアの思想界をリードしてきた。その中国が何故今報徳思想なのか。

☆日本経済新聞社の日中ビジネスマン調査によると「二〇二〇年に中国の国内総生産は、日本と並ぶか上回る」とする回答者が七割を超えている。中国のGDPはすでにイタリアを抜き世界第六位。二〇一〇年代初頭には、英、仏、独を上回ることが確実視されていると言う。だが、急速な経済発展は、国内に大きな社会的歪みを生んだ。貧富の差は拡大し、国民の不満の高まりは、政治的混乱を招きかねない。ことに、都市と農村の経済較差は深刻だ。そこで注目されたのが報徳思想と言うわけである。

☆報徳思想については、本誌も縁が深い。三戸岡発行人が八一号から八三号まで、三回にわたり〝報徳の人〟〝二宮尊徳〟と題する小説を発表、その思想を紹介した。その後、加筆し単行書〝二宮金次郎の一生〟を出版、話題を呼んだ。さらに、本年五月には、四人の共著で〝二宮金次郎と十三人の世界人〟を上梓している。

☆昨年四月、中国を始め海外数ヶ国の大学、研究機関の学者や研究者が参加して、国際二宮尊徳学会が設立された。経済と道徳の一致を説く報徳思想が日本発の思想として、東アジアだけでなく、世界に羽ばたくことができるかどうかは、今後の日本の持続的経済発展と民心の安定にかかっている。（O・S）

まんじ　第93号

平成16年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田　精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　田寺怜葦（たでられい）　画
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

まんじ

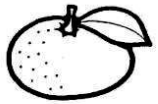
No. 94

2004.11.1

まんじ第九十四号　目次

孔子春秋　第一章・第二章 …… 三戸岡道夫 … 4
茉莉花伝―東丹国使と来た娘―（一） …… 森下征二 … 13
昔の「せんせい」 …… 大和禎人 … 35
「文明の衝突」から日本文明のアイデンティティを考える …… 中村一彌 … 39
敗北者賛美と勝利者誹謗（一） …… 隆恵 … 47
関寛斉のこと …… 山田嘉久 … 60
古い物・遠い夢 楽茶碗の怪（陽炎の人） …… 忠内正之 … 66
北海道一人旅 …… 吉田忠雄 … 73
現代時残暑見舞い（十四行詩三部作） …… 松下壽男 … 79

短歌　行雲流水（七） …… 石黒修身 … 80
まんじ語録（一） …… 新井宏 … 82
小野小町物語（三） …… 島津隆子 … 92
義人・伊豆頭七異聞（三） …… 堀内永代 … 104
丙午の女（四） …… 太田和貞 … 116
遥かなるカメルーン（五） …… 太田精一 … 121
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十六） …… 千坂精一 … 131
紙透家の人びと（二十二） …… 紙透寛夫 … 146
漢詩　潮騒録（四十一） …… 鯨游海 … 153
撞木 …… 編集子 … 158
表紙 …… 田寺怜葦
カット …… 宮城正彦
鈴木國男
清水トム



孔子春秋

三戸岡道夫

第一章　出　生

孔子は紀元前五五一年十月二十一日に、中国に生まれた。今からおよそ二千五百五十年前である。

生まれたのは魯の国、昌平郷の陬という邑である。陬の位置は、魯の首都（現在の中国の山東省曲阜）から南東三十三キロメートルにあたる近郊である。

そこは泗水と洙水という、二つの川にはさまれた平坦な田園地帯で、後年、孔子の学を洙泗の学とも呼んだりするのは、このためである。また、日本の江戸時代の幕府の大学昌平黌が、この昌平郷からその名をとったのは、いうまでもない。

魯は小国ではあったが、周王朝を創始した武王の弟である、周公旦が封ぜられた、由緒のある国であった。

さて、孔子という名前であるが、「孔」は姓であり、「子」は古代中国における男子の尊称であり、したがって孔子とは、孔先生といったような意味である。

孔子の本名は「丘」である。

なお、その頃の中国には、本名のほかに、他人から呼ばれるための字（通称）というものがあった。他人からは字で呼ばれるのが普通なのだった。孔子の字は「仲丘」である。

この名前の由来についてはいろいろ伝説があるが、孔子の母親が、

（どうか子供を授けてください）

と、曲阜の南東にひろがる尼丘山にお祈りに行った。そして生れた子供の頭の頂きが、尼丘山のように中央が凹んでまわりが高くなっていて、尼丘山の姿に似ていたので、本名を「丘」、字を「仲丘」とつけたのだといわれている。子供の名前は、なにか子供と関係のある因縁からつけられることが多いので、この命名は不自然ではない。

なお孔子の出生については、不思議な伝説がある。それは、孔子の母が尼丘山に登って子授けを神に祈ったところ、たちまち黒色の龍が現われ、その精に感じて妊娠したという伝説や、また母が天上の神と通じて孔子を懐妊した、という伝説である。すなわち孔子は普通の子ではない、特別な子供だったというわけである。

中国には、王朝の開祖や、すぐれた聖天子は、特別の生まれ方をしたのだという、いわゆる「感生帝」の伝説がある。孔子の場合も、後世、漢の時代になって、孔子を神格化するために感生帝伝説にならって、聖人伝説として美化したものと思われる。

では、孔子はどのような家庭に生まれたのであろうか。

父の名前は叔梁紇といった。

母の名前は顔徴在である。

父の叔梁紇は武官であり、その祖先は宋の国の貴族であったという。が、宋に内乱があったので、魯の国へ移ってきた。宋という国は、周王朝に滅された殷王朝の人々が作った国であり、したがって孔子も殷王朝の流れを汲む貴族の後裔ということになる。

しかしこの祖先に関する説には多分に美化されたところがあり、孔子の出生の感生帝伝説のように、後世になって脚色されたきらいがある。というのは、父の叔梁紇は実際は農民上りの、下級武士のようであった。しかし武士として赫々たる戦功をあげ、その武勇の誉れは鳴りひびいていた。

それを物語るのに次のようなエピソードがある。

魯の襄公の十年（前五六三）に、魯の北部の連合軍が、南の楚に対抗して、偪陽という城を攻めたことがあった。城はなかなか落ちなかった。しかし、やっと連合軍は城内へ攻めこむことができた。しかし敵が仕掛けた仕掛戸が落されて、城内に閉じこめられてしまい、城内から脱出できないという、危険な事態に陥ってしまったのである。

すると一人の武士が現われて、城門の仕掛戸をこじあけると、ぐっと両手で持ち上げ、閉じこめられた連合軍の兵士たちを、無事、城外に逃がしてやった。これが孔子の父の叔梁紇であり、叔梁紇は沈着剛胆にして、驚くべき腕力の持主、武勇の士だったのである。

またそれから七年後の襄公十七年、すなわち孔子が生まれる四年前、北方の大国である斉の国の軍隊が魯の国に攻めこんできて、防の町を包囲した。魯の国では援軍を出して救助しようとしたが、思いにまかせなかった。

するとその中にいた孔子の父の叔梁紇は三百の武装兵

をひきいて、夜陰にまぎれて斉軍の包囲を突破すると、防の町を救出した。すぐれた武人としての叔梁紇の素質は、ここでも遺憾なく発揮されたわけで、この軍功が認められて隊長になっている。

すなわち孔子の父の叔梁紇は身分の高い貴族の後裔というよりも、下級武士から身を起して、その実力によってひとかどの隊長に出世したというのが、事実のようである。

母の顔徴在は『儒』とよばれる家系に育った女性である。すなわち葬祭を生業とする、祈祷師の家系である。したがって、尼丘山には巫祠があり、おそらく顔徴在はその巫女だったのではなかろうか。顔徴在が尼丘山で「子供を授けてください」と祈ったのも、この尼丘山の巫女の仕事の中でのことだったのかもしれないのである。

さて、父の叔梁紇と母の顔徴在の結びつきは、「史記」によると、

（二人が野合して孔子を生んだ）

と記されている。野合の意味については諸説あるが、要は、

（正式な結婚によるものではない）

ということである。しかし具体的なことはわかっていない。とにかく（まともな出生でなかった）ことはたしかである。

神に仕える巫女がひそかに男としのび逢い、その結果懐妊した。だから孔子の出産があまり祝福を受けたものでなかったという事情が、この辺に隠されているのかもしれなかった。

なお、孔子の字（通称）の仲丘の「仲」という言葉は、兄弟の順番を示す言葉である。

当時の中国では、兄弟の順番を上から、伯、仲、叔、季、と呼ばれた（この言葉の使い方が、現在でも、両親の年上の兄姉を伯父、伯母、年下の弟妹を叔父、叔母と呼ぶ習慣として残っている）。

したがってこの言葉の使い方から推測すると、孔子は次男ということになり、兄がいたわけである。もちろん異母兄であり、名前を孟皮といったという。しかしその兄も妾の子で、足が不自由であったという。

孔子の父はすでに妻との間に九人の子供を持っていたが、みんな女子であった。また妾との間にも男の子が一人あったが、足が不自由であった。そこで身体が健全な男子が一人ほしいということで、若い顔徴在と野合して、孔子を生んだのではなかろうか。

だから顔徴在が尼丘山に「どうか子供を授けてください」と祈ったのも、

（どうか男の子が生まれますように）

と男子の出産を祈ったのかもしれなかった。

したがって孔子が生まれたとき、父の叔梁紇はもうかなりの年令（六十歳以上）になっていたと推定される。

こうして孔子は今から二千五百年ほど前に中国に生れたのであるが、奇しくもこの頃には世界各地で孔子と並ぶ聖人が生れている。

世に、世界の四大聖人として、釈迦、キリスト、孔子、ソクラテスの四人の名前があげられているが、この四人とも、ほぼこの前後に生れている。

孔子の生れる十五年前にインドでは釈迦が生れており、孔子の死後十年目に、ギリシャのソクラテスが生れている。そして時代はやや下るが、孔子が死んで約五百年後に、キリストが生れている。

それのみならず、この紀元前六世紀から紀元前四世紀にかけては、後世に影響を与えた思想家や学者が、これらの地域でたくさん生れている。

これは果して偶然なのであろうか。それとも人類の知能成長がその時に一挙に噴出した、人類歴史の、ある必然かもしれないのである。ちなみにこれらに共通しているのは、青銅器時代が終わって、鉄器時代が始まった頃という点である。

第二章　幼少時代と生い立ち

（一）

孔子の出生の事情は以上のようであった。そのため孔子は父の家（孔家）へ引き取られたが、母の顔徴在は孔家へ入ることができなかった。すなわち、孔子と母とは別々に住んでいたことになる。母はおそらく、孔子の誕生を祈った尼丘山の野外で、別居していたのだろうと思われる。

父の叔梁紇は、孔子が三歳のとき死亡してしまった。孔子は幼くして父を亡くしたわけで、逆にいえば、叔梁紇はそのような高齢になってから孔子をもうけたことになるわけである。

母は世間をはばかって、孔子が大きくなってからも、父の墓を知らせなかったという。したがって孔子は長い間、父の墓所がどこにあるのか知らなかった。

しかしよく考えてみると、母が孔子に墓の場所を教えなかったのではなくて、母は父（叔梁紇）の葬儀に参列することができなかったので、教えたくても、墓の場所を知らなかったのではないかと思われる。

神に仕える巫女が、ひそかに妻子のある男と忍び会い、その結果懐妊して生れたのが孔子である。だから孔子の幼少時代があまり恵まれたものでなかったことは事実であろう。

孔家の中においても、孔子は孤立していた。幼い頃の孔子は、あまり友達もなく、遊ぶのにも一人で食器を並べて、祭祀の儀式のまねをして遊んでいたという。

これは孔家が、魯の隣国である宗教的雰囲気の濃い殷

王朝の後身である宋国出身であり、そのため系統的に宗教者であったという家の雰囲気がそうさせたのであろうが、同時に、葬祭を生業とする祈祷師の母方の家業を、見よう見まねで、遊んでいたのではないかとも思われる。孔子は出生のゆえに、家族からも、近隣からも孤立して、一人遊びをしなければならなかったのである。

孔子の幼少時代を一口で言えば、父のいない継母のもとで、足の不自由な異母兄や、大勢の異母姉たちと一緒の、家庭的にも恵まれず、貧しく、艱難に満ちた幼少期だったのである。

だから孔子は成長して少年になり、青年になると、食べていくためには何でもしなければならなかった。孔子はいつも、どんな農事にも精を出し、ときには母方の親族が従事している葬儀などを手伝うこともあったであろう。そのため孔子は後年になって、

（わたしの若いときは身分が低かった。だから、つまらない仕事もいろいろやったので、大人になった今でも、つまらないと思われるような事もいろいろと出来るのだ）

と言っているのである。

そんなところから、幼い頃は祭祀のまねをして遊んだというエピソードも、生れたのであろう。

しかし、そうした仕事の中から孔子は子供ながらに仁儀礼の優美に魅せられ、音楽や衣裳、器物の雅びな雰囲気に、次第に惹かれていくのであった。それが同時に、孔子が将来持つようになる『礼』の徳や、音曲の教養の原点、基礎ともなったのではないかと思われる。

孔子は強靭な身体と、明晰な頭脳とを、両方あわせ持っていた。

身長は九尺六寸（百九十センチメートル）と巨大であり、また容貌は異相であったという。すなわち、のっぺりとした美男子ではなく、いかつい顔をしていた。

聖人と称されるから、白鬚を長々と生やした清純な老人をイメージしがちであるが、孔子はそうではなく、エネルギッシュな巨漢だったのである。日本でいえば西郷隆盛とか、二宮金次郎のような人だったのではなかろうか。

孔子が巨漢で、腕力に秀でていたという一つのエピソードがある。ある時、国都である魯城の、重い角材で作った国門の閂を、孔子は一人で持ち上げたと言われている。力持ちで有名だった父の体力を受け継いだのであろう。貧しかった孔子にとって、その体力は貴重であった。どんな力仕事でも引き受けて働いた。しかし孔子は、

（力をもって聞こゆるを肯んぜず）

と、力仕事だけで評価されるだけで満足しなかった。精神の世界でも活躍しようと、文人として世に立つことを決心していた。

それは孔子が頭脳明晰である上に、性格は穏やかで、慎しみぶかく、かつ控えめな人柄であり、酒は好きで飲んだが、決して乱れないという、立派な文人として世に立てる資質を持っていたからであった。

文字を読める人間が少い当時において、孔子は早くから文字を読むことができた。教えたのは、母方の叔父や祖父だったのであろう。葬祭には、死者を弔う祝詞や、礼式の伝承が不可欠であり、それらを記した文字は、職業の知識として必要だったからである。

孔子が晩年に、

（われ十五にして学に志す）

と述懐しているのは、ちょうどこの頃のことを言っているのであろう。すなわち孔子は十五歳の頃に、すでに人生の進路について、

（正しい文化の伝承者として、学問の道一筋に進んでいこう）

と決心したのである。

さてこの頃孔子は、別居していた母を、孔家の家か、あるいは孔家のすぐ近くに、呼び寄せたのではないかと思われる。

だが、そうした孔子にも不幸がやってきた。孔子が十七歳のとき、母が死亡したのである（『史記』の記載から推定）。孔子は父も母も失ったのである。

しかし母は公式には孔家とは姻戚関係にない人間である。だから孔家から公式に葬儀を出すことができなかった。

一般に葬儀は、遺体を棺に収めて安置して祭る「殯」をまず行い、このあと一定の日数を置いて、遺体を墓地に葬るのである。

この殯は家で行うのが普通であるが、孔子の母は、それを家で行うことができなかった。そこでやむをえず孔子は母の殯を、孔家とは関係のない、共同殯儀所のようなところで行ったのである。

さて、葬儀が終って母の遺体を墓に葬ることになった。親孝行な孔子は、母をせめて父の墓へいっしょに葬ってやろうと思った。しかし、孔子は父の墓を知らなかった。それはかつて父の葬儀に参列できなかった母は、父の墓を知らず、したがってそれを孔子に教えていなかったからであった。

しかし陬の邑の人が、父の墓の所在を教えてくれた。父の墓は、陬の邑から二十七、八キロメートルほど離れた防山というところにあり、孔子は母をそこに合葬することができた。

孔子にはこうして父も母もいなくなった。しかし孔子は何人かの家族をかかえて、なんとしてでも生きていかねばならなかった。

その頃になると継母もすでに死亡していたかもしれな

いが、異母兄姉が何人もいた。孔子は次男であったが、異母兄は足が不自由であったので、孔子が孔家の中心となって働き、家族を養わねばならぬ立場にあった。

陬の邑は、小さい邑里である。異相で、身体が大きく、力が強い働き者、その上文字を知っていて勉学にはげむ若者、これは陬の邑だけでなく、近所の邑々にも評判になったことであろう。

そのけなげな少年にたいして、村人は親切にしてやったものと思われる。後年、孔子が、

「里は仁なるを美しとす」（村里は愛情深いのがよい）

と言っているが、それはこの辺の事情を物語っているのであろう。

（二）

孔子が成長するにしたがって仕事量もふえていき、生活も少しずつ楽になっていった。

しかし、まだまだその日々は苦闘の中にあり、将来の見通しが明るくなったわけではなかった。

しかし孔子はそのまま社会の底辺に沈んでしまうような若者ではなかった。その運命に敢然と立ち向かった。すなわち勉学に励んだのである。

当時の中国では、優秀な平民や、没落した貴族の中で、「士大夫」という階級が抬頭しはじめていた。「士大夫」とは、貴族に必要だった「礼」「楽」「射」「御」「書」「数」などの、教育や知識、すなわち六芸をもって仕事をし、俸禄を得る者のことである。ちなみに六芸というのは、

礼（礼儀、人間生活のきまり）
楽（音楽、雅楽）
射（弓を射る）
御（馬を駆す）
書（字を書く）
数（物を数える）

という、六つの教養のことである。

そしてこの六芸に熟達していなければ、社会の中枢の職業につけなかった。すなわち、六芸は当時のエリート士大夫の、条件だったのである。現在でいえば、法律や医学の資格を持った専門職や、企業コンサルタント、政治家の政策秘書のような者といえばよかろうか。

貧窮の中で成長してきた孔子にとって、力仕事をしていただけでは、いつまでたっても、うだつは上らなかった。

その貧窮から脱出する唯一の方法は、士大夫になることである。

孔子が一生懸命に勉強して、六芸を武器に、士大夫として世に出ようと考えたのは当然であった。

士大夫は家柄に関係のない、唯一の実力主義の世界である。社会の底辺にいる者が、唯一、世に出られる手段である。孔子は苦しい仕事に耐えながら、懸命に学び、やがて高級役人として登用される夢を描く、いわば苦学生という生活を送ったのである。

では孔子はどのようにして学んだのであろうか。

孔子は家庭環境、教育環境は、貴族の子弟のように恵まれたものではなかった。そこで孔子は貧しい境遇の中で働きながら、一生懸命に勉強し、儀礼や文化にくわしい人間がいると聞けば、あちこちと精力的に教えを受けに行った。すなわち、孔子は物を知っている人ならば誰からでも学んだのであり、とくに決った師というものはなかったといっていい。

孔子自身も後年に、

（わたしは、なるべく多くの人の意見に耳を傾け、その中から、これぞというものを採用し、つねに見聞をひろげて、それを記憶にとどめるようにした）

と述べている。

その一例が、昭公十七年、孔子が二十八歳のときである。南方の小国に住む郯子という者が魯の国へやってきて、歓迎会の席上でその博識を披露し、人々を驚かせたことがあった。すると孔子はそれを聞き、さっそく郯子の宿をたずねて、くわしく故事について教えを受けたという。機会さえあれば、すぐそれを利用して勉学する、青年孔子の様子がうかがえるエピソードである。

またある時、孔子が、魯り国の初代の君主であった周公旦を祭った大廟に入って、祭りの仕事の手伝いをしていたことがあった。その時、孔子は一つ一つ仕事をするたびに、廟内の作法について、

「これはどうするのですか」

と聞いていた。それを見ていたある人が、

「なんだい、あの叔梁紇の家の小倅め、礼をよく知っているといわれているが、評判ほどでもない。一つ一つ聞いている。なにも知らないじゃないか」

と軽蔑したように言った。すると孔子は、

「一つ一つ聞くことが礼なのです」

と言ったという。孔子としては、

（この大廟の中の作法など、わたしは全部知っている。しかし知ったかぶりをして、どんどん仕事を進めるのではなくて、一つ一つ聞いて進めるのが、世の中の礼というものなのだ。そういうことが、あの人には少しもわかっていないのだ）

ということを、言いたかったのである。

それに物事というものは、自分は知っているつもりでも、万が一つにも知らないことがある。また万が一にも、間違ったことがあるかもしれない。それを一つ一つ聞くことによって確かめていこうとする、孔子の謙虚な向学心の現われでもあったのである。

孔子にとっては、机にむかって典籍を読むだけが勉学ではなくて、あらゆる事象、あらゆる場所が、勉学の場

であったのである。

なお、孔子がこのように学問の道を志したのには、孔子の生まれた魯の国の、文化風土に深い関係があると思われる。

魯の国は、政治的には不安定な弱い国にすぎなかったが、もともと周の王室から分かれた、周の文化を色濃く伝える、由緒正しい国柄であった。

孔子は周の文化を「郁郁乎とした文」とほめたたえ、「吾れは周に従わん」と宣言している。周の文化の創設者で、また魯の国建国の祖でもあった周公旦を、孔子は終生の理想としてあこがれていた。

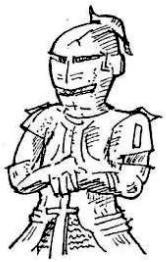
孔子はそのような魯の国の風土の中で、生まれ、育ったのである。だから孔子が「学に志す」という「学」というのは、ただ一般的な意味での学問の道に精進するといったものではなくて、もっと明確な意味を持っていた。それは孔子が生涯敬愛してやまなかった聖人周公旦が説いた教えを、学ぶことであった。

周公旦は、周の国を作った武王の弟にあたる人物であり、周の国の文化の基礎を築いた人である。

孔子はこの周公旦が説いた道、すなわち、人と人の関係（仁）、家族間の情愛（孝と悌）、社会の秩序（礼）、などの、人間が生きていく上に大切なことを、学ぼうとしたのである。この周公旦の精神を復活させることが、孔子の生涯を貫く念願だったのである。

孔子は天才に特有な鋭い感覚によって、若いうちから母国の風土の中に、その理想をかぎ当てていたのである。「学に志す」という決意は、そこから生まれたものだったのであろう。

（つづく）



茉莉花伝（一）

―東丹国使と来た娘―

森下征二

プロローグ

透明な太陽の光が、城壁の向こうから射し込んで来た。渤海国の都忽汗城内の広場に、具足の音が響き始めた。黒い甲冑をつけた契丹兵が、白い息を吐きながら楼門へ向かって集まってくる。槍を引っさげ、弓矢を背負った兵士たちが、整然と広場を埋めて行く。広場がすっかり埋め尽くされたとき、けたたましい銅鑼の音が、凍てついた朝の空気を突き破った。二度…、三度…と、立て続けに鳴る銅鑼の音に先導されて、きらびやかな騎馬の一行が、兵士をかき分けて入って来る。待ち構えていた契丹兵が、一斉に喚声をあげた。

「アバーキ、アバーキ！」

「天皇王、天皇王！　皇帝万歳！」

興奮した兵士たちが、てんでに槍を振りかざし、地面を足で踏み鳴らして叫ぶ。僅か二十日余りで、渤海国を滅ぼした契丹皇帝の耶律阿保機が、忽汗城へ乗り込んで来たのである。略奪者の名に相応しい九尺有余の偉丈夫は、沸きあがる喚声に応えながら威風堂々と馬を進める。皇帝の権威を示す黄袍が、黒い甲冑の上で一際鮮やかに翻った。続いて、葦毛の馬を駆って来たのは、甲冑姿も美しい婦人である。遥か西の民族の血が、色濃く流れているのだろうか？　赤く燃える豊かな髪をなびかせながら、青い目を真っ直ぐ前へ向けている。兵士の間で、更に大きなどよめきがあがった。

「ゲリーダ、ゲリーダ！　赤毛のゲリーダ！」

「地皇后、地皇后！　皇后陛下万歳！」

兵士たちが、熱に浮かされたように囃し立てる。応天皇后の述律氏、月里朶である。熟年になって益々美しくなった彼女は、彼らの間で人気がある。事実上国を取り仕切っているのは皇帝でなく、皇后の月里朶であることは公然の秘密とされていた。お陰で皇帝は、側室一人自

由に持つことが出来ない。彼女の前後を競うように、皇太子の突欲や大元帥尭骨などの若い公達が行進する。彼らは、皇族や重臣を引きつれて意気揚々と馬を駆り、兵士の群れに時折鋭い視線を投げつける。騎馬の一行が楼門の前の床几に納まると、兵士たちの喚声が一段と高くなった。やがて、大きな喚声に急き立てられるように、漢人らしい総髪の武将が、太った身体を楼門の前へ運んで行く。彼は、人々の視線を明らかに意識した様子で、扉の奥を大仰に睨みつけて叫んだ。

「開門！」

巨大な扉が呻くようにきしんだ。白髪をなびかせた老人が、扉の陰から転がるように現れた。渤海王の大諤譁である。簡素な白衣を身に着けた王は、何とも言えない奇妙な格好をしていた。片肌を脱いで上半身を晒し、後ろ手を縛り上げられていたのである。それだけではない。背中に長い杖を負い、縛られた左手の指で羊を一頭牽いている。刑具の杖を背負った王は、契丹皇帝に対し自ら進んで刑を乞い、羊の料理人として仕える覚悟を示したのである。

王の後を王妃が続く。突然降りかかってきた不幸に打ちひしがれた老婦人は、やつれた顔を健気に上げ、涙が枯れた目を精一杯見開いて歩く。少し遅れて、やはり白衣の人々が重い足を引きずって来た。渤海国の王族や重臣で、疲れきった顔を卑屈にゆがめ諦めの色を浮かべている。敗者の行進が直ぐ目の前を通るのを見て、契丹兵の興奮は弥が上にも盛り上がって来た。四方八方から指笛が吹き鳴らされ、聞くに堪えない罵声が飛んでくる。あちこちで、どっと嘲笑が湧き上がる。嘲笑と罵声が重なって、割れんばかりに広場が揺れる。騒然とした雰囲気のなかで、肉袒面縛して牽羊する亡国の君主の古式に従った行進が、延々と続けられて行く。

彼らの行進が、漸く、契丹皇帝の十間ばかり手前に着いたときである。漢人の武将が、鋭い声で叱りつけた。渤海王が、撃たれたようにひざまずき、凍てついた大地に頭を下げた。少し遅れて王妃が倣い、王族や重臣がこれに続いた。海東の盛国と謳われた渤海国が、契丹皇帝の武力の前に、完全に屈服した瞬間である。契丹兵が一斉に声を張り上げて万歳を叫ぶ。どよめきが湧き上がり、更に大きなどよめきを呼んで行った。騒ぎが最高潮に達したとき、契丹皇帝がおもむろに立ち上がって、渤海王の傍へ近づいた。王の身体が小刻みに震える。皇帝はいきなり、表情を引き締めて短刀を引き抜き、渤海王の襟を掴んで立ち上がらせると、手首の縄を切り離して叫んだ。

「聞け！　皆、良っく聞くのだ。渤海国は、ここに滅びた！　朕は、渤海国を改めて東丹国とする。わかるか？東の契丹国と言う意味である。東丹王には皇太子の突欲を立てる。渤海人は彼の下で、国の発展に努めるが良い！」

一瞬、静寂に包まれた広場が、割れんばかりにどよめいた。興奮した兵士たちが拳を突き上げ、声を限りに喚きたてる。皇帝は、兵士の騒ぎを冷静に見つめながら、渤海王に向かって吐き棄てるように言った。

「命だけは助けてやる…。しかし、忘れるな。今、この時から、汝は朕の下僕である。良いか、このことを、肝に確り刻んでおくのだぞ！」

疲れきった渤海王が、自由になった両手をついて、契丹皇帝の足下に崩れるように跪いた。王妃が急いでこれに続く。その時、一つの影が音もなく近づいて来た。地皇后の月里朶が、じっと二人を見下ろしている。彼女はおもむろに口を開いた。

「お前たち、そんなに命が欲しいのか？」

「……」

渤海王と妃は、頭を地面に改めてこすり付ける。皇后が鼻先で笑った。二人を見つめる青い目が、残酷にきらめいている。

「そうか…。しかし、それならそれで、下僕に相応しい名前に変えなければならない。よろしい！　私が、名前をつけてあげる。大諤譁、お前はこれから烏魯古と名乗れ！　それから女、そこの女…。お前は阿里只と名乗るのだ。良いか、自分の名前を、決して忘れてはなりませんぞ！」

皇后の声が終わるのを待ち構えていた兵士たちが、彼らの首に、大きな名札を乱暴に掛ける。呆然として坐りこんでいる二人へ向かって、漢人の武将が、間髪を入れずに畳み込んだ。

「烏魯古と阿里只、陛下にお礼を申し上げよ！」

渤海王が、我に返って姿勢をただした。

「有難うございます。喜んで拝領致します。臣らはこれから、烏魯古と阿里只と名乗って、お傍にお仕えすることに致しましょう」

渤海王が、歯を食いしばって礼を述べたとき、皇后の口から小気味良い笑い声がほとばしった。勝ち誇った皇后が、赤い髪をなびかせながら何処までも笑う。一息置いて、皇帝が大声で笑い出すと、契丹兵が声を限りに囃し立てた。忽汗城の広場が、凄まじい嘲笑の渦に巻き込まれて行く。笑い終った皇后が、青い目を綻ばしながら老夫婦に言った。

「烏魯古と阿里只…、良い名を貰って幸せか？　しかし、お前たちは名前の由来を知らない。ふふふ、教えてあげよう…。良いか？　烏魯古は陛下の、阿里只は私の馬の名だ！　お前たちも馬に負けず、精々忠勤に励んでおくれ！　ほほほ…」

契丹兵の哄笑が、広場の隅々まで広がって行く。老いた渤海王の顔に、さすがに、屈辱の色が浮かんで来たとき、堰を切ったように、悲痛なうめき声が聞こえて来た。

渤海国の王族や重臣が、嗚咽を一斉に漏らし始めたのである。彼らの嗚咽は、亡国の悲しみにひしがれながら、次第に大きくなって行き、やがて激しい泣き声に変って行った。忽汗城内の広場は、契丹兵の哄笑に渤海人の泣き声が重なり、ますます異様な熱気に包まれて行ったのである。

広場に引きずり出された王族の中に、小柄な初老の男がいた。彼は美しい娘の肩を抱き寄せながら、確りと顔を上げて、屈辱の儀式の一部始終を見つめていた。怒りに燃えた二人の目には涙がなかった。彼らは、懸命に歯を食いしばって、亡国の君主が辱められる姿を瞼の底に焼き付けていたのである。

渤海国の最後の王、大諲譔の治世が幕を閉じた年（西暦九百二十六年）の、正月十四日のことであった。

（一）

昨夜からの吹雪は次第に収まってきたが、荒れ狂う冬の波が船をほしいままに翻弄していた。黒い雲のかたまりが次々と、陸地へ向かって押し寄せて行く。延長七年（西暦九百二十九年）十二月二十四日、丹後国の大津浜の夜明けである。湊の沖へ辿りついた唐船は、長さ十丈、幅二丈五尺の大船で、前後に太い帆柱を具えていた。しかし、今は、後ろの帆柱が真二つに折れて無残な姿を晒している。割竹で編んだ丈夫な帆は、吹きちぎられて跡形もなく、浮かんでいるのが不思議に見える。もう少し嵐が続けば、海の藻屑と消えただろう。甲板の上に散らばった船荷の陰で、疲れきった水夫たちが物凄い鼾をかいて眠っている。自力で進めなくなった船は、強い北風に煽られて陸へ向かって流されていた。

娘が一人、船の舳先に立っている。彼女は、赤い紐で無造作に束ねた黒髪を風になびかせながら、雪で埋もれた陸地を食い入るように見つめていた。

（これが日本の国か‥、お父さまが生まれた国だわ。穏やかな国だと聞くが、この雪ではさっぱり様子がわからない。もしかすると、この辺りには人里がないのだろうか？　竈の煙が一筋も上がってこない。それにしても、うら寂しいところだ‥）

娘の口から溜息が漏れた時、背後で軽い足音がして、痩せた背の高い老人が現れた。

「茉莉花どの、寒くないですか？　大事を控えた身体であることを忘れてはなりませんぞ。もう充分、日本の国をご覧になれたはずですな。ぼつぼつ、船室へ戻りましょうか」

黒い質素な長袍を身に着けた老人は、何処となく飄々とした印象がある。しかし、深い眼窩の奥で光る目が、油断のならない男であることをはっきりと示している。茉莉花と呼ばれた若い娘は、ゆっくりと振り返って、信頼しきった瞳を老人へ向けた。彼女は素直にうなずきながら言った。

「わかりました。お部屋へ戻ることに致しましょう。でも、不思議ですわ。ここは、本当に淋しい所でございますね。日本国の湊は賑わっていると、父から聞いておりましたのに‥。それとも、鄙びているのは、ここだけでございましょうか？」

「左様‥」

老人は、白い顎鬚をしごきながら考え込んだ。

「そう言えば、確かにおかしいですな。ここは敦賀から、さほど離れていないはずです。しかし、それにしては人の気配が感じられない。人どころか、生き物の気配もないようですな。何れにしても、こんなはずはないのだが‥」

「雪が‥、雪が積もっているからでございましょうか？」

「いや、雪が降れば、鷹や鳶などが獲物を求めて飛び回るものです。それに、嵐で上陸できなかったのですが、我々はここへ、昨日の昼から着いております。人目につかないはずがございません。本当なら、大勢の人々が浜へ出てきてもよい頃でしょうに。私が十年前に来た時に比べると、確かに様子が違っている‥」

老人の細い目が、次第に鋭くなってきた。老人の名は裴璆。契丹帝国が渤海国を滅ぼして建てた東丹国の高官で、英諸大夫の重職にある。彼は、国王の耶律突欲の命令を受けて、東丹国が建国した事実を伝えるとともに、渤海国に代わって、日本国と修好関係を結ぶために渡航して来たのである。裴璆は渤海人で、国が滅びる前には、渤海国使として二度も日本国へ渡って来た経験がある。それだけではない。彼の父の裴頲も、やはり渤海国使になったことがあるので、日本国の支配層と太い繋がりを持っていた。契丹人である東丹王が、渤海人である裴璆を、敢えて東丹国使に起用した裏には、このような理由があったのである。

海から吹いて来る風が一段と強くなったとき、東の空を蔽っていた雲が割れて、朝の強い陽射しが射し込んで来た。裴璆の目が鋭く光り、食い入るように海岸の松原を見つめる。松の根元に溜まった雪を掻き分けながら、蓑を纏った幾つかの人影が、左右によろめきながら歩いて来るのが見えた。裴璆の顔に、ほっとしたような表情が浮かんだ。

「どうやら、やっとお出ましになったようですぞ」

裴璆は、茉莉花に向かっておどけたような仕種をしたが、直ぐに顔を曇らせて言った。

「一、二、三、四‥、何だ！　たったの六人か。出迎えの人数が、こんなに少ない筈がないのだが‥。おかしい！　この国で、一体何が起こっているのだろうか？　茉莉花どの、部屋へ入ろう。私は、副使の高仁賢と打ち

合わせをしなければならないようだ」

（二）

「お待たせした、裴璆どの」

束帯で威儀をただした男は、丹後国の国府の一角にある客観の大広間へ入って来ると、いきなり磊落な日本語で語りかけてきた。大勢の随員を従えて待ち構えていた裴璆の前へ坐ったのは、渤海客存問使の藤原雅量である。年の頃は四十五、六。垂纓の冠の下から薄い頭髪が僅かに覗き、深い皺が額に刻まれている。長い顔の中で目立つのは、何と言っても眉の下の大きな目で、落ち着いた誠実な色をたたえながら油断なく光っていた。彼は藤原式家の流れを汲む従五位上の左少弁で、当代一、二を争う代表的な歌人でもあった。雅量は、裴璆が二度目の渤海使として来朝した時、彼と詩文を応酬した経緯があり、それ以来親交を結んでいたのである。二人は、実に十年ぶりの再会だった。

「お久しゅうございました」

裴璆は、両手をついて拝礼しながら渤海語で答えた。彼の瞳には、ほっとしたような表情が浮かんでいる。都から派遣されて来た存問使が、旧知の雅量と知って安心したのである。ところで裴璆は、日本語を不自由無く話せる。しかし今は、思う所があって渤海語を使い、通事の労をわずらわせることにした。

思えば今日は、大津浜に着いて一ヶ月半になる。国府の役人に案内されて、客観へ収容されたのは十二月の晦近くであった。それが今は、二月も旬日を過ぎて庭の梅の花が満開である。客観は、殆ど使用されていなかったようで、着いた時には門の扉が壊れており、部屋の床板も朽ち果てていた。客観の補修は、裴璆たちが収容された日の翌日から始まった。しかし、殆どはかどらない。都から存問使が着く直前の昨日になって、やっと一応の修理が終わったのである。裴璆は、工事を取り仕切る小役人が、えらい物入りだ…と、こぼしていたのを知っている。日本語がわかることはなかろうと、裴璆を睨みながら大声で罵っていたからである。

存問使の到着を待つ間、裴璆は小役人に砂金をつかませて、外出したことがある。彼は密かに国府のまわりを探って見ようと思ったのである。そこで彼の目についたのは、この国の驚くべき疲弊と人民の無気力な暮らしぶりであった。

（この国は、予想以上に乱れているようだ）

裴璆は、前に来たときと比べて、余りにも変わっているので驚いた。田や畑に人影がないことにも驚いたが、雪寄せした道端に、人間の死体が棄てられていたのには仰天した。それらの死体は、男も女も申し合わせたように丸裸で、頭髪が根元からすっかり抜き取られていたのである。頭髪は髪の材料として需要が多く、良い商売に

なると言う。寒さのためか腐臭はない。しかし、獣に食い散らされた跡がはっきりと残っている。無残に転がる屍を見ても、案内する役人は顔色一つ変えない。契丹の苛酷な侵略を受けた渤海人でさえも、犠牲になった死者を、敵味方無くねんごろに葬ったではないか。

（この国で、内乱が起きたような様子はない。どうして、このようになったのだろうか？　精神的な荒廃が相当進んでいるようだ）

裴璆は次第に、この国へ来たのは無駄ではなかったか…と、思うようになっていたのである。

しかし、雅量は勿論、裴璆の胸の中を知るはずがない。彼は、自分の後に続いた下役が坐り終えたのを確認すると、おもむろに坐り直し、言葉を改めて裴璆を糺し始めた。

「東丹国の英諸大夫裴璆！　その方、東丹国使として入朝したと申しているが、如何なる次第か？　東丹国使にあらずして、渤海国使にあらざるや？　そもそも、東丹国とは何者か？　仔細を申し述べるが良い」

「然らば、お答え申す。神冊の始めよりこの方、渤海国が契丹帝国へ加えた無礼は、挙げて数ふること能わず。故に、天賛五年の正月、太祖陛下が軍を起こし、渤海王を捕らえて、その国を滅ぼせり。しかして、渤海国を改めて東丹国となし、長子突欲を立てて、王となせり…」

裴璆は、遣使の次第をとうとうと述べて行く。前回は確かに渤海国使として来朝したが、この度は、この契丹人が建てた東丹国の使として来た。東丹国は、渤海国の旧居を復して建国した正当な承継国である。従って東丹王が、渤海国の衣鉢を継いで、日本国と親仁関係を開こうと望まれたのは道理というべきである。伏して思うに、前例に倣い、隣邦として修好すれば、両国にとって、これに過ぎることはないではないか…と。

暫くの間、東丹国使の裴璆と存問使の雅量との間で、修好の是非や手続の問題、更には国書の授受をめぐり、熱がこもった応酬が続いた。

老いたりとは言え、渤海国の外交官として人に知られた裴璆である。対等な修好を求めて理路整然と主張する。雅量の顔に、次第に、裴璆に対する畏敬の念が浮かんできた。半刻も続いた論争の後、雅量は、とても敵わないと言うような仕種を示した。そして、照れたように微笑んで裴璆を遮り、ぞんざいな口調で論争の終結を伝えた。

渤海国使の来朝に対応するために来てみれば、意外にも東丹国の使だと言う。もともとこの問題は、雅量の裁量を遥かに超えていたのである。彼としても、話をぞんざいに打切ることしか出来なかったのかもしれない。

「良くわかりました。しかし難しいですね、この問題は…。なにしろ、あなたがお越しになるまで、我国では誰も、渤海国が滅びたことを、知らなかったわけですからね。まあ、国書を受け取り、左大臣には仰せの通り報

告することに致しましょう。左大臣は、独自の情報源を持っておられます。或いはあの方なら、処理する方法をご存知かもしれません」

「その左大臣とは、どなたですか？」

「あなたもご存知でございましょう。小一条の大臣、藤原忠平公…。あの方は近頃、益々ご盛んになられました」

「なるほど…。忠平公なら、私も何度かお目にかかったことがございます」

裴璆がほっとしたように言ったが、雅量はそれに構わず話を進める。

「もともと私は、渤海国使の遺期入朝を糺すために遣わされて来ました。たとえ、あなたが渤海国使であっても、前回お見えになった時から、まだ一紀（十二年）過ぎておりません。入国の条件を充たしていないのです。ところがややこしいことに、その上あなたは、東丹国使として参られたと仰せられる…。多分、入京は叶いますまいな」

これより前、日本国は渤海国使の頻繁な到来に音を上げた。主として財政上の理由である。そこで日本国は、使節を接待する費用を節約するため、渤海国使の入朝を十二年に一度に制限したのである。遺期入朝というのは、日本国が押しつけたこの「一紀一貢」の条件を満たさない使節の入朝を言った。その時から日本国は、そのような使節を問答無用と追い払ってきたのである。

「雅量どの、新しい国が生まれたことを告げるのは、隣国としての信義の問題です。一紀一貢の原則に従うものではございません」

裴璆が穏やかに釘をさすと、雅量の顔に当惑の色が浮かんだ。

「さて、どうしたものでしょうか…。そのような理屈が、今の我国に通じますかな？」

しかし、裴璆は雅量を余裕たっぷりの表情で見た後、おもむろに話題を変えた。

「ところで、法皇さまはご健在ですか？」

「院は、愈々ご壮健であらせられます」

雅量は、還暦を過ぎた宇多法皇の、如何にも好色そうな顔を思い出しながら答えた。

「それは重畳。私はあの方から、懇切な書状を二度もいただいたことがございます。あの方には、大変お世話になりました。それで…と、菅原淳茂どのも勿論ご健在でしょうね？」

「いや、残念ながら淳茂どのは、とっくの昔に身罷られた。あれは確か、延長四年のことでしたかな」

裴璆の顔に落胆の色が現れた。菅原淳茂は道真の庶子で文才の誉れが高かった人である。二十年前の延喜八年、裴璆が初めて渤海国使として来日した時、彼は渤海国使を歓迎する掌客使を務めていた。それだけではない。二人の父親である裴頲と道真は、五十年前の渤海国使歓迎の宴で、両国を代表して詩文を闘わせた仲であった。裴璆と淳茂の間には、親子二代にわたる因縁があったのである。

二人が初めて会った時、裴璆の学者らしい真面目さに親近感を覚えた淳茂が、父道真から聞いていた裴璆の息子自慢の話を披露したのに対し、裴璆もまた、淳茂に深い関心を寄せた。その頃、渤海国における裴璆の盟友で、王の義弟として隠然たる勢力を誇っていた大宿祢が日本人で、淳茂の兄の一人だったからである。その淳茂が死んだと言う。裴璆はふと、茉莉花の顔を思い浮かべながら不吉な影に怯えた。

「淳茂どのが、何か…？」

雅量の不審そうな顔が裴璆を覗き込んでいる。我に帰った裴璆は雅量を見つめ、通事を差し置いて、いきなり日本語で切り込んだ。

「雅量どの、後で、二人だけで会うことが出来ませんか？」

裴璆が突然日本語を使ったので、雅量の下役たちは大いに驚いた。しかも、自分たちを差し置いて、二人だけで交渉しようと言うのである。憤慨した彼らが、今にも裴璆を咎めようとした時、雅量は下役たちを遮って大声で言った。

「裴璆どの。あなたは昔の約束を、実によく覚えていらっしゃる。そう…、あれはもう、十年前になりますぞ。朝集堂で詩文を応酬した時、あなたの題送で私が一本取られたことがございました。そして、そのとき確かに私は、あなたの盃を飲みほす約束をしたのです。しかし私は、まだそれを果たしておりませんでしたね」

雅量は、裴璆が腹を割って自分と話したがっていることを察し、話を合わせて言ったのである。裴璆が、にっこり笑ってうなずいた。そして今度は、渤海語に切り替えて言った。

「後で、私の部屋へお出で下さい。渤海の酒を差し上げましょう。二人で久しぶりに、詩を賦そうではありませんか」

詩を賦すと言えば、雅量の下役は勿論、自分の副使たちも寄りつかないだろう。日渤両国で名高い彼等と詩を闘わせて、恥をかかないで済む者は殆どいない。裴璆の最後の言葉には、それなりの計算された思惑が含まれていたのである。

（二）

客観の大使の部屋は、燭台の灯が早々と燈されている。裴璆と雅量は、もう既に何杯も盃を重ねていた。彼らは、裴璆が二度目の渤海国使として来日した時のことや、大江朝綱をはじめ共通の知己の消息などを語り合っていた。教養を同じくする二人の文人にとって、話が一

度盛り上がれば、十年間の空白なんか何でもない。二人の間に和やかな雰囲気が漂い、ときおり賑やかな笑い声があがる。酒がすすみ、何度目かの代わりの酒を運んできたのは、目も覚めるような紅の唐衣を着た若い娘である。顔の色が透き通るほどに白く、小さな唇は血を含んだように赤い。裴璆の傍へ酒器を置くと少し後へ退き、斜め後ろに行儀よく畏まる。裴璆は新しい酒を雅量に勧めて、微笑みながら言った。

「雅量どの、あなたは、このお方が何方であるかわかりますか？」

「さあて？」

雅量は、目元に浮かんだ微かな酔いを気にしながら、娘の方へ目を向けた。

「このような格好をなさっていますが、渤海国の世子（皇太子）大光顕さまのお妃で、茉莉花どのと申されます」

「何と！」

驚いた雅量が、慌てて居住まいをただそうとした。裴璆は、それを大仰に押し止めて言った。

「いや、そんな必要はございません。お忍びです…。この方は、世子の妃としてではなく、私の知人の娘御として船に乗られました。ですから私も、茉莉花さまではなく、茉莉花どのとお呼びしております」

「しかし、どうしてまた、日本国へ参られたのですか？」

雅量の目が油断なく光る。

「あなたは、道真どののご子息の、阿満どのをご存知ですか？」

「阿満どの？　さて…。そう言えば確か、淳茂どのから名前を聞いたことがありますぞ。長兄の高視どのの、双子の弟御のようですな」

雅量が宙を見据えて、思い出しながら言った。藤原氏の傍流からのし上がって来ただけに、さすがに情報が豊富である。彼は慎重に話を続けて行く。

「淳茂どのの話では、その方は幼い頃に亡くなったことになっているそうです。しかし本当は、道真どののご命令で唐の国へ渡り、異国の情報を集めておられたとか…。遣唐使が廃止されたとき、異国の情報が不足することを心配された道真どのが、阿満どのに因果を含めて送り込んだようですな。

しかし私は、阿満どのがずっと昔、契丹で亡くなったと聞いておりますぞ」

雅量が、裴璆の顔を見つめて言った時、それまで黙って聞いていた茉莉花が、静かに口を開いた。流暢な日本語である。

「父は、死んではおりません」

雅量が驚いて茉莉花を見つめた。

「父…？　そなたさまの父御ですか？　阿満どのが！」

「そうです」

裴璆が、茉莉花に代わって答えた。

「このお方の父上は確かに、菅原道真どのの庶子、阿満どのでございます。ただし、異国では自らスクネと名乗り、流浪の末に渤海王の妹婿に収まって、国王から大宿祢の名前を賜わりました」

「スクネ？　宿祢？　そうか、姓をもって名前とされたのか…」

菅原氏は、もともと土師氏の一族である。土師氏の姓は宿祢であるので、土師宿祢と称した。また、土師氏を名乗る前には野見宿祢と言った。何れにせよ元の姓はスクネであり、その事を雅量は言ったのである。

「それで、今、阿満どのは？」

「渤海各地で蜂起した叛乱軍を糾合して、自ら実権を握られました。今では世子の大光顕さまと一緒に、契丹軍と懸命に戦っておられます。私が出航した時には、東丹国の東北部と南部を抑え、渤海国の旧領の、ほぼ半分を回復されておりました」

「それにしても、茉莉花どのは、何故日本へ参られたのですか？」

雅量の瞳が光った。彼は次第に、裴璆の話に興味を引かれて来たのである。茉莉花が後を引き取って穏やかに答えた。

「渤海国を再興するためには、まだまだ兵力も資財も足りません。永年の誼をもって、日本国のご助力をお願いしたいのでございます」

「日本国が、渤海の？　助力？　とても、私などが出る幕ではない！」

思わず悲鳴をあげた雅量へ、身体を乗り出して裴璆が言った。

「失礼だが、それは充分承知しております。そこで、あなたに改めてお願いがございます。雅量どの、茉莉花どのと私を、何とか都へ連れて行って下さいませんか。私は、宇多さまや忠平公に直接、日本国と東丹国との修好を働きかけて見たいのです。茉莉花どのも、同じこと…。契丹帝国の脅威を直接伝えて、渤海人への支援をお願いしたいと思っておられるのです。

いえ！　私たちは、存問使のあなたの能力を疑っているのではございません。このような話は、私たちが直接お願いしなければ、真意が伝わらないのではございませんか？　お願いです、何とか都へ連れて行っていただきたい。どんな形でも結構です。内密に、従者の端へ加えていただけませんか？」

「……」

雅量は、腕を組んで考え込んだ。裴璆は語調を変えてしみじみと訴える。

「私はね、今まで二度も日本へ来ました。お陰で、忠平公と知り合うことが出来ましたし、宇多さまと、書状を交わす仲になりました。それに、何と言っても…、茉莉

花どのの祖父の道真どのは、宇多さまと特別な因縁があるではございませんか。都へ行けば、非公式に会っていただけるのではないでしょうか？　宇多さまも、忠平公も、道真どのの血を引く茉莉花どのを、むげに扱うことは出来ないはずです。ええ、そうではございませんか？　私はね、雅量どの。宿祢どのから、砂金をたっぷり預かって参りました。あなたに、ご迷惑をかけません。十分なお礼も致します。それに…」

　裴璆の目が抜け目なく光った。雅量は黙って裴璆を見つめ返した。

「渤海国が滅亡したと言う情報…ですがね、これを貴方の一存で、握りつぶすことは出来ますまい。そうだとすれば…ですよ。あなたから報告するより、私や茉莉花どのから直接説明した方が、宇多さまや忠平公にも、わかりやすいのではございませんか？」

　裴璆の声に力がこもる。雅量は腕を組んだ後、神妙にうなずいて言った。

「うむ、確かにそうですね。それは、あなたのおっしゃる通りです。よろしい！　考えてみましょう。しかし裴璆どの、道真どののお血筋が、今の我国で役に立つのでございましょうか？」

「え、何ですって？」

　裴璆の目が訝しげに光った。

「いや、何でもない」

　雅量は、慌てて手を振って話題を逸らした。そして改めて裴璆へ向かって、首をかしげながら逆襲した。

「しかしですな、私にはどうしても、今一つわからないことがございます。裴璆どの、あなたは今、東丹王に仕えていらっしゃるわけですね。そのあなたが、東丹国へ敵対する茉莉花どのに、力を貸すことが許されるのでしょうか？」

（四）

　雅量は首をかしげた後、おもむろに盃を取って酒をあおった。裴璆に押され続けていた彼が、初めて余裕を持って酒を飲んだのである。裴璆は思わず苦笑を漏らした後、表情を引き締めて坐り直し、雅量の顔をまともに見つめて言った。

「そうですな…。あなたが、それを疑問に思われるのも当然でしょうね。昔はともかく、私は今では東丹国の官吏です。茉莉花どのと、全く利害が対立しているように見えるかもしれません。よろしい！　ご説明致しましょう。

　雅量どの、とりあえず、このように考えていただきたい。私が茉莉花どのに力を貸すのは、大宿祢どのへ借りを返すためである…と」

　裴璆が日本国へ向けて出航した湊は、渤海南部の吐号浦である。その頃、冬の日本海を安全で効率的に横

断するには、吐号浦で風を待つほか方法がなかったのである。吐号浦は、渤海沿岸の数少ない不凍港で、冬の季節風に乗って敦賀へ向かう、最も恵まれた条件を備えていた。北へ偏って日本へ着けば蝦夷の襲撃が心配され、南へ偏れば都へ向かう時間がかかり過ぎる。日本国へ渡航した経験がある裴璆が、あくまで吐号浦に拘ったのは不思議でない。

　しかし、当時そこは、渤海叛乱軍の首領である大宿祢の支配下にあった。裴璆はそこで、実に思い切った措置をとった。彼は、東丹国使でありながら、船を敢えて吐号浦へ乗り入れ、大宿祢と会見して出航の便宜を求めたのである。今でこそ敵味方に分かれているが、彼らはかって、渤海政界の盟友だった縁がある。滅亡前夜の渤海国は、国王大諲譔の二十年間も続いた治世によって、政治が腐敗しきっていた。外戚高氏が横暴を極め、深刻な政争が繰り広げられていたのである。

　この時、世子の大光顕を擁立して高氏と対抗したのが、王の義弟の大宿祢と、当時和部少卿であった裴璆である。二人の間には、同志としての深い信頼感が築かれていたが、何よりも二人の結びつきを強めたのが、日本国との関係だった。裴璆が二度も渤海国使を務めて、日本国の支配層と密接なつながりがあったのに対し、大宿祢は、そもそも日本国の人であった。裴璆が吐号浦に乗り込んだのは、政治的な立場を離れて、二人の間の友情に賭けたからである。

　一方、大宿祢の方にも、裴璆の申し出に応える理由があった。彼は契丹人との戦いのなかで、彼らの底知れない野望を、正確につかんでいたのである。彼らの究極の目標は、中国を征服して東アジアに世界帝国を建設することである。しかし、契丹帝国が中国を征服するためには、渤海国を征服しただけでは、資材も人材もまだまだ足りなかったのである。彼らはそれを、他の国から調達しなければならない。契丹帝国の皇后、赤毛のゲリーダは賢い女だ。彼女は、新興の意気が上がる高麗国より、平和に倦んだ日本国の方が、遥かに与しやすいと思っているようである…。彼が集めた情報の中には、それを裏付けるものが幾つもあった。契丹軍が、渤海人の反乱を平定すれば、今度は日本国を標的にする可能性が非常に高いのである。

　大宿祢は焦っていた。何よりも先ず、契丹人の脅威を祖国へ警告しなければならない。それに、契丹軍は日渤両国の共通の敵ではないか。日本国と交渉して、渤海人の戦いに助勢を求めることが出来ないだろうか？　しかし、父、道真は死んでしまった。日本国の朝廷と渡りをつける方法がない。

　ちょうどその時、まるで誂えたように、裴璆が飛び込んできた。この機会を逃すことはできない。東丹国使と同行すれば、日本国の朝廷とも接触出来るかもしれない

のである。彼は裴璆の話に乗ることにした。しかし、そうかと言って、自分が日本へ帰るわけには行かない。自分の代わりが出来るものは、茉莉花しかいないのである。彼は、迷うことなく決断した。婿の大光顕に因果を含め、茉莉花を裴璆に預けることにしたのである。大宿祢もまた言外に、裴璆の身体の中を流れる渤海人の血に期待したのである。裴璆は盃の底の酒を、飲み干しながら溜息をついた。

「そう言う訳でして…な。私は、叛乱軍と結託して、日本国へ渡って来たようなものです。でも、仕方がなかった…。私は、大宿祢の力を借りなければ、確実で安全に、日本へ来ることが出来なかったのですからね。しかし、こんな経緯がなかったとしても、私は渤海人のために働きたい気持ちを抑えることができません。私を拾ってくれた東丹王には申し訳ないが、これは渤海人として、仕方がないのかもしれません」

「なるほど、良くわかります…。確かにそれは、仕方ないかもしれませんね」

雅量は頷きながら言った後、盃を置いて坐り直し、改めて裴璆の顔を見つめて言った。

「ところで裴璆どの、今お話に出た東丹王ですが…ね。この方は一体、どのようなお方でございましょうか?」

「東丹王は、契丹皇帝の兄君にあたります。もともと皇太子でございましたので、本来なら二代目の契丹皇帝になるはずの方でした」

裴璆は、東丹王の端正な顔を懐かしく思い出しながら言った。

「ほう、それが何故…?」

雅量の目が訝しそうに光った。裴璆は、雅量の言外の疑問を正確に汲み取って答える。

「二人の母親である述律太后の意向で、東丹王は皇帝になることができませんでした。彼女は、太祖の耶律阿保機が亡くなった後、東丹王の弟である大元帥の堯骨を帝位につけたのです」

「そうすると、東丹王は余り…」

雅量がしたり顔で尋ねる。裴璆は、苦笑しながら否定した。

「いえ! 英邁なお方です。頭も切れるし、度胸もある」

「わかりませんね。それなら何も、長幼の順を乱すこともないでしょうに…」

「ええ、わかりません。一家の内情を、外から窺うことは難しいことです」

「そうですな。しかし、東丹王は弟に仕えることになる。腹の中では面白くなかったでしょうね?」

雅量が訳知り顔に呟いた。面白いはずがないではないか…。裴璆は苦い思いを抑えながら、雅量に向かって穏やかに言った。

「さあ、どうでしょう? しかし、東丹王は賢明な方です。継ぐべき帝位を奪われて、東丹国の経営に専心されるようになったのです。彼は渤海人を幅広く登用し、国力を高めようとしました。私が彼に拾われたのも、日本国へ派遣されたのも、そんな経緯があったからなのです」

「なるほど…」

雅量は裴璆とのやり取りで、渤海国滅亡の事情と、東丹国使が派遣された経緯を、何とかつかむことができたのである。彼は、ほっと一息入れた後、改めて坐り直して話題を変えた。

「裴璆どの、あなたがこの前、我が国へ来られた時から、十年近く経ちましたな…」

雅量の言葉の中に、何処となく改まったものが感じられる。裴璆は、表情を引き締めながら、用心深く答えた。

「ええ、そうですね…。おっしゃる通りでございますが?」

「あれから、この国は全く変わってしまいました。都へお連れするにせよしないにせよ、このことだけは充分心得ておいていただきたい。あなたも多分、気がついておられると思いますが…」

裴璆は、雅量の鋭い視線を受けて思わずうろたえた。彼は、私が客観を抜け出したことを知っているようだ。

裴璆は改めて、この国の村や里で見た凄まじい荒廃を思い出した。雪寄せした道端に、裸の死体が枯れ木のように転がっていた…。雅量は、裴璆の暗澹とした顔を見ながら、ゆっくりと語り始めた。

「あなたがお国へ帰られた後、この国では、何度も繰り返して、日照りや飢饉が起こりました。疫病が流行ったのも、一度や二度ではございません。草賊や海賊が至る所にはびこり、都の中でも群盗が暴れるようになりました。あなたが来られた頃は、それでもまだ、上辺を装うだけの余裕がありました。しかし、今ではもう、そんな力もございません。たとえ、あなたが満期入朝された渤海使でも、多分入京は叶いますまい。この国には、国使をもてなすだけの力さえも、無くなってしまったのですよ」

裴璆の眉が曇った。どこの国も、官の腐敗で疲弊する。彼は雅量の言葉に頷きながら、滅亡前夜の渤海国を思い出した。渤海国も民を慈しんで人心をつかみ、政争を止めて官の横暴を糺すべきであった。そして健全な経済政策を採って国力を保てば、あんなにあっけなく契丹人に滅ぼされることもなかったのではなかろうか? 裴璆は、雅量の話にわが身を重ねて言った。

「そうですか。まさか、そこまでとは思いませんでした…。それでは、渤海人を支援するどころか、東丹国との修好も?」

「今の日本国では、新しい国と修好関係を開くことは難しいでしょう。まして、渤海人への援助などは、夢のまた夢でございましょうな」

雅量が、裴璆を見つめてはっきりと言い切った。それまで黙っていた茉莉花が、たまりかねて口を挟んだ。

「雅量さま。たとえ、夢のまた夢だとしても、私は都へ行かないわけには参りません。父も夫も、今この時でさえ、契丹人と戦っているのでございます。どうして私一人がおめおめと、引き返すことが出来ましょう。お連れ下さいませ。そして、せめて宇多さまや忠平さまに引き会わせていただけませんか。公式に入京することが叶わないなら、尚更のことでございます。非公式で結構ですから、是非とも都へお連れ下さいませ！」

茉莉花の一途な言葉が雅量の心を打った。

（二十歳は過ぎているだろうに…。童女のような純粋な瞳をしておられる。このような女人は、我が国の乱れきった宮中では、残念ながら見当たらない）

「そうですな…」

雅量が思わず口ごもったとき、敷居の外で力強い足音がして、若い男の声が聞こえてきた。

「小次郎です。遅くなりましたが、お召しによって参上しました」

男の爽やかな太い声が、聞く者に爽やかな感じを与えてくれる。裴璆の目には、雅量の顔が心持ち明るくなったように見えた。

（五）

入ってきたのは、六尺豊かな大男である。彼は、裴璆と茉莉花に軽く目礼すると、雅量のななめ後ろに坐ってゆっくりと膝を組んだ。年の頃は二十七、八か。三十には、少し間があるようだ。濃い茶色の袴の上に薄萌黄色の直垂を着込んでおり、細纓の冠を頂いた総髪はあくまでも黒く輝いている。太くて濃い眉の下には黒い目が鋭く光り、高い鼻梁が目立つ顔は日本人にしては珍しく彫りが深い。青々とした髭の剃り跡が頬から顎にかけて広がり、赤い大きな唇は頑固なまでに意志の強さを示している。雅量は男が坐ったのを見届けたあと、裴璆へ向かって微笑みながら言った。

「これは、近衛府の衛士で滝口小次郎という者です。忠平公に名符を差し出しておりますので、歴とした左大臣家の家人でもあります。滝口でも名の通った武士で、武勇抜群の男でございますぞ」

「滝口小次郎です。よろしく」

小次郎は、けれんみなく名乗って裴璆を拝した。次いで頭を上げて茉莉花へ向かうと、いきなり、好奇心に満ちた黒い瞳が彼の目の前に迫ってきた。思わずとまどって顔を染めた小次郎が、改めて彼女を見つめて息を呑んだ。茉莉花の美しさに、今更ながら驚いたのである。裴璆は、この青年の無骨な仕種に好感を持った。

「裴璆です。以後お見知りおきを。この方は、渤海国

の…」

「いえ、裴璆さまの知り合いの娘で、茉莉花と申します」

そうだった…と、思わず苦笑する裴璆を尻目に、茉莉花は小次郎へ向かってにっこりと微笑んだ。彼女もまた小次郎に、何か惹かれるものを感じたらしい。世子の妃と名乗れないことを、喜んでいるようにも見える。雅量もほっとして、嬉しそうにつけ加えた。

「この若者は東夷ではございますが、もともと貴種の血を引いております。柏原の帝、桓武天皇の五世の子孫で、正しくは平小次郎将門。清涼殿の滝口所に伺候し、内裏の警護に当たっておりますので、滝口小次郎と呼ばれています。坂東に多くの地所を持っており、かの地では大変な勢いであるとか…」

「ほう、それは大したものだ」

裴璆が、改めて小次郎を見つめる。世が世であれば帝になれた男なのか…。

「帝の血を引いていても、今では、無位無官の唯の地下人。この若者にとって、都の水は思ったよりも遥かに苦いものでしょうな」

その頃の皇族は、皇位に近いごく一握りの者たちを除いて、その殆どが地位も低く経済的にも困窮していた。彼等が家を開き生活して行くためには、自ら臣籍に降って国司になり、地方へ活路を見出すほか道がなかった。一方、地方の有力者にとっても、皇位につながる貴種は貴重だった。彼等は、自分の娘を差し出して婚姻関係を結び、家格を高めることが出来たからである。

また、当時は妻問い婚の風習があったので、地方へ下った皇族は、同時に複数の家の入り婿になり、婚家を糾合して豪族にのし上がることが出来た。小次郎の祖父の高望王も、このようにして豪族化した賜姓皇族の一人だった。しかしこうした豪族も、世代を重ねるに従って家格が下がり、地方で勢力を維持するためには、都へ上って官職につかなければならなかった。そのため、時の有力者である摂関家を始め、貴顕の家に多額の金銀を差し出したうえ、家人となって奉公し、官職の推薦に与ろうとしたのである。

「そう言う訳でしてね。小次郎も検非違使の尉になりたくて仕方ないのでございますよ。忠平公の家人になったのも、勿論そのためですから…。しかし、惜しいかな。何しろこの男は、何と言っても要領が悪すぎる…」

雅量は盃を口に運びながら、横目でちらっと小次郎を見た。小次郎は苦笑しながら、黙って酒を飲んでいる。雅量が続けた。

「小次郎が都へ上って来て、もう十年以上も経ちました。今度、この男の従兄弟の貞盛が左馬允になりましたが、小次郎はまだ、無位無官のままなのです。優男の貞盛は眼から鼻に抜けるような切れ者ですが、この男は逆に、正直の上に馬鹿がつく。並外れた武勇があるだけに、私

は、歯がゆくてたまりません」
「良いではないですか、雅量の殿…。俺はただ、宮仕えに向いていないだけのことでしょう！」
小次郎は、横目で茉莉花を見ながら憮然として呟いた。余計なことは言わないで貰いたい。雅量の殿の悪い癖だ。小次郎は、思わず唇を噛んだ。黙って聞いていた茉莉花がにっこりと微笑んで、小次郎を優しく見つめながら口を挟んだ。
「何も宮仕えだけが、全てではございませんわ。得手不得手は、どなたにもあることではございませんか。小次郎さまは、音に聞こえた剛の者とか…。今にきっと、大きな仕事を、存分になさる時がやって来ますわ」
小次郎は真っ赤に頬を染めて、茉莉花へ向かって深々と頭を下げた。茉莉花の心遣いが嬉しかったのである。正直なお方…、茉莉花は思わず微笑んだ。雅量は、苦笑しながら慌てて言った。
「いや、これは一本参りました。茉莉花どののおっしゃる通りでしょうね。確かに小次郎は、並みの東夷ではございません。がさつな男が多いなかで、この男のすることや言うことは、一風変わった面白さがございます。たとえば、こんなことがありました。私が渤海客存問使となって丹後へ下ることが決まった時、どこで聞きつけたのか、最初に私の所へ駆けつけて来たのが小次郎でした。そして私に、何と言ったと思われますか？」
「はて？」
裴璆が、機嫌よく首をかしげた。気を良くした雅量が陽気に続けた。
「俺は今まで、異国の人を見たことがない。ぜひ渤海人に会わせてほしい。異国では家柄や門地が低くても、力さえあれば皇帝になれると聞いている。俺は渤海人に会って、親しく異国の話を聞きたいのだ…と。驚きましたよ、私は…。小次郎は、狭い枠に閉じこもって変化を怖れ、先例通りにしか動かない都人とは、全く違った種類の男でございますぞ」
「なるほど」
裴璆は盃を含み、あらためて小次郎の顔を見る。雅量の話を聞いていた茉莉花の顔が微かに翳った。
「小次郎さま。その渤海国も、今は、滅びてしまいました。国が滅びる時は、地獄よりももっと悲惨なことが起こります。しかし、どうしても、渤海国で起きたことを聞きたいおっしゃるなら、私がおいおい、教えて差し上げましょう。
ところで雅量さま、私は早く都へ行きたい。都へ行かなければならないのです。法皇さまや忠平さまにお目通りして、何とか使命を果たさなければなりません。お願いです、どうかお連れ下さいませ」
雅量は、茉莉花の燃えるような眼差しにたじろぎながら、胸の底に微かな痛みを覚えていた。この娘は何も知

らない。法皇や天皇が互いに競い合って奢侈に耽り、淫欲に溺れてその日を暮らし、政治をすることに倦み疲れていることを。それだけではない。大臣始め施政者たちも、私利私欲に走って、自家の安寧だけに汲々としている。腐り切った政治のため、都では今、陰謀が渦巻き呪詛が飛びかい、略奪や放火はもちろん、殺人やかどかわしが、日常茶飯に行われている。
しかも悪いことには、ここ数年、大雨と日照りが交互に襲ってきたうえ、疫病が蔓延して都の人々を苦しめてきた。国庫はとうに空っぽで、窮民へ施す米もない。朝廷は、天台座主の尊意を召して神仏に祈祷させたが、何の霊験も現れない。これはやはり、世間で噂されているように、数え切れないほどの怨霊が、都の中を闊歩しているからではなかろうか？　人々は、陰に隠れて噂する。おどろおどろしい怨霊たちを操って、闇の世界を支配しているのは、菅帥に違いない…と。菅帥とは何者か？
茉莉花の祖父の、道真の怨霊である。そんな都へ、この娘を連れて行っても良いだろうか？
考え込んだ雅量が、腕を組んで瞼を閉じた。すると不意に、瞼の内側が燃えるように明るくなった。仰天した雅量は、思わず悲鳴をあげかけたが、舌が痙えるだけで声が出ない。雅量の瞼の裏で、赤い炎が燃え盛る。真っ赤な炎が次第に割れて人の姿がおぼろに見えた。声が聞こえる。綺麗な声が聞こえてくる。雅量は炎の奥から、美しい声が呼びかけてくるような気がした。
（私を都へ！　是非とも都へお連れ下さい。お願いです、雅量さま）
雅量は、力をこめて瞼をこじあけた。首から背中へかけて、べっとりと汗が吹き出している。茉莉花を見た。彼女は無心に慎み深く微笑んでいる。わからない。何が起こったかわからない。何とも言えない虚脱感に蔽われた。彼は自分が、非常に疲れていることに気がついた。
「いったい、どうなさいました、雅量どの？　急に顔色が悪くなりましたぞ。お加減が悪くなりましたか？」
裴璆が目ざとく気がついて、雅量の顔を覗き込む。
「いえ、大丈夫です…。大したことはありません。私としたことが、少し酒を過ごしすぎたのかも知れませんな。それにしても、今宵はうまい酒でございました」
雅量は、きまり悪そうに汗を拭きながら、諦めたように言った。
「お二人とも、都へお連れしなければ、どうしても承知なさらないようでございますな…」
「かたじけない！　お聞き届け下さったか？」
裴璆の顔に喜びの色が走る。雅量は割り切れない気持ちを残しながら、気を取り直して念を押した。
「しかし…、あなた方を、東丹国使としてお連れするわけには参りませんよ！　おわかりでしょうね？　左大臣の

指図がない限り、あなた方は、国府の館から外へ一歩も出ることは出来ません。従って、お二人の身代わりを立てなければなりませんな。そのうえで、私の縁の者として、お連れすることに致しましょう。小次郎を護衛につけますが、都へ着いても、忠平公からご指示があるまで、彼の館で待って下さい。都の治安を考えれば、それが一番安全でしょう。なに、心配なさることはございませんよ。小次郎はこれでも、世に聞こえた分限者でございますからな。ははは…」

雅量は力なく笑いながら、先ほど起こった異変を思い出した。あれは一体何だったのか？　彼は意識の底で、懸命に探っていた。

（六）

部屋へ下がった茉莉花は、直ぐに灯かりを消して衾をかぶった。しかし、気持ちが昂ってなかなか寝つけない。暗い闇の中で、頭が妙に冴えてくる。都へ行ける目処が立ったのは、確かに一歩前進である。それを思うと嬉しかった。しかし、この国では、渤海国が滅びたことを誰も知らないようである。忠平公に会えたとしても、果たして契丹人の脅威を、充分に理解させることが出来るだろうか？　考えれば考えるほど、先の見通しが立たない。喜びが一段落すると、茉莉花の不安が、次第に大きくなって行った。

茉莉花は寝床の中で考えながら、ふと、あの小次郎と言う男を思い出した。この国の帝の血を引くと言う若者は、良く鍛えられた立派な身体をしていた。太くて濃い眉の下で、大きな目が優しく光り、高い鼻が男らしい。無骨な男のようではあるが、非常に折り目正しい男だった。その大男が、俺は、宮仕えには向いていない…と、子供のように拗ねていたことを思い出して、茉莉花は思わず微笑んだ。

不思議なことに、何処かで彼に会ったような気がする。何時、何処でとは、はっきりしない。しかし、確かに彼にあったことがある…。その小次郎が、渤海国のことを聞きたいと言っていた。渤海国…、私の祖国。契丹軍の馬蹄の下に、完全に凌辱されてしまった私の国…。大勢の人々が殺され、犯され、略奪された。そこでは今でも、私の父や夫が命がけで戦っている。私はこの国の人々へ、渤海人のことをどのように話したら良いだろうか？　難しい、これは、とても難しいことである。

茉莉花は、どうしようもない無力感に引きずり込まれて、次第に眠くなってきた。眠れそうだ。眠ってしまえば楽になる。茉莉花が心の中で呟いたとき、瞼の中の闇の奥に、白いものが降り出した。雪だ…。さらさらと、細かい雪が激しく降ってくる。私は夢を見ているのだろうか？　降りしきる幻の雪の間から、契丹軍と戦った中で垣間見た、悲惨な出来事が甦ってきた。戦に敗れた渤海の人々が、着の身着のままで家を追われて、契丹本国へ移送されて行く姿が、鮮やかに浮かんできたのである。

小雪まじりの風が、よろめきながら進む人々の群れをめがけて容赦なく吹きつけている。雪の荒野に何処までも続く細い道を、くたびれきった人々が兵士の鞭で追われていた。行列の先頭が、遥か西の地平線の向こうへ消えた後も、喘ぎながら進む人々の群れは絶えることがない。長い行列の中には、男もいれば女もいる。老人もいれば若者もいるが、皆一様に、重そうな布袋をかついでいる。どうやら袋の中には、長期間の移動に欠かせない保存食や、生活用具が詰め込まれているようだ。肩へ食い込む袋の重さが、彼らの凍えた身体を執拗に苛む。

人々は、歯を食いしばって前へ進んだ。何処となく彼らの歩みがぎこちないのは、腰のまわりを荒縄で数珠繋ぎにされているからだろうか？　人々は歩いた。寒さに凍え、雪に足を取られて、喘ぎながら進んだ。彼らは、遥か彼方にある契丹の都の西楼を目指して、ただひたすらに歩いて行った。まだ年端が行かない子供たちも、親に纏わりつきながら懸命に歩いている。疲れきった人々が少しでも足を緩めると、黒い甲冑を着けた契丹兵がとんで来る。兵士たちは見境もなく鞭を振るい、行列のあちこちで、何度も激しい悲鳴があがった。昨日も、そして今日も、戦に敗れた渤海国の人々が、家畜のように追われていた。

やっと、一日の行進が終わりかけた時、それまで確りと歩いていた若い女が急に立ち止まった。女の足下で、五、六歳位の幼女がうずくまっている。困った女は懸命に声を励まして、立ち上がるように諭し始めた。しかし、疲れきった子供は、じっと下を向いたまま動かない。女が仕方なく布袋を置いて、子供を抱き上げようとしたとき、血相を変えた契丹兵が駆けつけてきて、女の肩を鞭で打った。

「止まるな！　子供は捨てて行け」

兵士は、悲鳴をあげて崩れ落ちた女を力一杯蹴りつけて、再び背中へ鞭を振るう。恐怖に駆られた子供の動きが悲劇を生んだ。力まかせに振り下ろされた鞭が、女に取りすがろうとした幼女の身体を強かに打った。

幼い悲鳴が空気を引き裂く。子供の身体が宙を跳んで、大地へ激しく叩きつけられた。小さな手足が小刻みに震えながら、宙を掴んでもがき苦しむ。半狂乱になった女は、髪を振り乱して子供を抱き取ろうとしたが、腰の縄に邪魔されて、どうしても抱き寄せることが出来ない。女の直ぐ目の前で、子供の震えが次第に止まり、小さな命が絶えて行く。兵士は顔を僅かにしかめると、幼女の襟元をわしづかみにして、道の端へ無造作に投げ捨てた。女の悲鳴が子供を追う。兵士は空鞭を揮わせながら、居丈高に怒鳴りつけた。

「歩け！　餓鬼はもうくたばった。歩かないとお前の命もないぞ」

直ぐ後ろの縄に繋がれていた老人が、女を背後から抱き起こしながら懸命になだめる。前の男が、歯を食いしばって歩き始めた。縄に引かれて女が動いた。魂を失った女の身体が、ひきずられるようにして歩いて行く。彼女は、涙が枯れた目を虚ろに見開き、再び行列の中へ消えて行った。

茉莉花の耳に、再び三度、幼い子供の鋭い悲鳴が聞こえてくる。彼女は激しく身体を震わせ、思わず衾を蹴飛ばした。寝床の中から身体を起こし、大きく息を吸い込んで見る。次第に意識がはっきりしてきた。目がすっかり覚めて来て、悲惨な光景がありありと目の前に甦ってきた。

あの時…、道端の所々に、親から遅れて命を落とした幼児の死体が、襤褸のように棄てられていた。鞭で追われた人々に心ならずも踏み躙られて、内臓がはみだしたものも多かった。時々、大きな死体が転がっていたが、多分あれは老人のものだろう。まだ、微かに息をしていたものが、幾つかあったような気がする。足手まといになる老人や幼児は、情け容赦なく棄てられてしまったのである。そして、道を挟んだ草むらに、白いものが点々と散らばっているのが見えた。赤子の死体が…、襁褓にくるまれた赤子の死体が、草むらを蔽いつくすように散らばっていたのである。

茉莉花は思った。今でも、渤海国の至る所で、契丹軍の人狩りが行われているはずだ。契丹皇帝は中国を征服するために、渤海人を根こそぎ捕らえて契丹へ連れて行き、兵士として、あるいは労働力として使おうとしているのである。ああ…、また鋭い悲鳴が聞こえてくる。たくさんだ…、本当にもう、たくさんだ。彼らは無事に、目的地へたどり着くことが出来ただろうか？

私はやはり、都へ行かなければならない。どうしても都へ行かなければならない…。都へ行って、契丹軍と戦っている渤海人のために、この国の助力を仰がなければならない。渤海人が戦い続ければ、この国の人もまた、契丹軍の侵入から逃れることが出来るのではないか…。私は、都へ行かなければならない。茉莉花は、寝床の上に坐り直して、じっと前をにらみつけた。負けるものか！　身体の中から、次第に闘志がみなぎってくる。何時の間にか、東の空が白んで来て、小鳥がせわしくさえずっていた。

（続く）

昔の「せんせい」

大和禎人

飯田信先生と郡司信次先生、二人のお人のことを書いておきたい。飯田先生は校長、郡司先生は訓導であった。

たまたま、NHKの「生活ホットモーニング」という朝の定番組で大脳中の海馬という機能が司るという、人間の記憶について吹田明日香アナの解説を興味深く聞く日があった。

いま私の物語ろうとする、その記憶は大正十五年十二月二十五日の朝、終業式に臨まれ、わが飯田信先生が滂沱の涙をこぼされ、嗚咽を漏らされる姿に私は大変ショックを覚えた。忘れ得ぬ記憶の一駒である。

この日は大正天皇崩御を伝えられた日であった。天皇のご不例が伝えられ、歌舞音曲自粛というあげく、子供なりに、暗い気持ちを抱いていたあげくの事態であったから、ことの次第は理解できるものであったのだが、私のショックは大きかった。（校長先生は大変だな）という単純素朴な感想である。

大正十一年の入学時の校長は楯悦太郎先生であったが、翌年から飯田先生に変わられた。飯田先生は四年間のお勤めのあげく、翌年三月、学校を去られている。その在任の間には、着任初年の十二年に関東大震災という大事があったりするのだが、右のごときショッキングな式日以外校長としての先生の風貌姿勢に申し訳ないことだが、全く覚えがない。小学児童にとって校長先生は雲の上の人だった。そしてたった一日だけの異常な記憶だけが脳裏に刻みこまれているのだ。

実は私の家の筋向かいにあたる二階家に飯田先生は当時住んでおられた。父によるとこの家の先住は鈴木という小説家が借り主であったという。その作家は鈴木彦次郎氏であった。他にも少し先には噺家の柳家三梧楼も住んでいたりした横丁である。先生の家は少々家賃が高い、と思われるたたずまいの借家であった。飯田校長がその二階の広縁で籐椅子にくつろがれる姿が記憶にある。二年生を迎えると、先生は学校を去られ、いつ知らぬ間に

先生は他へ引っ越しされ、借主は変わっていた。

初代中村吉右衛門の扮する俊寛僧都が彼ひとりを留め置かれ、狂おしく悲嘆のあげく、遠ざかる赦免船に向かい、崖上に這い昇り「おーい」と悲痛の叫びとともに涙する幕切れの舞台で、吉右衛門の落涙がキラリと光るのを見て、名優の演技に心うたれたことのある私だが、飯田先生のあの日の落涙と嗚咽は校長という立場に迫られた演技であったろうか。学童の私が（校長先生は大変だな）という思いは素直な直感だったようだ。時代、そして世相の狭間に生きられた校長という立場の人の、もしかして一つの類型ではなかったかと考えることは不遜であり、許されないことであろうか。

飯田先生の去られた後、同じ路地に一人の教師が登場した。私の家と同じ並びで数件先であった。堀越という女児が同じ小学校だったので、

「おや…」と思い、コクリと親愛の目配せをした覚えがある。たしか同学年の女子組の生徒だった。しかし、その家の表札は「島田」であった。なぜかと思ううちに路地へ入ってきた人が近ごろ私たちの学校に着任した教師であって、右に小首をかしげたポーズがしかつめらしく、俗に言えば重くれた姿勢として子供の私の目に写った。式日の次第に勅語奉読という次第がある時、この先生が恭しく三宝に教育勅語を乗せて式場に入ってきて、壇上の校長に渡される姿をやがて見ると、この人は偉い先生だなと気づいた。そして、だから気取って小首を斜めに気取っているんだと思った。

「あの子器量良しの良い子だけど連れ子かなにか、深い事情がありそうね」

母の俗な勘ぐりの噂であった。

子供の私は表札が「島田」なのに、なぜその家に堀越というあの女の子はいるのだろう、他に兄弟を見かけないから、いっそうわからない。大人の世界の解けない謎であった。

当の先生の帰宅姿に出会い、私は一礼することがあったが、無愛想に辞儀を返すでもなく、戸口を排して姿を消された。私はひどく損をした気持ちになった。

この先生は飯田、郡司両先生の中間にあたる教頭という職位にあり、やがて新設校の校長として去った。挿話として書きとめておくことにした。

絵に描いたように訓導服姿の似合った郡司信次先生との出会いは大正十一年、F小学校に入学の時であった。この年代、職位相当の訓導服なるものがあっても、大方の教師がもはや着用しなくなっていたのに、先生は愛着をもって身につけることをかたくなに固守された気骨の持ち主なのであった。

小学一年生として希望に満ちて入学を迎え、最初の受持ち教師との出会いが詰め襟服の訓導服の郡司信次先生であった。

先生は授業第一日、私たちの机間を歩み、一人づつ一から数えさせ、幾つまで数えられるかを調べられた。幼稚園なぞ行っていないのが大方の時代、児童が家庭環境の中でどれだけの知育をうけ、身につけているか、これは大切な調査であった。私はまだ数えられるのにいい加減のところで、

「よし」

と言われ次に進まれた。

忘れ得ぬ入学第一日の印象である。

訓導という職名は今はない。小中高すべて教諭の呼称にかわって久しくなる。少しく後年になるが、小使さんが用務員から主事の呼称に変わっているが、すべてお役所流に考えられた形式的民主化である。教頭職も戦後久しく廃止されていたが、今日は補職でなく任命制として復活している。

訓導職を卑下し、大学夜間の高等師範部などに籍を置き、中等学校教員資格を取得しようとした義務教育畑の教師は少なくない。訓導職の誇りに生きた教師はむしろ少数派ではなかったろうか。本務をおろそかにし、自学自習を命じ、自分は教卓上、大学の講義ノートの整理に没頭する不心得教師も現実に存在した。

小学校教育が国民教育の大切な基礎であることに使命を堅持、その誇りに生きた教師は残念ながら少数派であった。

古色を免れないとしても。訓導職を誇りとして義務教育に従事し、訓導服を欣然として着用を続けられた先生こそは信念に生きた方であったと思う。奇しくも五年後に再会することになるのだが、訓導服依然のお姿に接するのだ。

この往時、男生徒はまだ和服に袴が大方で、ぽつぽつ洋服着用が増えつつあった時代だ。女児は和服がまだ一般であった。だが、男教師の場合は背広着用が普及、卒業アルバムの集合写真では女教師の和服に袴姿と対比して見てとれる。ここに訓導服の郡司先生が並ぶとすればまさに異風を免れないだろう。

しかし、二年生を迎えてみると、郡司先生は他へ転任されていた。同区内のS校という消息を聞かされた。S校は区内の名門校と知られていた。多分栄転であったのだろう。

奇しきことに、五年の歳月が流れた後、私は郡司先生と再会する。

わが家の前の路地を先生はいつからか通勤路に選ばれていたのである。昔とかわらぬ訓導服姿であった。珍しいスタイルだから、はっとして遠いその人影に眼を凝らすうちに、間違いなく郡司先生とわかった。小学一年の幼童の昔にタイムスリップする驚きであった。この場合の私は慌てて門内に隠れる意気地なしであった。

五年を隔てて先生の方では私を記憶ではあるまいと思いつつ、咄嗟の逃げを選んだのだ。長ずるつれて敬慕すべき先生という認識を捧げていながら、これは恥ずかしい反対の行動だった。

「せんせい」

と叫んで駆け寄るためにはこの場合、流れ去った五年の歳月は言い訳になるけれども、子供の私には重過ぎたのだ。

いま五年後の先生はやはり訓導服を召しておられた。この一点こそ貴重なのだ。先生の貫らぬいてこられた信念の証しとして尊いのだ。S校にお変わりなくお勤めなのかどうか、訓導服を欣然として着用する先生には、お齢のほどからは教頭、校長というステップを踏まれて良い年ごろであるけれども、おそらくそうした栄達の道を望まれるお方ではないと思う。訓導服には似合わないのである。

さて、ある夕景のことである。門口を出たところで郡司先生に出会ったのだ。逃げも隠れもできない、大袈裟に言えば千載一遇の巡り合わせであったと言えよう。

「きみ、中学校はどこへ行ってるの」

先生は明らかに私を知っておられた。五年前の受け持ち児童で、たった一年だけ先生の声咳に接したに過ぎないばかりか、先生は他に転任され、わずかなご縁だったから、これは驚異に値することであった。

私は中学校に進んで、新たな希望に燃えていた。

「あ、そう、それで他の諸君は…、Sくんはどこ」

私は知るかぎりの消息を伝えた。

「それからIくん、Kくんがいたね、どうだったの」

郡司先生の記憶は驚くばかりだった。

生徒の進路を訊ねる教師の心情は当然のことであったかも知れないが、郡司先生は五年前に私たち受け持ちの幼童と別れ、転任された方だ。今なお訓導服をまとわれて、訓導職に生きる先生の真骨頂に触れる思いだった。

井の頭公園の中に、大正期の一訓導の大きな殉難碑がある。樹林にかくれ、わざわざ足を止めて仰ぎ見る人はまれである。玉川上水に溺れた児童を救おうとして殉職した松本虎雄訓導の顕彰碑である。大正期における訓導職の至誠を伝えている。亡びないこの金石文は後代になにを呼びかけるのであろうか。（H一六・九・一）

「文明の衝突」から日本文明のアイデンティティを考える（上）

中村一彌

一　はじめに

ハンティントンの「文明の衝突」は約一〇年前Foreign Affairsに発表された論文をもとに、八年前に刊行され、大きい議論を巻き起こした書物である。すでに議論し尽くされたとも考えられるが、本書で述べられた文明の衝突現象は二〇〇一年九月一一日のニューヨーク等へのテロで世界の注目を浴び、その後のアフガニスタン、イラクの問題等その激化が進み、更なる議論が必要とも考えられる。そこで筆者なりに「文明の衝突」の内容を考え、さらにその上にたって日本文明を考えてみた。

まず本書は冷戦終了後の世界においてもはやイデオロギーの対立はなくなり文明間の対立が世界の不安定要因となるとするものである。この点において基本的には正鵠を得た見解と考えられる。

ハンティントンは現在世界に七つの主要な文明がありその主要なアイデンティティをなすものは宗教であり言語であるとしている。世界には古来いろいろな文明が存在したが、その中にはメソポタミア、エジプト、ギリシャ、ローマ等消え去ったものもある。そして現存する主要文明として西欧、オーソドックス、ラテンアメリカ、スィニック、日本、ヒンドゥー、イスラム、アフリカ（もしあるとすれば）をあげている。それぞれが宗教を基礎にしていることは明確である。これらの文明が境を接しているところがフォルトライン（断層線）と名づけられそれに沿って紛争が多発するというのである。

西欧は今世界に覇権を唱えているが、その勢力は他の文明の勃興により減退する方向にあるとした上で、今世界の紛争の原因は中国とイスラムの勃興にあるとしている。

シナ大陸の諸王朝は長い間東アジアにおいて覇権を保

持してきたが、一九世紀以降ヨーロッパ各国の進出を許し、その勢力下におかれることとなった。その後中国は第二次世界大戦にアメリカ、イギリス、ソ連等の支援を得て勝利し、それに続く共産革命によりヨーロッパ各国の進出を排除し文字通り独立を達成した。ここにおいて民族意識は高揚し、また一九七〇年代以降の経済発展も加わって国力は充実し、覇権意識が高まっている。

イスラムもまた古い歴史を持ちながら、ヨーロッパ各国の植民地ないしは保護領の地位に甘んじたが、第二次世界大戦後独立を果たし、その地域に石油という戦略物資が産出することもあって、存在感を増大させている。イスラムの場合には、スィニックの場合の中国のような中核国家が存在しないことが不安定さを増幅している。これに加えてイスラムは人口の激増もあって戦闘的であり、紛争が多発し、石油収入により支えられた聖職者の発言が増し、過激な動きをするものが増加し不安定さを増大させている。

本書では今西欧文明と鋭く対決しているイスラムについての分析は特に詳細であり、その後のテロの頻発など説得力に富むが、その他については分析はやや平板の感がある。特にアジアについてはそれが目立ち日本についてもそれがあてはまる。これらの点を中心に論じてみたい。

二　翻訳用語について

原文では挙げられている八つの文明はWestern, Orthodox, Latin America, Sinic, Japanese, Hindu, Islamic, African,(Buddhism)と表記されている。これに対し鈴木主税氏の翻訳では西欧、東方正教会、ラテンアメリカ、中華、日本、ヒンドゥー、イスラム、アフリカ、(仏教)と訳され、Westernの訳を西欧とすることについて注記がなされている。しかしOrthodoxを東方正教会とするよりはオーソドックスとするほうが理解しやすいと思われ、Sinicについては大陸以外にいるChineseを含む概念であり、著者がこの語を用いているのは考えあってのことであり、中華という訳語は必ずしも適当と思われないので、熟さない用語ではあるが、そのままスィニックとするほうがよいと考える。

三　仏教文明の存在について

本書では仏教は世界五大宗教のひとつと認めながら、発祥の地で力を失ったこと、伝播先で適応同化しその文明としての形をとどめていないことを理由として、仏教は文明の基盤となっていないとしている。しかし他の部分で仏教文明という言葉を使っており、混乱が見受けられる。これは著者のアジアの文明に対する理解が薄いためと考えられ、やはり独立の存在であると考えるべきではないか。それはたとえば西欧、オーソドックス、ラテンアメリカが同じキリスト教に基づくものであるにもかかわらず、それぞれ独立した文明として扱われていることからすれば、仏教文明を独立のものとすることは十分根拠のあることである。

仏教文明に属する国としてはタイ、スリランカ、ビルマ、ラオス、カンボジア、モンゴル、ブータン、地域としてはティベットがあげられよう。これらの国の人口は約一億四千万人(世界の約2.5%)、GDPは二億五千万ドル(世界の約1%)である。この数字は人口で最小の日本の2.2%を上回るが、GDPでは最小のアフリカ2.1%を下回り、存在としては小さい。しかしタイ、スリランカ、ビルマは仏教を基盤とする独特の文明を持っており、これをスィニック文明の一部とすることは出来ない。

ちなみに仏教はラオス、カンボジアでは国教であり、人口のそれぞれ50%、80%が信仰している。ビルマ、タイでは準国教であり、それぞれ85%、90%が信仰している。

日本を仏教文明に含めてもよいのではないかとの議論も考えられようが、多数の仏寺の存在、葬礼が仏式によることが多いことなどを考慮に入れても、その他の面での違いを考慮すれば、日本文明をこれと一体のものとするのには無理があろう。

四　日本文明の存在について

日本文明が古くから固有のものであり、これが世界の多数説であるとしているのは正鵠を得た見解と考えられる。ただスィニック文明から派生してAD一〇〇年から四〇〇年に現れたとしているが、派生ではなくスィニック文明を吸収しながら、はっきりとアイデンティティを主張するようになったのは七世紀ごろとするのが正しいのではないか。AD五九三年から六二八年が推古天皇の時代であり、ほぼ聖徳太子の時代に重なる。ややあって日本という国号も使われだしたし、日本固有のものがはっきりと現れている。

従来ややもすれば日本の文明はスィニック文明の一分枝であり、この二つは同文同種であるという誤解が横行していたが、この二つがまったく異種のものであることは現実に照らしても明らかである。人種的には同じモンゴロイドに属するが、その中の分類では異なる面があり、民族的には明らかに異なる。言語では日本語は膠着言語で、どちらかというとアルタイ語族に近いのに対し、Chineseは単音節言語でシナティベット語族に属する。この違いは日本語とインド-ヨーロッパ語との違いに等しく、まったく違うのである。言語の違いは文化の違いである。

さらに日本が仮名という音標文字を作り出し，使用を

はじめたことは特筆されてよい。これが日本文明の独自性の確立に大きい役割を果たしている。スィニック文明では最近に至るまで表意文字にこだわり、一九世紀以降の世界の進展に取り残される大きい原因となったことは明らかである。

本書では日本文明にはアジアの他の文明、特にスィニック文明との間に宗教、社会構造、制度、一般的な価値観などの点で共通するものはほとんどないとしている。中国との交流が深まるにつれて日本においてもこのことが強く認識され、特に一般的な価値観の違いが強く認識されている。そして世界的に広く読まれた書物でこのことが明確にされたことの意味は大きい。日本人と中国人とは外見は似ているところがあるが、中身はまったく違っており、その違いは日本人と西欧人との違いとあまり変らないのである。

これに関連しスィニック文明の起源がBC一五〇〇年またはそれ以上としているが、それは古代スィニック文明のことであって、現在のスィニック文明との間には断絶があるのではないか。七世紀の隋の成立はスィニック文明の担い手を漢族から北方の民族に移している。これはローマ文明がゲルマン民族に受けつがれたのと同様である。したがって、独断ではあるが、それが現スィニック文明の始まりで、それ以前は、いわば西欧におけるギリシャ、ローマ文明のようなもの、たとえば漢文明と考えるのが正しいとも思われる。漢文はアジアにおけるラテン語で、これによって上流階級や国家間の通信のみが行われた、と見るが正しいのではないかと思われる。日本が公文書に漢文を用いてきたのはヨーロッパ諸国が通信にラテン語を用いてきたのと同様で、文明を共有しているのではない。

五　文明の発祥時期について

先に述べた日本文明の起源である七世紀ごろには西欧文明、イスラム文明も起こっている。本書では西欧文明の現れをAD七〇〇～八〇〇年としているが七七一年にシャルマーニュ大帝が即位して八〇〇年にローマで戴冠している。このあたりが西欧文明の始まりであろう。イスラムについては西暦七世紀としているが六一〇年にイスラム教が成立しているのでこれに該当する。オーソドックスについてはやや複雑で東西両ローマ帝国の成立は三九五年であるが、東西両教会の分離が進行したのは八九〇年代である。本書にはオーソドックスの発祥時期についての記載はないが、オーソドックスの成立は九世紀の終わりとしてよいであろう。ラテンアメリカについてはさらに新しく一九世紀に求められる。

ヒンドゥー文明についてはBC一五〇〇年と記載されているが、これはスィニックの場合と同様で、文明の断

絶があったと考えられるが、その時期については詳しい資料を持たない。

本書で独立の文明として取り上げられていない仏教文明については、その成立は仏教の成立ではなく主要構成国に仏教が伝来した時期とすべきであろうが、日本の場合仏教の伝来は六世紀のことであり、タイ、ビルマ等への伝播も七世紀までに完了しているので、仏教文明の始まりは六世紀ごろとする推定が成り立つ。

六　日本文明の特性について

本書では日本文明はきわめて特殊で、しかも孤立したものとの位置付けである。この特殊性の例として近年における経済摩擦等が挙げられているが、それよりももっと根本的なものは宗教を持たないとしていることであろう。これは文明が宗教に基づいて区別されるという大前提を崩しているので、確かに大きい問題である。しかもこれはいわゆる無神論やマルクス主義に基づく無宗教でないところに特殊性がある。

これは一神教であるキリスト教の信者ないしはその教育を受けた者にはまったく理解を絶することであると思われる。彼らから見て理解しがたいのは神仏混淆ということである。まったく違う宗教が共存し住民が何の不思議もなくその両者を受入れていることである。これは教養のない庶民レヴェルの話でなく支配者である天皇のレヴェルでそうであった。六世紀に仏教をうけいれて以来、明治維新まで皇室の祭祀は神仏混淆であった。この間、天皇には仏教に基づく法号が少なからずあり、位牌がある。位牌は明治まで御所に祭られていたが、現在は泉涌寺に安置されている。このようなことは他の国、他の宗教では考えられない。

今日のように、皇室の祭祀が神道のみとなったのは、明治維新時における一部神道家の策動による。それのみか彼らは神道を国家宗教化することに成功したが、この国家神道がその後の日本に大きな害悪をもたらしたことは周知の事実である。一般国民のレヴェルでは神仏混淆はそのまま維持されたが、第二次大戦後アメリカは国家神道を排除し、国家宗教は公式になくなり、これにより皇室の祭祀を除き日本の宗教は本来の姿に戻った。

さらに問題を複雑にしているのは儒教の存在である。儒教思想はシナ大陸との交流のうちに流入し、特に江戸時代には統治の手段として用いられた。儒教思想は宗教としてより、生活の規範として日本文明に影響を与えている。

江戸末期に日本にきたヨーロッパ人はこの神仏混淆を見て驚き、日本人は宗教的に無関心であるとその紀行文に記している。「神道は祭天の古俗なり」と久米邦武は論じて、神道を宗教でないとしたのであるが、現実に宗教の機能を果たしているものをそのように決め付けるのも

無理があろう。この問題は現在でも地鎮祭が宗教上の行事か否かという訴訟が起こっていることでも明らかなように、議論の対象となっている。

近年は少なくなってきているかもしれないが、家には神棚と仏壇があり、誕生を祝う宮参り、結婚は神道で、葬式は仏教で行うのが平均的な日本の家庭であった。今でも多くの人がこの方法にあまり疑問を感じていない。これが他の文明に見られない日本文明の最大の特殊性であり、本書でも日本文明は宗教を持たないことを他の文明と区別する特徴に上げている。

著者は次のように述べている。

「もっとも重要な孤立国は日本である。日本の独特な文化を共有する国はなく、他国に移民した日本人はその国で重要な意味を持つほど人口が多くないし、かといって移民先の文化に同化することもない（たとえば日系アメリカ人がそうだ）。日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化は高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教（キリスト教やイスラム教）やイデオロギー（自由主義や共産主義）を伴わないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーを持たないために、他の社会にそれを伝えてその社会の人々と文化的な関係を築くことが出来ないのである。」

孤立性ということは、上にも述べたように日本文明が宗教を持たず、日本国外にその文明を共有する国を持たないためやむをえないことで、今さらいたし方のないことである。また日本文明の孤立性の現れとして，移住先でのコミュニティが閉鎖的であることが上げられているが、これは後に日本語版への序文で事実誤認を認め否定している。アメリカにおける日系人の団結はチャイニーズ、コリアンの団結より弱いし、ジャパニーズタウンは徐々に消えつつある。ある説によれば日系人はマイノリティーの移民の中でもっともよく同化しているとのことである。

さらに強調していることは日本文明が排他的であることである。われわれ自身では排他的とも思われないが、これは外から見て決めてもらうしかない。おそらくこれは西欧人が日本に住んで日本人の社会に融合できないことを体験し、それがステレオタイプの日本人観になっているのではないかと思われる。

西欧文明も排他的でないとはいえない。いろいろな例が考えられるが、もっとも顕著で大きい例はトルコがいつまでたってもEUには入れないことである。トルコは一九八〇年台から加入の申し込みをしているが、いろいろな理由で審査の対象にすらなっていない。一九八〇年代にはソ連圏に属した国が冷戦終了後申し込み、加盟を果たしている。ソ連の一部であったバルト三国も加入を認められている。トルコがイスラムであるゆえに加盟を認められないのは明白で、トルコをキリスト教国のクラブであるEU入れることは多くの加盟国の世論は反対である。ヨーロッパの統合に長年携わっているフランスのディスカール　デスタン元大統領は、二年前に「トルコのEU加盟はヨーロッパの死である」と発言しているが、最近はEUの憲法に関連し現在の案によればトルコが加盟すれば、EU中最大の票数をいずれ持つことになるとして加盟反対の姿勢を崩していない。トルコをクラブに入れることは、通常のヨーロッパ人のヴィジョンには入っていないのが現状である。トルコからすれば冷戦のときは北大西洋条約に加盟が認められ、その第一線をつとめたのにもかかわらず、平和な国家連合であるEUには何かと理由をつけて加盟を認められないことに対しては割り切れない思いをもっているであろう。

イスラムの側にも問題はある。ヨーロッパ各国におけるヴェール着用の問題など、自らの文明に固執し排他的であると、日本人からは見える。西欧人から見ても同様であろう。これがトルコ加盟反対を後押ししていることも否めない。こういう他文明の中に自らの文明の橋頭堡を作るような、攻撃的な態度がフォルトライン以外のところで摩擦を引き起こし、他文明の中にさらにフォルトラインを造り、摩擦を増大させているのは憂慮すべき現象である。文明の排他性と言うことは、考え様によれば文明に固有のもので、特に日本文明が排他的とするのはあたらないし、むしろ排他性が少ないように思われる。

それよりも日本文明の特殊性としては、本書でも認めているが、その柔軟性というか受容性に富むというか、要するに他の文明から必要と思うことをすぐに取り入れるところがあげられよう。つまり中華思想がないのである。これは他の文明の中核部分まで受入れることを意味しない。自らの中核部分を維持しながら有用と考える部分をと入れることである。明治においてこれを和魂洋才と名づけたが、これは大きい特徴として上げられる。明治に始まらず奈良時代から平安時代にかけて、唐の文化などを取り入れてきたし、江戸時代にはオランダを通じて西欧の文明も取り入れてきた。しかしあくまでも日本文明の中核の部分は変えずそのまま維持した。この点が孤立しているということの原因とも言える。

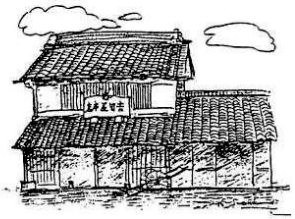
このあたりは著者が広く文明全般を概観したので細部についての理解が十分でないのは致し方ないのかもしれない。

ただひとつ認識しておかねばならないことは日本文明の小ささである。人口では2.1%。GDPでは今でこそ13%を占めているが、いずれこの比重は減少しよう。そして孤立しているのである。その存立が容易でないのは自明である。しかしこの点は何も今に始まったことでなく、有史以来変っていない。それが今日まで独立の存在として存続しえたのは、先にも述べた柔軟性であり、さらにハンティントンが指摘するように、常に強者に擦り寄っ

てきたことによる。この擦り寄り方は単純なものではないが、それについては後で述べる。一九世紀後半以降の日本文明の躍進、日本の国際社会での地位向上には西欧との連携が大きな力となっていることは明らかである。戦略的に西欧との連携は正解であった。端的にいえば日本文明は単独では世界にその存在を示すことが困難なのである。

（この項終わり）
（以下次号）

「文明の衝突」から
日本文明のアイデンティティを考える(下)
七　日本とアメリカとの関係について
八　中国の覇権について
九　日本文明とスィニック文明との関係について
一〇　日本文明の将来―終わりにかえて



敗北者賛美と勝利者誹謗(一)

隆恵

はじめに

わが国や中国の政治史上の人物評価では、大衆の受け止め方は敗北者への同情と覇者への誹謗が必ず対になる傾向がある。例えば、義経に対して頼朝・梶原景時であり、後醍醐天皇・楠正成に対して足利尊氏・高師直、忠臣蔵の浅野工匠頭・四十七士に対しては吉良上野介・幕府、また会津藩に対しては岩倉具視・大久保利通という具合である。

俗に判官贔屓と称される源義経を代表として、菅原道真、楠正成、忠臣蔵、会津藩、西郷隆盛などの敗北者は幾多の小説の題材となり、また歌舞伎の十八番となり、またテレビの大河ドラマとして毎年のように定番として放映されるが、必ず高い視聴率を上げる。

つい二年程前に、中国の三国志の英雄たちの子孫を探す面白いテレビのドキュメント番組があった。

蜀の劉備玄徳の子孫を探すのは難しかったようだが、諸葛孔明の子孫はいとも簡単に発見、その子孫たちは約二千年以上もの長きに亘って正当な系図を残し、その子孫である事に誇りを持ち、長年大衆も尊敬してきて、今や観光名所として諸葛孔明をもじったみやげ物店も多々あるなど有名になっていた。その一方、呉の孫権の子孫を自称する数か村のうち可能性ありとの村が二か所あったが、学者の検証で伝承の系図は後世の偽作と断定され、結局孫権の子孫たちは発見できなかった。しかしその村々の長老たちは孫権の教えを先祖から受け継ぎ、次の世代の子供たちに孫権の子孫であることを誇りとし、その教えを伝授していた。

ところが、覇者となった魏の曹操の子孫を探すのに大変苦労する。末裔たちは長年曹操の子孫と知れると隣の村人たちに苛めに会うということで、長年子孫である事

をひた隠しにしてきたそうだ。結局何とか事情通の人の紹介でそれらしい子孫を発見するが、その子孫たちは今日においても終始そんな事実はないと否認していた。結局再三の説得に応じて伝承の系図を見せてもらい、家の柱の墨書が決め手となり、曹操の子孫の発見に成功する。

この事実は、如何に民衆が史記や三国志演戯を盲信したにしても、敗北者は善、勝者・覇者は悪と思い込む習性の証左であり、何時の世も虐げられてきた民衆の素朴な感情の反映であろう。

このように、被支配階級の民衆は敗北者に共感を持ち感動するので、古今の小説家や劇作家は読者や観客の受けを狙うべくよりドラマティックな創作で色付けし、終生覇者にはなり得ない民衆はその敗北者に自分たちの人生を投影して、その悲劇を同情から賛美へと昇華させる。

その裏返しでその対極にいる覇者とか権力者を、実像以上により敵役らしく誇大に脚色された物語を好むこととなるのである。その結果敗北者は限りなく悲劇の極に、覇者は限りなく憎っくき敵役に誇張されて、後世に伝承される。

先日ある歴史愛好家の集いで、幕末の薩長と会津の評価についてのお遊びの論戦が行われ、滅び去る徳川将軍家への絶対的忠誠を終始貫いた会津藩の律儀さと潔さに、大半の人が同情と共感を示した。

おそらくこの想いは日本人共通の感慨であろうし、たしか我が敬愛する司馬遼太郎も明治維新で唯一日本人の美を貫いたのが会津藩で、幕府終焉の一片の救いであったと言う類の感想を述べたそうだ。

一　敗北者はなぜ賛美されるのか

(一)大衆が敗北者に共感する理由

人間は誰しも生きる事の苦しさとやがて訪れる死という人生の虚しさを味わう。

特に大衆はその人生で、恋愛や出世や金儲けで勝利の美酒を味わう事はごく稀であり、ほとんどが挫折とあきらめと失意のうちに死を迎かえる。その人生の挫折感の心の深層においては、成功者に対して嫉妬と羨望の気持ちが起きてくるのは、感情動物として必然の結果である。

その根源は、何時の世も人間が本質的にコンプレックスの塊だからではなかろうか。どうも人間は、他人が己より優れている人を本能的に毛嫌いし、己より劣る人を見て安心感と優越感を意識し、ささやかな幸福感を味わう習性から抜け出せない。

俗言の「他人の不幸は己の幸福」は正に人間の心理を突いている。己がコンプレックスを感じさせられる人物については、何とか欠点を探しもしくは欠点を誇張してコンプレックスの中和剤とし、己より劣ると感じた人物については若干の差では幸福感が少ないので大差がある

ようにその人物を実際以上に過小評価して、溜飲を下げることが多い。このコンプレックスは、自分自身の努力ではどうしようもない家柄・容姿・権力・富という、羨望するものを有する者には永遠に優越感は味わえないので、生理的な嫌悪感へと転化する。

従って、時の為政者に一矢報いたという忠臣蔵や会津藩が今日でも大衆から支持されることとなる。

勿論その一方、卓越した者への素朴な憧憬もあるので例外的に賛美する事もある。江戸時代であれば歌舞伎役者であり、現代ではスポーツ選手や芸能人となる。この意識の背景には、元々自分たちの仲間の成功であり、自分たちに夢や楽しみを与えてくれることはあっても、自分たちを支配する事がないという安堵感が大きな要因であろう。この憧憬は羨望にはなっても憎しみとはならないのである。

それでは日本政治史上の勝利者で、大衆に賛美されてきた人物は本当にいないであろうか。唯一人思い当たるのは足軽百姓の出から天下取りに成功する豊臣秀吉である。

しかしこの秀吉の人気も、天下を取るまでの木下藤吉郎の出世物語であって、覇者となった後の太閤豊臣秀吉の人気はパッとしない。その理由は、天下を取るまでは自分たちの仲間の大成功という意識で素直に拍手喝采できるが、覇者となった後の太閤は自分たちとは敵対する支配者像を無意識に感じるためであろう。確かに、日吉丸・藤吉郎時代の逸話には家族愛とか部下や民百姓への暖かい思いやりが多々見られるが、為政者太閤となるとそうした人間的魅力を示す逸話はほとんどなく、天下人になるや傲慢さと情け容赦のない非情さのイメージばかりが目立つ。事実秀吉は検地で最終的には民百姓への搾取を強化し、刀狩令で身分制度を明確化し、その一方己の享楽のための豪華絢爛たる桃山文化と度重なる朝鮮戦役による富の浪費により、結局民百姓の生活は更に苦しいものとなる。

この秀吉以外で思いつくのは上杉謙信ぐらいで、戦後小説家たちによって再評価された徳川家康にしても、大衆から賛美されているとは到底言えない。

ところが、政治史上の敗北者への賛美の例は数え切れないほどある。

そこで、支配階級の大転換期の覇権争いと、支配階級内での権力闘争に区分して、わが国の政治史を探ってみることとしたい。

(二)支配階級の大転換期の敗北者

弥生時代から明治維新までの二千年以上に亘るわが国の歴史は、ごく少数の支配階級が単なる出自の家柄だけ

で栄達と権力と富の独占を保証され、民衆は常に身分制度により被支配階級として固定され、搾取と虐待の対象であった。

唯一の例外は応仁の乱後の戦国時代の下克上の時代であり、この時期には松平元康・毛利元就・松永久秀のように下級武士から戦国大名に、また北条早雲・斉藤道三・小西行長のように町人から戦国大名に、中でも下克上の極め付けが貧しい足軽兼百姓の最下層から天下人になる太閤秀吉であった。この時期には被支配階級から支配階級へ、また下層の支配階級からより上位へと、幾多の人たちが昇段して行く。

しかし戦乱が収まる江戸時代になると、士農工商という身分制度で民衆は再度被支配階級として固定され、武士といえども階層別の門閥制度で基本的には固定される。

歴史上、支配階級の覇権交替の際には必ず財力と武力に裏打ちされた強大なる腕力がものをいい、新階級の栄華の傍ら旧階級の数多くの悲劇が発生する。

覇権を勝ち取った新たな支配階級は、その覇権を確固とするために新しい価値観と制度を創設し、そして新たな門閥制度によりその永続性を狙う。

わが国の大転換期とは凡そ次の五期に大別できる。

①大豪族連合型の大王の統治時代

卑弥呼の時代から飛鳥時代までは豪族たちによる群雄割拠の時代であり、その大王は財力と武力が他の豪族より相対的に勝るというだけに過ぎず、絶対的な王者ではなかった。

しかし、天智・天武の二人の大王は大王家に対抗する大豪族の勢力を殺いで絶対王政を布こうとする。その象徴的な事件が大化の改新であり、この過程で旧階級の蘇我氏を代表とする古来の大豪族の零落と悲劇が生ずる。

しかし、この大王親政も僅か四十年で終了して、次の時代を迎える。

②天皇を中心とする公家による統治時代

天武が崩御すると、天皇家の主導権争いに乗じた新興豪族の藤原氏が天皇を抱きこんで、貴族・公家として政治の実権を握るのが奈良・平安時代である。

この移行期には、皇位を巡る大友皇子や大津皇子のような皇族の悲劇が生ずる。

③将軍を棟梁とする武士の統治時代

長年の藤原氏を中心とする公家の覇権も、被支配階級として位置付けした筈の武士たちが主人たる公家たちの領地を腕力で盗み取って経済力を身に付け、皇族と公家が朝廷内の覇権争いに源平という由緒ある部下たちを活用したため、財力と武力で勝る武士に覇権を取られて鎌倉・室町・江戸時代を迎える。

この移行期には、没落する皇族と公卿の悲劇と、覇権争いに敗北する武士たちの悲劇が、平家物語や源平盛衰記に哀愁を込めて数多く語られている。

しかしこの武家の支配構造にも、時代の変遷とともに旧勢力の安穏と退廃の下で実力を蓄えた新興勢力に、足利将軍職の後継争いと斯波・細川らの管領たちの跡目争いという内部の権力争いに乗じられ、鎌倉時代以来の名族の御家人・守護大名は没落し、新支配者を巡る武家階級内での覇権争いとなったのが戦国時代である。

この約百五十年に亘る血で血を洗う戦乱の世も徳川氏により決着を見る。

江戸時代の徳川氏は鎌倉時代の北条氏と何ら変わらず、徳川氏一門と譜代の家臣たちの繁栄のみを至上命題と考え、天皇・公家と徳川一門以外の戦国大名は抹殺されるか冷遇される。

結局清盛・頼朝来の武家政権は、明治維新までの約七百年続く事となる。

④天皇を中心としつつ民衆の代表者との共同統治時代

この武家政権も欧米列強の開国要求を切っ掛けに、徳川一門と譜代の家臣たちが太平ボケと財政破綻から幕府の内外統制力に陰りが出る一方、戦国大名の生き残りである薩長の雄藩では正に江戸時代の下克上とも言うべき下級藩士たちが門閥の藩主・家老たちを押しのけて、藩の実権の奪取を実現する。一方公家社会においても門閥ではなく問題意識と覇気・行動力のある若手公卿が実権を握るようになる。

こうして実権を握った下級公卿と下級武士主導の倒幕が成功するや、近代的中央集権国家建設のために、公家・武家の門閥制に基づく政治権力を取り上げて、西欧列強の政治制度の主流であった立憲君主制を採用する。

この明治の政治は、薩長閥と多額納税者である資産家たちへの特別優遇というものを残しつつも、有史来の豪族・公家・武家という門閥による支配体制が完全に崩壊、腕力に依らない能力・実力主義の時代となる。これにより基本的には政界・軍部・経済界等の支配階級への門戸が民衆にも開放される。

この明治維新の際の悲劇は、僅か百五十年前の最近の出来事で歴史資料も豊富であるので、数多くの人物が悲劇の主人公として語られている。

⑤戦後の民主主義時代

国民全般への完全な能力主義の実現は太平洋戦争の敗戦まで待たねばならぬが、その過程では民衆の全てが戦争の被害者として悲劇の主人公となる。

ここで我々大衆が再確認すべき最とも重要な歴史的事実は、有史来はじめて支配階級の門閥制度と身分制度から解放されたのが明治維新であったということである。

勿論この歴史観に対しては、明治時代から敗戦までは未だ門閥制度が残り極めて不十分な民主制であったという反論が予想される。しかし何事も、ある日ある時期に

突然百八十度転換するという事は絶対にありえない。一旦は階段の踊り場というか中二階的なステップを経るか、もしくは百八十度以上転回し過ぎてから戻ってくるというステップが人間社会なのである。フランス革命が良い例である。

また明治維新後の政治体制は、当時の米国以外の先進国でも大同小異の政治形態であったわけで、残念ながら人間社会が未成熟であったとしか言いようがなく、明治時代の為政者への非難は酷の感がする。

数百年毎に起きる支配階級の大転換期には必ず武力が伴うので、栄耀栄華の勝利者の出現の一方、武力闘争に敗れた幾多の敗北者・没落者の大悲劇が生れる。

今日の我々大衆が小説や演劇で同情する悲劇の大主人公は、大半がこの大転換期の登場人物であり、没落する平家であり、義経であり、会津藩である。因みに大衆が賛美するもう一つの大主人公の忠臣蔵は、支配階級内の単なる仇討ちに過ぎず、政治史上の悲劇の主人公ではない。

この大転換期の数ある勝利者と敗北者の中から、天智天皇と天武天皇の確執と、後白河法皇と後鳥羽上皇の悲劇について触れてみたい。

○天智天皇と天武天皇

記紀によれば、天智は中大兄皇子時代に巳乙の変(大化の改新)で大王家を凌ぐ権勢を誇っていた蘇我蝦夷・入鹿親子を殺戮して、政治の実権を大王家に齎した英雄となっている。天智の執政は、母親の皇極・斉明天皇の皇太子時代から母の死後の称制時代を含めると実に約三十年間の長きに亘るが、そのほとんどは朝鮮半島の百済の救援事業であった。近江京遷都の五年後に病を得て庶子の大友皇子に皇位を継承しようとするが、実弟(近年実弟ではなく異父兄説が有力)の大海人皇子による軍事クーデターの壬申の乱により、大友皇子らは殺され覇権は大海人皇子すなわち天武天皇の覇権となる。

天武は長年の半島への介入を打ち切って内政に専念し、大豪族の土地と人民の所有を天皇に一旦返還させ、天皇の直接統治の時代を造る。

しかし在位僅か十五年で崩御すると、後を継いだ皇后の持統天皇(天智の皇女)は、自分の唯一人の子孫である孫の文武を天皇に就けるべく、藤原不比等を重用して外戚とし、以後の藤原氏による摂関時代の幕開けとなる。

持統天皇は、夫天武が壬申の乱で勝利するまで艱難辛苦を共にするが、天武の死後完成される記紀では、夫天武の業績より父天智の業績を過大に記録させる。しかし奈良時代は、曲がりなりにも天武の子孫が皇位を継承する時代だが、聖武天皇の度重なる遷宮の謎、娘の孝謙・称徳天皇の道鏡事件等々不可解な時代でもある。その一

方東大寺の創建をはじめ天平文化が栄えた時代でもあった。

○後白河法皇と後鳥羽上皇

後白河は、西暦一一二七年に生まれ一一九二年に六十五才で崩御する。在位こそたった三年に過ぎないが、その後五代の天皇の上皇・法皇として政治の表舞台に君臨する。

遅まきの二十八才で即位するや保元の乱を起こし、平清盛・源義朝を味方につけ兄の崇徳上皇を讃岐に流し、義朝の父為義を斬首、弟鎮西八郎為朝を伊豆大島に遠島処分とする。

在位三年で退位した翌年には平治の乱が起き、清盛が政敵の義朝を討ち頼朝を伊豆に流し、清盛は藤原氏の分裂を利用して平氏の天下とする。

後白河と平氏の蜜月も約十年で決裂、平氏排除の陰謀(鹿ケ谷の陰謀)を画策するが事前に発覚、清盛は法皇方の藤原氏等を排除(後寛等を鬼界が島に遠島処分)する一方、娘滋子と高倉天皇との皇子(安徳天皇)を即位させ、後白河を鳥羽殿に幽閉する。

こうして平氏の全盛時代となるが、その傍ら後白河の皇子の以仁王が源頼政を語らって、各地の源氏に平氏追討の令旨を出し、木曽義仲や伊豆頼朝が挙兵して平氏の天下に暗雲が垂れ込み始める。

後白河は清盛が病死すると早速に暗躍・策動を開始する。一旦は平氏に以仁王の令旨に従って挙兵した義仲と頼朝の追討を命じるが、平氏が敗退して義仲が入京するや今度は平氏追討の院宣を義仲に下し、この義仲が平氏との戦いに敗戦して帰京するや落ち目の義仲と対決する。そして次には頼朝に義仲追討の院宣を出し、これを受けて頼朝が義経を大将として入京させ義仲を京から駆逐して滅亡させ、更に義経が平氏を壇ノ浦で滅亡させるや、今度は頼朝と義経の確執を目論んで行家・義経を抱きこんで頼朝追討の院宣を出すが、思惑に反して敗走した義経が奥州藤原氏に逃げ込むと、今度は頼朝におもねって奥州藤原氏に義経追討の宣旨を出させる。結局、義経は藤原泰衡に攻められて衣川で自害を遂げる。翌年頼朝が奥州藤原氏を征伐して入京、頼朝が覇者と確定したと悟った後白河は頼朝と和解する。その後頼朝が征夷大将軍となり幕府を開設した翌年後白河は崩御する。

頼朝が後白河を評して「今様の大天狗」と言ったそうだが、後白河は天皇親政を目指して新興だが腕力のある武士階級を変幻自在に相克せしめるが、結局約四十年間の一途な苦労が実らず、悲憤の中で死を迎える悲劇の主人公である。しかし本人の不運もさることながら、この後白河の仕組んだ目まぐるしい政争と度重なる戦により、安徳天皇の死をはじめ公家の悲劇、平家の滅亡、義仲・

義経の悲劇等後世の代表的な敗北者・没落者が多数輩出されるわけで、後白河という人は甚だはた迷惑な御仁であった。

この後日談が、後白河の孫である後鳥羽上皇の倒幕活動であった。後鳥羽は、平家一門と共に安徳天皇が都落ちするや、祖父の後白河の肝いりで僅か三才で即位し、十八才で譲位した後は上皇として約二十三年間院政を布き、祖父の宿願を果たす機会を窺う。

敵方の鎌倉が頼朝の死後、二代将軍頼家の廃嫡、三代将軍実朝の暗殺、親王の将軍降下などの武家の棟梁たる将軍職の混乱と、その実質の権力を巡る北条対反北条の御家人たちの相克の混乱を好機として、西暦一二二一年に執権北条義時追討の院宣を出す。これに対して鎌倉幕府は有名な尼将軍政子の東国御家人たちへの反朝廷・公家の大演説で一致団結に成功して、結局鎌倉方が入京して京都を制圧、後鳥羽は隠岐に順徳上皇は佐渡へ土御門上皇は土佐に配流され、皮肉にもこの事件を契機に北条氏による鎌倉幕府が磐石の態勢となる。

後鳥羽は上皇時代に、藤原定家等を選者として新古今和歌集を完成させた文化人でもあった。結局、後鳥羽は隠岐に十九年在住して六十才で崩御する。後鳥羽の悲運の死から約百年後に、後白河・後鳥羽の念願であった武家政権の打倒を、後醍醐天皇が斜陽の鎌倉幕府に挑むが失敗して、歴史の皮肉であるが後鳥羽と同じこの隠岐に流される。しかし後醍醐は一年後には脱出に成功して三度目の正直で鎌倉幕府の倒幕に成功する。

(三)支配階級内での権力闘争における敗北者

この大転換期に限らず何時の時代においても栄枯盛衰は常であり、固定化した門閥・階級制度にも雪解け現象が起き、特に武力とか財政基盤に問題が表面化すると、支配者は個人の実力・能力主義で打開しようとするので、自ら定めた門閥制度に風穴が開き、やがて支配階級内での主客逆転が生じて支配者の交替にと発展してゆく。そもそも支配体制の安定期には門閥制度での組織運営で何ら支障が出ないので個人の実力・能力主義は起きず、従ってその支配体制は無難に維持されるが、体制の根幹である門閥を度外視する人材登用が必要とされるということは、その支配体制の崩壊が始まり、その病状が悪化していると言う証拠である。

①奈良・平安時代は天皇が最高権力者であるが、さすがに天皇が部下の公卿たちにより暗殺される例こそないが、部下たちの都合で譲位・廃位が頻繁に行われ、平安後期になると天皇を棚上げする藤原氏の長年の摂関政治で、皇位を体よく剥奪された上皇・法皇たちが反主流派の公卿を抱き込み、院宣を通じて二元政治を行う。

この時代の実質の権力者は、公卿の最高位である摂政・関白・太政大臣であり、その地位を巡る権力闘争は、藤原氏対他の公卿、むしろ藤原氏一族内の方が数多く起きている。特に藤原氏と他の公卿との覇権争いは後世の小説や演劇の題材となっている。

例を上げると、持統天皇の時代の藤原氏による天武天皇の嫡孫長屋王の抹殺であり、平安時代の九世紀半ばの清和天皇の時代に起きた国宝「伴大納言絵巻」で有名な応天門の変である。この事件は皇居の大極殿の応天門から出火して大極殿の一部も消失する大事件で、当時放火の主犯は右大臣源信か大納言伴善男かとなったが、結局飛鳥時代の名族である大伴氏の末裔の大納言伴善男が遠島処分となり大伴氏は完全に没落する。

この事件で源信も厳罰処分を受け、結果として一番得したのが藤原氏であり、真犯人は藤原氏であって対抗する有力公卿を貶めたというのが真相と言われている。

②鎌倉・室町時代の最高権力者は将軍だが、数多くの将軍が暗殺されもしくは親王を戴く形をとって、実権を握るのは執権の北条氏であり、管領の細川氏・斯波氏等であった。

この両時代を通じて名実ともに最高権力者だったのは三代将軍足利義満ただ一人である。

この約四百年間の体制内の権力闘争は正に血で血を洗う壮絶な時代であり、敗北者・没落者の悲劇は数知れずまた覇者・勝利者の栄華も長続きせずやがて敗北者に転落してゆく。

③江戸時代の最高権力者も将軍だが、この時代ではさすがに将軍の暗殺こそなかったものの、将軍職の跡目争いや将軍と幕閣との確執および幕閣最高位である大老・筆頭老中ポストを巡る譜代大名たちの争い等、権力争いの悲喜はこれも枚挙に暇がない。

例えば、三代将軍職を争った家光と実弟駿河大納言忠長との確執で忠長は自決処分となり、四代将軍家綱逝去後の次期将軍に大老酒井忠清が親王招請を目論んだとして、五代将軍となった綱吉は酒井を罷免して減封処分とし、一方綱吉を推挙してくれた堀田正俊を大老として論功行賞するが、この堀田大老も三年後血縁の稲葉正休に殿中で斬殺されるという事件が起きる。

七代将軍家継の急逝で徳川宗家の家光の直系が絶え、次期将軍は御三家筆頭の尾張家ではなく次席の紀州家の吉宗が八代将軍となる。吉宗と将軍職を争った尾張徳川宗春は、何かと吉宗将軍の政治に反抗して最終的には隠居蟄居処分となり、死後も名誉回復が許されなかった。

この八代将軍職の後継争いのしこりは、幕末の尾張徳川家の佐幕意識が希薄となる遠因となり、結局戊辰戦争ではいち早く紀州将軍家を見限ることとなる。

数ある体制内の勝利者と敗北者の中から、有名な菅原道真の悲劇と松平定信と田沼意次の隠れた確執について

触れてみたい。

○菅原道真

平安時代の九世紀末、藤原北家の実力者基経の傍若無人振りを見てきた宇多天皇は、自身が藤原氏と外舅関係が無かったこともあり、高名な学者でもあった下級公卿の讃岐守菅原道真を登用して、基経亡き後の藤原時平と官位を競わせた。

これに対して藤原氏の氏長者時平は、道真が娘を宇多天皇の女御に差し出し、更に宇多天皇の親王にも娘を入れていたので、菅原氏が天皇の外戚として藤原氏に取って代わる事を危惧して天皇に讒言を行い、結局道真は大宰府の権帥に左遷され二年後に五十九才の生涯を閉じる。

この菅原道真の悲劇は、その後の時平の原因不明の急死と相次ぐ天変地異を道真の祟りとして大いに藤原氏を恐れさせ、またご存知歌舞伎十八番となり悲劇の代名詞の観さえあるが、道真に藤原氏に取って代わる気があったかどうか別として、公家という支配階級の中での権力闘争の一敗北者であった。因みに、藤原氏の最盛期と云われる藤原道長はこの時平の急死後の氏長者の弟忠平の約百年後の子孫である。

○松平定信と田沼意次

江戸時代の天下泰平の最盛期を眺めても、五代将軍綱吉は館林藩主時代の側役の柳沢吉保を政治のブレーンとして重用して最後は大老まで抜擢し、六代将軍家宣は甲府藩主時代の家臣であった間部詮房・新井白石を重用するなど、門閥制度を基本としつつも出自の垣根を越えた将軍個人の信頼度の高い人物や有能な人材の登用を行い、門閥制度の氷解が生じる。

この抜擢人事の一方では、家康来の古参の譜代大名の地盤沈下となり、常にこれらの旧勢力との相克が起きる。

門閥制度に徹底的にメスを入れたのが八代将軍吉宗であり、門閥より個人の能力主義を積極的に採用、出身元の紀州藩から有能な人材を大量に幕僚に取り立てる。

吉宗とすれば幕府の財政再建が至上命題であり、無能な人を重職に置く門閥主義などに構っておれず、大岡越前守の重用はその象徴的な話に過ぎない。

さて、賄賂政治で悪名の田沼意次だが、その出自は吉宗が紀州家から召し連れてきた下級武士の倅であり、その後吉宗の子家重・孫家治の二代の将軍に重用されて側用人から五万七千石の大名の老中にまで破格の出世をする。更に老中在任中に息子の意知を若年寄に抜擢して、日陰に追いやられた御三家・譜代大名たちから恨まれる事となる。

この田沼の政治は、吉宗の質素倹約と米経済主体の享保の改革が失敗に終わった後を受け、町人の貨幣経済の繁栄に着目した重商主義の経済政策を推進、その成果は

抜群で幕府の財政は大いに改善される。しかし息子意知が暗殺されると、賄賂政治と幕政の私物化という非難が一気に沸き起こり、結局罷免の憂き目に会うが、最近この田沼の政策は高く評価されている。

この田沼によって日陰に追いやられた人物の一人が、後の寛政の改革で有名な老中松平定信である。定信は御三卿筆頭の田安家三男で吉宗の嫡孫に当たるが、同じ御三卿でも次席の一橋家と老中意次の結託により臣下の白河藩松平家の養子に出され、その後実家の田安家が兄の急逝で後継者が絶えたので定信は田安家への復縁を願い出るが、一橋家と意次の反対で終に叶わなかった。

そうこうしている内に十代将軍家治が急逝、一橋家と田沼の画策で十一代将軍には一橋家斉が即位したので、定信の将軍職はまったく目が無くなる。

しかし挫折した定信は幕政参加の強い執念を持ち、将軍家斉の実父で従兄弟にあたる定信追い落としの主犯である一橋治済に接近、更に共犯である老中の田沼には賄賂を贈って、何とか奏者番に登用され幕政への足掛かりを得る。

考えてみれば、田沼意次の父は紀州家の下級武士に過ぎず、一方の定信は将軍吉宗の嫡孫という主筋でありながら、猟官運動のためとはいえ一代前は家臣であった男の倅に頭を下げ、何とかその配下に取り立ててもらうという皮肉な逆転現象が起きたのだから、江戸時代の門閥制度の柔軟さには驚く。

一方田安家は、定信という立派な後継者がおりながら世子が絶えた形となり、結局跡目相続として仇敵一橋治済の息子を養子として受け入れ家名を繋ぐ。定信とすれば将軍後継の最有力候補から外されただけでなく、実家の田安家まで事もあろうに仕掛人の一橋家に横取りされるという度重なる悲運に会うわけで、定信は無念この上なかった事であろう。正に悲運の人であった。

余談だが、その後定信は田沼の失脚の翌年筆頭老中となり寛政の改革に着手、田沼の改革を一掃して祖父の吉宗に倣った倹約令と農本主義の経済政策を推進するが、改革は成功せず結局在任六年で退任し以後は藩政の改革に努める。

罷免された意次の方は、翌年減封処分のうえ相良城を没収され、定信の老中二年目に七十才で病没する。この意次への処分に定信の復讐が働いたかどうか分からない。

長々とした話となってしまったが、勝利者は憎むべき悪で、敗北者は同情すべき善、という短絡的な捕らえ方は誤っていると言いたかったのである。

詳しくは次号で具体的に論じる事とする。

（四）現代の大衆の為政者への反感の原因

完全な民主主義の今日、自分たちが選挙で選んだ政治家が為政者なのだが、大多数の国民は今日でも「お上」と揶揄したりして「支配されている」と言う意識から抜け出せない。

なぜだろうか。

その大きな要因は、戦後一貫して大多数の国民のための政治がほとんどなく、ほんの少数派に過ぎない、大企業や公共工事関連業者、官公庁および外郭団体特殊法人・特定郵便局経営者の公務員、医者・歯医者・教員、農林漁業の第一次産業従事者という、選挙で確実に投票してくれる「固定票への利益誘導」を、「国民のための政治」と称して与野党を問わず行ってきた事にある。

この結果、有権者の圧倒的多数派である一般サラリーマンと中小零細企業等の自営業者は、長年の少数派への利益誘導の付けだけ(投資資金ではなく寄付金の出し手)を回され、自分たちには政治による利益還元がないという事実にやっと気がつき、政治への無力感からそれが嵩じて政治無関心となった。

事の真相は、少数の既得権者が国家財政の分捕り屋の代表を国会議員として国政に送り込み、送り込まれた政治家は国家権力を官僚とグルになって投票者という「主君」に義を果たし、その過程でコソ泥のように国家財産のくすね盗りと、利権屋からの献金という美名の下の収賄を行い、己の一家の生計に当てる政治屋に堕落する。

政治屋とは、元手は悪知恵と口先三寸だけのぼろい商売を、表向き政治家という鎧と兜を身に付け、子々孫々に事業継承しようとする人たちのことを言う。

その政治屋は選挙の洗礼を受けていると常にうそぶくが、その選挙とは、お手盛りで身分確保に有利な選挙制度を作り、小数の固定票という利権集団をバックに多選を獲得、四年か六年に一回土下座するだけで後は先生と称されて「全国民の上に君臨」するのである。

この日本の議会制民主主義の重病を根治するには、先ず将軍吉宗の大奥女中の大量解雇に見習って、国会議員と地方議会議員を半減させるぐらいの大量解雇を行い、その上で人口に見合った厳正な定数配分を行うことである。

その一方、支配者たる国民の意識改革として、政治無関心は支配者としての権利放棄だという認識を再確認させる必要がある。

しかし現実には、多数の国民が政治による恩恵の埒外に置かれ、相も変わらず「搾取」の対象であり、結果として政治が悪いとぼやきつつ、生涯生活に喘ぐ事となる。

従って、未だに為政者により支配されていると言う意識から抜け出せないのである。

このように大衆には何時の世も勝利者による為政者の抑圧感が根底にあるため、歴史上の没落者や敗北者への共感更には賛美へとの本能が、今日の大衆にも働くのであろう。

こうした大衆の感慨の背景には、古今を問わず「人生の虚しさ」が何人にもあり、それが仏教思想の現世無常、来世極楽という日本人独特の「人生の無常観」となり、そこから発展したわび・さびという文化を伝統文化として誇りにするようになる。更に江戸時代には封建時代の為政者のための儒教(朱子学)と武士道に基づく「義」を崇高な価値観として全国的に浸透させ、その「義」は明治維新後「天皇への義」に変貌して国民全体に徹底的に叩き込まれた。

こうしたわが国の長い歴史の諸々の精神文化が、少なからず現代の大衆の心底にも沈殿しているため、「義を貫く敗北者」に限りなき賛美を贈り、その裏返しの勝利者への反感となるのであろう。

次回は、戦国時代から明治維新までのポピュラーな敗北者を取り上げて、大衆の意識・評価を筆者の歴史観との比較で論じてみたい。



関　寛斉のこと

山田嘉久

「関　寛斉」といっても、その名を知っている人は少ないだろう。

幕末から明治にかけて活躍した蘭方医の一人だが、生来、立身出世欲の薄い性格もあって日本歴史上には、まず登場しない。

わずかに彼の生まれ故郷やゆかりの地の地方史に名を留めているにすぎない。しかし私はその地方史の一つ「東金市誌」の中の「開拓に生きた医師」を読んだとき多少、奇異な感じを抱いた。

文中、「作家司馬遼太郎氏によればー」として彼の小説「胡蝶の夢」からの引用がやたらに多いからである。

通常、これらの地方史（郷土史）を素材にして作家はイマジネーションを働かし小説をものにするのだろうが、この場合は全く逆。一人の著名な作家の一作品が地方史を作り上げてしまっている。

今更ながら司馬作品の影響の大きさを見せ付けられた思いだった。

この小さな地方都市の中央部にある公園の一隅に「関寛斉翁」と銘打った立派な銅像を見つけた。その製作年月をみると昭和五五年二月とある。

司馬遼太郎が彼を主人公の一人として幕末の蘭方医たちを描いた長編小説「胡蝶の夢」を書き終えたのはたしかその半年前だから、その頃俄かに起こった「寛斉ブーム」に便乗して作ったものに相違ない。

そういえば前記地方史の冒頭の文章に「近頃、関寛斉が見直されているのは喜ばしい」とある。

いずれも司馬作品のおかげというべきだろう。

（一）

関寛斉は天保元年（一八三〇年）に上総国山辺郡中村（現千葉県東金市）の貧農の長男として生まれた。長じて佐倉順天堂で学んだが、学費が払えないために当初は学僕としての身分だった。学僕とは下僕の仕事をしながら合間をみて勉強するという立場だろう。

しかしまもなく順天堂開塾以来の秀才として頭角を表わしたので、創始者佐藤泰然は学費全免として援助を惜しまなかった。

卒業間際には師泰然に代わって手術が出来るほどになったが、その頃、彼が記した「順天堂外科実験」は順天堂のみならず日本外科医学史における貴重な文献となっているという。

寛斉は泰然から受けた恩義を終生忘れず、泰然を神棚に祀って感謝し続けたと司馬は書いているが、彼にとってはもう一人の恩人がいる。

順天堂で学を終えた寛斉は下総銚子で開業するが、土地の豪商浜口儀兵衛（梧陵）がその人である。ヤマサ醤油の創立者として知られる儀兵衛は豪商というよりは紳商の名にふさわしく、彼自身も一流の知識人で特に有能な若者の面倒をみることが好きだった。勝海舟なども若い頃、儀兵衛から学費の援助を受けた一人らしい。

儀兵衛は寛斉に長崎行きを勧める。しかし寛斉は既に妻帯し三人の子供もいたため最初は躊躇したので、儀兵衛は寛斉を江戸に連れて行った。そこでは当時、コレラが蔓延し漢方医では手の付けられない現状をみて寛斉は長崎で更に蘭方医学を修める決意をする。

この長崎留学に当たって儀兵衛は寛斉の交通費、留学費はもちろん留守宅の妻子の生活費まで一切援助した。そのことを知った寛斉は感泣したという。儀兵衛は百両という大金をこの若者の将来に賭けたのである。

（後日談だが、儀兵衛は明治にはいって故郷の藩である紀州藩に招かれ商人ながら大参事として藩政に携わることになるが、その後出張先のニューヨークで客死する。そのため儀兵衛亡き後、浜口本家（和歌山）は没落の憂き目に遭うが、その際、寛斉はそのご恩返しに浜口家再興に力を貸すことになる。）

長崎でオランダ医師ポンペの指導を受けたのが寛斉のほか本小説の主人公となる松木良順と司馬凌海。いずれも佐倉順天堂の出身だが、長崎入りは三人三様である。

松本良順は佐藤泰然の実子だが、父の創った佐倉順天堂は継かずに、請われて代々「法眼」の家柄である松本家の養子となっていたので、長崎入りは「長崎海軍伝習所の御用医」の身分である。

彼は数多くの司馬作品に登場している。「燃えよ剣」では近藤勇と親交を結び、徹底抗戦のため出向いた会津では土方歳三と久闊を叙し負傷兵の治療に当たった。たしか「峠」では河井継之助も治療を受けている。徳川幕府最後の将軍奥御医師でもあった彼は「最後の将軍」では慶喜との関わりも描かれている。

その良順に語学力を買われて佐渡から呼び寄せられた

のが司馬凌海（小説では伊之助、多少風変わりの人物としてえがかれている。）身分は当然、良順の従者だが評判とおりの天才振りを発揮してポンペの講義の通訳、翻訳はすべて彼が引き受けた。後にこれら講義録を出版したときは寛斉が校閲している。

寛斉は前記浜口儀兵衛の援助を受け、佐藤舜海（尚中）と長崎入りした。舜海は佐藤泰然の高弟だが後に泰然の養子となり順天堂を継いだ人物。

この時の寛斉と舜海の身分は形式上、旗本格である良順の弟子となっているが、日頃から寛斉の実力を知っている良順は逆に寛斉のことを「関先生」と呼んで尊敬している。

かくて五年間の長崎留学を終えた寛斉は銚子に帰って再び開業するが、すぐに阿波徳島藩からお声がかかった。藩主蜂須賀斉裕の側医師としてである。

この頃優秀な医師は引く手あまただったらしい。当時、佐倉順天堂と双璧だった大阪の緒方洪庵塾（適塾、この塾からは福沢諭吉、大村益次郎、橋本左内などの俊英を輩出したことで知られる）の塾頭ともなると直ちに五〇〇石以上の大身で就職が決まったと司馬は大村益次郎を主人公とした小説「花神」に書いている。

司馬は寛斉の阿波時代、一つのエピソードを披露している。

ある日、御本城の奥の間に詰めていたとき寛斉の故郷上総、下総の名物はなにかと聞かれて「博徒の本場」と答えて相手を唖然とさせる。さらにどういう人物がいるかの問いに「笹川ノ繁蔵」と愛情を込めて云ったというのである。更に付け加えて「私も繁蔵親分の百分の一の人間にもなりたいものです」と。

博徒繁蔵と医師寛斉とは全く結びつかないが、「義侠心」という点では共通のものがあったのかもしれない。

これが史実かどうかは疑わしいが、司馬作品を読む楽しさの一つは「余談ながら」「以下無用のことながら」で始まる司馬独特の道草にある。

「ついでに」寛斉が仕えた蜂須賀二五万石について寛斉は（野盗の子孫か）程度の知識しかなかったと書いているが蜂須賀野盗説については、この本ではないがほかの著作で面白いエピソードを記している。

斉裕の子茂紹は明治に入って侯爵枢密院議長となるが、彼が明治天皇に拝謁中、天皇が中座したことがあった。そのとき目の前に珍しい葉巻が置いてあることに気がついた茂紹はつい二、三本失敬してポケットに入れようとした瞬間、運悪く座に帰った天皇に見つけられてしまう。そのときの天皇の言葉は「蜂須賀、先祖は争えんのう」であったという。

以後、蜂須賀家では有名な東大教授に委嘱して「蜂須賀（小六）野盗説」を懸命に否定したという後日談が続く。

閑話休題。

寛斉が藩主に従って上京したときにはすでに鳥羽伏見の戦いが始まっていた。藩主は徳川家直系（斉裕は将軍家斉の子）であるにもかかわらずいち早く薩長側についたので、寛斉も薩長軍とともに江戸に下る。

この時の阿波藩兵わずか二百人。二五万石の大藩にしては驚くほどの少数だが、薩長としては阿波藩などは期待していない。しかし寛斉のみは頼みにされた。江戸に着いてまもなく上野戦争（彰義隊との戦い）が始まるが、このときの薩長軍の司令官は大村益次郎。多分、益次郎と寛斉は面識がなかったろうが、片や適塾の塾長を務めた益次郎に対して片や順天堂出の秀才の寛斉。お互いの名声は知っていたろう。

そこで益次郎は直接、寛斉に戦争に備えて神田に野戦病院を作ってくれと頼む。この戦いにおける寛斉の活躍は目覚しかった。なにしろ重篤者の手術は彼しか出来ない時代だった。重篤者の多くは激戦地黒門口から攻めた薩摩兵だったので当然、総大将西郷隆盛の目にとまる。（中村半次郎（人切り半次郎）も寛斉の治療を受けた一人。ただし軽症だったが）

そのため次の会津戊辰戦争では彼はすでに野戦病院頭取の地位にあった。

このときの幕府側の医務総監はかっての親友良順だった。運命の対決となったのは歴史の非情であろうか。

この戦争で彼が書いた「奥羽出張病院日記」（一八六八年慶応四年二月～八月）には克明に戦死傷者の病状が記されておりその中には薩摩藩士益満休之助の死も記されているという。

戦勝して江戸に凱旋するとき寛斉は常陸の土浦城から無理やり塗り駕籠に乗せられた。

官軍の高官としては当然のことだったが、「下あーに、下あに」の触れ立ちに寛斉は「恥入候」と日記に記した。いかにも寛斉らしいが、かって九十九里の寒村で「蕪ぐらい」とあざけられた自分がいまは大名の礼遇を受けている。

これが栄達というものかもしれないが、「わしのような人間に必要なのは、フレーヘード（自由）だ」の気持ちが明治以降の寛斉の生き方を決めた。

（二）

官軍の勝利に終わった明治維新だったが、明治の代になると寛斉はなぜか今までの官位を捨てたばかりか士族の身分も返上して一介の平民として徳島の町医者になってしまった。

司馬に言わせれば彼の実力や経験からすれば当然、新政府での大学総長か軍医総監あるいは外務大臣（なぜ外務大臣かわからないが）の地位が約束されていたはずで

ある。

かってのライバルであった良順が賊軍にもかかわらず後に許されて男爵軍医総監と栄進したのとは対照的だった。

徳島での寛斉は貧者の医療に専念した。

無料で疱瘡注射を施した住民は数千人に及び、住民たちは寛斉の後姿を「関大明神」として伏し拝んだと司馬はやや大げさに書いている。今でも徳島市内には「関の小路」として名を残しているという。

司馬はこの時代の寛斉のエピソードをもう一つ紹介している。

現在、徳島県には県有林がほとんどないという。なぜか。それは維新後の徳島藩の藩政を井上高格という辣腕家が牛耳ったことによる。彼は旧藩の公財産である山林の多くを私有化し売り払い帳簿も隠滅してしまったためである。

そのうえ歴代藩主の霊廟まで売って自分の蓄財にまわしたので、この霊廟は狐狸の巣と化してしまい、詣でる者はほとんどいなくなってしまったが、ひとり寛斉のみが霊廟の草むしりを続けていたという。

この行為を井上らは「因循の愚者」と嘲笑したが、寛斉は当時、在ロンドンの蜂須賀茂紹に建白書を送る。これが「明治後最初の自然保護論というべきもの」といわれる。若い旧藩主は当然のようにこの諫言を黙殺した。

（司馬には自然破壊についての多くのエッセイや対談があるが、このような具体的な例を引かれると説得力がある。）

寛斉のすごさはこれで終わらないことだった。

七三歳となったとき彼はなにを思ったか愛妻を伴って北海道の開拓民となってしまった。なぜ全く知らない北海道に渡ったのか。

彼の四男が札幌農学校に在籍していたことも考えられるが司馬は寛斉が親交のあった徳富蘆花の感化が大きいと推察している。当時、蘆花は関東近在で農業に従事しトルストイに傾倒していた。

北海道に入った寛斉は二宮尊親（尊徳の孫）の二宮牧場を視察したり、東京の蘆花を訪れて関心のあるトルストイのことも聞いている。

北海道では開拓作業に従事する傍らアイヌ人の治療にも当たった。

寛斉が住んでいた陸別町（当時は十勝郡斗満）には今では彼を祀った「関神社」や彼の銅像が立っているそうだ。また寛斉の医学書その他の遺品は陸別町郷土資料館に寄贈されている。

陸別の人たちにとって寛斉の名は西郷隆盛や福沢諭吉の名に等しいと司馬は書いている。

しかし北海道に渡って一〇年目。その前に最愛の妻を

失った八三歳の寛斉は母の命日に服毒自殺して波乱に満ちた一生を終わった。

四歳のときに死別した母への思慕は人一倍強かったといわれる。「母を慕い妻を偲んで」の最期だった。

後に親友蘆花は寛斉の死を「形において乃木翁に似て、思想においてトルストイ翁に似ている」と随筆「みみずのたわごと」に書いたと司馬は紹介している。

寛斉はこの地で「関牧場創業記事」を遺したが、この書に限らず自書にはすべて「白里」の署名が見られる。「白里」は寛斉の号で、その由来について書いた蘆花の別の随筆「九十九里」にまで司馬は言及する。

（「百」の上の一を梳ったのが「白」だから白里とは寛斉の故郷九十九里浜を意味する。現に九十九里浜には白里、白潟といった白の入った地名が多い。）

よく此処まで調べ上げたものと感心せざるを得ないが、肝心の「地方史」は蘆花の文章までは引用していない。

五巻に及ぶこの長編小説の題名は「あとがき」によると荘子の故事から取ったという。

荘子が蝶となり百年を花上に遊んだ夢を見たが、自分が夢で蝶になったのか、蝶が夢を見て荘子になったのか。「大辞林」を引いてみると（一）夢と現実との境が判然としないたとえのほかに（二）この世の生のはかないたとえともある。

大きな潮流の中ではどちらが現実かわからない。幕末期に渇望された蘭学者たちもさしずめ「胡蝶の夢」の存在でしかなかったというのが司馬の結論かもしれない。

この小説の主人公たちの前の世代―例えばシーボルトに学んで将軍の奥御医師に抜擢された伊東玄朴などはポンペ学校に学んだ主人公たちの出現によってたちまち旧式化してしまった。しかしそのポンペ学校の修業者たちの医学もわずか数年後の明治二年のドイツ医学の導入によって一挙に過去のものとなってしまっている。幕末の変動はなにも政治の世界だけではなかった。

その苦悩のなかに関寛斉がいたと司馬は見る。（「司馬遼太郎が考えたこと九」）

そんな寛斉について司馬はまだ書き足らなかったのか、それとも寛斉の生き様に強い感銘を受けたのか、「胡蝶の夢」を書き終えてすぐの「街道をゆく」（北海道の諸道）ではわざわざ陸別まで足を延ばし「関寛斉のこと」の一章を設けている。

また昭和末期に書いた「街道をゆく（阿波紀行）」でも徳島時代の寛斉に触れたが、こうも書いている。

「関寛斉はひとことでいえば幕末明治の名医である。さらにいえば医術によって暖衣飽食しようとしなかった人である。もうひとついい重ねると人生に強烈な意味を見出そうとしてその半生、古代インドの苦行僧のように身を苦しめた人でもあった。」と。

古い物・遠い夢

忠内正之

第十章　樂茶碗の怪（陽炎の女性）

（一）

平成〇年晩春のことである。バブルはピークを迎えていたが骨董業界はまだ盛況が続いている。美術商岩崎は五十才台半の働き盛りで都心に近い高級住宅地に落ち着いた雰囲気の店舗を構え、開業十五年を迎えている。

岩崎は元々、特殊な塗料を道路会社等に加工販売する中堅企業を経営していた。秀れた技術力を持つので販売先からの評価も高く業績は順調だった。アメリカの経営学者ドラッカーがその技術力を認めて著書の中で紹介したこともある。ドラッカーは日本の古美術にも造詣が深く後に岩崎の店を訪ねることもあった。

岩崎は若い時分から美術骨董を趣味として来たが、好きが嵩じて折角努力して育て上げた会社を大手メーカーに売却してこの道に入った。〝好きこそ物の上手なれ〟と言う諺があるが岩崎の転業は順調であった。生来の研究熱心と人柄の良さが相俟って、美術学者、同業者からも愛され、優良顧客との取引も拡がった。折しも骨董ブームの到来で資産も殖えた。鑑識眼もかなり養われて今では圧しも圧されぬ上位の美術商となった。

その日は好天気であった。明るい昼下がり岩崎の店に人が来ていた。石井である。石井は年令八十才過ぎの老人であるが元気の良い果師である。果師とは一言で言うと「ブローカー」である。彼はこの道の目利であり良いお得意先を持つ特異な存在である。石井老人は都内有数の老舗美術店に若い頃から勤め上げ修業した。一時応召によって中断したが復員後旧の店に復帰して中心戦力となって活躍した。戦後は旧家から所蔵品が沢山流出したので優品を数多く扱うことが出来た。

電力の鬼「松永耳庵」にも可愛がられ数々の名品を納入したことも自慢で、有名な「釈迦金棺出現図」はその内の一つである。その図は国宝に指定され現在は京都国立博物館に収蔵されている。先年「耳庵」没後三十年を記念した「耳庵コレクション」の展示会が東京国立博物館で大々的に開催され、出現図も出品された。この会の目玉となって観客の注目の的となった。

石井は一線を退いたが、今も元気で昔納入した品を堀出しては仲間に卸す仲介を行って余生を送っている。岩崎とは岩崎が開業する以前からの付き合いで、遊びがてら、時には商売がらみで屢々来店する。この物語りの発端は石井の来店中に生じた。

（二）

岩崎と石井は例の如くたわいない世間話に花を咲かせていた。その時一人の女性客が店に入って来た。石井は別室に控えたが岩崎はその女性客を迎えてハッと胸をつかれた。彼女の容姿が彼が若い日に別れざるを得なかった恋人にあまりにも似通って感ぜられたからである。

岩崎は学校卒業後、オーナー経営のある大手化粧品会社に勤務したことがある。真面目で熱心に働く彼は営業マンとして実績を挙げ将来が期待されていた。勤務先会社の業績も極めて順調で、美術品収集家のオーナーは後に箱根に立派な美術館を開く程の余裕を持つこと、なるのだが、それは岩崎が退社してからの話である。岩崎の美術好きもオーナーの影響を受けてこの頃開眼したとも言える。

オーナーの秘書室に美しい女性が勤務していた。岩崎より四つ年下で、短大出身、理智的で上品なお嬢さんであった。オーナーの姪である。キビ〳〵とした態度で良く働く岩崎もまた長身白皙の美青年である。高倉健似と言われよくモテた。この二人が相思相愛の仲となるのは極めて自然の成行きであった。だがこの恋は実らない侭で破れてしまった。岩崎の田舎の家業が傾いたのである。岩崎が中心となって一家を担うこと、なった。まだ封建色の濃い時代であった。化粧品会社は退職せざるを得なかった。

もと〳〵企業家的精神が逞ましく、経営才能に恵まれた岩崎は塗料関係の家業再興に成功すること、なるが、その時点ではあてもなく彼女を待たせる訳にも行かず、彼女側の事情もあり涙を呑んで別れざるを得なかった。その後彼女は結婚退職した模様であるが消息不明となった。岩崎は遅れて、地元出身の今の妻女と巡り合って結婚した。事業の再建、そして思い切った転業に伴う多くの苦労を共に支え合って今日の成功を得ることが出来たのである。

岩崎は女性にもてるタイプである。金があって気前が良い、しかもハンサムである。だが身持ちは堅く未だ嘗って妻以外の女性に心を寄せたことは無い。だが初恋

の人だけは忘れようとしても忘れることが出来なかった。その彼女の面影に似た雰囲気を持つ女性が出現したので思わず胸がときめいたのである。

女性は四十才前後、中肉中背、スラリとしている。はっきりした顔立ちで、色白く上品である。古浅葱の着物に八つ橋の染帯をキチンと着こなしている。指輪も爪のマニキュアもない。（茶道関係者はそうでなくてはいけない）僅かに腕時計だけはパテックスらしきのを覗かせている。総体の感じとして、品はあるが稍地味な印象を免れない。人知れぬ苦労があるのかも知れない。岩崎は応待しながらこの様に観察した。

彼女の来意は次の通りであった。彼女は地方都市の商家の生まれで、東京近郊都市にある寺に嫁いで来た。結婚する際、嫁入道具の一つとして樂茶碗一個を貰い受けて来た。祖母の時代から伝わる品で彼女も娘時代の茶稽古でたまに使わせてもらったが、相当良い品らしい。「良い品なので呉々も大切にしなさい。婚家には内緒にしておく様に、又どうしてもお金の必要な時は処分しても良いが信用のある店に持って行く様に」と父から念を押された。長い間使う機会もないまゝに来たがこの程実家の商売が破綻してしまった。加えて大黒柱の母が重篤な病気を患うに及んで、娘として少しでも援助したい。と言っても地味な寺では勝手元不如意である。この際大切にしていた茶碗を処分することを決意した。ついてはどの位の値段で買って貰えるか見て欲しい。骨董店は沢山あるが仲々入り辛い、そんな中でこの店は入り易く、信用もありそうなので、一週間程前から迷い抜いた挙句この店を選んだ由。以上の内容をか細い声で岩崎に告げるのがやっとであった。

岩崎は彼女の風情にすっかりいかれてしまい何としても相談に乗ろうと決心したが、そこはプロで態度に出さず先づ「茶碗を見せて下さい」と切出した。

それは黒樂茶碗であった。先づ箱行きを見る。キチンとして時代色もある。箱書きは「黒茶碗了入」とサインされ草書印「禾」がある。裏蓋には「玩土老人」の添印もある。立派な仕覆に包まれた箱内の茶碗は堂々とした出来で高台脇に了入の隠居印「禾」（箱表面と同じ）が刻まれている。早速別室に控える石井老人と相談しながら印譜、花押等、資料を繰って調べて見ると、「樂九代了入」作に間違いない様である。茶陶にかなり詳しい石井老人も太鼓判を押した。

「おいくら程で手放しになるのですか？」と聞くと「〇百万円は欲しいのですが、直ぐ買って下さるなら〇百万円で良いです。あちこち持ち歩いてさらし者になるのは嫌ですから」と更に消え入る様な声で言う。岩崎は心中こ躍りした。

筋目の通った樂茶碗は希少価値がある。筋目が通るとは形式、つまり作者の共箱、花押、押印、出来れば伝来（所有者の記録）があるに越したことは無いがそれは高望と言うものだ。次に茶碗の出来工合、風合い等々感触も含めて内容が納得出来るものでなくてはならない。言わば純正品である。この品はそれらの条件を充分満たしていると思われる。何よりも岩崎の彼女に対する同情心と好意が彼の決断を早めた。結局、言値の〇百万円で購入した。業者は常にかなりの額の現金を用意して不時の仕入に備えるので即金取引である。

元来美術商が店舗の投資に金を掛けるのは、店頭販売促進を主目的とするが、この場合の様に素人が所蔵品を換金するのを容易に受け入れる窓口としてのメリットが大きい。市場とか仲間から仕入れる眼垢のついた物よりウブで良い品が安く手に入るのだ。本件はその意味合からも典形的な好例である。買値の3倍か？若しかしたら5倍位で売れるかも知れない。身許確認もそこそこにして取引を終えて岩崎はホッとした。善行を施したとの気持と商売への期待で自己満足を覚えた。優しい眼差しで彼女を送り出すと帰り姿の彼女の足どりは心なしか軽やかで陽炎の立つ街並の中へ消えていった。ふさいでいた気持が晴れたのであろうか？「良いことをした」と思いながら既に売り先を考えていた。

岩崎の考えた売り先はTであった。Tは骨董好きな高級サラリーマンで妻女が茶道の師匠をしている。かねて茶会を開くため適当な黒樂茶碗を探して呉れと頼まれていたことを憶い出した。そうだ「Tさんに声を掛けて見よう」との心積りがあったのだ。Tは岩崎の上客でもあったので買値の2倍程度に抑えて売れば世間相場に比べてかなり安い筈である、恩が売れる。きっと喜ぶに違いないと考え早速連絡した。店頭に飾ったり市場に出すよりは遥かに効率が良いと計算した。

（二）

Tは知らせを受けて早速飛ぶ様に来て茶碗を見た。茶会や美術館等で垣間接することはあっても直に触れるのは初であり感激した。「樂九代了入」（一七五六年―一八三四年）作である。共箱表に黒茶碗「了入」の署名押印（隠居印）、又蓋裏に「玩土老人」印もある。茶碗はと見ればかなり大振りである。作行きは厚造りで大胆な強い篦を斜めにはしらせながら手すさび風な趣に力強くまとめ上げている。底部は土見せで、高台は小さく、高台脇はざんぐりと荒々しく削りとられている。高台畳付きは一ヶ所割られて割口に隠居印（禾）が押されている。資料に見る「了入」晩年作の優品「湖月」もかくあるかなと連想させる。

樂家は「初代長次郎」が利休の指示によって樂茶碗（黒と赤）を創業以降、現在の当十五代に至るまで色々変遷はあったが、「千家十職」（千家の指定道具業者）の一員として約四百年伝統を守って造り栄えて来た。茶碗は茶

道の主要な道具であり、三千家の茶を指向する人達が渇仰するのが樂茶碗である。世に茶碗は「一楽・二萩・三唐津」と言われ、樂がトップに位する。

「了入」は樂家九代で、作陶に励んだのは江戸後期、文化文政期を含む、文化の高揚期であって茶道の隆盛期を支えた存在でもあった。「この立派な茶碗を格安で所有出来るとは」大満足でTは至福感一杯の気持ちで購入した。当時黒茶碗の優品は一千万円以上した筈である。自宅に持帰って更に、落款、花押、印等を辞典で確認し、早速お茶を点て、呑んだ。いずれ妻の還暦の茶会を予定しているのでその時の目玉としてこの茶碗を披露すべく楽しみにして秘かにほくそ笑んでいたものだった。ところが好事魔多し、とんでもない事態が生じたのである。

（四）

茶会に使われる主要な道具（茶碗・釜・水指・茶入・掛物等）は茶会の華であり、真正且つ立派な道具を誇示することが席主の生き甲斐でもある。客もしっかり見たいのだが短時間の席で見極めるのは至難の業であり、鑑賞力にも限度がある。そこで主要視されるのが道具の箱書きである。この茶碗の場合、作者「了入」のキチンとした条件を具備するもの、更に加えて決定的な箔付けが欲しいところである。茶会に集う人達は他人の持物のアラを探し出す嫌な性がある。従って席主としては衆目の批判に耐える備えをしておかねばならない。

Tは考えた。この茶碗に一番ふさわしい備えは何であろうか？それは「樂当代吉左ヱ門」氏の追加箱書きである。京都の樂家へは附属の美術館を含め何度も訪ねたことがある。

当代樂さんは「先祖の遺した数々の作品が埋れているのは忍びない。現代にレビューするのが子孫として当然の責務」と良心的でどんな無冠の茶碗でも快く鑑定して呉れると好評で、真正な品は更に頼めば箱書き迄応じてくれる。鑑定料は僅少で、その料金も美術館の運営費に充てられるとか。Tは樂家と過去に多少の接触もあったので半強引にアポイントして樂家へ茶碗を持参した。

樂焼釜元、樂家は京都市上京区、御所に近い閑静な住宅街の中にあって初代以来永年に亘って今も変わらぬ樂焼伝統の陶技を伝えている。樂家十五代当主は一九四九年、「十四代覚入」の長男として生まれる。芸大卒業後イタリヤ留学ののち一九八一年十五代を襲名現在に至っている。樂家の伝統を継承しつゝ、現代陶芸作家としてその優れた作家活動が注目されている。根底にあるモダニズムは「三代ノンコウ」（一五九九年―一六五六年）の再来と言われる程技巧的である。超多忙な中であったが夫人経由ながらこの茶碗を見て呉れたのである。（普通は美術館経由）

結果は誠に意外や意外且つ悲惨だった。応待に出た美

人の誉れ高い樂夫人（芸大の同級生同志だったと聞く）が、「これは全くの偽物でございます。お高い品ですから今度お求めになる時は是非事前に見せて下さい」と気の毒そうに言う。Tは寝耳に水の驚きで物を言うゆとりさえなかった。当代さんが直接説明する価値も無いとの判断であろうかとひき下がった。購入してから半年以上経っていた。樂家訪問日が翌年の初釜を過ぎてからの指定だったので今二月の京都はたゞさえ凍てついており肌刺す寒さが一段と身に沁みて悄然として帰京した。帰京するやTは直ちに岩崎の許に走り、事の次第を告げた。

岩崎も驚ろいたが、流石に落ちついた態度で対応して、早速売値そのまゝでひき取ってくれた。損得よりも信用を第一とする商売だからである。

（Tはこの時の経験を無にせず、後に真正な黒樂茶碗を所有することに成功した。）

（五）

岩崎はあの茶碗が偽物であるとは俄に信じられなかった。彼は後に文化庁の購入評価委員になる程だからかなりの目利となったが、未だ当時は鑑賞陶器、屏風、大和画、等に注力しており茶道具就中樂茶碗についてはあまり経験が無かった。樂当代が鑑定した以上認める他に手段はないが、それにしても作品、箱書き、押印等完璧と思えるだけに口惜しい。

後に教えられた事だが、黒樂茶碗は千三百℃の高熱焼結の途次で窯から引き出して急冷却、黒釉を発色させると言う。瀬戸の引出黒と同様の工程である。引き出す際使われた鋏は「五代宗入」以降のものが現存しており、樂家では茶碗に残る鋏跡の符合により真贋を極めると言う。成程それでは樂家以外では本当の判断が出来ないのは当然である。そして四代一入以前の作については鋏の保存が無いので原則鑑定しない由である。（鑑定出来ないと言う表現が正しいか）。岩崎はやっと納得し自らの不明を悟った。石井老人も首をふりながら理解を示したが、「樂さんの鑑定を求めなかったら、あれはあれで形式は万全なのだから通用するのになあ」、又「あの箱は本物で中味の茶碗は適当な品を探して来て合せたのではないか？」となお諦め切れない表情であった。いずれにしても樂茶碗の商いは伝来品（有名人が所有した、エビデンスのある物）を除いて難かしいというのが二人の共通の認識となった。

岩崎は考えた。これまでの商売で楽茶碗以外でも見損って失敗した例は何度もある。逆に危ぶんで買った物が堀出し物として思わぬ儲を招来したケースもある。成否は半々で商売をしていれば当然の結果である。だが今回は違う、完全に詐欺行為に騙された様だ。マンマと仕掛けられた罠に嵌ってしまったのか？口惜しさを通り越して自己嫌悪に落ち込んだ。

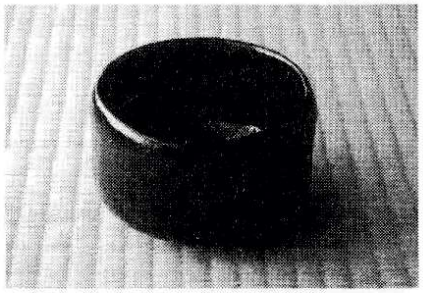
これは犯罪事件であろうか？ひっ掛った自分が未熟なのか？それに相違ないと、あれこれ心の中で反芻せざるを得なかった。だが、あの薄幸と思われた佳人は果して偽物を承知で犯罪の片棒をかついで売りに来たのか？或は彼女の実家が既に騙されて購入し大切にされていた物か？

故物を商う業者として守秘義務が求められる。同じく値嵩物の仕入は身許確認が必要である。このケースではパスポートで確認したもの、あの時の雰囲気では、充分な確認が出来なかった。今更騒いでも不名誉を公表するだけである。事件にすることは出来ない。こゝはじっと我慢をしよう。岩崎は茶碗を裏の倉庫の奥深くに格納し、封印することにした。

あれから丁度一年経った。店先から交差点を望むと人通りが多くなっている。年々この界隈は賑やかになって来た。今日も陽炎が立っている。ふとあの人がまた現われそうな妄想にかられる。あのしおらしさは演技であったのか？そう言えばあの人の帰り足は早かったなあ、途中で共犯者が車で待っていたのか知れない。様々な思いが錯綜して悪夢を見ていた様な気がする。

もう後悔はしない。恨みもしない。すっかり無かったこと、忘れてしまうことに決めた。幸い商売は盛んになっている。

終



（参考）黒樂茶碗（樂四代一入作）

北海道一人旅

吉田忠雄

「須藤さんという女の人から電話がかかってきたわよ」と七月のある日に家に帰ると家内に言われた。「吉田先生にもらった『二宮金次郎の一生』が行方不明になってしまったので、お詫びに何か送るといっていたわよ」と告げられた。

最初は事情が飲み込めなかったが、つぎにファクスが届いて事情がわかってきた。須藤弘子さんは足利商工会議所女性会会長で、昨年から足利花火大会のコンクール審査員になった人である。

私は昨年の花火大会のあと、拙著「反応性化学物質の応用―花火からエアバッグ、宇宙ロケットまで―」と三戸岡道夫「二宮金次郎の一生」を贈った。ところが、この「二宮金次郎の一生」を足利法人会女性会の間でまわし読みしていたところ、行方不明になったということであった。

次ぎのファックスでは行方が判明したことを伝えてきた。それは、最後に本を預かった方が最近なくなられたということであった。

そんなことで二、三の文通の後、弘子さんの息子さんの話が出てきた。愛息須藤哲史さんは、足利高校、埼玉大学を卒業後、ソニー生命（株）に勤めた。そして北海道出身の娘さんと親しくなり結婚して北海道に渡った。

そして哲史さんの奥さんの親元の北海道温根湯温泉にある観光ホテル（株）大江本家の常務取締役として営業を任されている。大江本家の女社長は、北海道ではじめての女性商工会議所会頭だそうである。

須藤弘子さんの最後の話は「息子はいずれ呼び戻すから、先生その前に一度息子のところに行って見てきてください」というものであった。

私はもの好きなので、まず行ってみようかと思った。しかし、北海道の一か所だけに行くのもどうかなと考えた。考えてみたら、私が学長をしている足利工業大学の

異色の卒業生が北海道に二人いる。梶谷恵造佐原町長と舟橋泰博羽幌町長である。三箇所をまわってくるのなら、北海道旅行も名目が立とうというものである。

私の予定表を調べてみると、八月二十九日から九月二日までが空いていることがわかった。一日の余裕をみて、八月二十九日から九月一日までの四日間を旅行日にきめた。

早速、須藤哲史、梶谷恵造、舟橋泰博の三氏に手紙を書き訪問の可否を打診した。そして、ＪＴＢツアーズ足利に電話して、旅程を組むことを依頼した。一次案ができた。この一次案を上記三氏にファックスした。

須藤さんからは八月二十九日に女満別空港まで迎えに来る、梶谷さんからは八月三十一日夕方に接待するとのファックスが返ってきた。

次ぎに旅業者との間で旅程の具体的な検討をした。ＪＴＢが最初に提案した温根湯温泉の旅館は温根湯ホテルとなっていた。訪問先が大江本家の須藤さんなので、温根湯ホテルは予約をキャンセルしてもらった。又、航空機以外の交通機関はすべてタクシーを予約してもらったが、バスなどがあることがわかったので、タクシーの予約はすべて解約した。そして、留辺蘂（るべしべ）―旭川間の高速バスを予約した。

羽幌町の訪問は時間的・距離的に私の体力限界外であることがわかったので、取りやめることにした。羽幌町長の舟橋さんには、ただちに電話してこのたびは行かないことを伝えた。

そのときの雑談で、「舟橋さんと梶谷さんは共に北海道の町長で足利工業大学の異色の卒業生であるので訪問することにしました」と告げた。すると舟橋さんは「そうですね、私は足利工業大学大学在学中も異色でしたから」といわれた。確かに、舟橋さんは在学中に二年留年している。私は「私も大学に入るのに三年浪人しています。舟橋さんは私よりましです」と言って、二人で笑った。

今回は羽幌訪問はできなかったが、札幌から羽幌に高速バスで三時間四十分で行けることがわかったので、次ぎの機会にかならず舟橋さんを訪ねようと思った。

ＪＴＢツアーズ足利の秋山さんのおかげで、新しい旅程表ができあがった。

八月二十九日：自宅―（徒歩）―新越谷駅―（空港バス）―羽田空港―（ジェット機）―女満別空港―（須藤哲史さん出迎え車）―美幌峠―津別峠―温根湯温泉大江本家（泊り）

八月三十日：大江本家―（高速バス）―旭川駅―（タクシー）―旭川空港―（プロペラ機）―函館空港―（タクシー）―大沼プリンスホテル（泊り）

八月三十一日：大沼プリンスホテル―（タクシー）―佐原町役場―（タクシー）―大沼プリンスホテル（泊り）

九月一日：大沼プリンスホテル―（タクシー）―函館空港―（ジェット機）―羽田空港―（空港バス）―新越谷駅―（タクシー）―自宅

八月二十九日雨。九時四十分にタクシーを呼んで自宅を出る。羽田空港行きバスの出発は八時十五分である。道路は空いていて、九時三十分に羽田空港に着いた。十時四十五分発ＪＡＬ一一八三便に乗り、十二時二十五分に女満別空港に着いた。

空港には約束どおり須藤哲史さんが車で迎えに来てくれた。「美幌峠に言ったことがありますか」と聞かれたので「ありません」と答えた。そこで、美幌峠経由で大江本家に行くことになった。途中の車の中で、須藤さんの来歴、大江本家の話、足利の実家の話、などを伺った。

須藤さんと大江本家のかかわりは、須藤さんが大江本家の娘さんと結婚していたので、その縁で大江本家で働くことを奨められたのではないかと、私は想像している。

大江本家は由緒ある温泉旅館である。先祖は山形の出身である。山形県には大江という地名がある。大江家の先祖は明治時代に屯田兵についてきて、温根湯に来た。そして温泉旅館の免許を得た。

大江本家旅館は堅実な発展を続け、現在の近代的な温泉ホテルに成長した。現社長大江マチ子さんは北海道で始めての商工会議所会頭である。また、須藤哲史さんは義兄の専務と協力して、大江本家にＩＳＯ９０００取得をもたらした。

須藤さんの足利の実家は、大正時代にお祖父さんが始めた農具店で、今はお父さんとお母さんがやっておられる。お母さんは足利商工会議所の女性会会長で、そんな関係で足利花火大会のコンクール審査員である。

美幌峠では、須藤さんに奨められて昼飯代わりに、名物の揚げ芋を食べた。確かに美味かった。腹ごしらえができて、美幌峠からの屈斜路湖の景色を堪能した。対岸の山々と島の緑が湖とマッチして美しい景色をかもし出していた。

美幌峠をいったん下り、間道に入り、津別峠に行った。津別峠は美幌峠より高く、別の角度から屈斜路湖を見下ろすことができた。美幌峠から見た屈斜路湖と甲乙つけがたい景色であった。後ろを見ると目の前に雄阿寒岳がそびえ、その後ろには雌阿寒岳が遠望された。

しばらく景色を楽しんだ後津別峠をくだり、温根湯温泉大江本家に向かった。北見市街で左折し国道三十九号線に入ると、大雪山系の武利岳が遠望された。その手前には三角形の北見岳（北見富士）が見える。

やがて瑠辺蘂を過ぎ、温根湯温泉についた。ここで須藤さんは親切に付近の名所を案内してくれた。道の駅とシンボルタワー果夢林、キタキツネ牧場、大江本家経営の温根湯国際カントリークラブ、エゾムラサキつつじの大群落のあるつつじ公園などを車で回ってくれた。この

辺では五月連休の頃桜とつつじが同時に咲いて、素晴らしい季節を迎えるそうである。大江本家には、須藤夫人の提案で温室花壇が作られている。良い試みだと思った。

四時ころ大江本家ホテルに着くと、先ず温泉に入った。少し疲れて体が火照っていたので、露天風呂が気持ちよかった。きれいな空気と緑の木々に囲まれ、涼しい風がとおる、さわやかで清潔な露天風呂はなかなかよいものだと思った。

部屋に戻り窓を開けてベランダに出ると、北見富士の三角形が見える。早速写真をとる。

五時半に夕食を頼んだ。ビール一本と冷酒三〇〇㎖を晩酌として食事を始めた。北海道名産がすべて出てきたのではないかと思われる新鮮な魚介類すべてが美味かった。

残念ながら、老齢の私の現在の体力ではすべてを食べ尽くすことはできなかった。全部を少しずつ突っついた。それでも食べ過ぎて翌朝は下痢したが、満足であった。

朝食は七時に部屋でとった。朝食もデラックス和食であった。残念ではあるがあとのことを考えて少しずつ手をつけて終わりとした。

八時から三十分間散歩をして、八時三十分にホテルのロビーで須藤さんと会い、それから奥さんと大江マチ子社長を紹介された。私が須藤哲史さんを訪問したいきさつや、母親の須藤弘子さんの話題を話した。大江社長からは大江本家の経営についての話を伺った。そして四人で記念撮影をした。

九時一分、温根湯温泉発旭川駅行き高速バスに乗った。北見富士を右に見て過ぎ、石北峠を超えて、層雲峡を抜け、旭川駅に着いた。直ちにタクシーで旭川空港に向かった。

旭川空港ではチェックインをした後、空港レストランで海鮮丼を食べた。イクラ、サケ、イカの乗ったどんぶりめしは、種が新鮮で美味かった。生ビールを飲みながら、肴は全部たいらげ、ご飯は半分残した。

乗った飛行機は双発のプロペラ機で、飛び立ってうとうとしているうちに、函館上空にきていた。函館上空は晴れていて、函館山と函館市街がみえた。

函館空港からタクシーで大沼プリンスホテルに向かう。約一時間でホテルに着き、直ちに温泉に入る。ここでも露天風呂が心地よかった。

五時にすしバーに生き、北海道名産の魚貝の刺身を肴に日本酒一本を飲んだ。その後ですしを少しつまみ、ビールジョッキ一杯を飲んだ。部屋に帰ると台風関係のニュースを見て、寝た。一昨年から頻尿口渇症（ドライマウス症）のため、夜中に約二時間起きに目がさめ、トイレに行くようになった。その後でポカリスエットを飲む。最近では慣れてきて気にならない。

九月三十一日六時三十分起床、七時朝食。その後温泉に入り朝寝する。絶好の休養日となる。台風十六号は午過ぎに北海道に上陸する公算が大となる。しかし、ホテルの部屋の窓から見える木々はほとんど揺れておらず、台風接近の実感が湧かない。

十二時にホテルのレストランでランチをとり、部屋でこの旅行記の一部を書く。十四時二十分にタクシーを呼んでもらい、佐原町役場に向う。既に空は明るくなり、台風はそれたか、通過した模様。

タクシーの運転手がいろいろ説明してくれる。木地挽山が眺望絶佳であり、駒ケ岳をはじめとして、鳥海山、青森、江差、室蘭、函館がすべて見えるという。明日寄ってみようかと思う。

佐原町に入り、道路の両側にきれいな花の咲いた花壇が続く。十四時四十五分に佐原町役場に着く。町長室で梶谷町長が迎えてくれる。

昨年梶谷町長が足利工業大学を訪問してくれたときは、あいにく私はよんどころない先約がありお会いできなかった。これでとりあえずお返しができた。町長に執務椅子に座ってもらい、私はその横に立って、町長秘書に写真をとってもらった。これで砂原町に来た目的は達せられた。

町長は忙しい。その日も夕方町民のお葬式が入ったそうである。十八時半を過ぎれば帰ってこられるから、それから一緒に夕食をどうかと誘われた。しかし、私は夜に弱く、またそれまでに北海道名産を食べ過ぎていたので、お招きを謝辞した。

町長室では一時間ほど歓談した。台風襲来ということで当日町役場の会議はなかった。私にとっては恵まれたときとなった。

梶谷さんは二年前に町長に立候補して当選した。そして町民のために尽くしてきた。その町長当選直後に隣町の森町との合併の話が持ち上がり、来年四月には佐原町と森町とは合併する。梶谷町長は淡々として合併に協力するという。佐原町の人口は五千人、森町のそれは一万五千人である。事実上の吸収合併である。

佐原町は、後ろに駒ケ岳の双子峰佐原岳を背負い、風光明媚なところである。道路の両側は美しい花が植えられ、美しい町である。この花は、町民全体のボランティア奉仕によって維持されている。

佐原町には砂崎という砂浜の岬がある。ここには天然記念物のシロハヤブサが飛来する。ここに発電用風車をつくるという話もあったが、シロハヤブサの飛来地ということで風車建設は沙汰やみとなった。

駒ケ岳は昭和四年の大噴火によってその山容を変えた。今でも噴火の可能性は残されている。そのために佐原町には緊急避難用の港の建設が計画されているそうである。自然の脅威は、この美しい町にも存在した。

佐原町は海の自然に恵まれている。帆立貝、たらこ、その他の新鮮なおいしい魚介類が豊富に取れる。これらの魚介を積んだ保冷車は佐原町から高速道路を通って一直線に築地市場まで行くそうである。足利までそれらを届けるのに手間はかからない。この旨足利の商工会議所会頭に伝えるように頼まれた。

帰りにはその名物のホタテとタラコを土産に持たせてくれた。翌日家に帰って、すぐに家内と共に食べると本当に美味かった。

佐原町役場にいる間に天気は回復に向かい、晴れ間が出てきた。町役場からみた佐原岳は穏やかなたたずまいで、右の肩の上に駒ケ岳のとがった峰が少し顔を出していた。帰りのタクシーで駒ケ岳の周囲を半周した。山容が向きによって変わる。西側から見ると駒ケ岳と佐原岳の中間はえぐられたようになっている。おそらく昭和四年の大噴火でできたのであろう。

大沼プリンスホテルにもう一泊し、翌朝タクシーを呼んで、木地挽山経由で函館空港に行った。残念ながら天気があまり良くなく、眺望もいまいちであった。昨日の台風の余波で山頂の風が強く、つかまるところが無いと吹き飛ばされそうな勢いであった。

函館空港では函館ラーメンを食べてから、機中の人となり、羽田空港に帰ってきた。

私の北海道一人旅は無事終わった。台風十六号の真下を通ったが、このときは北海道は被害はなかった。しかし、次の台風十八号では北海道や青森も大きな被害をこうむった。

りんごの栽培が特に盛んな津軽地方では、落果被害が一～三割に及んだ。被害のりんごを大手スーパーのイオンが特売するという新聞記事も注目を引いた。

九月九日に須藤哲史さんからメールで「北海道便り（04年9月号）」が届いた。

今回の台風十八号では、北海道は大きな被害に見舞われた。大江本家でも停電で泉源からの温泉の供給がストップした。しかし、夜八時過ぎに復旧した。敷地内で倒木が数十本あった。

しかし被害だけではなかった。国道三十九号線の石北峠が通行止めになり、予約なしのお客がどっと来た。二百人以上のお客が増え、混乱したが、夕食も無事提供でき、何とか対応できた。

梶谷恵造夫妻は保健貢献で全国表彰され、九月二十二日に上京した。その折に夫人の故郷である足利に立ち寄った、関係が集って楽しい時を過した。

楽しい旅行でお世話になった皆さんに感謝します。

残暑見舞い（十四行詩三部作）

松下壽男

日本語教室

「もし、息抜きが必要でしたら・・・」
「いえ、いつでも息抜きですから。」
間髪入れないあなたの拒絶は
折からのすず風のように微笑みました

息の抜けないあなたですから
あなたに教わるトラヴェソっ子に
思いきり母国語で飛び跳ねられる
となりをお貸ししたかったのです

いつも息抜きというのなら
あなたはあまりに無防備だ
いつでもわたしが誘いましょう

ですから、話は終いまでお聞きなさい
でも、あなたの利発なつっこみが
ぼけの頭に快感なのです

愁え顔

「話は終いまでお聞きなさい。」と
私があなたにさとしたのは
中途半端な手紙に添えた
あやふやな詩の中でした

あなたに心を開いてほしいと
私がことばにたくしたのも
惑う思いをつたえたい
あやふやな心中でした

すず風と陽ざしにさらされて
立ち枯れていく花園のように
拒絶を恐れる私の心は

あなたに話しかけすらできないままに
あやふやな秋の陽の仄めくような眼ざしに
あなたの愁えを読み取るのです

小さな心に

「けっこうです！」
心の扉を閉ざしてしまったあなたに
話しかけることすらできないまま一年が過ぎて
私は人とは分かり合えないものだと知りました

いつでもだれにでも開け放たれた
心の窓すらもたない勝ち気で怖がりなあなたは
天の風からも人の道からも
自分自身を遠ざけようとするのでしょうか

せめるようにしてことばを放つ
扉を開いたあなたの心は
一瞬でさえ悲しみの色にうつります

私の心に開いた大きなうつろは人の悲しみで
いっぱいですから無心になっても棄てられない
こうして私はまた人というものが分かりました

短歌

行雲流水（七）

石黒修身

洞爺丸遭難してより五十年
　千余の御霊海に鎮まる

五十年を経て風化せしか洞爺丸
　津軽の海に沈みし悲惨

七重浜千余の亡骸茶毘せしを
　偲べば御霊今も啾々

ふる里の巾広き道を往き来せり
　いま札幌はリラの花どき

清貧を説きて市井に生きし作家
　中野孝次逝くいと密やかに

犬と碁を愛でて清貧説きし作家
　酷暑の午后にその訃を聞けり

盂蘭盆会僧は棚経早々に
　五輪に触れて疾く辞りにけり

狼煙崎・能登北端の丘に佇ち
　台風余波の荒海を見き

最北の天守残れる松前は
　殷賑の跡さびさびとして

馬子唄が海を遡りてこゝ江差
　「追分節」は潮風に乗る

素朴なる浜言葉恋い道南の
　さびれし町を訪ね歩きぬ

今もなお潜りて貝を獲るという
　和倉の宿の仲居頭は

朝ごとに窓辺に寄れる囀りは
　亡母転生の鳥にあらずや

はらからの回忌いくつか長月は
　暑さ残りて彼岸花咲く

慈愛もて吾が短歌を評し賜いける
　島田修二逝く秋を孤独に

まんじ語録（その一）

新井宏

社員は一人も止めさせない、というのは、言葉としては美しいが、殺されるか半殺しにあうか、どちらかを選べ、というに等しい選択だった
（75号、瀧澤中、茜色の翼）

酒は古詩の時代からよく詠まれたが、茶は中唐以降に詠まれるようになった
（75号、鯨游海、潮騒録）

父祖の地忘じがたし……しかし、失望の二字を記録する結果を残し、都市化に失なわれようとするものへの単なる感傷旅行に終わった
（75号、大和禎人、わたしの「父帰る」）

因みに男もののさる股はえて股と呼んでいて、……左右の布が重なり合っているだけで、踏んばれば自然に布が割れて用がたせたのです
（75号、鈴木昭三、ねずみ小僧丸楠）

あのパイナップルは不思議な植物だ
あれは珍獣アルマジロの変異かも知れない
（76号、青木昭成、その頃あれはアルマジロ）

わかりきったことだが、戦闘は攻撃に出ない限り勝ち目がないということである
（77号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

理論や学問は完成度が高ければ高いほど、現実に運用するといびつになる
（77号、瀧澤中、大山巌外伝）

鷹狩りの最高の獲物であるツルが一羽もとれないと、将軍の御機嫌を損じるのを恐れて、百姓たちは鶴代という野生のツルを餌付けする場所を考え出した
（77号、太田和貞、笹ケ崎村）

異人さんはね、めっぽう女には優しくてね、みんなここへ来たては気味悪がっていた子がね、今じゃ、誰もが異人さん相手じゃなきゃ嫌だっていっているほどなんだよ
（77号、相原精次、開港・港崎心中）

その静けさというものは、静寂とか、シーンとかいうような生やさしいものではなく、『音のない異界』へ自分だけが閉じこめられてしまったような、異様で、凄絶な孤独の世界なのだ
（77号、三戸岡道夫、老春繚乱－幻聴－）

艶なるものの本質、根本にあるものはだ、ヌードなんぞと云うものよりじゃ、麗しい人が正装して端座している姿にこそあるものじゃぞ
（77号、鯨游海、潮騒録）

たまたま下賤はこの男だけかも知れぬ、だが、この輩がいまは正義をかざしている、それが恐ろしい
（77号、大和禎人、勤皇トライアスロン）

〃いいかげん〃っていうのは、すばらしいことなんだよ。瑠里だっていつも使っているじゃないか。ママに〃お湯の湯加減は？〃て聞かれたら、……
（78号、森実与子、月の海辺の人形たち）

妻を伴い、私はその時
おおかたの人達がする振舞いでいた
落ち着きを持たず
もちろん仕事を持たず
（78号、青木昭成、旅行）

その間、大名行列のような行列の形式をとったのは、松平村を出てから東海道までの間と、江戸に入って品川の宿から麻布の屋敷までの間だけで、途中は主従八人だけの旅だったことがわかる
（78号、三戸岡道夫、御参府中日記のこと）

私が物心ついてからのことを、ずっと思い返してみると、どうも、最初の思い出は、寝小便だったように思う
（78号、紙透寛夫、紙透小太郎の一生）

結句詩魔とは、詩を異常に好み、そのとりこになった人を云う。ここでは作者の私を指す

は動くものに食指がのびる。当然のことである。浮世絵師に代わって、人形師の出番である。どんな有名な浮世絵師でも、裏では必ず秘画の製作にいそしんでいたように、人形師たちも裏ではからくり組人形の製作をきそっていた

（80号、三戸岡道夫、人形師奇譚）

泥めんことは、江戸時代の中期……に登場し、子供のおもちゃとして一文駄菓子屋で売っていました。今のめんこは紙ですが、その頃は粘土の素焼きでした

（80号、紙透寛夫、泥めんこ）

むしろ、夫がもっと不細工であったらと思うくらいです。醜悪なら、きっとそれを埋め合わせようとして、気がきくとか愛嬌があるとか、面白いことを言って笑わせるとか、何かしらユニークな一面を持ち合わせているはずです

（80号、森実与子、可もなく不可もなく）

そして、しばらく無言でいたが、
風が二人の頬を撫でた時、「明日、だ、そうだ」
ポツリ、と立花が言った

（80号、瀧澤中、空に祈る）

（78号、鯨游海、潮騒録）

能力の無い者が生き残るためには、中立・傍観しか無いのだ

（79号、瀧澤中、さち）

家慶の正室は……文化十年に竹千代を生んだ。正室が第一男子を産んだことは稀有なことであった

（79号、太田和貞、笹ケ崎村）

女は大きな瞳にいっぱいの悔し涙をためて、刀を静かに、い草の臭いのする畳に置いた

（79号、瀧澤中、さち）

かって、実朝殿は海に乗り出そうとした。痛ましくも傷ついた歌人の魂は、ただひたすら大波のなかに、雨滴のように漂い、戯れようとしたのではないか

（79号、島津隆子、北条時宗とその時代）

俗説には権威がない。しかしより合理的であれば、何れは定説にとって替る。正論は権威に勝る

（80号、鯨游海、論語の解釈・二千年の誤りを糾す）

世の中もその頃になると……秘画にも飽がきた、次

人の一生はまるで樹木の下草のようなものだ。この庭の水引草のように、小さな花をつけてひっそりと咲いても、一陣の風が吹けばあとかたも無くなる

（80号、島津隆子、北条時宗とその時代）

……全ての動物は、性交のあとに悲し……

（81号、森実与子、六月の雨）

いつの時代でも、命令する者はいとも簡単であり、命じられる立場は苦しい

（81号、島津隆子、北条時宗とその時代）

何か気の利いた話でもしなければ、そう思うとあせりだけが先走り、逆に、思うような言葉が出てこない。喉はカラカラに乾き、体は固くなっていた。心がどきどきして、ひたすら前を向いて歩くことだけしか、頭になかった

（81号、森実与子、六月の雨）

テレビは、大体三十分か一時間、映画は二時間、食事も一時間、山手線一周は一時間四十分、セックスにしても、一時間以内で終わる。結婚だけが死ぬまでなんておかしいし、契約としても長すぎるわ

（81号、森実与子、六月の雨）

私は、国家意識のない素人に国政を預ける勇気はありません

（82号、瀧澤中、政治家の条件）

世の中の人たちは書物を読む時、まず文章を読んでから、その後で内容を理解しようとします。しかしわたくしはまず最初に、天地大自然のどの道理に当るのであろうかと考える

（82号、三戸岡道夫、報徳の人二宮尊徳）

人に善行を施せば自ずから我が輩の心は爽快になり、……

（82号、鯨游海、潮騒録）

わたしは詩人ではない
これが、詩であるわけがない
そう言いつつ、詩を創る

（82号、青木昭成、詩　あどりぶ）

多少の罪悪感が無いでもないが、金融界とはこんなものだ。この時代に困った奴に金なんか貸す方が無能だ

（82号、中泉聖司、悪流修羅）

では、本当の意味で家康から学べるものとは何か。それはズバリ、下請け企業から脱皮して独立を果たすという、ただその一点である
（83号、瀧澤中、徳川家康）

物を担保に金を貸すのではなく、人の心を担保に金を貸すのである
（83号、三戸岡道夫報徳の人二宮尊徳）

「誰もおらんのか」そう声を荒げると、「よし、それならば本官が行こう」
（83号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

未だに利己的で無謀な論理に気が付かない、この幼稚な発想の男が経営管理者として認められていることこそが不幸を生む今の時代なのだろうか、悪流に気付かないのも現代なのだ
（83号、中泉聖司、悪流修羅）

自分は営業が下手くそだと思っている人にこそ、私は商売をやってもらいたいのです
（84号、瀧澤中、マヨネーズの神様・中島董一郎）

神様は、予知能力しかないってこと
（84号、森実与子、お告げ）

クールな目で男を見てしまう性癖。そして自分の内面に、他人にズカズカと土足で踏み込まれることが何よりも鬱陶しくて、一人でいる方が気軽に感じられたのだ
（84号、森実与子、お告げ）

『桜花』も『回天』も、目標に命中する直前に搭乗員が脱出することのできる装置をつけるという条件で承認されたのだが、そんなことが不可能なことは誰もが承知で、結局は建前に終わり……
（84号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

「監獄は人生の大学である」大野はその生涯、三回も獄につながれている
（85号、瀧澤中、本には書けなかったこと）

賄賂の形態はどう変わってきたのか。結論から言うと、明治時代の「単発型」から、現代は「恒常型」「連続型」になった
（85号、瀧澤中、本には書けなかったこと）

つまり、これまでの出撃は九死一生の「決死行」であって、十死零生の「必死行」ではなかったのだ
（85号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

あの雪印が……何たる事か狗の肉を売るのに牛の頭の看板を懸げていたとは
（85号、鯨游海、潮騒録）

この宇宙を造った天地創造の神が、そんなに簡単に、いろいろな人間のところへ降りてくるのだろうか、それはまやかしの神様だ
（86号、森実与子、お告げ）

「止めよう」と思った気持ちは、同時に、「止めてやれ」という気持ちにも通じていた
（86号、三戸岡道夫、哀愁武士道）

疱瘡の治療法がはっきりしていなかったこの時代に、赤い色にすがった親の姿があわれであり、その親心が悲しい
（86号、太田和貞、黒船）

関係の無い民間人を殺して刑務所に入れば、自分の組からも相手の組からも殺される心配は無い
（86号、宅見勝弘、都市銀行『爆発物処理班』）

木洩れ日に光るしどけない御許丸の白い肩や胸が、赫く燃え立ち、いつまでも網膜に浮かんで消えないのだ。その秘色めいた像に、いつしか衣を解いた裸身が重なり、今にも現実のものとなって、手の届きそうな所にあることを竜丸は実感する
（86号、島津隆子、和泉式部譚）

散華のときが長引けば長引くほど、生還のたびに頭を擡げてくる生への執着が抑えきれなくなって、地獄の日々に絶えつづけねばならず……
（87号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

自省せよ矛振りかざし示威をする
傲れる思想バクスアメリカーナ
（87号、石黒修身、行雲流水）

確かにバブルにより金融機関と大半の企業・個人が資産デフレで体力を消耗していたが、国内の需給アンバランスは「バブルに関係なく以前から」顕在化していた
（87号、隆恵、日本の金融システム再建への提言）

換言すれば、金融機関は被害妄想症と自閉症という強度の心身症を患っており、この自然治癒を日本経済は待つ余裕はない
（87号、隆恵、日本の金融システム再建への提言）

それが北の方の最後の抵抗でもあり、せめてもの女の意地でもあるように、わざと帥宮に寄り添って文武百官への顔見世を行った
（87号、島津隆子、和泉式部譚）

酒も琴も未だ楽しんでいないのに既に詩人であるこの私はすっかり酔って了った
（87号、鯨游海、潮騒録）

許慎の時代は甲骨分も金文も出土が稀だったのに対し、二十世紀になり甲骨文や金文が大量に発見されたお陰だと白川は許慎を庇う。二千年を経て学問が一歩前進した
（87号、鯨游海、千篇萬律）

電撃結婚した若い歌手が「女は決断する度に幸せになる……」と告白していた
（88号、森実与子、遠い町）

だいたい、遊園地でジェット・コースターを好むのは男性より女性が多いという
（88号、瀧澤中、七人の代議士）

であるならば、初めから醒めていることこそ、放心と悲哀から逃れ得る唯一の道と思われます
（88号、島津隆子、和泉式部譚）

吾が短歌にいまひときわの深みなし
ただ黙然と名歌集繰る
（88号、石黒修身、行雲流水）

一藩の君主が決意の脱藩を敢行した。あろうことか、紛れもなくそれは事実であり、戊辰戦争に際し、自ら下した決断であった
（88号、大和禎人、藩主脱藩）

通常任務の爆撃行なら偵察員は必要であるが、特攻は零戦が一人なのだから艦爆も一人でよかったはずなのだが、生死をともにしてきた組の絆は条理を超越していた
（88号、千坂精一、体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと）

自分が死んだ後、こんな女のことなど誰が思い出してくれようか、せめて生きた証にものを書くことの意味をてしまうものか
（90号、島津隆子、妖花藤原薬子）

利益は形としてはっきり眼に見えるものじゃない。……たとえ計算し直してみたって、その数字もやはり計算されて出てきた数字にすぎないのだ。どちらも数字である。どちらが正しいという根拠は、どこにもない。『正しいと信ずること』、それが正しいということだ
（90号、三戸岡道夫、ソクラクレス）

はらからの訃に急げども
連絡線とめて吹雪は佐渡に渡さず
（90号、石黒修身、行雲流水）

昭和二十二年二月十三日……
憲兵大佐　中村通則　死刑　絞首
中尉　紙透小太郎　無期
曹長　市橋重男　無期
軍曹　笹倉林治　死刑　絞首
軍曹　岡崎和明　無期
……有為の笹倉、一条、風戸の極刑は余りにも残酷なり
（90号、紙透寛夫、紙透小太郎の獄中日記）

すると、二糎から三糎ぐらいの、かなりの量の縮れた

想い、今こそ情熱を傾けて書くことだと、式部は実感したのだ
（88号、島津隆子、和泉式部譚）

わしは仏罰などは信じない。そもそもこの世は、正法などでは救えない。この世は外法によって救うしかないのだ
（89号、三戸岡道夫、妖星）

ためらいつつ出す初めての無料パス
どうぞの声にホッとして乗る
（89号、石黒修身、行雲流水）

ところが、映画にまつわる場所や旧跡は何もないのだった。映画は全編、米国ハリウッドで撮影されたものだからである
（89号、大和禎人、モロッコ幻想）

正文を何語にするかとの交渉がおこなわれなかったため、……双方が正文と考えた条約文には、自国側の署名のみという皮肉な結果となった
（89号、太田和貞、黒船）

女というものは自分の美しさのゆえに犯される行為ならば、それがどんなに悪徳に満ちていても、自らを許し

毛髪が、和紙に平らに貼りついていて、私の吐く息に、その一本一本が、まるで生物のようにふるえるではありませんか
（90号、鈴木昭三、さもないさん）

カエデの老木に与えたゆうべの残飯が、猫の知恵と生きるための執念で食われている。老木はこれを拒む術を持たないし、自分を犯す何ものにも恫喝を与えるための声も出ない
（90号、中泉聖司、貸しはがし）

おどろいて眺め廻すと、白鳩たちもじっとこちらを見据えていた。すると、一瞬その数十羽の白鳩が、特攻で散華した先輩たちの蒼白な顔貌に変わった
（90号、千坂精一、白い鳩）

孤独や独善、あるいは仲間うちにしか通用しない合点に陥りやすい気質は、その極小の詩型を意識すればするほど頑なになるに違いない
（90号、青木昭成、芭蕉のこと）

品物は自分の金で買って触って時には使って見て本当の良さが解る
（91号、忠内正之、古い物・遠い夢）

歴史は文学が作り伝えるものか
（91号、鯨游海、潮騒録）

無邪気な童女を装ってみても、お互い心の奥深くには、触れればすぐにこぼれ落ちてしまう涙のしずくを隠しもっている
（91号、島津隆子、小町散策）

だから堺に二万貫を課したのは、二万貫の金が欲しいからでなく、それを機に、堺を自分の支配下に組み入れたいのだった
（91号、三戸岡道夫、妖星）

わたしも歴とした年寄りですからね。ことし、六十九歳ですからね。なんなら長崎産婦人科病院に私が入院して、その入院費用を母さんが払ってくれますか
（91号、太田和貞、丙午の女）

わたしは、『ボケるが勝ち』と思っているのよ
（92号、太田和貞、丙午の女）

重き賞受けし女らはうら若く
あっけらかんと感想を言う
（92号、石黒修身、行雲流水）

ムッシ桂木、奥さんは一人か
（92号、太田精一、遥かなるカメルーン）

好きなものは好き、嫌いなものは嫌いと割り切った態度を、すっきりしていて、良いと思うのは、直接かかわりのない人々
（93号、島津隆子、小野小町物語）

情事はいつも拙く哀れである
（93号、島津隆子、小野小町物語）

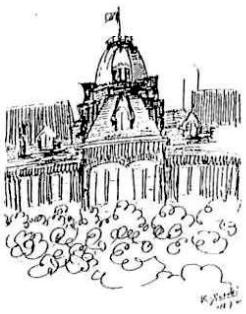
上空で開く花火はあまり高く上げないほうがバランスが良い
（93号、吉田忠雄、春のミニ花火ショー）

入所者が逃げ出したら大変でしょう。……逃げ出す？逃げるのではなく外出するのです
（93号、鍋屋次郎、ボランティア活動に携わって）

過去を現実に引っ張ってみると、案外たいしたものではないのかもしれない
（93号、森実与子、錯覚）

前部族長の家の前の通りを挟んで左右対称に茅葺の小さな家が連なっている。左右合せて十軒余りある。桂木は始め小作人の家かと思った。ところがそれらはすべて奥さん達の家なのだ
（93号、太田精一、遥かなるカメルーン）

ここまで徹底して剽窃すると、剽窃が剽窃でなくなる
（94号、新井宏、まんじ語録その一）



小野小町物語（三）

島津隆子

十一　噂話

ある日、縁に出て一人ぼんやりと、もの思いにふけっている宗貞の処に、六位蔵人が訪ねてきた。

「少将殿、近頃何かと閉じこもって考え込んでおられるご様子、心配してまかり出ました」

蔵人の言葉は丁寧だが、その顔は何やら意味ありげな様子である。

「何も考えてなどおらん」

「いやそれならば結構でございますが、どことなくお顔の色がすぐれないご様子……」

蔵人のしつこい追及に、いささかむっとした宗貞は応じた。

「何でもないわ。何用があって参ったのじゃ」

「用と言えるほどのことではござりませぬが……」

「わかった、何でもかまわぬ。退屈しておる処じゃ、話してみよ」

せかせる宗貞に、

「……それでは……」

と蔵人は宗貞のそばに進み寄って、小町の話をはじめた。

天皇家と親戚に当る宗貞は、その才幹を以って天皇の信用も厚かったので、何かにつけて取り入ろうとする連中が多かった。中でもこの蔵人は宗貞のご機嫌をとるのに熱心であった。

宮廷内の新しい話題を誰よりも早く宗貞の耳に入れるのはきまって彼である。

歯が黄色く、何日も当らない口髭が伸びて薄汚れているこの男の口の端に、小町の名前が出るのさえ、宗貞は不快を感じる。だが、そこは右近衛少将である殿上人らしく、白皙の顔に微笑を漂わせて、蔵人の話に耳を貸す礼儀もわきまえている宗貞である。

この薄汚い男も結構利用価値はあるのだ。このような男を間者として宮中に泳がせておくことも出世のためには必要である。

宗貞は次期近衛中将の座を狙っている。その座さえ占めれば、やがて近衛大将、内大臣の地位は、自分の才覚を以ってすれば、必ず手中にすることができると確信している。しかもそれは近い将来にである。

蔵人は言った。

「あの女は、本当は小野佐大弁の娘でございますそうで……」

小野佐大弁とは自分よりも位の高い参議小野篁（たかむら）のことである。

才覚一世に秀でているが、性格が偏狭で人を容れず、政治家としてはすこしの信望もなかったが、この篁がまだ文章生（もんじょうせい）の頃のことである。

ちなみに当時の政府は律令体制をより強固にするため、その役割を果す官吏養成機関として、大学・国学を設け従五位以上の子弟の中から、秀才・進士（秀才は学問が嫌いでも、文字通り生まれながらの秀才。進士は秀才でなくても学問が好きで好きでたまらない者）のコース別試験によって官吏に登用していた。

そこには儒教の経典を研究する明経道、そして史書・漢文学を修める文章道があって、学生を教授する博士が置かれていた。菅原道真はこの文章道の博士である。

学生の篁は異母姉と恋をした。娘の母は美しい姉娘を将来宮中に入内させる心算だったので、偏屈な篁との恋愛を知ると、驚き慌てて娘を篁からかくしてしまった。

だが、その時すでに篁の子種が姉娘の腹に宿っていたことを当の篁は知らなかった。

やがて、姉娘は女の子を産んだが、産後の症状が悪化して死んでしまった。女の子はひそかに他家にやられて育てられた。それがすなわち小町であると、どこから聞いてきたのか蔵人は断言するのである。

「そのような悲しい出生の秘密が祟って、噂のとおり女として生まれながらの片輪なのでございましょう」

宗貞はぷっと吹き出しそうになるのをかろうじてこらえた。小町は女も女、れっきとした女にちがいない。

あの寺での小町との一件は、さすが地獄耳のこの蔵人も知らぬらしいわい。

宗貞は会心の笑みを洩らしながら、何気ない素振りで言った。

「ほーぅ、すると篁どのも小町も、お互いに親子であることを存ぜぬのか」

「そうなのでございますよ。ご両親も亡くなりましたし、貰い育てた家でも、もちろん赤子が篁の子であるなどとは知る由もござらぬ。乳母となって一緒に他家にやられた召使が未だ生きております。その老婆が人に話しても らっては困ると、念を押して話してくれたのでございま

す」

ははーん、と宗貞は敏感にこの男が訪ねてきた訳を悟った。

要するに、この自分が小町に恋焦がれているが、小町はそのような出生の秘密を持った、私生児だから止めろ、と言っているのだ。そして、そんなことに浮身をやつすより次期近衛中将の座を射止め、自分を一日も早く出世コースに任用してくだされ、と言っているのであろう。

下心がみえみえの陰口だな。

宗貞は心の中で呟いて蔵人の顔をみた。浅ましい男だと思った。そして、もう一度念を押すように聞いた。

「篁どのはそのことをご存知ないのじゃな」

「篁は存じておりませぬ」

宗貞は軽く笑ってみせた。そして心中、この蔵人は油断のならない男だと肝に銘じる。

この男は自分の心を見抜いている。このおれが篁どのと敬称をつけても、蔵人は決して敬称で呼ばない。うっかりそれに乗り、参議に対して礼を失するようなことがあれば、おれが蔵人の意に添わないときは、必ず篁にこのことを告げ口するであろう。

当時の宮中においては身分の上下を明確にするため、敬語を用いることは絶対的な礼儀である。それを承知で宗貞が礼を失するようにわざと誘いをかけて会話を運んでいる。

要するに、蔵人は二股をかけているのだ。

参議である篁もその上の中納言、大納言をめざしている。いつでも出世の早い方に鞍替えできるよう、布石を打っているのだ。いざという時に取り入るための話しのネタを探しているのである。

篁からは近親相姦という私生児のネタを、宗貞からは篁に対する露な敵意の言質を取ろうとしているのだ。

蔵人よ、お前のこざかしい権謀術策など、この宗貞に通じると思っているのかと、言ってやりたい。

しかし、この蔵人の目論見どおり、事実、宗貞は篁には好意を持っていなかった。気質の相違からである。会えば敬意を払うにやぶさかではなかったが、心では常に嫌な老人と思っている。

だいたい、惚れた女の両親など厄介な余計者に過ぎないが、とくに篁が小町の父親だとするとかなわない気がしないでもない。しかし、それほど信用できる話でもないし、現実に親子の繋がりは切れているのだから、頭の中から篁を追放してしまえば何のこともあるまい、と宗貞は考えた。

それにしても、小町との恋愛の中に篁という好ましくない名前が割り込んできたのは愉快なことではなかった。宗貞は不愉快な話をした蔵人を軽蔑し、かつ憎んだ。

蔵人が帰ってしまうと宗貞は焦りをこらえて、ともかく小町との次の機会を待つことに決めた。いよいよとなれば、いつかのように下臈のごとく再び小町を組み伏せる機会をー。

十二　宗貞の出家

機会が来ないうちに思わぬ出来事が起きた。

宗貞が寵愛を受けていた仁明天皇が突然に崩御されたのだ。それは実にあっけない亡くなり方であった。今でいう狭心症の類であったろうか。

天皇は俄かに襲った発作に胸を掻きむしられ、脂汗を全身に滲ませた。百済国から来ていた名医も手の施しようがなく、陰陽師の加持祈祷も間に合わなかった。

仁明天皇はその時、后、女御、更衣など正室側室合わせて九人、親王および内親王など御子が二四人、御年四二歳であったことが、宮中の故書に記録されている。

天皇の御遺体は京の郊外深草の里に埋葬されたが、天皇の死によって宮廷での宗貞の地位は惨めなものとなった。次の文徳天皇は故仁明帝の長子であったが、かねてから宗貞を快く思われていなかった。

だが、それぐらいのことで臆するような宗貞ではない。天皇以下側近や重臣たちの白眼視にもひょうひょうとして、平常と変らない態度を保持していたが、ある日、まったく突然、蔵人頭の官職を辞してしまったのである。

その朝、宗貞は供の者も連れずに家を出たきり、いつになっても戻らなかった。

通いなれた五条の女のもとにも、ぷっつりと足を断った。

正室以下、家人の手をつくした捜索も空しく、失踪は宮廷内の新しい話題になった。しかし、すでに勢力を失った宗貞の行動に対して、話題以上の関心を抱く者は、きわめてわずかの人に過ぎない。

ただ、はっきり先帝の死を悲しんでの家出と判っていたので、多少のさわやかな感傷が話題の中に漂っている。常に当意即妙を得意としていた宗貞のいない歌合せの集会は、一本の歯が欠けたような淋しさがある。

その夜、歌会が散会した後で、文屋康秀が小町のそばに寄ってきて囁いた。

「少将どののご消息がわかりましたよ」

そう言われた小町はべつだん驚く様子もみせず、さりげない表情で康秀の顔をみた。

「少将どのは比叡山に登られ、慈恵上人の弟子になり、剃髪して、名を「遍昭」と改められたそうじゃ。そして、諸国修業に旅立たれたとか……」

「そうでございますか」

小町はつとめて冷静に聞き流す。

「昨日、そのことを報せてくれた者がありましてな。さっそくお屋敷の方にもお知らせしておきました」

「やっぱり……」

小町の唇から思わず深い吐息が洩れた。だが、小町をみつめる康秀の目に皮肉な匂いがこめられているのを、小町は見逃さなかった。

あのお寺の裏山での経緯が知られているはずはないが、小町と宗貞の間に特別な雰囲気があったことを康秀は敏感に汲み取っている。小町は意識し人並みの感慨を見せた。それに女の立場からの非難をいくらか含めて言った。

「お家の方々はさぞかしお辛いことでございましょう。何もご出家をなさらずとも、他に方法があったでしょうに……」

まだ居残っている人々の視線が自然と小町に集まっている。こう言っておくのがまずは無難というものである。だが、康秀の言葉にはなぜか槍先のような鋭さが感じられる。

「少将どのはあんな風にみえても、本当は一筋に思いつめるタイプなのですよ。ただ、ご自分ではそれに気づかずに、ものの奥底へは入り込めない人間だと考えておられたようじゃが」

「そうでしょうかしら、そのようにはみえませんでしたけど」

小町はあくまで惚け抜く決意を固める。

「例えば、色恋の問題にしても、少将どのはご自分を花から花へ飛び移る蜂のようだと思い込まれて、それを得意としていたようじゃが、事実はそれほど気軽に飛び歩いてはおられんようじゃった」

「そうでございますか。よくおわかりでいらっしゃいますこと」

康秀は勢いこんでいう。

「ええ、わかりますとも。蜂の他に花から花へと飛び廻る生きものには蝶もあると、少将どのは気づかれたようじゃ」

小町の胸にぎくりと槍の切っ先が当る。これは明らかに宗貞を通しての当て擦りにちがいない。それも執着をこめた言い方で迫ってくる。

小町の顔にうっすらと血がのぼり、狼狽が浮かぶ。そして、人々の視線がいちだんと注意深く、自分に注がれていることを感じる。

その時、運よく小野貞樹が二人の会話の中に入ってくれた。

「康秀どののお言葉は事実と思います。少将さまの和歌はこう言っては失礼ですが、ちっとも本音を吐いておられない。ご自分でお気づきにならない偽装の方が、実はご自分の本音だと信じておられたのでしょうね。だからあの美しい哀感も美しいだけで、どこか浮ついた頼りなさが感じられてなりませぬ」

よくぞ言ってくれたと、小町は胸のつかえが取れる思いがした。他の追随を許さない当意即妙、軽妙洒脱な歌

風に、自分と逢ってからは美しい哀感が加わっても、それは美しいだけ。その生来のものはやはり好き者としての浮つき、そして、寄り添う男性にしてはどこか頼りなさが残る。

小町が抱く宗貞という男性像をずばりと言ってのけ、しかも康秀の言葉の矛先を回避してしまった貞樹の助太刀の見事さに、小町は溜飲を下げた。

小野貞樹はこの時二一歳。少々身分は低いが、従五位下少納言である。英才の誉れ高い白眉の公達の一人だ。仁寿元年（八五一）に甲斐の国守、その後、太宰少弐を経て、貞観二年（八六〇）に肥後の国守となった人物である。

年下の貞樹もひそかに小町に憧れを抱いている一人であることは言うまでもない。

「……すると、仏門に入られたとなれば、少将どのの歌も、これからが身についた本物になるというわけでござるな」

脇から誰かが相槌を打つのを、小町は上の空で聞いた。

十三　意地悪な小町

先帝の死を悲しむあまり、それに殉じた生一本さが、宗貞の出家遁走の動機だろうという見方が、宗貞こと遍昭のためには親切である。

しかし、小町の見方はもう少し意地悪だ。

もしも新しい天皇が先帝同様の信用を遍昭に持たれていても、なお、遍昭は仏門に走っただろうか。そうではあるまい、と小町は思う。

要するに、遍昭は虚栄に満ちた男なのだ。この世の栄枯盛衰、浮き沈みは誰も免れ得ないのだから、しばらくは閑居に甘んじて、その内に開けるかもしれない運を悠々と待つのも、一つの強靭な生き方というものだろう。その勇気が遍昭にはなかったのだ。

宮廷内の主流派からはずれ、重臣たちからも疎んじられる姿を、人目に曝すことに耐えられないほどの、俗っぽい見栄坊なのだ。それゆえに、出家の発心も半ば体面のためだろうという自分の目に、狂いのないことを小町は信じた。

おそらく彼の出家も長続きはしまい。いずれ然るべき口実をもうけて俗界に戻ってくるにちがいない。

この期待は不思議と小町を安堵させた。

しかし、遍昭は戻ってこなかったのである。

小町はしだいに焦りを覚えはじめた。あの裏山の件の後、なおいっそう飢え渇くように激しく自分を求めた遍昭を、小町はなぶる愉しさであしらった。

ところが、今となると逆に、遍昭の飢え渇いた情熱が、そのまま自分に移り棲んだかのごとくである。

小町は二三日前の夜にみた夢を忘れない。
香の漂っている、どことも知れない薄暗い場所に、小町は僧の姿になった遍昭と佇んでいた。
「わかっております。少将さまは私を怨んでご出家なさったのでございましょう。けれども私はそのように冷たい女ではございませぬ。私が少将さまを避けたのは、それだけ私の気持が切なかったからでございます……」
目が醒めた小町は、夢の中の自分の言葉を恥じた。
目で見、耳で聞こえる以外の、現世のもう一つの世界を小町は疑わなかった。お互いに恋慕し合う魂と魂の交流、それがぴったりと寄り添う時の流れを小町は信じた。
あるいは、どこかの寺院でのうたた寝に、遍昭も同じ夢を見、小町の述懐を聞いたかもしれない。

それはそれとして、遍昭以外にもう一つ、常に自分を見守っている魂魄のあることを、小町は虚空に感じている。
その魂に、遍昭に対する自分の本心を聞いてもらいたい思いがある。
その魂とは、先帝の父嵯峨天皇の第四皇子基良親王の幻である。
親王は小町とのつらい別れの後、結婚するとすぐ若くして亡くなられた。だが、今なお心に深く食い入って離れない、小町の生涯の人である。
幾歳月、月日は流れても、儚なかった逢瀬は、時に昨日のことのように甦って、小町の胸は苦痛なまでにときめくのだ。

かぎりなき思ひのままに夜も来む
夢路をさえに人はとがめじ

夢路には足もやすめず通へども
現にひとめ見しごとはあらず

あの日あの時、さまざまな障害があって逢うこともままならなかった切ない心を詠んだ歌は、今も生きている。
「美しく、いつまでも美しく生きるのです」
と言って去っていった親王との別れ。そして、親王の死は小町から一切のものを引き抜いてしまったように思われる。生き残ったものは、やはり抜け殻でしかない。あのように孤高な男性に巡り会うことはもう二度とあるまい。あの方に比べればあとの男性はもうどうでもいいようなものである。
その意味では田舎出の十六歳の小娘が、群を抜く青年学者、基良親王に出逢ったことは、不幸なことであったかもしれない。
もちろん親王と小町の関係は全く人に知られずに終った。

た。
先帝である仁明天皇は嵯峨天皇の第二皇子である。したがって基良親王の兄に当る方なので、無作法、非常識、女性失格、女の機能喪失と悪口のかぎりを噂されても、小町としては天皇の好意を拒む他はなかったのだ。
それも基良親王を想うことの深さからであり、秘密を保ちつづけることで、二人の間を永遠のものにしておきたい一念からなのであった。
しかし、抜け殻にも生きようとする情熱だけは燻ぶっていて、また遍昭のような男性から好意を寄せられるとは、何とおかしなことだろう、それにしても、小町は宗貞が被った僧侶という仮面にも、悪戯心のおかしさを覚えてしまうのだ—。

十四　石上寺にて

—ああ、この声は、経文は……。
小町は耳を澄ます。
今、修行僧の読経は而説偈言にかかっている。

久己行仏道　住神通智力
善学菩薩道　不染世間法
如蓮華在水　従地而湧出
皆起恭敬心　……

「あっ、少将さまのお声か」
小町は思わず声を洩らす。いずれの歌合せの席であったか、池に浮かぶ蓮の露を見て即興歌を競ったことがある。並いる歌人たちがしきりに思案しているとき、遍昭はいともたやすく、

はちす葉のにごりに染まぬ心もて
なにかは露を玉とあざむく

蓮の葉は泥水の中にあって、濁りに染まらない心をもちながら、葉の上の露だけは汚れなき玉であると、欺きうそぶくほど気高いのであろうか。
と詠んだことを思い出した。
この歌は『法華経』の中の肝心である「如来寿量品第十六」の前品の「従地湧出品十五」の中の「不染世間法如蓮華在水」(世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し)という偈の一節を見事に和歌に詠んだものである。
その時の印象が余りにも鮮やかだったので、小町は深く記憶に留めていたのだ。
「あの読経する僧侶は、もしや知ったお方かもしれない。どんなお方かこっそり様子を見ておいで」
小町に言われた小童は走って行ったが、しばらくすると息を弾ませて戻ってきた。報告によると、
「少将宗貞さまでございます。頭は青々と剃髪しておりますが、間違いございませぬ」

抑えに抑えていたものが、小町のなかで堰を切って迸った。その力によろめいた小町は、もうそこに親王の幻も虚空も感じなかった。

あの時は手練手管の宗貞の強引さに屈服せざるをえなかった。しかし、今日という日は小町自身にも説明できない激しい内部の力に押し流されていた。抜け殻が弾力のある一つの生身と化してゆく。

小町は懐紙を取り出すと、

「お久し振りに朗々たるお声をうかがい、お懐かしゅうございます。私も今宵はお篭の予定で参りました」

岩の上の旅寝をすればいと寒し
苔の衣をわれに借さなむ

ここ大和国（奈良県）の石上寺に参篭の予定の私です。今宵はとくに寒いようなので、石の上に旅寝するのは耐え難いのです。苔のような僧衣でもかまいませんから、お借りしとうございます。

とさらさらと書き綴った。

それを小童に持たせてやると、小町は小枝の間に広がる虚空を仰いで、ふぅっと大きく吐息を洩らした。

ややあって宗貞から返事が返ってきた。折られた和紙を広げると、一首の歌が認められている。

世に背く苔の衣はただ一重
借さればうとしいざ二人寝む

俗世間に背を向けた出家の見であるゆえ、苔のように古びた衣をただ一枚、身にまとっているだけですから、お貸しするわけにはゆきません。それならいっそ、二人で一緒に寝て体を暖め合いましょう。

という宗貞らしく意表をついた返答であった。

才気と色気を残す者同士が逢うと、本気とも戯れともつかない言葉の交錯になるのであろうか。

ともあれ小町は、自分の求めに応じるかのような返歌の中に、以前の宗貞が息づいているようにも感じたが、それは皮肉っぽい軽妙さ以外の何ものでもないことを改めて確認するばかりであった。

歌にはあの裏山でみせた強引な情熱はない。一歩も二歩も退いて、半ば冷笑を漂わせながら、じゃれるような心も用意しているといった歌の調子である。

宗貞さまは出家したといっても、内面は少しも変わっていない……。嘆かわしいような、それでいて嬉しいようなもどかしさを感じるが、一目逢えば、こんな気持は吹き飛んでしまうだろう。何しろ、あの方は決して人を飽きさせないお人だから……と小町は考えていた。

かつて宮中にいた時に親しかった女官の実家が確かこの近くにある。女官の両親はすでに亡く、兄弟もそれぞれに四散してしまっていることを小町は思い出した。その家は今はただの荒れ家、廃屋になっているはずである。

当時、各地にはそのような民家が至る所に放置されていた。それがまた男女の格好の憩いの場所、秘密の場ともなっていた。

小町はその廃屋の一間を借りることを思いつき、その旨を、小童にはとうてい読解不可能なほど巧みな言葉で綴って、再度使いにやった。

今は修行僧の身の上である。それに陽もかなり西に傾いて風も冷たい。前と同じように裏山を選ぶわけにもいくまい。こちらからそんな処へ誘いをかけたなら、あんな処での味を覚えてしまった奇癖女とも思われかねない。

二度目では小童にさえ怪しまれかねない。いくら子飼いの文使いも童でも、自分の弱点を握られるのは、名誉にかけて嫌である。何としても避けなければ。

しかし、小町がどう思ってみても、かねてからの約束を今になって果すことに変りはないのだ。劣等感の漣が小町の胸に寄せ始めた。やがて、その漣が屈辱感という大波に変化してゆくにちがいない。

だが、宗貞があれほど待ち望んでいた次の機会を与えてやることには、さらに大きな意味があるのだ。

遍昭になった宗貞の外見も本質も、不似合いな僧形からきっと引き戻せるという自信は、この一夜の機会があれば可能なのだと、小町は自分に言い訳をしていた。

そして、遍昭が小町の誘いに乗れば、これからの自身の運命をゆだねることにも通じると、小町ははっきりと思うのであった。

小童が戻ってきた。遍昭は『法華経』の書写にいそしんでいるという。そして、必ず行くので、そこで待っていて欲しい、との返事を持ってきた。

小町は小童を帰した。

それから早めに廃屋に行き、残っている灯油を集めて光を点じた。部屋の寒さにも気を配って火桶に火を盛り、遍昭を待った。

……遍昭は容易にやってこない。

陽の光が薄れてゆき、闇が濃さを増す。それでも遍昭は姿を現さない。彼がそれほどお経の書写に魂を奪われているというのだろうか。女心を焦らす彼一流のポーズにちがいない。

夜は深深と、さらに深まる。軒を渡る夜風も木枯らしのように侘しさを増して、虫の音も絶えた。

灯火も火桶の火も衰えて、寒々とした夜気が小町の身を包む。

小町はたまりかねて、再びお寺を訪ねてみた。

遍昭はすでに長屋を引き上げたとのことである。それなら、行き違いになったのだろうか。長屋を引き上げたとなれば、やはり廃屋でゆっくりする心積もりにちがいない。小町は再び杉木立に囲まれた荒地の廃屋に戻る。

小町は遍昭が来ることを疑わなかった。

しかし、遍昭はついに来なかった。

何も食べず一睡もしない小町の充血した目に、やがて明け方の白みはじめた雲が映り、ゆっくりと流れてゆく。とうとう遍昭は小町の前に姿を現わさなかったのである。

もし、この夜、遍昭の意志が砕けていたら、後の権僧正から僧正に進み、花山の元慶寺の住職となった「花山の僧正」または「僧正遍昭」は生まれなかったかもしれない。

信仰する人々から一世の渇仰を受けた後半生と、小町を抱きしめて一夜を焔と燃えつくし、その小町を傍らにおいた後半生と、どちらが生き甲斐のある生涯であつたかは誰にもわかるまい。

ともかくその時の修行僧遍昭は、一度は深夜の闇にまぎれて小町のいる廃屋の戸口の前に、忍ぶように立ったのである。

その奥に自分を待ちかねる小町の気配をまざまざと感じながらも、一歩足を踏み出すのを躊躇(ためら)ったのは、小町から届いた紙一枚の文にすら、すっかり抵抗力を失ってゆく自分自身への腹立たしさからであった。

そして、自分の出家の動機を小町にすっかり読みとられているという、彼女への反撥もあった。

遍昭にとっては、たとえ虚栄、見得坊といわれようが、覚悟は覚悟であった。人生の谷底に身を躍らせる悲壮感に支えられて、三界の火宅を出てしまうと、これまで遍昭の知らなかった世界が開けてきたことも事実であった。

というよりも逆に、これまでの俗世界のいちいちが、深い意味を持ってわが身に迫ってくるのを実感した。

出家してはじめて、色恋さえいかに人間の奥底に宿業として深く横たわっていたかを知り、真のやるせなさを味わったのである。

それはまた、僧衣をまとって俗界を覗き返したような、新鮮で深い感動でもあった。そのやるせない生き様の魅惑に支えられ、そして、耐えながら生涯を終えることも、煩悩熾烈な人間の生き方の一つだろうと、遍昭は達観したのである。

一方、さすがに小町も、彼が来るといいながらすっぽかしたのは、自分に対する一種の反撥、復讐に近いものであることは理解した。

何もかも捨て去った出家の心境は、どこから見ても一種被虐に近いものであろうが、その心理を土台とした遍昭の胸中は、ある種の法悦を噛みしめているのにちがいないと。

しかし、小町が自信を喪失したことに変りはなかった。その時から、小町の自尊心は遍昭を憎んだ。

男と女の世界で、これほどまでに無数に絡み合う糸が織りなす綾も、時が至ればお互いの心の奥の奥までも冷静に見透してしまうものなのか。

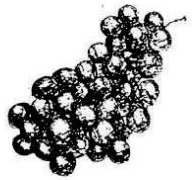
小町は人生の冷徹さを改めて味わうかのように吐息をついた。

おそらく小町の生涯で消えることがないであろう傷痕を残した二人の男性に、相反する感情を持ったのも不思議である。基良親王には今もなおつづく限りない愛慕の念を。遍昭には恋の顛末に憎悪を。

けれども忘れ難い根は一つのものである。

小町の月日は睡(ねむ)たげに流れる。

そして、小町が不具だというおかしな噂も、いつか人の口に上らなくなった。だが、小町はわが身を全くの抜け殻と思っていても、歌合せ会などに出席すれば、言い寄る男性は相変わらず多かった。



義人・伊豆頭七異聞（その三）

堀内永代

前号までのあらすじ

五人力の怪童稲七（伊豆国仁田村の村役人・清六の長男）は、十二歳の時、五人の暴漢に襲われたお春（十七歳）を助けた。江川英龍（後の韮山代官江川太郎左衛門）と神道無念流の達人斎藤弥九郎は、稲七の非凡な才能を見込んで代官所に召し抱えて剣道を修業させた。代官所で働くみなし子の久恵（十五歳）雪恵（十二歳）姉妹は稲七の身の回りの世話をした。十五歳になった稲七は、英龍が烏帽子親となって元服、龍郎と名乗ることになった。修善寺温泉野沢屋の一人娘理恵は、奥修善寺温泉新谷旅館の次男で花相撲の修善寺場所で横綱を張る光次と二世を契る。お春は、祖父弥吉の弟子喜三と所帯を持ったが、喜三は暴れ牛から幼児を助けようとして非業の死を遂げた。お春は二一歳で寡婦となった。それから二年後、稲七が一八歳の秋、父清六も伊豆半島を襲った集中豪雨から仁田村を救わんとして狩野川の濁流に呑まれて死んだ。

第四章　剣道対抗試合

（一）

韮山代官江川英龍は、進歩的教養人としてその学識は支配地は勿論、江戸においてもつとにその名は知られていた。代官所の役人とその子弟は申すに及ばず、支配地内の勉学を志す者には、身分、男女を問わず江川塾で学ぶことを許した。英龍と親交のある大名や旗本の家来にも門戸を開き、長期滞在して学んでいる留学生もいた。

特に大名や旗本の家来には、英龍から砲術の知識、技術を学ぶ者が多く、常に七、八名の門人が塾の間に滞在していた。

公私の区別を明確にする英龍は、家来や支配地内の住民には『殿様』と呼ぶことを黙認したが、大名、旗本の家来には、『先生』と呼ばせ、『殿様』とは決して呼ばせなかった。

仁田稲七、岡村達之助、久恵、雪恵姉妹たちは、英龍直々の儒学講義を受けることもあったが、役務の余暇を見ては交替で指導に当たる斎藤弥九郎など学識豊かな人達の講義も進んで受けていた。

沼津藩五万石、水野忠成は、老中として幕閣に重きをなした人物であったが、学問にも理解を示し、江川英龍同様、儒学に併せて洋学も家臣に学ばせていた。沼津藩のお抱え儒家佐久昭山は、陽明学の大家として、江戸においてもその名を知られていた。年齢は英龍より二十歳ほど年長で、英龍も親しく教えを受けていた。

英龍は、特に藩主水野公の許しを得て、毎月上旬に江川邸に昭山を招いて儒学の講座を開いてもらった。昭山は、明け四つ（午前十時）頃から昼食の半刻を除き、みっちり論語、大学など五経四書を始め、算術、天文学、測量術など幅広く講義した。

今日も稲七、達之助、久恵、雪恵姉妹は、昭山の講義を謹んで拝聴していた。中でも稲七、達之助は熱心で、大名や旗本からの公費留学生に負けてはならじと、先生の講義を一言半句も聞き漏らさないように耳を傾けていた。稲七と達之助の定位置は、先生に最も近い正面最前列で、二人用の文机に並んで座っていた。久恵、雪恵姉妹は、前から三番目、入り口に近い文机に座っていた。

昭山の講義は平易な語り口で、譬え話をまじえ、初心者にも十分理解できた。

ある時、昭山先生から次ぎのような講義があった。

「江川家のお殿様とご親交のある方で、相模国小田原藩家臣・二宮金次郎という先生がおられる。二宮先生は農民の出身であるが、少年時代から独学にて学問の道を開き、藩主大久保忠真公のご信任がまことに厚い方であられる。篤農家、財政家、道徳家、教育家であり、天文学や土木設計、測量技術にも非常に優れておられる。忠真公に請われてご分家宇津様のご領地下総国桜町領四千石の再建を始め、関東一円の各藩の財政を復興され、お忙しく活躍されておられる先生である」

「二宮先生は『音もなくかもなく常に天地は書かざる経文をくりかえしつつ』といっておられる。この意味は『人のまことの道というものは、学ばずとも自然に悟り、習わずとも自然に覚え、書物がなく師がなくとも自ら会得すれば忘れることはない。空腹になれば食し、疲れれば休眠する。目覚めれば起きて働く。これは教えられなくても誰もがやっている。これが自然の道理である』と説いておられるが私も先生のお説のとおりだと思う」

「二宮先生は、『書物に頼らず自然を師とし経文（教本）と

している。このように日々繰り返して示される天地自然の経文にまことの道はある。自然の道を学ばずして、書物によってのみ人の道を求める学者の論説は採用していない。世の中で横に平らかなるものは水面が一番である。縦にまっすぐなものといえば重りを付けた垂れ糸が一番だと思う。万古不易の法則があればこそ地球の測量もできる。万古不易の法則を無視した測量の術はない。戸外にて棒を立てて影を測る方法や、算術の九九などみな自然の法則で万古不易である。よって天文も暦も計算できる』と教えておられるが、二宮先生は自然を師として悟られた方である」

「二宮先生は『米を蒔けば米が生え、麦蒔けば麦が生え、天はものを言わないが四季は巡りて万物は生成する。不書の経文、不言の教戒によりまことの道は得られる』と説いておられる。また、『世には道を説く書は山ほどあるが、完全なものは一つとしてない。孔子も釈迦も人である。経書といい経文といいみな人の書いたものである』よって、書物に書いてあるもののうち、不書の経、すなわち『もの言わずして四時巡りて百物なるところの天地の経文に引き当ててみて、間違いのないものを採り、間違っているものは決して採らない。だからわたしの説くことは間違いがない』と言い切っておられる。素晴らしい話である。二宮先生にご親交のある江川様のお殿様にお願いして、二宮先生から直接お教えを受けたいものだ」

昭山は決して偉ぶるところがなく、教え方も丁寧だから生徒の評判は良く、多くの人々が話を拝聴していた。

これら江川塾におけるさまざまな講義が、その後の稲七の人生に大きな影響をもたらした。

昭山は今日も報徳の教えを説いていた。

「諸君はこれからどの様な生活をしていきたいか。われわれは、自分で生まれ、食べ、生育してきたのではない。父母があり、そのまた父母があり、身体髪膚は父母に生育され、諸君も自分の勤労により子々孫々に受け継いで行く。衣食も住まいも田畠山林も全て同じことである。天地自然の恩恵、即ち、太陽に当たり、空気を吸い、水を飲み、土地から採れた穀物、野菜を食してきた訳である。我が力だけで生長したと思ってはならぬ」

ある日の講義の時である。いつもと同じように生徒達は昭山の話を真剣に拝聴していた。

その時、稲七は自分を見つめている誰かの視線を背に感じた。さりげなく振り返って見ても誰もこちらを向いていない。先生の間近の席からでは度々後ろを振り返ることもできない。錯覚かなとも思った。やがてそれが久恵の視線であることが分かった。講義の合間に振り向くと、久恵がじっとこちらを見つめている。

稲七には恋の経験はないが、今までの久恵の行動から、彼女が自分に好意を寄せていることを知っていた。(俺は久恵さんに愛されている)そう感じたとき稲七は無性に久恵が愛おしくなってきた。

いつしか稲七と久恵は、人目を忍んで目と目でお互いを探す仲になっていた。

一方、達之助にも稲七と同じような現象が起きていた。熱い視線は雪恵のものだった。雪恵が達之助を恋するようになっていた。

勉強が終わり、生徒が江川邸の塾の間を出て帰路に就くころ、遅れて塾の間を退出する稲七に雪恵が近づき、そっと結び文を手渡して逃げるように去って行った。稲七が宛書きを見ると、『達之助さままいる』と書いてある。

(そうか、達之助さんへの恋文か)

稲七は結び文をそのまま懐に入れ、知らぬ顔をして自室に戻った。

暮れ六つ(午後六時)過ぎ、稲七は江川邸に隣接する韮山代官所役宅の松岡邸を訪ねた。ここには代官所に勤める役人の役宅が十数軒立ち並んでいる。代官所手代の松岡邸は、二百坪ほどの敷地に塀を巡らした屋敷である。

稲七は、達之助を門の外に呼び出して雪恵からの結び文を手渡した。すると達之助も稲七に一通の結び文を寄越した。宛書きには『稲七さままいる』と書いてある。久恵からの結び文であった。稲七と達之助は思わず顔を見合わせて苦笑した。

結び目をといて文面を読むと、久恵は八幡さまの前で、雪恵はお稲荷さまの前で、それぞれ、

「今夜五つ(午後八時)にお待ちしています…是非お越し下さい」

と書いてある。

年下の稲七には妹の雪恵が、稲七より二つ年長の達之助には姉の久恵の方が似合いと思うが、恋は思案の外である。二人は恋の相手を思って心が弾んだ。

(二)

秋の収穫も終わった秋晴れの日、今日は恒例の剣術対抗試合の日である。試合は、韮山代官所斎藤道場と沼津藩剣術指南、一刀流師範伊東大膳率いる伊東道場との年一回の道場対抗試合である。

試合に出場する陣容は、伊東道場は、沼津藩切っての一刀流の遣い手、弱冠十九歳の塚本徳二郎を主将に総勢十二名、これを迎え撃つ斎藤道場は、二十歳の松岡達之助を主将に、十八歳の仁田龍郎こと稲七ほか同じく十二名、双方盤石の布陣である。

試合に出場するのは十名で、残る二名は補欠である。

過去二年続けて斎藤道場が敗北している。若し今年敗

れるようなことがあれば、韮山代官の立場も、斎藤道場の信用もすっかり無くしてしまう。今年は是非とも勝たなければならない。達之助以下大いに張り切っている。

伊東道場の陣容は、塚本徳二郎を主将に、副将斎藤孫六、先鋒神谷市兵衛、中堅小林英吉などの面々である。

斎藤道場の陣容は、松岡達之助を主将に、副将渡辺喜太郎、先鋒安藤実平、中堅仁田稲七らで、斎藤門下生の俊英である。

伊東道場の面々は明け六つ（午前八時）頃、伝馬船二艘に分乗して、沼津城下魚町の船着き場から出発した。老練な船頭の櫓捌きで狩野川を遡っていった。伊東道場の青年剣士達は、ここ二年続けて勝利しているので、今年も大いに意気軒昂である。

「塚本主将、今日の試合は主将の出番はありませんよ。俺一人で斎藤道場の主将まで打ち取って見せますよ」

威勢のよいことを言っているのは中堅の小林英吉であった。一同が思い思いの剣に賭ける気持ちを語っているうちに、船は南条村の船着き場へ着いた。

土手に上がった塚本主将は、

「諸君、船の中に忘れ物はないだろうな。今日の試合は、斎藤弥九郎先生が面目に賭けて厳しく鍛えられた連中なのだ。仲々なかなか手ごわいようだ。決して侮るな」

さすがに塚本は、主将を勤めるだけあってしっかりしている。

「承知しています。我々も今日のために精進に精進を重ねて励んできたのですから」

「おい、斎藤道場では、松岡主将の外に強敵は誰だろう」

「仁田稲七は、斎藤先生の内弟子みたいなもので、居合術を練習しているという噂だ。剣捌きが早いのではないか」

「居合術は、刀を抜く前に勝負が決まるといわれているからな」

「今日は防具を付けての竹刀での試合だ。居合抜きはなかろう」

「そうだな…でも用心するにこしたことはない」

自分の相手は誰だろうと想像しながら、やがて九つ（正午）前に試合場になる韮山村金谷部落の斎藤道場に到着した。早速昼食を済ませ、それぞれ使い馴れた剣道具を身につけた。

客方に当たる伊東道場の面々が、道場の奥へ着座した。迎える斎藤道場の剣士が入り口に近い所に席を占めた。正面の一段と高い師範席の中央には、江川英龍がどっかと座り、その右には伊東大膳師範がやや顔を紅潮させて座っている。英龍の左側には弥九郎が座っている。

師範席の向かい側は、一般人も見学を許されたので、代官所界隈は言うに及ばず、沼津の城下町からも見物人が詰め掛け、道場の内外は大変な賑わいであった。久恵、

雪恵姉妹も、稲七、達之助の試合を一目でもよいから見学したいと、朝から胸を躍らせて待っていた。

今日の審判役は道場主の斎藤弥九郎が務めることになっていた。

弥九郎は、定刻になると道場の中央に進み出て、

「本日は恒例の両道場の対抗試合である。折よく韮山ご滞在の殿様も、特にお力を入れられて試合をご覧になられる。決して見苦しき振る舞いあるべからず。勝負は時の運、敗れてもいじけるな、くさるな、遺恨を残すこと決してまかりならぬ、よいな。幸いにして勝利を得ても決して驕るな。驕りの心が生ずれば、そのときより剣の道は後退する。日頃の鍛錬の結果を伸び伸び出して存分に戦われよ」

弥九郎は、試合についての心得を説いて審判の位置に立った。

「先鋒の者、前に進み出られよ。試合は一本勝負、先に一本とった方を勝ちとする。この試合は勝ち抜きとする。勝った者が残って次の相手と勝負する。それでは勝負始め」

伊東道場先鋒神谷市兵衛と斎藤道場先鋒安藤実平、道場の中央に進み、正面に一礼したのち、得意の間合いをとって正眼に構えた。

「イヤァー、ヤァ、ヤァ、ヤァ、…」

「サァーツ、サァ、サァ、サァ…」

「オーラ、オーラ、オラ、オラ、オラ…」

二人の気合が道場中いっぱいに響きわたる。

『面ッ』『胴ォ』双方の激しい打ち合い、鍔ぜり合いが続き、戦うこと幾十合、二人の息遣いも次第に荒くなる。その時大きく跳躍して右足を踏み込んだ安藤実平の切っ先が、

「面ッー」

鋭い気合と共に相手神谷市兵衛の頭上に決まった。市兵衛もさる者、

「胴ォー」

掛け声とともに、市兵衛の竹刀が実平の左胴を打ち抜いていた。見物人の眼にはほぼ同時と見えた。「一本、勝負あり、白組安藤実平の勝ち…」

白組斎藤道場側から

『おうー、やったァー』

と歓喜のどよめきが上がった。

一方、赤組伊東道場側からは『残念…惜しかった…』と無念の溜め息がもれた。

伊東道場の二番手は松浦某である。松浦は十六歳の若年ながら剣先鋭く、将来を嘱望されていた。父親は沼津港を差配する郡奉行を務める三百石取りの家柄であった。一人勝ち抜いた斎藤道場の先鋒安藤実平は、相手が若輩

と見て気を許したか、防戦一方に廻り、ついに籠手を一本取られてしまった。

斎藤道場の二番手、鈴木恒男以下双方勝ったり負けたりで互角の勝負である。試合が進むにつれて、次第に道場の内も外も気合が入って興奮度が増してきた。勝負は斎藤道場に利あらずして、伊東道場有利のうちに稲七の出番がやって来た。

江川英龍も斎藤道場不利のまま試合が中盤にきたため、顔の表情が厳しくなってきた。英龍自身も江戸岡田道場で免許皆伝の腕前であるだけに、歯痒さを感じているのだろう。

審判役の弥九郎は、泰然自若として眉一つ動かさず、淡々と審判を務めている。一刀流師範伊東大膳も、弥九郎同様静かに弟子たちの試合を見つめている。自分の育てた剣士たちの実力を信じているからだろう。勝ち負けに一喜一憂しないところは、さすがに一刀流の達人である。

剣道対抗試合は、今年も伊東道場の勝利に終わるのか、稲七は不退転の決意を心に秘めて、静かに伊東道場四番手、望月鉄次郎と相対した。

稲七は掛け声は出さない。静かに竹刀を正眼に構えて相手の動きを見つめている。稲七の全身から相手を圧する無言の気合が発せられている。密かに修練を積んだ居合抜きの気合である。居合抜きは相手が抜刀する刹那を制して、抜く手を見せずに相手を倒す抜刀術である。掛け声を発すればそれだけ集中力が散じて抜刀する速度が鈍る。稲七は竹刀を正眼に構えていても、無言で相手の気配をうかがうことが身についている。無言の構えがかえって不気味に感ぜられ、相手は身がすくんでしまう。いわゆる無作為の力だ。

稲七は、居合術にも独自の工夫を凝らした。居合は、そもそも合戦場で相手を倒して身を守るところから発達した。合戦場では、いつ、どこから敵が襲って来るか分からない。突然襲われても瞬時に対応できるように刀を抜き合わせなければならない。刀は長ければ当然有利だ。技量が同じならば、刀が長いほどよい。このようにして長い刀を素早く抜く技が発達した。

居合の修練は正座して行う。正座して抜刀するところから居合と呼ばれるようになった。

素早く抜いて斬る。斬ったらすぐ刀を鞘に納めて次に備える。一人稽古の稲七は、刀を親指と人差し指に挟んで鞘に納まるように稽古した。居合抜きの修練で二本の指は常に傷ついていた。

居合術の稽古は真剣で行った。居合は実戦剣法だ。刀を抜いて構えてから打ち合うということはない。特に相手が複数の時は、抜刀したら必ず一振りで相手を倒し、

間髪を容れず相手の数だけ斬るか、突くかして相手を倒す。相手が立ち直る余裕を与えない。居合は早業であるから、刀を抜く前に相手が恐怖心を起こして戦意を喪失すれば、刀が鞘に入ったままで勝負はついたことになる。

居合は、左手で刀の鯉口を切ると同時に鞘ごと刀を胸元まで持ち上げる。右手が柄を掴んで刀を抜く。同時に鞘を元の所まで引き下げる。居合は鞘を動かす左手の動き如何にある。この点稲七は左利きだから有利だ。稲七の左手は、右手より一寸五分長いから、居合の上達を一層早めた。

数年後、この居合抜きが稲七の人生を左右するほどの大事件を起こすことになる。

伊東道場の望月鉄次郎は、動きもなければ、気合いの掛け声もない稲七に不気味さを感じた。望月は恐怖心を振り払おうとして、打ち込みの姿勢に入った。恐怖心からの打ち込み姿勢であるから隙だらけだ。稲七はその隙をつき、無言の気合とともに『突き』の一撃を望月の喉元に突き刺した。素早く竹刀を引き一歩下がって正眼に構える。

「勝負あり」

弥九郎の右手の白扇が、サッと白組稲七に挙がった。

「ワァー…ワァー…」

白組の面々は大喜びである。今までの劣勢が一気に挽回したような気になってしまった。

道場に詰め掛けていた斎藤道場応援団も大喜びである。今まで両手を握り締め、勝負は如何にと眼を閉じて、八幡大明神を一心に祈っていた久恵は、緊張の糸が切れてへなへなと崩れるように両手を床につき、嬉し涙を流して咽び泣いていた。

(稲七さんありがとう…あなたが負ければ、わたし、死んでしまったかも知れないわ)

久恵の稲七への入れ込みようは大変である。妹の雪恵は、久恵の嬉し泣きして喜ぶさまを見て、

(お姉さんは、稲七さんに夢中だけれど、これから二人の関係はどうなるのかしら)

一抹の不安を抱いた。

対抗試合は、稲七の四人抜きの大活躍もあって、勝負は大将戦に縺れ込んだ。両軍の大将は、斎藤道場は松岡達之助、伊東道場は塚本徳二郎である。いよいよ達之助の登場である。今度は雪恵がそわそわしてきた。

両者の戦うこと幾十合、共に死力を尽くして互角の戦いである。もはやこれまで、今日の対抗試合は引き分けかと思われたが、終盤にきて様子が変わった。達之助に一日の長があって、僅差で勝負がついた。

残念がる伊東道場の面々。三年振りで雪辱を果たせた斎藤道場側の喜びは大変である。さしもの大道場も割れ

んばかりの大喚声が上がった。
一刀流伊東大膳師範は、江川英龍に丁重に礼を述べ、結果を藩主水野公にも奉報する旨を告げてから、弥九郎に近ずき、
「お見事でございます」
いささかもへりくだることなく、大膳は斎藤道場の勝利を祝福した。弥九郎は、
「勝負は時の運、我が方は勝負には勝ったが、試合は伊東道場の勝ちでござる」
双方相手を誉め称えて対抗試合は終了した。

試合終了後、江川英龍より双方の健闘に賞詞が述べられて、一年一回の対抗試合は滞りなく終了した。
久恵は稲七の大活躍が嬉しくて、
「雪恵、稲七さんは本当に強いわね。四人も抜いて……」
「……」
「雪恵、後で稲七さんにおめでとうと言いに行こう」
「久恵姉さん、達之助さんも素晴らしかったわ、大将戦で達之助さんが勝ったから、斎藤道場が三年振りで雪辱できたんだから」
久恵は、
(おや、雪恵は達之助さんのことにこだわるわ……やっぱりこの子は達之助さんが本当に好きになったんだわ)
と思った。

雪恵の胸の中は達之助のことで一杯になっていた。
雪恵と達之助の結婚について、英龍と松岡哲平の間で話が進み、祝言は来年の寒の明けと決まっていた。稲七は二人の祝言については全く知らなかった。

(三)

三年振りに勝利を勝ち取った斎藤道場の面々は、まさに意気天を衝く思いで欣喜雀躍踏む所を知らずという有り様であった。
江川英龍は、
「今日の試合は見事であった。それぞれが己の技に精根を込めて戦い、日頃の鍛錬が勝利の英冠を招いたのだ。これからも稽古を怠るでないぞ。これも斎藤先生のご指導の賜物であります。英龍、感謝いたします」
「殿からそのようなお言葉をいただき、恐縮に存じます。わたしの指導というよりも、門人たちの努力の賜物でございます」
英龍は、今日の殊勲者は誰と誰かは充分承知しているが、特定の者を褒めるということはしなかった。
今日の試合は総合力の結果であるとして、全員を平等に褒め、かつ、弥九郎の労をねぎらうことも忘れなかった。
さらに英龍は、
「今日まで大変な努力をしたであろうから、皆の者、奈古

谷温泉にでもいって英気を養ってきてはどうかな、費用は英龍が持とう」
「おーう……」
英龍の粋な計らいがあって、道場からどよめきと喜びの歓声がいっせいに上った。

ほどなく英龍は自邸に帰っていった。続いて弥九郎も役宅に帰った。
早速主将であり、年長者でもある松岡達之助が中心になって相談した。場所の選定などについていろいろな意見が出たが、庭も広く、離れの座敷もある『亀乃家』に決まった。
奈古谷温泉は韮山に隣接し、歩いて四半刻(約三十分)の距離にある。畑毛温泉と同じ鉱泉脈から湧出する温泉である。
奈古谷温泉は、その昔、沼の中の亀を捕らえている時に発見したといい伝えられ、亀乃家は一番の老舗であるところからその名が付けられていた。
門人たち一同は、身支度もそこそこに亀乃家へ向かった。
今日の宴席は、殿様直々の宴であるため、門人たちの張り切りようは尋常でなかった。
門人の中の一人が、次のようなこと提案した。
「折角の宴に男だけでは無粋である。江川家と斎藤道場に拘わりのある女性を誘おうではないか」
交渉した結果、江川家の女中衆数名と斎藤道場の管理人の娘二人が誘われた。久恵、雪恵姉妹もその中に入っていた。

宴たけなわとなり、無礼講の座も弾み、大騒ぎがあった後、門人たちは大いに酩酊してそれぞれ決められた離れ座敷で就寝した。
どちらかといえば下戸の稲七は、『お前は四人抜きをした殊勲者だ』と煽てられて強いられた酒に酔い、離れ座敷の床に倒れ込んでしまった。
一刻ほど経った頃か、ふっと目が覚め、枕元の水差しに手を延ばした時、稲七の手を優しくおさえた女の手があった。
どきっとした稲七は、
「誰だ……」
「稲七さん……久恵です……」
「久恵さん……どうしてここに……達之助さんはどこにいる……」
「お許しください……稲七さんがお酒を飲み過ぎてあまりにも苦しそうだったので、達之助さんが介抱するようにっておっしゃったもので……わたしもとても心配だったの……」
「達之助さんはどこにいったんですか」

「向こうの離れで雪恵と一緒なんです……あの二人は来年二月に祝言を挙げることになっていますので……」
「そうか、達之助さんと雪恵さんは結婚するのか、俺はすこしも気がつかなかったが、それは目出度い。羨しいな……」
久恵の差し出す冷や水を一息に飲んで稲七は、
「フゥー……うまい」
大きな吐息をついて、ゆっくり久恵の方に向き直った。
廊下の欄間から差し込む月明かりが、障子を通して二人の姿を浮き上がらせていた。次第に目が慣れてきた稲七は、じっと久恵を見つめているばかりで、なすすべがなかった。

愛おしい久恵は手を伸ばせば触れるところにいる。しかも二人っ切りだ。
稲七はそんな思いで胸が高鳴っているが、男女の経験のない稲七には、何をしてよいか分からなかった。
「稲七さん……稲七さんはわたしがお嫌いですか……」
「ちがう……好きだ……久恵さんが好きだ……」
稲七は久恵の華奢な手を掴んだ。久恵はビクッとして反射的に手を引っ込めた。だが、その手の引き方は、あがらうほどのものではなかった。稲七は少し力を入れて久恵を引き寄せた。
「あァ……」
久恵は自分から逞しい稲七の腕にからだを預けていった。
「久恵さん……おれは……おれは……」
「稲七さん……わたしを離さないで……」
部屋の外は一段と静けさが深まっていった。

しばらくそのままでいた二人は、いずまいを直してから静かに横になった。
稲七は久恵の頬に顔を寄せ、そっとうなじに唇を触れた。
久恵は稲七の肩に腕を廻し、大胆にも口唇を吸ってきた。
久恵は江川座敷の女中衆が話す男の話を聞くともなしに聞いて、いつしか男女の愛の仕草を知っていた。
息苦しくなって唇を離した久恵は、稲七の手を取って襟元から寝衣の内に誘った。久恵の乳房は小振りながら肉置(ししお)きもあり、稲七の掌の中で柔らかく弾んでいた。
稲七は、初めて触れる乳房の感覚に思わず指に力が入った。
「イタッ……稲七さんやさしくネ……」
久恵のからだの甘い温もりで稲七は燃え、身体はいらだってきた。
久恵は伊達巻を解き、稲七の手を自ら導いた。久恵のからだは火照り、充分潤い溢れていた。久恵の鼓動は高まり息を弾ませ、半ば理性を失いつつ陶酔のなかで手を伸ばし、柔らかな五本の指を優しく使って、稲七を愛し始めた。
稲七は、女性のからだに触れるのは初めてだったが、武術で鍛えた四肢は高ぶる心にすぐ感応した。
稲七の右手が優しく、そして激しく動く、左利きの稲七は左手を巧みに使う。その手が久恵の核心に触れたとき、久恵は、
「ウッ……」
小さく呻いた。眉根を寄せてもだえ、固くなった稲七の身体を持つ手に力が入った。
「稲七さん……許して……」
久恵の成熟したからだは十分に開花している。久恵は戸惑いながらも慣れない手つきで稲七の下帯を解き、自分からからだを重ねていった。
久恵は火照った柔肌を、武術で鍛え、鞣(なめ)し革のように適度な潤いをもつ稲七の若肌に密着させ、極度の興奮に陶酔した。
稲七は、細くて柔らかな久恵のからだを両腕でしっかり抱き締めた。
久恵は重ねたからだを激しく動かした。久恵には、男女の愛に不慣れな稲七の所作がもどかしく、跨がった腰を浮かして稲七の身体に手を添え、導いた。
久恵の導きで稲七の身体が久恵を貫いた。
「ウゥッ……」
小声で呻き、久恵は逞しい稲七の背中に廻した両手に力を入れた。稲七を熱愛する久恵のからだは、躍動する稲七の身体に揉みしだかれ、いつまでもいつまでも心地よい痛みに陶酔していた。
(よかった……これで良かった。稲七さん……ありがとう……)
久恵は、思いを遂げた充足感で幸せを存分に味わった。
稲七は、久恵のたっぷりと時間をかけた愛撫に翻弄され、何度も何度も喜びを堪能した。
久恵は、愛する稲七が喜ぶままをからだ全体で受け止めて満ち足りていった。

その翌年、もともと丈夫でなかった久恵は、床に着く日が次第に多くなってきた。久恵の健康を心配した江川英龍は、母久子(三十五代代官江川英毅夫人)の遺言もあって、比較的温暖な下田港に隣接する弓ヶ浜に、久恵を転地療養させた。
弓ヶ浜は、韮山代官所の支配地であったから、久恵も安心して療養することができた。病状は一時快方に向かったが、稲七たちの願いも空しく短い生涯を閉じた。
久恵は、稲七とのたった一度の愛を誰にも語らず、静かに胸に抱いて黄泉へ旅立った。享年二二歳。死因は現代でいう白血症であった。
(つづく)

丙午（ひのえうま）の女（四）

太田和貞

モルヒネ

亜季（あき）たちといっしょに、お茶を飲んでいた桂女（けいじょ）が、
「この部屋にお泊りになっていた吟行会の人たちは、どうなさったのかしら、……」
と再び斉藤真紀（まき）に聞いた。
桂女の視線は入口の「ゆ」と白く染め抜かれた紺地の暖簾（のれん）に釘付けになっていた。
先程、聞いたときからまだ五分も経っていなかった。
「はい。お散歩におでかけです」
亜季は斉藤真紀に教えられたように、逆らわずに答えた。
「あら、そうなの」
桂女は返事を聞くだけで、満足したようだった。
「吟行会の人は、どうしたの、……」
桂女は再び斉藤真紀に聞いた。
亜季は答えられなかった。
斉藤真紀が、
「まだお帰りになりませんが、そのうち、お帰りになるでしょう。そこらへんまで探しにいきましょうか」
と桂女を部屋の外に連れ出してくれた。
亜季は急いで、「ゆ」の暖簾をはずした。
桂女のためと思って、買ってきた暖簾が桂女の頭を混乱させる、きっかけをつくったことに驚いた。
（あの気丈な母が狂い出した）
そう思うだけで、亜季は自分も狂い出しそうな錯覚に陥った。
二十分程して、桂女は斉藤真紀に連られて帰ってきた。
「病院内を散歩してきました。とてもご機嫌でした」
斉藤真紀は、亜季にそう報告してくれた。
先程の険悪な形相と違って、桂女は柔和な顔になっていた。
「おかあさん、お散歩ができて、よかったですね」

亜季は桂女の手をとった。その手があまりにも冷たかったので、危うく手を離しそうになった。
「五十年以上も、冷たい水で魚をさばいていると、手が冷たくなるのは当り前よ。その代わり心が温かいの。なにしろ、お店の名前が蛍火ですからねえ」
桂女は、亜季の顔を見て笑った。
「ところで、あなたさまは、どちらさまでしたかしら、……」
桂女はそう言って、亜季の顔をのぞき込んだ。
亜季は一瞬、言葉を失った。
病院の冷房が暖房に切り替われば、腰の痛みもやわらぐだろうと桂女は願っていた。
しかし、暖房になっても腰の痛みはやわらぐどころか、ますます痛みが激しさを増して、桂女を苦しめた。
五年前、築地で配送中の台車に跳ねられて聖路加病院に入院して以来、毎年、秋になると腰が痛みで疼いた。
念入りに、お化粧をして、きりりと締めた帯をポンと叩いて、「蛍火」の女将になると、背中や腰の疼きも、すーっと消えた。
（切り換えスイッチが馬鹿になってしまった）
桂女は、そう苦笑するしか、なかった。
痛む腰に左手を当てがい、右手を壁に這わせて個室を動き回わる桂女を見兼ねて、斉藤真紀は桂女に車椅子を勧めた。
「わたしは新橋の女将ですよ。車椅子なんかに乗れますか、……」
と言っていた桂女も、しぶしぶ車椅子に乗った。
「小料理屋の女将が車椅子じゃ、様（さま）にならないわね」
桂女は照れ隠しに、斉藤真紀に笑って見せた。
和服に着替えるという暗示をかければ、腰の痛みも消えるかも知れないという僥倖を願って、桜色のジャージーを脱いで、和服に着替え、締めた帯をポンと叩いても、腰の痛みは消えなかった。
個室だけで使っていた車椅子に桂女を乗せて、斉藤真紀は思い切って廊下に引き出した。
「先生！。トンボ眼鏡がよく似合うよ」
「先生は色が白いねぇ」
「車椅子も、いかすじゃないの」
車椅子に集ってきた桂女の信奉者の入院患者たちは、くちぐちにそう言って、桂女を褒めた。
最初は、顔の前に両手をかざして、眉をひそめていた桂女の表情が次第に和らいで、「どうもありがとう」と言葉を交わすようになった。
信奉者を毛嫌いしていた入院当初と変わったのは、個室での孤独に耐えられなくなったためかも知れなかったし、女将の習性が蘇ったのかも知れなかった。
「そうだ。きょうの陶芸教室で焼物の絵付けがあるの

よ。先生もいかない？」
ひとりが、そう言うと、みんなが「そうだ。そうだ」と車椅子に手を掛けた。
「これは、これは。恐れ入ります」
桂女は顔をほころばせて、礼を言った。
そんな様子を見た斉藤真紀は、
（桂女さん、きょうはご機嫌だわ。桂女さんの笑顔を久し振りに見た）
と思った。
（個室にひとりで籠もっているよりは、みんなで、いっしょにいる方が桂女さんも楽しいのよ）
車椅子を押しながら斉藤真紀は、そう思った。
みんなでエレベーターに乗って、三階に上がった。
三階には、多目的ホールがあった。椅子を並べれば、アマチァバンドの演奏会場やボランティアの素人演芸会場になった。椅子を格納すればダンスパーティの会場にも変化した。
この多目的ホールの一角に、電気炉が据えられていた。
院長の三千石の道楽だった。
てびねりの粘土をこの電気炉で焼けば、思わぬ作品ができ上がったりした。
院長が使わないときは、入院患者の陶芸教室に使用させて、作業療法の一環としていた。
斉藤真紀は陶芸教室の講師の花田理江（りえ）に挨拶した。
「よくいらっしゃいました。先生もご一緒にどうぞ」
そう言って花田理江は桂女の前の机に、半乾きの背の高い一輪差しを二つ置いた。
「乾き切った一輪差しは、教室の生徒さんに配って、これしか残っていませんが、彫ったり、文字を書いたりするのも面白いかも知れません」
花田理江のことばに、桂女はその一輪差しを手にとって、クルクルと回わした。
「真紀さん、塗り箸を借りてください」
桂女は、斉藤真紀の顔を見上げて、そう言った。
「ハイ」と答えながら、斉藤真紀は、
（はじめて、名前で呼んでくれた）
と嬉しくなった。
花田理江に探して貰った塗り箸を桂女に渡した。
一輪差しをしばらく見詰めていた桂女は塗り箸で、一輪差しに文字を刻み始めた。
流れるような文字が三行に分かれて一輪差しの表面に浮んだ。
「先生、これなんと読むのですか？」
一輪差しに刻まれた文字は達筆すぎて、斉藤真紀には読めなかった。
「羅や　人悲します　恋をして　わたしの懺悔の句なの。どんなに懺悔しても、救われないのよ。わたしは」
そう言って、肩をおとした桂女は、ことさら小さく見

えた。
二本目の一輪差しを手にして、桂女は塗り箸で文字を刻んだ。
「今生の　いまが倖せ　衣被　と、これは読むの。わたしの人生にもいろいろのことがあったけど、今がいちばん倖せと思っているわ。こちらの　羅や　人悲します　恋をして　この句と矛盾するかも知れないけど、これがわたしの気持ちなの」
「先生、さすがだねえ。うますぎて、おれらには、ちっとも読めねえや」
「一輪差しに、俳句を一句、書くなんざあ、おれたちには到底できねえ芸当だ」
「塗り箸の先で、文字を彫ったのは味がありますねえ。彫刻刀で彫ったのと違い、文字に沿って粘土が小さくまくれていて、それが景色になっています。釉薬は白をかけましょう。わたしに任せていただけますか、……」
花田理江のことばに、桂女はうなづいた。
「きっといい作品になると思いますよ」
花田理江のことばに、桂女の信奉者たちが一斉に拍手をした。
「真紀さん、あれ、カツラかしら、……」
桂女は斉藤真紀の顔を見上げて聞いた。
「はい、そうです。黄葉が綺麗です。ごらんになりますか？」
斉藤真紀は小腰をかがめて聞いた。
「こくん」と桂女が、うなづいた。その子供のような素直なうなづきに、斉藤真紀は、「あッ」と思った。
（わたしは今まで桂女さんと呼んでいたけど、桂は訓読（くんよ）みすれば、カツラだわ。俳号に桂の字を選ぶほど、桂女さんはカツラの黄葉がきっと好きなんだわ）
早く気付いていれば、青葉から黄色い葉に移る微妙な変化も見せてやれたのにと、後悔した。
「それじゃ、カツラの木を見にいきましょう」
斉藤真紀は明るく言って、車椅子を押した。
桂女の信奉者たちが車椅子を押したがったが、「これはわたしのお仕事」と、はねつけた。
「焼き上ったら、病室にお届けします」
花田理江は、胸の前で小さく手を振った。
カツラは中庭の真ん中に植えられていた。
カツラの黄葉を見て、桂女は「おッ、おー」と声を出し、体で車椅子を揺って喜びを表した。
カツラの梢は病院の四階にも達し、中庭一杯に枝を伸ばし、その枝々に無数の黄金色の葉をつけていた。
陽の光を柔らく反射して、中庭全体が黄金色の羅（うすもの）に包まれているようだった。
桂女は顔を上向けて、ただ、ただ見入っていた。
半ば口を開けて、上を見上げている桂女は童女のようにあどけなかった。

その色白な顔に、カツラの黄葉が映えていた。
「庭をひとまわりしましょう」
そう言って、斉藤真紀は車椅子を押して中庭を回り始めた。
病棟の角で作業員が大きな穴を掘っていた。落ち葉を埋めて、腐葉土をつくるためだった。
桂女は作業員が穴を深く掘り下げるのを、しばらく見ていた。
「そんなに大きな穴を掘ったって、わたしは、まだ死にませんからね」
桂女の声は、憎々しげだった。
「えッ」、斉藤真紀は聞きもらして、思わず桂女の顔を見た。
「お生憎さま。わたしをこの穴に放り込むつもりでしょうけど、わたしは、まだ入りませんよ」
桂女の顔が童女から鬼女に変っていた。

それから二週間程して、一輪差しができあがってきた。その一輪差しを桂女は手に取って見たものの、すこしも興味を示さなかった。
塗り箸で半乾きの一輪差しに、自分の句を刻み込んだことも、すっかり忘れていた。
「これ、桂女さんが塗り箸で書いたんですよ」
斉藤真紀がそう教えても、
「あら、そうだったかしら、……」
と、ぼんやり一輪差しを見ているだけだった。
医学の進歩は人々に長命をもたらしてくれたが、皮肉にも惚けという落し穴を用意していた。
斉藤真紀は一輪差しに水仙を差して、桂女の文机の上に置いた。
斉藤真紀が知っている桂女なら、
「あらッ。きれい。それにいい薫りだわ」
水仙に顔を近付けて、笑顔を見せてくれる筈なのに、その水仙にも無関心だった。
九十五歳であるから、惚けが加速されるのは仕方が無かったが、(こんなに早く惚ける)とは、斉藤真紀にも予想ができなかった。
「惚けるが勝ちよ」
桂女は笑って、そう言っていた。
「惚けてしまえば、わたしは、わたしでなくなり、惚けているのか、惚けていないのか、わたしにも分からないわ。娘やあなたには申し訳ないと思うけど、こればっかりは、しょうがないわね」
やや、しまりの無くなった桂女の顔を見ながら、斉藤真紀は、
(惚けは死の恐怖から逃がれるモルヒネなのかも知れない)
と思った。

(つづく)

遥かなるカメルーン (五)

太田精一

(二十五)

二回目のヴァカンスシーズンを間近に控えて、欧米系企業の社員は、そわそわし始めた。
「ムッシュー桂木、今年から休暇制度ができると以前お聞きしましたが、ヴァカンスはいつ頃から取られますか」
マダム・ベルトランが桂木に尋ねた。
日本の企業や団体もやっとヨーロッパ並となった。瘴癘地勤務の駐在員に対する長期休暇制度が設けられたのだ。ジェトロもその例に倣い一時帰国の制度と併せてこの休暇制度が認められたのである。
(これでやっと欧米企業の駐在員のヴァカンス談議に加わることができる)
桂木は、ほっとすると同時に、日本は休暇の面でも、欧米並に近づいていることを実感した。
「五月の下旬からパリで会議がある。その会議の出席後一ヶ月半ほど家族と共に日本に一時帰国する」
赴任後一年半以上母国の土を踏んでいない桂木には、この一時帰国制度の利用は、身心ともリフレッシュできる良い機会であった。
「それでは、五月下旬のパリでの会議に出席して、日本に帰国し七月中旬に、ドアラに帰って来るのですね。ちょうど良かった。私は、七月中旬頃からヴァカンスを取りたいと思っていましたから」
マダム・ベルトランとの会話は、桂木の心に忘れかけていた日本への郷愁を呼び醒した。懐しい故郷の風景と両親や兄弟たちの顔が桂木の脳裏に浮び、微笑がこぼれた。

一ヶ月余りの日本滞在は、瞬時のうちに過ぎてしまった。桂木は本部への帰国報告や関係機関への挨拶、講演会の講師などで、東京、名古屋、大阪を駆け巡り、席を温める隙もない。実際、彼が故郷で過した時間は、二週

間ほどしかなかった。
「ずいぶん痩せたな。鼻の先が黒くなっているが、どうしたのだ」
桂木の父が、久し振りで見る息子に尋ねた。
「カメルーンは暑いからね。毎日大汗をかくので、水分が少くなったのかも知れない。鼻の先の黒いのは汗で汚れた手で、いつも新聞を読み、鼻をこすっていたからだと思う」
桂木は、改めて自分の顔を鏡に写してみた。そう言われてみれば、鼻の先辺りがただの黒さではない。皮膚の内側から黒い色素が滲み出たような病的な黒さである。
一週間に一度、強いマラリアの予防薬フラボキンを服用していた桂木は、肝機能障害を起しかけていた。その徴候が鼻の先に表われた。原因はマラリアの予防薬の副作用にあったのだ。
事実、カメルーンを出立してから帰任するまでの期間、予防薬を服用しなかった桂木の鼻の先は、また元の健康な色に戻っていた。

(二十六)

桂木の家族は、一時帰国を終えて、一九七四年七月半ば再びドアラの土を踏んだ。
雨季の真最中であった。低く垂れ込めた薄雲が地上を這うように桂木の家の周りを漂い、暑く湿った空気が流れている。時折雲が、厚い固まりとなって、空を埋め尽くし、地上に強い雨を降らせる。
たっぷりと水を吸い込んだ草木は、生き返ったように緑の色を深め、蛙の鳴き声もひときわ賑やかに聞こえる。梅雨時に休暇を日本で過した桂木は、日本の雨雲をはるばる西アフリカのカメルーンまで運んできたのではないかと錯覚するほどであった。
桂木は、ヴァカンス後の残務整理と来客の対応に追われていた。気が付くとすでにヴァカンスシーズンも終わりに近く、街は次第に活気をとり戻していた。
九月のある土旺日のことである。桂木は仕事を終え、家での昼食を済ませた後、ソファにくつろいで、日本から送られた新聞を読んでいた。ふと睡魔に誘われ、居眠りを始めた。赴任後二年が過ぎ、現地の生活にも慣れた桂木は、昼食後よく昼寝をするようになった。
突然、けたたましい足音が聞こえ、桂木は目を覚した。日頃ゆっくりとスローペスで仕事をしているボーイのアルベールが、目を輝かし帚を持って何か小動物を捕えようとしている。その敏捷な身のこなしは、いつものアルベールの仕事振りとは全く異なり、まるで別人のようであった。
「何をしているんだ。アルベール」
桂木は、帚を持って小動物を追うアルベールに声を掛けた。
彼は、桂木に返事もせずに夢中で、その小動物を追い掛けている。小動物は、突然桂木の前に姿を表わし素早くテーブルの影に隠れた。
「鼠だ」
桂木は思わず叫んだ。
アルベールの帚に追われた鼠は、テーブルの下から飛び出し、台所に向かって走り、裏口のドアーから草むらの中に逃げ去った。
アルベールは、残念そうな顔をして帚を持ち替え、ゆっくりと床を掃き出した。
「アルベール。君は鼠を追っかけていたのか」
「ウィ、ムッシュー」
「何んでそんな真剣になって鼠なんか追っかけるんだ。捕まえて一体どうするつもりなのだ。家で飼うのか」
「いいえ、食べるんですよ。鼠は結構旨い動物ですから」
「なに、鼠を食べる。本当に」
桂木は、怪訝な顔で、アルベールをまじまじと見た。興奮の醒めやらないアルベールの顔は、普段と異なり生き生きと輝いていた。鼠の出現は、アルベールの眠っていた狩猟本能を呼び醒まし、反射的に機敏な行動を取らせる結果となったのだ。
牛、豚、羊などの家畜の肉は、カメルーン人にとって高価であるため、毎日の食卓に載せることはできない。野性動物が貴重な蛋白源として利用されているのだ。カメルーン人のマーケットでは、犬、兎、鰐、羚羊(アンチロープ)はもとより山嵐、家鼠、猿などの類いまで売っている。桂木はそのことをすっかり忘れていた。

(二十七)

鼠を食べる習慣のある西アフリカでは、ラサ熱が猛威を振ったことがあった。
ラサ熱は、カメルーンとの国境に近いナイジェリア北部のわら葺の屋根と土壁の立ち並ぶ遊牧民の寒村ラサで起った。原因は、始め分らなかった。
犠牲者の血液標本を空輸で、米国アトランタの疫病対策センターに運び、そこでコロンビア大学、エール大学のウィルス学者が加わって研究した。その結果、鼠を媒介とするウィルスの熱病であることが分ったのだ。
始めは、インフルエンザのような徴候を示し、喉の痛み、発熱、嘔吐、咽喉炎の症状が出て、しばしば風邪と間違えられる。抗生物質はきかない。そのうちに、唇と喉が渇き、脱水症状を呈し、尿が出なくなって急性腎不全に陥る。最後には、白血球数が異常に増加し喉や口腔粘膜に潰瘍ができて、呼吸困難となり、チアノーゼ状態を呈し命を失う。
一九六九年一月、ナイジェリアのジヨスで感染した患者の半数は死亡した。患者の食器を消毒する設備さえな

かったためである。
桂木の駐在していた頃には、この熱病も沈静化していたが、鼬を食べる習慣がなくならない限り、いつまた猛威を振うことになるかも知れない。
「鼬をどうやって食べるの」
「まず毛を焼いて、皮を剥ぎ、串焼にしたり、ゆでたりオクラと一緒に油で揚げたりして食べるんです。肉は鶏肉と似ていて旨い。ただ、よく焼いたり煮たりして火を通さないと病気になる恐れがあります」
桂木は、名古屋の病院に敗血症で入院した時、三重県と奈良県の境にある大台ヶ原の一寒村に生まれた同室の男のことを思い出した。その地方では、彼の子供の頃まで猪や熊はおろか野兎、猿、雉、山鳩、雀、などあらゆる鳥や獣を日常的に食べていたと言う。それらの動物は、人間の生命を繋ぐ〝山の神〟の恵みとしてとらえられているのだ。
彼が鼬を食べたかどうかは分らない。
(もし、苛酷な自然環境の中で鼬以外に棲息する動物が限られていたならば彼の村に住む人びともあるいは鼬を食べていたかも知れない)
桂木は、厳しい環境に生きる者の自然の知恵を簡単に野蛮などと言う言葉で片付けてはならないと思った。
ヨーロッパ人の家でペットとして大切に飼われている犬もその飼主が帰国し、野良犬となってしまった場合は哀れである。餌を漁って徘徊するうちに捕えられ、食用とされてしまうことも少くない。カメルーンで動物を飼育することは、将来その動物を使役するか肉として食用にするかいずれかなのだ。ヨーロッパ文明の恩恵に浴しているごく一部の富裕層だけが例外的に動物を愛玩用として飼うことができる。
犬や猫などの愛玩動物が、しばしば人間より大切にされている社会は、文明の所産がもたらしたものなのだ。
動物をいとおしみ、慈しむ気持は、人類が共通して持ち合わせている感情である。だが、その感情も富の豊かさによって表われ方が異なることを桂木は、わずか二年のカメルーン滞在によって知った。
「アルベール、君が敏捷に動く姿を始めて見たよ。仕事をしている時にも、それ位一生懸命にきびきびと働いたらどうかね」
桂木は、鼬騒動が終って、またゆったりと窓拭きをしているアルベールに皮肉を込めて言った。
「ムッシュー、いつもそんなに働いていたら死んでしまいますよ。ここはアフリカです。あなたのように昼、夜働いていたら命がいくつあっても足りませんよ。あなたは三~四年で日本に帰るでしょう。私は一生この熱い処に住むのです。だから、ほどほどに体を使わないと長持ち

できません」
アルベールの説明を聞いて、桂木はなるほどと思った。この暑さの中で、全力を尽くして何年も働き通すことは命を縮めることに繋るのだ。アルベールにしてみれば、彼なりに真面目に働いているわけである。

(二十八)

桂木のいるアパートの二階の東側にカメルーン人の家族が住んでいた。カメルーンエアーラインのパイロットで、妻と三人の子供の五人家族である。その家族がある日一頭の山羊を買ってきた。家族の子供たちは大喜びで山羊に餌を与え可愛がっていた。
ところが、数日後突然庭に引き出されて、殺され解体されてしまった。摩耶と登は、裏庭に引き据えられて頸動脈を切られる山羊の様子を窓越しにじっと見ていた。悲しそうに鳴く山羊の姿が、よほど強烈な印象であったのか、繰り返しその時の様子を桂木に語って聞かせた。
日本では、家畜にせよ、野性動物にせよ自分で屠殺してその肉を食べることは極めて少ない。だが、かつての日本の農村では、飼育した鶏が卵を生まなくなった場合、飼主がその鶏を殺して食べることが普通に行われていた。
その行為が(自分が生きるために他の生物を犠牲にしている)と言う意識を育て、生命の尊さを学ぶきっかけとなっていた。ところが今日の日本では、肉も魚もただ食用の肉片としか扱わずできるだけその生物の姿、形を消し去ろうとしている。生命の尊さは、他の命があるがままの姿を見て感動し、その命を絶ち自分の口に入れる残酷さを体感すればするほどより深く感じるのではなかろうか。
そうした意味でカメルーン人の日常は、今の時代の日本人より、遥かに命の尊さを知っていると桂木は思った。
「どうしてあんなに可愛がっていた山羊を殺して食べてしまうの」
摩耶は、涙を溜めて桂木に聞いた。
「あの山羊は、もともと飼うために連れてきたのではないんだよ。カメルーンの人は、自分が生きて行くために動物を食べるのは仕方がないと思っているんだ。肉を食べるのであれば、なるべくその動物の姿や形があったほうが(この動物のために自分は生きることができる)のだと思ってその動物に感謝の気持を持つ。だから、マーケットでは、ほとんどの動物が殺されていても体をばらばらにされずにいるか、生きたまま売られているんだ。でもそれだけではないね。カメルーンには冷蔵庫を持っている家が少なく肉をあまり長く置いておくと腐ってしまうから、なるべく新しいうちに食べようとしている。それも動物を生きたまま買って来る一つの理由なんだと思う」

「ふーん。そうなの。そう言えば、この前二階のカメルーン人の女の子の家に遊びに行った時、その女の子のお父さんが鶏の太い骨をばりばり噛んで食べていた。びっくりしちゃった。すごい歯だね」

鶏の骨を食べる様子がよほど強烈な印象であったに違いない。摩耶は興奮気味に桂木に話した。

「そうね。カメルーン人は皆んな歯が丈夫だね。また奇麗な歯をしている。歯と顎が強くないと固いものは噛めないからね。カメルーン人の食べ物の中には固いものが多いんだよ。また、骨まで食べてしまうのは、きっと自分のために死んだ鶏をできるだけ奇麗に食べてあげることによって（役立ってくれて有難う）と言う気持を表わしているのではないのかな」

摩耶は、父の言葉に一つ一つうなづいていた。

（二十九）

ドアラの街では、実に多くの病人や障害者を見かける。体は痩せているのに腹だけが奇妙にふくらんでいる老人。全身が白い瘡蓋（かさぶた）に覆われている女性。足だけがふくらんで歩くこともできなくなり、じっと地べたに踞って物乞いをしている男。数えあげれば切りがない。こうした病気の多くは栄養不足と劣悪な衛生状態に起因している。

一九七四年当時、庶民の飲料水のほとんどは井戸水に頼っていた。水道はカメルーンの高級官僚や企業経営者など上流階層の家庭にしか普及していない。一般市民は街のところどころに設置された水汲場の水道水を共同で使用している。井戸水には、寄生虫の卵や細菌が秘んでいて、さまざまな伝染病の発生源となっている。

摩耶の小学校への入学を目前に控えた九月末の土旺日の午後のことである。桂木の帰宅を待ちかねたように妻の由美が浮かぬ顔で、桂木に声を掛けた。

「あなた、これを見て」

くしゃくしゃに丸めたティッシュペーパーを広げて桂木に差し出した。何やら白い膿の固まりのようなものが中に見える。よく見るとその膿の固まりがティシュペーパーの中で蠢ている。

「何これ、蛆のように思えるけど、どこにいたの」

「登の体の中にいたのよ。二～三日前からお臍（へそ）のあたりが痒い痒いって言ってたでしょう。赤く膨んで先が白くなっていたから出来物が化膿したんだと思って指で強く押してみたの。そうしたら中からこの蛆虫が出て来てびっくりしちゃった。こんな虫が体の中に入っていて大丈夫かしら」

「大丈夫だとは思うが、ちょっとアルベールに聞いてみよう」

桂木は、ボーイのアルベールを呼んで蛆虫を見せた。

「こんな蛆虫が登の臍（へそ）の近くから出て来た。大丈夫かな。

この虫が体の奥深くに入って大きな病気を引き起すことはないだろうか」

「ムッシュー、そんなことはありません。なんという名前の虫か忘れましたが、物干しに掛っている肌着などに卵を生みつけます。だから必ずアイロンを掛け卵を焼いているのです。子供は、肌が柔らかいので蛆虫も皮膚を破り易く、毛穴の中に入って、皮下で育つのです。そこで育ったのがこれです。しばらくすると皮膚を突き破って羽根を生やし、飛んで行ってしまいます。カメルーンの子供にもときどき見られますが、そのために恐ろしい病気になったと言う話は聞きません」

桂木夫妻は、アルベールの話しを聞いて少し安心した。だが、完全に不安が消えたわけではなかったので、掛り付けの医師の診察を受けることにした。小児科専門のギリシア人の女医で、年令四十五、六才。名は、カスカディアーデスと言った。彼女は、カメルーンに来て十五年になる。マラリアを始め子供の罹り易い熱帯病に精通していてドアラに住む外国人から高い信頼を得ていた。

彼女は、登の赤い発疹と蛆のような虫を見て、即座にアルベールと同じ説明をした。

「これは心配いりません。皮膚の下で卵が成長し、蛆虫のような状態でしばらくいますが、やがて皮膚を突き破って出て行きます。幸い血管の中に入って、体中を駆け巡りどこかの臓器に巣喰うと言ったことはありませんので、ご安心下さい」

カスカディアーデスは、こともなげに言って軟膏を登の患部に塗り付けた。

「もう痛くも痒くもなくなったでしょう」

彼女は、にっこり笑って登の肩をぽんと叩いた。桂木夫妻は、ほっとした表情で、お互いに顔を見合わせた。

（三十）

登の健康に問題がないことが分かり仕事にも余裕のできた桂木は、コートジボワール（象牙海岸）の経済、貿易動向調査のためアビジャンに出張することにした。

ドアラ駐在員の桂木は、旧仏領ブラックアフリカ十三ヶ国を管轄していた。だが、一人で十三ヶ国をカバーすることは、到底無理であったので、そのうちの重要と考えられる国々に焦点を絞って巡回調査を行っていた。

コートジボワールは、桂木の管轄する国の中での最重要国の一つである。面積はカメルーンの三分二。だが、人口は一九七四年当時で六百万。カメルーンとほぼ肩を並べるほどであった。首都のアビジャンは、アフリカのパリと言われていた。（その後、首都はヤムスクロに移転し現在に至っている）一人当りの国内総生産は、旧仏領ブラックアフリカの中では最も高く、三〇〇ドルを超えていた。

大統領のウフェ・ボワニは親仏派であり、コーヒー、ココア、木材などの熱帯産品の重要な供給基地であったためフランスは、この国を積極的に支援していた。

社会資本も比較的整備されていて緑も多く、主要幹線道路は整然としている。市内には、立派なホテルがあり、ヨーロッパの観光客で賑わっていた。

桂木は、政府の経済計画省発展局、在コートジボワール日本大使館、仏、英、独の大使館、国際援助機関、日本の商社などを精力的に訪問、経済、貿易、投資関連情報の収集に当った。

「諸外国のコートジボワールへの援助や投資動向を調査しているのですが、各国からの援助や投資状況を取りまとめた資料はありませんか。また、最近の大型プロジェクトの進捗状況についてもお伺いしたいのですが」

桂木は、発展局の局長ウマール・ディアラ氏に質問した。

「一九七三年の実績は、統計局からまだ報告を受けておりません。でも各国の企業が個別に申請したプロジェクトを認可した記録はあります。個別の申請書は開示することはできませんが、認可された案件についての概要は、お知らせすることができます。ただ、詳細なデーターは私の手元にはありませんのでフランス人顧問を紹介しますからその人に聞いて下さい」

ディアラ局長は、フランス人顧問のゲレ氏を呼んだ。

ゲレ氏は、桂木の質問に対し、一つ一つ書類を繰って開示できるものとできないものとを峻別し慎重に対応した。

コートジボワール政府の各局には、フランス人の顧問がいて、詳細かつ具体的な情報を入手するためには、その人たちとの接触を避けて通ることはできない。

カメルーンは、カメルニゼーション（カメルーン化）が早くから浸透しており、コートジボワールに比べてフランス人の国家顧問も少なくなっていた。コートジボワールは、カメルーンよりも経済発展のスピードは早かったが、人材育成の面では、カメルーンのほうが進んでいるように桂木には思えた。

桂木は出張期間中、過去の投資情報についてはかなり詳細なデータを得ることができた。が、進行中のプロジェクトについては、新聞、雑誌などで公表されている以上の情報を入手することはできなかった。

一九七四年も慌しく過ぎ、七五年の正月を迎えた。桂木は「コートジボワールへの西欧諸国の援助と投資の実態」と題する大部の調査報告書を取りまとめた後、これまで懸案となっていた日本のプレゼンテーションを高めるためのPR映画の上映に取り組んでいた。

日本は為替の変動相場制に移行し、世界の主要国の間では、日本を先進国として扱おうとする気運が高まっていた。だが、まだカメルーンでは未知の国である。

桂木は、カメルーンの人たちに「今日の日本」を正しく理解して貰うためには、映像を駆使した活動が最も近道であると考え、各地で、日本のP・R映画の開催を企画した。

映画フィルムは、戦後日本の経済発展、産業・技術、生活・スポーツ、文化・芸術など多岐にわたっている。上映時間三十分のフィルムを数本、三ヶ月前に本部から送付を受けていた。だが、それらのフィルムの上映には、情報省の映画管制課の事前検査が必要である。

桂木は、映画フィルムを管制課に提出し上映許可を得た。ところが、何処で上映するかが問題だった。桂木は、各地にあるフランス文化センター内に設置された小劇場を利用することを考えた。フランスは文化に寛大な国で、日本のPR映画の上映を快諾し、宣伝に協力を惜しまなかった。

また、桂木は、街の映画館を利用することも考えた。PRエージェントを通し、各映画館に働きかけ、ドアラ、ヤウンデなど主要都市の劇場でも上映することになった。

この各地での映画会の開催が、日本のプレゼンテーションを高めることに効果があったかどうかは、明確には分からない。だが、少なくとも一九七二年の赴任当時に比べ、ドアラの街では「ジャポネ」は侮蔑の言葉ではなくなってきた。カメルーンにおいても、日本は遠い東洋の未知の国から活力溢れる豊かな先進国へとイメージが変りつつあることだけは確かであった。

（三十一）

乾季も最盛期を迎える二月となった。乾季であってもドアラは、からっとした晴天が少ない。上空にはいつも靄がかかっていて強烈な太陽の光を遮っている。だが、海岸に近く低地でであるため乾季でも蒸し暑い。

桂木は、ドアラとは気候風土の異なる北カメルーンを訪れてみたいとかねてから思っていた。そこは、チャドに近く、緑の少ない乾燥地帯である。北部の辺境の街マロワに近いワザは、乾燥地帯でありながら湿地帯が広がりその湿地帯にわずかに残る水を求めてライオン、象、キリン、シマウマなどの野性動物が集って来る。そこでカメルーン政府は、この地を自然公園に指定し、観光開発の目玉としていた。

「北カメルーンのンガンデレ、マロワ、ガロワの乾燥地帯に旅行をしたいのですが、ドアラからツアーが出ていますか」

桂木は、旅行会社、トランスキャップのフランス人社員に尋ねた。

「乾季の期間中、三、四月頃までなら毎週団体ツアーを出しています。参加人数は何人ですか」

「妻と子供二人の四人で参加したいと思います」

フランス人社員は、桂木の顔を見て困ったような顔で

答えた。
「私どもの北カメルーン団体ツアーは、小さなお子さんの参加はお断りしています。お子様は何才になられますか。国立公園やリュムシキ地方は気候も厳しく、医者もほとんどいません。そうした苛酷な環境の中で数日間過すことになりますので、もしお子さんに病気や怪我などがあった場合、満足な対応ができないのです。ほかのお客様にもご迷惑をかけることになりますので、お子様の参加はご遠慮頂いているのです」
子供たち二人をドアラに残して夫婦二人だけで旅行に行くことはできない。だが、桂木夫妻は、あきらめきれなかった。桂木がカメルーン駐在を決意した一つの大きな理由は（野性動物の生態を自然のままで見られる）ことであった。彼は、少年の頃から熱帯に棲む猛獣の生態を描いた絵本が好きで、弱肉強食の世界に生きる動物たちの世界に憧れていた。
「ツアーに参加することができないことは分かりました。では、ツアーでなく家族だけで北カメルーンを旅行したいと思いますので、ドアラ、ンガンデレ、マロワ、ガロワ、ドアラと回る航空券を大人二枚、子供二枚下さい。それとンガンデレ、リュムシキ、マロワ、ガロワのホテルを各一泊ずつ予約願います」
桂木はいつもの調子で（何んとかなるだろう）と呟きながら申し込んだ。
「よしたほうがいいと思いますがね。当方としてはお客様から航空券を求められれば売りますし、ホテルも予約しますが、責任は持ちませんよ」
トランスキャップのフランス人社員は今ひとつ釈然としない顔付で、桂木の要求に応じた。
桂木夫妻は、自分たちの旅行への思いが強くこの旅行がどれほど大変なものか深く考えていなかった。それが子供たちの小さな体にどれほどの負担となってのしかかって来るか二人には予想がつかなかったのである。
往復二、〇〇〇キロを超すアフリカ内陸部の野性を求めての旅の計画はこうして立てられた。
ドアラから北カメルーンのアダマワ高地にある有力都市ンガンデレまで飛行機を利用、そこで一泊、見学後、さらに飛行機でチャドとの国境に近い辺境の都市マロワに出る。マロワから事前に予約したタクシーで奇岩の聳えるマンダラ山中のリュムシキに出てそこで一泊。翌日同じタクシーでワザの自然公園を見学しながら再びマロワに戻る。マロワで一泊した後、やはり飛行機で北カメルーンの産業の中心都市で当時のアヒージョ大統領の出身地ガロワに出る。そこで一泊した後、そこから直接飛行機でドアラに帰着すると言う計画であった。
桂木は、期待に胸を躍らせながら出発の日を待った。
つづく

体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと（十六）

千坂精一

無謀だった〈第二次丹作戦〉

半年前、マリアナ沖海戦に敗れてサイパン島を奪還できなかったことから、ついに四半世紀つづいた赤道以北南洋諸島の委任統治権は全面放棄のやむなきにいたった。
サイパン島を空軍基地にしたアメリカ側の制海制空権は急速に拡大してゆき、日本本土に迫ってきた。
十一月二十四日マリアナ基地のB29七十機が東京を空襲したのを手始めに、各地への爆撃が本格化していった。
その侵入を阻止するため、海軍基地から零戦、局地戦闘機雷電、紫電、夜間戦闘機月光が、陸軍基地からは隼、鐘馗、屠龍、飛燕、疾風の戦闘機が迎撃に向かった。
アメリカ側は、迎撃される爆撃機の被害を少なくするために、護衛戦闘機の基地を物色しはじめた。
そして、中継基地も兼ねて、マリアナと日本本土の中間に在る小笠原諸島の南二〇〇キロの硫黄島を狙った。
二月十六日、硫黄島に迫ってきた敵機動部隊が、四万の大軍と一五〇台の戦車で上陸を開始してきた。
二月二十一日、三航艦六〇一空のK一飛行隊長村川弘大尉（海兵七〇期）率いる第二御盾隊の天山八機と彗星一二機、S三一〇の零戦一二機が香取基地から出撃した。
いったん八丈島で給油してから逐次飛び立ち、父島上空を経由して硫黄島の東方から目標目掛けて殺到した。
この日の戦果は、アメリカ側の発表によると、護衛空母ビスマーク・シー沈没、同ルンガポイント、正規空母サラトガ、貨物船コークック、上陸用舟艇四七七号、同八〇九号がそれぞれ損傷を受けたという。
だが、第二御盾隊天山六機、彗星一一機、零戦六機と、搭乗員四四名の尊い生命を犠牲にした戦果としては過少で、上陸作戦を阻止するまでにはいたらなかった。

結局、硫黄島は僅か数日で飛行場を制圧されてしまい、敵機の離着陸を可能にさせてしまった。

敵機動部隊は、攻略戦が一段落して陸上基地が確保されると、わがこと終われりと南方洋上に去っていった。

三月九日にはマリアナ基地からのB29三三四機に東京を空襲され、夜半から十日未明にかけて本所（墨田区）、深川（江東区）、浅草（台東区）など下町地域約四〇平方キロを焼失、死者八万四千人、罹災者一五〇万人、焼失家屋二三万戸に及ぶ大打撃を受けてしまった。

この日、トラック基地の彩雲偵察機が、ウルシー泊地に帰投している敵機動部隊を確認したので、連合艦隊司令部は直ちに五航艦に対し〈第二次丹作戦〉を発令した。

そのころ、国分基地の七〇一空では、急降下爆撃の名手江間飛行長が直接指導をして、高度三〇〇〇メートルから四〇〇メートルまで急降下して爆弾を投下する猛訓練が続けられていたが、まだ適合に至ってはいなかった。

いま敵機動部隊が北上すれば、体当たりで阻止するほかはなく、部下思いの江間飛行長は敵情を気にしながら、一日も早い成果を希って発破を掛けていたに違いない。

そこへ〈第二次丹作戦〉の発令である。

一、期日　三月十日。

二、飛行艇一機〇三〇〇鹿児島湾を発進、佐田岬より沖の鳥島、ウルシーを通ずる天候偵察を行なう。

三、陸攻四機〇四三〇鹿屋発進、前路警戒を行なう。

四、飛行艇四機〇七〇〇ないし〇七三〇鹿児島湾発進、銀河隊をウルシーまで誘導す。

五、銀河二四は佐田岬上空で誘導隊と合同ウルシーに進撃、在泊艦船に対し特別攻撃を行なう。兵装八〇〇キロ爆弾各一個。

つまり、双発の銀河艦爆二四機に八〇〇キロ爆弾と増槽二個を抱かせて二式飛行艇に誘導させ、長駆二四〇〇キロ飛行して機動部隊に体当たりをさせようというのだ。

そうしてくれることは、江間飛行長にとっては時が稼げて好都合だったが、熟練搭乗員としては眉を顰めた。

〈菊水部隊梓特別攻撃隊〉と命名されたK二六二、四〇六両飛行隊員は、隊長黒丸直人大尉以下七二名であった。

待機していた鹿屋基地の搭乗員宿舎入口には『黒丸一家英霊安置所』と墨書した幟が立てられていたという。

観念していたのか、それとも自棄糞だったのだろうか。

隊員たちは、この未経験の長距離飛行がどんなに不安であったかは察するに余りある。自信がなければ成功は覚束ないし、たとえ戦果を挙げたとしてもとても帰還できる距離ではないから、まさに片道燃料の出撃であった。

三月十日、宇垣長官の訓示、別盃、記念撮影の出撃儀式を終えて、黒丸隊長機から順次発進がはじまった。

そこへ、トラック基地からウルシーには正規空母一隻しかいないという電報が入り、急遽出撃が中止になった。

その後の電報で正規空母八隻、特空母七隻の在泊が判明したが、時刻が遅いので翌朝再出撃させることにした。

司令部はそう変更したが、前夜緊張と煩悶で眠れぬ夜を堪え抜いて今朝別盃を交わし、観念して出撃したその気勢を削がれた隊員は、また今夜も苦悩と緊張に耐えねばならないのだから、なんとも酷い仕打ちであった。

そんな一夜が明けて、十一日の朝を迎えた。

〇八三〇、指揮所前に出撃隊員七二名が整列した。

隊長黒丸直人大尉二七歳、最年長は富永喜見雄飛曹長二九歳、最年少は横山侃昭二飛曹一七歳、成人三五名、二〇歳八名、未成年二九名で編成された梓隊は、半数以上が二十歳までの少年たちであった。

今朝は別盃だけで出陣式をすませると、一機三名の組が縦に並んで六機一小隊が一団となり、四小隊が横隊に整列した前に立った黒丸隊長が出撃命令を下すと、全員搭乗機に駆け寄り、整備員と握手して機上の人となった。

両翼から突き出た発動機が頼もしく始動して車輪止めが外されると、機は悠くり動きはじめて滑走路へ向かう。

そして、担当整備員たちに見送られて勇躍壮途に就く。

銀河は九九式や彗星より大型の高性能機。発動機二基、内燃機関調節弁二連、操縦桿は棒状ではなく輪型。

発動機が両翼なので視界が展け、油を被ることもない。

単発機の発動機がある頭部は、円形の風防で囲まれた偵察員席。後方胴体上部に操縦員席と電信員席がある。

零戦並の最高速度と一式陸攻並の航続距離を要求され、慾張り過ぎたこの高性能新鋭機は、無理が崇ってか、発動機の片方が停止する事故が起こって整備が難しく、また前輪が弱く脚が折れたり、制御装置故障も多かった。

そんな銀河を、なぜ長距離攻撃に使ったのだろうか。

七〇〇リットルの増槽を両翼下に装着し、八〇〇キロ爆弾を抱いた銀河は流石に重く、長い滑走路をぎりぎり使ってようやく離陸してゆく有様であった。

梓隊は、鹿屋上空で編隊を組むと、大隅半島南端の佐田岬上空で誘導する二式飛行艇と合流して一路南下した。

鹿屋からウルシーまで長駆一三〇〇浬（約二四〇〇キロ）、針路が洋上のため中継基地はなく一〇時間の大飛行であった。壮挙というより暴挙というほかはない。

洋上へ出て間もなく、九区隊一番機米満上飛曹機が増槽燃料使用不能で鹿屋へ引き返すと、奄美大島東方洋上で誘導一番機の二式飛行艇杉田中尉機（一二名搭乗）が敵の大型対潜哨戒機と遭遇して撃墜されてしまった。

前路哨戒に当たっていた一式陸攻三機が帰投してゆき、南大東島を過ぎたころから果たして故障機が続出した。

一区隊二番機石塚上飛曹機が発動機故障で引き返し、南大東島に不時着大破した。

二区隊二番機渡久山上飛曹機が右発動機故障片肺飛行で引き返し、宮古島に不時着大破した。

一二区隊一番機峰政上飛曹機が左発動機故障で引き返

し、南大東島に不時着大破した。
五区隊一番機阪口中尉機が左発動機故障片肺飛行で引き返し、南大東島に不時着大破した。
一二区隊一番機井上飛曹長機が右発動機故障燃費過剰になって引き返し、南大東島に不時着大破した。
八区隊二番機大林上飛曹機が左発動機故障で沖縄に向かい、小禄基地に不時着した。
残る一七機は、中間点の沖の鳥島付近まできたと思われるあたりで、増槽を切り放して身軽になった。
この頃から天候が悪化してきて雲量九となり、洋上の視認が遮られたので、高度を下げて雲の下を飛行する。
一八三〇、ヤップ島上空に到達したところで誘導二番機二式飛行艇と別れ、針路を変えてウルシーに向かう。
あと一〇〇浬（一八五キロ）で目標上空に到達する。
ここまできたところで、五区隊二番機吉田一飛曹機が片肺飛行になり、後退してヤップ島に不時着した。
ヤップを過ぎて緊張態勢に入ったところで運悪く驟雨（スコール）に遭遇してしまい、雲上飛行を余儀なくされてしまった。
ウルシー上空と思われるあたりに到達した一六機は、降下しながら周辺を隈なく旋回したが、日没後と雨天のため真っ暗でなにも見えなかった。
目標を確認できず、やむなく引き返したのは四機で、一区隊一番機黒丸隊長機、三区隊一番機落合飛曹長機、九区隊二番機出山上飛曹機はヤップに不時着して大破したものの全員一命を取り止めたが、三区隊二番機玉井一飛曹機は途中洋上に不時着して消息を絶ってしまった。
ウルシー碇泊中の敵機動部隊に闇夜の体当たり攻撃をかけたのは、鹿屋を出撃した恰度半数の一二機であった。
結局、この長距離攻撃は、正規空母ランドルフ一隻に損害を与えただけで、機動部隊を潰滅するにはいたらず、〈第二次丹作戦〉の銀河特攻は不成功に終わった。

七〇一空に特攻命令下る

これよりさき、七〇一空は南西諸島哨戒強化のため、二月十四日にK一〇三の彗星六機を沖縄小禄に派遣した。
十五日以後は、連日都井岬南東海域の哨戒に当たるとともに、編成された菊水特別攻撃隊として錬成に励んだ。
二十二日に一旦解かれた警報が二十五日に再び発令され、三月一日には再度特別攻撃隊が編成されたが、九日に敵機動部隊のウルシー引き揚げとともに解除されて、再建のための飛行訓練が一段と激しさを加えていった。
二国においても、K一〇五の降爆訓練が頻度を増していって、四〇〇メートルまでの降下爆音が終日つづいた。
再建途上にある七〇一空が、フィリピン戦で蒙った損耗を補充し終えてさらに伎倆を向上させ、万全の構えで敵機動部隊を迎え撃つためには、なんとしてでも敵の来襲を一日でも遅らせることで時間稼ぎする必要があった。
そのためとはいえ、ウルシー泊地にいる敵機動部隊に

鹿屋から長駆先制攻撃をかけたのは、焦慮に駆られてのことと割り引いても、やはり無謀だったことは歪めない。
七〇一空のK一〇三、K一〇五両飛行隊が一国と二国でそれぞれ降爆訓練に励んでいる最中の十五日に、トラック基地の彩雲偵察機から、敵機動部隊が大挙してウルシー泊地を出撃した、ことを緊急電で報じてきた。
五航艦司令部は、九州方面に来襲するとなれば十八日と想定して、十七日に麾下全航空隊に警戒を発令した。
このころだったろうか、二国も慌ただしい動きが起こり、張り詰めた緊張感と異様な雰囲気に包まれていった。
江間飛行長は、一国のK一〇三と二国のK一〇五に対して、十八日の出撃は必至であると判断したことを告げると、いつも大きな出撃の前日にはそうしてきたように細々とした行動に至るまでのことを懇切丁寧に説明した。
このときも、江間飛行長は自論の正攻法だけを告げて体当たり攻撃については触れなかったようである。
そのことについては、隊員たちが、
「戦闘においては単機または小編隊による索敵と必中爆撃を本旨とし、特攻については特別に指示されなかった」
と証言していることでもわかる。
江間飛行長の推測どおり、この夜二二四五すぎから、
「敵機動部隊が、南九州東方海上土佐沖、または都井岬東南海域一〇〇浬（一八五キロ）付近に出現した」
報告が続々入ってきて、五航艦司令部は緊張した。
日付が替わった十八日〇二〇五、五航艦司令部は麾下全航空隊に対して〈第一戦法発動〉を下令し、その総力を挙げての特攻で敵機動部隊を殲滅するようつけ加えた。
一国の七〇一空司令部は、直ちにK一〇三飛行隊全員に非常呼集をかけて、まだ暗い指揮所前に集合させた。
木田司令が出撃命令を下すと、つづいて江間飛行長が、敵機動部隊の位置確認とその編制内容を伝達した。
あとは待機を命ずるのだが、この百戦錬磨の急降下爆撃隊熟練搭乗員（ベテランパイロット）は、目標地点に到達してもし異方向からの単独攻撃になったときはどうするか、あらゆる局面を想定してその場合の要領を事細かに説明して聴かせた。
敵機動部隊は、沖縄攻撃のまえに抵抗する九州の各特攻基地を虱潰しにしようと考えているに違いなかった。
七〇一空司令部は、空襲まえに出撃させることにした。
早朝、一国指揮所まえにK一〇三出撃隊員が整列した。
指揮所横には、菊水紋の下に木田司令が大書した、
「非理法権天（ひりほうけんてん）、一棒一條痕一掴一掌血（いちぼういちじょうこんいちかくいちしょうけつ）」
の幟が立ち、おりからの朝風を受けてはためいていた。
この日は花曇りで靄（ミスト）がかかり、視界はよくなかった。
江間飛行長は、整列した隊員たちのまえに立つと、
「本隊は全員特攻であるが、敵艦に爆弾を命中させる自信のある者は通常攻撃で帰還し、再度出撃せよ。いいな」
一同を睨みつけながら、語気鋭くそう言い放った。
通常攻撃で成果を挙げてこいと発破をかけられた隊員

たちは、飛行長の温情に報いんと一段と士気を鼓舞した。
飛行帽の上から日の丸鉢巻を締め、純白の襟巻(マフラー)を首に巻いた隊員たちは、別盃を交わすと指揮官石坂中尉の号令一下列線に並ぶ搭乗機目掛けて疾駆していった。
○六一三、機先を制する攻撃隊は慌ただしく発進した。
木田司令以下の幹部、残留隊員、基地隊員たちは指揮所まえに整列して、帽子や襟巻を振って別れを惜しんだ。
この日、一国ではこれに留まらず、敵襲の間隙を縫って一〇四五に第二波攻撃隊が単機こどに次々出撃した。
いっぽう、二国のK一〇五では十七日に司令部からの命令を受けた隊長北詰實大尉が、全隊員を指揮所まえに集合させると、敵情伝達のあと江間飛行長の意を体して、「明十八日第一回の攻撃をかける。彗星隊は昼間強襲である。どんなことがあっても爆弾を当てて帰ってこい。爆弾は一日でできるが搭乗員は十年かかる。充分自重して無理な飛行をせず再挙をはかれ。いいな、おわりッ」
青々とした髯の剃りあとと真一文字に結んだ薄い唇、となれば虚無的(ニヒル)な風貌を彷彿させるが、この二十五歳の青年指揮官北詰實大尉は精悍な人だったという。
明けて十八日。二国のK一〇五は午前中の敵襲のあと、七〇一空第三波攻撃隊として一三五〇から一四二〇のあいだに、単機ずつ慌ただしく出撃していった。
延一四〇〇機におよぶ敵襲の合間を縫って一本滑走路の両側に残留搭乗員と担当整備員だけが並び、それぞれに非理法権天の大幟や軍艦旗、略帽、白い襟巻などを千切れんばかりに振って、その壮途を見送った。
この日二十七機出撃したが、十九機が還らなかった。
○一国から出撃した第一波は、八機十五名。

(操) 野間茂中尉 (21) 福知高商、予備13期
(偵) (生還)
敵戦闘機と交戦し馬毛島沖に不時着水。

(操) 木村潔少尉 (23) 長岡高工、予備13期
(偵) 松原清上飛曹 (20) 飛練32期

(操) 金山一雄二飛曹 (20) 丙飛16期
(偵) 小山康衛少尉 (22) 長岡高工 予備13期

(操) 勝俣市太郎二飛曹 (21) 丙飛11期
(偵) 久保田秀生少尉 (22) 宇部高工 予備13期
「我空母に突入す○八一八」の電あり。

(操) 葛和善治少尉 (22) 第二早高 予備13期
(偵) 石井隆上飛曹 (19) 飛練32期

(操) 猿渡弘上飛曹 (20) 甲飛10期

(偵) 西嶋忠治上飛曹 (20) 飛練14期
「我空母に突入す○八二五」の電あり。

(操) 小網十九雄飛長 (20) 乙(特)飛1期
(偵) 中川茂男飛長 (19) 乙飛11期

(操) 岡本壽夫飛長 (19) 乙(特)飛1期
(偵) 古長正好飛長 (19) 飛練34期

○第二波攻撃隊は、六機十二名。

(操) 益岡政一二飛曹 (24) 丙飛14期
(偵) 岩上一郎中尉 (23) 室蘭高工 予備13期

(操) 湯浅正三上飛曹 (25) 甲飛9期
(偵) 田島一男少尉 (26) 飛練5期
「我空母に突入す一三〇一」の電あり。

(操) 市毛喜代夫二飛曹 (24) 丙飛16期
(偵) 田中精之助少尉 (23) 早稲田専 予備13期

(操) 山下利之二飛曹 (21) 丙飛14期
(偵) 瀧理吉上飛曹 (19) 乙飛16期
「我空母に突入す一二五八」の電あり。

(操) 黒田和三郎飛長 (19) 乙(特)飛1期
(偵) 佐々木榮治一飛曹 (20) 甲飛11期

(操) 小野庄治飛長 (19) 乙(特)飛1期
(偵) 市川末人一飛曹 (19) 乙飛17期
種ヶ島南方で敵戦闘機と交戦自爆。

○二国から出撃した第三波は、五機九名。

(操) 平田博一中尉 (23) 明治専 予備13期
(偵) 野宮仁平少尉 (24) 東京青教 予備13期

(操) 畠中良成少尉 (25) 台中高農 予備13期
(偵) 植村平一飛曹 (21) 甲飛11期

(操) 小崎朗上飛曹 (21) 飛練30期
(偵) (生還)

(操) 三鬼照一飛長 (23) 丙飛17期
(偵) 小野塚一江二飛曹 (21) 甲飛12期
「我空母に突入す」の電あり。

(操) 藤園勝飛長 (19) 乙(特)飛1期

（偵）助田義一二飛曹（21）　丙飛16期

この日は彗星十九機のほか、零戦五機、銀河八機が突入したが、アメリカ側の記録では正規空母エンタープライズ、同ヨークタウンがそれぞれ爆弾一発命中、同インドレビットが一機至近弾で損傷しただけであった。

翌十九日は、二国のK一〇五が主力で編成された。

第一波は、〇五四五から〇七一五のあいだにK一〇三。

第二波は、〇九二八から〇九五三のあいだにK一〇五。

第三波は、一〇五〇から一一三五のあいだにK一〇五。

の二十三機が単機ごとに逐次出撃していったが、天候下り坂、空中状態悪化で混信甚しく、情況まったく不明のなかで辛うじて三機だけの突入報を受信できた。

この日、一国K一〇三指揮官は隊長柏井大尉であった。

出撃隊員の前に立って、木田司令に挙手注目の礼をする柏井隊長の顔は爽やかで晴れ晴れとしていたという。

フィリピンでの出撃で部下を死なせながら不時着帰還した苦悩が、この朝でようやく解消されたのであろう。

フィリピンで柏井隊長機を操縦して、ともに生還した北村良二上飛曹も、この日ついに還らぬ人となった。

この日は二十三機のうち、十五機が還らなかった。

〇一国から出撃した第一波は、八機十六名。

（操）川畑弘保少尉（25）　甲飛1期

（偵）柏井宏大尉（26）　海兵69期

（操）川口富司大尉（33）　乙飛1期

（偵）山下敏平飛曹長（23）　甲飛3期

（操）宮下萬次郎上飛曹（24）　丙飛3期

（偵）坂田明治中尉（22）　海兵72期

（操）飯塚英一上飛曹（24）　丙飛3期

（偵）藤田春男中尉（21）　海兵72期

（操）天野一史中尉（24）　関西大　予備13期

（偵）千野五郎上飛曹（21）　丙飛15期

（操）福西一隆少尉（24）　青山学院　予備13期

（偵）出島廣良少尉（24）　中央大　予備13期

（操）北村良二上飛曹（19）　甲飛10期

（偵）西口速雄飛曹長（23）　乙飛8期

（操）上田元太郎飛長（18）　乙（特）飛1期

（偵）長谷川次郎一飛曹（19）　乙飛17期

〇二国から出撃した第二波は、四機八名。

（操）関谷忠雄上飛曹（23）　乙飛11期

（偵）中村恒夫大尉（23）　海兵71期

「我空母に突入す一三〇三」の電あり。

（操）山路博中尉（23）　熊本高工　予備13期

（偵）高梨總理少尉（21）　拓殖大　予備13期

「我空母に突入す一二三七」の電あり。

（操）山口春一一飛曹（25）　丙飛11期

（偵）木村福松一飛曹（19）　甲飛11期

中村機と行動を共にし同一目標に突入。

（操）石黒喜八飛長（19）　飛練35期

（偵）竹川福一一飛曹（20）　乙飛17期

〇おなじ二国からの第三波は、三機六名。

（操）夏目康少尉（23）　東京薬専　予備13期

（偵）齋藤幸雄少尉（23）　広島教　予備13期

「我空母に突入す一四一七」の電あり。

（操）本田俊勝少尉

（偵）平井一夫一飛曹

敵戦闘機と交戦自爆したが、『神風特別攻撃隊戦歿者名簿』に記載なし。

（操）山元當四郎飛長（19）　乙（特）飛1期

（偵）大矢武二飛曹（17）　甲飛12期

二国では、特攻機が出撃すると通信員が直ちに近くの地下防空電信室に入り、周波数を合わせて、彗星に搭載してある空二号電信機から送られてくる符号を聴き漏らすまいと受聴機（レシーバー）を当てた耳に神経を集中させる。

特攻機が目標上空に到達して突入体勢に入ると、偵察員が電鍵（キー）でトの符号（・・―・・）を連送してくる。そして電鍵を締めて鳴りつ放しにする。この（―）という長符が跡絶えたときが体当たりか墜落の瞬間なのである。

この日は彗星十五機のほか、銀河五機、彩雲一機が突入した。アメリカ側の記録では正規空母フランクリンが爆弾三発を受けて誘爆を起こし、沈没寸前にまでいたったほか、同ワプスが爆弾一発を受けて損傷したという。

十九日の天候は悪化の一途を辿り、ついに雨になって夜間索敵が完璧を欠き、通信情況も不良で各部隊の現状把握が困難を極めたので、五航艦司令部はこの際に態勢を立て直させるべく翌二十日の攻撃中止を発令した。

だが、木田司令が、

「七〇一空は明日彗星二十機の準備が可能である」
ことを具申したので、中止が取り消され続行となった。
二十日早朝に発進した索敵機が、南下中の敵発見を報じてきたが、夜来の雨は上がったものの天候は容易に回復せず、焦燥に駆られながらの待機がつづいた。
機を逸すると判断した司令部は、ついに意を決した。
第一波は一国から一二五〇、第二波は二国から一四二四、合わせて十七機が発進したが七機が還らなかった。

○一国から出撃した第一波は、三機六名。

(操) 佐藤甲上飛曹 (21) 乙飛16期
(偵) 森下亮一郎上飛曹 (27) 甲飛4期
(操) 原田幸飛長 (19) 飛練35期
(偵) 中島茂夫飛長 (20) 乙飛11期
「我空母に突入す一五四四」の電あり。
(操) 寺道好美飛長 (18) 飛練35期
(偵) 根上義茂飛長 (18) 乙(特) 飛1期
「我空母に突入す一五〇〇」のあと長符連送。

○二国から出撃した第二波は、四機八名。

(操) 熊澤孝飛曹長 (25) 甲飛2期
(偵) 大谷吉雄上飛曹 (20) 甲飛9期
「空母七隻を発見我突入す一七一一」の電あり。
(操) 福下良知一飛曹 (21) 丙飛11期
(偵) 谷本七郎一飛曹 (21) 丙飛11期
(操) 宮本才次郎飛長 (23) 丙飛17期
(偵) 槇田利夫一飛曹 (19) 乙飛17期
(操) 生稲康夫飛長 (19) 乙(特) 飛1期
(偵) 栗澤榮吉一飛曹 (19) 乙飛17期
「我空母に突入す一七一〇」の電あり。

この日は彗星七機のほかに銀河二機が突入したが、戦果はアメリカ側の記録では駆逐艦ハルゼイ・ホウエルが空中分解した特攻機の発動機落下による損傷だけで、正規空母エンタープライズは味方誤射による損傷であった。
フィリピン戦以来アメリカ側の特攻機防禦態勢は強化されてゆき、対空砲火の消極策から迎撃さらには特攻基地襲撃の積極策に転じて、猛烈を極めてきていたので、尋常一様の手段では戦果を挙げるのが困難になっていた。
七〇一空K一〇三、K一〇五の両隊は、この三日間で出撃総数六十七機のうち六割以上の四十一機を喪失し、

掛け替えのない多くの若い搭乗員を犠牲にしてしまった。

ついに人間爆弾『桜花』投入

この九州沖戦闘を顧みて、最早体当たり攻撃は奇策として通用しなくなったことを痛感した宇垣長官は、次なる起死回生の奇計として、発案者大田正一少尉の名をとり㊦と称ばれていた秘密兵器が完成して、『桜花』と命名されている人間爆弾を実戦に採用しようと考えた。
『桜花』は、頭部に一二〇〇キロの爆薬を装塡し、尾部に火薬ロケット三基を取り付けた飛翔物体で、全長六メートルの胴体は軽合金製であるのに対して六平方メートルの翼は木製、樺のベニヤの箱型構造であった。
頭部に推進器がなく、翼を外せば爆弾そのものである。
母機一式陸攻に懸吊され、搭乗員は陸攻機に同乗する。
特攻隊員は、離陸時に風防を上げて白い襟巻を靡かせ、片手を振って最期の訣れをする機会があるが、桜花隊員は出撃の花道を荷物同様に運搬されてゆくのだった。
三月二十一日、〇八一〇索敵に発進した彩雲四機から、都井岬一四五度三二〇浬に二群の敵機動部隊が南下しているのを発見、うち一群には空母二隻が認められるが護衛戦闘機は見当たらない、との報が入った。
この三日間の戦闘で大損傷を受けて退避してゆく空母に違いないと判断され、今日は久しぶりの快晴で視界三

○浬というから、やや距離は遠いがまたとない機会を逃してはならないと意気込んだ宇垣長官は、この好餌を撃滅するのに神雷部隊の『桜花』使用を決断した。
隊長野中五郎少佐は、三十五歳の熱血漢であった。
陸軍少将野中勝明の五男で、兄次郎は陸軍中佐、姉はフィリピン沖海戦で戦死した第二戦隊首席参謀安藤憲榮少将に嫁いだ軍人一家で、あの二・二六事件で警視庁を占拠したのちに拳銃自殺した野中四郎大尉の弟であった。
小柄な野中は一風変わった士官で、命令伝達はべらんめえ口調の野中節で通し、隊員の返事も「合点だ」と言わせていた。
野中は兄が叛乱将校だったことを隠さず、自己紹介は、「ご苦労さんにござんす。てめえ海軍少佐野中五郎という吝嗇な野郎で、国賊の弟でござる」
誰彼構わずそう知らしめるように伝えて憚らなかった。
体制を批判し、武力を以て政権奪取しようと蹶起して恨みを飲んだ兄を誇りに思っているように、いつも兄の写真を懐中に抱いて出撃していた。
そんな野中の野性的性格からK七一一（神雷攻撃隊）は「野中一家」と称ばれ、『非理法権天』『南無八幡大菩薩』の大幟を指揮所に立て、整列や訓練開始の号令、合図は大仰に陣太鼓を持ち込み、これを叩いて知らせた。
「整列よろし」
が報告されると、号令台上の野中は右肘を曲げて

ちょっと掌を上げるだけの軍人らしからぬ答礼をして、
「やあ、ご苦労さん」
が口癖だった。
そのあと、例のべらんめえ口調で、
「野郎どもいっちょやってやろうじゃねえか、かかれッ」
の号令をかける。
そんな野中に五航艦横井参謀長から呼び出しがあった。
司令部に出頭すると、七二一空司令岡村基春大佐と桜花隊を直轄する飛行長岩城邦廣少佐が先着していた。
宇垣長官のまえで横井参謀長から出撃編成内容の説明を受けると、すかさず岡村司令が口を切って、護衛戦闘機の数があまりにも足りないことを力説した。
桜花を抱いた一式陸攻は自由がきかない。そうでなくても主翼を貯蔵容器にして五〇〇〇リットルもの燃料を搭載していることから、被弾するとすぐに火災を起こす。
そのことは、宇垣長官自身が連合艦隊参謀長だったとき山本長官とラバウルから前線視察に出てブーゲンビル島上空で撃墜されていたからよく知っているはずだった。
野中は憮然とした表情で、終始黙したままであった。
横井参謀長が、岡村司令の尤もな発言に圧されて、
「長官、次の機会を待つことにしてはいかがでしょうか」
そう具申した。宇垣長官は立ち上がると、
「この情況で桜花を使えないなら、使うときがないよ」
岡村司令と向き合い、両肩に掌を預けてそう言った。
そうまで言われて、凝と見詰められては、岡村司令も、
「やります」
と答えざるを得なかった。
このとき、岡村司令は、
(自分が陣頭に立って、指揮を執ろう)
そう決意したようであった。
野中は、岡村司令に促されて岩城飛行長とひとあしさきに司令部を出たが、途中で足を止めて振り向くと、
「飛行長、湊川だよ」
そうぽつりと言った。
湊川とは、南朝方に九州へ逐われた足利尊氏が盛り返してきたとき、楠木正成が守り難い京のなかへ入れておいて撃滅する戦術を奏上したが、坊門清忠に拒絶され、やむなく自滅を承知で出陣して敗死した地である。野中はその故事をかりて自分の決意を表現したのであろう。
○九四五、桜花特別攻撃隊に出撃命令が下った。
慌ただしく準備がすすめられているところへ、先任分隊長の甲斐弘之大尉がやってきて、
「隊長、今日は私に指揮を執らせて下さい」
野中を成算ある出撃に残しておきたい思いでそう申し出たのだが、無視され二の句が継げなかった。
そこへ岡村司令が顔を出して、
「おい野中、今日は俺が征くぞ。代われ」
その言葉を聴いた野中は、むっとした表情で見返すと、

「司令、そんなに私が信用できませんか。今日ばかりはたとえ司令のお言葉でも承服できません。ご免蒙ります」
そうきっぱりと断った。
その強い語気に岡村司令は、野中の徒ならぬ決意を感じとって押し切れなかったという。
こんな話がある。
野中がまだ神ノ池にいたころ、ラバウルで一緒だった八木田喜良大尉が公用でやってきて旧交を温めたとき、
「俺はたとえ国賊と罵られても、桜花作戦だけは司令部に断念させたい。必死攻撃を恐れるものではないが、桜花を吊った陸攻が果たして目標地点まで到達できると思うか。掩護戦闘機が我々を守り切れると思うか。そんな自殺行為に多数の部下を道連れにすることなど真っ平だ」
野中はそう吐き捨てるように言って、さらにつづけた。
「たとえば運よく目標に辿り着いたところでどうだ。司令部は桜花を投下した陸攻は速やかに帰投して再出撃だという。おなじ釜の飯を食った部下が肉弾となって突入したのだぞ。自分だけおめおめと帰れるか。桜花を投下したら、母機も別の目標に体当たりを食らわせてやるわ」
そのときの野中は、全身に怒りを露にしていたという。
桜花を運ぶ神雷部隊の一式陸攻十八機は、これまでの九機二隊を六機三隊編成に変えて、一三五名搭乗する。
三隊の隊長機に電波探知機を装備して、甲斐弘之大尉(海兵70期、25歳)、西原雅四郎大尉(海兵71期、22歳)、佐久間洋幸大尉(海兵71期、24歳)が指揮を執る。
総指揮官野中五郎少佐は、甲斐隊長機に搭乗して先頭に立ち、以下西原隊、佐久間隊がつづく。
隊長機以外の桜花懸吊十五機に、隊員一名が同乗する。
目標上空へくると、陸攻隊員が床板を上げて真下に吊った桜花の風防を鉤棒であける。
母機との隙間の風を受けながら操縦員がずり降りる。
操縦席ともいえぬ狭い空間に坐って風防を閉じ、座席の幅広帯を締めて母機に「用意よろし」のヨ符号を打つ。
計器盤の赤灯が呼鈴と連動して一回点滅するその瞬間に懸吊金具が外れて爆発音とともに突き落とされる。
落下が失速域から脱したのを確かめて、操縦桿を引く。
そして、速度計が二五〇節に落ち着くと、突っ込んでゆくのだ。
これまでの特攻兵器は、潜航艇にしても飛行機にしても帰還できる可能性を持っていて九死に一生を得られた。
だが、桜花は爆弾そのもので、爆薬を切り放すことができないから生還の余地はなく、十死零生であった。
開戦時の山本長官は、生還の望みなき作戦は許可しなかったのだが、あの用兵術はどこへ消えてしまったのか。
この日、出撃する桜花初搭乗の隊員は、

大尉	三橋謙太郎	千葉県	海兵71期	22歳
中尉	久保　明	石川県	早大専13期	23歳
中尉	緒方　襄	熊本県	関西大13期	23歳

中　尉　村井彦四郎　石川県　明治大13期　23歳
上飛曹　山崎　重二　福井県　予備練長12期21歳
上飛曹　杉本　仁兵　三重県　甲　飛10期　20歳
一飛曹　服部　吉春　静岡県　乙　飛17期　20歳
一飛曹　野口　喜良　茨城県　乙　飛17期　19歳
一飛曹　島村　　中　岡山県　予備練愛14期19歳
一飛曹　重松　義市　佐賀県　甲　飛11期　21歳
一飛曹　江上　元治　福岡県　丙　飛12期　23歳
二飛曹　清水　　昇　新潟県　丙　飛14期　22歳
二飛曹　矢萩　達雄　茨城県　丙　飛16期　24歳
二飛曹　豊田　義輝　福岡県　乙（特）飛1期　19歳
二飛曹　輕石　正治　岩手県　乙（特）飛1期　19歳

の十五名であった。

直掩の零戦は、S三〇六、三〇七の三十二機のほか、笠ノ原の二〇三空から二十三機が加わることになった。

野中は、見送る宇垣長官はじめ五航艦の幕僚たちに、「海軍一の弓取り、日本一の飛行機乗り、海軍少佐野中五郎、では征きます」

悲壮感が自棄糞になって、そう大音声で挨拶した。

一一二〇、野中機が砂塵を巻き上げて発進すると、つづいて十七機が次々に離陸していったが、桜花を懸吊した機は流石に重く、滑走路一杯走ってやっと飛び立った。

零戦一機が離陸直後に失速自爆したほかは無事出撃を終えたので、神雷部隊主脳部は吻と胸を撫でおろした。

すぐさま、電信室では無線機に野中隊の電波が合わされて、当直員と補助員とが受聴器を当てて張りついた。

発進から三十分ほど経ったころ、異常事態が発生した。

編隊らしき爆音が近づいてきたので、敵機来襲と緊急配備が布かれたが、降下してきたのは零戦であった。

連日の使用で消耗しているうえに、時間不足で整備不良の機が多く、増槽（スペアタンク）や発動機（エンジン）故障（トラブル）で半数近い二十五機もが引き返してきた。なかに指揮官神崎國雄大尉機もいた。

その後、偵察機彩雲から、

「敵空母群三、二、二の三群に分かれて南西に向かう」

緊急電が入った。

当初予想を遙かに上回る勢力である。推定する護衛戦闘機数からみて桜花特別攻撃隊の成功は危ぶまれた。

攻撃中止か、それともこのまま強行か、司令部は決断を迫られた。情況判断では当然全機引き返せであった。

だが、宇垣長官は怯まず、桜花隊の攻撃を続行させた。

電信室の当直員は、野中隊の発信に全神経を集中した。

一五〇〇、予定地点に到達しているはずなのになんの連絡もない。五航艦司令部に焦りの色が拡がっていった。

「敵を見ざれば、南大東島へ行け」

応急措置の電報が発せられたが、それにも応答がなかった。それは、十死零生戦法を強行した宇垣長官への野中の無言の抗議とも思えて幕僚たちは顔を見合わせた。

不吉な雰囲気に包まれた夕刻、零戦数機が帰投した。

その報告によると、一四二〇ごろ敵艦隊との推定距離五、六〇浬地点に於て敵グラマン約五〇機の邀撃を受けて空戦、敵機を撃墜するも我が方も離散し、陸攻は桜花を捨てて僅か十数分で全滅した、ということであった。

委細は、まだ無人の桜花を落として身軽になった陸攻が一糸乱れぬ編隊のまま応戦した。最後尾の陸攻が火を吐き、炎が翼を舐めたかと思うと忽ち火達磨になって落ちていった。戦闘機から燃え盛る炎の中で搭乗員が野中隊長機に別れの挙手をしている姿が見えたという。

群がるグラマンの餌食になって十五機が落とされると、野中隊長機は残った二機を率いて断雲の中へ急降下で突っ込んでゆき、そのまま消息を絶ったのだそうだ。

帰投した零戦搭乗員がそう報告したとき、野中隊の『非理法権天』の大幟が風に揺れていやいやをしていた。

この全滅した神雷桜花特別攻撃隊は、司令部の焦りによる無謀と判断の誤りの犠牲になってなんの戦果も挙げられず、特攻史上未曾有の戦死者を出してしまったのだ。

その野中五郎隊長以下一六〇名の内訳は、

桜花隊15名　士　官4名（22～23歳）
　　下士官11名（19～24歳）
陸攻隊135名　士　官18名（22～35歳）
　　準士官10名（25～30歳）
　　下士官88名（18～27歳）
　　飛　長19名（18～19歳）
戦闘隊10名　士　官4名（22～23歳）
　　下士官6名（21～25歳）

であった。

五航艦先任参謀宮崎隆大佐は、戦後当時を回想して、

「神雷攻撃が失敗せし原因は、敵機動部隊が敗退行動中にして、上空警戒機も配しあらず、との索敵機報告電により、当司令部が敵の戦意は低下し、防衛力も激減したるものと誤判断せるところに根本原因があるのではないかと、自責の念に堪えない所である。神雷攻撃の威力は期待する処あり、対機動部隊撃滅の最終の戦果は、之に依らねばならぬと司令部においては考えており、好機使用の機を覗っていたのである。また、神雷部隊としては、絶対の制空権下攻撃を主張していたので、作戦中相当の論議をされたが、二十一日決行した。掩護戦闘機五五機の筈が整備完からずして三〇機に過ぎず、また、神雷攻撃の着想と威力は、奇にして甚大であったが、一式陸攻の防禦力が余りに貧弱であった。加えるに、当日の索敵機の発進が遅れ、従って敵情の捕捉が遅れ、また敵の電探哨戒の巧妙と相俟って、敵の邀撃配備を完全ならしめたことも一因である」

そう慙愧に堪えない旨を述懐していたという。

（つづく）

紙透家の人びと（二十二）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙　透　寛　夫

七　セレベス島へ転進

昭和二十年（一九四五）五月中旬、軍はセレベス島へ転進。憲兵隊本部も、最少限の兵員と本部主力が、セレベス島へ転進することとなった。

そのころ、敵の反攻は激しく、制海・制空権は完全に敵の手中にあって、我が方には飛行機の一機、船の一艘さえなかったのである。

果してセレベス島に渡れるであろうか。まず、アンボン港へ行き、同地からマカッサルへ行くとのこと。船は病院船を利用する噂もある。憲兵隊は最初、四十名を予定計画したが、その半分、中村隊長以下二十名に制限されてしまった。中村通則大佐、僕、矢沢主計大尉、山田軍医大尉、友部安五郎少尉、佐藤四郎・村上曹長、岩元・池野軍曹、今泉・風戸兵長、石井上等兵等等。

六月八日、ピル港を出港し、アンボン着。沼田分隊に入り、十五日ごろ海軍駆潜艇に便乗、隊貨の大部はアンボンに残し、マカッサル港に向け出港したが、そのころ、ボルネオ島バリックパパンに濠州軍が上陸作戦中。その戦況を『日本憲兵正史』は次のように述べている。

（昭和二十年五月、濠州軍の上陸攻撃はまず北部東海岸のタラカンから開始されたが、守備軍約二、〇〇〇は善戦しつつ次第に兵力を消耗して、六月十一日にはすでに組織的抵抗は不可能となった。戦う兵器も弾薬もつきていた。

この後は日本海軍が守る南部ボルネオ攻防戦が、六月中旬、濠州軍のバリックパパン上陸に始まり、北部では六月八日、濠州軍の攻撃がラブアン島、次いでミリ、ブルネイに開始された。第三十七軍の場合、作戦的期間は短かったが、昭和二十年の初頭以来、相次ぐ配備変更に翻弄されて、兵力を消耗したことも認めないわけにはいかない。

濠州軍の上陸以来、軍司令官馬場正郎中将は、全軍をアピから東方約五十六キロのボーホートの盆地に集結させようとしたが、各部隊は到着できず、各地で個別的戦いに敗れた。）

敵の哨戒厳しく、ついに目的地への上陸は危険のため、ジャワ島スラバヤ港に上陸してしまったのである。スラバヤは昭和十八年二月、通過の土地であったが、その変わり方には一驚き喫した。街は死の町と化して、大和ホテルに入ったが、昔のような華やかさは全くなし。食卓につくものはモンキーバナナただ一本だけであった。それでもセラム島に比すれば、まだまだ極楽である。食糧は充分、酒もビールも探せばあった。埠頭憲兵隊に行ったら、米俵で防衛陣地が造ってあった。酒とビールは我々四人が一週間飲むだけ分けてくれた。

中村隊長は飛行機で先行、我々は、七日間スラバヤに滞在、今度こそ、最後になるかも知れぬ。

再びセレベス島へ向う

七月初旬、スラバヤ港を海軍駆潜艇で出港、途中敵潜水艦の魚雷攻撃を受くること数本、幸い万死に一生を得て、マカッサル港に上陸した。目的である軍司令部所在地『シンカン』へ向かう。輸送自動車がなかなか都合つかず、徒歩でも行けとのこと。三、四日滞在するうち、ようやく貨車の都合が出来て、七月七日ごろ、シンカンに到着する。途中、並木准尉のいるパレパレ分遣隊に立ち寄り、夕刻シンカン着、兵站旅館に宿る。

シンカンは小さな町であるが、綺麗で、戦争がなければ誠に結構な所で、米の産地、バナナ、パパイヤ、ミカン、パインナップル、魚類すべて豊富だ。また、水牛、あひるが無尽蔵で、食事には事欠かないことが分かり、ひとまず安心が出来た。聞けば軍は向こう数年間分の塩も持っているとのことだ。

軍命令により、中村隊長は、セレベス島に先遣していた小田村少佐以下全憲兵を指揮下に入れることになった。鈴木、橋本、大柴の三個分隊と、新たに友部分隊を編成した。第五野戦憲兵隊も大きくなったものだ。チモール、ケイ諸島、スンバア島、アンボン島周辺、セレベス島全地域を受持つことになったが、既に飛行機なく、辛うじて無電で連絡するのみとなり、チモール、ケイ諸島は無電連絡さへ不可能となった。

終戦を迎える

昭和二十年八月十五日、終戦の天皇の放送は、シンカン第二軍司令部で聞いたが、余りのことに、皆、涙も出なかった。

アア、万事休すか。

明日からは何をして過ごすか。兵器は、書類は。秘密書類、兵器の焼却を始めたが、気抜けして何もする気も

ない。もう、すべては終ったのだ。情報によればセレベス島の引き揚げは昭和二十四年春ごろだと。

日時が経つにつれ、戦犯の問題もなんとなく不安を増してきたが、大したことはないだろうと思いつつ、日を過ごした。

ランテパオに入る

ランテパオは標高八〇〇メートル、軍が最後の拠点として構築した要衝であった。集積物資も兵宿舎の設備もあり、何よりも大切なことは気候の良いことだ。軍は八月末、ランテパオに移動した。まだ武装解除はしていない。一体、武装解除のため、どこの軍が来るのか、濠州軍らしいとのこと。

軍は憲兵隊に命じて、補助憲兵の教育を始めたが、これは誤算で、憲兵の武装さえ許されそうもないので、途中、中止してしまった。なんたる軍の失敗ぞ。先の見えないのに、あきれ果てざるを得なかった。

九月七日、僕はランテパオに向う。シンカンで思い出のパインの大きなのを五個ほど買う、一個五十銭、再びシンカンを見ることはないだろう。ランテパオに夕刻着く。町の一角、陸軍病院跡に入る。

終戦になってもインドネシア人は反感を持つことはなく、皆、人の良さそうなものばかり。気候は内地の九月初旬の陽気、夜は毛布三、四枚で内地の秋を思わせる。水田には鯉（養鯉、日本で指導したもの）山羊、鶏、アヒル多数。大根、ネギ、白菜、南京豆。敗戦でなければ、何年でもいて良いような気がする。

五部隊一部の抗命事件の捜査、大柴分隊の古島事件、その他……、今まで不景気にしていた憲兵を敗戦後、なお使う軍司令部の卑劣さ。仕事さえやる気にならぬ。そのうち、戦犯の調査も刻刻、身辺に迫り、心の安まる日とてはなかった。

降伏調印

昭和二十年九月五日、セレベス島全陸海軍、モロタイ島で濠州軍に降伏調印した。同年十月五日、濠州軍セレベス島に進駐。事実上の武装解除となり、最早、身に寸鉄も帯びない敗兵と化してしまった。

戦犯の調査本格的となる

十月に入り、戦犯の調査本格的となり、中村大佐は軍司令部に進言、善後策を講ずるも、軍司令部極めて冷淡、誠意なし。

第五野戦憲兵隊の最後は、『日本憲兵正史』を拾い読みしたら、次のように述べていた。

第五野戦憲兵隊は、当初、第五師団（師団長山田清

一中将）とともにアンボン島にあったが、昭和十九年三月の大空襲によって、師団がセラム島のピルの山奥に移動したため、憲兵隊本部も随行した。

昭和二十年八月十日ごろ、アンボン分隊長沼田少佐は同島の同盟通信支局長から、突然、

「どうも様子がおかしい。内地で講和交渉をしているのではないか」

と、いわれた。支局長は海外放送を聴いているので、ポツダム宣言の交渉が連合国側から放送されているのを承知していた。そして十四日には、

「明日、重大放送があるはずだ。戦争は敗けだな」

と支局長から聞かされていた。

アンボン分隊ではラジオがなく、八月十五日の玉音放送は聴かなかった。だが、この日、アンボン島の沖では米海軍の巡洋艦と駆逐艦が島に向かって何か頻りに信号を送っていた。後で判明したことだが、これは早く軍使をよこせ、という信号であった。

当時、アンボンには海軍の南西方面第四南遣艦隊（司令長官山県正郷中将）がいたが、海軍は早くも敗戦を知って、停戦、降伏の覚悟はできていた。

一方、沼田分隊長は十五日に南方軍から前任務続行の命令を受け、第五師団との連絡はきれた。そこで状況によっては海軍とともに決戦もあり得るものと考えていたが、とにかく第五師団司令部に連絡のため、身辺の整理と遺書をしたため、舟艇を出し、米海軍の出没する海上を、夜陰に紛れてひそかにセラム島に渡った。司令部では師団長山田中将が自決した直後で、参謀近藤中佐が沼田少佐に逃亡をすすめた。降伏となれば憲兵分隊長はまず命がない、というわけである。沼田少佐は苦笑したが、まさか分隊長が逃走するわけにはいかなかった。結局、敗戦を確認した沼田少佐は再びアンボン島に戻り、約二十名の分隊員を集めて協議、承認必謹に決定した。

九月中旬、アンボン島へ進駐した濠州軍は、島内日本陸海軍部隊の武装解除を終えると、まず、アンボン分隊長沼田少佐を逮捕した。

この後、十一月にかけて、アンボン分隊は全員戦犯容疑者として刑務所に収容されたのである。また、セラム島ピルにあったセラム分隊長古川与嘉少佐は、八月十日ごろからセラム島上空に飛来する米空軍に対して、住民のアンボン人が、日本軍の所在地を教える信号を頻りに送っているのを知っていた。むろん、その信号が米空軍に通じていたかどうかは不明である。だが、元来、親オランダ派でクリスチャンの多いアンボン人は反日的であった。それだけに気にはなったが、翌日、古川大尉は憲兵と衛生兵を連れてブル、タニンバル諸島の視察に出かけた。ダイハツの漁船に乗ってブル島の徳田実成中尉に会い、つづいてタニンバル島

の宇佐美少尉に面談、八月二十日ごろにセラム島ホアモア半島のルフ部落に寄ると、駐屯していた海軍の様子がおかしい。妙な雰囲気に古川大尉がいやな予感を抱きつつピルの分隊へ戻ると、部下の山岸准尉が分隊の重要書類を焼却していた。ここで古川大尉は初めて敗戦を知ったのである。そこで古川大尉は直ちに原住民に頼んで、ブル、タニンバルへ伝令を派遣した。

こうして第五野戦憲兵隊の本部以下は、セラム島のピルに集合したが、十一月になって、入院中の憲兵まで含めて、憲兵全員はアンボン島の刑務所に移され、アンボン分隊と一緒になった。また、遅れてアンボンに到着したタニンバル分隊も、直ちに刑務所入りとなったのである。だが、かつて古川大尉が派遣したブル島北のササナ島分隊の長谷少尉以下五名の憲兵は、そのまま消息が途絶え、現在もなお不明である。

一方、第五師団を支軸とする陸軍部隊は、ピル西南のホアモアル半島に集結、ここで自活の生活を始め、武装解除の日を待っていた。ところが、この間、古川大尉のセラム分隊で小事件が発生している。

セラム島とブル島の間に小島があった。その島の原住民はかなり激しい性格の持主であったが、その酋長の娘と恋仲になった北海道出身の湊谷甚吉曹長が、一旦は分隊へ帰ったものの、刑務所へ送られる直前に突如逃亡してしまった。恐らく酋長の娘のところへ行ったことと思われるが、その消息は今もなお杳として不明である。だが、古川大尉はすでに自由を拘束され、湊谷曹長を捜索することができなかった。

第五野戦憲兵隊は十一月中にチモール分隊を除く全員が逮捕されたが、翌昭和二十一年一月、オランダ軍の進駐によって濠州軍との交代が行われると、俄然、刑務所の給与も悪化し、オランダ官憲による憲兵への報復的虐待が始まった。そして一般部隊は二月ごろから復員が開始された。

第五野戦憲兵隊はオランダ関係では最も戦犯の被害は少ない。けれども、憲兵隊内部にはいくつかの問題があった。その筆頭が、憲兵隊長中村通則大佐と沼田英隆少佐の思想的相剋である。問題は海軍側の要望によって、原地住民の婦人を使って慰安所をつくる問題で、これに協力的な中村大佐と反対した沼田少佐の対立から始まった。米濠軍の上陸作戦近しを思わせる現在、陸海軍の団結と士気向上のため、慰安所を必要とする海軍及び中村大佐側に対して、それ故にこそ原住民の反発を憂えて沼田少佐は反対した。もっとも、沼田少佐の反論は手段としてのものである。そもそも、沼田少佐にとって中村大佐はかつての教官であった。したがって、中村大佐は沼田少佐に対し、『抗命罪を覚悟のうえか』、とまで激昂したくらいであった。結局、沼田少佐は動員された原住民の女性を背後で逃がして

やった蔭の行為が、最後の戦犯裁判で原住民の有利な証言を得られるという、思わぬ好結果をもたらすことになる。

沼田少佐の罪名は俘虜虐待を黙視、放任したという責任であったが、虐待にもいろいろある。不充分な待遇が即虐待の汚名になるのも、敗戦国なればこそであろう。

最後にこの項を借りて記しておきたいことがある。それは刑務所に収容された憲兵に対するオランダ兵の暴行、拷問に対して、憲兵側からオランダ当局に抗議を申込むと、次のような反論が返ってきた。

「オランダが欧州の一小国でありながら、現在まで欧州列強の中で恵まれた生活をおくれたのは、蘭印植民地があったからだ。幾百年にわたって資本、技術を惜みなく注ぎ込んだのも、植民地政策でそれだけの恩恵があったからである。だが、日本軍は今度の戦争で、オランダの南方植民地を滅茶滅茶にしてしまった。その植民地で熾烈な独立運動が始まったのも、日本が戦争で占領したからである。オランダが長年投資した巨額な資本や多くの将兵を失い、このうえ植民地に独立されてしまったら、オランダ国民はもうこれまでの生活を維持することはできない。われわれが憲兵を犯罪人として虐待したところで、オランダ人の気持はそんな末節的なことですむものではない。本心では日本本土を叩いて潰滅的打撃を与えてやりたいくらいである。したがって、憲兵を虐待したぐらいで、敗戦国の日本が文句をいうのは潜越極まる。われわれが憲兵を処断するのは、罪名やその事実などはどうでもいいのだ。ただ、現地住民にオランダの威信の一端を示すこと、日本に対するオランダ人の国民感情を鎮静させるための手段にしか過ぎない。日本軍がわれわれに対して与えた精神的、物質的損害を考えれば、憲兵が日本軍を代表して犠牲になるのは当然のことである。虐待への抗議などおこがましい」

というものであった。こうまで率直にいわれては、憲兵として最早覚悟を新たにするしかなかった。この事実も戦犯裁判の実相を如実にあらわしている。

さて、ここらで、セレベス島の憲兵隊本部にいた父小太郎のその後を、父の手記により続けることにする。

湯川、松本、佐藤、岩元、佐藤通訳、マカッサルに拘引せらる。しかし彼等にはなんら事実なきにより心配なし。ただ本人達には気の毒なり。橋本大尉、相田伍長、吉野軍医大尉はモロタイ島の濠州軍に拘引、護送せられた。後日、三名とも無罪、ようやく、戦犯裁判の重大性を知るも、小田村少佐何の役にも立たず、保身にきゅうきゅうたり。松本准尉病死す。

昭和二十一年一月二日、中村大佐、米軍の拘引状によ

りマカッサルへ出頭。

マリンプン草原へ全日本軍、集結を命ぜらる。

昭和二十一年一月二日、連合軍の命により、全セレベス島日本軍、官民全員が、マリンプンへ集結を命ぜられた。

憲兵隊は軍司令部と共に同日午前八時、山を降り一路集結地に向かう。午後四時、同地着。先着の各分隊と合流。

隊長代理白数少佐となる。下士官の一部に不満、不平分子あり。統御に苦心の多いことであろう。

マリンプンはかつてオランダ当時、インドネシアの流刑地的存在にして、農耕に全然適せず、一望千里の草原地帯なり。この不毛の地に日本軍陸、海、民、計約二万名を集結して、現地自活により何年おく積もりだろうか。

我らは約一か月の後、ベンテン地区に入り、農耕を開始す。集結地中、やや農耕に適する所に、全員計約百五十名にて農耕班を組織して、本格的に開墾体制を整える。約三十歩に主にさつま芋、茄子、瓜、カボチャ、オクラ（実を食べるのだが、とろろ芋のような味がする、ニューギニアに多産す、日本にもある）

この集結地に来てから、付近のインドネシア不良人は、日本軍の兵器なきを知り、盗賊と化し、毎夜各部隊に押し入り、被服・糧秣を盗み出すこと頻発。夜、警戒のため、歩哨を配置す。物物交換を、追い追い所持品少なくなり、意の如くならず、砂糖の入手困難となる。

昭和二十一年四月十日、（僕も）戦犯容疑として拘引される。四月九日、軍司令部よりの命令で十日中にマカッサルへ出頭せよとの事。思いで多かりしマリンプンの草原よ、さらば、戦友よさらば。

セレベス島マカッサル郊外マンダイオランダ収容所に入る。先着の人達百余名、中村大佐ほか憲兵隊員三十名、ほかは海軍並びに民政部員等、将来どうなる事であろう。

セレベス軍復員

昭和二十一年五月上旬、我等を除く全員は輸送船七隻により、内地に送還された情報あり。収容者一同、ただただ、自分達の運命がどうなるか、毎日を、雑談と追憶と故郷の空に思いをいたし、日を過ごす。

オオ、悪い星の下に生まれた人達よ、いつ光明を見出し得るであろうか。

（つづく）

漢詩

潮騒錄（四十二）

鯨游海

憂政官堕落　　平成十六年五月

詭辯虚言不畏天
多羞寡徳虎威專
官尊民鄙定千歳
人俟河清幾百年

押韻・天專年

〈政官の堕落を憂う〉

詭弁虚言　天を畏れず
羞多く徳寡なく　虎の威を専らにす
官尊民鄙は　千歳の定なるに
人は河の清むを俟つこと　幾百年ぞ

〔注　解〕

虎の威＝劉向・戦国策（楚）＝籍虎威狐……権勢ある者の威光をかさにきて自分自身が強大であるかのように威張る小人物の喩え。狐が虎にいった。「天帝が自分を百獣の長となさったから自分を喰えば天帝の命に背くことになる。証拠をみせるので後について来てくれ」と虎を従えて行くと、百獣は逃げ散った。虎は百獣が狐を恐れて逃げたと思い狐を喰わず立ち去ったという。

河清むを俟つ「俟河之清　人壽幾何・春秋左氏伝」＝常に濁っていて千年に一度澄むといわれる黄河の水。それを俟つ事。即ち「幾ら俟っても無駄な事」の喩え。

この年、経済は長期不況から脱し明るい兆が見え始めた反面、政界は混乱し、議員の不祥事が続発した。

学歴詐称、収賄、横領、年金未納未加入等々を始め不都合な事の隠蔽、詭弁、虚言の数々。北朝鮮外交の拙劣さ、イラクへの自衛隊派遣にみられる米国一辺倒外交…。

それにしても政官に清澄を期待する方が無理なのか。

☆千歳に一度は清むと伝にいう
　愚直の民は永遠に俟つらむ

二宮金次郎之一生（十九）相馬藩復興事業〔上〕

平成十六年一月

儒生一念九叩門
投筆渾身欲救藩
想起孔家公冶長
共為女婿報師恩

押韻・門藩恩

〈二宮金次郎の一生（十九）相馬藩復興事業〔上〕〉

儒生の一念　九たび門を叩く
筆を投じ渾身　藩を救わんと欲す
想い起こすは孔家の　公冶長
共に女婿となりて　師恩に報いたり

〔注　解〕

儒生＝儒学生。この頃の主たる学問とは儒教を学ぶことであった。ここは後に金次郎の女婿となった相馬藩士富田高慶のこと。秀才の彼は江戸の昌平黌の学徒だった。

投筆＝本義は学問を中止して戦争に参加する意。魏徴・述懐「投筆事戎軒」筆を投じて戎軒（戦車）を事とす。ここでは机上の学問にあきたらず自から土にまみれて実践せんとした高慶のこと。

公冶長＝公冶が姓、字が子長。孔子がその人柄を認め自分の娘の婿とした青年。論語に巻三公冶長篇がある。

陸奥相馬藩は元禄の頃、人口八万、六万石の雄藩であったのに栄枯盛衰の世の常で貧窮していた。原因は増税にあった。「わが藩は山野開拓が進んだので、実収は十万石にも届く筈」として検地し直した所、新たに三万八千石もの田畑が見つかった。権力は常に強欲である。

そこで九万八千石を基準に年貢を徴した為、藩財政は益々豊かになり、藩士の俸禄も増やした。富裕状態が永続するものと錯覚したのである。

臣民は節倹を忘れ、奢侈に流れる一方、百姓は増税でゆとりを失くし、農地開拓の意欲を失って了った。この為ピーク時十七万五千石もあった収穫は、天明、天保の飢饉で二万余石に激減、雪だるま式に借金が増えた。バブルが崩壊したのである。

時に富田久助なる微禄の家臣の男子が、江戸に留学し儒学者屋代弘賢の門人となり勉学に励んでいた。その后昌平黌の儒官依田源太左衛門の塾生となり昼夜を分たず努力し、代講する迄になったが「十年苦学すれども得る所なし」として帰郷し、土にまみれて実践せんと金次郎の門を叩く。金次郎はなかなか入門を許さなかったが余りにも熱心なので遂に門弟とした。運命の邂逅である。

☆人荒み国まずしくて孝子出ず
師恩を継ぎて民を救わん

二宮金次郎之一生（二十）相馬藩復興事業〔中〕

平成十六年二月

藩論紛糾日虚流
分度如何危急秋
不敢自當名伯樂
時機偏待水低收

押韻・流秋收

〈二宮金次郎の一生（二十）相馬藩復興事業〔中〕〉

藩論ふんきゅうして　日むなしく流れ
分度いかんすべき　危急の秋
敢えて自からは当らず　名伯樂は
時機ひとえに待つ　水の低きに収まるを

〔注　解〕

紛糾＝いり乱れ縺れる。論議が喧々囂々とまとまらず唯喧びすしいだけの様子。なお侃々諤々は正しい論議が整然と討論される様子。時に誤って用いられている。

不敢當＝敢えて当らず＝自から進んで事態を解決しようとしないさま。ここでは機の熟するのを待つ表現。

伯樂＝馬の素質をよく見分けた周時代の孫陽という人で、馬の鑑定に優れた博労。転じて有能な人物を見出し育て能力を発揮させる優れた指導者の喩え。ここでは勿論金次郎を指す。

金次郎の門を叩き漸やく入門を許された藩士富田久助は、後に金次郎の女婿として金次郎の息子彌太郎と共に金次郎を継いで大活躍する（以後高慶と呼ぶ）。

高慶は自藩の貧窮を救うには、金次郎の力を借りるしかないと考え、家老の池田胤直、草野正辰らに伝えた。

家老らは尤もなこととして藩主の了解を得た上、人を遣わして依頼するが、金次郎は多忙を理由に断わった。

高慶が理由を問うと「相馬藩の復興への気持は判るが未だ〳〵決意が浅い。本気なら藩主とはいわぬが、せめて家老が来るべきであろう。復興とは方法論ではなく藩政の基本方針が大切なのであり、分度を守らせるにはトップの固い決心が必要だからである」と悟す。

これは金次郎の苦い経験から出た真の心情であった。

果たして分度の削減案に対して藩士から反対が起こった。あげくの果てに金次郎をいかさま呼ばわりする者まで現われた。金次郎は動こうとしない。

喧々囂々と議論はまとまらず、徒に月日が過ぎていく。

金次郎は敢えて放置し、藩内の輿論が一致して来るのをじっと待っていたのである。やがて熟柿が落ちる如く、溢れた水が低きに収まる如く機の熟するのを見て腰を挙げた。

☆大事には熟柿のひとり落つるごと
水の低きに収まるがごと

二宮金次郎之一生（二十一）相馬藩復興事業〔下〕

平成十六年二月

辭祿應分和一圓
陶磁牧馬或開田
誰教獨立自尊道
人悟大愚通大賢

押韻・圓田賢

〈二宮金次郎の一生（二十一）相馬藩復興事業〔下〕〉

祿を辞し分に応じ　一円に和す
磁を陶き馬を牧し　或は田を開く
誰か教えしか　独立自尊の道を
人は悟る「大愚は大賢に通じたり」と

〔注　解〕

一円とは金次郎が成田山で修業した時に到達した境地である。「心あらば成田の山に籠りなん石の上にも岩の上にも」の歌を詠んだ。即ち「人には絶対の善人もない代りに絶対の悪人もない。至誠を以って当れば、復興事業を妨げる人々の心をも動かすことが出来る」。世の中の凡ゆる対立するものを一つの円の中に入れて観る広い心、である。禍福、幸災など対立するものは、何れもそれぞれ円の半分であり、世の中のことは何事も対立する別の半円と合せてみれば一円となることを説いた。

さて、藩家老の池田胤直、草野正辰ら再三の懇請にも拘わらず一向に具体的な復興事業を開始しない。これは藩内の分度削減について尚反対意見があり、挙藩一致の体制がとれていないのを金次郎が見通していたからであった。愚者の如く唯待つ。

江戸藩邸の方でも、雄藩であるが故のプライドがあり一介の百姓に藩の将来を託する事への抵抗が強かった。待つが一番と、金次郎は熟柿が落ちる時機を伺っていたのである。自立自尊し、困難に堪えて借財を返済していくには藩全体が一円融合し、目的に向っていく強い自覚と連帯が不可決である。金次郎は辛抱強く待った。

やがて自発的に意思が統一、意欲が盛り上って来るのを感じた。復興の為に命じた過去の収穫高の十年間の調査資料は、流石詳細に出来上った。

頃は良し、と判断した彼は計画書「為正鑑土台帳」八巻を作成、手交した。こうして満を持した復興が始まったが、もう異論はなく藩中にも迷いは無かった。かくして時日は長年月を要したが確実に復興は成っていったのである。

☆肥えし馬緑したたる相馬焼き
　里に流るる尊翁の唄

〈漢詩の流れ32〉北宋の巨星たち⑤

蘇軾（一〇三六～一一〇一）。字は子瞻、号は東坡居士。父洵、弟轍と共に傑出した文学者で、老蘇、大蘇、小蘇、合せて三蘇と称せられた。特に軾は強靱だった。

政治的には旧法党に属し、新法党の王安石と対立、朝政を誹謗した廉で逮捕下獄したこともあった。

神宗に代って哲宗が即位するや中央に呼び戻され、翰林学士から兵部尚書、礼部尚書（何れも次官級）に就くが、五九歳また恵州（広東省）に、更に遠い海南島に流された。漸やく赦されて帰還途上六六歳で没した。

唐宋八家の列に入り、書も良くした才子。また政治的に容れない先輩の王安石との友情は終生不変であった。

春　夜（しゅんや）

春宵一刻値千金　春宵一刻あたい千金
花有清香月有陰　花に清香あり月に陰あり
歌管樓臺聲細細　歌管楼台こえさいさい
鞦韆院落夜沈沈　鞦韆（ブランコ）院落（庭）夜沈々

澄邁驛通潮閣（ちょうまい駅のつうちょうかく）

餘生欲老海南村　余生老いんと欲す海南の村
帝遣巫陽招我魂　帝巫陽をして我が魂を招かしむ
杳杳天低鵲没處　杳々として天低れ鵲（はやぶさ）没する処
青山一髪是中原　青山いっぱつ是れ中原（中国本土）

後漢末、魏の曹操と、呉の孫権、蜀の劉備連合軍との戦いを歌った前赤壁の賦を一部であるが紹介しよう。

前赤壁賦

壬戌之秋　七月既望
蘇子與客泛舟遊於赤壁之下　清風徐來
水波不興　擧酒屬客
誦明月之詩　歌窈窕之章　少焉　月出於東山之上　徘徊於斗牛之間　白露横江
水光接天　縦一葦之所如　凌萬頃之茫然
浩浩乎如馮虚御風　而不知其所止　飄飄乎如遺世獨立　羽化而登仙　於是飲酒樂甚　扣舷而歌之　歌曰　桂櫂兮蘭槳　擊空明兮泝流光　渺渺兮予懐　望美人兮天一方　客有吹洞簫者　倚歌而和之　其聲嗚嗚然　如怨如慕……

（赤壁の賦は前と後の二首あり）

壬戌（一〇八二）の秋七月既望（旧暦十六日）蘇子客と舟を泛べて赤壁の下に遊ぶ。清風徐ろに来たつて水波興らず。酒を挙げて客に属し明月の詩を誦し窈窕の章（詩経の女性を求める詩）を歌う。しばらくして月東山の上に出で斗牛の間に徘徊す。白露江に横たわり水光天に接す。一葦（小舟）の如く所を縦にして万頃の茫然たるを凌ぐ（勢いよく進む）。浩々乎として虚に馮り風に御して（乗って）その止まる所を知らざるが如く飄々乎として世を遺れて独り立ち羽化登仙するが如し。是に於て酒を飲み楽しむ事甚し。舷を扣いて歌う。歌に曰く桂の櫂蘭の槳空明に撃ちて流光に泝る。渺々たり予が懐い美人を天の一方に望むと。客に洞簫を吹く者あり歌に倚って之に和す。その声嗚々然として……

撞木（しゅもく）

☆小学生の犯罪と学力の低下が最近問題となっている。少子化により一学級の生徒数が減って先生も生徒との対話が容易になったはずである。ところが、先生と生徒を結ぶ心の糸が途切れがちで、見えない壁があるようだ。

☆十月九日の日本経済新聞プラス1に「なりたかった職業」についてのアンケート調査の結果が掲載されていた。二十から六十歳代の男女五百人ずつ千人を対象としたものである。それによれば「先生になりたかった」とする回答が男性では二位、女性では一位を占め、男女合わせて一位である。理由は、「憧れていた先生のようになりたかった」とする回答が最も多い。このことは多くの大人たちが先生を尊敬、信頼し傾倒していたことを物語るものである。

☆今回発行の九四号に大和禎人元発行人が小学校時代に印象に残った二人の先生について書いている。校長先生になった飯田先生と栄達を望まず訓導として常に現場で生徒の陶冶に当った郡司先生である。どちらの先生が生徒の目には、真の教育者として写ったか。大和さんの昔の「せんせい」を読めば明らかだ。

☆小学校教育は学力の涵養と人格形成の基礎となる大切な期間である。先生の教育に懸けるひたむきな情熱と言動が生徒たちの共感を呼び先生への傾倒を深める。生徒は先生が本物であるかどうかをよく見ているものだ。郡司先生のような本物の先生が教育界に輩出することをなりたくてもなれなかった多くの人の分まで含めて期待したい。（O・S）

まんじ　第94号

平成16年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦（たでられい）　画